あたしの魔法使い。

たまさ。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あたしの魔法使い。

【Ｎコード】
Ｎ８７０９Ｊ

【作者名】
たまさ。

【あらすじ】
それまでの生活を全て捨てて、新たな町で心機一転！
リドリーは自分の幸せを求めて「竜の眠る霊峰」に守られた小さな町にやってきた。可愛い町並み、親切な町の人。全てが全てリドリーに幸せをもたらせてくれる――かにみえたのに、そこにはおかしな自称魔法使いが住んでいた。傲岸不遜理不尽極まりない魔法使いと、平凡と常識とをこよなく愛するリドリーの恋愛物語。

変態とあたしの攻防。

襟首にはレース、首筋に細いリボンタイ――黒いシルクハットにステッキ。
彼を一言で表すならば、胡散臭い魔術師。
にっこりと微笑むその唇で、不可思議な呪文を唱えて、帽子の中から兎を引き出し、鳩を飛ばす。
こんこんっと、反り返った床板をステッキで突付き小首を傾げる。
三度目にこんっと床をたたくと、その手からキャンディを一つ、二つ、三つ。
胡散臭い魔術師は容易く子供達の心をとりこにしてしまう。
そう、子供であれば。

「やぁ、リトル・リィ」
「――リドリーよ、魔術師」
パン屋の仕事の帰り、売れ残ったパンをバスケットに抱えてアパートに帰宅するあたしに、胡散臭い魔術師はカラフルなパラフィンに包まれたキャンディを一粒取り出し、そのしなやかな指先でくるりとパラフィンをむいて中身をあたしの唇に押し付ける。
――むぐっと、とっさに口をつぐんだ。

「おやおや、リトル・リィ。
キャンディが落ちてしまうよ」
「――」
両手でバスケットを抱えた状態だ。
むぐぐっと口元に更に力をこめる。
それに、この男ときたらいったい何度訂正すれば人の名前を理解するのだろう？　あたしはリドリーであって、決してリトル・リィではない。それとも、それは名前ではなくて小さなリィと言いたいの

か？　だが生憎と、あたしは今年十七になった立派な大人だ。オンナノコは十六で成人なのだから、当然あたしだって立派な大人だ。間違いない。

それに、身長だって「小さな」なんて言う身長ではないのよ。小さなリィなんて、むしろ気持ち悪い。

確かに子供の頃は自分のことを、リィねぇなんて言ったものだけどね。

「キャンディは嫌いかな？」

――ヘンタイから食べ物を貰う趣味はないの。

そう言ってやりたいが、生憎と現在無言の攻防中。だが、ふっと魔術師はその手の力を抜いた。途端に唇に掛かっていた圧力が取れて、ほっと息をつく。

あたしの唇に押し付けた薄桃色のキャンディを、魔術師は親指と中指でつまんでにっこりと微笑むと、自分の口元に運んで尖らせた舌先でいやらしく、舐めた。

「！！！！」

「間接ちゅー」

このヘンタイ！

ぎゃあああっと心の中で悲鳴をあげ、逃げ出したいというのに足がべったりと床に張り付くようにすくんで動けない。

中指で押し込むようにしてキャンディを口の中に放り込み、最後にはニッと口元を引き結ぶ。

「とても、甘いよ？」

その時になってやっと足が自由を取り戻し、あたしはバスケットを振りかぶり、力任せに相手の顔に打撃を加えてヘンタイの脇を一目散に駆け出した。

「良い夜を、リトル・リィ」

――振り向かなくともあの馬鹿がひらひらと手を振っているのが想

像できる。

そして思い出すように、「ぼくは魔術師じゃなくて、魔法使いだよ」といつもと同じ台詞を叫んでいたが、その言葉に追いつかれるのすら恐れて慌ててアパートの三階にある自室に身を滑り込ませた。

「ううううっ、絶対に引っ越す！早く引っ越す、引っ越すんだってば！」

呪文のように必死に唱えたけれど、生憎とこの言葉は一年くらい毎日のように唱えていることも事実だ。

リドリー・ナフサート。

産まれたのは今暮らしているコンコディアからずっと西にあるセーナムの街。

街を出たのは一年とちょっと前。理由は簡単――逃亡だ。

あたしはセーナムの街で幸せになれないと悟った。それはもう絶食四日にして悟りを開いた坊主のごとく、悟ったのだ。

ここにいてはきっと幸せになれない。

だから逃げた。

大好きな『暗闇の花嫁』（マイジー・アーレトン著作）のように、夜陰に乗じて街を脱出し、列車に馬車を乗り継いでこの街まで流れてきたのだ。

新しい町、新しい家、新しい人達。まるで全てが「しあわせ」のための布石のようだった。そう、あの変態が同じアパートの住民だと気づくまでは。

やっと肩を上下させて息を整え、呼吸を正常に取り戻す。そうして玄関の扉から離れて一部屋だけの自分の城にほっと息をついた。

持ってきたバスケットをテーブルに置き、テーブルの脇にある小さな寝台に腰を落とす。売れ残りのパンを食べる気もなれなくて、息をはくようにしてそのまま寝台に背中を預けた。

魔術師はこの辺りでも有名な「魔術師」だが、それを生業としているのか、それともただの趣味であんな格好でうろついているのか、はっきりいってあたしには判らない。理解しようという気もないし、あの馬鹿が何をしようと無視だ。

だが、帰宅するといるのだ、螺旋階段に。

おもわずあの変態は二階の住人ではなくて螺旋階段の住人なのではないかと思ってしまう。もしかして家賃が払えなくて部屋に入れないのではないか？

まぁ、部屋から飛び出してくることもあるからそれはないか。

まったく変態は困る。

しかもあの変態を、この街の人たちは容認しているのだ。腹立たしい。

もう三度も警備隊の詰め所に苦情を告げたというのに、相手があの魔術師だと知るや、笑って「やー、それ程悪い方じゃないですよ」の一言で片付けられてしまうのだ。

挙句、三度目には溜息なんぞをつきながら「でも、実害が無いと」って、実害が出たら問題でしょう！　今だって害ばっかりなのに、これ以上の害がないと警備隊は手も口も出してくれないのだ！

いいや、口は出してくれたのかもしれない。

「コーディロイ、ナフサートさんから苦情が出ているのですが。少しばかり善処してくれませんかね？」

と、ころりと転がしたら一目散に転がっていきそうな体型の警備隊員が一応進言してくれた。

だが、魔術師は――どうやら彼はコーディロイという名前らしいが、記憶に留めておくほどの情報でもないだろう――だが、魔術師はにっこりと人好きのする笑みを浮かべてこんっと持っているステッキで帽子を持ち上げた。

「リトル・リィへの愛情がこぼれてしまうのですよ！　ほら、こん

な風に」
ぱらぱらと彼の手のひらの中でコンペイトウが溢れた。
「……」
呆然とするあたしの前で、警備隊員は笑いながらそれをつまみ、口の中に放り込み、
「まったくコーディロイは仕方ないなぁ。ちゃんとしまっといてくださいね」
って、何をしまっとれというのか？
――コンペイトウか？　コンペイトウをしまっとけばいいのか？

とりあえずその時にあたしは悟った。
役に立たない！
ここの警備隊員はまったくもって役にたたないのだ。
挙句、馬鹿魔術師があたしへと向けるものを「愛情」と履き違え、「痴話げんかに口は出しません」と以来どれほど苦情を持ち込もうとも、生あったかい眼差しで「やれやれ」という対応しかされなくなってしまった。
「相変わらず仲良しでよいですね」って、いったいいつ、あたしが、この馬鹿と仲良しだったことがあろうか？　皆無だ。絶対、断じて、ない！

――おかしいよ。あたしは、この町に幸せになる為に来たというのに。
ならば引っ越せば良いだろう。
そう幾度か行動にうつそうとした。
引っ越してしまえばよいのだ。

パン屋で勤めていて何が良いって、食費が掛からない。売れ残りのパンを幾つかもらって、それを主食にしているから、食べ物には困らない。毎月のお給金だってそれ程高いものではないけれど、確

実にそれを貯蓄に回せている。着るものにだって頓着していないし――

ここの暮らしはあの馬鹿に煩わされることさえなければ、十分幸せの範疇だ。

だから思い切って引っ越すという行動が取れないのだ。

今日もきっと、溜息一つついて寝台で寝てしまえば――普通の朝がはじまる。

花とあたしの攻防。

パンを抜き取ったバスケットの中にエプロンとタオルとを入れて出勤するのがあたしの一日の始まりだ。

朝食は勿論パン。

黒麦のパンにオイルをつけて、機嫌と懐具合と相談して時々これにベーコンや目玉焼きを添える。ほぼ一年の間食べてきたけれど、幸いあたしが働いている『うさぎのぱんや』は少し変わったマイラ小母さんが思案に試作を重ね上げて週に一度のサイクルで違うパンを取り入れていってくれるから、あきることもない。

――恐ろしい食べ物が発明されることもあるけれど、それだって日々のエッセンスだと思えば……悪くない、筈だ。

毎度食べさせられる自分としては、時々、本当に時々、殺意がわくこともあるけれど。

最近では『苦ヨモギの練り込みパン』は死ぬかと思った。

マイラ小母さんも一緒に卒倒していたから、寛大なあたしは勿論許した。

螺旋階段をそっとおりていく。自室の扉だって随分と静かに開けられるようになったし、足音を消すことも覚えた。だというのに、二階の扉はまるで冗談のようにあたしを前にして開くのだ。

「おはよー、リトル・リィ！

今日もいい天気だね！　でも、午後からは少し小雨がちらつくよ。傘は持ったかい？」

「……おはよう、魔術師」

思うのだけれど、どうしてあたしも返事をしてしまうのかしらね？

でもご近所づきあいに「おはよう」と「こんにちは」は欠かせないものなのよ。自分の常識を恨んでいい？

とりあえずの挨拶をすませたあたしにすっと花を一輪差し出して、

魔術師本日も絶好調だ。
何も無いところから差し出された花を、受け取る。すると、もう一輪、もう一輪、もう一輪……
「もう……いいです」
「そう？　この花はねぇ、とっても香りがいいんだよ。しかも食べられるんだ」
にこにこと魔術師が説明する。
「便秘にも最適」
「――」
「花弁だけを使うんだよ。御茶にいれてもいいね」
――それはどういう意味？　あたしが、あたしが便秘だという意味かしら。
百歩譲って認めてあげてもいいわよ。
けど、どうして便秘をそんなにプッシュしてくるの？　もしかして、もしかして……
あたしはガッと魔術師の襟首を掴み上げ、顔をぎっと近づけて睨みつけた。
「何がいいたいのかしら！」
「えっと……愛してるよ、リトル・リィ」
近づいた顔が悪かったのだろう、魔術師はぎりぎりと首を締め付けられながらもひょいっときようように、あたしの唇の端――ほんの数ミリの端にちゅっとわざと音をさせてキスをした。
「死になさい！」
この害虫！

「おや、今日の花はいい香りがするね。何て花だい？」
「……名前はきいてないです」
あたしはあのあと魔術師をドアに叩きつけ、その反動で何故かぶわっと現れた問題の花をバスケットの中に一杯入れて『うさぎのぱ

んや』に出勤した。

すでにパン屋の中には香ばしいパンの優しい香りで溢れている。パンの種は昨日のうちに作り、二次醗酵までおわる段階に仕込んであり、マイラ小母さんが朝焼き上げているのだ。

焼きあがったばかりのパンの香りを胸一杯にすいこみながら、エプロンを手早くつけて頭にはうさぎのマークが刺繍された可愛らしい帽子をかぶる。

「あんたのおかげで花には苦労しなくていいよ」

とマイラ小母さんは豪快に笑う。

「……それは良かったです」

「でも本当にいい香りだね」

バスケットの中の花をつまみあげ、マイラ小母さんは幸せそうに香りを楽しむ。

「食べれるんですって。ソレ」

とりあえず店側のガラス窓をふくためにゾーキンを用意しながら言葉を続ける。

「へぇ」

「便秘にいいんですって。花弁だけを食べるみたいだけれど」

「パンに使ってみようかねぇ」

「御茶に入れてもいいって」

「あらあらなんて便利な花だろうね。この辺りじゃちっとも見たことがないけれど……」

マイラ小母さんは言いながら花弁を一つつまむと、ぱくりとそのまま口の中に放り込む。

「あら、少し甘いね。苦味があるかと思ったけれど、これならきっとパンに乗せても美味しいに違いないよ」

嬉しそうに言うマイラ小母さんに、あたしは苦笑しながら朝の仕事を進めた。

――へんなところで魔術師は便利だ。

「そういえば、来週は収穫のお祭りだね」

ふいに話が変わる。

「あんたは初めてだろう？」

「丁度来た時にはおわってましたから」

「もう一年になるんだねぇ」

マイラ小母さんが感慨深い調子で話す。

うちのほうでは豊穣祭といわれていた祭りは、この辺りでは収穫祭と言われるようだ。

「午前中はパンを目一杯焼くのを手伝っておくれ。午後は休みにしていいから。その翌日は一日休み」

「マイラ小母さん？」

「あんたは若いんだから、少しくらい楽しまないと駄目さ。

あたしが若い頃は、収穫祭は遊ぶもんで働くもんじゃなかった。

一日休みにしてあげたいが、それはちょっと無理だからね。半日の休みで勘弁しておくれ」

「いやだ、一日だって働くわよ」

あたしが慌てて言う言葉に、けれどマイラ小母さんはけたけたと笑う。

「午後は嫁にいったターニャが手伝ってくれるから、あんたはちゃんと遊んでおいで」

隣町に嫁いだ娘が手伝うというなら、確かにあたしが手伝う余地もない。あたしは溜息を隠してうなずいた。

「花をくれるいい人だっているんだから。デートとかしないとね」

「……」

――一年近くここで働いているけれど、魔術師のことは口にだしていない。あんなへんな人間と付き合いがあると思われるのは絶対に、イヤだ。ただ出勤の時に花を渡してくれる人がいることは、いやでもばれてしまっているけれど。

「その人とは別にそういう関係じゃないです」
とりあえず否定するところは否定しておかねば。

「あら、そうなの？　男の人かと思っていたけれど、花屋のお友達なのかい？」
「……えっと、まぁ、そんな、かんじ？」
花屋。ではないと思うけれど。
「じゃあ、粉屋のトビーはどうだい？　あれは絶対にあんたに気があるよ」
毎日小麦を届けてくれる青年を出され、あたしは苦笑する。
「そんな訳ないですよ」
というか、なぜそんな話ばっかり？
あたしはゾーキンを桶の中に放り込み、がしゃがしゅと憎しみを込めてゾーキンを絞った。
恋愛話は女性にとって楽しいのかもしれないが、とりあえず自分と無縁のところでお願いしたい。

粉屋の息子とあたしの攻防。

――リドリー、愛してるよ。

ふいに、そんな音が耳の中によみがえる。ぎくりと心臓がこわばった。

同時に深い藍色の瞳。優しい、優しい……冷たい。

「リドリー？」

「っ！――ごめんなさい、ぼうっとしちゃって」

「疲れてるんじゃないのかい？」

マイラ小母さんの気遣わしげな声に笑い返し、あたしはぎゅっとゾーキンを絞った。

昼の一番忙しい時間が終わり、マイラ小母さんは新作のパンの構想を練る為に店の奥に入ってしまった。

あたしは店の番をしながら、焼きあがったパンの状態をみたり、これからどれくらい焼けばパンのロストを減らせるかと考える。

「パンが選べないってのはいやなもんさ」とマイラ小母さんは豪快に笑い、結局一通り焼いてしまうのだから、商売気というのがあまりない。

「どうせあたしみたいな年寄り一人、やっきになって働いても楽しいことなんてないのさ。だったら、近所に愛されるパン屋でいたほうが幸せだね」

――マイラ小母さんはとてもいい人だ。

からんっと、カウ・ベルが音をたてる。けれどこれは裏手にある銅のベルの音。店の入口のガラスベルとは違う音。

あたしはカウンターの縁に手をかけて体を逸らしてそちらの扉を見た。

こちらに向かって笑みを浮かべて手をあげているのは、粉屋のペギ

ーさんの息子でトビーだ。今朝方のマイラ小母さんの言葉がちらりと浮かんで、あたしは苦笑した。

「今日の分、届けに来たよ」

と、トビーは言いながらついっと帽子をもちあげる。そうすると人懐っこい鳶色の瞳が見返してくる。頬にはソバカスが散っていて、トビーはどちらかといえば可愛い弟というイメージしか湧かない。

「ありがとう、トビー。いつもと同じ量？」

「うん。次の金曜日にはいつもの三倍届けるから」

収穫祭の為だ。

「トビーのところは収穫祭は何かするの？」

「うちはこれといってないよ。うちが忙しいのは、前日まで。あっちこっちの店に粉を届けないといけないからね」

「そう」

考えてみればペギーさんの店は粉を専門に扱っているけれど、それで製品をこしらえている訳ではない。

あたしが以前住んでいた場所では、粉屋がもっぱらパン屋も兼業していたものだけれど、このあたりでは違うようだ。

「それで……リドリーは」

何だかいいにくそうにトビーが視線を逸らした。あたしが思考を切り替えて視線を向けると、慌てた様子でその手が自分の服の袖を引っ張る。

「あの」

「なぁに？」

「収穫祭！　予定はどうなってるの？」

まるで叫ぶように言うから、おそらく奥にいるマイラ小母さんにまで聞こえたことだろう。ぷっと、小さく吹き出した音が聞こえた。

あたしは少しだけ赤くなって慌ててしまった。

「えっと、一応仕事が……」

「そう、ですか」

うわぁぁぁ、耳が、耳があるよ、この子。
あたしは幻の耳が垂れたのを感じたし、尻尾がくるりと巻かれるのも感じてしまった。奥のマイラ小母さんが何か言わないだろうな、と用心しながら「あ、お店のほうにお客さんかな？　じゃあ、またねっ」と慌しく店舗のほうへと戻った。

彼の「しゅんっ」という気配そのままのカウベルの音がなんだか痛々しい。
「午後は暇だって教えてあげればよかったのに」
と、案の定マイラ小母さんが顔だけのぞかせて言ったけれど、あたしは「一人のほうが気楽ですもの」とそらっとぼけた。
意識したことは無いが、あんな風に言われれば嫌でも意識してしまう。
「そうだ、ターニャさんが来るってことは、アジス君も来るんですよね。アジス君がよければ、午後は付き合ってもらおうかな」
あたしが慌てるようにいえば、マイラ小母さんは溜息をついた。
「子供の御守のほうがいいなんて、まったく変わった子だね！」
うちとしては助かるけどさ。
マイラ小母さんの言葉にかさなるように、店舗のベルが来客をつげた。
「いらっしゃいませ！」

逃亡と新しい門出。

――大きな木の根元の洞に、良く身を潜ませて泣いていた。
そうすると決まって、洞の反対側から優しい声が聞こえたのだ。
「泣かないで」
「悲しまないで」
……きみがぼくのいちばんのひと。
洞の中だから、その声はとても奇妙に響いていた。けれど誰だかは判る。
優しい、幼馴染。
そんなことを告げてくれるのは、彼しかいないのだから。

鏡の中には花嫁のための質素なドレスを身にまとったあたし。
慣例にのっとった、何の飾りも、色もつけない、おとなしやかで――そして世界一女性達が憧れるドレス。
ただしこれはまだ本縫いの段階でなく、腰のドレープも全てざっくりとした木綿で適当に止められているだけだ。
「腰はもう少し詰めましょうね」
針子の女が言いながら衣装をつまんでは針でとめ、時には軽く縫いとめる。
「マーヴェルさんも羨ましい。こんな美しい婚約者で」
歯の浮くような世辞も、あたしにとっては心地よい音色だ。
「本当に綺麗」
椅子に座ってこちらを見ているティナが切ないような溜息でつげた。
――ティナさんとマーヴェルさんが想いあってるのを、気づいていないとでもいうのですか！
アネットの絞るような声が脳裏をかすむ。
あたしは鏡越しにティナを盗み見た。

ふわふわとした巻き毛の可愛いティナ。
その彼女が、もう随分とそうやって吐息を、溜息を落とすのを知っている。

――でも、それを見ないふりしてやり過ごす。

マーヴェルが、あたしの手をとりながら、ちらちらとティナの様子を気にするのも。ティナが、あたしとマーヴェルの手が触れ合うのを伏せた瞳で気にするのを。

そんなことは……

結婚してしまえばどうにでもなる。

マーヴェルとあたしが結婚してしまえば、マーヴェルはきっと良い夫になるだろう。優しい人だから、きっと……子供でもできればきっと愛して可愛がる。

きっと、きっと、きっと……

あたしは知らない。

あたしは知らない。

マーヴェルはあたしの婚約者で、ティナはあたしの妹で……あたしは、幸せに――

あたしは全て見ないフリをする。

あの時、マーヴェルがあたしの唇に触れようとしたのを――遮ったのは、間違いだった。

「リドリー？」

「……ねぇ、マーヴェル」

そっと胸に手を当てて、その心臓の鼓動を確かめるように囁いた。

「豊穣祭に結婚するなんて、素敵よね？」

「うん。きっと、女神の祝福が得られるよ」

優しいマーヴェル。

「あたしのこと……愛している？」

とくりと、マーヴェルの心臓が反応する。
それが喜びなのか、悲しみなのか、愛惜なのか……あたしは、そっとマーヴェルを見上げた。
「――愛してるよ」
うそつき。
うそつきな、マーヴェル。
全ての嘘に蓋をして、あたしは――幸せになどなれないのだと気づいた。
マーヴェルが好きだった。
親が決めた婚約者だとしても、そのまま幸せになれると信じていた。
そんな訳、ないのに。
出来上がったウェディングドレスを引き裂いた。あたしが着ないそのドレスを、ティナが着ることが無いように。婚約指輪を暖炉の中に放り込んだ。
もう――どうでもいいものだから。
――きみがぼくのいちばんのひと。
子供の頃、泣いていたあたしに言ってくれたのは、ただのまぼろし。

大きなボストンバック一つで生まれ故郷を後にした。
最近流行り蒸気機関車。チケットは馬鹿みたいに高かったけれど、後悔はしない。それに、遠く、遠くに行ってしまえば馬鹿なことをしたと自分を罵りながらも後戻りはできない。

あたしは全てを捨てたのだ。
愛する婚約者も、愛しい妹も。少し口うるさい父も、全部、捨てた。
少しだけ感傷的になって、昔――子供の頃に悲しい時に入り込んだ洞を蹴飛ばして、あたしは夜行列車に飛び乗った。
片道切符。
持っているお金のギリギリで――勿論、当面の生活費を見越しては

いたけれど、精一杯遠い場所まで行くチケット。

列車に乗って、それでも一週間と二日。ずっとずっと、列車に揺られて、あたしはアルトゥーラという街にたどり着いた。

その街はとても大きくて驚いたけれど、勿論そこで落ち着くつもりは無い。なんといっても、婚約者があたしを探さなくとも父は探そうとするかもしれない。ならば、列車がとまるような大きな街など単純に、目をつけられてしまうかもしれない。

だから更に辻馬車に揺られた。

列車の通らないちょっと辺鄙な街を目指して、そうしてたどりついたがコンコディア。

北側にある霊峰に、竜がいるという小さな街。勿論そんなのは伝承で、列車が往来するこの時勢に竜なんている訳がないのだけれど、驚いたことにこのコンコディアという街は、今も変わらずに「北の竜峰には竜が眠っていて町をお守りくださっている」というのが普通に常識として残っていた。

町の人は北の山脈を竜峰というのだ。

うっすらと万年雪の残る山々。深い緑と、こじんまりとした煉瓦造りの家々。この地を治めている御領主様は霊峰の手前にある小高い場所にある城で暮らしている。

一目でこの町を気に入った。

うっすらと見える万年雪の霊峰も、小高い丘の綺麗な城も。可愛らしい煉瓦造りの家々も。

あたしは心からこの場所を好きになり、さっそく町のお役所を訪ねてこの町に暮らす為の許可を取付けたのだ。

町に暮らすには領主の許可が必要だ。

領民は全て領主の管轄だから。

役所で旅券を提示して、目の前でそれを処分されるのを確認する。

新しい書類にあたしの名前が載せられて、今度ここを出て行く時は、また改めてここで旅券を発行してもらわなければ出れないのだ。

少しだけどきどきした。

旅券はホンモノだし、あたしは自分の名前を偽ってもいない。元々この旅券じたいは、婚約者との新婚旅行の為に発行されていたものだけれど――それを明記されている訳ではない。旅券はただの旅券。

ただ旅をする為に必要な書類――

「ようこそ、竜と古の町コンコディアへ」

にっこりと係員が笑ってくれた。

それがあたしの――リドリー・ナフサートの新しいはじまり。

新しい出会いと出会いたくなかった出会い。

「家と仕事、ねぇ」
ふむ、と係員は唇を曲げ、ぱらぱらと書類をめくる。
「仕事の前にとりあえずは住む場所だろうね？
一応、町の入口に宿屋はあるんだけれど、きみはこの町に暮らすんだから、ずっと宿屋って訳にもいかないだろうしね。
ふむ」
真剣に悩み始めてしまった係員さんに、あたしは慌てた。勿論、役所が斡旋してくれるものではないと知っている。いくらあたしが世間知らずと言われても、それくらいはわかるのだ。
「困らせてごめんなさい。宿屋に逗留して探してみます」
「そうかい？」
「はい」
「ではね、三日くらい自力で探してみてよ。それでなければ、こちらもきちんと力になるからね。それで、住む場所とか決まったらもう一度顔を出して手続きして」
優しく言われて更に機嫌がよくなった。

――なんていい町なんだろう。
こんなにいい町は無いに違いない。
あたしは自分の幸運を神様に感謝したいくらいだ。
あたしはとりあえず町の入口にある宿屋に部屋を借り、荷物を預けると幸せな気分で町の探検をした。
宿屋を抜けて大きな通りを歩けば、すぐに広場にでる。ここは辻馬車の駅になっていて、あたしが一番はじめにおりたった場所でもある。
視界の端に道化師や魔術師が見えた。楽しそうに子供達がはしゃいでいる。

それを微笑ましい気持ちで眺めて、そのまま通りを過ぎる。いたるところに祭りの名残があった。

そう――豊穣祭があったのだ。

この付近でもだいたいこの秋のまっただ中に豊穣祭は行われるようだ。

ふっと苦いものがこみ上げた。

あたしは――豊穣祭にマーヴェルと結婚するはずだった。

その期日は列車の中で過ぎた。

二人がけの椅子で寝たふりをしながら、そっとそっと――自分の幸せを祈った。

マーヴェルとティナの幸せなんて祈らない。

祈らなくてもあの二人は幸せになれると思うから。

なんて意地悪な姉だと思うけれど、それくらい……許して欲しい。

ふるりと一度首を振った。

過去は要らない。

新しい町で、新しい自分で、生きていくと決めたのだから。

それから二日、あたしは町の中を歩き回った。大きな町にありがちな後ろ暗さが無い、ほのぼのとした町だ。

気さくに声がかけられて、気さくに答えられる町。

――平和な町。

警備隊の人と話してみれば、ここでは滅多に争いも無いと笑っていた。時々酒の飲みすぎでハメを外す人や、よそからやってきた旅人が悪いことをしたりもするが、そもそも旅人じたいが少ないから本当に滅多なことは無いのだと。

二日目の午後、キャンディショップで買ったハッカ飴を抱えていたら、ふいに太った小母さんに声をかけられた。

「あんた」

初対面で突然「あんた」といわれたのは驚いた。けれどその顔に

悪意は無くて、にこにことしている。
「あんただろう、リドリーっていうのは」
「？――確かに、あたしはリドリーですが」
「だろうと思った。ここじゃ滅多に知り合いいがいとは会わないからね」
豪快に笑った女性はマイラ・バーンズと名乗った。
「聞いたんだけど、あんた仕事を探してるんだって？」
誰から聞いたの？
と思わず言いたくなったが、それは役所の人であることはあとで聞いた。
個人情報うんたらはない。
「うちはちっさいパン屋なんだけどね、あたし一人で切り盛りするのもちょっと年齢的に辛くてね、どうだろう。あんたさえよければうちで働いてみないかい？」
年齢的にツライというけれど、マイラ小母さんは随分と元気そうに見える。少し豪快な人だ。
「パンは嫌いかい？」
「大好きです」
「なら良かった。お給金は多くは出せないけれど、うちの売れ残りのパンもあげるよ。まぁ、残らなかった日はかんべんしてもらうけどね」
マイラ小母さんが提示した金額は、確かに多くは無かったけれど、それでもパンをもらえるのは魅力だったし、パン屋の仕事にも興味がある。
あたしはマイラ小母さんにはその場で了承し、その足で小母さんのパン屋を訪れた。
店舗は町の中央からは少し外れているけれど角地にあり、とてもこぎれいで可愛らしい店舗だった。
『うさぎのぱんや』という看板は愛らしいし、描かれているうさぎの絵も可愛い。エプロンにそれが刺繍してあるのを見たときは、ほ

んのちょっとだけ可愛すぎて苦笑してしまったけれど……

その日にはパンも貰って、あたしは美味しいパンにとても幸せな気持ちになれた。

しかも、マイラ小母さんはあたしとの会話の中でまだ住む場所が決まってないと知ると、そのままあたしを待たせどこかに消えたと思うと、すぐに戻ってきてにっこりと笑った。

「うちの店からはちょっと歩くけれど、大通りをまっすぐ宿屋まで行く道に、煉瓦造りの四階建てのアパートがあるの、わかるかい？」

「えっと、左手のほうのヤツですか？　隣がお肉屋さんの」

あたしはこの二日歩き回って覚えた地図を頭に浮かべる。もともと大きな町ではないから、すでに端から端まで歩いている。

「そうそ、あたしの友達がやってるアパートなんだよ。今三階に空きがあるっていうからね、そこにおしよ。今話しをつけてきたからね、あたしの顔をたててはじめの一月はただにしてもらったからさ。来月からは銅貨で十七枚。給金からでも十分払えるだろう？」

あたしは瞳を瞬いた。

――今泊まっている宿屋だって一泊銅貨で七枚なのだ。それは安いし……っていうか、こんなにトントン拍子でいいのだろうか？

「リドリー？」

「あ……ありがとうございます」

「いいんだよ。あいつには一杯貸しがあるんだからさ、これくらいなんでもない」

マイラ小母さんは豪快に笑い、ばんばんとあたしを叩いた。

――だが、この話はちょっとだけ複雑な話が続いた。

あたしが宿屋に戻り、部屋を引き払いアパートにたどり着くと、入口のフロアに続く部屋に暮らしている管理人のアニエス小母さんは苦笑した。

「あんたがリドリーかい？」

「はい、マイラ小母さんの紹介できました」
ぺこりと頭を下げると、彼女は肩をすくめた。
「聞いてるよ。だけどね、あんたに一つ頼みがあるんだよ」
「……頼み、ですか？」
「マイラは強引に話をつけた気でいるけどね、せめて毎月の家賃は銅貨２０枚にならないもんかね？　なに、そのかわりといっちゃなんだけど、ベッドの用意と薬缶の用意もしておいた。勿論今月分の家賃は要らないさ」
　溜息交じりの言葉に、あたしはぷっと吹き出しそうになるのを堪えた。銅貨二十枚だって勿論破格の値段だ。宿屋に三日も泊まれない値段なのだから。
「それで構いませんよ」
そう言うと、アニエス小母さんは苦笑する。
「悪いね」
「いいえ、とんでもないです」
　だが彼女は心底悪いと思っているようで、その日の晩には温かなスープを運んでくれた。
おそらく――マイラ小母さんが相当無茶を言ったのだろう。
けれど二人ともいい人で、あたしはその日あたたかなスープとパンとで幸せな食事を終え、しかもこんな田舎の――失礼――アパートだというのに、三階のこの部屋にまでシャワーが通っているのだ！
　こればかりは驚いた。　世の中列車が通ってオイル・ランプの外灯が煌くようになったといっても、シャワーを引く技術はまだ大きな町でも少ないだろう。
「すごい」
かくいうあたしはシャワーなんてはじめてだった。
　自宅で湯を使うならば、湯船にお湯を張るか、手桶に入れて軽く体をふくくらい。子供の頃なら川でよく体を洗ったものだ。
　こんな小さな町なのに、すごい。

――といっても、これがこの町の標準なのかもしれない。
宿屋ではシャワーこそなかったけれど、浴室があって湯船の横には蛇口があって湯が出てきたのだ。
これだってとっても驚いた。
そのことをパン屋で働いている時にマイラ小母さんに言うと、小母さんは「他の町を知らないからねぇ」と首を傾げ「ここでは蛇口をひねれば水や湯がでるのは普通だよ。まぁ、一重に領主様のおかげだね」と笑っていた。
すごい、御領主様。
「税金取られたって、そのぶんちゃんとやってくれるいい領主だよ」
と、マイラ小母さんは豪快に笑っていた。
――竜と古の町、なんて言うから、もっと古臭いのかと思った。
なんて、さすがに言わずにおいた。

「ようこそ！　ぼくの町へ！」
ぱんっと音をさせて何かがはじけた。
ひらひらと花の花弁と紙切れ、リボンが舞い散る。
パン屋の仕事へ行く為に螺旋階段をおりて行ったあたしの前で、クラッカーがはじけた。
「……」
「あれ？　挨拶が遅れたから機嫌を損ねちゃったかな。
ちょっと忙しくてね、でも安心して。ぼくの愛はずぅっとリトル・リィのものだから」
――はらはらと何かが舞う中、男の手がもつ帽子からぴょこりとうさぎが顔を出し、鼻をひくひくと動かす。
ってか……なに？

――新天地。

全ての事柄があたしの幸せを祈るかのような日々が、もしかして違うかもしれないというかげりを見せたのは、この街を訪れて八日目の朝だった。

気鬱の病と変質者。

町の様子が少しずつざわめくように変化する。
建物と建物の間をロープが巡り、旗が連ねられる。町のあちこちに置かれているのは、子供達が作る小さなランタン。
レンガの壁に色鮮やかなポスターが貼られたり、町の中央広場には移動遊園地の一団が現れる。
収穫祭は小さな町をいっきににぎやかなものへとかえてしまう。
近所のリッターさんの家にパンを届ける為に歩きながら、あたしはほぅっと溜息を落とした。
町のにぎやかさと反するように、あたしの気持ちはゆっくりと沈んでいた。
馬鹿だな、と思う。
今更考えても仕方ない。
こんなに後ろ向きだったろうか？

――収穫祭。それはつまりあたしの街でいう豊穣祭。
もちろん、イヤな記憶だ。
結婚式のはずだった。本来なら、もう少しで結婚一年目で、もしかしたら赤ちゃんだってこの腕に抱いていたかもしれない。
視線が自然と下がり、自分の足元を見ていた。
中央通り。幾つものブロックを埋め込んで舗装された道を歩くあたしは、ふいにぽんっと――両の肩をつかまれた。
「やぁ、リトル・リィ！」
「――――」

ああ、今日は天気がいいなぁ。
本当はこういう日にはアパートの窓を開け放って空気の入れ替えとかしたいとこだけれど、次の休みもこんな天気だといいなぁ。

「こんなトコで逢えるなんて！
さすが運命で結ばれただけはあるよねっ」
「って、誰がよ！」
「あ、やっと見てくれた」
にっこり。

あやしい魔術師はがしりと人の肩を掴んだまま小首をかしげ、まるきり他人の視線など気にせぬ勢いで、ぎゅっと――抱きしめてくる。
「くぬぅっっっ」
は・な・せぇぇっ。
「ほら、ぼくも仕事が忙しいものだから。なかなか君とデートとかできないでしょ？　嫌われたらどうしようって、ぼくは毎日心配なんだ」
「その花畑並の頭の中、かち割って見てみたいんだけど！」
嫌われたらどうしよう？
おあいにく様、そんな心配は毛頭ナイ。だってもうすでにキライなのだ。
心配する必要なし。
「リトル・リィの頼みならきいてあげたいトコだけれど、さすがにそんなことしたらぼくも危ないからなぁ」
「とりあえず離しなさい！」
「ふふふ、ぼくのリトル・リィは照れ屋さんで可愛いなぁ」
さらにぎゅぅっと力をこめ、魔術師は耳元で囁くように「今日もリトル・リィはとってもいい香りだね」
とふんふんっと鼻を鳴らしてみせる。
この変態ぃぃぃ！
匂いをかぐな、莫迦！
ぐぐぐっと、片手にバスケットを持ち、もう片方の手だけで一生懸命ぐぅっと相手の胸を押すのだが、見た目はひょろりとした優男だというのにこれがびくともしない。

っていうか、道端で何をしているんだ。
そもそも誰かとめてくれ。
という心の叫びもむなしく、町を行く人は苦笑を零し、
「やぁ、コーディロイ。あんまりキティを苛めたらいかんよ」
などと片手をあげて優しく見守ったりするのだ。
誰が子猫ですかっ。

――そもそも、この変態男の暴走を何故誰も止めないのっ。
というあたしのまっとうな意見が通ったのか、その時に聞きなれた声が耳に入った。
「リドリー？」
吃驚した声に、ハッとあたしの視線は広場の方向から歩いてきた青年を見た。
それはペギーさんのところのトビーで、彼の帽子の下の鳶色の瞳が大きく見開かれている。
ぎゅっとあたしを抱きしめたまま、魔術師はふいっとその眼差しをトビーへと向けた。
「やぁ、トビー」
「コーディロイ？」
「御仕事かい？　仕事熱心はいいことだね！
ぼくも毎日仕事で忙しい！
でも何てラッキーなんだろう！　今日はこうして道端で愛しいリトル・リィに会えたんだ。君にもぼく達の赤い糸が見えるだろう！」
へらへらと笑いながらそんな風に言う。
あたしはかぁっと自分の体温があがるのを感じた。

いや、トビーに誤解されたところで構わないのだけれど、いや、構うか？　あれ、もういやっ、なんだかわからーんっ。
トビーとは仕事で顔を合わせるのだから、こんな変態と知り合い

だと思われるのは絶対によろしくないっ。
「いえ、あの……リドリー、嫌がってるみたいですけど」
「いやだな、リトル・リィは照れ屋さんなんだ。
そこは君が察知してあげなくちゃ。そんなんじゃもてないよ？」

おまえがじゃっ。
くぅっとあたしは呻くと、ふと無防備な相手の……まあ、いわゆる急所を足の太ももで蹴り上げた。
――なんというか……いやな感触でございます。
ぐにゃん、というか、えっと……
いがいに手ごたえが（足だけれど）ないというか。

「ぐごぅっっ」

「離せ、この変態！」
ぱっと肩から手が離れると、あたしは慌ててその場を飛び退り、まるきり何事もなかったかのようにトビーへと笑いかけた。
「トビー、このあたりは昼間っから変質者が出るから怖いわね」
「……いや、あんまりでないけどね」
「ヴぅぅぅぅぁぐぅっ、リトォル……」
うっさい、変態。あたしは仕事中なのっ。
あたしはふんっと横を向き、
「じゃあまたね、トビー」
「え、ああ……うん。気をつけてね、リドリー」
トビーは引きつった笑みを浮かべ、悶絶している男を哀れむように視線を向け、同じ男としての性なのか、とんとんっとその腰を叩いてやった。
「コーディロイ？」
「……ぅぅ」
「ぼく、コーディロイのそんな姿、はじめてみました」

「――っっぐぅぅっ」
とんとんっと飛び跳ねる魔術師を、トビーはどこか奇妙な眼差しで眺めていた。

まったく！
どうしてああ年がら年中御花畑で変態でいられるのだろうか？
悩みなどないに違いない。悩みがないのが悩みっていう、そういう人種に違いない。
考えれば考えるほど、むかむかとしたものが競りあがってくる気がする。
お届けものであるパンをきちんと配達し、足早にパン屋に戻る。
その頃にはすっかり、頭の中は「変態ボケ、消え去れ」と悪態で一杯になっていた。

眠る竜と守り神

さて、着々と町は「収穫祭り」に染まり始めている。
はじめのうちこそ、なんとなく気鬱を感じていたあたしだが――祭りのことを思うと、何故か脳裏に変態が踊るようになったため、気鬱を感じる暇もない。
どちらかといえば殺意は感じるが。

「収穫祭りには豊穣の女神の役をする女性が町をパレードするのよ」と、【うさぎのぱんや】の常連客の一人が教えてくれた。
どうやらあたしが住んでいた街とは祭りのやりかたが違うようだ。
「女神さま？」
「今年はアマリージェ様が１４歳になられたから、アマリージェ様が女神様をやるのですって」

知らない名前。
まぁ、町の人たちはたいていの人と知り合いなので、さらっと名前が出てくるのだろうが、生憎とあたしは引っ越してきて一年。この町に親族もないため、誰もが知っている情報にもうとい。

あたしが小首をかしげて「アマリージェ様？」と、かえすと、彼女は「ああ」と思い出すように笑った。
「ご領主さまの妹さまよ」

あたしはその時はじめて、ご領主さまの妹が十四という年齢であることを知り、ついで尋ねてみた。
「ご領主さまって、もしかして若いの？」
その言葉に、あたしとたいして年齢の変わらない彼女は噴出した。

「リドリーは知らなかったのね？
この町のご領主さまは、二年前に代替わりをなさって、今は２６歳のとぉっても素敵な方なのよ！」
まるでとっておきの秘密を打ち明けるかのように言う。
「町の若い娘達の間では誰がご領主さまの奥方になられるかでもりあがってるの」

まるで彼女自身、自分のことのように頬を染めて話している。
そこまで我がコトのように話せるのであれば相当の美形なのだろうか。あたしはちらりと美形という単語に魔術師が浮かび、なんとなく落ち込んだ。
　そうか……あたしってば、アレを変態認識はしているけれど、美形認識もしているんだ。ま、面食いではありませんが。

　一通りご領主さまと収穫の祭りでもりあがったお客様は、パンを抱えて帰宅した。
「リドリー、悪いんだけれどちょっと買い物頼まれてくれるかい？」
店の奥で粉と格闘しているマイラおばさんが声を掛けてくる。あたしはちらりと時間を確認し、それほど混雑しない時間だと一つうなずいた。
　バスケットとマイラおばさんの小銭入れを受け取り、買い物の内容をメモする。
「エイセルの葉とヴィラウの粉と……」
そのどこか不穏な注文に、あたしは眉を寄せて口を開いた。
「マイラおばさん体調でも悪いの？」
「どうして？」
「だってこれって、腹痛の薬とかよね？」
薬というか原型だが。
「パンにいれるんだよ。こないだあんたがもってきてくれた花。あの便秘にきくのが好評だったからね！」

……だからって薬の原型を使ってどうするのでしょうか。
そのパンの試作品を食べることになると思うと、あたしはなんだか暗澹たる気持ちになったが、店主の言葉に逆らうこともできずにかい出しにでることにした。
　ううう、便秘とかその逆とかになりそう。

「やぁリドリー」
その言い方にびくっと身構えたが、通りで収穫祭の飾りつけをしているおじさんだ。
あたしはぺこりと頭をさげた。
「こんにちはエイセンさん」
「いい天気だね。竜がいい夢を見てるんだろうな」
　あたしはこの地方独特のこの物言いが嫌いでは無い。
――作物が一杯とれたら、竜の機嫌がいいとか、天気が悪いとあまりいい夢じゃないのかね、とか。
　この町の人たちは随分と竜が好きだ。
竜が好きなわりには「竜が目覚めた」という単語は聞かない。どうやら竜はあくまでも眠っていなければならないのだ。

　だからあたしのその言葉は不用意だったろう。
「竜は随分とおねぼうさんね」
ふふっと笑いながら言ったら、人のよい鬚をたくわえたおじさんは目を見張り、慌てたように脚立からおりてきょろきょろと辺りを見回した。
「リドリー！」
強い口調で言い、そして声を潜めた。
「冗談でもそんなこと言うもんじゃない！」
「……え？」
「なんて恐ろしいことを、あああんたは余所者だからね。

わしだったからいいようなもの、もう二度とそんなことを言っちゃいかんよ？」

それがあんまり深刻な調子で、あたしは物凄くびっくりとした。

がしりと両肩をつかまれ、何度も念を押すおじさんにあたしはがくがくと首をたてにする。

と、そんなあたしの腰に何かがからみついた。

「いいんだよ」

ぴたりと背中に体温が当たる。

エイセンさんがびっくりとしたように顔を見張り、引きつった笑みを浮かべる。

「リトル・リィに触ったら駄目だよ、エイセン」

「コーディロイ……」

出たな、変態！

あたしが身じろぎして相手から逃れようとするのに、魔術師は両腕でがしりとあたしを捉えて、あたしの頭の上からにこやかな調子で言う。

「竜がおきたっていいんじゃない？　ぼくはちっとも気にしない」

「コーディロイ！」

「冗談だよ、エイセン。

竜はずっと眠ってる。なんたって氷漬けだしね」

言いながらひらひらと手をふり、魔術師はエイセンに「またね」と微笑む。

あたしはその腕の中で、眉間にぐぐっと皺を寄せた。

「はーなーしーて」

「チューしてくれたら離れてあげる」

「懲りてないわね！」

また蹴られたいか！

というあたしの剣幕などおかまいなし、魔術師は片手をひらめかせ、その手に花を一輪。

「この町の人はね、竜が何であるか知っているから……弱いだけなんだよ、許してあげて」
「――」
珍しくこの男が静かな口調でいう。
あたしは眉を潜め、身じろいだ。

「竜は守り神なのでしょ？」
「――本当はちょっと違うんだ。
崇り神、といえば判る？
崇られるのがイヤだから、神様ってことにして敬うわけ。敬ってるんだから悪さしないでってことだね」

あたしははじめて聞く話にますます顔をしかめた。
なんとなく胸がもやもやとする話。
「もっと竜の話が聞きたい？」
あたしは少しだけ体の力を抜いて、戸惑いながらうなずいた。
今まで見ていたものが何か違うような、へんなもやもや。くすりと頭の上で声がする。
魔術師はあたしの首筋で、吐息をぬらすように、
「殊勝なリトル・リィ可愛い」
と、ちゅっと音をさせてそこを吸い上げた。

天誅――
あたしの肘が見事にクリーンヒットしたのは言うまでもない。

あたしもあたしだ。
ちょっと町の人に「余所者」あつかいされたからって落ち込んで、ちょっと魔術師がしおらしいからって気を許しそうになってしまった。

あたしは仕事の途中なのだ。
ああ、忙しい！

眠る竜と守り神（後書き）

毎度痛い目にあうようになってしまった……

タイトルをみれば「あたしの」ってくらいなんだから、いつからぶらぶになる筈なのですが――道のりがちと遠い。

不意打ちとドラゴンバスター

カウベルの音に店の奥、裏手の扉を見れば、粉屋の息子トビーがなんだか気まずい調子で帽子を少し押し上げた。
「やあ、リドリー」
その様子が、先日のことを気にかけているのだと知らしめる。
あたしはこそりと嘆息し、微笑み返した。
「こんにちは、トビー」
「粉、ここでいいのかな？
注文通りいつもの三倍。ちょっと多いけどつまずかないようにね？」
「ええ、ありがとう」
――気まずいのは全て魔術師のせいだ。あたしは絶対に報復しようと心に決める。
「あの、リドリー？」
「なに？」
「その、きみがコーディロイと付き合ってるって知らなくて、ごめん」
は？
「随分と失礼なことしたかな、て……」
いやいや、きみは何も失礼なことはしていないでしょう？
むしろ失礼なのはあの変態だ。
「って、あたし別にあの人と付き合ったりとかしてませんよ？」
あたしはここは大事と訂正しておく。

ここは大事です。来週テストに出ますよ！
――あたしと魔術師は付き合っていません。まったくの他人です。
関係があるとすればそれは無関係。
それでもあくまで関係を主張するなら、ご近所さん。
「そうなの？」

ぱっとトビーの顔に喜びが広がる。

「よかった。
オレ、とうていコーディロイにはたちうちできないし」
えっと、きみは気づいているのか？
「あ、じゃあまた」
嬉しそうなトビーがそばかすの散った顔を赤く染め、帽子を目深にかぶって店を出て行く。
あたしはそれを見送る形で唖然とした。
――トビー……
あなた、あたしに告白もしていないというのに、何でしょうその全開な感じは。
これで「いやいや、好かれているなんて傲慢な勘違いよ。あたしってばかね」というほうが莫迦っぽいじゃないの。
それでもって、更にいえば告白されてもないのに「あなたとつきあう気はないのよ」なんて言う程の剛の者ではありません。
どうしてくれよう、この微妙な人間関係を。

「どうかしたかい？」
新しいパンを完成させたマイラ小母さんは達成感のある清々しい表情であたしを覗き込む。
あたしは曖昧な笑みを浮かべ、
「どうかしたんでしょうかね？」
「あんた本当に疲れてんじゃないかい？　大丈夫かい？」
――余計な心配をされてしまいました。

マイラ小母さんは時間を確かめ、
「今日はもういいよ」
とあたしの肩を叩いた。
「いえいえ、そんなわけには！」

「大丈夫だよ。今日のあたしは調子がいいしね！　あんたも若い娘さんなんだから、少しは休んだり遊んだりするといいよ。若い頃っていうのは、あんた、驚くほどはやく過ぎてくもんだからさ」
――やけにしみじみと言われた。
あたしはこれ以上反論せず、じゃあっと微笑んだ。
ちぇっ、今日はパン抜きね。
なんていうあたしの内心が伝わった訳ではないだろうに、マイラおばさんはあたしのバスケットの中にいそいそとパンを詰めてくれた。
「今日作った試作パンだよ！　家でゆっくり食べて感想を聞かせておくれね」
「――はい」

それは、アレですよね。
腹痛の薬とかが入ったパン。
あたしは引きつった笑みを必死に押し隠した。
――がんばれあたし！
でも神様ってどうやらいるらしいのです。
あたしがバスケットを手に自分のアパートへと帰宅すると、螺旋階段には――いつも通り魔術師がにこやかに待っていた。

おまえの仕事はいったいどうなっているのかと尋ねてみたい。
心の底から。
しかし今はそれどころではない。
あたしはにこやかに「おかえりなさい、リトル・リィ！」と毎度の如く鳩を飛ばす魔術師ににっこりと微笑みかけた。
「会いたかったわ、魔術師」
こんなに心から会いたかったのはおそらくはじめてだ。
ぱっと魔術師の顔に喜色が広がる。
「ぼくは魔法使いだってば、リトル・リィ」
それでも訂正を忘れない。

がばりと手をひろげて抱きついてきそうなのを避け、あたしは自分のバスケットを差し出した。
「お店で作ったパンなんだけど、食べてくれる？」
「リトル・リィが作ったパン！」
外れです。
マイラ小母さんが作りました。
お店で作ったというところに嘘はないですよ。
「あああ、やっとぼくの愛が君に届いたんだね。愛しいリトル・リィから贈り物をもらえるなんてっ！」
――そんなに全開で喜ばれると、微妙に罪悪感がある気がして困る。
「しかも手作りの食べ物なんて」
感激を隠さずに潤んだ瞳で見つめられると、あたしはなんだかいたたまれない気持ちになってくる。
「た、食べてくれる？」
「勿論だよ。ああ、ハニー」
はにー……
絶対にダーリンとは言いませんよ？

魔術師はひとしきり感激を示し、おもむろにバスケットの中の丸パンを取り出し、あむりと豪快にいった。
「――」
本来であればこのまま逃亡を図りたいところだけれど、なにせマイラ小母さんにはパンの感想を求められているのだ。
純粋に、素直に、あたしは面前の魔術師を観察した。

たらりと、その額から汗がこぼれた。
たら、たらり……
「ううう、毒殺……卑怯、なり」
悶絶する青年を前に、あたしは引きつった笑みで凶悪なパンを見つめた。

――予想どうり、これはきっとあの【苦ヨモギの練りこみパン】に匹敵する破壊力。いや、さらにそれを上回る最終兵器であったに違いない。
　食べなくて良かった。
「ううぅぅ」
「えっと、どう、かなぁ？」
「それは、この――パンについて、聞いている？」
ドアのノブにすがりついた魔術師だ。
「そう」
「――君は竜すら殺せる。ドラゴンバスターの称号を与えてもいい」
　そうか。
そこまで強烈だったのね。
あたしはさすがに罪悪感を覚えずにはいられず、前かがみになってドアノブにすがりついている魔術師を覗き込んだ。
「あの、大丈夫？」
「死ぬ」
確かに死んでしまえとか消え去れとか色々思いはしましたが、それは決してあたしの手で行われるものであってはいけません。
　殺人犯はイヤ。
あたしは慌てて魔術師の腕に手をかけ、
「魔術師、ちょっ、ねぇ？　大丈夫？　お水？　吐き出す？」
「ああ、ハニー。
君がくれたものを吐き出すなんて、できない、よ」
それで死んだらどうするつもりだ馬鹿！
あたしは殺人犯になどなりたくない。
「うぅ……」
オロオロとするあたし。
ずるずると体をさげる魔術師。
――十七歳パン屋勤務の美少女、パンに毒を仕込み階下に住む青年

を毒殺。

頭に不吉な新聞の見出しが流れる。
こういう時、どんな女性も美人になれるものだ。今まで美人であるという冠は抱いたことがないが、きっと皆の中に絶世の美人が想像されるだろう。最近出始めたという写真さえつけられなければ。
なんて、そんなことを喜んでいる場合じゃない。
「まっ――」
悲鳴をあげるようにあたしが魔術師にすがりのぞきこむと、ドアノブにすがっていた手があたしの肩にかかり、小刻みに震える。

「ああぁ」
悲痛な魔術師の声。
駄目よ、今は死んでは駄目。
せめて時間差でお願いします。
あたしが本気で斜め上方面に心配をしていると、ふいにがばりと魔術師は顔をあげた。

「――――」

ぎゅっと後頭部を押さえ込まれ、唇と唇が触れる。
おそらく触れる寸前にスピードを調節した魔術師は、歯を当てることも場所を間違えることもなく、あたしの唇を斜めにふさいだ。

「んっっっ」

「ごちそうさまでした」

「っっっ」

「パンはまずかったけれど、ちゃんと口直ししたから大丈夫。
ああ、味感じた？
パンにしては苦い、というかえぐいよね？
どうせあのパン屋のおばさんの新作だろうけれど、これはちょっとオススメできないね」

へらりと笑う魔術師を、へたりと座ったままみあげ、あたしは怒りでじわじわと口元が震えるのを感じた。

キスされたキスされたキスされた！

別にはじめてじゃないけどね！
だからってほいほい許せることではない。
断じてない。乙女の唇をこんな風に奪って許せるものか。

「あれ？　腰抜けた？」
「っっっ」
「そこまで過激にはしてないつもりだけど。
ん？　ふふふ、リトル・リィは可愛いなぁ。キス一つでそんなじゃこの先が思いやられてしまうよ？　まあ、勿論ぼくがゆっくりじっくり手とり足とり慣らしてあげるから心配はいら――」

「死になさい」

あたしはがしっと魔術師の上着を掴み、へらへらしている男を引き寄せるとその口の中にバスケットの中に残っているえぐい味の――ううう、味が判ってしまった――パンをその口に押し付けた。

マイラ小母さんさんには明日「ちょっとえぐみがあったけれど、良薬口に苦しっていうし」とあたしは笑っていえるだろうか。

とりあえずまたしてものたうっている魔導師は無視し、あたしはバスケットを手に自宅へ戻ることにした。

――心配なんかするんじゃなかった！

不意打ちとドラゴンバスター（後書き）

おもに自分の心配です。

パン職人と頬の痛み

大量の粉だった。
いつもの三倍仕入れたという粉。それは勿論――戦場だ。

あたしは朝からずっとパンをこねている。
天然の酵母をいれて、醗酵させて空気を抜くためにだんだんっと艶やかな大理石のプレートに叩きつける。パン屋、というかこうなるとパン職人の世界だ。

――マイラおばさんはあたしの顔を見るなり謝った。
「リドリー、悪かったね。あんな失敗作を食わしちまってさ」
と、心底申し訳なさそうに言っていたが、できれば触れて欲しくなかった。パンのえぐみと一緒に変態が脳裏で踊る。辞めて欲しい。
あたしはエプロンをつけながら引きつり笑みで「平気ですよ。あたしマイラおばさんのパンをいつも楽しみにしてるんです。そんな顔しないで？」と続けた。
「それに、何でもチャレンジしないと。新作パンはイメージとインスピレーションだっていっていたのはマイラおばさんでしょ？」
「そう、そうだね。
判ったよ、リドリー。あんたがそう言ってくれるんならあたしも心強いよ！　そうだね、新しいパンは挑戦だよね」
――めげないあなたが大好きです。

あたしは心の中で泣いていたが、今現在はとてもキモチがいい。
パンを叩きつける行為というのは凄いキモチが良いものだとはじめて知った。
「パンは叩いてやるのが一番さ。
ふっくら、ふんわりの美味いパンを作るコツは、力いっぱい投げた

りぶつけたりすることさ！
　あんたもやってごらん。頭の中で大嫌いなやつを思い浮かべるのがコツだよ？
まぁ、あんたにそんな相手がいるかどうかあやしいけどね」
豪快に笑ったマイラおばさんだが、それはもう当然――あたしの内部はただ今絶好調に魔術師を叩きのめしている。

もうむしろ何故昨日のうちに息の根がとまっていなかったのだろうとすら思えてくるから不思議だ。
　あたしは一心不乱にパンを叩いた。
こねた。投げた。作りまくった。
――マイラおばさんが多少引いたところで、今のあたしは物凄く清々しいのだった。
パン屋というのはとても素晴らしい職業だったのだ。
天職かもしれない。
「えっと、少し休みなよ？
せっかく明日は半日休みだっていうのに……あんた疲れて動けなくなっちまうからね？」
　マイラおばさんの助言と同時、今日は閉店となっているパン屋のガラスベルが軽快な音をさせた。
「ばーちゃん！」
元気な調子で入り込んできたのは、弱冠十一歳の将来有望株――――マイラおばさんの孫であるアジス君。
　ほわほわとした栗毛の髪と、やんちゃな緑の瞳をくりくりさせた愛らしい少年だ。
アジス君はそのままの勢いでマイラおばさんに抱きつき、ついでひょこりとその影からこちらへと視線を巡らせた。
「リドリー、働いてるか？」
「頑張ってるわよ、アジス君」
あたしはクスリと笑ってしまう。

「働き者はいい嫁だって言うぞ。おまえはきっといい嫁になれる」
うんうんとうなずく弱冠十一歳。
「それに比べて、かぁちゃんはちっとも働かない。あれは嫁には向かないんだ」
――何度も言うが弱冠十一歳。
この口調はどうやら彼の父方のお祖父さんのものらしい。あったことはないが、きっと物凄い偏屈親父に違いないとあたしはにらんでいる。

「生意気な口きいてるんじゃないよ。
それより、あんたの母さんはどうしたんだい？」
「母ちゃんは道端で話しこんで動かないからオレ一人で来たんだよ。まったくオンナってヤツは困ったもんだよな」
アジス君のお母さんのターニャさんはまだとうぶんきそうにない。あたしとマイラおばさんは顔を見合わせ、笑いあった。
「腹はへってないかい？
昨日の残りパンでもおあがり」
「今日は焼いてないのかよ？」
「今日は下準備だけさ。明日の朝に一杯焼いて収穫祭に備えるからね。
ほらほら、手を洗っておいで。リドリー、あんたもだよ。ちょいと休憩にしよう」
マイラおばさんの柔和な顔がさらに優しいものになる。
家族っていいなぁ。

なんて、落ち込むことを考えてしまった。
――あたしって結構懲りない性格かもしれない。
ついでに後ろ向き。
全部捨ててきたのだ。

自分で捨てたのだ。
何度も同じキモチで沈むなんていい加減にしろ、あたし。

「どうした？」
水場で並んで手を洗っていたら、アジス君がひょこりと下からあたしの顔を覗き込んできた。
緑の瞳が真摯にあたしをみあげていて、あたしはうまく笑えているかどうか途端に不安になる。
「何でもないよ？」
「ふーん？」
「――なんかおかしい？」
「オトナってめんどくせえな？」

弱冠十一歳の少年よ、君には何が見えているのか？
あたしは引きつった。
「そうだ。明日はオレが案内してやるからな」
「え、うん。楽しみにしてる。この町の収穫祭ははじめてだから」
「別にそんなに面白くないぜ？　毎年十四歳のオンナが女神役でパレードして、美味いもの食って踊って騒ぐだけ」
「うちのほうの街ではね、女神はコンテストで選ぶよ？　ここはそういうんじゃないみたいだね」
――妹のティナも、十三の年にコンテストで優勝して花冠をつけて女神を演じた。
あの子は本当に可愛い子だから、むしろ当然だったろう。
脳裏に金色のふわふわとしたティナが浮かんだ。
「もともと人が少ないからな、この町。今年は確か領主さまのトコのコだろ？
去年は靴屋の娘だった」
アジス君は昨年のパレードの様子を楽しそうに語っていたが、やがてマイラおばさんに呼び戻された。

「あんたたちいつまで手を洗ってんだい？
ふやけちまうよ？」
笑いながら言われ、あたしとアジス君は顔を見合わせて笑った。

「領主さまは随分と素敵な人みたいね。
お客さんが言ってたわ」
売れ残りのパンを竈（カマド）で多少焼きなおし、あたたかなミルクでパンを食べる。
その時の話題でそういえば、マイラおばさんは嬉しそうに、
「そりゃあね、ご領主さまは立派な方さ」
と言い、
アジス君は「おっさんだろ」と冷たい。
十一歳には二十歳過ぎた人間は【おっさん】らしいという恐怖にあたしは身震いした。
あたしが【おばさん】と呼ばれる日も近い。
「明日はきっとご領主さまもパレードに参加されるんじゃないかね。
なんといってもアマリージェ様が女神役だしね」
「それは楽しみですねー」
もちろん、人気の高いご領主さまのご尊顔だ。
「オンナってそんなんばっかなぁ」
アジス君は盛大に溜息を吐き出す。
「さてと、そろそろ暗くなる」
そう言い出したのはマイラおばさんで、それを合図にしたようにアジス君が席を立った。
「リドリー、送ってく」
「え？」
「明日の祭りのおかげで、街に知らない顔がちらほらいんだよ。
町の中に入れなくて外に野宿してる連中もいるしさ、暗くなると物騒だろ？　送ってく」

弱冠十一歳の少年はそういいながら少し伸びた前髪をかきあげた。
――君は何故に十一歳なのか。
あたしはその男前さに少しばかりくらりときてしまう。
「でも、祭りの準備で町の人達だっているし」
「トシゴロのオンナが遠慮してんな」
「……」
「送ってもらいなよ、リドリー。そんなチビスケでも声と度胸だけはいっちょまえだからね。何かあれば大声で啖呵の一つで町の人がくるさ」
カカと笑うマイラおばさんに、あたしは肩をすくめてこれ以上断るのも難だと思い、甘えることにした。
「チビスケはよけいだ、ばーちゃん」
アジス君はふんっと横をむいた。

薄暗くなった町中。
石畳の道を歩きながら二人で祭りの話しやマイラおばさんの凶悪パンのことを話題にあたし達は楽しく帰路についていた。
手をつないで、まるで本当の姉弟のように。
無邪気に笑い、怒るアジス君が可愛くて思わず頬が緩んでしまう。
そんなあたしの心を突き刺すように、突然――
「リドリー！」
名前が呼ばれ、あたしがそれを認識する前に、
パシンっと激しい痛みが頬を打った。
――金色の巻き毛がふわりと風に揺れていた。
目元を真っ赤にして、振り上げた手をそのままにその場に立っていたのは、

「ティナ……」

あたしは、一年ぶりの妹の姿に目を見開いた。

過去の傷と過去の歪み

ジンジンと頬が痛んだ。
冷たい風が、さらにその痛みを広げるように感じていた。

あたしが正気を取り戻すより先に、あたしの手をつないでいたアジス君が咄嗟に動いていた。
「何すんだよ！」
「何って……あんた何よ？」
「何って」
「まさか！　リドリー、あんた子供？」
って、ちょっと――アジス君とあたしの年齢を思いだして欲しいし、何よりティナ！　あたしがあんたの前から姿を消したのはたかが一年前ですよ？
自分で言葉にしてからその事実に気づいたのか、ティナの顔が赤く染まる。
「え、あ……それは、ないわよね」
そうね。

「そんなことより！
どういうことか説明してよ！」
ティナは気恥ずかしさを隠すように畳み掛けた。
アジス君を無視して。
「説明は俺にしろ！
なんでリドリーを叩いたんだよ、このヒス女！」
「なんですってぇ」
「突然暴力ふるうなんてどういう了見だっ」
「あたしにはリドリーを叩く権利があるのよっ」
あたしは呆然と二人のやりとりを見ていたが、やがてハッと正気を

取り戻して慌ててアジス君の肩に手を掛けた。
「アジス君！
あの、ごめん――これ、あたしの妹のティナ」
そういうと、あたしとティナとを見比べてアジス君は眉を潜めた。
「似てねぇ」
うん――あたしもそう思うよ。

あたしは苦い笑みを浮かべ、アジス君の体の向きを【うさぎのぱんや】へと向けた。
「送ってくれてありがとう。
もう大丈夫だから――明日、楽しみにしているからね」
「……」
不信気な視線を向けられたが、姉妹だということは疑っていないのだろう。アジス君はあたしの肩をぽんっと一度叩き、
「何かあれば言えよ？」
――弱冠十一歳。男前過ぎますよ。
あたしは少しだけ彼から勇気をもらい、見送った。

足が震えそうだった。
振り返るのが怖かった。
けれど、そこにはちゃんとティナがいた。

泣きはらしたような顔をして、憎しみを込めた瞳で見つめてくる。
あたしの行動、全てを見逃すまいとするように。
「うち……そこのアパートなの。来る？」
「――行くわ」
「一人で来たの？」
「そうよ」

ティナの返事はとげとげしい。

――おかしいなぁ。
今頃、きっとティナは幸せになっていると思っていたのに。
邪魔なあたしがいなくなって、きっと今頃はマーヴェルと一緒に楽しく暮らしているとおもっていたのに。
あたしは重い足取りで自宅へと戻った。
三階建てのアパート。
螺旋階段をそろそろと歩く。こんな日にも魔術師が顔を出すだろうかと戦々恐々としていたものの、何故か魔術師は顔を出さず、あたしはほっとした。
「狭い」
ティナは冷たく言い切った。

「リドリーが全てを捨てて手にいれたかったのは、こんなものなの？」
――ティナの言葉は悪意に満ちていた。
あたしは微笑を浮かべ、椅子が一客しかないその部屋でティナに椅子をすすめ、お茶をいれるために湯を沸かした。
「あたしが聞きたいこと、判ってるよね？」
「――」
「どうしてあんなことしたのよ？
マーヴェルがどれだけ傷ついたと思ってるの？」
ティナは唇を戦慄かせていた。
「結婚式間近に花嫁に逃げられたのよ？　あの人がどれだけ冷たい視線にさらされたと思うの？　どれだけあの人がっ」
「――」
「どうして！
どうしてマーヴェルを裏切ったのよっ」
ティナの言葉はどこか遠い。
――ティナは悔しそうに泣いていて、あたしはそんなティナをどこ

か空虚に眺めていた。
　あたしはマーヴェルを裏切ったのだろうか？
いいや。
裏切っていたのはマーヴェルで、そしてティナだった。
それを見ないふりで通すことが堪えられなくなったとき、あたしは決断したのだ。
「どうしてそんなひどいことができるの！
マーヴェルがどんなに辛い思いをしたと思ってるのよ！」

あたしは酷いことをしただろうか？
むしろ二人の為に、いや……
自分の為にあそこを出たことは事実だ。
あたしはあそこで幸せにはなれない。
あそこでは誰も幸せになれない。

あたしは、それを良く知っていた。

気分が高揚しているティナは、勢いをつけてテーブルの上のカップに手を伸ばしかけた。
――掛けられるっ。
咄嗟にそう思ったけれど、それを押さえるようにすっと、黒いステッキがティナの手を押さえた。

とんっと、まるで軽く。

あたしは呆然とした、ティナもまた、呆然としていた。

あたしはゆっくりとティナの手に当てられたステッキを見て――そしてそのまま視線をステッキの上へとあげた。

握っているのは白手。
「魔術師」
確認するまでもなく、それはいつもと変わらない傲岸不遜なその男。
「ごきげんよう、部屋の鍵は閉めたほうが良いね。無用心だよ」
にっこりと微笑み、ついで魔術師はステッキをおろして優雅に一礼した。
シルクハットをくるりと回し、胸元に軽く押し当てて。
「こんにちは」
「……こん、にちは」

ティナは戸惑うように応える。
「大きな声であまり怒鳴るものではないよ。このアパート、わりと壁が薄いからね」
ティナの頬がカッと赤くなる。
「なんなんですか、あなたっ」
「魔法使いだよ。傲慢なお嬢さん？」
クスリと口元に笑みを刻みつけ、すっとステッキを一回転させるようにして床に引き戻し、とんっと床をついた。
「あなた――」
「ぼくの愛しい人を傷つけるものは、たとえ誰だろうと許すつもりはないよ？」
何を勝手なことをっ。
あたしが口を挟むよりさきに、ティナはギっとその視線をあたしへと向けた。
「リドリー！
この男がいたからなのっ？」
それは誤解です！
そんな事実はありませんっ。
「身勝手なお嬢さん」
クスクスと魔術師が笑う。

その笑みが、いつもの彼とは違っていた。

「自分は悪くないと思いたいんだね。悪いのは全てリドリーだと思いたいんだね」

こんな時だけ、魔術師は確かにリドリーと口にした。

「ティナ」

まるで唄うように。

艶やかに。

魔術師は微笑んだ。

「――水車小屋が君のお城だった」

突然、魔術師は奇妙なことを言う。

は？

とあたしが眉を潜めるのとは逆に、ティナはすっとその顔色を変えた。

「このままお帰り。

ティナ・ナフサート――君の暮らすその場所は、ぼくの領域では無い。

安全な場所で絶望の夢をみるといい。ぼくの愛しい人を傷つけるものを、ぼくは決して許すつもりはないよ」

「なんっ、あなた……」

「君は何も見なかった。

リドリーはこの町にいない。まったく、結構見つけてしまうものなんだね？　少しばかり君の行動力には脱帽だ。それに免じて体は無傷で返してあげる。

君にはちょっとばかり感謝していることだしね？」

何を言っているの？

あたしは淡い笑みを浮かべ、ただひたりとティナを見つめる魔術師を見た。
魔術師はあたしを見ていない。
あたしなどいないかのように、ただ静かにティナに語りかけ、やかげてステッキをくるりと回し、ティナの額を軽く、ついた。
「そうだな、リドリーはいない。
死んでしまった――判った？」
「リドリーは……死んだ」
「そうだよ。
他の誰も知らないけれど、リドリーは死んでしまった。あの日、君とマーヴェルが寝台を共にしてしまったのを見たリドリーは、自ら死を望んだんだ。
他の誰も知らないけれど、君だけは知っている。君はずっとずっと、それを忘れてはいけない。
君が――リドリーを殺したんだ」
「ちょっ」

何を言っているのよっ。

あたしは慌てたが、魔術師もティナも――あたしなどいないかのように振舞う。
やがて、つっとティナの瞳から涙がこぼれた。
「リドリー……っ、リドリィっ」
まるきりあたしが死んでしまったかのように、ティナは切なそうに声をあげて泣き出す。

魔術師はそんなティナを満足そうに見つめ、微笑んだ。
「――君はずっと自分の罪を忘れない」
「何をしているのよ！」

あたしは堪えられずに声をあげた。
魔術師の瞳がやっとあたしを見る。けれどその瞳は――冷ややかな眼差しだった。

「やぁ、リトル・リィ？」
妖艶な、という言葉が似合うくらい綺麗な微笑みを浮かべ、魔術師はステッキをくるりとまわして片手の平で受け止めた。
ぱしりとステッキの乾いた音。
――そして、泣き崩れたティナのすすり泣き。

「何を、したの？」
「邪魔だから帰るように説得した」
「……そうは見えない」
「そう？　大丈夫だよ。おちついたら勝手に自分の町に戻るから。もう君を煩わせることもない」
肩をすくめてみせる相手に、あたしは一歩身を引いた。

「魔術師？」
「いやだな、リトル・リィ――ぼくは魔法使いだよ？」
くすりと、小さな笑みをこぼす。

その瞳はいつもの色をたたえていない。

あたしは更に一歩退く。
相手が――怖い。

けれどあたしの家は小さなアパートで、やがて背中が壁に触れた。
魔術師は小首をかしげ、困ったように微笑んだ。
「君の記憶を消すのは、本当は本意じゃないんだよ？」
「――」

「前の時もずっと後悔したんだ。
君ときたらぼくという相手がいるのに、たかが幼馴染なんかに恋してしまうのだもの。
君のことを知ることができても、ぼくは君の元にはいけないから…
…忍耐力を試すゲームかと思ったくらいで、本当に失敗したなぁって悔やんだものさ」

なにを言っているの？

どくどくと心音が上がる。
魔術師の足がゆっくりと床を歩み、あたしの前で立ち止まる。
悲鳴をあげそうな恐怖なのに、舌が凍るように悲鳴はでなかった。

白手に包まれた手が、あたしの頭の両サイドにとんっと触れる。
腕の中に囲まれたあたしに目線を合わせて、魔術師は恐怖に震えるあたしを一瞬悲しそうに見つめて、囁いた。

「おやすみリトル・リィ――良い夢を」
「やめっ――」

唇が触れ合う。
そのまま魔術師の手が狂おしいようにあたしを抱きしめた。
強く、強く、強く。

骨がきしむほどの強さで。

――あたしの意識が白い闇に囚われ、その腕の中でゆっくりと力を失う。

ティナが、泣いてる……

「怖がらないで。
そんな目でぼくを見ないで。
きみがぼくの……いちばんの、ひと」
優しい囁きに、あたしはふっと笑った。
ボクをキライにナラナイデ……

贖罪と虹

――二日酔いのような頭の痛みと、体のだるさ。
「うわ、筋肉痛だ」
あたしは着替えも食事も済ますことなく寝てしまった自分に唖然とした。

確かに昨日はめちゃくちゃパン種を作っていたけれど、こんなに腕がだるくなるとは思わなかった。
　軽く自分の腕をほぐしながら、今朝は早く店に行かないといけないのだと思い出す。
ばたばたと身支度を整え、洗ってあるエプロンをバスケットに放り込むと、あたしは出勤の為に家を出た。
「おはよう、リトル・リィ」
「――おはよう、魔術師」
「今日の花は山間に咲くリシェルの花。花言葉は」
シルクハットをとんっと叩いて取り出した花束。
魔術師は一旦声を潜めて「贖罪」と囁いた。

その声の調子に、あたしは眉を潜めた。
「……何かあった？」
「ちょっとね。色々と反省することがあったものだから」
　その言葉にあたしは瞳を瞬いた。

反省！
この男の口からそんな言葉が漏れようとは！
「やめてよ、天気が崩れるじゃないの。せっかくの祭りなのに」
「晴天がいい？」
「そりゃ、そうよ」

「じゃあ、今日は晴天を約束するよ。空一杯に青空を君に」
ハイハイ。
「魔法使いを信じてないね？」
軽くいなされることにムッとしたのか、やがて魔術師は吐息を落として微笑んだ。
「では、魔法使いらしいことも一つ」
「なによ？」
「パレードを楽しみにしておいて。空にぼくからの贈りものを君に」
「ちょっ」
とんっと花を手渡し、魔術師は自らの部屋の扉をひらいてそのまま室内に入ってしまった。

あたしは手渡された花と部屋の扉とを交互に眺め、不吉な言葉を耳の奥で反芻した。
――パレード、見に行くのやめようかしら。

午前中はパンをめ一杯焼いた。
それを売りやすいように袋につめたりとターニャさんとアジス君とマイラおばさんとで大騒ぎしながらやる。
それだって祭りの延長上で楽しかったけれど、午後になればアジス君があたしの腕を引いた。
「いくぞ、リドリー」
「パンは食べていかないのかい？」
焼きたてのパンを示されたけれど、アジス君は肩をすくめた。
「屋台で色々食うからいい」
「まぁ、そうだね。じゃあ二人とも気をつけていっておいで」

マイラおばさんに見送られ、あたしとアジス君とは並んで歩きながら町の様相に笑みを浮かべた。

足は自然と中央広場へと向かう。そこにはサーカスや移動遊園地も来ているし、何よりパレードはそこからはじまるのだ。
「リドリー」
ふいに、アジス君があたしの腕を引いた。
「なぁに？」
「昨日、あれから大丈夫だったか？」
真剣な眼差しで見上げられ、あたしは瞳を瞬いた。
「あ、うん？
大丈夫だよ？」
昨日、あれから。
昨日は帰りにアジス君が送ってくれて、その後は珍しくも魔術師と顔を合わせることもなく帰宅。朝までぐっすり――なんて素敵な一日であったろう。
あたしはにっこりと笑って言ったのだが、アジス君は眉間に皺を寄せ、
「ま、大人ってめんどくせえよな？」
――と、またしても子供らしからぬことを言う。
「え？」
「ああ、いい。俺は物分りのいい男だ」
うんうん、と何故か一人で納得しているアジス君。
彼に接していると、本当に彼の父方の祖父という人を並べてみてみたい気になる。
「パレードって確か正午だっけ？」
「ああ、もう挨拶なんかはすんじゃってるんじゃないかな」
中央広場にやっと足を踏み入れた時、そこはすでに人で一杯だった。
中央広場のど真ん中に馬車を利用した山車のようなものがあり、花で飾り付けられたその上には女神の扮装の少女、そしてその少女をエスコートする形で青年が一人。
「あれがご領主さま？」

あたしは若い娘さん達に黄色い声をあげられている青年を見つめ、ほぅっと溜息を落とした。

遠すぎてちょっと判らないけれど、少女同様豊かな蜂蜜色の金髪が目立つ。二人とも純白の衣装でまるで花嫁と花婿のよう。遠めで見ても、それは見事な一対だ。

もっと近くで見てみたいと思うが、いかんせん人が多すぎる。

と、花火のような音と共にパレードが始まる。

山車が動き、この為に呼ばれた踊り子達がその前後で踊る。にぎやかな楽団の音楽。子供達の歓声。

そのスタートの時、誰かが叫んだ。

「虹だ！」

うわぁっという歓声が辺りに響き渡り、女神への祝福の言葉があちらこちらから聞こえる。

「雨でもないのに虹なんて」

あたしが小さく呟くと、隣のアジス君がなんでもないことのように口にした。

「コーディロイだろ」

「え？」

「こんなことするのはあの人しかいないだろ。

って……ああ、リドリーには判らないか？」

アジス君は笑い、肩をすくめた。

大人びた笑いをする少年は、まるで小さな子供に語るようにあたしに言った。

「コーディロイっていうのは、古代神話の言葉で尊き人っていって、これはここの町の神官長のことを示す言葉。

滅多に出てこないし、こういった祝いゴトなんかも顔すら出さないけどさ。

虹なんて、あの人には簡単だろ」
「……」

あたしはその聞きなれぬ言葉にアジス君の顔を凝視した。
「コーディロイって……あのへんな魔術師のこと？」
「は？」
「え、だって……いつもシルクハット被って、ステッキ持って」
ちょっとまて？
なんか違くないか？

あたしが引きつる顔を不思議そうに眺めながら、

「コーディロイは神官服だよ。
だらだらと長いヤツ。黒い髪を背中の辺りまで流して、オレあの人はじめ見たとき女かと思ったけど」
「――うん、判った」
それは違う人ですね？

あの変態が神官長？
いや、ないない。それはない。
それは神職に対する冒涜だろう！

神官長と魔術師

収穫祭のパレードを横目に、アジス君がくいっと手を引いた。
「今のうちに屋台で何か買って行こう」
「行こうって、どこに？」
「今日はご領主の館の庭が開放されてるんだよ。そこで昼飯」
物慣れた様子で案内してくれるアジス君はどこか得意げだ。その顔を見ながら、あたしはとりあえず魔術師のことは放棄した。

――考えても仕方ないことは考えない。

アジス君のすすめてくれる香草の焼きものと、この辺りでは珍しい海鮮を使った炊き込みのご飯、新鮮なフルーツのミックスジュースを買って町の中心部から離れた丘の上にある領主の館へと足を向けた。

幾度か外から眺めたことはあっても、その敷地内に入ったことは無い。

少しだけどきどきとあたしの胸は緊張したが、門番はにっこりと迎え入れた。

町の人たちの幾人は、あたし達と同じように館の庭へと入っていく。

「今の時間が一番空いてる」

と、アジス君は得意げで、そして一番いいのはこっちだと裏庭に造られた噴水へと案内してくれた。

円形に作られた噴水。

中央には竜を模(かたど)った石造がおかれ、その竜の口から水が流れている。

その姿に、あたしは思わず眉宇を潜めた。

「アジス君」

「ん？」

「……この竜、起きてるみたい」
寝ていないと駄目だと言われている竜だというのに、その口から水が出ているのだからおかしなものだ。目もばっちりと開いている。
それでもあたしは思わず声を潜めた。
そして言ってから自分の失敗に気づいてしまった。アジス君といえど言ってはいけなかっただろうか？
だが、こちらの心配をよそにアジス君はその噴水の縁に腰をおろし、
「いいんだよ、ここの竜は起きてても」
「――まったく理解できないよアジス君」
「だって」
アジス君が言葉を続けようとした時、クスリと笑みが聞こえた。
「ここには竜守りがいるからですよ」
柔らかく低い声音。
あたしは内心で「でたっ」と思いつつ視線を向け、固まった。
「コーディロイ。うわっ――えっと、あの」
いつも元気なアジス君がしどろもどろに言葉を跳ね上げる。
赤くなって慌てて、それから思い出したように頭を下げた。
「えっと、あの――こんにちは」
「こんにちは」
静かな笑みを湛えている男は、神官服を着ていた。
「あの、さっき空に虹が出ていたのはコーディロイですよね？」
アジス君が勢い込んで言う。
まるで憧れの人が目の前にいるように、彼の口調はいつものそれでは無い。物凄い動揺しながらも、相手に精一杯の敬意を払う。
面前の男は薄く笑う。
「ええ。見ていただけて良かった。

――貴女も、見れましたか？」
ふっとその視線があたしへと向けられた。

突然話しが振られ、あたしは慌てる。
だって――その、えっと……これは、ナニ？
魔術師ではないのか？
あたしは軽いパニックに陥っていた。
面前に立つ男の顔は、確かに良く知るあの変態に見える。
だが、その服装は白くてだらりと長い神官服だ。腰をサッシュやベルトでとめたりしない、まるきり女性が着ていそうなワンピースのようなつくり。純白の絹地でよくみれば銀糸の細かい縫い取りまでつけられ、そして髪が腰近くまで流れている。

これは違う。
別人だ。
そこでやっと息をついた。
――あたしの知る変態の髪はこんなに長くない。
首の辺りまでしかないし、普段の服装はもちろん胡散臭い魔術師スタイル。シルクハットにステッキ。
その笑いはもっとあけすけだし、口から垂れ流される言葉には品位が足りない。
同じ顔でも人間って持っている内面でこれだけ違うのだ。
――そうか。ヤツは双子か？　それとも良く似た親戚筋。
神官長、きっとアレと血が繋がっているのだ。なんて不憫な。

「見れませんでしたか？」
柔らかな眼差しで再度問われ、あたしはやっと落ち着いて応えることができた。
「いえ、見ました。
あの――虹を見せたりできるものなんですか？」

純粋な疑問だ。
あたしの知る神官という人は、神様を奉じてはいても不思議な力をもっていたりしなかった。ただ優しく神様に仕えているだけ、そういうものだと思っていた。
それともその知識が間違っているのだろうか？

すると、神官長はクスリと笑う。
「それくらいは簡単です。
大気中の水分と太陽の光とを利用するだけですから」
「凄いですね！」
「私は魔法使いですから」

……思考停止。

「えっと」
ニコニコとして見つめられてますよ？
「あの、すると」
あたしは引きつりながら、
「普段は黒い服着て、シルクハットにステッキとか持ってたり？」
「ふふふ」
「は、ははは？」

奇妙な笑いが二人の間で漏れる。
「リドリー？　何へんなこと言ってるんだよ」
アジス君が呆れたように言う。

あたしは乾いた笑いを漏らしながら、
神様なんてきっといないに違いないと思っていた。

――こんな神職、イヤだ。

何かが激しく間違っている。
「コーディロイと話しができるなんて、オレ、感激です」
「そうですか？　そんなに恐縮されるような者ではありませんよ」
アジス君が舞い上がっている。
物凄く。
そのテンションの高さがまたあたしの涙――というか脱力を誘う。
騙されてるぞ！
そいつは変態だ。

神官長と魔術師（後書き）

リドリーのテンション下がって上がって突き落とされました。

天まで舞い上がっているアジス君は、きっと本当に感激しているのだろう。
いろいろわたわたとしていたが、突然思い出したように立ち上がり、
「あのっ、ぼくのばあちゃんパン屋なんです！」
と声のトーンをあげた。
「存じ上げていますよ。マイラさんですね。
私もあの方の焼くパンは好きです」
　このあいだ悶絶していたクセに。
「うわっ、あのっ」
アジス君は頭に乗っていた帽子を手の中でぐしぐしと歪めて、思い切るように口を開いた。
「いま持ってきますから！
待っててくださいっ」

――そして彼は星になった。
まるでうさぎのような素早さで、あたしのことなどちらとも考えずにアジス君は走っていってしまわれました。
あたしを残して。
「ふふふ」
気づけば背後霊の如く嫌な感じの生き物がいる。
あたしはうんざりとしながら、一歩距離をおいて魔術師を睨みつけた。

何度見ても、それは神官服だ。
黒く長く伸ばされた髪には、耳の横で小さな銀の輪で一筋ずつ胸の前に垂らされている。宝飾品はそれだけだというのに、腹立たしいほどに神々しい。

「なんなのその格好」
「仕事中。ああ、ぼくの仕事に興味もってくれた？　まさかリトル・リィが職場訪問してくれるなんて。えっと、収入も知りたい？　大丈夫だよ、君とあと十人くらい子供を養っても全然余裕があるから」
「何の話しですか？」
知っていますか、全然というのは否定ですよ。
「神職？」
「――ああ、それは大丈夫だよ。ぼくはちょっと特殊だから、結婚もできるし当然子作りもできます。そこは安心してね？」
そこは安心するところじゃありません。
あたしは自分の手が自然とぷるぷると震えるのを感じてしまう。
「ぼくは神様を奉じる、というよりも竜峰の竜を封じる者だから」
「……」
「ふふふ、嬉しいなぁ。リトル・リィがそんなにぼくに興味をもってくれるなんて。顔が緩んじゃう。へへ、あ、ぼくの家に行く？　領主館の裏にあるんだ」

その言葉にあたしはじっと相手の瞳を見てしまった。
「家って、アパートじゃないの？」
「違うよ？」
「だって、あなたいつも下の部屋から」
「扉がね、つながってます」

は？

「リトル・リィの部屋の下の部屋の扉とね、ぼくの寝室の扉が繋げてあるんだよ。
本当はリトル・リィの部屋の扉と繋げちゃおうかと思ったんだけど、

さすがにそれはねぇ？　寝てる君に手を出さない自信が無いものだから、ちょっとだけ距離を置いてみました。
ぼくってば紳士だと思わない？」

――言葉が通じませんよ？
言っている意味が全然判りません。
扉が繋がる？
は？

「魔術師？」
「だから、ぼくは魔法使いだってば」
「――」

えっと、魔法使いって何だっけ？
あたしはどうにものろのろとしか考えられない自分の思考能力に絶望した。

そんななかでただ一つ理解したことがある。
この男との関係は無関係であり、さらに言えばご近所さんでも無かったのである。

天気は良かった。
風が柔らかく心地よい。
庭木の花も低木もきちんと管理されている庭はとても美しい。
そして何故か神官服の紫闇の瞳と黒い髪の男。
もの柔らかい微笑みを浮かべ、あたしを見ている。
あたしはぽんっと手をうった。

「詐欺師だ」
魔術師は一瞬表情を消し、しばらく無言であたしを見つめて小首

をかしげた。
「なにそれ」
――おまえだ。

「あのね。いまがいったいどういう時代だか理解してる？　町の人が穏やかで優しいからって、そこに胡坐をかいて生きるのはいけないのよ？　世の中はね、列車が走っているし、中央に行けばガス灯がばんばん街を彩っているの。写真で人の姿が絵よりもはっきりと映し出されるし、拳銃だってあるの」
　あたしはここは自分がしっかりしなければという意欲にもえた。
「それが何？　ここの古くからある御伽噺を利用して竜守り？　神官長？　ちょっとそこに座りなさい。しかも魔法使いだなんて、あなた詐欺にも――」
　魔術師は一度天を仰ぎ見て、がばりとしゃがみこむ。

「昔の君は可愛かったのに」
「……ナニソレ」
「ぼくにキスして、ずっと一緒にいてあげるって言ってたのに」
は？
「会いに行くから、ちゃんと待っていてねって言ってたのに」

神官長、うずくまった状態でぶちぶちと芝生を抜き始める。
その口からは意味不明な恨み言が垂れ流しだ。
「オトナになったら結婚してくれるって言ったのにぃ」
「……」

突然がばりと立ち上がる。
「あ、もちろん今のリトル・リィも可愛いよ。
でも、昔はうさぎさんみたいに頭の左右で髪が揺れてて愛らしかっ

たし、自分のことリィねぇって舌ったらずに言うのも本当に可愛かったけど、さすがにあの時は押し倒そうっていう気は起きなかったよ。キスだけで我慢したしね！
今のリトル・リィは当然押し倒したいですよ。三日三晩それはもうねちっこくベッドに縛り付けて全身――」

力説する男を前に、あたしは更に驚愕し、激しく動揺してその鳩尾（みぞおち）に拳を叩きつけていた。
「なんでそんなこと知ってるのよ！」
っていうか、もう黙れ変態！

やばい――まさか本当にあたしはこいつと知り合いだったのか？
なんでツインテールにしてたって知ってるのよ！
どうして自分を【リィ】って呼んでいたのを知ってるの！
ぎゃあぁぁ、気持ち悪いっ。

行くうさぎと跳ねるうさぎ（後書き）

やっぱり一発いれないとリドリーじゃない気がしてきた。

アマリージェの見解

「花占いは花のチョイスで決まるよねぇ」
溜息交じりにぶちぶちと可憐な花を引きちぎる男の姿に、アマリージェ・スオンは醒めた眼差しを向けた。
「なんでもいいけれど、誰が掃除をすると思うのです？」
「マリーじゃないのは確かだねぇ」
切なげな溜息を吐き出し、更にぶちりと花の花弁を引きちぎる。

――うざい。

もうどうしようもなく、うざい。邪魔臭い。
町は間近に迫った収穫祭の為にいつになく賑わっている。人々は準備で追われていて、この館だってなんだか慌しいというのに、コーディロイ――黒髪に黒瞳の長い足を組んでいる青年ときたら、まるで粗大ゴミだ。
というか、粗大ゴミだったら捨てればいいのだから始末がいい。コレときたら捨てることもできないし、たとえ捨てることができたとしても戻って来るだろう。イヤ、失礼、コレは戻ってきてもらわねばならないのだ。
忌々しい。

「兄さまは忙しいのに、あなたってばどうしていつもそうなのです！」
「おや、マリー」
ふるふると握った拳を震わせて怒鳴りつけると、コーディロイはぴくりと肩眉を上げた。
「ぼくが忙しいほうがいい？」
ニヤリと口元を歪めるその底意地の悪さ。

「……」
「そうだよ、マリー」
ふいに声がかかり、アマリージェは慌てて居住まいを正した。
開け放たれている扉から姿を現したのは、おそらく一番忙しいであろう兄だった。
自らの兄ながら、その容貌は優しく緩い癖を持つ金髪は美しい。
自慢の兄だ。

「コーディロイはいつだって暇をもてあましているほうが丁度いい。
彼が忙しいなんてそれこそ天変地異の前触れだよ」
笑いながら言う兄の手には幾つもの書類。
そう、ここは兄の執務室だから、おそらく書類にサインをする為に戻ったのだろう。
兄のあとを秘書がつき従う。
「また、えらく花だらけですね」
苦笑しつつ、兄は足元の花を踏まないように避けた。

「ふふふふ、何度占っても結果は同じさ」
コーディロイは口元をゆがめた。
「ぼくとリトル・リィの愛は不滅だもの」
アマリージュは深く溜息を吐き出した。
――この変態で変人で狂人で、更に言えば人外は一昨年前にやっと逢えた「運命の人」
とやらに夢中だ。

いや。正確に言えば彼がこの病気を患っているのはもう遙か昔からだ。アマリージュが四歳程の頃からのことだから、その脳みそはすっかりと病んでいるに違いない。
腐っている。
――黙ってさえいればとても素敵な男性だというのに。

そう思ってアマリージェは唇をへの字に曲げた。

子供の頃、コーディロイは良く中庭の噴水にいた。
アマリージェは彼を見つけると、ぱたぱたと足早に近づいて慣れない所作でドレスの裾をつまみ、優雅というよりも元気に挨拶をしたものだ。
「おはようございます、コーディロイ」
「おはよう、マリー」
「コーディロイは噴水が御好きですね！」
「――この泉は竜峰の霊水だからね」

淡々と言いながら、コーディロイはその水に自分の手を浸し、消えそうな微笑を浮かべた。
ゆったりとした神官衣を着て、腰まである黒髪に濡れたような紫闇の瞳。物語の女神様のように美しい人が、アマリージェは大好きだった。
ふと、アマリージェは噴水を覗き込む。
透明度の高い水は、ゆらゆらと揺れていた。
「何か見えますの？」
「ぼくの運命」
その言葉が淡々としている。
小首をかしげ、けれどアマリージェは運命という言葉に反応した。
――運命の王子様。
自らの小指と小指の間を見えない赤い糸が繋がりあう、運命の相手。
丁度、昨夜寝物語に聞いた話が浮かんだのだ。

だからアマリージェは上気した頬で言った。
「マリーの赤い糸はコーディロイに繋がっている？」
その言葉に、珍しくコーディロイは顔をあげて乾いた微笑を浮かべた。

「繋がってないよ」

あっさりと切って捨てられた。

「マリー、君にだけ特別に見せてあげる」

ふふふ、とコーディロイは囁き、とんっと噴水の表面を爪先で弾いた。

ふわっと波紋が広がり、まるでそれは鏡面のように変化した。

浮かんだのは部屋だ。

まるで人がそこに入るように、ゆっくりと場面は動いていく。廊下をすすみ、階段をおりて、小さな扉――勝手口だろうか？　裏手だと思われる外。やがて一つの大きな木のところに、一人の少女がもたれるようにして眠っている。

アマリージェよりもわずかに年上の少女。

「だれ？」

「ぼくの運命」

それはとても不快な言葉だ。

普段はあまり感情をみせないコーディロイが、とても静かに、けれどとても愛しそうに言う。

水面にうつる少女の頬を、その指先が触れる。

「ぼくの大切な人」

その言葉に胸の奥がちりちりと傷む。

自らの中でもやもやしたものが蓄積し、とても不快な気持ちになって――アマリージェははじめて自分の中にそんな感情があることを知った。

「町の子じゃないわ」

「そう、ここからずぅっと遠い場所にいるんだ。水鏡で見ることしかぼくにはできない」

その言葉に少しだけほっと息をつく。
「でも約束してくれたんだ。
きっと、大人になったらぼくの許に来てくれるって」
「そんな子供の約束、忘れてしまうわよ」
言葉にして、アマリージェは後悔した。
――こんな酷いことを言うつもりなんて無いのに。これではイジワルなアンリみたいだ。

「もう忘れているよ」
静かに、コーディロイは囁いた。
「ぼくが記憶を奪ったもの」
「――なぜ？」
「過去の人になんてなりたくないじゃないか。幼い彼女に昔スキだった人だと思われて記憶の彼方に押し込められるなんて到底堪えられない。だから、彼女の中にもうぼくはいない」

まったく意味が判らない。
アマリージェは顔をしかめた。
まるきり言葉が通じない人のよう。
「でも大丈夫。
あの子の深い場所に、少しずつ、少しずつ、澱のようにぼくの魔法が作用して――やがてあの子はぼくの面前に立つことになるんだ」
くすりと、青年が笑った。
「大丈夫、ぼくは魔法使いだからね。
うまくやれる――そうだろう、マリー？」
うっとりと夢見るように笑うその人を、アマリージェははじめて怖いと感じた。
自然と一歩、足が退く。
そんなアマリージェの怯えなど気づかぬように、黒髪の青年は柔らかな眼差しを水鏡に落とし、そっと囁いた。

「きみがほくの、いちばんのひと」

「まあ、自業自得ですわよ」
アマリージェは呆れた調子で言い切った。
昔のコーディロイはここに居ない。
高潔で、物静かで、ただその場にいるだけで神々しさを思わせた尊き人は、いない。
今、アマリージェの前にいるのはただの愚か者だ。
運命の相手を面前にしたこのぼけなす様は、どうやらやり方を間違えたらしい。

「コーディロイ」
幾つかの書類を見ていた兄が、嘆息する。
「ナフサート嬢から貴方への苦情が警備隊に出ていますよ」
「……」
「警備隊でもどう対処していいか判らないとこちらにあがってきてるんです」
それは当然だ。
この町でこの男に説教できる者など誰一人としていない。
たとえ、領主である兄であっても。
「ふふふ、リトル・リィは照れ屋さんでかわいいなぁ」
――どこの誰が照れて警備隊に苦情を訴えるのか。
兄ですら困惑した顔をしている。

あたしは断言する。
あの尊き人（コーディロイ）をここまで下らない生き物に引き下げたリドリー・ナフサートというオンナは至上最悪の悪女に違いない。

戸惑いと惑わし

悶絶している男を前に、あたしはよろりと一歩退いた。
やばい！　咄嗟にやってしまったけれど、あたし、あたし、酷くない？
あたしってめちゃくちゃ酷い人間ではありませんか！？
自分以外は御祭り騒ぎだけれど、あたしの中身は完全にパニックだった。
気持ち悪いなどと言ってる場合ではないのでは？
――リィねぇ。
はい、その通り。
あたしの子供の頃の一人称は、リィです。
自分でそう呼んでいたし、母親がいた頃はあたしの髪はたいてい頭の上で左右に結わえられ、ついでに赤いリボンを垂らしていた。
つまり、つまり、あの男が言うリトル・リィは――子供の頃のあたし、だ！
「あたし……あんたと会ったこと、ある、の？」
声が震えていた。
しゃがんで悶絶していた男がついっと顔をあげ、困ったように苦笑する。
あたしの攻撃などこの男は実はものともしないで、けろりと立ち上がって微笑する。
「あるよ」
「――いつ？」

「君が八つの頃。場所は聖都――ヴァシュラスの庭園で」
その庭園の名前は判らない。けれど、八つの頃、聖都――その単語は、覚えている。

母親と二人だけで行った場所。
母親はもうすでに父親と共に居ることが堪えられなくて、あたしをつれて伯父の家にいっていた。
――……あなたさえいなければ、別れられるのに。
彼女の言葉は、きっと悪意は無かった。
それは彼女にとって全部事実で。彼女にしてみれば、苦笑と共にこぼれおちるただの単語でしかない。
母はあたしを愛してくれていた。
ティナのことは……――正直判らない。母はいつだってあたしの手ばかりを引いていたから。それはきっと、ティナの体が弱かったからだろうとは思うけれど。

「あの、頃……？」
「この話はおしまい」
尋ねるあたしに、ぱっと魔術師は両手を広げた。
「ぼくとしては自力で思い出して欲しいもの。ぼくが余計な手出しして、もっと余計なことまで思い出されると厄介だしね」
肩をすくめる魔術師にあたしは眉宇を潜める。

「ぼくはね、ずっと、あの頃からずっと、リトル・リィ――君がぼくの前に立って、ぼくの名前を呼んで、あの時のように好きだといってくれるのを待っていたんだ」
柔らかく微笑み、こちらの動揺を包み込むようにその手があたしの腰を抱き寄せる。
あたしは引きつりながらその胸に手をあて、必要以上に引っ付かないようにと力を込めた。

「あの、ですね」
「うん」
「――許容量がですね」
一杯一杯です。

「君がこの町に来てくれたときね、やっぱりちゃんと覚えていてくれたんだって思ってぼくは有頂天になってしまったんだけど、君はしっかりと忘れているみたいだし……思い出して欲しくて少し無茶をしてしまったけど、許してくれるよね？」
　いつものエセ魔術師姿で言われていれば、あたしはきっと拒絶しただろう。
だがその時ときたら、ヤツは神官服の上いつもとはまったく違う――慈愛のこもったような優しさばかりをこちらに向けてくるものだから、あたしのちょっと混乱している頭は、容易（たやす）いほうに流れた。
――つまり、水を上から流すように。
「そりゃ……えっと、あたしも、悪かったわ」
だからあまり引っ付かないで下さい。

それにこのむくむくと溢れる罪悪感はなんだ？
あたしはちらちらと周りをうかがってしまう。人がいない。誰もいない。
ここは開放されているのではないのか。
誰か助けて。
――罪悪感が底辺にあって、この腕を振り解けない。

人に忘れられることは辛いことだ。
もし自分だったら相当堪える。それを考えると目の前の男が振りほどけない。
もしあたしが大好きな人に忘れられてしまったら？
ソレは辛い、とても――いやだ。思い出して欲しいと願うより、そ

の現実を無視してその相手に背を向けるかもしれない。
この男は、そうしなかった。
思い出して欲しいとアピールして、それがちょっと斜めだっただけ？
アレ？
それでいいのかな。あれ？

「忘れられてしまったことは悲しいけれど」
うっ。
「責めたりしないよ」
そっと耳元で囁く。
「だって君は幼かったし、しかたないよね？」
八つ……幼いといえば幼いけれど、こんなに印象深い相手を忘れるものか？
綺麗さっぱり。
あたし……
「きっと心のどこかでぼくが住むこの街を覚えていてくれたんだね。そうおもうとぼくはとっても幸せな気持ちになれるよ」
――覚えていたのだろうか、この町の名を？
ただ遠い場所に逃れたくて来ただけだと思ったこの町を？

あたしは段々と不安と焦りを覚える。

私は鬼ですか？
もしかして鬼畜ですか？
自分は勝手に忘れたくせに、今までさんざ変態と罵ってきた自分は間違いですか？

――その時のあたしは完全に壊れていたと思う。
冷静な判断能力が完全に欠落している。
魔術師が低い声で優しく言葉をつむぐたび、何故かずぐりずぐりと

鈍器でつつかれているような気持ちになっていた。
鈍器で殴るではない。
――じくじくと傷む傷口をぐりぐりとあくまでも鈍く突かれるような物凄く、いやな感じ。

耳元に吐息が触れて、唇が触れて、
「この一年、時々辛かったけれど」
……
「君はきっとぼくのことを見てくれるって……思い出してくれるって、意固地になってしまったぼくを」
……
「優しい君は、きっと許してくれる、よね？」

ごめんなさい。
私が悪かったです。
本当にごめんなさい。

あたしは泣き笑いの顔でこくりとうなずく。
なんだろう、この辛い感覚。
責められている訳ではない筈なのに。
むしろ謝っているのは相手だというのに、ただひたすら謝ってしまいたい。

「嬉しいよ、リトル・リィ」
魔術師がぎゅっと一層強くあたしを抱きしめる。
あたしは身を縮めながら、泣きそうな顔になっていたと思う。
激しい罪悪感。魔術師に対して自分はなんて酷いことをしてきたか、思い出すだけで自分がイタイ。
なんて酷いんだあたしってヤツは。

「ああ、そうだ」
ふいに体が離れてほっとする。
魔術師は自らの首筋に手を回し、すっと神官服の下に下げていた首飾りを引きだし、あたしの面前にぶらさげた。
「これ、返すよ。
約束だったからね――君がくれたんだよ。結婚の約束にぼくに預けてくれたんだ」

ネックレスに通されていたのは、ころりと小さなボタンだ。
くるみボタン。
子供達は良く約束の印として交換しあった。
他愛ない、約束の、印。
「――」
「君がぼくの花嫁になる時に返してあげるっていう約束、変わった風習だよね？」
それはまるで決定打のようにあたしに振り下ろされた。

「いやだな、リトル・リィ――そんな顔しないで？
責めているわけじゃないんだから」

いっそ責めて罵(ののし)って欲しい。
あたしって――めちゃくちゃ酷い人ですか？
「ずっとずっと、きみのことが好きだよ」
魔術師の笑みが、こわいなんて思うあたしは――鬼畜なのでしょうか。

戸惑いと惑わし（後書き）

あれ？

動揺と冷静の狭間

「リドリー」
少年の甲高い声が響くと同時、あたしはほっと大きく息をついた。
まるで時と思考回路が停止していたような違和感がゆっくりと解かれる。
そう、それまでまるで閉鎖的な空間に放り出されていたような心もとない気持ちが払拭される。
体全体のこわばりが、ゆるりと溶かれて――やけに緊張していたのだとあらためて感じた。

あたしは多少たじろぎながら問題の男から一歩距離をとり、戻ってきたアジス君に心から感謝する。
――なんか凄くいたたまれなかったよ、アジス君。
まるで自分が悪鬼夜盗の類かっていうくらい、すごーく！
「コーディロイ！　これ、焼きたてのパンです」
「おいしそうですね。頃合も良いですし、いただいて宜しいですか？」
「勿論っ」
物凄い、アジス君が普通の子供のよう。
若干十一歳。むしろその精神年齢がもっと幼いくらいにも感じる。
彼の心は今何よりも純真無垢だ。
なんだか大人ぶった彼はいない。
頬が蒸気して赤くなっているのがある意味微笑ましい――えっと、何故右側から微笑み光線がくるのでしょうか。
――いや、うん……判ってますよ。
無下にはできない。なんというか和解？　したみたいだし？
自分でもなんだか不可思議なのだが、謝っちゃったし謝られてしま

ったし、なんだか私が悪いみたいだし？
　引きつった笑みが張り付いてしまいます。

「こっちのパンはオレが作ったんです」
嬉しそうにバスケットを開いてパンを説明するアジス君。
「リィー」
ふいに呼ばれた。
「リドリー」

名を、呼ばれた。
あたしは瞳を瞬いてしまう。普段であればリトル・リィと呼ぶ男が、あたしを呼んだ。
うっ、なにこの恥ずかしい感じ。
……誰か助けて。
きっと今のあたしは絶対脳内に大事件がおきてます。
「あなたが焼いたパンは無いのですか？」
やんわりと問われ、ちらりとアジス君を見る。
そもそも彼がチョイスしたのだから、あたしは彼が持ち込んだバスケットの中身を知らない。
「こっちのがリドリーが焼いたやつだよ」
「では、こちらのパンとこちらのパンをいただきますね」
まるでこれで平等だといわんばかりの様子で、アジス君が作ったパンとあたしが作ったパンとをつついて見せる。さすが神官と褒めたほうが良いか。ここだけみれば彼は素晴らしく気配りの人のように見える。

あたしは自分の胸元に手をあてて息をつきながら、その二人の様子を眺めていた。
――そのパンにはあたしの気持ちがたっぷり入ってますよ。
ええ、貴方に対してのあれやこれや。

そんなことを思い出せば、あたしはやっと酸素を得た魚のように大きく息を吸い込み、落ち着いた。

よし、大丈夫だ。

うん――うん、何が大丈夫だかもあやしかったりするけれど、うん、大丈夫。

流されてはいけません！

謝って謝られて、よし！　立場は同等、イーブン。

よし、オーケイ。

がんばれあたし。後ろを見てはいけません。前を見るのです。

もうひたすら自分を鼓舞するあたしだった。

「ああ、人が増えて来ましたね」

そんな私とは裏腹に、ほのぼのと会話を交わす二人だったが、ふいに魔術師は辺りを見回した。

言われてみれば庭に一般観光客らしき人たちが増え始める。

これはチャンスと切り替え、あたしは笑みを浮かべて元気に言った。

「じゃ、アジス君。あたし達――」

もう行こうか。

という言葉を、やんわりと魔術師が遮る。

「私の館に行きますか？　飲み物を用意して差し上げましょうね――ゆっくり座ってパンをいただきましょう？」

アジス君にそんなこと言ったら貴方、

「はい！」

――それ以外の回答などでないではありませんか。

「え、あの……アジス君。パレードは？　終わっちゃうんじゃない？　祭りは？」

あたしはアジス君の袖を引いた。

今日は収穫のお祭り。

子供はお祭りが好きなものと相場は決まっている。甘いお菓子にスパイシーな焼き物。大道芸人に着飾った踊り子。

あたしの訴えに、アジス君が「この後は女神の祝福くらいだよ。女神よりコーディロイのほうが絶対にご利益あるって」

どんなご利益ですかー！

「なんたってコーディロイは竜守りなんだぞ、リドリー。それがどんだけ凄いことか、きっとリドリーは知らないんだな」

まるで残念な人を見るように言われてしまい、あたしは落胆した。

――竜守りとやらが何たるかは確かに知らないが、その男がちょっとアレな感じであることは承知している。

先ほどはなんだか雰囲気にのまれて物凄い罪悪感に呑まれてしまったが。

思い出せ、リドリー。

笑って流せないコトだってある。

百歩譲って知り合いからはじめるのはいいだろう。千歩譲って古い知己であることも認めよう。謝って謝られたのだから、シェイクハンドを交わす用意があたしにはある。

だが――決してヤツとあたしは恋人でも婚約者でもありません。

よし、よく言った！

そうよリドリー。そこまで流されるのはいけない。

冷静さをよく取り戻したわ。おめでとう。

あたしは自らの脳内会議で満場一致で拍手を受けた。

清々しいほどだ。

「リドリー、私のお茶は飲めませんか？」

まるで傷ついたように切ない瞳を向けられ、

そしてその右隣では――あたしがさも酷い人間であるかのように責める眼差しで見ている若干十一歳。

「……いただきます」

脳内会議のメンバーが諦めたように溜息をつき、とんとんっとテーブルに書類をまとめあげ、会議の終了が告げられた。

闇色の瞳と翡翠の瞳

――北の霊峰、竜峰には竜が眠る。
石で形とられた竜のレリーフが飾られたサロンの基本色は白。
神官職という言葉に偽りはないのか、そこはやけに――こざっぱりとしていた。
魔術師に半強制的に――確かに承諾はしたが、納得はしていない――連れてこられた屋敷は、領主館の裏手に作られた白く清潔感のある邸宅。
というか、生活感があまり見えず。
「神職って、神殿は？」
と、ぽつりと呟いたあたしの言葉に応えたのは、アジス君。
「必要ないだろ？」
「……ないの？」
「だって、祭壇は北の霊峰にあるし。コーディロイは竜守りなんだから」
――全てその言葉で片付けるのは辞めて下さい。
あたしはまったくの余所者です。
あたしは出された茶に毒でも入っているのではという危惧すら抱きながら、おそるおそる口をつけた。
白磁のカップにほんの少しのお砂糖を加えた林檎のお茶。あたしの好みまで熟知されているようでちょっと怖い。
「ただの名誉職だからですよ」
クスリと魔術師が言う。
「名ばかりと言ってもいい――尊き人と呼ばれるのも、神官長といわれるのも。
ただの暗号や記号とかわらない。
そう、私はね、リトル・リィ」
魔術師はふと儚く微笑む。

達観しているような、何かを諦めているような。
「竜と一緒なんです」
竜と、一緒。
その言葉を舌の上で同じように転がす。
それはなんでしょう、自分神様目線ですか？　それってどうなのよ。というあたしの内心を見透かしでもしたのか、魔術師はふいにふっと鼻で笑った。
「――失礼」
苦笑しながら、
「先日言ったでしょう？　ここの人たちは竜が目覚めるのを恐れている、と」
「……」
「その理由も。
――私も同じなんですよ」
――崇り神。
悪さをして欲しくないから、神様として敬う。敬っているのだから悪さをしないで欲しい。
それと同じなのだという意味であると、気づいた。

「そりゃ、竜は寝てないと駄目だって、皆知ってるよ」
アジス君が怪訝に眉を潜める。
「竜は眠りながら町の平和を見守ってくれてるんだ。俺は違う町だけれど、ばーちゃんがそう教えてくれたよ」
「そうですね」
「起きたら神様がいなくなってしまうから、コーディロイが竜を守ってるんだろ？」
少しだけ言葉使いがいつものように戻っている。
この男の存在に慣れてきたのだろう。
「守っているのではなく、見守っているんですよ」
「同じだろ？」

「――どうでしょう」
クスリと笑い、魔術師はちらりとあたしへと視線を向けた。
深い闇色の眼差し。深い寂しさすらはらむような。
アジス君の言葉と魔術師の会話は少しだけずれている。
アジス君は気づいていないだろうけれど。

――崇り神。
とくりと胸が痛むような気がした。
笑みを浮かべてアジス君と話している魔術師は――神官長に見える。
今まで見てきた魔術師と今この場にいる人は中身がそっくり違うと言われたほうが納得できるほどに違う。
あたしはなんとなく居心地が悪くて、昨日作ったパンを両手でもって無意識に千切っては口に放り込む。

どれが真実でどれが……
それともどれも真実なのだろうか。
幼い頃にあたしは本当にこの人を好きだったのだろうか？
――何故、この男はあたしを好きだというのだろう。

あたしは壁に掛かるレリーフを見上げた。
眠る竜――崇り神の竜。
竜守りって、なんなのだろう？

あたしが思考の海を漂っているうち、突然廊下から足音が近づき、息を詰めた頃にはその部屋の扉が外から開け放たれ、
「コーディロイ！
せめて領主館にいて下さいと言っておいたじゃありませんか！」
少女の甲高い声が部屋に響いた。
あたしとアジス君がびっくりと固まる。
その中で魔術師が苦笑を落とした。

「マリー、お客様が見えてますよ」
「そのようですね」
純白の衣装に、花を一杯あしらった髪飾り。美しい翡翠の瞳とそして金色の豊かな髪。
それは遠めで一度見た、本日の主役であるはずの少女だということはすぐに知れた。アジス君があっけにとられて「アマリージェさま」と呟いたからだ。

――ああ、女神様。
少女はドレスの裾をつかみ上げ、部屋の中に入ると眉間に皺を刻み込みアジス君と、そしてあたしとを視界に入れた。
「……この館で使用人以外の人間を見るのは初めてですわ」
「マリー、礼儀はどこに落としてきたの？」
「はじめまして、私アマリージェ・スオンと申します。このアビセイム付近の領地を束ねるジェルド・スオンの妹でございます」
丁寧に一礼し、それからすぐに魔術師を睨みつける。
「たまに頼んだ仕事くらいしてください！」
「マリー、花なら一杯だしてあげたじゃないか」
「足りませんわよ！　今日見えているお客さんたちは、女神からの花を楽しみにしていらしているのよ。一年間の祝福を得る為に来ているの。だというのに、自動花栽培機のあなたがいなければやがて花は尽きてしまうのよ」
「……別に自動ではありませんよ？　花は無限ではありません。無いなら諦めて」
呆れたように吐息をつき、魔術師は諌めるが相手は眉間の皺をきつくした。
「今日は言うことをきいてくれる約束でした」
「困った子ですね」
ぐいっと魔術師の手が引かれる。

それと同時、少女はちらりとあたしを見た。
けれどそれだけ、何を言うでなく魔術師の腕を引く。
「コーディロイ」
せっつくように言う少女。
「リトル・リィ、それにアジス君」
嘆息して魔術師は立ち上がり、微笑んだ。
「申し訳ありません、私は行かなければいけないようです」
「オレ達帰ります」
ぱっとアジス君が立ち上がって頭をさげる。

アマリージェ・スオン――愛らしい人形なような少女の翡翠の瞳が、つめたく自分を見ている気がした。

いかないで。
ふいに浮かんでしまった心に、あたしはぎょっとする。
だってはじめて見たのだ。
あの男の腕を掴んでいる人間なんて。
――そこは自分の場所……なんて思っちゃ駄目だって！

あたしはうずくまって叫びたいほどの感情を必死で叩き落とした。
流されてはいけません！！
自分を強く持つのよ、リドリー！

苛立ちと開かない扉

結局その後、極度の疲れからあたしは自宅へと戻ることにした。
町の中は収穫の祭りで賑わっていて、人が一杯だし、楽しそうな雰囲気も漂っている。
「女神の祝福はこれからじゃないかな」
というアジス君の言葉に、あたしは「疲れたみたい、ごめんね」と帰宅を選択したのだ。

女神の祝福、というのは今日の女神様役の子がお客さん一人一人に花を手渡してくれるというイベント。昔は女神役の子が額にキスをしてくれたらしいのだが、今は来場者も多いということでこの風習はなくなったのだと、先ほどアジス君が話してくれた。
「それにしたって、アマリージェ様は綺麗だったなぁ」
と、アジス君が言う言葉につきりと胸が痛んだ。
――女神様の扮装だけが理由ではないだろう。確かに、アマリージェ・スオンはとびきり綺麗な顔立ちの美少女だった。今までティナより可愛い子などいないと思っていたけれど、上には上がいるのだ。将来はきっと物凄い美女として求婚者が一杯いるに違いない。

――すごい、魔術師とお似合い。

なんて考えてからあたしは自分の頭を壁にぶつけてしまいたくなった。
やばいやばいですよ、あたし。
なんであの男のことを意識してるの？
落ち着くべきですよ、ここは？
だって……

だって、本当に好きだと言われたのははじめてなんだもの！
今までの魔術師の言動は全て冗談とか嫌がらせとかの類だと思っていたんだもん！
あたしは小さく呟いて頭を抱え込みたくなった。

――愛している、好きだ。
マーヴェルの言葉はきっと全部嘘だった。だって彼はティナばかりを気にしていたもの。
知らぬふりしていたって、あたしはちゃんと知ってる。気づいてた。
だから、その言葉をきくたびにあたしは木に縋って泣いたのだ。
昔聞いた「きみがぼくのいちばんのひと」ただその言葉だけにすがりついて！

あたしは人ごみを抜け、いつものアパートの建物内に入ってやっと大きく息をついた。もうたった一人きりでクッション抱いて眠りたい。
その思いのままに螺旋階段をのぼっていくあたしだが、上からおりてきた相手にギョっと目を見開いた。
「リドリー」
鳶色の瞳が驚いたようにあたしを見る。
あたしは「うっ」と小さく呻いた。
――これは、あれですよね？
「どうしたの、トビー？　こんなところで」
「いや、うん……リドリーがいないかなって、思って」
だよね。キミがこのアパートに用があるのはきっとあたしだけでござますよね？　あたしは自然と笑顔が引きつるのを感じた。

ややこしい時にややこしい相手とあってしまいました。
神様ってきっとイジワルに違いない。それともあたしの不信心がばれてるのでしょうか。

日曜日の礼拝なんてものに出席したのはいったいいつのことか。
……今度ちゃんと行きます。
あれ、ここって教会あるのかしら。
「何か用？」
あたしはそ知らぬ顔で尋ねる。
「もし暇なら付き合ってもらえないかと思って。あの、収穫祭」
「今見てきたよ？　パレード見た？　虹が出てて綺麗だったわ」
あたしはどうにかして話を逸らせないものかと思案にくれる。
「オレも見たよ。でも、リドリーと見れたらもっと良かった」
「……えっと、あのね、暇はあるのだけれど、あたし、疲れてしまって」
あたしは視線をさ迷わせて、
「今から家で休もうかと思って」
「ぼくも一緒していい？」
――このように押された場合、どうしたら良いのでしょう？
あたしの人生経験でこういった場面はあまりないのです。相手が魔術師であれば、あたしは鉄拳制裁に出たことでしょう。
少なくとも今までであれば。
　あたしは眉間に皺を寄せた。
この顔を見て気づいてくれればいいのに、と思うのだけれど――生憎とトビーは少しもこちらの感情に頓着してくれない。
わざとかしら？
そう思うあたしの心は随分と汚れてしまっている。
あたしはトビーの丁度後ろにある扉を意識した。
あたしの部屋の、一つしたの部屋。
――出てこないかな？
って、もぅ本当に何考えているのかしらあたし。
自分の頬がかぁっと熱を持つのを感じる。

あたしのバカー。

「リドリー？」

「え、ああ、うん」

あたしはハッと息を飲み込み、曖昧に笑みを浮かべた。

途端、ぱっとトビーの顔に喜色が浮かび、あたしは唖然とした。

「良かった！　屋台で焼き物を買って来たんだ。一緒に食べよう」

トビーの手があたしの手を掴み、嬉しそうに階段をのぼろうとする。

くいっと引かれて、あたしは驚愕した。

――あれ？

あたしってば、承諾したっけ？　あれ？

さぁっと血の気が下がる。けれどトビーはすでに上機嫌であたしをぐいぐい引っ張る。

まって、ちょっとまって！

あたしとトビーは付き合っていない。

あたしとトビーは若い男女で、おそらくトビーはあたしのことを好きで、そういう現状で男性を自室に入れるっていうのは、どうなの？

それは……駄目、ではないですか？

「えっと、トビー」

「なに？」

「やっぱり、収穫祭見に行かない？

あの、買ってくれたもの、外で、食べない？　御祭りの雰囲気、楽しみたいし」

あたしはしどろもどろに言いながら、その視線は幾度もその扉の、そのノブが動かないかと見ていた。

――リトル・リィ。

そう言ってくれる人はいない。

だって……あの男は今、あの子と一緒にいるんだわ。
あたしの手を掴んだままで、トビーは笑う。
「うん、そうしようか」
とっても嬉しそうに。

子犬と微熱

トビーの横顔を見ながら、あたしは現状に困惑していた。
――例えば、トビーが好きだと言ってくれればそれに対して何かしらの反応をあたしは返せる。
好意を向けられるというのは実際に嬉しい。
嫌われるよりも好かれるほうが嬉しいのは当然だ。けれどトビーはそうしてくれない。そうしてくれないのに、当然のようにあたしの手をとる。
「あのね、トビー」
「なに？　あ、どこか座るトコ探さないとね。広場は人で一杯かな」
トビーは笑顔を絶やさない。
嬉しそうなその様子は、以前思ったとおりに犬のようだ。尻尾をぶんぶん振っている。
純朴そうな青年の笑顔に、あたしは途方にくれてしまう。
――彼を好きになれたら良かったのに。
あたしの中でただの一度もトビーを意識したことが無い。だから、好きだと言われればきっぱりと断ることができる。
――なんか、あたしってイヤな女。
「領主館の庭に行く？　今日は開放されてて」
あたしはギクリとした。
まるで心臓を攫まれたように動転して、慌ててぶんぶんと首をふる。
「えっと、西の森の入り口辺りとかは？　少し丘になっているとこ」
そこは絶対にイヤで、慌てて無難そうな場所を提案する。町中で食事をとれるような場所は広場しかないけれど、広場は人で一杯だから、やはり少し外れに行くしかない。
「ああ、あのへんなら少しは人が少ないかな？　じゃあ、他に何か買って行こう」
――あたしはさほどお腹空いてませんよ。

パンとか色々食べたので。
けれどそれすら口に挟めない。
トビー、いがいとおしが強いのか。それともあたしが弱すぎるのか。

楽しげな曲に、美味しそうな食べ物の香り。
誰を見ても楽しそうにしている雰囲気があたりを埋め尽くしている中、あたしはトビーに引かれて町を横断し、やっと人が少ない丘で一休み。
「こっちの鳥の蒸し焼きはソースが絶品だよ。毎年買うようにしてるんだ」
差し出された蒸し鶏を、一口。
――だからお腹は一杯なんです。
「収穫の祭りのメインはパレードだけれど、夜になると広場でダンスとかもするんだよ。リドリーも出るだろ？」
あたしは乾いた笑いで首を振る。
「さすがに夜までは」
あたしはですね、疲れているのですよ。今、まさに。
明日は一日休みを頂いている。【うさぎのパン屋】も完全に休みで、マイラおばさんもゆっくりすると言っていた。けれどだからといって夜まで騒ぐ元気が無い。
今日はイロイロありすぎました。

町の外れにあたる丘はさすがに人が少ない。同じように広場で食べ物を購入して寛ぐ家族連れやカップルが離れた場所にちらほらといる程度。
今は丁度女神様からの花がもらえる頃合だとかで、やっぱりそちらのほうが人気が高いようだ。
「リドリーとダンス踊るのを楽しみにしていたのに」
「いや、うん？」

やばい、もうなんか駄目です。
「他にも一杯女の子はいると思うよ」
投げやりですよ、あたしは。
お腹一杯だというのに、がぶりと蒸し鳥にかぶりつく。トビーが絶賛するだけあって、ソースが絶品。ただし、ソースの量が多すぎ――かぶりついた途端にソースがこぼれそうになって慌てるあたしに、トビーが笑う。
「リドリー」
ひょ？
呼ばれて顔をあげた途端、ふっとトビーの顔が、近い。
えっ？――と思う間もなく、その舌があたしの唇の端を舐めた。

「……」
「えっと、あのっ。あんまり可愛くてっ」
ざーっと血の気が下がった。
「ソースがついててっ」
あの、ごめんっ。
ごめんと謝りながらも、トビーときたら嬉しそうにしている。あたしは相手の有頂天を打ち砕く勢いで声をはりあげていた。
「あたしっ、好きな人がいるの！」
いないけどっ。
「だから、あのっ、こういうのは――困る」
「好きな人？」
呆然としたようにトビーが言う。まるで傷つきましたというように。
「え、でもリドリーは……」
「本当にごめん」
何か釈然としないという様子で眉を潜められても、こちらのほうが釈然としない。あたしは焦って一生懸命に言葉を捜した。
「あたしは――」

「好きな人って、誰？」

突っ込まないで！

そこを突っ込まれると物凄く、困る。

あたしはもう咄嗟にどうしていいか判らなくて、

「婚約者がいるの！」

もうやけっぱちだった。

こんなトコで出してごめん、マーヴェル――今だけ、今だけよ。あんたがティナのものだっていうのは承知してるから！

あたしは心の中でマーヴェルに謝った。

ここは一つ、元婚約者として名前だけ貸して下さい。それくらいはいいでしょう。許して下さい。

あなたとティナの幸福を遠い空の下でいくらでも祈ってあげるから。

名義貸しくらい笑って許して。

あれ、なにかちがう？

「誰？」

もう一度、強張った調子でトビーが問う。

あたしは勢いこんで口を開いた。

「マ――」

「ぼくです」

いきなり後ろから抱き込まれて、あたしはひぃぃぃっと声無き悲鳴をあげた。

「こんにちは、トビー。

ぼくの居ない間にリトル・リィの相手をしてくれていたの？　ありがとう」

ぎゅうっと、強く魔術師の腕が抱きしめてくる。

優しい口調でトビーに向かいながら、魔術師は告げた。

「でも、十数える間に消えてくれる？

雷落としちゃうかも、ぼく」
「コーディロイ？」
「君には一度きちんと言ってあげたのに――いっておくけど、リトル・リィのことに関してぼくはものすっごく狭量だよ？　ぼくの町の人にも容赦するつもりはないし、はっきり言って消し炭にしてもいいかなぁって思ってるんだけど、ああ、でも焼き加減に注文があれば応えてあげる程度には寛大だけどね？」
　さらりと不気味なことを言いながら笑っている男に抱え込まれ、あたしも、そしてトビーも青ざめていた。

いやいや、ナイですよ。
普通に考えてそんなことできませんって。
と理性が言うのだが、この男を常識で図って良いのかどうかも判らずになんだか怖さだけが募っていく。
　魔術師だか魔法使いだか判然とはしませんが、この男がアレなのは承知しております。
「じゃあ、カウントしちゃうよ？」
小首をかしげる男の言葉に、あたしは慌てて、
「トビー、ごめんなさい！　さようならっ」
わけわかんないけど、退場！　ハウス！
追い立てるようにして告げた。

「おや、逃げられてしまったか」
のほほんと言いながら、さらにのしりとのしかかられる。
あたしは草むらに座っている状態で、結構辛い。上から押しつぶす気か？という圧力だ。
「あの、離してくれる？」
「目を離すと心配なんだけど」
「いやいや、目じゃなくて、その腕を……離して欲しいのです」
「どうしたの？　いつもだったらここで肘鉄とかきそうなんだけど」

うっ。
それは……そうなのですが、なんというか、できないのですよ。
あたしは眉をぐっと潜めた。
――やばい、ちょっと嬉しい。
嬉しいような、気がする。
誰か気のせいだって言って。
「ねぇ、リドリー」
耳元で囁かれて、心臓がはぜる。
耳たぶに吐息が触れる。
体温が、上がる。
「リドリー？」
この男の口から名前を呼ばれると、なんだか落ち着かない。
むしろリトル・リィと呼んで頂きたい。
「め」
「め？」
「女神さまは？　いいの？」
「ああ、なんか凄いコキ使われたよ。マリーはね、おっかないんだよ。ジェルドがほやほやしてるからかな。やたらとマリーがしっかりしてて、あの年で凄い怒りんぼうになっちゃった」
溜息交じりに言いながら、ゆっくりと背中から離れる。
肩に掛かる圧力が離れると同時、ふっと……自分の中にかげりが浮かんだ。
少しだけ物足りないような、寂しいような。

あたし病気か？
相手は魔術師ですよ。
しっかりしなさいリドリー！
自分の中で自分を叱責しても、神官服では無い魔術師の姿に、あたしは自分の体温があがるのを止めることができないでいた。
なんでだ！

過ちと悪魔の囁き（マーヴェル）

物心ついた頃には知っていた。
――リドリー・ナフサート。
それが自分の妻となることを。
ナフサートの家は貿易を生業としていたし、自分の家は船長の家だった。だから、いってみればそれだけの関係だ。
つながりは元々深く、更に深くするための結婚は必定だった。
リドリーはその家の中でも萎縮して見えた。
母親には溺愛されていたものの、父親からは少し距離があった。
家人は病気の妹のほうにかかりきり、リドリー自身、ティナを気にして自分を抑えているようにみえた。
　ティナは甘えん坊で、可愛くて、誰からも愛されていた。
「ティナはマーヴェルの御嫁さんになる」
数日寝込んでいたティナがそんなことを言う。
「オレはリドリーと結婚するんだよ」
小さく笑って言えば、ティナが泣き出した。
仕方ないから「判ったよ。ティナが元気になったらね」と軽く言う。
――ティナは体が弱いから、きっと長く生きれない。
　誰もがうすうすそう感じていた。
そのティナが十を越えれば、誰もが喜んだ。その頃には病気がちだった体も元気になって、快活な彼女は可愛くてやっぱり誰からも好かれていた。
　きっと焦ったのはオレだけだ。
「マーヴェル大好き」
そう言うティナにどう返事をして良いのか判らない。
けれどティナだって判っている。オレの結婚相手はティナではなくて、リドリーだということを。
「リドリー」

――愛してる。
言葉はまるで砂や水のように流れて、落ちた。
届かない。その言葉はまるで彼女には届かない。
幾度告げようと、彼女の心に触れることはできない。
まるで、リドリーの心はここにないように。

やっと彼女にキスをした時、オレがどれだけ有頂天になったかなんて誰もしらないだろう。

ティナがいなければいいのに。
そう思うことが罪だろうか？
ティナの後ろで控えめに笑う彼女を愛してる――いつかこの手でもっと自由に快活に笑わせて、守っていきたい。そう思うことは罪ではないはず。

もどかしくて、抱きしめたくて、でも彼女との間には見えない溝があった。
それでも口付けに応えてくれた彼女は控えめに頬を染めて、拒絶しなかった。
それを思い返せば、その先を求めたくなるのが男ってものだろう？

『水車小屋で待ってます』
無記名のカード、けれどオレの心は喜びに震えた。
他の誰とも思わなかった。
彼女自身、オレを欲しいと想ってくれている。

ティナとは……――思わなかった。
彼女がオレを好きだと知っていたというのに。
「どうして？」

「一度でいいの。マーヴェルがリドリーと結婚するのは判ってる。親同士の決めた許婚同士だもの。仕方ないと思ってる」
仕方ないって何だ？
親が決めたことだとしても、それでも――自分がリドリーと結婚することを望んでいる。
「莫迦なことはよせよ」
半裸の姿で瞳を潤ませるティナは怒ったようにいう。
「莫迦なこと？　マーヴェルは意気地が無いだけよ」
「ティナっ」
「もしあたしがここで悲鳴をあげて飛び出したらどうなると思う？　リドリーは許すかもしれないわ。でも父は許すかしら？　いいえ、もしかして結婚相手を思いなおしてくれるかもしれないわ。あたしとあなたが一緒になるのが一番いいのだって」
「ティナっ」
「でも、ここであたしを抱いてくれるなら……諦めてもいい」
そんなことできる訳がない。
そう思うのに、その時……悪魔が囁いたのだ。
耳元で、いや、脳に直接。
――そうすればいい。それが正しいのだと。
そうすれば幸せが手にはいるのだと。
抱いてしまえば諦めてくれる！
耳に心地よいテノール。小さな笑みすら添えたその言葉は、全てを覆した。
「あたしのこと……愛してる？」
ぎこちない笑みで、愛しい娘から愛しているかと問われた時。
――いつだってティナの笑みがちらついた。
あの小さな口が、いつか全てを話してしまうのではないかという恐

怖と絶望が、抱きしめる手にふるえをよぶ。
オレは間違ったのだ。
――悪魔の囁きなど振り払い、あの場所から立ち去り、リドリーに幾度でも愛を囁けばよかった。

それでもまだやり直せる。
結婚してしまえば――四六時中抱きしめて、君を誰よりも幸せに……

触れる指先とふるえるココロ

背後から隣に座り、顔を覗きこまれる。
柔らかな眼差しで心の中に入り込むように。
かぁっと頬が熱をもって、自然と視線を逸らす。それを不思議そうに見つめて、魔術師はふいにあたしの唇にその指先を沿わせた。
「舐められてたね？」
うっ。
「見てたの？」
「見たく無かったけどね？」
その言いように、あたしはむっとして口走ってしまった。
「だったらちゃんと止めてくれれば良かったじゃないの！」
「うん、ごめんね？」
うっ。
「お詫びにリトル・リィの気に入るような制裁をしてあげる」
は？
にっこりと綺麗な微笑みを浮かべ、魔術師はあたしの唇を優しくなぞった。
「あれは粉屋の息子だね。粉の卸しを生業としている家だ。うん、その専売を取り上げようか？　それとも、土地や家を取り上げる？　あの家には娘がいるけれど、その娘をどこかのヒヒ親父にあげちゃうとか。それとも」
「ちょっと待て！」
あたしは慌ててストップを掛けた。
楽しそうに歌うように言っているが、その内容は楽しい感じゼロ。
あたしは思わず周りの様子すらうかがってしまった。
元々それほど人のいる気配は無かったが、それでも周りの人がちらちらとこちらを気にしているのが判る。
それが町の人だからこの男のことが判るのか、それともただのバカ

ップル見物なのかは判別できないが。
「なんで全部家人なの」
いや、問題はそこじゃないけれど。
「だって、人間は自分に向けられる悪意よりも近しい人に向けられる悪意のほうが堪えるんだよ？」
「……」
「まぁ、リトル・リィが当人にしろっていうならもちろん、よりどりみどり。消し炭？　ミディアム？　ウェルダン？　見て気持ちいいとは思えないけど」
「――」
冗談だよね？
「竜の生贄とかっていうのもいいよね。
でもアレは男を食べたいかな？　まぁ、昔っからそもそも生贄なんて言い訳で、落とされる人間は大抵そのまま躯を晒すだけなんだけどね」
「――何もしない方向で」
「ん？」
「別にあたし怒ってないし」
「怒ってないの？」
ぶんぶんと肯定の意味で頭をふれば、魔術師はふふっと笑い、
「でもぼくは怒ってるから」
――……頼みますから人の話を聞きましょうよ。
「遠い場所、ぼくの手の届かない領域でならともかく――ぼくの領域でリトル・リィに手を出されるなんて」
「――」
「自宅に雷を落とすってのはどうかな。全焼で一家全滅とか楽そうだね。焼け野原にして花畑にしようか。いい肥料になってくれるかも」
「もしもーし」
「牛引きっていうのがあるんだけど、知ってる？　鉄の処女なんて

無いしなぁ。んん、近くの砦で見た気がするかも？　どこだったかな」

だから、待て。

「駄目だったら！」

「駄目だよ」

さらりと言う。口の端を引き上げ、小首をかしげ、まるで楽しそうに。

「だから、ぼく怒ってるし？　この怒りを静めないことには――」

そもそもやられたのはあたしですよ。

頼むからその楽しくない妄想、妄言の垂れ流しは辞めて。笑いながら言うのが怖いから。

怒っている、という言葉の通りに面前の男の瞳は決して表情通りに微笑みなど浮かべていない。その瞳は暗く強い光を浮かべている。

――腹の底からすっと血の気が引く感覚は、まるで別の感情を呼び起こす。

駄目だという戒めを断ち切る、気持ち。

　コノヒトはアタシをスキなのだ。

やばい、やばい、やばい。

警鐘は鳴り響く。けれど、嬉しい。嬉しい――その感情がとろりと自身をなで上げる。

あたしは、とても、嬉しいのだ。

「リトル・リィ？」

ふいに、魔術師が小首をかしげた。

「え、あ……」

かぁっと頬に熱があがる。

冷たい指先が頬に触れて、優しくなで上げる。

親指の腹が唇を撫でて、ふっと魔術師が吐息を落とした。

唇が、触れる。

それが判るのに、あたしは――避けることが、できなかった。
上唇をそっと挟むようについばみ、戸惑うように舌先で撫でる。ふるりと身が震えたのは、背筋に奇妙な痺れが走ったから。
「リドリー」
そっと囁かれた言葉に、あたしは瞳を伏せた。

魔術師がかすれるような言葉で囁く。
「どうして外なんだろう」
「……」
「あああ、このまま押し倒したいぃぃぃ！」

――あたしが思い切りその頬を張り倒したのは言うまでもない。
くそっ。
なんでこんな男好きなの！
絶対にこんなの間違ってる！
だってだってだって……
間違って――まちがいで……

マチガイなの、この、
心臓が壊れそうなほど、うれしいのは。

あああ……この男が、スキだ。

コイゴコロと冷たいコエ

――あの男はあたしを好き。
あたしはあの男を好き。

ぎゅうっと枕を抱きしめる。
それってさ、つまりさ、両思いですね、オメデトウ？
「いやいや、駄目だろう！」
あたしは独り言を呟きながら、自分の寝台の上で身悶えていた。駄目だ。絶対にこんなこと言ったら駄目だ！

そんなことを言ったが最後、なんだか寝台に連れ込まれてなし崩しに……うひぃ？
「あたし壊れてるわ」
何考えてるのかしら。
一人でいるのに恥ずかしい！
壁に預けていた背中を横にずらして寝台にぽてりと横になる。自然と指先が唇に触れて、魔術師の繊細そうな指先が唇をなぞるのを、吐息が触れるのを思い出してわけもなく叫びたくなる。

――重症だわ。
なにかしら、これ。
あたし……マーヴェル相手にこんな風になったこと、ないわ。
はじめて口付けしたあの日。とても嬉しかったのをちゃんと覚えてる。けれど、こんな風に暴れだしたいようなじっとしていられないような気持ちまでは抱かなかった。
嬉しいという感情と共に、何かとても……そう、腹の底が冷えたのだ。

罪を犯したような、なんともいえない、鈍い痛みを覚えた。きっとあれはマーヴェルの心が自分にないことを知っていたからだろうと思うのだけれど。

あのあと、あたしが「帰る」と言えば魔術師は微笑んで「送るよ」と自宅まで送ってくれた。強引に出るかと思えば拍子抜けするほどあっさりと開放される。

――それをあたしときたら、何だか物足りないように感じるなんて、本当に、どうかしている。

あたしが寝台の上でばたばたしていると、ふいにノックの音が聞こえた。

「ひゃあっ」

何故かへんな声が出てしまう。

……なんというか、もう何故イロイロと後ろめたいのかしら、あたし。

恥ずかしい！

あたしはぱんぱんっと自分の頬を叩いて、十歩も歩かないで行ける玄関の扉を開いた。

「遅い時間にすみません」

「……はい？」

しまった、なんであたしってば無防備に確認もしないで玄関開けてるの！？　外の喧騒がまだあるから忘れていたが、すでに外は暗い時間だ。

トビーが言っていたように、広場ではダンスをしているのだろう。楽しそうな曲が流れてくる。

そして、玄関に立っているのは見知らぬ男性だった。

金色の長い髪を後ろで一つに束ね、深い紺の上下に身を包んだ姿は一見質素だが、その生地は品が良さそうだし、穏やかな笑みを浮かべる面は……

「領主、さま？」

遠くから見ただけであまり判らないのだが、その顔はアマリージェ

に似ていた。その口元が。だから咄嗟に、そう言葉をつむいでしまう。

あたしが戸惑うように言えば、面前の青年は胸元に手を当てて微笑んだ。

「はじめまして、リドリー・ナフサート嬢。

私はジェルド・スオンと申します。

申し訳ありませんが、一緒にいらしていただけますでしょうか？」

「え、あの、何故？」

「できればあなたに救って頂きたいのです」

は？

困ったように微笑み、

「もちろん、あなたがイヤだと言うのであれば諦めます。ですが、私としても領民は大事な家族。救えるものであれば救いたい」

「あの、ちっとも話が見えませんが？」

「コーディロイはご存知ですよね？」

「あの人、何かしでかしたの！？」

「ペギー一家を投獄するようにと命じました」

ばかーっ。

「私が言ったところであの方は止まりませんから、こんなことであなたの手を煩わせることをどうかお許し下さい」

って、何故にそんなに領主さまは下手なの。

あたしはしがない一般庶民です。領主さまだというのに相手の青年は丁寧にあたしに対して礼を尽くす。

何より、領主様！　どう考えたってあなたのほうがアレより偉いんじゃないの？

「もし救う心がおありでしたら、一緒に」

「行きます！」

あたしはむしろ相手の腕をつかむ勢いで部屋を出て、そのまま階段を下りた。慌てて領主さまがついてくる。二階におりたところで、止められた。

「こっちです」
示されたのは二階の扉。
「……」
いや、確かに魔術師はそこから出てくるけれど。あれ、ここにいるの？　あたしが首をかしげるより先に、領主さまは慣れた様子でその扉を開いた。

「……あああ、本当につながってるし」
あたしは眩暈がした。
扉を開けると、そこは寝室でした。
しかも明らかにあたしの部屋よりも数倍もでかい寝室。幾つかの明かりが点されたその部屋はほのかに暖かい。
レンガ造りのアパートとはまったく違う。白壁の美しい空間。
天蓋付きの寝台なんて、どう考えてもあたしの部屋サイズだし。
うわ、なにこれ、なんかむかつく。
額に手を当てるあたしに構わず、領主さまはその寝室にあるもう一つの扉へと歩いていく。おいていかれるわけにもいかず、あたしは慌ててその後をおった。
――魔法使い。
確かにこれは魔術師ではなく魔法使いの領域だ。
けれど魔法使いなんて、はるか昔……もうずっと昔に絶滅してしまったのではないの？　あたしの中の認識では、魔法使いはすでに物語の人だ。
起毛の絨毯はなんだかふわふわとしていて歩くのが不安定。あたしは居心地が悪くて、とりあえず領主さまの背中ばかりに集中するほかない。廊下はタイルがはめ込まれていてよく磨かれている。それでも、人の気配はあまり感じない魔術師の館。
「面倒かもしれませんけれど、町中を通るよりは近いですから」
と、一旦その建物を出て隣にある領主館へと入りながら言う。あた

しは領主様の歩調に必死に追いつきながら、領主館のその一室にやっとたどり着いた。
「嫌われますわよ」
女性の声が耳に入る。
「黙れ、マリー」
「黙りません！　あなたのすることに誰も文句を言わないと思っていらっしゃる？　確かにその通りですけれど、人の命を奪うのだけは許されませんわ」
「許されるよ。書類にはぼくの印章がある。ぼくが命じれば今この場にこいつらを引きずり出して一本一本腕を引き抜くのだって自由だ」
「コーディロイ！」
「ぼくと言っているうちにその口を閉ざすといい、アマリージェ。随分と不敬だと思わないか？　よりにもよってリトル・リィを引き合いに出したしね」
「いくらだって言うわよ。リトル――」
「黙れ、その呼び方を許してもいない」
「コーディ……」
「アマリージェ、あんまり煩いとおまえも石牢の冷たさを知ることになるよ？
それとも、竜峰へと行くかい？　あの永久凍土に一日置き去りにして生きていられるかな」
ひやりと、冷たい声音が響いた途端、あたしは慌てて扉を開いた。

冷笑と――

「何してるの!?」
ざっと視線が自分に集中する。
あたしが怯んだのは、その場には魔術師とアマリージェだけでなく、壁際に見知らぬ人たちが立っていたことだ。
その誰もが神官服を着ていた。白いものではなく薄い蒼の衣装。
その中で、まるで王のように椅子に座っていた魔術師は顔をしかめてあたしの背後から入室した領主さまを睨んだ。
「姑息だな」
「……一番良い手でしょう?」
「そうかもね」
魔術師は嘆息すると前髪をかきあげた。
「今日はゆっくりとお休みと言ったのに」
――休めなかったのよ。あなたのことばかり考えて。
なんて絶対に言わない。
「領主さまから聞いたのだけれど、トビーの家族を拘留するとかしないとか」
「うん」
「……まだ怒ってるの?」
「この手で打ち殺してあげたいくらいには」
肩をすくめる相手に眩暈がする。そんな台詞を吐く時でさえ、この男と来たら憎らしいくらいに綺麗な笑みを浮かべてみせる。
座っている椅子で足を組みかえる。小首をかしげ、やがて魔術師は吐息を落とした。
「トビーに報復したら、君はぼくを嫌うかい?」
「嫌うわ」
「……そうか」
「そうよ」

吐息を落とし、魔術師は軽く手を払った。
途端、うわっと誰かが声をあげる。
その声に視線を向ければ、控えていた男の一人が持っていた書類からぱっと手を離すのは同時だった。
青白い炎が羊皮紙の表面をなであげるように這い、書類が燃え尽きる。
途端に、張り詰めていたような緊張が解かれた。
――それがおそらく彼が印章を押したという書類だったのだろう。
うわぁ、なに今の？　魔法？　やっぱり魔法なの？
「良かった」
領主さまが柔らかく微笑み、あたしに一礼した。
「ありがとうございました。ナフサート嬢」
って、あたしそんなたいしたことをした感じではないのだけれど。
困惑を込めて領主さまと魔術師を交互に見れば、魔術師はつまらなそうに半眼を伏せ、皮肉気に口の端を持ち上げる。
「アマリージェ」
「は、はいっ」
「ぼくに言うことは？」
まるでふてくされるように言う。
「ご無礼を、お許し下さい」
「――二度とリトル・リィと呼ぶことは許さないよ。覚えておきなさい」
八つ当たりだ。
確実に。
アマリージェは軽く魔術師に頭を下げたが、つっとその視線をこちらへと向けた。
「リドリー・ナフサートさま」
さ、さまっ？
「はじめまして私、アマリージェ・スオンと申します。
私のことはマリーとお呼び下さい。私は貴女さまをどのようにお呼

びしたら宜しいでしょう？」
　はじめましてではないが、それを訂正するのははばかられた。
あたしは多少戸惑いながらも、年下の御姫様の言葉と微笑みに応えた。
「えっと、リドリーでいい、です」
「では、リドリーさまとお呼びいたします」
いやいやいや。
「リドリーでいいです。呼び捨てで。アマリージェさま」
「マリーですわ。呼び捨てで構いません。リドリー」
　翡翠の瞳を柔らかくして微笑む彼女に、あたしはほんの少しだけ胸を痛めた。
――嫉妬、したんですよ、今日、あなたに。
冷たい眼差しだと勘違いしたのですよ、今日。

そんな微妙な二人とは裏腹に、魔術師の視線は領主さまへと冷たく向けられた。
「ジェルド」
「はい」
領主さまの声が強張る。
びしりと背筋を伸ばし、こくりと喉を動かす様子はまるで教師に叱られるのをまつ生徒のようだ。
「言いたいことは理解できる？」
「はい」
「ならいい――あとで、ね？」
瞳を細めて言うと、魔術師は椅子の肘掛に一度手をつけて勢いをのせて立ち上がり、もう一度手を払った。
　それを合図に薄蒼の神官服を着た男達が一礼して下がる。
――まるで劇の一幕のように。整然としていてそうあれと定められているかのように。

あたしはなんだか居心地が悪くて眉を潜めた。
緊迫した様子の領主さまも気に掛かる。
「魔術師」
「なにかな」
ふっと微笑む。
差し伸べられる手に触れることもなく、あたしは一応気になっていることを尋ねた。
「もう怒ってない？」
「怒ってないよ？」
「トビー達に何かしたりしない？」
「――言葉をかけるくらいはいいよね？　もうぼくはいやだよ？　あんなコト」
確かにあたしもイヤだし、何よりあんなことでこの騒ぎだ。もしまかり間違ってもっと偉い騒ぎを引き出したら困るから、それくらいは了承する。
あたしがこくりとうなずくと、魔術師が嬉しそうに微笑む。
その笑顔に誤魔化されてなるものかと、あたしは更に言葉を重ねた。
「他の人にも怒ってない？」
「他って？」
「あなた、ご領主様に何をするつもり？」
「――」
魔術師が応えるより先に、ご領主さまが慌てて声をあげた。
「ナフサート嬢。良いのです。これは当然の罰なのですから――」
「ジェルドっ」
苦々しい様子で魔術師がご領主さまを睨みつけたが、あたしはそれより先に声をあげた。
「駄目だからね！　なんだか判らないけど、何するつもりだか判らないけど、絶対に駄目だから！」
「……」

魔術師は前髪をかきあげ、ちらりとご領主さまを見ると嘆息した。
「だ、そうだよ？」
「――」
「たまには思い切り無駄な権力の行使をしてみようと思ったけど、なかなかうまくいかないものだね。まぁ、リトル・リィの優しさに感謝しなよ、当主？」
「はい、寛大なお心に感謝いたします」
そのやりとりに、あたしは瞳を瞬いて、
「魔術師、なんだってあんたはそう偉そうなの？　相手はご領主さまなのよ？　貴族よ？　なんなの？」
とあたしが言う言葉に、
それまで静かに控えていたアマリージェが耐え切れなかったように爆笑した。

止まらぬ想いとはじめてのお泊り

突然爆笑し、肩を震わせている姫君の姿に驚いたのはなにもあたしだけではなかった。
その場にいる三名――あたし、魔術師、そして領主さままで驚いた様子で自分の妹姫を見ている。
自らの胸元に手をあて、いっそ苦しそうに笑うアマリージェの姿は到底想像できるものではなかった。
御姫様？
見目麗しい御姫様の爆笑……
「マリー？」
気遣わしげに領主さまが言えば、アマリージェは必死に自分の口元を押さえ込み、涙交じりで顔をあげた。
「し、失礼いたしました」
「……大丈夫かい？」
「わたくし、こんなに笑ったのははじめてです」
「だろうね」
領主様が心配そうに言う。
「――リドリー、あなたはそういう方ですのね？」
え？
あたし？
あたしが笑われていたのですか？
あたしは呆然とした。いや、確かに――あたしが喋ったあとに爆笑されたのだからそうなのだろうけれど、あんまり意外すぎて結びつかなかった。
眦に浮かんだ涙を拭い、アマリージェは未だ肩を震わせながら言った。
「尊き人と兄を同列に扱ってはいけません。彼は神官長ですのよ？」
「……神官のほうがご領主さまより偉い？、のですか？」

ごめんなさい、私は一介の商人の娘なのです。
階級社会には物凄く疎い。いやいや、跡取り娘としてきちんと学ばなかったのは致し方ないのです。うちには婿養子が入る予定でありまして、その……うん、彼のほうは勉強していたようです。
――なんというかごめんなさい？
「長と言っているではありませんか。リドリー、まさか長と付く人の上にも誰かいると思っていらして？　尊き人はそんな安い方ではありません」
えっと？
またしても話が見えませんよ？

あたしはじっと魔術師を見詰めた。
今は白い神官服の男を。
「……偉いの？」
「名目上はそうかもね？」
「――どれくらい？」
小首をかしげるあたしに、魔術師はふふっと微笑み、
「そこの当主から爵位を取り上げるのは序の口」
びくりと領主さまが身をすくませる。
「正式な手続きさえ済ませれば、この町くらい好き勝手しても、まぁ許してもらえる程度には」
まぁ手続きなんかしなくても、何しようが証拠なんて残んないけどねぇ。
などと小さく呟く魔術師。
さらに領主さまが慄(おのの)いて一歩退く。
「冗談？」
「――言っただろう？　ぼくを持ち上げている連中にしてみれば、その程度でぼくが大人しくしていてくれるなら安いと思っているんだ」

――敬っているのだから悪さをしないで……
崇り神の竜の話が脳裏を過ぎる。
あたしは肩をすくめて冷ややかに笑う男から視線を逸らし、ちらりとご領主さまを見た。
その顔が心なしか青ざめている。その横のアマリージェも。
本気ですか！？

「えっと、夜分遅くに失礼いたしました」
あたしはご領主さまにぺこりと一つ頭をさげた。
ご領主様は未だに硬直しているし、またその気持ちも良く判る。
あたしはにっこりと笑い、
「では帰りますね」
とその場を退場しようとした。

駄目だ。
理解の範疇外過ぎる。
それとも何かの喜劇か何かなの？　ここはテントの中ですか！？
好きだと思ったのは忘れよう。
――いやいや、そんな気持ちはきっと嘘だったのだ。ああ、悪い夢だった。明日はきっといいことがあるさ。今日はちょっとなんだかアレだっただけ。
という完全逃避を図ろうとしているあたしの背に、のしりと温かな体温がのしかかる。
「リトル・リィ、送るよ？」
耳元にささやかれ、あたしはひぃっと声無き悲鳴をあげた。
好きじゃない、好きじゃない。
そんな感情はゴミ箱に捨てました！
なのにどうしてあたしの心臓はばくばく跳ね上がるの。あたしのばかー！

神様助けてっ。

しかし、ソレを救ってくれたのは思い切り当てにならない神様ではなく、可愛らしい声の姫君だった。

「リドリー」

鈴の音のような愛らしい声で呼び、たたっと姫君はあたしの前にまわりこむ。

「今宵はもう遅いですわ。わたくしの部屋にお泊り下さい」

「マリー？」

困惑気味の魔術師の声。

いや、だから耳元で言葉をあやつるのは辞めて下さい。

心地よいテノールが――バスだったら正気に戻れるというのに、その柔らかな声音がぞくぞくと体のどこかをくすぐる。

アマリージェの手がぐいっとあたしを引く。

背中の背後霊が外れてよろつくあたしに、そっとアマリージェが囁いた。

「了承なさい。尊き人の寝室に行きたいのでしたら別ですが」

うっ……

送るって、きっとあの部屋を通るつもりだよね？

あの、明らかに魔術師の寝室。いやいや、断ることだって勿論可能だ。人間には足があるのだ。多少歩くことになっても――……なんか無理な気がする。

「泊めて下さい」

「ではいらして」

アマリージェが嬉しそうに微笑み、

「よろしいですわよね？　コーディロイ」

と魔術師を見た。

魔術師は眉を潜めたが、あたしとアマリージェを交互に確認し、
「リトル・リィがそういうなら」
と肩をすくめた。
――ってか、あたしの行動を一々その男に了承とるというのはいかがなものでしょう。私と彼はきっと、ええ、きっと無関係……です。

止まらぬ想いとはじめてのお泊り（後書き）

アマリージェの御部屋にお泊りでした～

ｗｅｂ拍手お礼小話つめつめ（１）（前書き）

一度御読みになった方もいらっしゃると思います。ｗｅｂ拍手お礼の小話の詰め込みです。期間限定のエイプリルフールネタなどはまた次回ｕｐさせていただきます。

ｗｅｂ拍手お礼小話つめつめ（１）

多くの人が広場に集まり、鳩が飛んで花が大気を舞う。
――今日一日は自分が主役。
アマリージェは誇らしい気持ちで微笑んでいた。
その時まで。

誰かの声が「虹だ！」というまで。
天候は晴天、ならばその虹をこの晴天に見せたのは誰であるかなんて、この町に生きてこの町で死ぬものであれば皆知っている。
――尊き人。
そう呼ばれる人だと。
つんつんっと、隣に立つ兄が膝でつつき、笑う。
「綺麗だね」
「……」
「あとでお礼を言っておきなさい」
兄は綺麗に笑う。
その顔を見ながら、アマリージェの心は一気に冷めていた。

――違うわ。
この虹は「私」に向けたものでは無い。そうであるならば、あの尊き人は言うはずだ。
人を驚かせたり喜ばせたり、あの人は少しも考えていない。
虹を見たいといえば見せてはくれる。
花が欲しいのだといえば与えてくれる。
けれど、自らの意思でそれをする相手は――たった一人に向けてだと、どうして兄は気づかないのだろう。

「マリー？」
兄の声に微笑む。
今日の主役はアマリージェ・スオン――
ここに集まる全ての人に、祝福を。

けれどたった一人にだけは、わたくしは祝福なんて与えない。
意地悪なのは判ってる。
けれどいいでしょう？
その人は、決してわたくしが欲しくて、欲しくても手にいれることのできない唯一のものを手にいれているのだもの。

判ってる。
キライじゃないわ。憎んでもいない。
むしろ、あの人は可哀想な人。
可哀想な生贄の羊。

けれど今日この日はわたくしが主役。
それを惨めな気持ちにしてくれたあの人を――今日、この時ばかりは嫌ってもいいでしょう？

――――――――――――――――――――――――――――――――

「リージェ、どうしたの？」
兄さまが不思議そうに覗き込んでくる。
私は眉をくっきりと寄せて言った。
「コーディロイがね」
「うん」
「突然、マリーって呼び出したの」

「まぁ、それも可愛いよね？」
「……リトル・リィに似てるからこっちにしようって」
「……」
「どういう意味？」
「――君はこれからマリーだね、うん、判った」
わーかーんーなーいぃぃぃぃ。

白い人が黒になってました。
さすがにその場にいた全員が息を詰めたのが判る。
「尊き人？　その姿は……なんですか？」
兄がゆっくりと問いかける。
シルクハットに黒衣の上下。ステッキをくるりと回して見せる。
「魔術師っぽい？」
「というか……イカレ――」
思わず口を開いたあたくしの口を、兄の手が慌ててふさぐ。
「見えます！　見えますがっ」
「リトル・リィがね？　飴を出してあげたら魔術師みたい、素敵って言ってくれたのを思い出したから」
「……」
「再会は魔術師にしてみようと思って」
――嬉しそうに微笑む姿は実に麗しいが。
莫迦だ……
いつの間に病の進行がここまで。
泣きそう。わたくし。
「似合う？」
「似合ってます」
兄の声がかすれていた。その声に追従してこくこくと家人がうなずく。

――似合ってるわ。そら怖ろしい程！　物凄く素敵よ！
莫迦だけど！
ああ、言いたい。言ってしまいたいっ。
脳細胞壊れてますわっ！
絶対にこれが初恋だなんて口が裂けても言えない！
「マリー？」
「……きっと彼女も喜んでくださいますわ」
いやいや、ナイ。ナイな。
もう変人にしか見えないもの！

――――――――――――――――――――――――――――――――

霊峰の水脈に触れている尊き人は嬉しそうだ。
そこが彼の力の源で、そして彼の活動範囲であるから。
逆に言えば、竜峰の水脈が届かない場所は尊き人の範疇外。
――彼の人の想い人はその範疇外に暮らしている。
それでも水鏡で相手を見ることができるというのは、やはり彼の人は素晴らしい。
その嬉しそうにしていた人の眉が跳ね上がり、かもす雰囲気が変わる。
「尊き人？」
「殺す」
「……は？」
なんだか今不穏な言葉が漏れたような……
「ぼくのリトル・リィにキスしたぼくのリトル・リィにキスしたぼくの……――」
何その呪いの言葉。
「何がファーストキスなものか、残念でした！
はじめてはぼくとですよ。あんまり可愛くてベロチュウしちゃったもの。

おまえなんか二番目だ、ばか」
「……」
「ゆーるーすーまーじぃ。
おまえの破滅は確定だ！　念入りに地獄に叩き落す」

ふふふと笑っているその人からそっと離れ、自然と神に祈りを捧げた。
ああ、だけれど。
自分はどの神に祈ればいいのだろうか。
神官長がアレだ。

鉄壁の姫君と悩める子羊

――意外に鉄壁。
あたしがアマリージェ・スオンに抱いた感想だ。

あの日、あたしは彼女の部屋に泊めてもらった。
御姫様の部屋というには質素な部屋だった。想像していた御姫様と言えば桃色がふんだんに使われ、レースが並び、甘い香りでも漂わせていそうなもの――という思い込みを撃破するくらい、アマリージェの部屋は普通だった。
寝台は天蓋付きでしたが。
ほぼ初対面――というか完全初対面の、しかも貴族の令嬢の部屋に泊まるなんて、なんて畏れ多いと思ったものの、十四歳の少女はこちらの気負いを少しも感知しないでマイペースだった。
「同じ寝台で構いませんわよね？」
多少気がひけたが、同じ部屋に眠るというのはそういうことだろうとうなずく。
彼女の部屋は、私室が手前、左手奥にある扉の向こうが寝室というつくりだった。貸してもらった寝巻きは愛らしいレースが使われていて若干あたしは引いてしまった。
――ああ、こういうところはイメージ通りのお姫様だ。
「リドリー？」
「えっと、あの……聞きたいことがあるのですが、良いですか？」
あたしはずっと尋ねたいと思っていたことをそう切り出した。
アマリージェは微笑み、
「言えることでしたら」
応えた。
「あの、あの人――尊き人のこと、なんですが」
「聞かないで下さい」

……
はい？
アマリージェはそれはそれは綺麗な笑みを浮かべた。
「あの方にとって都合が悪いことはいえません」
「えっと、あの？」
都合が悪いことって。
「でもわたくしの言いたいことって、かなりあの方にとって都合が悪いのです。うっかり口に出したが最期呪われそうですから」
なにそれ……呪われるって。
神官に対して使う言葉では無いと思うのですが。神官って呪いとかとは対極な……
「あの、偉いんですよね？」
「偉いですわね」
「――なんだか途方もないんですが」
「途方もないですわね」

駄目だ――アマリージェ・スオン。
何気に強い。鉄壁の守り。
貴族の御姫様というのはもっとこう……ほわほわとしているものだと想像していたのだが。
笑みを浮かべていた姫君だが、ふいに視線を逸らして吐息を落とした。
「想像していた方と、あなたは随分と違うみたい」
あたしからしても、想像の姫君と貴女様は大分違います。
「えっと、あたしのこと――ご存知だったのですか？」
どんな想像をされていたんだろうか？
というか、あの男はいったいどう言っていたんだ。
引きつるあたしに、アマリージェは小首をかしげた。
さらりとウェーブのかかる金髪が揺れ、まるでお人形さんのように愛らしい。あまりの可愛らしさに何故かあたしは赤面しそうになる。

――すごい可愛い。
「私があなたを見たのは四つの頃です」
見た、という単語にあたしは瞳を瞬いた。
「お会いしたことが？」
「いいえ。見たのですわ――」
その意味がまったく不明だ。
だが……魔術師の身内だと思えば言葉が通じないのも仕方ない気がする。
あの男は本当に言葉が通じない！
「もう休みましょう？　今日はわたくしも疲れてしまいました――」
アマリージェは吐息を落とし、寝台を示した。
彼女は本日の主役で、確かに疲れているだろう。何より先程の魔術師とのやり取りだってきっと疲れたに違いない。
だというのにあたしにまで気を使わせてどうする。
「ごめんなさい、下らない話を」
「いいえ……リドリー」
そっと首をふった少女はふっと声音を変えてあたしを見た。
「――これは愚痴なのですけれど」
ゆっくりと呟きながらアマリージェは瞳を伏せた。
「あなたという存在が、嬉しくて――また悲しいわ」
それきり彼女は口を閉ざしてしまった。
その時に彼女の眦（まなじり）から一筋、涙が伝い落ちてあたしは息を詰めて視線を逸らした。
心臓がとくとくとはぜる。
彼女は、魔術師が好きなのかしら？
そう咄嗟に思ってしまうのは、きっと今のあたしがあの男を気にしているから。何もかもを直結してしまうからに違いない。
違いないのだけど――やっぱりなんだか落ち着かない。
どうして嬉しくて悲しいのですか？
どうして、涙を流す程……でもそれ以上触れられなくて、あたしは

彼女と同じ寝台で静かに彼女の邪魔にならないように横になることしかできなかった。

「あー、頭から離れないわ」

――すでにあれから数日が経過していた。

アマリージェの涙がふいに浮かんでしまう。あまりにも綺麗な、綺麗な涙。翌日には彼女はにっこりと微笑みを浮かべていたし、口調はほんの少しだけ砕けていた。

十四歳というにはなんともオトナだ。

それに比べて彼女の兄という人は、ちょっとばかりほやんとした人だった。

「どうした？」

のぞきこんでくる少年の姿にあたしは苦笑した。

「これといって……ってか、あれ？　アジス君？」

【うさぎのぱんや】のカウンターで立つあたしと、カウンター越しにいるアジス君。アジス君は隣町の住人で、時々週末などに姿を見せることはあっても平日に顔を出すことは皆無だった。

いや、過去に例が無いわけではないのだが。

「どうしたの？」

「ヤボ用」

若干十一歳はそう言いながらカウンターの中にある椅子に荷物をどさりとおろした。肩掛け式の鞄はぱんぱんに詰まっている。

それまでの前例とまったく同じだった。

「疲れてるのか？　オレかわってもいいぞ」

「……家出？」

さっさと壁に掛けられている店のエプロンに手を掛ける少年に、あたしは顔をしかめた。

「――違う」

視線を逸らして言うが、実はアジス君の家出はすでに三度目だ。家

出のたびに祖母の家に来るのだからまだまだ子供だ。微笑ましい。
「オレは修行の旅に出たんだ」
隣町に？
その可愛らしさに自然と口元が綻ぶあたしだったが、少年は力強く言葉を続けた。
「神官になる」
「えええええええ？」
「この町にはコーディロイが居るんだぞ！　オレは立派な神官になってコーディロイに仕えるんだ」
うんうんとうなずく少年の両の肩を、あたしはがしりとつかんだ。
「それは辞めたほうがいい！」
駄目だ。そんな間違った道にすすんだら人生が終わる！
あたしは青ざめて必死に説得しようと試みた。他のどんな道をたどったところでしっかりもののアジス君なら極めることができるだろう。絶対に成功する。
あたしは応援するし、できることなら助力だって惜しまない。
だが、その道だけは勧められない。
そもそもあの男を崇拝しているところからして間違っている！
「アジス君ならもっと違う道があるから！」
「オレは決めたんだ。なんだよ、リドリーまで反対するのか？」
「しますよ！」
しますとも！
と声をあげているところで、店舗の方のガラスベルが涼やかな音をさせた。

「リドリー、大きな声を出してどうなさったの？」
ふいに現れたアマリージェが愛らしく小首をかしげた。
どうやらあたしの絶叫は外にまで聞こえていたらしい。突然現れたアマリージェの姿にアジス君が息を飲み込む。
その頬がほんの少しだけ染まったことにあたしは気づいたが、今

大事なのはそんなことではない。
「……いえ、この子が……」
「オレ、神官になりたいんだ。神官になって尊き人に仕えたいって言ったらリドリーが」
「お辞めなさい！」
アマリージェは顔色を変えて声をあげた。

どうやら加勢が現れたようだが……
御姫様の驚愕の様子にあたしは若干――否、かなり引いた。
やっぱりあの男は問題がある気がする。

頑固な少年と嘘つきな少女

「なんでアマリージェ様まで反対するんだよ！」
アジス君は憤慨した。
おそらく彼にしてみれば、アマリージェが反対するなど欠片も思わず、むしろ自分の意見に優しく賛同してくれるものと思ったのだろう。
――だがアマリージェは違った。
「愚かしいですわ」
しかも容赦がない。
ゆっくりと呼吸を整えて冷静さを取り戻したお姫様は胸元に手を当てて――動悸を押さえ込んでいるような所作で幾度か呼吸を繰り返し、その翡翠の眼差しに力を込めた。

「それに、あの方に仕えることができるのは神官でも高位の方たちですわ。その出は貴族ばかり。あなたがたどり着くことはできません」
――挙句辛らつ。
身分を出されては少年にはぐうの音も出ない。悔しそうに唇をぐっと噛むアジス君の姿に、あたしはほんの少し可哀想になってしまった。
彼があの男に物凄く憧れだとか憧憬だとかいう種類の感情を持っているのは、判る。前回のことで十分に判る。だが、どうか思いとどまって欲しい。
アレは……アレな感じなのですよ、本当に。
しかしアジス君の眼差しはより一層強いものへとかわってしまった。
ぐっと唇を噛んで、低く威嚇するように吐き捨てた。
「やらずに諦めるのは男のすることじゃないだろうが」

……格好いいよ、本当に。
若干十一歳。その男前さに涙が出そうだ。
　毅然と立っていた姫君もさすがに怯む。
ほんの少しだけ眉間に皺を寄せて、アマリージェが口を開こうとしたのをあたしは遮った。
これは駄目だ。
彼は純粋で、そして子供なのだ。
駄目だと反対されればされるほど意固地になるに違いない。
ならば――
「マリー」
あたしは嘆息交じりに口にした。
「パンを買いに来てくれたんですか？」
まったく話題を変えてしまう。
　アマリージェは一瞬驚いた様子を見せたが、問われた言葉には素直にうなずく。

「ええ……もちろんそれもありますけれど、あなたに会いに参りましたのよ？」
「何か用がありました？」
「用がなければ会いに来てはいけません？」
――何故か赤面しそうになる。
　可愛いなぁ、アマリージェ様。
そんなあたし達の会話に、アジス君が眉間に皺を刻んであたしの袖を引く。
「やけに親しいな」
女の子というのはですね、一晩お泊まりして食事を一緒にとれば結構仲良くなれてしまうものなのですよ、アジス君。
　何より、アマリージェの態度はやけに友好的だった。
「友人になりましたもの」
　アマリージェが言えばアジス君が驚きに瞳を瞬く。

彼にしても相手はお姫さま。お姫様と一般の――パン屋の従業員などが友人というのはきっと理解できないものなのだろう。
「リドリー、手が早いな」
――もっと違う表現でお願いします。
まるであたしがアマリージェ様をたらしこんだように言うのは辞めて。内心でそう考え、更にこれであの男があたしに張り付いていることを知られたら何を言われるのだろうかと身震いした。

――あたし、もしかして物凄い悪女扱い？

「とにかく」
話しを逸らしたつもりだったのだが、強い意思で喋っている少年はそんな小細工で話題をすりかえられたりはしなかった。
「オレは決めたんだ」
アマリージェの眉間に皺が寄り、口を開こうとする。
「神官になる」
「まぁ、色々と悩むのは大事よね」
あたしはアマリージェが口を開く前にそう言った。
「リドリー」
咎めるようにアマリージェが言う。それを宥めるように軽く手を払い、
「とりあえずおばさんのとこに顔だしてくれれば？」
「え、ああ」
ひらひらと少年を見送り、アマリージェに肩をすくめて見せる。
「リドリー、あれでは――」
「子供のことですから、きっとすぐに熱が覚めますよ」
「――頑固そうですけれど」
「……そうですね」
頑固は頑固なんですが。
「でも神官って、確かにこの間数名見ましたけれど、普段からいる

んですか？　神殿は無いんですよね？」
「普段はおりませんわ。あの方は自宅に人を置きたがりませんし。必要最低限の人員はおりますけれど――神官を屋敷にはおいていません」
「ああ、あの日は御祭りだったから？」
「……召集したのですわ。いくらあの方でも正式な手続きをとるならば独断で他者を投獄したり死刑にしたりできませんから」
「……」
「先に言っておきますけれど、あの場にいた全ての人間があの方の暴挙を容認してますのよ。誰一人として止めることはしませんでした。だから兄はあなたを呼びに行ったのです」
――……
「正式な手続きをとってくださって良かったです。もし何の手続きもせずに事後報告ですまそうとなさっても――おそらく誰もあの方を咎めたりなさいませんわ」
「なんつー、暴君？」
「違います」
アマリージェは疲れた笑みを浮かべた。

「あの方は決して暴君ではありません。今までそのような振る舞いなどなさらなかった。できることを知っていても、ただ静かに自らの世界に閉じこもっていらしたの」
すっとその翡翠の眼差しがあたしを射抜いた。
「あの方を暴君になさるのはあなたよ、リドリー。だからあなたはその責任をとらなければいけないわ」
「……責任？」
「今日の正餐の招待だそうです。行って下さいますわよね？」
にっこりとアマリージェは一通の封書を取り出した。
「あなたが行ってくださらないと、きっとうちの兄が苛められてし

まいます。それはもうねちねち陰湿に」
「ええ？」
「お受けして下さいますね？」
――お姫様はにっこり笑って嘘をつく。
さっき、用は無いって、ただ会いに来たって言ったではありませんか。
すごく嬉しかったのに……酷すぎる。

気が重かった。
果てしなく。気が重かった。
――アマリージェに押し付けられた正餐とやらの招待状。
そもそも正餐なる単語がすでに大仰だ。あたしは一介の商人の娘です。それなりにいい家だったとは言えるけれど、一々夕餉に招待状ってどうなのだ。
アマリージェが普段着でかまいませんのよ。と微笑んでいた言葉にしっかりと胡坐をかき、あたしはきっちりといつもの格好でアマリージェの屋敷の裏手、白い厳かな感じのする屋敷を訪れた。

なんだろうね、これは。
普通は好きな相手の家を訪れるというのはもっとこう……嬉しくてどきどきするものではなかろうか？　いや、うん――もういいよ、好きで。好きだよ。ああ、好きですよ。
絶対に言いませんが。
あたしは勇気を振り絞り、屋敷の正面玄関のノッカーへと手を伸ばそうとした。
途端、音もなく扉は開かれた。
「お待ちいたしておりました」
「っっっ」

丁寧に頭を下げる女性は――使用人の御仕着せを着用した女性だった。
背が高くてすらりとしていて、それでいて隙がない。きっちりと髪は結い上げられていて、一糸乱れてもいない。凛としたイメージのその人は、一片の笑みもなくただ静かに頭を垂れて身を引き、あたしを招き入れた。
「あ、あの……」
「主がお待ちです」
帰りたい――もうご領主さまには悪いですが、帰りたいですよ全力で。
ひたりと向けられるまなざしは冷たい。いや、冷たいのではない。無なのだ。あまりにも作り物めいた女性。
そのまま案内を受けて一つの部屋へと通される。
細かい彫刻の施された艶やかな扉を開き、奥へと示される。溜息を押し隠して入れば、それはそれは陽気な笑顔の魔術師が、両腕を広げた。
「リトル・リィ！　朝ぶりだねっ、会いたかったよ」
無駄にテンション高い……
だが今問題なのはそれではなくて、あたしは自分の体温があがるのをめちゃくちゃ感じていた。
「なにその格好！」
「普段着」
……おまえの普段着はあのイカレ魔術師ではなかったのか。
あたしは極普通の黒色のズボンに生成りのシャツ、ベストにリボンタイという格好に意表をつかれてしまった。
考えてみればあんな格好を四六時中しているなんて、職業的魔術師であろうとないだろう。
呆然と見つめるあたしは、次の瞬間ぐいっと抱き込まれていた。

「リトル・リィの匂い、懐かしい」
ぎゅうっと抱き込み、耳の後ろ辺りで囁く。ひぃっという悲鳴を飲み込みながら、あたしはその同じ部屋で普通に食事の用意をしている女性が気になって、気になって、気にしろぉぉぉっ。

「はなっ、せぇぇ」
「イイにおい、美味しそう」
それは絶対にパンの匂いですよ！
って、舐めるなぁっ。
力任せに相手の腹を押せば、やっと拘束が解かれた。
「リトル・リィってば相変わらず照れ屋さんでかわいいなぁ」
照れ屋とかそんな問題ではありません。
「人が見てるでしょっ！」
「見てなければいい？」
いやいやいやいや、そういう問題ではありませんよ。

「気にしないで、アレは空気みたいなものだよ」
「うるさい！　そもそも、招待状をマリーに持たせるなんて卑怯者！」
「どうして？　御友達なんでしょ？　頼んだだけだよ。マリー暇そうだったし」
領主の妹姫を捕まえ暇そうって……なんたる傍若無人。
「どうせ自分で持ってきても無視されると思ったんでしょう」
「思ってないよ？」
「……」
にっこりと、魔術師は小首をかしげて綺麗に微笑んだ。

「リドリーはぼくが好きだろう？」
魅惑的な笑みを湛えて、何気ない様子で自らの手を包む白手をする

りと抜き取る。
しなやかで神経質そうな指であたしの手を掬い取り、あたしの指の付け根のあたりを指先できゅっと押さえる。
なんということはない所作なのに、あたしは小さく悲鳴をあげてしまいそうな程の羞恥を覚えた。
ゆっくりと、一本ずつ丁寧に同じことを繰り返し、最期にその手をもちあげるようにして自らの口元に運び、あたしを見つめたままその指の付け根を軽く噛んだ。
「ね？」
「っっっ何が、ね、だっ」
あたしは慌てて自分の手を取り返した。
もういっそ心臓外して……

甘い吐息と怨嗟の呟き

血の気が下がる。
背筋があわ立つ。

頭が沸騰する！
あたしの反応をどうとったのか、魔術師はクスクスと笑いながら彼の奥――すでにセッティングの済まされたテーブルを示した。
「用意ができたみたい。食事にしよう？」
な、な、何事も無かったように言わないでよ。

動揺しているあたしがおかしいの？
あたしはその同じ部屋で静かに控えている御仕着せの女性を見てしまった。
――彼女は変わらず一片の感情も示さずに静かに控えていて、あたしが一人でこんなに動揺しているのがまるで莫迦みたいで、さらに体温が上がってしまう。
まるで何かの病のよう。
不安を覚えるあたしに、魔術師は笑みを湛えながら椅子を引いて微笑んだ。
「どうぞ？」

あああ、なんだろうこの恥ずかしさは。
あたしは乱暴に席の前にまわり、座るのにあわせて魔術師が椅子を整えてくれる。
「食事を楽しんで」
耳元で囁き、身を引く男に――泣きたいほど心の奥が跳ね上がる。

……素直になれないのは、この男のせいで、あたしのせいじゃない。

でも、それって――卑怯な言い訳？
「どうかした？」
「――ご招待、ありがとう」
あたしが精一杯気持ちを落ち着かせて言えば、反対側の席に座った魔術師はいつもどおりの綺麗な笑みで、
「なんならここに住む？」
などと余計なことを言うから、あたしはいつも通り、
「それはナイ」
つっけんどんに返せた。

用意された食事は、考える程に豪華なものでは無かった。
――野菜と肉とをトマトベースのソースで煮込んだもの、パンは表面がかりかりとしているのに中はもっちりとしたタイプで、マイラおばさんの焼くパンとはまた違う。魚のマリネや香草を使った焼き物。カボチャのグラタンに、サラダに……
「好きだよね？」
「――まえも思ったのだけどね」
「うん？」
「……あたしの好きなもの、良くご存知よね？」
思わず語尾がへん。
以前、ここで飲んだ紅茶に焼き菓子。どちらもあたしの好きなものだった。これを偶然と捉えるのは、むしろどうかと思う。
魔術師は笑みを絶やさずに言葉を綴る。
「リトル・リィのことなら何でも知ってるよ」

どこまで知っているのか問い詰めたい。物凄く。
尋ねたいが、尋ねるのがちょっとコワイ気がします。
そのコワサときたら、なんというか、はじめてのキスの日付まで知られてそうで怖い。

そういうコワサだ。怖すぎる。
あたしは口元が引きつるのを必死に宥め、せっせと食事をすませた。
なんでしょう、この早食い競争のノリは？
　あたしは現在好きな人と一緒に食事をしているはずだ、本来は。
なのに心は浮き立たず、できれば速攻で帰宅したいと望んでいる。

――好きじゃないんじゃないか、コレ？
勘違い？
絶対におかしい。
好きな相手といるというのにちっとも幸せな気持ちになれない。
好きって、どんな感情？
もっと幸せなものではなかったかしら？　マーヴェルと一緒にいたあたしは……辛かったわ。幸せではなかった。マーヴェルがいつもティナを気にしているように感じて、それでもムリしてあたしに対してくれているように感じて、とても辛かった。はじめての口付けだって嬉しかったけれど、マーヴェルも微笑んでくれたけれど、でもなんだか後ろめたかった気もする。
ちらりと魔術師をうかがってしまう。
穏やかな調子で食事をしてて、いつものアレな感じが潜めていると身構えてるこちらが莫迦みたい。

すき？
好きって……どんな感情？
好きって気持ちは、幸せとはイコールではないのか？
スキって、辛いの？　幸せではないの？
理解ではるのは一つだけ。自分の胸の内がざわめいて、落ち着かなくて、苦しい。

　ぐるぐると考えながら食事に専念するあたしの耳に、クスクスと笑みが届く。

ハッとして顔をあげれば、魔術師が――幸せそうにこちらを見ていた。
「美味しい？」
「……うん」
いや、実は味はそんなに判りません。
けれどそう言わせる何かがこの男にはあるのだった。
広い食堂にはあたしとアレと給仕の女性が一人。それ以外には人の気配が無くて、なんだか不思議な空間。
「おなか一杯になった？」
気づけば目の前に置かれているのはデザート。
こくこくとうなずく。
魔術師は食事の最中であるというのにおもむろに席を立ち、あたしの前へと来ると手を差し伸べた。
「デザートはあっちで食べようか」
示されたのは同じ室内にあるソファとテーブル。
あたしが返事をするより先に、魔術師はあたしの手を掬い取って導いた。
「夜の庭を眺めるのも悪くないよ」
……なんということでしょう。まともに見えます。
まるで普通の――ちょっと色気過多の、穏やかな青年に見える。
あたしの目に特殊な網膜でも張られているのだろうか？
あたし騙されてない？
結婚詐欺とか。

「どうかした？」
「……あたしのどこが好きなの？」
あたしは操られるようにその手に自分の手をのせ、立ち上がり窓辺へと向かいながら問いかけた。
かつりと音をさせて魔術師の足が止まる。
穏やかで優しいばかりの雰囲気は、あたしにとって馴染みのもので

はなくて戸惑うばかりだった。
……強引さは完全にナリを潜めていて、まるきり別人のようで不安さえ覚えてしまう。
魔術師はあたしを引き寄せて微笑んだ。
大事な宝物でも包むように閉じ込めて、耳元に唇を寄せてくる。
「知りたい？」
「……知りたい」
甘い、甘い何かを耳に注ぎ込まれるように甘い。
とろりとした粘着質な声音。ぞくぞくと背筋に何かが這い登り、自分の中で離れたほうがいいと警鐘が響くけれど、このまま全て身を委ねてしまいたい気持ちがあたしの行動を制御する。
――腰を抱く手が、背中をなぞる。
骨に沿うように、まるで形を確かめるように。
背骨をなぞり、肩甲骨を掠める。

耳たぶに触れる吐息が、吐息でなくなり熱へと変わる。
ほんの少し口に含まれて自分の中で甘いなにかに変化した時――ふいに魔術師の体重が重く自分の肩に掛かった。
「……っの、やろう」

は？

甘さの欠片もない呟きは怨嗟といっても過言ではない。
今、野郎とか言いました？　その口からそんな単語が出たりしました？
それまでの雰囲気を木端微塵に砕くその忌々しい呟きと体内の何かを吐き出すように深く長く息をつく魔術師。唖然とするあたしが口を開こうとしたその時、乱暴な足音が廊下を響き、部屋の二枚扉が押し広げられるように無遠慮に開いた。

「竜公！　竜珠が落ちたぞっ、どうなっているのか！　御身は！？」
「……」

突然現れたのは魔術師よりも幾分年上と思われる男性だった。
大仰なマントをした姿。腰には重そうな剣を携えた目つきの鋭い鼻の下に鬚を蓄えた男。
あたしは魔術師の腕の中で固まり、魔術師はあたしを強く抱きながら冷ややかに相手をねめつけた。
「――今、ものすっごい殺意を覚えてますが」
「……スミマセン」
「戻ったら反省文でも書かせますよ、本気で」
「いや、そんなことより」
相手の男は怯んだ様子を見せたが、すぐにふるりと一度首を振った。
「竜珠が」
「判ってます。あなたに判ることが私に判らないとでも？」
深くため息を吐き出し、魔術師は腕の中で硬直しているあたしを見下ろし、緊張を解くようにあたしの瞼に口付けた。
「戻ったら続きをしましょうね」
いや、いやいやいや？
「マリーをよこします。くつろいでいて。ちょっと出かけてきますから――」
「あ、あたし……かえ、る」
「居なかったら自宅に行っていい？　それよりはここで待っててくれたほうが嬉しいな。マリーだって喜ぶよ」
いや、あのですね？
耳たぶに唇が触れてますからね、辞めて欲しいです。
あたしを腕から解放した魔術師は不機嫌そうに足音をたてて出入り口へと向かいながら入ってきた男を呼びつけた。
「あなたも来なさい――」

「私もですか？」
「当然です」
冷ややかに言う魔術師の口調は――神官長の声音になっていた。
ばたばたと慌しく人が去る。あたしは呆気に取られてそれを見送り、どうして良いものかと部屋を見回して、
――部屋の隅で控えている女性と目があった。

物言わぬ冷たい美貌。
あたしは先ほどの魔術師とのあれこれを完璧見られていたことを思い出してかぁっと体温があがるのに、相手は何事も無かったかのように淡々と言った。
「デザートをどうぞ」
……恥ずかしいと思う自分が恥ずかしい？

魔術師の唇が触れていた耳が絶対に真っ赤になっていて、それが余計に恥ずかしくて、あたしはそこをつかむように隠しながら示されたソファに乱雑に座ってしまった。

それからふいに先ほどの男性が叫んだ単語が耳の中によみがえった。
――リュウコウ・リュウシュ……

リュウシュが落ちた、というならそれはモノっぽい。
リュウコウ……こっちは、
「竜……公？」
その意味を拾い上げた時、あたしは前のめりに倒れそうになった。

――聖都の守護、第五の公爵位。見えない盾……姿無い騎士。
「嘘だ……――嘘だと言って！」
あたしの血の気が一気に引いた。

甘い吐息と怨嗟の呟き（後書き）

へんなひとがへんじゃないとなんかへん……

竜公爵とお伽噺

「何を呻いていらっしゃるの？」
あたしの低い声に、応えた声――あたしは前のめりになっている体を引き起こし、挨拶さえも口にせずに問いかけた。
丁度入り口である二枚扉から現れた少女へと。
「マリー！　あの人が竜公なの！？」
咄嗟に出た言葉には配慮が足りない。
相手はお姫さまだというのに、敬語すら出ないほどあたしは動揺しまくっていた。
――魔法使いも尊い人も知らない。
けれど、竜公を知らない人間などこの大陸のどこにもいない。

「……あの方が自ら言うなんてことはありませんわね？　エルディバルト様ですか……ああ、色々お気の毒ですわ」
そっと吐息を落とし、アマリージェは苦笑した。
座ってよろしい？　とあたしに求め、あたしが返答するのをまって彼女はドレスをさばいて反対側のソファに腰をおろす。
ほんの少しだけ、彼女は面白がっているようにさえ見えた。
「竜公、って実在したの……？」
「まぁ、表に出ませんから。ただの牽制だとか御伽噺（おとぎばなし）だとか色々言われてますけれど――いるみたいですわね」
「みたいって……」
「それだってあの方に言わせればただの名誉職で終わりますから」

第五の公爵位――竜公はむしろ御旗だけの存在だ。
王城に掲げられている六つの御旗。竜に盾と剣とをモチーフにした旗の前に立つ人物はいない。その代替わりなどは公式に発表されるが、その姿を現すことは無い。

王座の周りに控える四公爵と同様に席が設けられてはいるものの、そこに姿を現すものはない。
だからこそ、ただの儀礼だと一般人は思っているのだ。
存在しない架空の公爵位。
子供達の間では様々な物語として伝わっている。
姿無き竜公に守られる王家。姿が無いのは代々醜い獣の姿であるからだとか、そもそも不可視の精霊なのだとか物語だけが伝わっているのだ。

「どうかなさって？」
「あんまり雲の上の話しすぎて、できることなら気を失ってしまいたい、です」
というか幕引きはいつかとか、夢はいつ覚めてくれるのかとか、すでにそういう次元だ。
「わたくしなどは物心ついた時にはあの方がいましたから、あなたの感覚はちょっと判らないですけれど」
アマリージェは言いながらもう一つ溜息を吐き出す。
「わたくしにとっても確かにあの方は偉すぎて雲の上の存在ですけれど、困ったことに実在していますし……実害もあります」
実害があるんですか。
ってか、どんな実害？
「それに、竜公は代々尊き人の役職ですから。わたくしにとっては疑問など沸きようも無いのですけれど」
「――」
「竜守りであるから、竜公なのですわ。竜公だから竜守りではありませんのよ？」

その違いが理解できないです、お姫様。
あたしは小刻みに震える自分を宥めて、引きつる頬を何とか引き締めて、アマリージェを見た。

「どうしてあの人、あたしなんでしょうね？
あたしは……一般人ですが」
何ゆえあたしをスキだとか言うの！？
ただの遊びですかっ。
遊戯ですか。そういうのは一切辞めて頂きたい。
あたしの引きつった表情に、アマリージェは瞳をまたたき小首をかしげた。
「あなたが今何を考えているか、駄々漏れですわ」
このお姫様ときたら時々言葉がとってもフランク。
どうやら下町言葉を面白がって使っていらっしゃる。
「――」
「身分なんて言わないほうがよろしいですわよ？　それこそ、あの方は身分などどうとでもしてしまいますもの。身分違いだと言った翌日にはあなたはわたくしより高みにいそうですわね？　あら、それは愉しいかも」
なーにーを言ってらっしゃいますかお姫様っ。

「9年です」
くすりとアマリージェは笑った。
「あの方があなたを想い続けた年月は9年ですわ。その間も、それ以前も、あの方があなたいがいの何かに執着したことはないそうですよ。良かったですね」
「良いんですか！」
「――よろしいんじゃないですか？　わたくしには手にできないものですもの」

静かな言葉とひたりと向けられた瞳。
あたしは息を飲み込んでお姫様を見つめた。
「欲しくてもわたくしには手にできないものですわ」
「マリー」

……アマリージェ様は、あの人が、好きなの？
あたしは心臓を？まれたような衝撃を受けた。
確かにそうなのではないかと考えたこともあるけれど、それを突きつけられるとずきりと何かが痛む。
目の前の愛らしい姫君が、どう見てもあの男と似合いのこの姫君が――

「あ、もう要りませんけどね？」

真面目な顔を破顔させ、お姫様はころころと笑い出した。
ずきりと痛めた胸が、ぴしりと音をさせる。
「諦めるとかそういうものではありませんよ？　なんと表現したらよろしいかしら。うんざり？　もうむしろ好きだったという感情がすでに汚点です。忘れて下さい」
「……」
「口をひらけばあなたのことばかり。口を閉ざして座っていれば誰よりも美しく高貴だというのに、口を開けばだらだらとあなたのことばかり！　年を経るごとにその病は進行なさいますし、いきなり妙な格好はなさいますし、知ってます？　うちの兄は一度石牢に三日程いれられたことがありますのよ。ああ、勿論知りませんわね。
理由は簡単ですのよ？　兄があなたを無礼だと言ったからです」
は？

「あの方、兄に飴を出してくださったそうなんですのよ。そうしましたら、兄が普通にお礼を言いました。あの方からの賜りものですから、礼節を守ってお礼を言いましたのよ？」
「はぁ」
「それに対してあの方、リトル・リィ……この名称は言ってはいけませんわね。リドリーは魔術師みたいだってもっと喜んでくれたの

に、とおっしゃったのです」
「……はぁ」
「その言葉を聞いて、兄は血相を変えて言ったのです。尊き人になんて無礼な！　道化のように言うなどっ」
アマリージェは愉しそうにその時のことを再現して話したが、あたしと彼女の間を一瞬シンっと静寂が満ちた。
「兄は三日の間石牢で過ごしました」
ころころと笑うが、
「笑えません……マリー。嘘ですよね？」
「嘘を言ってどうします？」
あたしは「ははは」と乾いた笑みを落とした。
……ごめんなさい。ごめんなさい。ご領主さまっ。
頭を抱えてうずくまってしまう。
あの優しそうなご領主さまになんてことをっ。
「大丈夫ですよ。あなたが絡まなければあの方は聖人君子――自分の一言で他人の人生を狂わせてはいけないとただ悠然と微笑だけを浮かべて時に身を任せていらした。本来でしたらとても素晴らしい方なのですから」
ああ、あなたが絡むと他人の人生など欠片ほども気にしませんけどね。
付け足される言葉がずんっとのしかかる。
……粉屋のペギーさんは現在御引越しの準備中です。なんだか慌しく……はい。
大きな街に行くそうです。良かったですね。
アレ以来トビーと顔は合わせてません。トビー……もしかしたらもう町にいないのかもしれません。
「なんていうか、生きててすみません」

低い呻き声が漏れてしまいます。

「やぁ、愉しそうに何の話しをしているんですか？」
軽くノックをし、開きっぱなしの二枚扉から姿を見せたご領主さまの姿にあたしは慄き、
「もう本当にすみませんっ」
と、ひたすら頭を下げてしまい、ご領主さまに更に「どうしたんですか！辞めて下さいっっ」と悲鳴をあげさせてしまった。

「あら、あなたって歩く有害」
アマリージェは実に愉しそうに呟いたが、あたしはちっとも笑えません。
聖人君子なあの男など知らない。
それとも……出会った当初、あたしが「スキ」だと言ったあの男はそういう人だったのだろうか。
あたしはちょっとばかり想像してみた。

お嫁さんにして欲しいと言った相手はとても素晴らしい人。
でも再会を果たした相手はアレだった……
記憶、なくなって良かったかも。
あれ、でも今こうしてアレな感じのあの男を好きって――あたし、趣味悪い？　あれ？
記憶があれば絶対にスキになったりしなかったかも？
でも記憶が無くてもスキで……

あああ、頭が煮えそう。

――竜公爵。

西方の守護者。醜い獣の姿を持ち人の前に現れない彼の人の物語は、数多伝えられている。
その物語はまさに統一性がなく、聖人君子とも、また……数多の命を喰らい、その引換えに王家に忠誠を誓っているとも言われる。
ただその全ての物語の中で、唯一統一されているのは――悪鬼にしろ聖人君子であろうとも、王家の守護であることに変わりは無い。
それは古から伝わり続ける御伽噺（おとぎばなし）。

竜公爵とお伽噺（後書き）

もっと早く竜公爵のお伽噺はどこかにいれたかったですが、あからさま過ぎていれられませんでしたーっっ。入れたらすぐにあのあんぽんたんだと判ってしまう。

反省文と眩暈

北の竜峰には竜が眠る。
幾百、幾万の人々を殺し、大地を山を焼き払い苦しめた悪しき竜。
それを捕らえ、封じ込めたのは一人の女だったという。

当時は幾人もの魔法使いが存在し、彼等は力を合わせて竜へと対した。
けれど彼等の大半はその時の戦いで失われた。
今や魔法使いは物語の中にしか存在しないとさえ言われているが実情は違う。
――魔法使いは存在している。
たった一人だけ。
その能力を代々に受け継ぎながら。

エルディバルトは白き支柱に身を預け、吐き出される息に喉を鳴らす。
体のどこかがきしむ気がするのは、幾つもの転移の門を通った為だ。
一度や二度であればともかく、幾度も通過するのであれば門番の守護が必要となる。
――だが、どうやら門番は機嫌をこねているのかエルディバルトへのそんな配慮をみせてはくれなかった。
体の痛みと共に彼の身を苛むのは寒さ、いや、冷たさだ。
場の空気がキシキシと全身を包み込む。
決して溶けることのない凍土は足元から冷たさをつたい上げ、体内の全てを攻撃してくるようにすら感じさせた。
「くそっ」
小さく舌打ちがもれた。

ここに自分がいる意味などもとより無い。
この場で自分に何ができるかと言えば、凍り果てることしかできないだろう。
だが何故だろう。あの方が機嫌を損ねるなどはじめて見た。いや……なんとなく理由が判る気がするが、自分の思考能力がそれを拒絶する。

ぶるぶると身が震え、溜息が零れた。
たとえこの地に眠る竜が目覚めたところで――腰に下げた剛剣が役立つとも思えない。元々こんなものは飾りでしかないのだが。
静謐（せいひつ）な空気を引き裂くように、ざりっとした音が氷と石とが混じるような床に降り立った。
冷気を巻き上げるようにして突如その空間を歪めておりたつ相手に、咄嗟に声をあげる。

「竜公っ」
慌てて体を起こせば、面前に降り立つ青年が黒色の髪を跳ね上げる。先ほどみせた冷たさなど忘れたかのように、そこにいるのはいつもの、彼の良く知る竜公爵――誰よりも穏やかで強く慈悲深い者。
「安心なさい、竜は変わらず眠っておいでだ」
「では何故……」
竜珠は王城の地下にある竜像の口の中にはめ込まれている。この峰から伸びる水脈に変化があるとそれは落下して異変を知らせるのだ。
今までにも幾度か竜珠が堕ちた――それは、それまでの竜公の死を知らしめたこともあれば、また地脈の変動を知らせることもある。
「誰かが竜峰に入り込んだようです。結界に触れた跡があります」
「こんな場所に？」
「竜こそが平和をもたらすなどと信じている輩（やから）もいる。ときおりこうやって竜峰の辺りが騒がしくなるものですよ」

柔らかく微笑み、青年は瞳を細めた。
「ここでどうにか竜を起こしたいと思うのでしょう」
「警備の強化を」
「およしなさい。そんなことでかりだされる兵士達が哀れだ」
こんな冷たく寂しい場に来るのは自分だけで十分だ。薄く笑う相手。
「しかし、竜公」
気色ばむエルディバルトに軽く手を払い、黒髪の青年は身を翻した。
「誰も近づけません――そんなことより私を殺したほうが確実だというのに、まったく莫迦な話しですね」
自嘲的に微笑む相手に慌てれば、更に穏やかな気配を向けられる。
「心配は要りません。まったく知らぬものに容易く差し出すような命は持ち合わせてはいませんよ」
「御身の警備を増やすことを許可下さい」
「私より強いものなどいないでしょうに。無駄なことに人手をさくのも愚かしい――それとも私を侮るつもりですか？」
「いいえ。そんなつもりはありません」
慌てて言えば、優しく微笑み返される。

「戻ります」
「このままで平気なのですか？　侵入者は」
「もう燃え尽きてますよ。
無理に入りこもうなどとするから……」
死んだものに対して悼むように言う相手に安堵する。
安堵と同時に嘆息も出た。
「誰も彼もに哀れを催していては、あなたの心痛ばかりが増す」
「――エルディバルト、私の心配は無用です」
言いながら転移の門を開く相手が、ふいに唇を引くような笑みを浮かべた。

「それよりも――反省文です」

「は？」
……確かそんなことを先ほどもいわれた。咄嗟に意味が判らなかったのだが。
そう、慌てていて忘れていた。

エルディバルトが竜公の館を訪れたおり、彼の人はその腕の中に一人の少女を抱いていた。
それだけでも驚愕で言葉を失ったというのに、その時の彼はいつもの彼とはまったく違かった。
――まるきり普通の青年のように。
「竜珠が落ちたことは問題ではない。私が生きている限り竜は目覚めない――私が腹をたてたのはおまえが転移門を通ってずかずかと現れたから」
しかも無遠慮に足音をたてて。
段々と言葉がいつものものとは変わる。穏やかな眼差しが少しばかり剣呑な色を浮かべ、その口元には決して見たこともないような皮肉気な笑みが浮かんでいた。

「せっかくいい雰囲気だったのに。リトル・リィだって絶対に僕を受け入れていたのに。反省文、ごめんなさいを千個程度じゃ納得いかない！」
「りゅ、竜公……あの、お加減が悪いのか？」
思わず心配になったエディバルトだが、相手は瞳を眇めた。
「加減じゃない、機嫌が悪いんだ。この莫迦」

――莫迦！
あの竜公が！　尊き人が、神官長がそんな言葉を口にするとはどんな異常事態だ。
心臓がばくばくと音をさせる。どんな悪い病気がその身を苛んでいるのかと心底心配になった程だが、相手の様子は変わらない。

「これでリトル・リィが帰ってしまっていたら末代まで祟る！」
「医者、医者をっ」
異常事態だ。
エルディバルトがおろおろと首をふり、相手の動きを止めようと手を伸ばす。
転移門を幾つもくぐりぬけ、竜公の屋敷にたち戻り――相手の足は先ほど彼がいた部屋へとさっさと向かってしまう。
王宮の医者を――まさか何かの呪いか？
「竜公っ」

焦るエルディバルトの先、竜公は開いたままの扉を入り――嬉しそうに「ただいまっ」と言うや、長椅子で歓談していた少女に抱きつき、
「ぎゃーっ」
と叫ばれていた。
「……」

「寂しかった？」
「寂しくないですっっ。離してっ」
「あああ、可愛いなぁもぉっ」

――自分の目は、その光景を認めたくないと訴えていた。
穏やかで麗しい尊き人が、まるで愚かな若造のように少女に抱きつき、嫌がられ、それでも構わず抱き込む。

竜珠が落ちた。

そんなことよりこちらのほうがむしろ大問題だった。
「なんだ……これは」
眩暈がした。

――何がおこってる？
早急に医者だ、医者を手配せねば。
エルディバルトは混乱していた。

デジャブとイタミ

しまった。
失敗した。
どうして戻って来る前に逃げ出してしまわなかったのか。
完全なる失態だ。

あたしは慌しく戻ってきたあげく、座っているあたしに突如として抱きついてきた変態、もとい――もうなんだか判らないアレを前に狼狽した。
すでにその地位は雲の上のはるか高みに押し上げられ、一般庶民の自分などが逆らえば簡単に処分でもされてしまいそうだ。いや、さすがに処分は無いけれど、石牢はどうも簡単に入れられてしまいそう。
だからといってぎゅうぎゅう抱きしめられたあげくに、首筋を吸われておとなしくしている乙女がいようか――イヤ、いまい。
だから咄嗟に殴ってしまったあたしは不可抗力。

「なっ、なんてことをっ」

魔術師の後について室内に入った騎士姿の人が咄嗟に声をあげるのに対し、慌てた様子でご領主さまが駆け出し、その肩を押し留めた。
「駄目です、駄目ですからね、エルディバルトさまっ」
「竜公になんたるっ」
その後に続くべき言葉を、必死にご領主さまが押し留める。
「駄目です！」
「いけませんわ、エルディバルト様」
アマリージェも言葉を添えるが、どこか面白がっているように見える。そう、これってアレだわ。

――先ほどアマリージェが話して聞かせてくれた【ご領主さま三日間石牢事件】に酷似している。

「うるさい」

ぎゅっと首筋にすがりついている魔術師が、ふいに低くうなり、振り返った。

「もう帰っていいよ？　ぼくはこれからリトル・リィとあんなことやこんなことをするんだから」

「しないわよっ」

「えっ、しようよ！っていうか、どんなことするか想像したの？　あれ、リトル・リィ、顔が赤いよ？　ねぇ、なにを想像したのかな？　教えて？」

耳元で囁かれ、泣きたい気持ちで必死にアマリージェを見たのだが、彼女は困ったように微笑んだ。

「ね、リドリー？」

低く囁かれる言葉に限界を感じた。

名前を、呼ぶなぁっ。

「竜公！　王宮に行きましょう。医師をっ」

は？

慌てたように声をあげる騎士の言葉に、はたりとあたしは動きを止めた。

「……具合悪いの？」

「誰が？」

「――あなたが？」

「さぁ？　僕は絶好調だけど。三日三晩寝ないで励める自信もありますっ。あ、でも自信だけで実際どうだろう。そんなことしたことないし。

駄目だった場合はリトル・リィが――」

普通殴りますよね？
もう無礼とかそういう問題でなく殴っていいと思います。もういい。私は悟りました。無礼とか相手がどうとかではなく、このイキモノは有害です。
やられる前にやれ――先人はきっと良い言葉を残しました。

「無礼者っ！　そこの女っ、竜公になんたる無礼をっ」

唾を跳ね飛ばす勢いで鬚の騎士が怒鳴り上げ、ご領主さまは真っ青に血の気を引かせ、アマリージェは口元を歪めて必死に笑いを堪えるように横を向いた。
「エル」
「竜公、ご無事かっ。お怪我は」
「判っていないね、エルディバルト。これは彼女の愛情表現なんだよ。おまえはもういいから下がりなさい。反省文はごめんなさいを五千個でいいから」
まてまて、何が愛情表現？
絶対に違います。
「とりあえず書く場所が欲しいなら地下に石牢があるから入っておく？　食事くらいはでるよ」
「……公？」
「いっておいで」
言葉と同時、信じられないことにご領主さまに腕を押さえられていた騎士の姿が――その場から綺麗に消え去った。
突然押さえていた存在を失ったご領主さまがバランスを崩してたたらを踏む。しんっとした静寂がその場に流れ、アマリージェが「ああ、お気の毒……」と小さく呟くまで、あたしの思考能力は動き出そうともしなかった。

「え、え、えええ？」

何か今、とてもサラっと流せないような事態がありましたよ。
何の脈略もなくその場から人が一人消えたというのに、アマリージェなどは吐息を落としただけだ。
「反省文が書けたら出してあげて」
「かしこまりました」
ご領主さまは一礼し、苦笑するようにあたしを見た。
「リドリーさま、愉しい歓談の時をありがとうございます。今宵はこれにて失礼させていただきますが、どうぞまたいつでも当家にいらして下さい」
えっと、えっとですね。
「ではお休みなさいリドリー、またパン屋に寄らせていただきますね」
ちょっと、
「マリーっ、あのっ」
「お休みマリー、ジェルド」

肩に、肩に背後霊が乗っています。
あたしはギギギっと顔をめぐらせ、ひきつきながらやっと口にした。
「じゃ、じゃああたしも帰ります、よ？」
「もう少しいいでしょう？　別に泊まっていってもいいよ？　ぼくの寝台大人が五人くらい使っても平気な広さだし、多少暴れたところでびくともしないから」
「結構です！　あのね、それにねっ、聞きいたいことがあるのっ」
あたしはぐいっと相手の体を押しながら訴えた。
「僕の応えられることであればどんなことでも」
「どうしてあたしなの！」
絶対におかしい。
ありえない。

「もしかして勘違いなんじゃない？　違うリィなんじゃないの？　あなたが、尊き人で竜公なあなたが、なんであたし？」

――だったらヤだ。

だって好きなの。

好きなんだもの。勘違いで好意を向けたりしないで。あたしを捕らえないで。あたし、あたし――あたしは！

両の腕を精一杯伸ばして相手との距離を作りながら、あたしはやっぱり……最低だった。

結局あたしはいつだって自分のことしか考えてない。

逃げたい。

逃げ出してしまいたい。

……一年前に逃げたように。

ふっと、魔術師は腕の力を抜いた。

「好きだよ、リトル・リィ」

「っっ――っ」

「リドリー・ナフサート――ぼくが何者かなんて関係ないよ？　今、目の前にいるぼくを見て？」

一歩開いた距離、その距離を無理に詰めたりしないで淡い笑みを浮かべ、すっと手を伸ばしてあたしの手首を捉える。

一旦持ち上げた手のひらにそっと唇を押し当てて、そのまま魔術師はあたしの手のひらを自分の胸へと押し当てた。

とくとくと心音が、熱が指先に触れる。

あたしは戸惑いながら相手を見上げた。

その柔らかな眼差しを。

愛されていると――勘違いする程の眼差しを。
「君が、君だけが……ぼくに言ってくれた」
「何を？」
問いかけに、ふっと皮肉に息をつく。
「ぼくの魔法はね、先天性のものじゃない。無理矢理に継げられたものなんだ」
真摯な眼差しを注ぎ込まれ、ゆっくりとした口調で告げられる言葉。
それはきっと、彼にとってとても――苦しい何かだった。
触れた胸から心音が伝わる。
とくとくと、とくとくと。
「ぼくの魔法はね――呪いなんだよ」
――呪いなんだ。
カチリと何かが動いた気がした。
どくりと心臓が音をさせる。
その心臓の鼓動が相手のものか、それとも自分のものであるのか。
あたしは息をつくのを忘れたように相手を見上げ、ふるりと首を振った。
つきつきと頭の内側が傷む。明滅を繰り返すように何かが頭をかすめては消えていく。
――病気じゃない。呪いだよ。
「オネエ、サン……」
「いや、だからぼく男だから」
思わず出てしまった言葉に面前の男は苦笑する。
この男は、確かあの時もそう言ったのだった。

あたしはすがるようにその胸に額を預け、痛む頭に意識を飛ばした。

――オネエサン。

ぱらぱらとめくられるページのように、幾つかの場面が脳裏を過ぎった。

激しい流れ、緩やかな会話。冷たい口調。

それらの全てを突然詰め込まれたような錯覚で、あたしは霞がかるような重たい頭をしてぼんやりと瞳を開けた。

――ああ、頭が痛くて、体も痛い。

自由にならないもどかしさで、ただぼんやりと瞼をあけたあたしはふと思考能力を停止させた。

「……」

なんだろうか、コレ。

面前にあるのは天井ではなくて、壁でもない。

身じろぎしようとすると、抑えられるように阻まれる。ゆるゆると鈍い思考回路がゆっくりと考えるという行動を示しだすのと同時、あたしはざっと血の気が引くのを感じた。

「ギ……っっっ」

ギッ、という音が奥歯の隙間からはみ出る。けれどその先は喉の奥が凍りついたように音を吐き出さなかった。

ただ口だけがぱくぱくと動く。瞳をめいっぱい見開き、自分の状況をやっと理解する。

男の腕の中だった。

しかも裸の！

温かな体温に抱き込まれて、二の腕を枕状態にして横たわっている

のだ！
ありえないっ。

声は出なかった。血の気が引いた為なのか、それとも恐怖の為にか喉の奥がからからで音を発することが咄嗟にできない。あたしはじたばたと暴れてそこから抜け出そうとするのに、あたしを抱え込んだ二本の腕はぎゅむっと強く更に抱き込んでくる。
「まだ早いよ」
頭の上からとろりと甘い声が囁き、あたしはやっと声を吐き出した。相手が誰だか理解するのは一拍だけおくれた。だが、こんなことをしでかすのは他にいない。
「このっ、変態！」
声は裏返ってしまった。
「ナニしてるのっ、どういう状況！　どうなってるのっ、なんであんたは服を着てないのっ」
あふりと間抜けに欠伸を噛み殺す音が届く。あたしは相手の顔も見れずにじたばたと暴れていた。
「リトル・リィの寝顔を観察中。時々クーっていうの、スゴイ可愛い。状況？　ここはぼくの寝台だね。君は気を失ったみたいだったから。服を着てないのはぼくの精一杯――せめて体温を近く感じたいじゃない」
意味判らないっ。
寝顔の観察？　かん……
あまりのことにざぁっと自らの中で何かが引く。血の気だけではない。
「リトル・リィは服を着てるから問題ないでしょ。本当は脱がせたかったけど、脱がすならやっぱりおきている時がいいよね。ゆっくり一枚づつ脱がしていろいろ反応を楽しみたいでしょ。
まだ夜明けまで少しあるよ――暴れないでいい子で寝なさい」
「できるかっ」

「あばれるとね、ぼくもあばれたくなっちゃう」
は？
「結構自制心もってやってるつもりなんだけどね。大好きなリトル・リィが腕の中で暴れているわけでしょ？　いろいろ当たるんだなー。そうすると、男としてちょっと困った事態に――」
だってほら、これで一応立派な成人男子なわけですしね？
ぴたりとあたしは止まった。
固まったと表現してもいい。だらだらと嫌な感じの汗が背中を伝いそうだった。
おとなしくなったあたしを抱え込み、クスリとヤツは小さく笑った。それが触れる場所から如実に振動して感じられて、あたしはくらくらした。
「どこが困るのか判る？」
「っっっ」
「ふふふ、イイコにしていてね。ぼくって紳士だけれど、リトル・リィに色々と、あんなことやこんなことをしたい気持ちはいつもアリマスよ？　舐めたりかじったり、あ、寝ている時はさすがにちゅーくらいしかしてないから安心してね？　でも可愛らしくシテって言ってくれたら、このまま――」
だめ、もう無理っ。
あたしは咄嗟に相手の顎にごんっと――それは容赦なく後頭部をぶち当てた。
さすがにこの攻撃は予想しなかったのだろう。ぐっと呻いて腕の力が抜ける。あたしは慌てて寝台から這い出て、這い出てっっ、この寝台莫迦みたいに広すぎるっ。
やっと床に降り立つと、びしりと指を突きつけた。
「一生寝てなさい！」
「ううう、愛がいたい……」
ばかげたことを言いながら上半身を起こした変質者は前髪をかきあ

げた。
それが窓から差し込む月明かりに照らし出され、あたしは心の中でうっと呻いてしまった。
均整の整った体は生々しく眼前に晒された。さらりと流れる髪は今は首筋から少し長い程度。あの髪は自由自在か。
柔らかな眼差しをこちらに流し、笑みを刻んでみせる。
「ねぇ、リトル・リィ」
思わず言葉を飲み込んでしまったあたしに切り込むように言った。
「思い出した？」
ずくりとそれは突きつけられた。
ぱらぱらと明滅した幾つかの景色。風景。情景。
広大で迷路のような庭。白い噴水。水の流れ、音。
そして……
「少し、だけ」
あたしは声が掠れるのを感じた。
喉がからからに渇いている。
面前の男はとろけそうな笑みであたしを見ていた。
とても、とてもうれしそうに。昨夜ちらりとみせた憂いなどもうその顔には見られない。
「あなたは――」
「うん？」
「あなた――」
あたしは何から告げようかと逡巡した。
おそらくあたしの記憶は一部だけ。ほんの一部だけ。幾つか覚えていない記憶が確かにある。
冷たいイメージと温かなイメージとが交差している。

この男は冷たく、鋭利で、そして次の瞬間にはあたしへと今と同じように特別な視線を向けてくる。だから、きっとこの記憶はどこか断片的で、全てを覚えているとはきっといえない。
　もともと子供の記憶だから。
でもあたしは――この男を知らないとはもういえなかった。
あたしは間違いなくこの男と出会っていた。それだけはもう否定できない。
この男が言うリトル・リィはあたし。それは間違えなくあたし。
それを嬉しいと思う反面――
あたしは口元が戦慄くのを必死に宥め、ギっと睨みつけた。

「八歳児にキスしたでしょう！」
「――」
「しかもっ、しかもっ、し、舌入れたでしょう！
この変態っっっっっ」

いやぁっ、変態です。
というか変態だとは知ってましたが。
それはもう駄目な感じの変態です。アレです。
もうどうしましょう。
あたしの記憶の中、鮮明に思いだしてしまった記憶の中で――それはそれはもういっそう色鮮やかに！
　この男ときたら八歳児を膝に抱き上げて！
しかも軽く触れるだけの口付けならば可愛げがあろうというのに、その口付けときたらっ。
いやぁっ、もしかしてコレってあたしの初キスですか？
マーヴェルとがはじめてだと思ってましたがっ、もしかしてっ、コレなんですか？
――この男はあたしの初キスの日付まで知ってるのですか！！！

「年齢なんて瑣末なことだよ？
だってぼくが好きなのはリトル・リィだもの。あの時のリトル・リィは本当に可愛かったよー。あ、もちろん今のリトル・リィも可愛いよ。小さなリスみたいで。それにあれだって随分と自制――」
黙りなさい！
あたしはギっとさらに力を込めた。眼力で殺せるものならやってやる。だが、それは穏やかで柔らかな眼差しに迎えられてしまう。

くぅぅぅっ。

「御邪魔さまでした！」
あたしは叩きつけるように言って身を翻した。
寝室の奥にある扉。
記憶が確かであればこの扉を開ければ――判っていたが、その扉を開けばそこはあたしのアパートの階段廊下。
一瞬脱力しそうになったが、自分を奮い起こす。
ここは二階で、あたしの部屋は三階です。
「リドリー」
ぞくりと背筋をなぞる声。

寝台の上でくすくすと笑いながら、アレは小首を傾けた。
「おやすみ」
「……おやすみなさい」
あたしは扉を閉ざし、まさに逃げさるように自分の部屋へと入り込んだのだった。

それまでの豪奢な部屋とはまるきり違う質素な小さなアパートの一室。冷たい空気。粗末な寝台に置かれたクッションをがばりと抱いて、あたしは自分の寝台にべたりと倒れた。
心臓がばくばくいっていた。

コワレそうなほど。
自分の体温があがる。
――あの男の体温とか、匂いとか……自分の体にまとわり付く気がしてふるりと身を震わせる。そんなことでそれが払拭などされないことは承知していたけれど。
「……っっ」

――覚えてる。
思い出してしまった。
あたし……

呼吸が途切れるように不自然に口の隙間から零れていく。
断片的な記憶。
生垣の迷路。
白い円形の噴水に座る純白の衣装の艶やかな黒髪の人。
女性だと思ったのだ。とても綺麗な女性だと思った。
花嫁さんかとすら思ったのだ。
迷い込んでしまった公園の奥深い場所にいるその人に、小さなあたしはどきどきしながら声を掛けた。
「あのね！」
凄く嬉しかった。

迷子だったから。
広大な敷地内であたしは迷っていた。
「こんにちは！」
元気に言ったらその人は静かに微笑んだ。
口元だけを引き上げて。

「消えなさい。死にたくなければ」

……衝撃的な言葉だった。
まったく意味の判らぬ言葉を吐き出し口の端に笑みを刻むその姿に、八つの子供は驚愕した。

あれ、聖人君子はどこ？
あたしはきつく眉根をひそめた。
心のどこかで思っていた。疑いながらもそれでもちらりと考えていた。
――子供の頃の幼いあたしが好きだと思ったのはきっと素晴らしい人だった……んじゃないのか？
いくらその記憶を紐解いてもまさぐってみても、やっぱり初対面の時の記憶はこれだった。
冷たいイメージ。
笑みは湛えていたけれど、冷たくて拒絶的。

迷子の心細さで近づいた子供に対し、その相手は鋭利な刃物のように「死」という言葉を叩き付けたのだ。

ｗｅｂ拍手お礼小話つめつめ（２）

「魔術師。今まで意地悪ばっかりしていたけれど……あたし、本当は――」
こくりと喉が上下する。
伏せた眼差しをそっとあげて、小首を心持ち傾けて、
「あなたのこと」
「リトル・リィ？」
「好きなの」
「ああ、なんて嬉しい日だろう！
もちろんぼくも大好きだよ。キミのことを心から愛してる。こうして心が通じ合ったのだから、ここは一つもっと嬉しい日にしよう」
がしりと両の肩をつかまれた。
有頂天になっている魔術師に、ふっと笑ってみせる。
「嘘に決まってるでしょ。
今日は四月一日、エイプリルフールよ。一年で一度だけ嘘をいくらでも言っていい日よ！」
「知らない」
「へ？」
「ぼくそんなの知らない。
だってぼくは神官長だもの。嘘なんていっちゃ駄目でしょ？
ってコトで、さぁ、リトル・リィ！ぼくとめくるめく愛の世界へ！」
「ちょっ、引っ張らないで」
「ふふふ、優しくするよぉ」
「はーなーしてぇぇっ」
「リトル・リィの照れ屋さんっ」
ちょっ、ホント離してっ。

４／１えいぷりるーる

＊＊＊

「あら、兄さまどうかなさったの？」
日当たりの良いテラスでぼぅっと北の霊峰を眺めている兄の姿に、アマリージェは小首をかしげた。
「うん……」
「兄さま？」
「エリザベートに振られてしまった」
……薄い笑みを浮かべる兄に、うっと言葉を詰まらせる。
「どうしてだろう？　プロポーズしようとすると途端に振られる」
「――」
「もう二十六だしね。本気で跡取りのことを考えなければいけないのに」
「……兄さまはとっても素敵よ、大丈夫。すぐに良い方が見つかるわ」
そうアマリージェは兄の背をとんとんっと叩いたが、脳裏によみがえる言葉をどうしても無視できなかった。

――へぇ、ぼくより先に結婚する気なんだ？

まさか……まさか、ねぇ？

＊＊＊

「もういい加減、諦めたどうだ」
低い声に、男はスケールを動かしながら笑う。
「なにを？」
勿論、相手の言わんとしていることなど理解している。
理解したくないだけだ。

「……これだけ探して見つからないんだ。それに……」
「たかがまだ一年じゃないか。見つける」
「おまえ――振られたんだって自覚しろよ。リドリーはオマエを捨てて逃げたんじゃないか」
呆れたような口調にももう慣れていた。
――花嫁に逃げられた男。
マーヴェルはそれも自覚している。
「ナフサートの家は、ティナでもいいって言って……」
「ふざけるな！　俺の妻はリドリーだ」
「――ティナとオマエが付き合っていたのなんて、皆知ってるじゃないか」
「知るか！　どいつもこいつも！　俺とティナが付き合ってる？　そんな事実は無い。俺が好きなのはリドリーだって言っても、どうして誰も信じないんだ！」
――リドリーが居なくなって呆然とするマーヴェルを更に追い込んだのは友人たちの言葉だった。
「まぁ、良かったじゃないか。おまえはティナが好きなんだろう？」
――そんな事実はありもしないのに。
誰も彼も判で押すようにそう言うのだ。
挙句、ナフサートの家からは「申し訳ないことをした。こんな恥知らずな真似をする娘だとは思わなかった。もし、もしよければティナを――」とまで言われた時、ぶちりと何かが切れた。

「港で見つけられないならば内陸だ。船長（ふなおさ）の息子だからって舐めるなよっ」
「……振られたんだって」
「うるさい！」

＊＊＊

「アマリージェさま、一人で歩き回ってるとあぶないぞ」
嘆息気味に言う青年は、腕を組んで眉を潜める。
「わたくしがわたくしの町でどんな危険があるというのです」
「まったくオンナってやつは」
「あなた、そうやってすぐに女を卑下なさるのはよくありませんわよ」
「ああそうですか」
容易くあしらわれてアマリージェは翡翠の瞳に強い意思を宿す。
「年下なのに生意気！」
「オレのほうが随分と背も高いですけどね、チビ姫さま」
「チビではありません！　あなたが無駄に大きいのですわ！」
わたくしを見下ろさないで下さいませっ。
アマリージュの剣幕に、やれやれと肩をすくめて青年は前髪をかきあげ、跪いた。
「なっ、何をなさってるの？」
「見下ろすなっていうからだろう」
「……そんな風にしろと言ってはおりません！」
「あああ、めんどうくせぇっ」
青年が言うや、乱暴な所作でアマリージェの腰を引き寄せる。ぐいっとだきあげて視線を合わせると、嘆息交じりに言った。
「ほら、これでいいか？」
にやりと笑う青年に、アマリージェは真っ赤になって身をふるわせた。
「生意気！」

まぁ、こんな未来も楽しいかもしれません？
相手は――……？

彼女の想いと彼の想い

――姉さんは、好きだった。
うちの家族は元々どこか壊れていた。
母さんは私を疎んじていた。父さんはあたしを腫れ物のように扱った。
使用人はただあたしの世話に明け暮れて、そして姉は――目をあけると覗き込み、冷たい手を額に当ててくれた。

だから自分が酷い人間なのは承知している。
姉さんの婚約者を――好きになるなんて、どうかしてる。
でも、知らなかったのよ。姉さんの為の人なんて。だってそんなの……ずっと昔から決められていたなんて、誰も言わなかったし、あの人も――マーヴェルも、あたしの病気が治ったら結婚してくれるって……言ってくれたの。

「大丈夫――ティナはちゃんと元気になれるよ」
そう言ってくれたのは姉だった。
あたしはずっと病気がちで、自分はあんまり長くないということも知っていた。そう親が願っているのも知っていたし……それはつまり、あたしは父さんの娘ではあったけれど、母さんの娘では無かったからで、要らない子というのは判っていた。
空気が――違うのよ。
父さんは寝込むあたしを心配しながら、それでもこのまま息耐えてしまっても構わないと思っていただろうし、母さんはあたしを視界にいれるのも嫌がった。
姉さんがあたしの枕元でイロイロ話しをしてくれるのを、母さんは良い顔しなかった――ある年なんて、姉さんだけを連れて聖都に長いこといってしまっていた。

聖都から戻った姉さんは、不思議な飴をくれた。
「すごーく、美味しい飴だよ。毎日一個づつ舐めるんだよ？
そしたら来年は一杯元気になれるんだから」
あたしが七つの頃――もう少しで八つになろうという時に戻った姉がくれた飴は、とろけるように甘くて、そして彼女の言葉の通り、あたしは十になる前にはそれまでの病気がちな体が嘘のように元気になっていた。
お医者様のクスリで完治したのではなくて――きっとあの飴が、私を治したのだと今でも信じている。
「あの飴は聖都で買ったの？」
いつだったか尋ねた時には、姉は不思議な顔をして「なんだっけ？覚えてないわ」と言っていたけれど、彼女にとってはさほど重要なことでは無かったのかもしれない。あたしにとっては、とてもとても、重要なことだったけれど。

元気になると人間はきっと欲深くなる。
姉が好きだし、そしてあの人も好き。
それはきっと両立しない想い。
大人になればいやでも理解できる。姉はあの人が好きで、あの人は姉が好き。それを認めたくないだけ。
――二人が一緒にいるのは、親が決めた婚約者だから。
そうやって自分が傷つかないようにする自分はきっととても自己中心的。
諦めなければいけなくて、諦め切れなくて……たった一度だけでいい、そう願った。

たった一度、あの人に触れられるなら。
きちんと諦めて二人のことを祝福しよう。

卑怯で矮小で、最低――あの人が姉に触れていないことも承知だった。

だって、随分と大事にしていることを……知っていたもの。

「あたしと結婚したほうがいいって、思いなおしてくれるかも」

うそぶいた。

――父がそんな結論を出さないことは承知しているのにね。

だって姉だから意味があるのだ。

あの母と父との間の娘。

父が事業をしていく上で、それはとても大事な布石。使用人に手を出してつくられたあたしとは違う。

冷え切った家庭だった。

姉は良く一人で泣いていた。冷たいこんな家だから――誰もが泣いていたんだろう。

「どうして！」

引き裂かれたウェディングドレスを前に、まったく理解できなかった。

結婚式は間近だった。

幸せそうな姉を毎日見てきた。

その姉が――ゆっくりと沈んでいくのを知ってはいたけれど、結婚すればきっと幸せになるんだろうと思っていた。

……あたしの裏切りなど気づいていないと思っていた。

あたしの気持ちも、あの人の気持ちも気づいてないなんて――馬鹿げた妄想だった。

血の気が一気に下がって、意味が判らなくて叫んだ。

たった一度だけで良かったのに。

諦めたのに。

どうして姉が消えてしまうの！

あたしはやっぱり自分勝手なのだろうけれど……本気だったの。
そこに嘘は無かった。姉の人だと知っていたもの。たった一度手に入れられれば、それだけで良かったのよ。

壊れた家は更に崩壊した。
マーヴェルはあたしと目を合わせない。何かの拍子であたしと目が合えば睨みつけ、怒鳴ろうと口を開きかける。
憤りがひしひしと体を苛む。
町の人たちの視線が生あたたかく向けられる。
嘲(あざけ)りながら「これで二人は一緒になれる」と嘯(うそぶ)くのだ。

自分の中の感情は怒りなのか悔しさなのか、罪悪感なのか判らない。
ただ姉を探さないといけないと思った——探して連れ戻して、あの人と一緒になってもらわないといけないと……ああ、違う。何故！
どうしてあの人を悲しませるの！
いいえいいえ、悪いのはあたしで！
あたしが姉を苦しめた！！！
どうしてあの人が冷たくあたしを見るの？　どうして！
姉さんのせい！　姉さんさえっ。
謝らなければ。
いいえ、いいえ！　あの人を苦しめた姉を責めたいの。
あの人を悲しませる姉をっ！
違うっ、あたしはっ。

見つけ出して、そして……

死んだなんてうそよ。
死なんて、死んで……——いや、いやよ……姉さん、
「リドリーっ」

頭の中がぼぅっとする。
霞がかかるように鈍痛が繰り返す。
記憶が曖昧で、何が真実で何が嘘なのかも判らない。

……ぎゅっと、手を握ってくれたリドリーのひんやりとして、でも優しい手を、離したのは――あたし。
「リドリィ……」

死んだなんて、悪い夢……悪い、夢よね？

＊＊＊

「戻ってから、あの調子なんだ」
呼び出されたナフサートの屋敷で、マーヴェルは覚めた眼差しでティナを眺めた。
寝台の上に座り、壁に向かいただ姉を呼ぶだけの娘。
この辺りで一番可愛いといわれた娘の面影は今は無い。こけた頬に、落ち窪んでしまった瞳は涙のせいだろう。時々ぶつぶつと何事かを呟いてはまた涙を零す。
「ティナを支えてやって欲しい」
「――ナフサートさん」
マーヴェルは深く息をつくと開かれていた扉を閉ざした。
「オレはリドリーを探すので忙しい。たとえリドリーの妹のことだとしてもオレには何もしてやれない」
「マーヴェルっ」
「オレはもう間違ったことなどしたくない！」
――たった一度。たった一度だけの過ちのはずだ。
何が悪かったかといえば、それだけで、だがそれが一番大きな罪で、溝を作った。

目立つ妹の後ろでいつだって物静かにしていた愛しい娘。
母親を気遣って、妹を気遣って、自分を押し殺して満足に笑いも怒りもしなかった。
自分が更に彼女を追い詰めたのだ。

理解している。
嫌われたのかもしれない。
呆れられたのかもしれない。
捨てられたのかもしれない。
――けれど、自分はしなければいけない。
彼女を見つけて、愛してると何度も告げて、過ちを認めて。

まずはそうしなければいけない。
他のことなど何もできない。してはいけないのだ。
許されるとは思っていない。
それでも――幾度でも頭を下げなければいけない。

たとえ、もうその心が閉ざされているのだとしても。
もう二度と間違った行動は取れない。
「リドリーの居場所、エレイズさんは知っているんじゃないんですか？」
ナフサートの家の独特な雰囲気が嫌いだった。
どこか刺々しいような。なんだか冷たい雰囲気。この辺りでは珍しい豪商でありながら、心はどこかすさむような寒々しさ。
　この屋敷の女主人が屋敷を離れたのは、リドリーが十のころ。
あやうくリドリーすら連れて行かれそうになった男主人は、慌ててリドリーの婚約を整えた。
――この男は長女を失う訳にはいかなかったのだ。
聖都に強いコネを持つ男爵家の娘を嫁にした男は、その血を失う訳にはいかなかった。たとえ妻を手放したとしても。

実際、今はがたがただろう。
　妻側の支援はいまや無いといってもいい。離婚という強硬手段にはでていないが、リドリーの結婚式の為に訪れていたエレイズ婦人は娘の姿が無いことに半狂乱になった。

エレイズのリドリーへの愛も、どこか偏ったものだ。
おそらく夫へと向けられないものが全て娘へと向かった。自分の身を不幸だと信じた女は、ただ盲目的に娘を愛し、最終的に手放したのはリドリーがティナを見捨てられなかったせいだ。
　ティナを、そして突然突きつけられた婚約者を。

壊れたこの家から彼女を救い出すまで数日だった。
あと数日で……――
彼女は消えてしまった。
「……幸せに、なれるかな」
抱きしめると体を強張らせて、少しだけ戸惑うように見上げてきた瞳。
「ティナは、エレイズに会いに行ったんだ」
苦いように言われた言葉に、マーヴェルは眉を潜めた。
「そこで冷たく扱われでもしたのだろう。かわいそうに」
父親の溜息に、マーヴェルは閉ざされた扉をちらりと見た。
「ああ、エレイズさんはティナを憎んでいるから」
ずばりとマーヴェルが言ったのは憎しみが腹をなぞるからに相違ない。男の鋭い視線が向けられたが、どう思われようと構わなかった。
今更だ。
「帰ります――」
ティナに何があったかなど感知する気も起きない。
だが、ふと何故いままでエレイズのことを考えなかったのだろうと首をかしげた。

いままでの捜索は港付近ばかりだった。
聖都を欠片も思わなかったのは不思議だ。あそこはリドリーの母方の親族がいる。母親だって暮らしているのだ。
普通の娘が母を頼っておかしいことは無い。
エレイズはアレ以来こちらに顔を出すことも無かったが、もしかしたらリドリーがいるのかもしれない。そうでなくともリドリーの情報が何かあるかもしれない。
「……内陸を考えないのは迂闊だよな」
――港ばかりを探したのは自分が船長（ふなおさ）の息子で探しやすかったせいもある。
そして、心の片隅で思っていた。

探しやすい場所にいて、今も見つけて欲しいと願ってくれているんじゃないかって。
求めたのはささやかな「幸せ」だった筈だ。
彼女だって多くを望んでいた訳じゃない。いつだって、そうだった。ささやかな幸せを築いていけると信じていた。
「……リドリー、今……幸せか？」
雨が降っていた。
傘を差し向けてくれるナフサートの屋敷の使用人に首を振って歩き出しながら、ぽつりと言葉がこぼれおちた。

見知らぬ誰かの隣で、その腕の中で、彼女は……笑っているのだろうか。
笑っていて欲しい。
笑って、幸せでいて欲しい。
そう思いながら辛くて涙が落ちた。
泣いたところでこの雨だ。誰も気づかない。
そう思えばその涙を放置できた。
――会って、謝って……本当は君が欲しい。

「オレ……最低だ」

幸せでいて欲しいと願いながら、今このときも一人で泣いていて欲しいと願ってる。

憎んでいてくれていい。むしろずっと憎んでいてくれればいい。

オレを忘れてしまわないで。

この手が届く、その日まで。

素直さと姫君の願い

「ん、んんん？」

あたしは結局朝までクッションを抱きしめて寝台の横の壁に背中を預けて考えていた。

記憶の断片は確かに自分の脳内で再生される。だが、その記憶はどこか曖昧すぎた。いってしまえば、余計なことは覚えているけれど、決定的な何かが足りない。

冷たい口調で言葉を落としたアレが、いつの間にか微笑を浮かべている。

これは絶対におかしい。怯えを覚えた子供が、男から菓子を受け取り愉しそうに笑っている。つまり、仲良くなる何かがあった筈だというのに、それを考えると頭の中身がずくずくと傷むし、顔をしかめるしかない。

考えれば考える程、思い出してはいけないことが思い出されてしまいそうで自分でもイヤになる。

というか、大事な部分はすっぱりと抜け落ちているというのに、絶対に忘れていたほうが良さそうな記憶は無意味に出てくる。

――あのね、約束の印にボタンを贈り合うの。

無邪気な子供は自分のシャツのボタンをせっせと引っ張った。けれどその衣装は普段着ではなくて聖都にいる間はいつだって愛らしいつくりの綺麗な衣装。ボタンだってたやすく取れてしまったりしない。

男が微苦笑を浮かべてそっと手を触れさせると、ぽろりとボタンは外れた。

「花嫁さんになったらかえしてね。大好きっ」

背を伸ばして慣れた様子で相手の口唇に音をたてて口付ける。

ぎゃぁぁぁぁぁぁぁっ。
大好きって。大好きって、大好きって何ですかっ。
迂闊にキスとかしてはいけません。口と口はそんなお安くしては駄目だったら。
ちょっとそこの子供！　そこに座りなさい。
勝手に何を約束しているの？　そんなあやしい人間と親しくしてはいけません。約束なんてもってのほかです。
　駄目ですってば。
あたしの卒倒など知らぬ様子で、記憶の欠片は次々に浮かんでは沈んでいく。
目の前でひょいっと出されるうさぎや子犬。
甘いお菓子に小さな子供は夢中だった。まるでお伽の国を訪れたように毎日が楽しい。黒髪の青年が見せてくれる不思議を楽しみ、笑い転げて、疲れればその膝で眠る。
　男の手が頭をなでてくれる。
……母以外の誰かがそんな風に接してくれたのははじめてだった。
　寝ぼけた子供がときおり「オネエサン？」と呟き、それに男は笑いながら否定する。

あたしはクッションを抱えて悶絶し。
ついでぱたりと寝台で倒れこんだ。
顔の筋肉がおかしい。ぴくぴく引きつる。
泣きたいのか笑いたいのか判らない。もうなんというか吐きそうなほど恥ずかしい。
両手でそっと頬に触れて、窓から差し込む朝日に目を眇めた。
あたしは数日の間あの男の元へと通った。
一日目に何か……約束をしたのだ。だから翌日もあの男の元へと行った。どんな約束だったろう。ただ、その時はまだあの男はあたしに対して冷たさばかりを向けていた。いつの間にか顔を合わせるの

が当然になって一日のたいはんをそうやって過ごして――

――ぼくの魔法は、呪いなんだ。

ツキンと痛む。

あたしは泣きたい気持ちになった。

霞かかる記憶の中、けれどその言葉は――あの男にとって随分と痛みを伴うことを、あたしは知っていた。

理由より先にそれは理解している。

あたしはわしゃわしゃと自分の髪をかき混ぜて、鳥の声と羽ばたきを耳にいれながらすくりと立ち上がった。

なぜ、あたしはこの記憶を失ったのだろう？

確かに初対面の記憶はあまり良いイメージではないけれど、けれど――失うには辛い記憶のはずだ。当時のことを思えば、それは幸せな記憶。泣いてばかりいたあたしにとって、生きていたうちに一番幸せであったのではないだろうか？

「頭でも打ち付けたかしら」

あたしは思わず自分の頭を撫でてみた。

なにかの本で読んだ覚えがある。強い衝撃があると記憶を失うのだと――強い衝撃。別れはもしかしたら小さな子供には衝撃だった？

そう考えてあたしは撫でた手をそのままに頭を抱えた。

もぅ、なんと言っていいのか判りません。リドリー・ナフサートがアレと別れるのが衝撃！　今、たった今物凄い衝撃を受けてますよ。

あたしは深く息をついた。

ほんの少し、ほんの少しだけ素直になろう。

あたしはあの男が好き。

もうなんか良く判らない男だけれど。でも――あたしはもうちょっと素直に……

あの男が好きといってくれる言葉を、素直に聞こう。

あたしは窓を開けて新鮮な空気を吸い込み、少し寝不足な顔を水で洗いあげて朝食をすませ、きっと今日は笑って「おはようっ」と自分から声をかけようと意気込んで自らの部屋を出て螺旋階段をおりた。

もう少し素直に。

もう少し仲良く。

あの人を一人にしていた自分の、せめてもの罪滅ぼしに。

しかし相手はあたしの思いを上回る――アレだった。

いつものように二階の部屋の扉前に差し掛かる。あたしの心臓がとくとく言う。

ちらりと視線がそのドアノブを見つめ、まるでそれを判っているように扉は開かれた。

――とくん。

あたしは自分の胸元を抑え、笑顔を作って、それで、

「リトル・リィ！　昨夜の君はとっても素敵だったよ」

「頭イカレてるんじゃないの!?」

「えええ？　すごく正常だけど……んじゃ、今日も美味しそうな匂い」

「余計な言葉は要らないのよ！」

なんでこう頭の悪いことばかり言うの。

あたしがせっかく素直に、素直に……

あたしはバスケットを抱きしめて一回深く酸素を吸った。

なんとなく頬があつくなる。

「おはよう」

「うん、おはよう」
「あのね――昨日はご馳走様でした」
「どういたしまして」

「お返しって訳じゃないけど、今日御昼過ぎにパン屋さんに来ない？　あの、マリーも来るんだけど。一緒に昼食を」
ホントウにお返しなんていうワケではありませんが。
「行く！　マリーも行くの？　マリーは別にいらないけれど」
ぱっとその表情が更に明るくなり、両手が伸びてあたしを抱きこもうとする。それを一歩よけて交わし、あたしは引きつる笑みをおしかくした。
「楽しみにしてるから」
「ぼくも楽しみだよ。ああ、凄く嬉しいよ。リトル・リィ」
浮かれているアレに見送られたあたしだが、ほんの少しだけ胃が痛む気がした。

凄く、凄く喜ばれてしまった。
いや、不遜な言い方かもしれないけれど、喜んでくれるだろうとは予想していた。
もしかしてあたしってかなり――傲慢かもしれない。
傲慢で底意地が悪いかも……あたしはぎゅっとバスケットを抱きしめた。
もしかして、幸せ――いや、もちろんなんか色々と問題がある気がするけれど、もしかして、ちょっとこういうのもシアワセって、思っていいかしら。

「仕事は手伝う！　判ってるよ！」
可愛らしい【うさぎのぱんや】の店の中、怒鳴りつける少年の言葉にあたしは爽やかな青空を一旦見上げて苦笑した。
――そう、アジス君の問題。

神官を目指したいという言葉に、あたしよりもむしろ気を配っていたのはアマリージェだった。
まぁ、あの兄君を見ていれば誰だって同じ危惧を思うのかもしれないけれど。
「神官なんて駄目です。どうにか諦めさせて下さい、リドリー」
アマリージェはあたしの手を握り締めて懇願した。
ふわふわの蜂蜜色の髪、翡翠の瞳。
薄桃色の唇の愛らしい姫君にそんなことをされれば――誰だってどんな願いだってかなえてしまいたくなる。
そういうものだろう。
あたしは妹に対しても甘い自覚があったが、アマリージェにもちょっと甘い気持ちになってしまう。
だって凄い可愛い。自分が男だったらほうってなどおけない。
――あれ、魔術師よりもアマリージェのほうが好きかも。
あたしは口元が緩むのを隠し、大きく息を吸い込んで馴染みの職場の扉を開いた。

砕けるものと新たな道

アジス君は手負いの獣のように神経をぴりぴりとさせていた。
若干十一歳という年齢とは思えない厳しい眼差し。
祖母にまで反対されたのだ。神官という職種を。
そしてまた、同じパン屋で働いているあたしに小言を言われるのではと思って瞳をきつくしている。

あたしは仕事をこなしながら、時々客の来ない時間にちらちらとアジス君の様子をうかがっていた。
「アジス君」
「……なんだよ」
「そこのトング、とってくれる？」
咄嗟に言われた意味が判らないというように瞳を瞬いて、それからアジス君は唇を尖らせた。
「聞かないのか？」
「なにを？」
「……神官のこと」
「やりたいならやればいいと思うよ？」
――嘘だけれど。
あたしは完全に反対です。いや、普通に神官になりたいというのであれば良いと思う。けれど、アレに仕えたいっていうのはまったくもって駄目だと思う。
何が駄目って、もう色々と駄目だ。その駄目っぷりは類を見ない。
注釈をつけると、これでもあたしは自分の好きな相手のことを言っています。本当です。
本当に好きなんですよ。人生投げていいですか？

アジス君の顔が嬉しそうにぱっと明るくなった。

それまでのきつい表情がやにわに解けて年齢相当の可愛らしい子供になる。
ちょっとどきりとさせられる表情だ――なんというか可愛い。
「リドリーは賛成してくれる気になったのか？」
いや、反対してます。
「尊き人って、そんなにスゴイ？」
「そりゃあスゴイよ。だって竜守なんだぞ？　竜が起きないように見守ることができるんだぞ。その為に一杯不思議なことができるんだ。尊き人は。北の竜峰の凍土をずっと凍らせているのも竜守の大事な仕事で、他の誰にも真似できないすごいことだろ？」
　怒涛の尊き人賛美は、だがどこか曖昧な単語で埋め尽くされていた。
お伽噺なのだ。この辺りで語られる――それはそれは微笑ましい。それだけ聞くと「ああ、竜公も尊き人もやっぱり一緒なのね」となんだか納得できた。どちらも古くからあるお伽噺。
――竜、なんて存在あたしは未だにあんまり信じていないのだけれど。

　お昼の混雑が終わり、休憩時間が近づく。これから一刻程、パン屋さんは休憩時間に入る。にこにこと機嫌を良くしたアジス君が店の入り口の開店の札をひっくり返し休憩中に切り替え、自分が食べる為のパンを物色していると、店のガラス・ベルが軽快な音をさせた。
「あ、もう休憩だよ」
とアジス君が言いかけた。
現れたのはあたしが招いた相手――アマリージェと、そしてその背後から魔術師姿のアレだった。
「やぁ、リトル・リィっ。御招きに甘えて来たよー」
ぽんっとパン屋という場所柄もわきまえずに帽子から色とりどりのリボンと花とを引き出した魔術師の姿に、アジス君は硬直した。

その口が呻くように「コーディ……ロイ？」と小さく動いたのだが、誰もそれに応えるものは無かった。
よし、いい登場の仕方だ。
あたしはにっこりと微笑んだ。

「いらっしゃい、コーディロイ」
あたしは言いなれない言葉で相手に言った。
けれど変態魔術師の姿をした男はその顔を途端に真面目なものへと切り替えて真摯にそっと首を振った。
「その言い方はしないで。君は――いつも通りでいいんだ。魔術師でも、魔法使いでも……そんな言葉は君から欲しくない」
ふいに寂しそうに言われ、あたしはどきりと心臓がはぜた。
その顔は傷ついた顔をしていたから。
「魔術師」
慌ててそう呼べば、途端に、魔術師はアジス君を視界にもいれずにぱっと両手をひろげてあたしを抱きしめにかかる。
普段通りの莫迦まるだしの所作に戻れば、あたしは安心して息をついた。真面目な顔など見せないで欲しい。辛そうな顔とかは駄目。
少なくとも今この時は。
力一杯抱きしめられていつも通り首筋に顔を埋められる。軽く唇で吸われる感触に小さく呻いたものの、今日のあたしはすでに色々と覚悟を決めていた。

そう――アジス君の憧れを木っ端微塵に打ち砕く覚悟を。

「すごく、すごく、すごーく嬉しい。
リトル・リィ。どうしよう、ぼく今日は興奮して眠れないかも。君に誘ってもらえるなんて、絶対もう色々と無理。我慢できない。というか我慢も限界。ぼくと一緒に寝ようよ？」
意味がまったく判りませんが、もういいです。

今日はその頭の悪い言葉の羅列は大歓迎。
あたしはちらりと固まっているアジス君を見て、それからその一歩後ろで笑いを堪えているお姫様を見た。
「マリー、外で食事にしましょうか？」
「ええ。チキンとか持ってまいりました」
そういいながら姫君はバスケットを掲げて見せてくれた。
あたしはべったり張り付いているソレを無視して、アジス君に微笑みかけた。
「アジス君も一緒に食べよう」
ほーら君の大好きな尊き人も一緒だよ？
にっこりと言いながら、自分でもちょっと――あたしってば鬼かもしれないと心の片隅で思っていた。

しかし、アジス君は男だった。
立ち直りが早かったのだ。
明らかに頭のおかしい憧れの人を前に、果敢に立ち直ってみせた。
あたしの匂いをかいだり、うっかりすると髪にキスしたりとやりたいほうだいな挙句、口からだらだらと流れる言葉はお子様に聞かせるのにはちょっともう――辞めろと云いたくなるような言葉の羅列。
アジス君は涙目になっておりましたが、彼の心はまだ健在であったようだ。

パン屋の裏手にある小さな庭。そこに敷物をひいてパンとアマリージェが持ってきてくれたチキンやサラダなどで昼食。その間もあたしが怒らないことをいいことにべたべたとしてくるアレへと向けて、アジス君はやがてゆっくりと言った。
「おれ、神官になりたいんです」
コレを見てもそういえるアジス君はやっぱり立派で、また頑固だった。アマリージェがふっとその瞳を暗くする。何事か口にしようと

したが、それよりも先に魔術師が口を開いた。
「神官はつまらないよ？」
「……」
「一般的な神官だと結婚とかできないし。キスもできないし、子供もつくれないし。あ、ぼくはね、平気。ぼくただの名誉職だからね。これからも一杯リトル・リィとキスするし、一杯舐めるし、かじるし、リトル・リィの匂いが僕の匂いになるまでしまくって子作りもする予定。でもぼく以外の神官は結構かわいそうだよ？　知ってる？　戒律がどうたらって訳からないこと言って神官見習いの男の子に手を出したり、えぐいよねぇ？」
　上機嫌の魔術師……
激しく殴りたい。もう、殴って黙らせてしまいたい。
「君は可愛いからちょっとあぶないと思うよ？　可愛くて頑固っぽそうな子はね、組み敷きたいって変態が結構いるからさ。ああ、変態は怖いから。ホントだよ？」
変態の分際で変態を非難した挙句に、トドメを刺した。
真っ青というよりも真っ白に成り果ててずんっと沈んだ少年に、アマリージェがフォローするように言葉をかけていた。
「神官などよりも、もっと別の……たとえば騎士を目指してはいかが？　あなた、手が大きいですし意思も強そうですもの。そういった方面が向いていそうですわよ」
「莫迦だろっ」
咄嗟に言ってしまってからアジス君はあわてて自分の口をふさいだ。
「いや、あ、すみません……」
「莫迦って、どういう意味です」
アマリージェが低く言う。
「あの、本当に失言でした」
アジス君がしどろもどろに口を押さえ込んだまま言う言葉を、アマリージェは冷ややかにねめつけた。
「どうしてわたくしが莫迦なのです」

「――騎士なんて、平民のオレがなれる訳ない」
苦しそうに言う少年の言葉に、アマリージェは思案するように見つめ、微笑んだ。
「愚かですわ」
「っっ」
「騎士を目指すつもりがあるのであれば、手はありますのよ？　神官を目指すよりもずっと現実的ですのに」
「なんっ」
「領主が認めれば良いだけです。従騎士の資格を貰い、騎士のもとで働き、学び、聖都で騎士を目指せばよろしいのですわ」
「簡単に言うなっ！」
その言い方に、あたしは気づいた。

アジス君はきっと騎士を夢見たことがある。
騎士といっても昔程厳格なものでは無い。なんといっても今は列車が走るような時代だ。だけれど騎士は憧れであることにかわりがない。
「えっと、もっと簡単にもなるよ？――ぼくの」
ひょいっと魔術師が口を挟もうとしたのを、アマリージェがぎっと睨みつけて留めた。
「黙ってなさい！」
「……はい」
うわっ、アマリージェ強い。
一瞬で魔術師を黙らせて、アマリージェはアジス君へと向いた。
「わたくしが兄に言っておきます。従騎士の更に見習いとして兄に仕える気はありますか？　やがては騎士となるために」
その言葉に、アジス君が唖然とアマリージェを見つめる。
「え、あの……」
「どうなさいます？」
「いいのか？　いや、いいんですか？」

「わざわざ言葉を直さなくてよろしいですわ。むしろ気持ちが悪い――」

アマリージェはすっと視線を逸らした。

「騎士なら、一代限りといえども立派な爵位ですわね。結婚もできますわよ？」

おそらくアジス君はそんなことは気にしないのだろうが、とりあえず神官の道は忘れたようだった。

「頼むっ」

勢い込む言葉に、アマリージェはそれは綺麗に微笑んだ。

「頼まれましたわ」

「あのね、リトル・リィ」

あたしの横で寄りかかるようにしてパンを食べていたアレは顔をしかめて言った。

「もしかしてぼくってばダシ？　なんか策略を色々と感じる」

「重いからそろそろどいてくれない？」

すでにあたしの素直さと忍耐は底をついてしまった。今日の許容量は終了。

離れて下さい切実に。

「やっぱりそうなんだ。ぼくを誘ってくれたのは純粋な好意じゃなかったんだ。リトル・リィってばぼくを騙したんだ」

いじける相手にあたしはそっと言った。

ほんの少しの同情を込めて。

「なんだかあたしもダシっぽいわ」

それでもってアジス君もダシ。

だって……こうやって寄り添って話しているのってちょっと、普通っぽくない？

なんて、なんて――うわっ、どうしよう恥ずかしいんですが！

「ヘンタイだと思うんです」
リドリーの台詞にアマリージェは微笑んだ。
「それはタイヘンですね」
「……言葉遊びじゃないですよ？　あの男のことです」
「あの方の悪口は掃いて捨てる程ありますけれどわたくしはいいませんよ？」
　アマリージェは微笑んで言う。
「たとえ有害だとか粗大ゴミだとかもういっそ消え去れとか思っておりましても、わたくしは言いませんわよ？」
　若干十四歳の愛らしい姫君を、リドリーはぎゅっと抱きしめた。
「マリー好き」
「まぁ、辞めて下さいませね？
あなたの好きは凶悪ですわ。実害がありすぎます」
「え？」
「呪われそうです」
……なんで？　え？　ひどくない？
「あなたへの悪口ではありませんわよ？　わたくしが知るなかで一番狭量で人間が小さくてどうしようもなくうざい方のことですけれど、それが誰かはあえて申し上げません」
――もしかしてアマリージェ様、イイ性格の持ち主ですか？

＊＊＊

「婚約？」
兄が示した絵姿を前に、アマリージェは冷ややかだった。
「そろそろマリーも婚約者がいていい頃だろう？」
「それでその方？」

「どうだろう？」
兄は嬉しそうだが、アマリージェは差し向けられた絵姿に冷めた眼差しを向けた。
「素敵な方だろう？」
「なんで写真ではありませんの？」
「――」
「最近では写真も流行ですのよ？　そんな時代にわざわざ絵姿？　どれくらい修正なさっているの？」
辛らつに言う妹に、兄は引きつる。
「不可、ですわ」
「……うん、判った。でもね、家柄もいいし……悪い方ではないんだよ」
「家柄などどうでも良いのですよ！」
アマリージェは冷ややかに兄を見た。
「結婚相手に求めるのは顔よ。顔のよさ！！」
酷いことをきっぱりと言い切る。
「兄さまやあの方のような顔を身近で見ていたら美的感覚が狂うのよ！
わたくしが結婚できないとしたら、兄さまやあの方のせいですからね」
「――私のせいじゃないよ……それ」
「とりあえずこの方は却下。おといきやがれですわよ」
この金髪碧眼の王子様のような兄と、女性のように美しいあのぼけなす様を見て育ったアマリージェ様は――激しく面食い……です。

＊＊＊

「気づいたことがあるのですよ、マリー」
あたしは焼きあがったビスケットを袋に詰めながら、何故か手伝ってくれているアマリージェに言った。

「尊き人がおかしなことでしたらわたくしも気づいてますわよ？」
「じゃ、なくて」
あたしは脱力してしまう。
「マリーって、実はもっと幼い口調でも喋りますよね？」
なんだかとても大人びて喋っているようなのだが、実は彼女はアレや兄君の前ではもう少し砕けた口調になる。
年相応というか、子供っぽいというか。
たとえば、アレに対して「もうすこし大人しくしたらどうなの！」とか「少しは黙ったら？」などと乱暴な口も利くのだ。平気で怒ったりしたこともある。
「そういうこともございます」
「どうしてあたしにはいつも敬語なんです？」
あたしが首をかしげるとアマリージェはそれはそれは綺麗な笑みを浮かべた。

「一番危険だからですわ」
「……はい？」
「あの方は自分に対して乱暴に話されても気になさらないけれど、あなたに対して乱暴な口をきいたり無礼な口を利いたら何をしでかすか知れませんもの。
物凄い気を使っておりますのよ、わたくし」
「えっ……と」
「ああ心配なさらないで、あなたのことを嫌いじゃありませんわよ？　むしろ好きです」
「――いつもなんだかスイマセン」
「言葉の練習と思ってますから気になさらないで」

アマリージェ、リドリーに対してめちゃくちゃ気を使ってるようです。
ちなみに兄君はできるかぎりリドリーには近づきません！

＊＊＊

「おや、引越しなさるのかい？」

【うさぎのぱんや】の女主人マイラは眉を潜めて言った。

「はい、急な話なのですけれど、聖都の近くにあるもう少し大きな街のほうに。

トビーはもうあちらにいって準備をしてるんですよ」

トビーの姉であるセリナの言葉に、マイラは嘆息した。

「粉屋がいなくなるんじゃうちの商売はどうなるんだい」

「粉の卸業はまた別の方がいらっしゃいますから。安心して下さい」

「そうかい……でも本当に急だねぇ」

「コーディロイが口ぞえしてくださったんですよ。もう少し大きな街でやってみないかって。

父もここは長いから随分と迷ったんですけれど、父なら大きな街でもできるって、

がんばってみなさいって説得されて」

「おや、そうなのかい？」

「はい。本当に優しくて素晴らしい方ですね」

にっこりと笑ってセリナは言うのだが――

実は彼女も酷い目にあいそうだったこととか、その大きな街での事業をする為に裏で駆けずり回ったのは、

ご領主さまだったとかいう話しは――まったく彼女は知らないのだった。

……ご領主様はそのうち神経性胃炎とかで倒れそうですが、きっとその時は尊き人が治してくれるよ、良かったね！

＊＊＊

「意地っ張り」
「外面大王」
「頑固者」
「性格ブス」
――あたしは焼き釜から出てきたパンの焼き具合を確かめながら苦笑した。
「なんだいあれは？」
マイラおばさんが呆れたように眉を潜める。
「止めたほうがいいかねぇ？」
オロオロと祖母の顔で店舗を覗き込もうとするマイラおばさんを留めて、あたしは肩をすくめて見せた。
「仲がいいんですよ」
「仲って……喧嘩してるように見えるけど」
「仲良しですよー」

「生意気ですわよ！」
「パン屋の店舗内でさわぐなよ。汚い」
「きたっ、わたくしのどこが汚いのです」
「唾が飛ぶだろう。まったくそんなことも判らないのか」

おそらくきっと、すごい仲良し。
微笑ましい気持ちであたしは眺めているのだが、
それと同じように自分と魔術師を町の人が眺めていることには気づいていなかった。

かわいいメイドと檻の人

町のパン屋さん、【うさぎのぱんや】の裏手、庭にテーブルと椅子とを出して騎士になる為の勉強に励むアジス君の姿は、最近では見慣れたものになった。

その前で「愚かですわ」と教鞭をとるアマリージェの姿も。

「なんていうか、申し訳ない気がするんだけどねぇ」

マイラ小母さんははじめこそおろおろとしていたものだが、そのうちに慣れたのか諦めたのか、最近ではあまり気にしなくなったようだ。

「って、お前だって間違ってるじゃないか。偉そうにすんな」

「わたくしのどこが愚かなのです！」

……あれは果たして勉強なのだろうか。時々心配になりますが、まぁ、ほほえましいといえばほほえましいのでほうっておくことにしています。

アジス君は十二歳になったら領主の城館にあがることに決まった。

それまでは色々と勉強をしなさいと言われたようで、今の彼の崇拝の対象は御領主さまになっている。彼は結構思い込みが激しいのかもしれません。

アレの姿を見ると引きつるようになりました。

――なんだかごめんなさい。

カランっというガラスベルの音に、あたしは店舗にお客が来たことに気づいて店舗のほうへと顔を出した。

「いらっしゃいませ」

「こんにちは」

にっこりと微笑んだ女性を前に、あたしは――引いた。

白のレース付きのシャツに黒いふんわりと広がるスカート。その上

につけられた真っ白いレースのエプロン。頭にはヘッドドレスという、いわゆるメイドさんの姿のお嬢さんは、にこにこと小首をかしげた。

「パンをくださいな」

「えっと……どうぞ？」

あたしは並んでいるパンを示す。

けれど彼女は並ぶパンを一度眺めて、小首をかしげ、

「パンをくださいな」

とまた言った。

「……」

あたしはしばらく考えてカウンターを出て彼女にトレーとトングとを渡し、

「好きなパンをトレーにのせて、カウンターで精算します」

で、いいか？　理解してくれましたでしょうか？　あたしどきどきしてしまいました。なんと表現したらよいでしょう。未知との遭遇？　会話は通じるかしら？

かわいいメイドさんは持たされたトングとトレーとをじっと見つめ、

「判りました！」

と、まるで戦場に挑むかのようにくるりとパンに向き直った。

かわいらしいのですが、なんだろうコレ？

「ここのパンが美味しいと教えてもらったのです。でもいろいろあってどれがいいかわからないわー」

「えっと、こちらのパンは比較的甘いんですが、こっちは」

あたしがひとつづつ説明すると、メイドさんは熱心にそれを聴いて、にっこりと言った。

「エディ様はあまーいのがお好きですから、あまーいのがよろしいですわぁ。常々昆虫かしらって私思ってるのよぉ」

ふふふ、と幸せそうに彼女は言う。

「ご主人さまですか？」

あたしに話しかけられていると理解し、そう返すと彼女は実に幸せ

そうに微笑んだ。
「そうです。エディ様はぁ、ルティの旦那様なのですよぉ。とっても素敵なのです。今は猛獣みたいでとってもかわいいの」
……昆虫だとか猛獣だとか、ある意味すごい単語が飛んでますよ。
「檻の中でうろうろしている姿がもぉ最高にかわいいっ」
「檻……？」
あたしは呆気にとられてしまった。なんだろう、関わってはいけないひとなのかしら、この人は。檻って、どんな……ふと、あたしはぴたりと動きをとめた。
「どうかなさって？」
「えっと……あの」
「はい？」
「旦那様のお名前は？」
「エディ様ですぅ」
「……もしかして、エルディバルトさま、とおっしゃる？」
「まぁ、ご存知ですか？　だめですよお、エディさまはルティのですからあげません」
いや、いりません。
あたしは彼女を放置し、裏手の扉を開いてそこで勉強といいながら舌戦を繰り広げているアマリージェへと叫んだ。

「マリー！」
「もうお昼ですの？」
「違います。マリー、あのっ、もしかしてあのエルディバルト様って、もしかして、まだっ」
あたしは自分の血の気が引くのを感じた。
しっかりと忘れていたが、確かアレに命じられて地下牢に入れられた人がいたではないか。
「ああ、まだ地下牢にいらっしゃいますけど」
いやぁぁぁぁっ。

「あたしアレのとこ行ってきます！」
アレという単語にアジス君がびくりと反応する。その反応にかぶせるように、アジス君に自分のエプロンを預けた。
「アジス君。お店おねがい」
「お、おぅ？」
「今店内にかわいいメイドさんがいるから」
その言葉にアマリージェが瞳を瞬いた。

こんなに走ったのは久しぶり。
あたしは中央広場を抜けて細い街道を走り、丘の上にある城館を左手に見てその裏手にある白い館までたどりついたころには心臓を吐き出してしまいたい程気持ち悪くなった。
ううう、心臓でる。むしろ吐き出したらすっきりしそう。
こんなにアクティブに自分が動けるとはちっとも思っておりませんでした。
「お水飲む？」
すいっと差し出されたグラスを受け取り、あたしはそれを一気に飲み込み「ぷはーっ」と勢いよく息をついた。
「もう一杯！」
元気よく言えば、空になったグラスの中身がとたんに満ちた。
「……」
あああ、まだ慣れない。慣れません。魔法。
というか、あたしはちらりとそこで微笑んでいる男の姿に「うっ」と呻いた。

「落ち着いた？」
「まぁ、うん。ありがとう」
手の中のグラスが霧散する。とたん、神官服だというのに、アレはぎゅむりと両手を伸ばしてあたしを抱きこんだ。
「あああ、ぼくに会いに来てくれたんだね。ハニーっ」

「ちがぁうっ」
「えええ、違うの？　違うの？」
「あたしはエルディバルト様にっ」
「エルディバルトに？」
耳をなぞるその音に、あたしはびくんと反応した。今、今明らかに声のトーン落としましたね。何か不快な気持ちになってますね！
「いや、ちがくて」
冷静に、冷静に、あたしは一生懸命言葉を捜した。
言葉は選べとアマリージェにきつく言われている。

「あのですね、あなたに会いに来たで正解です」
白旗。
はたはたと心の中ではためく旗をイメージすれば、がばりと魔術師はいったん体を引き剥がし、ついであたしの瞳をじっと覗き込んだ。
「したくなった？」
「違うわよっ」
「ぼくはいつだってしたいのに。リトル・リィの首筋にゆっくりと舌を這わせてその甘い香りの正体をじっくりと確かめたいよ。今の君はきっとほんの少し塩気が――」

腹部の一撃は手馴れたものですよ、ええ、本当にね！
ぱんぱんっと両手を打ち鳴らし、あたしはうずくまっている男に言った。
「エルディバルト様、まだ地下牢にいるんですって！？」
「だってまだ反省文が書けてないんだよ」
「もう十日近いじゃないのっ」
十日ですよ、十日！　御領主さまだって三日だったというのにっ。
「あの子ってば不器用だよねぇ」
そういう問題かっ。
「大丈夫、大丈夫。ルティアが面倒みてるし」

その名前は先ほど遭遇したメイドさんだ。

あたしは額に手を当てた。

「とにかくっ、もう出してあげてよっ」

「だから、反省文まだ書けてないんだ」

「魔術師っ」

くすりと微笑み、魔術師は小首をかしげた。

「リトル・リィからキスしてくれたら、出してあげてもいいよ？」

にんまりと口角をあげた唇を、あたしは凝視して自分の体温があがるのを感じた。

自分から……

なに、なに、これは何の罠？

言っておくけどしたくない訳じゃありません。いろいろ興味はあるお年頃なんですっ。

それに、相手は好きな人な訳だし。

ただ、ただ勇気がっ。

あうあうと口が開いたり閉じたりを繰り返す。

あたしは勇気をふるいおこし、よろよろと手を伸ばして魔術師の胸元に手を当てた。上目遣いで相手の唇を確かめて、ぎゅっと魔術師の神官服を掴んだあたしの前で、アレはのたもうた。

「なんかむかつく！」

低く唇の間から言葉を漏らし、アレはあたしの腕を掴んで館への道を歩き始めた。

えええええ？

ちょっと！

あたしのこの勇気と期待をどうしてくれんの！？

絶対に自分からキスしない！
あたしはもう胸に刻んだ。精一杯勇気を搾り出したというのに。絞り袋の中に残ったカスのような勇気を、端っこから寄せて寄せて一生懸命搾り出そうとしたのに！
しかもどうして逆に怒っているのよ。

あたしはわなわなと全身が震える程の思いにとらわれてしまった。いや、もう率先してしたかった訳じゃありませんよ。したくなかった訳じゃないけど！
「離してよっ、痛いっ、どこに行くのっ」
あたしは乱暴に掴まれたまま引っ張られることにも憤りを覚え、怒鳴るように言った。
明らかに怒りを撒き散らして引っ張られる屈辱。そもそも何をそんなに怒ることがあるのだろう。まったくあたしには理解できません。
この男の思考回路を理解しろというのが間違っているのかもしれないけれど。

白い館の庭を横切り、裏手のサロンからそのまま屋敷の中に入ろうとする男の足がぴたりと止まり、不機嫌そうに眉をひそめてあたしを振り返った。
「どこって、エルディバルトに会いに来たんだろう」
「――」
ざぁぁぁっと、あたしの中で血の気が引いた。
血の気があんまり引きすぎてくらりときてしまう。あたしは完全に体の力がおかしな方向にいってしまい、へたりとその場にへたりこんでしまった。

「リトル・リィ？」
「……忘れてた」
「は？――」
片方の手を掴まれたままの現状、あたしはしゃがみ込みついでにもう片方の手で頭を抱えながら本気で青ざめていた。
「その人のこと、いま、完全に忘れてた」

あたしってば何でキスしようとしていたのか忘れてましたよ！
ひぃぃ、そうです。あたしが自らキスすることによってエルディバルトさんを解放しようという当初の話を完全に脳裏から引き剥がし、キスをするという行為しか頭に無かった！
なにそれ、なにそれ、なーにーそーれー！
いやぁ、あたしばか！　恥ずかしい。
「それってさ」
あたしが青くなったり赤くなったりしている頭上、静かな問いかけが降り注ぐ。

「キスのことだけ、考えてたの？」
「判ってるなら聞かないでよ！」
って、何を力いっぱい言ってるのあたしはっ。
「ぼくのことだけ、考えてた？」
殴るっ。殴ってやるっ。
あたしが顔をあげると、膝を地面につけて覗き込む魔術師の顔がそこにあった。
小首をかしげるようにふわりと微笑み、手首を掴んだままゆっくりと身を寄せてくる。
けれどその顔は、頭ひとつぶんだけ残してとまった。
「リドリー？」

柔らかな言葉に、あたしは身を震わせてその唇を見つめて――そろりそろりと、触れれば火傷するのを恐れるように用心深く、そっと、そっと……

こくりと喉が自然と上下する。

わずかに瞳を開いて、相手の唇だけ意識して。そっと、触れた。

する必要なんて当然なくて、でも、あたしは――

唇の表面がわずかに触れるだけの口付け。

ただ触れ合わせただけの口付け。

全身を貫いたその感覚は、喜びだった。

面前の男も同じ気持ちを今、抱いてくれて――

「いまどき十歳の子供でももっと濃厚ですよー？」

真横にしゃがみこんでメイドさんが自分の頬に手を当ててキスシーンをのぞいていた場合、人間はいったいどんな反応をするか？

心臓止まります！

少なくともあたしの心臓は一瞬確実に止まり、のけぞった。もともとへたりこんでいたあたしの体は後方に尻餅をつき、けれど魔術師は平然としたまま、

「ぼくのリトル・リィは可愛いだろう？」

と言いながらあたしを引き起こし、その腕の中に収めた。

再始動をはじめた心臓がばくばくと激しく脈打つ。あたしは魔術師の腕の中だというのに逃げることもできずにただただ酸素を求めた。

がんばれ心臓っ。この程度で負けてどうするっ。

「ルティのエディ様のほうが可愛いですわよー」

「あれのどこを見て可愛いと言い張るのか僕にはまったく理解でき

ないよ、ルティア。君って目が悪いのではないかな」
「あら、竜公こそ目が腐ってらっしゃるわー。あんなに愛くるしい方はいませんわよぉ。今だって泣きながら反省文を書いてるのを見ると、もぉものすごくおばかで愛らしいと思いません？」
「ああ、そのエルディバルトはもう牢から出していいよ」
魔術師はあっさりと言った。
「まぁ、まだ反省文は書きあがってませんのにー？」
どこか間延びした口調で言うメイドさんに、魔術師はふふふっと微笑んだ。
「世の中には恩赦というものがあるんだよ、ルティア。よいことがあると寛大な心でもって罪人を免罪してやるんだ」
罪人……いや、彼はそこまで悪いことをしていないと思いますよ。あたしはやっと心音が通常業務をしだしてくれ、なんとかふぅっと大きく息をつけた。男の腕の中だというのに落ち着くというのもいかがなものかと思うが、その前の衝撃があまりにもでかすぎです。
恥ずかしい！
「ではあと三日くらいしたら出してあげますわー」
間延びした口調のメイドさんは肩をすくめて言った。

「え？」
その内容にあたしは唖然と呟いた。
あたしの口からもれ出た言葉に、メイドさんの視線がやっとあたしを見る。小首をかしげてしげしげと見つめられ、ついで彼女は微笑んだ。
「パン屋さんではありませんかー」
「……はい」
「先ほどは親切にしていただいてありがとうございましたわー。あの後可愛い少年とも出会えました。パンを買うのに金貨は駄目だといっぱい怒ってました」
それは……おつりがありません。

パン屋の商品すべて買って、さらに粉まで買っていただいたところでおつりがありません。
「あの子可愛いですわよねー」
はい。彼はとても可愛いです。でも中身はとっても男前。
「でもマリーがいましたからパンを買ってもらえましたのー。今からエディ様の餌付けに行きますのよ。いらっしゃる？　もう猛獣って感じでとても楽しいですわよー。ああ、でも勿論エディ様はルティのですからあげませんわよー？」
餌付け、猛獣……
自分のご主人に対してものすごいなぁ、このメイドさん。
いやいや、それより。
「出してさしあげないんですか？」
出してあげてよいと言われたのに？
「だって、せっかく面白いんですもの。あと二・三日じっくり楽しみたいのですわー」
「……ご主人さま、嫌いなんですか？」
実は牢に入っている姿を見て溜飲を下げている？　なんかそんな感じはあったけれど、ものすっごく横柄でイヤな感じのご主人様とか？
あれ、でもなんだかご主人様のことを自分のものだと激しく主張もしているのに。
あたしはあの日見た騎士を思い浮かべた。確かにそんなイメージはある。
十日近く前のイメージなのであまりはっきりとしませんが。
「あら、そんなことはありませんわー。ルティはエディ様大好きですものー」
「あまり深く考えないほうがいいよ、リトル・リィ」
魔術師は苦笑をこらえるようにして囁いた。
「それに、ルティアはこんな格好しているけどエルディバルトの婚

約者で、メイドさんじゃないから」
「は？」
「そうですよー。ルティはエルディバルト様の婚約者ですの。未来の妻です。ふふ。旦那様って呼ぶの素敵ですわよねー」
「どうしてそんな格好してるんですか」
思わず素で尋ねてしまったのは仕方ないだろう。
可愛いメイドさんはふふふっと微笑んだ。
「エディ様ったらメイドの腰を触ったのですよー、ルティいがいの女性に触るなど由々しいことでしょう？　ですから、そんなにメイドが触りたいのであればルティがメイドになるのです。メイド姿のルティを見て萌え死ねばよいのですよ、エディ様は」
……あたしはおそるおそる魔術師の顔を下から覗き込んだ。
「あまり気にしなくていいから」
えっと――これはいわゆる、気にしたら負けですか？
あたしは地下牢のエルディバルト様を思い浮かべ、もしかしたら彼はあたしと似てるかもしれないなどと考えた。
それはつまり……不幸臭を感じる。
いや、最近のあたしはまぁそれなりに、まぁ、幸せ、かもしれないけど。
あたしは無意識に自分の唇にふれ、はっと息を飲み込んだ。
――自分からキスなんてしないと心に刻んだというのにっ。
だって、なんかとても……とても、したかったんだもの。
あたし、あたしもしかしてインラン！？　スケベエですか？
あああ、あたしもういろいろと駄目かもしれないっ。変態って感染

するの！？

記憶の欠片と求める一片

――変態は感染症の一種かもしれない。
そうでなければ納得できない。
このあたしが……アレとキス。しかも自分から求めるなんて。
大好きだったマーヴェル相手にだってそんなことしたこと無いのに！

あたしは部屋の窓を開け放ち、朝の冷たい冷気を部屋に招きいれた。
北の竜峰のおかげかこの辺りは一年中ひんやりと涼しい。これからもっと冷えて、やがては穏やかに雪が降る。それでも酷い豪雪ではないのは、竜が町を護ってくれているから、ということらしい。町の人が言うには。

――竜峰の竜は眠っている。人々の安寧を夢見て……

身支度を整えて朝食はパンに目玉焼き、今日は奮発してベーコンをスライスした。サラダをつけるのはちょっと控えて、あたしは昨夜の夢を回想しながら朝食を済ませることにした。

意識して夢なんて見れるものではないけれど、最近の夢は決まって子供の頃のことだ。
聖都の夢であったり、自宅の夢。
子供の頃のあたしはたいてい一人ぼっちだった。時折マーヴェルがやってきたけれど、マーヴェルが来ればティナが喜ぶ。自室からめったに出ることのできないティナを残してマーヴェルと遊ぶなんてできなくて、決まってティナの部屋で三人でいるけれど、なんだか邪魔をしているように気分がめいってしまって、結局最後にはあ

たしは部屋を抜け出し、一人で家の裏手にある木に寄りかかったりその洞にもぐりこんで不貞寝した。
　そうすると決まって後悔するのだ。
どうしてあたしは優しくないんだろう。
――ティナは部屋からでられなくて大変なのだから、こんな風にイジケル気持ちを持つのは間違っている。泣きたいきもちになるのは、きっとあたしの気持ちが汚れていて、酷い人間なのだ。

――神様、神様……ティナの病気を早く治して。
　その為ならあたしは何だってします。
あたしがかわりに病気になってもいいの。ティナが元気なら、もうこんな汚い気持ちになんかならない筈だもん。
　ティナが死ぬなら、あたしが――

――じゃあ、リィにうつせばいいよ。

　あたしは脳裏に響いた甲高い声を聞いた。
「……」
　つきりと頭の内側が小さく痛む。
顔をしかめて悪態をつぶやき、テーブルに肘をついて額に手を当てたあたしはゆっくりと浅い呼吸を繰り返した。
「――そう、あたしに……うつせば、いい」
　頭に響いた甲高い子供の声を切れ切れに唇の隙間から零す。記憶の断片を逃さないように、忘れないように魂に刻み込むように繰り返す。
　これは記憶のひとかけら。
逃してしまえばまた遠く離れてしまう、儚いひとかけら。

――近づけば、うつる。うつれば死ぬ。

冷たい口調でうっすらと笑う、
「ああ、そうかぁ……うん」
つきつきと痛む頭を振り払い、グラスの水を喉の奥へと流し込んだ。ひやりと冷たい霊峰からの恵みの水。冷たい刺激に頭が少しだけすっきりと晴れた。
――消えなさい、死にたくなければ。
随分ととげとげしい口調で拒絶されたあの時、あの男はたった一人で……泣いていた。
涙もこぼせない程辛くて、泣いていた。
「あー、もぉっ、はっきりしない頭が憎い！」
心の中がざわつく。思い出したいの、絶対に思い出さないといけない。
あの人の……名前。
――名前、でございますか？
マリーは困ったように微笑した。
「申し訳ありません。わたくしはおろかあの方の名を知るものはお一方しかおりません。あの方の名を存じ上げているのは陛下のみです」
あたしは乾いた笑みを零した。
世の中って狭いですねぇ。一般の商人の小娘様、いやいやパン屋の店員さんの日常の中に、とうとう【陛下】まで出てしまいましたよ。
マリーは静かに、ゆっくりと――おそらくあたしに刻み付ける為に言葉を続けた。
「陛下のみがあの方の名を支配するのは、陛下があの方の命を握っているからですわ」

――魔法使いの誓約のひとつなのだそうです。名を支配した者に仕え、その命によって命を奪われる。

竜守りとして代替わりなさいましたおりに、陛下に名を下されるのです。ですので彼の方の名を知るのは陛下だけということになります。

「……もし、ほかにあの方の名を知ることができる、知る者がいるとすれば、それはきっとあなたですわ」

支配？

そんなことがしたい訳じゃない。名前ひとつでどうかなるなんて思ってもいない。けれど、以前にあの男は言っていた。

――名を呼んで欲しい。

尊き人と呼ばれるのも竜公と呼ばれるのも、きっとあの男は、喜んでいない。

「あの方に直接お尋ねしてみてはいかがですか？」

アマリージェの瞳がどこか悪戯っぽく、興味深いものを見るようにあたしを見る。口元にうっすらと笑みを浮かべた彼女に、あたしは眉をひそめて尋ねた。

「何か楽しそうね、マリー？」

「わたくしの知る限り、あの方はきっと貴女に名をおあたえになられるでしょう。そしてあなたは唯一生き残る」

「は？」

「あの方の名を知るということは、あの方の主になるのと同義です。それは膨大な力を手にいれるということ。本来であれば名を求めるものはすべてその場で惨殺です」

……惨殺されたらどうしてくれますか、アマリージェさま。

狙ってますか、狙っているのですか？

あせるあたしとは違い、アマリージェはかわいらしく微笑を浮かべた。

「お尋ねしてみて下さい。ただし、二人のときに限りますわよ？うっかりでもわたくし達の前で尋ねたりなさらないで。それが知れれば、エルディバルト様があの剣をわたくし達に向けることになりますから」

アマリージェには悪いが、あたしは尋ねない。

知りたければ、思い出す。

知っていた筈のことは全て、すべて――あたしはあたしの記憶を何ひとつ忘れたままにはしない。

思い出して後悔するとしても。

この気持ちがどこから起因するもので、どこにたどり着くのか。

あたしは――過去にばかり振り回されたくない。

あの男が好きだと思う気持ちが……

過去のものなのか、今のものなのか、まやかしなのか真実なのか。

全て思い出して、その上でちゃんとあの男を好きだと――

「だってこのままだと変態が感染した気がするのよ！」

あたしはぱんぱんっと自分の両頬を叩いた。

もっとキスしたいとか触れて欲しいなんて、あの変態みたいなこと思っちゃうんだもの！

これって絶対に病気よ。

感染症か何か！

あの男の変態に汚染されてるのよっ。

アレの変態はいいけど、自分が変態なんて絶対にイヤ！

……これが本当に恋心なら、こういったものが真実恋だというのであれば、あたしははじめて恋をしている。
　自分の気持ちのコントロールが少しも利かなくて、相手の手の動きや唇の柔らかさ、唇が薄く開いたさまが気になって仕方なくて、その眼差しに瞳を閉ざして触れてみたくなる。
　手と手を絡めて――
だから、だから、だから！

頭イカレテルんじゃないの、あたしっ。
なんだか自分が信用できないの。
だって気づいてしまったのよ、あたし。

あの男のことを好きだという感情はあるけれど、あの男のドコが好きなのか判らないの！

触れたいって思う。あの瞳を向けられると嬉しいの。
でも、臆病なあたしは身のうちで震えている。
あの男の好きなところ――あたしを好きだと言ってくれるから？
それって、好きになる理由としてどうなの？　誰でもいいみたいじゃない？この気持ちはまやかしなの？

まるで騙されているみたい！

ちゃんと思い出してから――そうしたら、この気持ちが今現在の誰の影響も受けていないたった一つのあたしの気持ちだって認めてやってもいい！
　変態に影響されてるなんて絶対にイヤだからね！
それまではキスとか禁止。禁止。禁止っ。

でもあの男は強引だから、無理やりされるぶんには仕方ない……と、思う。

……すくなくともあたしからはしない、なんて、うわっ、もう本当にあたしは何を考えてるの！？

朝食の席で一人のたうちまわるあたしは、もう完全に危ない人だと思う。

あたしはあたしの記憶を取り戻す。

失ったものは、すべて。

ｗｅｂ拍手お礼小話つめつめ（４）（前書き）

まぁうちの魔術師はもとから変態だからと開き直ってみた。ここにｕｐするべきか迷った初キス話入り。何度もいいますがうちの魔術師は変態ですから！

ｗｅｂ拍手お礼小話つめつめ（４）

頭の上、左斜めと右斜めに結わえた髪には赤いサテンのリボンが揺れていた。
子供の瞳は大きくりくりと良く動く。
子供の目が大きいのは、顔が小さいからだ。
人間の成長の過程で、瞳の大きさは変わることがない。だから子供とはそもそも目が大きく見えるのだ。
「――」
その唇が嬉しそうに名前を呼んでくれる。
誰も呼んでくれない。ただ一人だけに許した大事な名前。
無邪気な笑みで手のひらから差し出される飴や花を喜び、手を叩く。

子供は知らないのだ。
この自分が何者かなど少しも知らない。
だからそんな無邪気な笑顔を見せる。
誰も彼も、自分に対して敵意は無いと必死に取り繕うこわばった笑みばかりを向けてくる。
腫れ物に触るように、畏れ慄いて必死に視線を逸らす。
けれど目の前にあるのは純粋な、無邪気な笑み。
愛しい。愛しい――心に浮かぶ感情がもうどれだけ自分の中に存在しなかったものかも判らない。
膝に乗せて抱きしめて、不思議そうに小首をかしげる子供の唇に口唇で触れた。
一瞬驚いて暴れるが、その口の中に落としこまれた甘さに嬉しそうに微笑む。
「あまーい」
「ふふ、美味しいでしょう？」
一旦離した唇をまた合わせ、相手の口の中――蕩けた菓子を舌先で

取り上げる。
「意地悪っ」
軽く上目遣いで睨んでくる少女に微笑み、もう一度唇を合わせる。
手放したくない。
このままずっと……その思いの反面、もう一つの思いが浮かぶ。
愛しいならば手放さなければ。
遠く離れた場所で、きっと幸せになれるように。
「君に魔法をかけよう」
「なぁに？」
「君の中からぼくを消してしまおう――」
「どうして？」
「そのほうがきっと君は幸せだから」
「判らないよ」
子供は眉を潜めて首をかしげる。
怒ったように唇を尖らせて、
「でも忘れないよ。だって大きくなったら御嫁さんにしてくれるのでしょ？　きっと――のトコに行って、お嫁さんにしてもらうから！」
言い切る少女の瞳には強い決意。
どうして彼女は欲しい言葉を容易くくれるのだろう。
心までとろかしてしまう――君こそが魔法。
「そうだね。その時は御嫁さんになってね」
――でも、君がぼくのもとに来ることがないなら……その時は、完全に手放してあげる。
遠い場所で君の幸せを祈るよ。
君がぼくのもとに来てくれるなら、その時は――君はずっとぼくのもの。

「当初の謙虚さは欠片もありませんわよね！」
アマリージェは心底あきれ果てていた。

もう何度も聞かされている尊き人の「のろけ」にはうんざりだ。
しかも何が手放してあげるだ。離れている間の余計な手出しの数々をアマリージェはいやという程知っている。
――そもそも八つの子供相手に非道すぎる。

「絶対に当人にはいえません！」

＊＊＊

「アマリージェ様っ」
半泣き状態のリドリーは自分よりも年下の姫君にすがりついた。
「あたしの初キスがぁぁ」
「ああ、思い出したのですか？」
「酷いんです。酷いんですよっ」
「斬新な記憶ですよね」
あっさりと言い切られ、リドリーはとまった。
「……ご存知ですか？」
「脳が腐るくらい聞かされましたから」
「……」
アマリージェはにっこりと微笑んだ。
「口移しでいただいたチョコレートは美味しかったですか？」

やーめーてぇぇぇっっっっ。

――なんか最近アマリージェ性格が悪いなぁ、とか思うんだが（笑）

＊＊＊

パン屋の香りはやわらかい。
パン釜からの熱は暖かいし、焼きたてのパンの香りが優しくその場を充たしてくれる。

やさし……
「マイラおばさん」
「なんだい？」
「今度の新作パンは、何ですか？」
「前回クスリのパンを失敗したからね！　次こそは成功してみせるよ。
楽しみにしておくれ」

匂いがすでに薬品臭い……
ちらりと隣のアジス君を見ると、アジス君は青ざめつつもあたしを見上げ、そっと首を振った。
その顔は全てを諦めた男の顔。
「胃薬、飲め」
ぼそりとアジス君が呟いた言葉に、あたしは逃れられない運命を感じた。
……あとであの男にも差し入れてやろう。
「あら、どうなさったの？」
軽やかなガラスベルの音、ひょこりと現れた姫君の姿にアジス君は蒼白になった。
「アマリージェ様っ」
「おや、姫様。丁度いいところにいらっしゃった。新作のパンがそろそろ焼ける頃合だよ。できたてを食べてやっておくれ」
上機嫌なマイラおばさんの声に、アジス君はぶんぶんと首を振り、必死にアマリージェに帰れと示したが――顔を出した途端にそんな態度をとられたアマリージュは不敵に微笑んだ。
「まぁ、それは楽しみですわね」
アジス君の思いは挑発として受け取られ、彼の優しさは通じなかった……

アマリージェ毒殺未遂事件勃発。

手紙とボストンバック

「やぁ、ナフサートさん」
郵便局員のオフロークがマイラおばさん宛ての幾つかの手紙を差し出してくる。それをパン屋のカウンターで受け取りながら、あたしは微笑んだ。
「ごくろうさまです。少し寒いですね。珈琲でも飲みますか？」
「いや、ありがたい」
オフロークは赤くなった顔でにっこりと笑い、ふと思い出すように鞄の中をごそごそとあさった。
「ナフサートさんにも手紙がきてましたよ。ここで渡してしまっていいかな？」
「ああ、かまいませんよ」
パン屋のカウンターのに常備されている小さなストーブにかけたままになっている珈琲をカップに落し、あたしは自分宛の手紙と珈琲カップとを交換した。
あたしに届く手紙の主はただ一人。

――愛するリドリーへ。
綺麗な文字で記されたそれは、母からの手紙だ。
全てを捨てて出てきたけれど、あたしはそれでも母には家出したことを打ち明けた。母はあたしのことを愛してくれている唯一の人で、きっとあたしが突然いなくなればひどく心配すると知れていたからだ。
といっても、この町に引っ越してしばらくたってからのことで母は当時すぐにここに一度顔を出し、一緒に暮らそうと強く勧められたのだけれど、すぐに諦めて連絡だけはかかしてくれるなといいおいて聖都に戻っていった。結構拍子抜けしたものだ。
あたしは手紙をエプロンのポケットに落とし込み、オフロークに

礼を言った。

パン屋の休憩時間。

そろそろ庭で昼食を取るのは寒さを覚えるが、相変わらず庭で勉強に励んでいる二人にはあまり意味がないだろう。

あたしがアジス君とアマリージェの為に珈琲とパンとを用意して裏手の扉をあけると、二人は睨みあっていた。

「あなたは教えられたことをそのまま覚えればよいのです！」

「どうしてそうなるんだって聞くのが悪いのか！」

「悪いとは言ってませんわよ！　屁理屈を叩く暇があればその頭にいれなさいといっているのですっ」

……元気だなぁ、本当に。

確かにこれだけ元気であれば寒さなど感じないかもしれない。

あたしは苦笑しながら「お昼にしましょう」と声を掛けた。

ぱっとアジス君の顔が綻ぶ。そうすると突如として若干十一歳の男前はかわいらしい少年へとかわるのだ。

何事か言いかけたアマリージェが唇をへの字にして眉を潜める。

アマリージェもアジス君といる時は年相応になるのだ。なんというかとても可愛い。あたしはこの二人を眺めているのが好きだった。

いつも喧嘩しているのだけど、とても微笑ましく感じてしまう。

いいなぁ、喧嘩するほど仲がいいってこういう……

「リドリー？　どうかなさいまして？　何か……へんな顔になってますわよ」

「いや、ええ。なんでもありませんよ？」

――微妙にいやなことを思いかけた。

あたしとアレは仲良く喧嘩しているわけではありません。

本気ですよ。本気。食うか食われるかの関係なのです。

好きだけどスキなどみせたらいけないのです！

「おや、今日も外で食べるのかい？　家の中に入ったらどうだい」
ふいにマイラさんの声が割ってはいる。
「さむくねぇよ。平気」
「ですわよ」
二人の子供達に同時に言われ、マイラさんは苦笑する。
「子供は寒さなんてものともしないかもしれないけどねぇ、リドリー、あんたはずっと中にいたんだし、寒くないかい？」
玄関口で言いながらマイラさんは軽く腕をさすっている。開け放した扉から入る風がこたえるのかもしれない。
「平気ですよ」
「いいんだぞ、リドリー。ある年齢を超えた女は寒さが堪えるもんらしいからな」
アジス君、それはどういう意味ですか。
「あなたはデリカシーを学ぶべきですわよ」
またしても臨戦態勢に入る二人。ってか、なぜあたしのことで喧嘩に。
あたしは嘆息し、
「じゃああたしは中で食べますから。二人は好きにしてくださいね」
判りました判りました。邪魔者は退散いたします。

あたしはマイラおばさんと一緒にあたたかなスープまでつけて昼食を取り、昼食を終えるとポケットの中にいれたままになっていた封筒を引き出した。
「おや、手紙かい」
「はい、さっきオフロークさんが届けてくれました」
あたしは思い出してマイラさん宛ての手紙をカウンターから持ってきて手渡す。自分宛の手紙を確かめていたマイラおばさんだが、あたしの手のものが気になるのか、
「ラブレターかね」

にやにやというマイラおばさん。何故彼女はこういった話が大好きなのか。

「母からですよ」

あたしは苦笑しながら封筒の蝋封をぴしりとはずした。

「蝋封なんて古風だねぇ」

「こういうのが好きなんですよ、うちの母」

あたしは中から数枚の便箋を引き出し、視線を落した。

母は男爵家の末娘で、今はその兄を頼って聖都で生活をしている。まぁ、もっとも母の娘であるあたしはただの商人の娘です。まったく関係なし。

自分の近況、そしてあたしの身の心配。いつもと変わらない文面——だがその中にいつもとは違うものが見えてあたしは眉を潜ませた。

——あなたを探しにティナがきました。

その文面にわずかに心音が早くなる。

やっぱりという思いとともに湧き上がる。いまさら、という思い。もう一年がたっていて、本気で探すつもりならもっと早い段階で母のもとに行くのではないかという、微妙な失望。

失望？

そんなものを感じる意味などないのに。

探されたかった訳じゃないでしょう。あたしは探されたいなんて思っていない。ティナはマーヴェルと幸せの筈で……あたしは……

「リドリー？」

マイラおばさんが心配そうに声を掛けてくるから、あたしは慌てて微笑みを浮かべた。

「いえ、なんでもないです」

慌ててその後の文面に視線を落とした。

――もちろん、あなたのことを告げるようなことはしていません。そもそも、よくあの子が私のもとに顔を出せるのか、私には理解できない。

母の文面にとげとげしさがにじむ。

あたしはそっと吐息を落した。

何故そんな風に母がティナを嫌うのか理解できない。あたしが何故結婚を逃れて逃げ出したのかその理由は言っていない。彼女にとってティナは同じ娘だというのに、母はティナに対して随分と冷淡さをみせるのだ。そんな態度を見せられるとあたしは心が歪むようないやな気持ちになってしまう。

――そんなことはどうでもいい。あなたの顔が見たくて寂しいです。一度顔を見せに来てください。あなたの暮らす場は冬は厳しいのでしょう？　ならば冬の間は私の家で過ごしたらどうでしょう。それがムリだとしても、せめて一度顔を見たいのです。

「お母さんは何て？」

「顔を見せにきなさいって」

「そりゃ、可愛い娘が遠い場所に一人で暮らしていれば母親なら心配にもなるさ。行って来たらどうだい？」

そんな気安く。

あたしは手紙を折りたたんで片付けながら、

「聖都ですよ。行くのに馬車で二日、汽車で一日かかります」

「いいよ。十日程度なら仕事休んだらいい。うちのバカ孫もいるしね」

「でも」

「旅費なら出してやってもいいんだよ？　いつもがんばってもらってるんだ。考えてみれば若い娘さんを一年ここで働いてもらって、親御さんのことをちっとも考えてやらなかったあたしの落ち度だよ」

心底心配するように言われた。

「それに、もしかしたらお母さん体調が悪いんじゃないかい？　あ

んたにあいたいって心細いんじゃ……」
　余計な心配までしだしてしまった。
あたしは両手で相手を押し留めるようにしながら、
「いや、旅費なら大丈夫です」
　食費はかからないし、アパート代だって安くすませてもらっているのだ。そんなところまで面倒みてもらう訳にはいかない。
「本格的に寒くなる前がいいね。じゃあ明日から」
「……」
「あんた休み時間のうちに役所に行って旅券の手続きしときなよ？」
マイラおばさんは勝手に決めつけ、さっさと暦を睨んであたしの休暇を決めた。

――行きたくない。

心から行きたくないのですが。
どうやらあたしは聖都へとおもむかなくてはいけないらしい。
あたしはポケットの中の手紙をくしゃりと握りつぶした。
　いや、判ってますよ。
マイラおばさんの前で手紙を読み出し、あまつさえその内容をぺらりと喋ってしまったあたしが悪いのです。はい、はい……あたし、間が悪いなぁ。

　あたしは深い溜息を落とし込み、その夜には荷物をまとめあげた。と、いったところで荷物はボストンバックが一つ。朝一の駅馬車で出るとして、馬車は退屈だなぁ。とあたしが螺旋階段をおりて行くと、本日の魔術師はぽろりとステッキを落し、両手を広げてのたもうた。
「ぼくの家に引っ越す気になった？」
「……ちっとも」

――そういえば難関がありました。
いや、忘れていた訳ではありませんよ？
考えたくなかっただけです。

「どこ行くの？」
にっこり。
――思うのですがね。あたしはこの面前の変態、もとい変質者にいちいち自分の行き先を言わなければいけないような理由はない筈なのですよ。

無関係ですからね！
無関係……自分からキスしちゃった件はもう忘れて。忘れ、ううう。
忘れられる程キヨウな人間じゃない自分が憎い。
「聖都」
……言わなくてもいい筈、です。
しかしあたしは思わず視線をそらし、あまつさえ言い訳のように「お母さんのところに顔を出してくるの」などと口走ってしまう。
「一人で？」
「一人で」
「ふーん？」
くるりと手の中でシルクハットを弄ぶようにした魔術師は、眉根をひそめてしばらく考えた様子を見せたがやがてゆっくりと微笑んだ。
「じゃあ行こうか」
「いや、あの？」
「どうりで早いと思った。朝一の駅馬車を使うつもりだった？　早くいかないとおいてかれちゃうよね」
うんうん、などとうなずき、ふと面前のあほんだら様は思い出すように顔をあげ、ぽいぽいっとステッキと帽子とを投げた。

ええ、あたしはもうそれが空中に消えようが気にしませんよ。気にしたら負けです。この男に負けっぱなしは気に障りますからね。もう何があっても気にしない。

軽く手を払えば今度はイカレ魔術師姿が極普通のシャツとスラックスに変わる。髪が随分と短くなって首の辺り。「ああ、忘れてた」というつぶやきに外套がぱさりと増えた。

気にしたら負け！！

すっと差し出された手に顔を引きつらせたあたしだが、この面前の不可解な男ときたらさっさとあたしのボストンバッグをひったくり、螺旋階段をおりようとする。

「聞いていい？」

「なに？」

「送ってくれる、ってコト？」

駅馬車の停留所、つまり中央広場まで？

疑わしい気持ちでそう尋ねれば、にっこりとまるで普通の人のように微笑んだ。

「うん。送るよ――聖都まで。駅馬車の旅ってはじめてだけど、大丈夫、ちゃんと君をエスコートするよ？」

「誰があなたと旅行に行くといいましたか！」

まてこら。

あたしは内心で随分とガラの悪いことを吐き出し、慌てて相手の手からボストンバックを取りかえそうと動いた。

「でも年頃の娘さんが一人旅なんて危ないよ」

「わたしはそもそも一人でこの町に来たのよ！」

「何事もなかったのは運がよかったよね。でも今回は運が悪いかもしれないじゃないか」

「自分の仕事があるでしょう！」

あたしはめちゃくちゃ焦った。
相手の傍若無人ぶりには多少慣れてはきていたものの、まさか一緒に行くなどと言うとは思わなかった。常識で考えて欲しい――って、常識が通じる相手じゃない。
「ぼくの仕事なんて楽隠居みたいなものだよ。とりあえず生きてればいいんだもの。何度も言ってるだろ、ただの名誉職。数日いなくなったって気にするのはジェルドくらいだよ」
へらへらと笑っていた魔術師だが、ふいに小首を傾けて囁いた。
「心配なんだよ、リドリー」
あたしはぐっとおなかの中心に力を入れた。
そうしないと体から力が抜けて流されてしまいそうになる。
さすがのあたしだって気づくのです。この男があたしを名前で呼ぶ時はあたしをたぶらかそうとしている時に違いない。
……柔らかなテノールでつむがれる自分の名前が、酷く優しく心の深い場所をなぞる。ただそれだけであたしの体温があがるのは、あたしのせいじゃない。
振り払えあたし。ここで負けたらいけません。
「とにかく、一緒に行くのは却下。あなたと二人で旅行なんて、そっちのほうが危ないわよっ」
「いやだなぁ、そんな期待されちゃうと腕によりをかけなくちゃって思うじゃないか」
なに照れてるのよっ。
あたしはばしりと相手の手からやっとボストンバッグを引ったくり、威嚇するように睨み付けた。

「あたしは自分の母親に会いにいくの！　一人で行きますっ」
魔術師は軽く肩をすくめてゆっくりと首を振った。
「そう、判ったじゃあ二択ね」
仕方ない、とまるであたしが悪いような口ぶりであたしの目の前に指を二本突き出した。

「一つはぼくと行く」
「わけないでしょっ」
「じゃあ、君の選択肢はもう一つのほうだね。あんまりすすめられないけれど、そうか、うん判った。仕方ないよね」

魔術師は心底仕方ないというようにゆっくりと首を振り、はーっと溜息を吐き出した。
「じゃあエルディバルトを連れていって」
「絶対にイヤ！」
あたしは即効で却下した。
髭を生やした明らかな騎士姿の男と二人旅？　なにそれ、なにその悪目立ち。
あたしは背筋に寒いものを感じながらボストンバックをさらにぎゅうぎゅうと抱きしめる。
中の着替えはきっとしわくちゃだ。

「じゃあ、やっぱりぼくと一緒に行かないと。他の選択肢はないよ」
「一人で行くってば」
大前提でおかしいでしょう？
そんな選択肢を突きつけられる意味がわかりませんよ。
「それは許可できない。ぼくは君が心配なんだよ。リトル・リィ――それとも、君を説得する為にぼくは君を地下牢に入れたほうがいいのかな。言っておくけど、ぼくってば有言実行派だよ？」

……あたしはわなわなと身を震わせて面前の男を見た。
傍若無人の男ははっきり言って何をするか判らない。理解しているのは一つだけ。
やると言ったら、ヤる。

あたしは精一杯の気持ちを込めて相手を睨みつけた。

「へんなことしたら絶対に許さないから！」
「へんなことって何？」
「――」
「ぼくの考えるへんなこととリトル・リィの考えるへんなことが一緒だといいんだけど、そこの相違点はちゃんと照らし合わせたほうがいいんじゃないかな？　で、君が考えるへんなことって、なにかな？」

魔術師はそれはそれは綺麗な微笑を称え、あたしの瞳を覗き込む。あたしはたじろいでボストンバックを抱きしめた。どんどんと体温があがるのが判る。脳裏に色々と浮かんでしまうのは恋愛小説にありがちな恋人同士のシュチュエーションだ。
「あ、あの……」
「うん？」
「だから」
「だから？」

伸びた指先が耳たぶに触れるか触れないかの距離でなぞり、そのまま首筋をたどる。
細められた瞳からこぼれる奇妙な色香にこくりと喉の奥で唾液が溜まり、あたしは逃れるように一歩退いた。
「あの……」
指先が鎖骨の上をそっとなぞり、落ちた指をはねあげるように顎先に触れさせた。

ま、負けそう！
あたしは精一杯歯を食いしばり、ギッと睨みつけた。
「つまり、そうやって触ったり、キスしたりってコトです！」

強い意志を貫き通せ、リドリー・ナフサート。

流されてはいけません。

半泣き状態ではあるものの、あたしがきっぱりと言い切ると魔術師は瞳を二度瞬いて微笑した。

「ぼくは純粋に心配しているんだよ、リドリー。もしぼくがいない時に馬車が強盗に襲われたりしたらどうしよう？　若い娘さんに対して彼らはどんな暴挙に出ると思う？　彼らが紳士でいてくれるとは到底思えない。君のかわいらしい瞳が涙で潤んで助けを求めても、彼らはきっと残酷な笑みを向けるだろうね」

「――」

びくんっと身がすくんだ。

そういえば、最近そんな話があったな。強盗もほんかくてきな冬を前に大忙しかな？　可愛い女の子を捕まえたり？

相手の言葉がその状況をとろとろとこぼすたびに、足元から奇妙な震えがたちのぼる。まるで言葉が事実であるように暗い影のようにあたしに触れる。

顎先に添えられていた指先が、ふいに大きく動いて五本の指が首に触れる。決して力を込められていないのにあたしはボストンバックを抱きしめて体に力が入るのを感じた。

「細い首だね……ぼくのような優男の手でも片手でことたりてしまう。ねえ、リドリー？　強盗の手はきっともっと大きく強く、この細い首を捕らえて締め上げて、そして――」

もう片方の手があたしの腰に触れた。

びくんっと体が跳ね上がる。

まるで見知らぬ無骨な男が自らに触れているような奇妙な振るえが走る。

微笑を称える男は口角を引き結んで耳元にそっと囁いた。

「その後は――」

「判ったわよ！」

あたしは悲鳴のように言った。
背中がぞわぞわとあわ立ち、唇を?む。想像したくないのに想像してしまう。男の手が、しなやかなこの面前の男ではなく、無頼な男の無骨で大きな手が自分の首をしめあげる――まるでその様子を脳裏で再現されるような恐怖で歯がかちかちといいそうになる。
あたしの叫びに魔術師はふっと微笑み、ふわりと軽くあたしを抱いた。
「ね？　ぼくがいれば安心だよ。ぼくこれでも結構使えるからね」
小刻みに震えるあたしの耳元で、優しくささやきぽんぽんっと背中を叩く。
安心させるように、この腕の中は安全だと示すように。

「さぁ、行こう」
体を引き離した魔術師は、実に楽しそうに言った。
あたしは強盗とこの男とを天秤にかけた。
――強盗よりはマシ。
強盗よりはマシってだけですっ。

扉と馬車の旅

特徴的な長靴を叩きつけるような足音を耳に入れ、アマリージェ・スオンは軽く嘆息した。

「アマリージェ」

「お久しぶりです。エルディバルトさま」

地下牢に十日と数日の間暮らすことを余儀なくされた騎士は、五日ほど前には無事放免されて自宅へと戻っていた。普段であれば滅多なことでこちらに顔を出したりしないのだが、今日は理由ができたのだろう。

理由さえあればエルディバルトは嬉々として顔を出す。まるで忠実な犬が飼い主を求めるように。

「……ああ」

ごほんっと決まり悪いというように咳払いをした騎士は、視線を軽くさまよわせてもう一度勇気を奮い起こすかのように咳払いをし、口を開いた。

「公はどちらだろうか。まだお見えになられないのだが」

「聖都に行かれました。さきほど、連絡だけは頂きましたが」

そちらには無かったですか？　という言葉は口にしなかった。

――無かったのだろう。彼の主は彼が思う程には彼に対して心を向けていない。

確かに、エルディバルトという人物はあまり近くにいて嬉しい相手ではないのでそこは理解できる。でかい偉そう、邪魔臭い。

……勿論アマリージェはそんなことをおくびにも出さないが。

「いや、まだいらしていない」

困惑するようにエルディバルトは言う。アマリージェは辛らつに瞳を細めた。

「馬車で行かれましたから」

「……何故？」

エルディバルトは思わず振り返り、自分がたった今使った扉を遥か後方に仰ぎ見た。
そう、扉――この屋敷にはいくつもの扉があるが、その中には竜公の不思議の能力をもってすえられた扉がある。

それはすなわち――転移の扉。
エルディバルトはその一つを通り、たった今聖都からこの西の辺境へとおりたったのだ。
経由地を二つ程通りはしたものの、それでも聖都とこの辺境の屋敷とを訪れるのに必要な時間は四判刻もかかりはしない。
「深く考えると頭が痛くなる理由です」
アマリージェは端的に言った。
「は？」
「追求するとまた地下牢行きになると思いますわよ」
その言葉にエルディバルトは思わずぶるりと身震いした。

もうあんな場所に戻りたくは無い。
あんな場所を喜ぶのは――変人（ルティア）くらいだ。

＊＊＊

「はい、あーん」
ぎゅむりと口に飴玉がおしつけられる。
――どこかでこんなことがあった。
あたしは極力隣の能天気な男のことを無視したいと願っているのだが、狭い馬車の中でそういう訳にもいかず、そしてヤツは果てしなくテンションが高い。
テンション――実はテンションは張るものであってあがったりさがったりするものではない、なんて現実逃避をしようにも、あたしの口には飴玉がまだしっかりと押し付けられている。

ぎゅむむむ。

「とけちゃうよ？」

くすりと笑われ、あたしは屈服して力を込めて閉ざしていた口を開いた。

ころりと口の中に飴玉が転がり込む。

あたしの記憶が確かであれば、この飴は自分で舐めないとこの面前の男に舐められるのだ。あたしの唇に触れていたそれが！

「って、なに、苦っ」

「ふふふ、マイラさんを見習って体に良い飴です！　面白いでしょ」

あたしはじたばたと暴れ、慌ててポケットからハンカチを取り出し、口の中の飴を取り出した。苦い、苦すぎ。そして妙に粉っぽい。甘い飴だと決め付けて口にいれたものだから、その苦味のきつさに驚愕してしまう。あたしがわたわたしているのを見て楽しむ男は、自分の唇に指先を押し当てた。

「口直しに甘いチョコレートはいかが？」

完全に無視。

あたしは自分の荷物から皮袋を取り出し、さっさと口の中の苦味を洗い流すようにして飲み込むことに成功した。

――魔術師はこの調子だった。

あたしはおそらくまたしても失敗したのだ。エルディバルトさんが正解！　二択だったらぜひともエルディバルトさんを選択しておくべきでした。多少怖かろうが、騎士の格好だろうと喜んでエルディバルトさんの手をとるべきだった。

自然と幾度もこぼれてしまう溜息をまたしても一つ落し、あたしは胡乱に馬車の中を眺めた。

大型の箱馬車は総勢で十名程を載せることのできる地方特有の移動手段だ。四頭の馬に引かれ、また後方には乗り換え用の意味も含めた二頭の馬。それには二人の人間が乗っていて、一応護衛役ということになっている。

馬車の中はなごやかだった。

ええ、先程狭い馬車と言いましたが、この馬車の現在の乗車数はほんの六名程度。わざわざ引っ付いて乗らなくて良いだろうということだろう、各自離れて座っている。

あたしと黒いヒト以外。

――おそらくこの馬車の中で狭い思いをしているのはあたしだけ。

かろうじてヤツとあたしとの間にはボストンバックが挟まっている。

それだとてこの男は気に入らないのかはじめのうちはぐだぐだと言っていたものだ。

――各村や町を巡る巡回用の大型馬車の一番奥の座席についたあたしは自分の隣にしっかりとボストンバックを置いた。

隣、座るべからず！

その意図をしっかりと指し示すあたしに、アレはあきれたようにあたしとバックとを見つめ、やれやれというように肩をすくめて見せた。

「時々、リトル・リィは物事がわかってないんじゃないかって心配になるよ」

「どういう意味？」

「こうやってやられると男がどう感じ取るか考えたりとかしたことない？」

「だからどういう意味？」

「もえます！　この垣根を打ち崩すやる気がでるよね！　イヤダといわれるとなんというか追いかけたくなっちゃうんだよ。リトル・リィはそういうのが判ってないよね。ホント。こっちとしてはやらないでとか来ないでとか言われると、逆に期待されてるんだなってがんばりたくなっちゃう」

……そうなの？
そういうものかしら。
じゃあ、あたしはいつも間違えてる？

その時はつんっと無視したれど、あたしは心の中でこれについてはじっくりと考えてみることにした。
いやがるからヤツははりついてくるのか？
ならば平気な顔をするとか、喜んで受け入れるふりをするとか。
あたしは軽く眉間に皺を刻み込んで馬車の窓枠に寄りかかるようにして外を眺めた。

「あれ、疲れた？　ぼくに寄りかかって寝ていいよ？　それとも膝を枕にする？」

機嫌がいいのがまたむかつく。
せっかく人が考えているのにっ。
あたしは忍耐という言葉を幾度も頭の中で書き記す。
そして気づくのだ。
ときおり。ほんの時折りマーヴェルとこの男を比べてしまう自分。
それはもう果てしなく愚かしいことをしている自分に。
ヒトとヒトとを比べてしまうなんて本来やっていいことではない。
元来からあのヒトとこのヒトは違うのだし、それに――
ふっと、魔術師があたしの肩を引き寄せた。
びくりと身がすくむ。

「もうふざけないから。本当に少し眠って――ね？　大丈夫。君の嫌がることなんてしないから」

穏やかな表情は神官としての顔。慈愛に満ちた瞳に嘘はなくて、あたしは居心地が悪い思いを味わいながらもそろりそろりと言葉に従って身を預けた。

嫌がるともえるならばその逆をためしてみるのは悪くないはず。

相手の肩口にもたれるようにしようとすれば、今日は普段着姿の魔術師が二人の間にある荷物を容易くどかして膝枕の体勢――うぎゃっと狼狽するあたしを気遣うように撫で、ばさりとあたしの体に毛布が落ちた。

ああ、この体勢は子供の頃にも体験した覚えがある。

あたしは心臓の音が相手に聞こえてしまうのではないかと危惧しながら、ほんの少し――悔しいことに幸せな気持ちで瞳を閉ざした。

ごとごとと揺れる馬車――

決して柔らかいとはいえない膝枕。

ゆるやかに届く振動と体温とで体が休息に眠りへと誘われる。

あたしの髪が緩やかに撫でられ、指に絡められる。

あたしは眠りの淵をふらふらと歩みながら無意識に囁いていた。

「もう、寒く、ない……？」

「――君がいるからね。大丈夫」

くすりと囁きが落ちる。

あたしが口にした言葉をこの男は理解しているようだけれど、あたしが口にした言葉をあたしは理解していなかった。

寒い？

寒くなんかない……だって、こんなに体温が、近い。

「いい子でおやすみ――怖いことなど何もありはしないから」

――ことりと眠りに落ちいくあたしの前髪をかきあげて、魔術師はクスリと微笑し囁いた。

「運が悪いな」

馬の嘶きが、遠く……遠く、きこえていた。

幸運と闇の獣。（前書き）

＊注意＊

今回はいつもとちょっと違いまして、グロ表記があります。苦手な方はブラウザ・バックでお願いします。

幸運と闇の獣。

運がない、ああ、運がない！
こんな筈じゃなかった筈だというのに。

冬がくる。
冷たく寒く凍える冬。誰もが巣穴に閉じこもり暖かな場で春を待つ季節。ならばその前に山々の獣と同じように冬篭りの準備をするのは当然のこと。大量の食料と酒と女。それがあればどんな冷たい季節もことともなくすごせるだろう。
獲物は商隊が好ましい。普段であれば貧乏人が使うような駅馬車など目にも留めぬ。だれがそんなしみったれたものを襲って楽しいものか。だからそれはほんの暇つぶしの獲物だったはずだ。

――窓から女が見えた。若い女だ。

暇つぶしに色が付き、女旱（おんなひでり）の体が脈打つ。
女を抱くのは一月ぶりだ。前の女は三人いたが穴倉の男達の数にあわずに壊れて果てた。谷に落してやった時には奇妙な声で笑っていやがった。一人などは途中で孕みやがったものだから、興がそがれて仲間の一人が切り刻んだ。今度の女も長くはもたないかもしれないが、なにかまいやしない。
とにかく暇つぶしの獲物にちょうどいい――誰かがそう言った。

「運がいい」
穴倉に残してきた奴等を出し抜いて、まずはオレたちで味わいつくしてやろう。
生娘ならばなおいいが、他人の手が入っているならば諦めるのも容

易かろう。従順に振舞えるようになるまで幾日か虫けらのように縛り上げ、自ら甘く男を誘うように作り上げてやる。最後には気が触れて壊れ果てるまで嬲り者にしてやろう。

そう言ってやったのは半刻も前では無かった筈だ。

人数は五人。

駅馬車を襲うにはちょうど良い人数だった。

期待と興奮で仲間達の目がぎらぎらと輝き、馬の腹に蹴りを入れた。

逃げまどう獲物を追い詰める感覚を思い、女を抱く開放感を思い口元に自然と浮かぶ笑みがとまったのは、いつまでたっても馬車に追いつかないことに気づいた為だ。

駅馬車は巨大な荷物だ。

単騎の自分達に追いつけぬ筈はない。違和感に誰かが気づき、眉がひそまる。速度をあげても変わらず、だんだんとその違和感にちらりちらりと仲間内で視線をまわした。

先頭を行くバウロの足が止まる。

馬は幾度も足元をかき、口の間から飛沫を飛ばした。

ぶわりとその体に汗が浮かび上がり、それが湯気となってあたりに漂う。

「なんだこりゃっ」

誰かが言う。

馬は疲れを示し、自分達にも深い疲労が見えた。

駅馬車はその間にも遠ざかるが、馬の様子は尋常ではなく疲れをしめしていた。

「ごきげんよう」

その時にやわらかく流れたテノールに、びしりと場に亀裂が入った。

慌てて仲間達の視線が声の主を探し、そして――岩場によりかかるようにして立つ優男の姿に戸惑った。
それはまったくの異質だった。
荒野だというのに、単身で岩にもたれて立つ男は、一瞬女かと思う程に整った顔立ちと、ひょろりとした優男だった。
まったくこんな場にそぐわぬ。
「っだ、てめぇっ」
いきりたった誰かが叫ぶ。
だが相手は女のような整った顔立ちに微笑みを浮かべ、軽く手のひらを返した。

「私が誰かは私が知っている」

頭がいかれているのか、この男は穏やかに言うや一礼した。

「あなた達に名乗る名はない――けれど、そうだね……安らかに死を迎えるには死ぬ理由くらいは知りたいだろう？」
「何言ってやがる」
「ちょうどよかった。本当に。ちょうどいい。
私はこれで運がいいのかもしれない。このところ力を使いすぎていたからね――そろそろ補給が必要だった。いつもであれば心が痛むのだれけれど」
微笑をこぼし、ついでゆっくりと首を振った。

「それにしても本当にあの子ときたら運が悪い……ほんの冗談だったのに、いまどき駅馬車強盗に目をつけられるなんて」
まぁ、ぼくという最高の幸運がついてるけどね。

訳の判らない男は頭がいかれているのだろう。
それでも、身包みはいでしまえばいい。よく見れば身なりだけは立

派じゃないか。売り払うには少しばかり年齢がいき過ぎているが、金持ちの男旱（おとこひでり）の女であれば高く買ってくれるかもしれない。場合によっては女の代わりとして――

口元に笑みを浮かべると、優男が微笑んだ。

動いたのは斧持ちのヤーゴが先だった。馬の背に引っ掛けてある斧を無造作に男へと投げつける。「バカ野郎っ、殺すなっ」野次が飛んだが、その言葉も凍りついた。

斧が、はじけたのだ。

火薬でも遣ったかのようにはじけて、散った。

優男が肩をすくめる。

「うごかないで」

その一言で――時が、止まった。

それだけで、自分達は敗北したのだ。

ゆっくりとした歩調で男が近づき、嘆息交じりにヤーゴの馬の前に立つ。

「おいで」

ヤーゴが引きつった顔のままで馬をおりる。

こちらは身じろぎしようにもぴくりとも動けず、ただ汗ばかりが流れるというのに。

男の手がヤーゴの胸に触れる。

その指先が、ずぶりと胸当てに沈むのを見つめ続けることしか誰にもできなかった。

ただ両の目を必死に見開き、それを見続けることいがいは。

「御伽噺を知っているかい？
竜公の御伽噺だ。この国に古くから伝わる御伽噺だから、まさか知らないとは言わないだろう？　陛下に鎖で繋がれた獣――数多の命を奪いつくす獣（けだもの）」

言葉のうちにも、ヤーゴの体が痙攣を起こしその下又がみっともなくぐしょりと塗れた。
目玉はぐるりと上を向き、口元から垂れ流された唾液はその恐怖を物語っていたが、他のものたちは逃げることもできずにそれを見せつけられ続けた。
一人、又一人とゆっくりと身動きも抵抗もできずに仲間がほふられていく様を。

「彼が獣といわれるのはね……」

吐息のように囁き、いまや四人分の血に塗れた指先をゆっくりと舌先で舐める。
その口元にはただ笑みが刻まれていた。
血と、脂肪とにまみれてらてらと濡れる指先がひたりと自分の胸に触れる。恐怖に悲鳴をあげて逃げ出したいと体をよじろうとしても、まったく体は動こうとはしない。
まるでバターが熱に溶けるかのように、指先はゆっくりと胸当ての鎧に沈んでいく。
頭の中で何かがぶつぶつと切れるような音を聞いた気がした。
体中の穴という穴が開放されるようにだらりと自分の意思とは無関係に液体を垂れ流す。羞恥も何も感じる間などない。

「人の魂（いのち）を喰らわなければ……生きていけないんだよ」
そんな汚らわしい生き物など滅びてしまえばいいのにね。

くすりと微笑し――深々と指先を沈めていく。
ぐじゅりぐじゅりと血と脂肪とが溶けて混ぜ合わされる音を聴いた。
「私だっていやなんだ。殺すだけならいいけれど……魂を覗き込むような行……」
痛みも熱も、快感も悲哀も、すべて闇に閉ざされようとしたその時、沈み行く意識が乱暴に掴みあげられ、もちあげられた。

「へぇぇぇ？」

暗い場所へといきかけた意識が無理やり戻され、薄暗かった視界が広がる。
もう二度とみたくもない男の顔が面前にあり、絶望が這いのぼった。

「あの子にそんなことをしようと思ったの？」

何を言っているのだろう。
胸に指が突き刺さっている。けれど何故自分は意識を保っているのだろう。

早く、もう早く、殺せ。殺してくれ。

夢なのか？　夢ならば覚めやがれ、ド畜生っ。
男の顔がそれまでの無機質なものとは変わり、強い意志をひらめかせた。
触れていた手がゆっくりと離れ、血塗られた腕を振り上げる。その手に現れたのは一本の槍だった。槍ではなく、ただの長い棒であったかもしれない。
そんな単純な判別すらできなかった。
ただ突然棒が現れたと理解した途端、どすりと重い勢いとともにそれが腹を突き破っていた。

激しい痛みに悲鳴があふれそうになるというのに、ひりついた喉の為か、それとも声を封じられているのか悲鳴は漏れなかった。そのままの勢いで地面に倒れ、その場に縫いとめるように男の手が槍をぐいぐいと押した。

笑いながら。

「あなたの命はとらないことにしたよ。下らない妄想を見せられて気分が悪い――このままこの場で、鳥に、獣にゆっくりと意識を保ったまま食べられたらいい。破片の一つ一つに痛みを感じて、肉片が引きちぎられるのをひしひしと感じながら、ゆっくりとこの世の終わりの旅を楽しむといい」

男はふと思い立つように誰かの獲物であった短銃を手の中で弄び、ちらりと槍で縫いとめられた男の下腹部に意思を向けた。

「男の性（さが）とはまったく素晴らしいったらないね。命の危機には自らの種を残そうとする――でも、もう必要がないだろう？」

その意味するところに絶望感が更に広がった。

辞めろ、辞めろっ、やめてくれっ。

悲鳴をあげようにもそれは喉の奥で張り付いたように漏れることもなく、ただ腹の中で渦巻いていく。

つんざくような銃声が響き渡り、灼熱が張り詰めた下半身を打ち砕いた。

音が、くわんくわんとどこか遠い場所で木霊する。

目玉が飛び出る程に見開かれたが、やはり悲鳴は口からではしなかった。

目の前が真っ赤に見えるのは、眼球の血管が破損したからに違いが

無いというのに、自分の意識は飛ばされることもなくそこにとどまっていた。
　下半身が打ち上げられた魚のように無意味に暴れ、紫闇の冷たい瞳が冷ややかに見下ろし、やがて口元に笑みを浮かべてみせた。

「一人は寂しいでしょう？　すぐにたくさんのお友達がやってくる。安心おしよ。
――次の人生は幸せになれるように祈ってさしあげますから。ああ、次などないのか。なんといっても世界の終焉まであなたは細胞の一つとなっても痛みを受け続けるんだから」

男は微笑し、ふっとその姿を消した。

消えた？……消えた、消えた！
歓喜のようなものが広がった。
下半身も腹も、相変わらず激しい痛みに違いない。だが、それでもその男がいなくなったという現実に身が歓喜した。

　ほっと息をついた。
何はともあれ自分は生きている。
他のものは殺されたが、オレは、運がいい。
腹に槍が突き刺さっているが、まだ生きて……

　空を見上げる自分の瞳に、いくつもの黒い鳥の影が旋回しながらおりてくるのを見た時に、またしても暗い絶望がゆっくりと体をなぞりあげた。

　死肉を求める巨大な鳥達が日の光に嘴（くちばし）を反射させて歓喜の声をあげている。
鳥の言葉はわからずとも、やつらが何を求めてやってきたのかは判

りたくないというのに理解できた。

運が……

ｗｅｂ拍手お礼小話つめつめ（５）（前書き）

＊今回諸事情がありまして、エルディバルトさんのみ詰め込みました。

ｗｅｂ拍手お礼小話つめつめ（５）

竜公に引き合わされたのは十五を越えた頃。
滅多に尊顔を拝することのできぬ相手の前で控え、緊張に手のひらから汗が流れていた。

存在すると言われながらその人のことを多く語ることは禁止されている。
竜公爵――上位貴族ですら滅多に会うことも無い相手。
陛下の頭上に冠を捧げる神官長。
「護衛など必要はありませんよ。あなたはあんな片田舎に来ることはない。聖都を護ることを勤めとなさい」
柔らかな声音に、そして何より驚いたのはその若さ。
自分よりも若い！
というかむしろ子供ではないか。
エルディバルトは驚愕したが、その人の前で生涯この方に仕えるのだと気持ちを新たにしたものだ。

「それがどうしてこうなったーっっ」
鉄格子をがっちり攫んで叫ぶ男の姿に、
「反響しますから叫ばないで下さいね」
アマリージェは反省文を書く為の用紙を運びながら軽やかに微笑んだ。

ばーい、地下石牢にて。

＊＊＊

「ダサイですわ」

きっぱりと突きつけられた言葉に愕然とする。
ダサい、って……なんだ？
「エディさま、その鬚。鼻の下の鬚。最悪ですわぁ」
にっこりと花のような微笑で言われる。
それはアレか。この毎日手入れをかかしたことのない鬚のことか！
「あなたにはこのダンディさが判らぬのだ。いい男は鼻の下の鬚！　手入れだってかかしておらんぞっ」
「言葉使いまでわざわざおっさんっぽくしなくても、まだ若いのにぃ」
おっさん！？
「仕方ないからルティが整えてあげますよぉ」
にっこりと微笑み、愛らしいメイド服を何故か着ている婚約者のルティアはナイフを閃かせた。
「あら……片方削るととっても御間抜け！　仕方ないからもう片方も削っちゃいましょうねっ」
「っっっ」
毎日時間をかけて整えていた鬚がっっ。
私の苦労がっ。
ばっさりと、綺麗さっぱり……
「ほらぁ、こっちのほうが男前」
「おまえなんか嫌いだっ！」
「ルティアはエディさま大好きですよー」
現在の鬚は一月必死に死守している！

――エルディバルト、婚約者にも遊ばれるかわいそうなナマモノです。
あれ、魔法使いってかわいそうなキャラしかいないかも？

＊＊＊

――ごめんなさい。
もうどうしてその文字を書いているのか判らない。
判っているのは、書かなければ自由は得られない、ということだ。
エルディバルトは痺れる手と頭でただその文字を書き連ね、かつんという音に顔をあげた。
「公！　竜公っ」
ぱっと喜びが広がる。
「冷えたりしませんか？」
やんわりと穏やかな笑みを浮かべるのはいつもの主だった。ほっと息をつき、エルディバルトは鉄の柵にしがみついて訴えた。
「公、私はなぜここにいるのでしょう。なぜここで反省文を書かなければならないのか」
「判らないですか？」
穏やかな竜公は小首をかしげた。
「――まったく」
自分は何か悪いことをしただろうか？　いいや、断じてない。主の機嫌を損ねることなど普通に考えても誰にもできない。何故なら、竜公は怒らない。
いつだって穏やかにそこに在るだけ。
もうずっと「ごめんなさい」ばかりを書いていると、自分が書いているのが「ごめんなさい」なのか「なさいごめん」なのか訳がわからなくなってくる。
ほとほと困り果てているエルディバルトに、竜公は穏やかに言った。
「じゃあ追加で一万字」
「……公？　公っっっ」
エルディバルト、まだまだ石牢の住人確定。

＊＊＊

「ルティア様！」

ひょこりと顔を出した侍女服の女性の姿に、アマリージェは危うくお茶を頼みそうになってしまった。

ルティア――現在石牢の住人となっているエルディバルトの婚約者だ。

ヘッドドレスのサイドに淡いブラウンの髪をかるく結って垂らした相手は、小さな唇を少しだけもちあげるようにして微笑み小首をかしげた。

「マリー、ひさしぶりですねー」

「その格好は何なのです？」

「エディ様ってば侍女の腰に触ったのよですよー」

「はぁ」

「私いがいの女性に触れた罰として、戒めの為に着てるのですー。可愛いでしょ？」

ふふっと笑う女性に、アマリージェは頭がくらくらとした。

「それで、あの今日は？」

「エディ様がお帰りにならないから、迎えに来たの。王宮に報告にも来てないの。どうせ大好きな竜公にべったりしているんでしょうけど」

竜公を主人としているが、生憎とその主人は滅多にエルディバルトを近くに置いてはくれない。ここぞとばかりに張り付いているのだろうとオンナの勘を働かせたルティアだが、

「報告書でしたら兄が済ませてあります。エルディバルト様は、あの」

アマリージェは視線を逸らし、ココロの中でエルディバルトに謝った。

「――尊き人に命じられまして、現在は彼の方の屋敷地下の石牢です」

その言葉を聞いたルティアは声をあげた。

「まぁ！」

大きく見開かれた瞳には――完全に喜びが混じっていた。

アマリージェは心からエルディバルトに謝罪した。予想はついていた。

そして予想通りだった。

「エディ様ってば可愛い！　閉じ込められてるわっ、猛獣みたいっ」

「なんであなたがいるんだーっっ」

アマリージェの謝罪はエルディバルトに届いただろうか。

膝枕だったじゃないですか！
あたしはゆっくりと覚醒した自分が、男の腕に抱かれて胸元に頬を付けて寝ていたことに愕然とした。
肩にまわされた腕とか、腹部に回る腕だとか、香る――花だとか。

花……むせかえる程の花の香り。
確かにこの男はよく花を抱えているけれど、こんなに息が苦しく感じるむせかえる花の香りをまとっていることはあまりない。まるで香水を振りまいたかのようだ。

そして、抱く腕が小刻みに震えていて、あたしの内面を駆け巡った動揺が沈んだ。
強く抱きしめながら、声を殺して、泣いている？
見開いた瞳がゆるく伏せられ、あたしはほんの少し体の力を抜いて、相手の心音を求めるように体を傾けた。
触れる体から相手の寂しさや悲しさが流れてくるような気持ちがして、あたしは胸が締め付けられた。

どうしたの？
何がそんなに悲しいの？
ねぇ……あたしが、いるわ。
一人でそんな風に声を殺して悲しんだり……しないで――

小刻みに震える腕の中、何故悲しんでいるのか理解しようと身じろぎする。けれど、どう口をひらいてよいのかわからなくて、あたしは戸惑いの中にいたというのに、ふいに男の腕がきゅっと強くあたしを抱きしめて囁いた。

「発育不良かな……まあ胸は揉めば大きくなるっていうし」

あたしはがばりと体を起こし、思いっきり相手の首を締め上げた。

「な・に・か・し・ら!?」

「お、起きてた?」

「離せ、この女の敵っ」

あたしは力まかせに相手の腕の中を抜け出し、気づけばすでに夕刻近くだということに眉を潜めた。

箱型の馬車の中は薄暗く、窓からはオレンジ色の日が差し込んでいる。

昼食も食べることなくぐっすりと熟睡していたということだ。しかも、この男と一緒にいるというのに熟睡！　なんという危険な真似を。

ああ、でもこの男は言っていたじゃないか。逃げられたり嫌がられると追いかけたくなるのだと。あたしが逃げたり嫌がったりしなかったから、追いかけるような気が起きなかったのかもしれない。

――男心って判らないけど、この手は結構いけるかも。

今度から逃げないで立ち向かうのよ、リドリー・ナフサート。

あたしの新たなる決断とは裏腹に、馬車の後ろで騒いでしまった為にほかの乗客の視線が胡乱気に向けられ、慌てて愛想笑いでやり過ごした。

それからそそくさと横を向いて窓の外を確認すれば、視界には放牧されている牛が見えてくる。放牧地があるということは、そろそろ町があるということだろう。

次の町で一泊して、翌日の昼にはその次の町――汽車が開通して

いるもっと大きな町へと入れる。それから一日かけて汽車に揺られれば聖都へと入る。馬車での移動が一番多くて、荒野を通るのは今日だけだから、案の定強盗なんぞばかげたものがでることもなかった。

今までの人生でそんなものに関わったことなんぞ一度も無い！

そんなのはただの新聞ダネだ。そうそうあるものか。

ただ、魔術師に言われていると何故かそれが本当におこるような気になってしまうのだ。もしかしてあたしって意志薄弱？　もっと強くないと色々と危険かもしれない。しっかりしなさいリドリー・ナフサート。

あたしは心の中で拳を握り締めた。

――やっぱりね、そうよね、そもそもこの優男なんぞちっとも役にたつわけがないじゃないか。むしろ、そうむしろ……

「今日は一番良い宿に泊まろうね！　なんと言っても婚前旅行の一日めだから」

完全無視を決め込むつもりで窓の外を眺めているあたしの両肩にやんわりと手を置いて、低いテノールで囁きかけられあたしは目を思い切り見開いた。

「婚前旅行、ああ、でもやっぱりそれはよくないかな。道徳とか倫理とか」

吐息のように囁くその言葉に、あたしはほっと息をついてこくこくとうなずく。硬直した体のままだったが、その意見は大賛成だった。

そうよ！　倫理とか道徳とか常識とか考えればそんな考えはよくない。

よくぞ言った。変態だと思っていたけれど、やっぱり腐っても神官――二次醗酵が終わっていても神官長。あたしは胸をなでおろし、ゆっくりと振り仰いで微笑んだ。

偉い！

一応の常識を持っていてくれたことにあたしは心からほっとした。

「そうよ、あたしもそう思うっ」

「だよね。じゃあ、今夜は初夜ってことで」

「――は？」

「婚前交渉が駄目なら、結婚しちゃえばいいんだよ。大丈夫、たいていの書類はどうとでもなるし、ぼくのサイン一つで何でもクリア。あれ、もしかしてぼくってめちゃくちゃ便利かも」

常識はどこにありますか！

そんな無駄な便利さは必要がありませんっ。

「あたしとあなたはまったくの他人です！」

「こんなに愛しあっているのにっ」

実は醗酵が進みすぎて異臭を放っていませんか！？

「おあいにく様っ、その愛は一方通行です。進入禁止っ」

自分でも何をいっているのか判らなくなってきてしまいましたが、もう動揺がすごすぎる。

結婚？

付き合った覚えもなければ、求婚された覚えもないわよっ。

……ないわよね？

あれ、あったかな――あたし自分の思考能力に若干自信がありません。

毎日のように色々といわれているから流しきっていたけれど、本気じゃないわよね？

結婚？
あたしとこの男が？
いやいやいや……いや、じゃ、ないけど。
イヤじゃない？　え、あたしイヤじゃないわけ？
コレよ？　アレよ？
確かに顔はいいけど、えええ？
あたし――あたし、病気？　末期？
駄目だあたし。イカレてる。待って、待ちなさいリドリー・ナフサート！

まずは付き合うとか付き合わないとかが先でしょうっ。あたし達はまだそういう段階ではないはずっ。正しい男女のお付き合いとか、世の中にはあるわけですよ。
少なくともこの現状はちっとも正しくありません。

……あたしマーヴェルとデートらしいデートした覚えもないけど。

「リドリー」
ふいに寂しそうに瞳を伏せて名を呼ばれ、あたしはうぐっと喉の奥で呻いた。
「ぼくと結婚してくれるって言っていたじゃないか」
「――」
「ぼくはずっとその言葉を信じていたのに。もしかしてぼくのこの男心を弄んでいたというのかい？　ぼくは君の言葉を信じて強く生きていたのに。だのに……君は、純真なぼくの心をもてあそんで捨てるの？」

いつのまにか包まれた手のひら。
魔術師の細くてしなやかな手に包み込まれ、はみ出した指先にそっと口付けが落ちた。途端にあたしは居心地が悪くて身じろぎしてしまう。

「そ、それは……子供の頃のことで」
じわじわと訪れるなんとも言えない罪悪感。
確かに今ではきちんと覚えている。間違いなくあたしはこの男と結婚すると言いましたが。そんなのは子供の頃のことで……あの、離して下さい。
子供の戯言としてさらっと流して捨てておいて下さい。だって普通信じませんよ！　八歳児の「結婚しようね」なんて麻疹（はしか）みたいなものではありませんか。

「君の為にぼくは婚約を破棄したというのに」

衝撃の言葉にあたしは目をむいた。

婚約を破棄！

――婚約、あれ……まって、あたしの婚約ってどうなってるんだろう？　今まで深く考えてなかったけれど、あたしとマーヴェルの婚約って、破棄されてるのよね？　今頃はきっとマーヴェルとティナは邪魔なあたしがいなくなって二人で結婚なんかしちゃって、もしかしたらティナってば子供とかいたりするかもしれないわよね？
あたしはがばりと顔を魔術師から背け、心臓がばくばくと音をさせるのを感じた。
会いたいなんて思いはしないけれど、すっごい気になる。

あたし……二人が幸せにしているのを見て、今はちゃんと笑えるのかしら。
もう吹っ切れたと思っているけれど、マーヴェルに笑って「おめでとう」って、言えるのかしら。
すごい、心臓が耳に引っ付いているかのようにばくばくと鼓動する。

「ああ、相手の女性のことは気にしなくていいよ？　もともと政略的なものだし、彼女ははじめっからぼくなんて好きじゃなかったし。今は好きな男と一緒に楽しく暮らしているから」

能天気な男の言葉は右から左に流れていった。

あたしは眉をぐぐっと潜めて、この問題については一応母に会ったら聞いておこうと考えを収めた。

ただし、母があちらのことをどの程度把握しているのか判らない。なんといっても母は郷里のことを毛嫌いしているフシがある。それもこれも父さんが仕事人間過ぎて母を構わなかったからに違いない。

構いすぎるのも色々と問題がありそうだけど。

世の中はきっと程ほどが一番なのよ。

平和で平凡で程ほどにのんびりと！

それがきっと幸せというものであって、非凡なコレとかは幸せとはまったく間逆の生き物ではないでしょうか！

「君が心を痛めることなんてないんだよ」

微笑交じりの言葉に、あたしはやっと正気を取り戻し、

「え、なにが？」

と問い返した。

「式は町に戻ったらしようねって話」

「そんなこと言ってなかったでしょっ」

「聞こえてるじゃないか」

唇を尖らせて魔術師は言うや、ふいに顔を伏せてあたしの指――薬指の根元に軽く歯をたてた。

小さな痛みに身をすくめる。

文句をつけようと落とした視線の先に、銀色の指輪を認めてあたし

は目をむいた。
「なにこれっ」
小さな痛みを伴って唇が離れると、そこには銀色の輪が当然のように残されていたのだ。
銀色に輝く、艶やかな指輪が。
「婚約指輪」
「何勝手なことしてるのっ」
「だって――君はぼくのものだもの」
爽やかに言い切る男は普通の男のように微笑んだが、あたしは慌てて自分の手を取り返して指輪に指をかけた。
銀色の指輪には細かい文様が刻まれている。文字を文様のように掘り込んだ綺麗なものだが、どれだけ引っ張ってもそれは抜けなかった。
「抜けないぃぃっ」
「抜く必要はないからね」
どんな呪いの指輪ですか！
「で、ぼくのリトル・リィは婚前交渉と正式なる初夜とどっちがいい？」
――これは、嫌がられれば追いかけるの法則にのっとってむしろ受け入れたほうがいいのか、それとも断固拒絶したほうがいいのか……
あたしの面前にはあたしの手を握りこんだまま幸せそうに微笑む――悪魔が一人。
あたしはだらだらと背中に汗を感じながら、いつもなら助けてくれるアマリージェを思った。

マリー、正しい解答を教えて。
いますぐ！

暮れる町並みと悪い女

「怖いことなんて少しもないよ。ぼくが君を傷つけるなんてあるわけがない」

なぞられる指先は、触れるか触れないかのぎりぎりの空間をさ迷う。

ひんやりと冷たい気配だけが産毛をなぞるかのように触れてくるから、あたしは小さく身震いするのを押さえ込んだ。

「ぼくの唇が君の瞼に、頬に触れて、可愛らしい唇の頂きをほんの少し吸い上げる。下唇を舌先でなぞり上げれば、きっと甘い味がぼくにも、そして君にも小さな漣（さざなみ）を与えてくれる」

親指の腹が、軽く唇をなぞる。

その瞳は濡れたように艶めいて微笑を称え、あたしはどうしても落ち着かない気持ちに喉の奥に自然と溜まってしまった唾液を苦いものでもあるようにゆっくりと嚥下した。

それすら――羞恥の源であるように。

「唇を開いて。戸惑いと一緒にぼくの舌を受け入れて。歯列をなぞりあげて、その奥をもっと探らせて。舌と舌とを絡み合わせて、君の味をゆっくりと堪能したい――指先は穏やかに背中をなぞり、君の背骨をたどりやがて腰の窪みへとたどり着く。君の体温が上がり、鼓動がぼくを……」

あたしはわなわなと震える手をぐっと伸ばし、その口を思いっきりふさいだ。

「それ以上言ったら痴漢と変態行為で警備隊に突き出す！」

絶対に、やるっ。

「挙句あんたが神官長だとバラしますっ」

この歩く新聞種めっ。

――神官長、聖職者という立場でありながら痴漢、変態行為で拘留。クビを切られておしまいなさいっ。！

「ふふ。そんなこと言っているけれど、リトル・リィだってちょっとはドキドキした癖にぃっ」

あたしはばくばくと鼓動し、あがってしまった体温に何故か後ろめたさを覚えてギッと力いっぱい睨みつけた。

そんなことは無い！……とは断言できかねた。

悔しいことに。だがそれを認めてやることは断じてできません。ええ、絶対に。

「体が疼いてしたくなるのは人間として正し――」

「だ・ま・り・な・さ・いっ」

あたしは低く唸るように言い、丁度ゆっくりと速度を落とし、完全停止を果たした馬車の中――そう！　ここはまだ馬車の中だというのに！――視線のみで殺せるならば二度程も面前の男を惨殺し、引きつった微笑みを向けた。

「あたしが間違っていました」

「そうだよ、ぼくはいつだって正しい」

ええ、ええ！

あたしが間違っていました。

「毅然ときっぱりと！」

「うん？」

「あなたとお付き合いするのはお断りですっ」

あたしは悪いことをしましたでしょうか。

あたしはですね、１７年間平和とか凡庸とかを愛して生きてきた訳

ですよ。この一年ちょっとは勇気をもってそれまでの自分を捨て去り、もうちょっと自由に伸びやかに、自分の為だけに生きようと努めて参りました。

じろじろという周りの視線が激しく痛いです。

以前に一度利用はしたことがありましたが、これといって訪れたことは無い町です。この町とあちらの町との間にはちょっとばかり坂があって、前回よりも今回のほうが随分と時間が掛かりました。

ほんの少し自分の町よりも人が多い感じの大きな町。大きな市もたつのだというこの町で、激しく注目されています。

うっとうしい生き物が泣いているので。

「酷いよ、酷いよぉ。リトル・リィが虐める」

大の大人が、えぐえぐと泣いています。しゃがんで、なんだか小さくなって、道端で。

本気で放置して逃げたいのですが、左手の手首はしっかりと掴まれている有様。

「あ、あのねぇ」

自然と声が呆れを含んだ。

「いい加減に泣くの止めなさいよ」

「だってリトル・リィが酷いんだ」

「……」

「ぼくの心を散々もてあそんで捨てるんだーっ」

でかい声で言うなぁぁっ。

ちらちらと遠慮がちに見ていた通りすがりの人にまでじっくりと視線を向けられ、人によってはひそひそと自分の連れと話し、あたしと視線が合うと慌てて顔をそらして立ち去っていく。

あたしは羞恥で頭が煮えてしまうのではないかと思いながら、自分の鞄を持ち直した。

片手だからものすごくやりづらい。
「人聞きの悪いことを言わないでよっ」
あたしの声は自然と潜まっているのに、この腐れ頭ときたら声の音量などお構いなしだった。
「人なんて関係ないよ。ぼくはずっと、ずぅっとリトル・リィだけを愛しているのに。君の為ならぼくはそれこそ何だってしてきたのに。何だってできるのに。ぼくのことをっ」
ああああ、埒があきませんよ。
人間ってこんなに水分が出るものでしょうか。あんまりみっともなく目元を腫らしている美青年なんてちっとも絵にもならない。
あたしは嘆息しつつ鞄をその場におろし、ハンカチを取り出して乱暴にヤツの鼻に押し付けた。

とりあえず鼻はかんでください。
こっちが絶望的な気持ちになるから。
「まぁ、どんな悪女かと思えば」
突然聞こえた声に、あたしは「は？」と振り返った。
振り返った先、買い物用に籠を抱えて立つ細身の女性の姿に、あたしは小さくうめいた。

「ターニャ、さん？」

「リドリー、あんたもなかなか男泣かせね」
笑いを隠さずに言うエプロンをつけた女性は、ターニャさんだった。
それはつまり、あたしの雇用主であるマイラおばさんの娘さんにして、アジス君の母親。あの若干十一歳の男前の産みの親――

そしてからからと笑っていたターニャさんだったが、目元を腫らしてえぐえぐと泣いていた男の顔を確認して引きつった挙句、持っ

ていた買い物籠をぼとりと落とした。
「尊き人(コーディロイ)っ」
そうでした。
この女性はあの町の出身で――そして、アジス君の母親でした。

あたしはなんとなく暗澹たる気持ちになって夕暮れに沈む空を眺めてしまった。
あー、今日は良い天気だったなぁ。

ほぼ寝てたけどねぇ……

＊＊＊

「神官様はやっぱり精進料理とかなのかしら」
「気にしないでいいですよ。ぼくは好き嫌いなく何でもたべれますから――それよりも、何かぼくにできることはありますか？　夕食をご馳走になった挙句に泊めてもらうなんて、何かさせてもらわないと心苦しい」
「とんでもありません！　どうぞゆっくりとお休みくださいなっ」
外面のいい男っていうのはなんというか信用できませんね、まったく。
あたしはターニャさんからさやえんどうのすじを取るのを頼まれ、ぴーっとすじを引っ張りながら、ふ・ふ・ふっと奇妙な笑みが口元から出るのを止められなかった。
ターニャさんは心優しくもあたし達に一夜の宿を提供してくれ、完全にあたしとあの男とを婚約中だと勘違いし、挙句「結婚前っていうのは気持ちが不安定なものなんですよ」などと余計なフォローまでしてくれた。
あたしが何を言っても彼女は「照れなくていいのに」としかとってくれなかった。彼女の目は悪戯はちゃんとわかっているのよ？

というような母親の顔で、あたしの左手に光る指輪をちらちらと確認するのだ。
そう、呪いの指輪はその邪悪さを遺憾なく発揮していたのだった。
当然、あの腐れ頭ときたら持ち前の外面のよさでもって「ええ、判っていますよ。彼女はそんなところも可愛いんです」なんて言うのだ。
もう抵抗する気力も無い。
「部屋はアジスの部屋で構わない？　二人一緒でいいわよね」
意味ありげににんまりと言われ、あたしは慌てて一旦どこかに消えてしまっていた抵抗する気力を必死に手繰り寄せた。
「タッ……――っ」
「駄目だ」
低く聞こえた声は、部屋の片隅で安楽椅子にもたれて禁煙中ということでハッカの葉をつめただけというパイプを燻らせていたご老人――ジオさんだった。
眼光の鋭い老人は、真っ白になった白髪だがその貫禄は半端なく自分の存在を示している。
「いくら婚約中と言えど、結婚前の男女を同じ部屋に泊めるなど分別の無い」
婚約中などという事実も現実もありませんが誰も信じてはくれません。
「もぉっ、お義父さんってば頭が固いんだからっ」
「ワシの目が黒いうちはそういう無分別は許さん。娘さんはアルジェスの部屋を使ってもらえ。そっちの若いのはワシの部屋だ」
「ええ、それで構いません。ありがとうございます」
外面大王は丁寧に応えた。
――内心は判らないが。
頑固そうな老人は年齢を感じさせない淀みの無い言葉で言い切り、用は済んだとばかりに本に視線を落とした。

あたしは自分の中に湧き上がるものが恋心であったとしても否定しない。
お祖父様、素敵ですっ。とてもすばらしい。以前心の中で偏屈親父とか会いたくないとかそんなことを思ってしまって心よりお詫びいたします。って、あたしは瞳を瞬いた。
すじの取れたさやえんどうのザルをターニャさんに届けながら、
「ターニャさんのところってもう一人息子さんがいましたっけ？」
「あら、なんで？」
「アルジェスって、旦那さんはハルさんですよね」
あたしの記憶が確かならば。
小首をかしげるあたしに、ターニャさんは「ああっ」と笑いながら言った。

「アジスの本名」
「本名？」
「なんだかね、恥ずかしいんですって。アルジェス・フィアフェイスって知ってる？　美貌の騎士の戯曲に出てくる主役なんだけど、そこから付けた名前なのよ。はじめのうちこそ普通にアルジェスって名乗っていたのだけれど、物語を知った途端にあの子ったら顔を真っ赤にして『アルジェスなんてイヤだっ』って。ふふ、ちょっと女好きの、でも素敵な騎士なんだけれど。あの子は相当イヤみたいで。以来あたし達はアジスって呼ぶのだけれど、ほら、お義父さんたら頑固だから」
からから笑い、ターニャさんはあたしの肩口を叩いた。
「そのあの子が騎士になるって言うんだから、笑っちゃうわよねぇっ」

本人に言っちゃ駄目よ？
ものすごく怒るから。
あたしはきっちりとターニャさんに口止めされたが、次にアジス君

と顔を合わせた時には笑ってしまうかもしれない。

笑いを堪えながら台所と食事室とを隔てている廊下へと出ると、食事室にいたはずの男が出入り口の淵に手をかけてにっこりと笑って身を屈めた。

「ぼくと付き合うのはお断り？」

捨てられた子犬の顔をして半眼を伏せて囁く。

あたしは自然と一歩退いて視線をそらし、訳もなく自分の指を組み合わせて指をもてあそんだ。

「ぼくのこと、嫌い？」

殊勝な顔なんてしないでよ、この卑怯者！

あたしは上目遣いに睨み返した。

「嫌い……じゃ、ない」

しどろもどろにこぼれた音は、我ながら弱弱しくてあたしは眉を潜めた。

「でもっ、きちんと順序ってものがあるでしょう？　あんまり強引過ぎて、あの……困るの。ちゃんと……付き合ったり、お互いのことをもっと理解した、り」

どうしたら理解してくれる？

自分だって自分の心に全然責任が持てない。

嫌いとは言えない。

好きなの。

好きだけれど……どうしたら、いいのか判らないのよ。だってあなたときたら一直線に寝台に連れて行こうとするんだもの！

「ああもぉっ。食べちゃいたいくらい可愛い。まったく今までそんな表現なんてろくでもないと思ったものだけど、ああ、本当に君ときたら食べちゃいたいくらいに可愛い！」

ぎゅっと抱きしめて強く言うから、あたしはかぁっと赤くなった。
「食べるのは夕食だけにしてくださいな。ふふ、仲直りしたみたいで良かったわねリドリー」
台所から食事の乗ったプレートを手にターニャさんが顔を出し、あたしを腕に抱いたまま男は言った。

「食べちゃいたいくらい可愛いけど、でもどちらかと言えば食べてもらいたいかな」
「まぁ、尊き人は本当にリドリーがお好きなのね」
まったく平然と話し合う二人の間で、あたしは羞恥で真っ赤になりながらこっそりとヤツの腹をつねりあげた。

あたしの話はちゃんと通じてますか？

彼の哀と彼の愛

幾度か足を踏み入れたことはある場であったが、それでも緊張の為に無意味に部屋の中を見回してしまったり、おかれた茶を飲んでしまう。

聖都――ファイエディラシェスの王宮を囲むようにして造られている高位貴族が暮らす邸宅とは少しばかり外れた場にある煉瓦造りの邸宅は、程よく蔦が絡まり味のある建物だ。

それでも貴族の邸宅としては小規模なのは、そこに暮らしている女性が貴族では無く一般の女性である為だろう。

ただし、彼女を庇護しているのは彼女の実の兄である男爵――決して不自由な暮らしではないと思わせるものが調度品にも見て取れる。

白磁のカップには蔦と小さな小鳥が踊り、他の品々にも全て同じような柄が刻まれている。それは一種の彼女の為に作られた紋章のようなものなのだろう。商人に嫁してしまった為に貴族の道から外れた女性の為に。

「よく訪ねてきてくれましたね」

女主は穏やかな口調でそう言った。

その声音に、そしてその眼差しに、雰囲気に、泣きたいような気持ちが湧き上がった。鼻の奥から感情がせりあがり、つんっと痛む。

「そんな言葉は期待していないのでしょう？」

――彼女は当初の穏やかさと優しさをにじませた言葉を撤回した。

「むしろ、よく私の前に顔を出せましたね――船長（ふなおさ）の息子」

理解していたことだが、歓迎されてはいないようだった。

彼女と同じ瞳――ブラウンの柔らかな眼差しをきつくして、唇を引き結んで――似た雰囲気を全て払拭させて、彼女の、リドリー・ナフサートの母親である女性は持っていた扇をぱちりと閉ざした。

一瞬彼女（リドリー）に憎まれているような錯覚にすら陥る。

そう、面前の女性は決してリドリーではない。
　マーヴェルの知るリドリーは物静かで控えめで、妹を気にして、周りばかりを気に掛けて自分の幸せを追いやって――それでもおずおずとマーヴェルを伺って、笑いかけると驚いたようにぎこちなくふわりと……幸せそうにふわりと、微笑んでくれた。
――信じていいの？
　そう、信頼を求めて。
マーヴェルは胸に息苦しさを覚えて自分の胸元に手を当てて小さく喘ぎ、息を吐き出した。
「エレイズさん。リドリーはいますか？」
「いないわ」
きっぱりと彼女は言った。
　その眼差しにはあざけるような色合いすら見える。その瞳を見返し、マーヴェルはひとつの結論を引き出した。
「では、どこにいるのか教えて下さい」
「知らないわ」
「いいえ――あなたは知っている。あなたが唯一愛している娘の居場所を知らない筈なんて、無かった。俺は……なんて迂闊だったんだろう」
　自信に満ちた眼差しを前に、確信が持てた。
自分の中につらさが押し寄せる。少し考えれば判りきっていたはずだ。なのに何故彼女のことを思い浮かばなかったのだろう。
　呆れる程の愚か者だ。
エレイズは口元を緩めた。
「一年も放置した癖に今更なにをいっているのか判らないわ」
「放置なんてっ」
「どちらにしろ。あの子はあなたとの結婚がイヤで逃げ出したのですから、あなたに伝えるべくことなどありはしないわ」
「エレイズさんっ」
――あなたとの結婚がイヤで。

それはあまりにも事実で、マーヴェルは自然と拳を握りこんだ。
結婚を楽しみにしていると思っていた。彼女の瞳には確かに激情のような愛は無かったけれど、確実に想いがあると信じていた。手を重ね、抱きしめ、ふれあい、ゆっくりと確実に築いていけるのだと……浅はかにも思っていたのだ。
「リドリーを……愛しているんです」
嗚咽のような言葉がもれた。
恥も外聞もなく、どうしても彼女のことを知りたいのだと――必死に、どう示せば彼女の心は折れてくれるのかと感情が渦巻いていく。
「私の夫も」
ふいにエレイズは言葉を硬くして続けた。
「私の夫も――愛などという言葉を容易く使う男だった。それを信じたこともあったけれど、私の愛する娘とたいして年齢の変わらぬもう一人の娘を突きつけられたわ」
自らを嘲笑うかのような笑みに、言葉を続けられなくなった。
――そうじゃない。自分はっ。
咄嗟に言葉が吐き出されそうになったが、その言葉は喉の奥で凍りついた。
……何が違うのだろう。
裏切ったのは自分だというのに。
悔しさや後悔とがない交ぜになって喉の奥が震える。自然と頭が下がった。
「会いたいんです。会って……謝りたい。愛しているのだと、伝えたい」
エレイズはその瞳を更に冷たい色を称えたが、すっと視線を逸らした。
「ティナに聞けば良いでしょう」
マーヴェルは瞳を見開いた。
下がっていた頭ががばりとあがる。

「あの娘が素直に教えるとは思わないけれど」
「ティナはっ、ティナがリドリーの居場所を知っている？」
信じられない思いで声のトーンが跳ね上がる。エレイズは不愉快そうに眉を潜めた。
「もう話すことは無いわ。出ておいきなさい」
「エレイズさんっ」
エレイズはドレスの裾をさばき、身を翻した。それ以上何も言う気は無いと訴える背に慌てて手を伸ばして腕をつかもうとすれば、それまで気配すら殺すように控えていたこの館の執事がすっとマーヴェルとエレイズとの間に身を滑らせて軽く一礼した。
「表までご案内いたします」

＊＊＊

机の上にはナイフや木を削って作られた、ちょっと不恰好なブーメラン。手作りのペーパーナイフ。木彫りの犬。
ほほえましい思いにそれをひとつひとつ眺めていた。
アジス君は結構器用なのか、木彫りの置物だとかが色々作られていて——その中に小さなブローチがあった。
「……これは、見てはいけなかったか」
あたしは親指と人差し指でつまんだソレ。
木で枠が作られ、中は石がはめ込まれている。なぞると柔らかな感触のある石で、よく子供達が削ったりして遊ぶものだ。
石は削られている。
細かく、丁寧に彫刻刀で細工されているのは女神だ——おそらく女神。豊穣の……
「マリー、かな」
やばすぎる。
なんて可愛いんだろうか、アジス君。いや、アルジェス君？——うっ、駄目だ口元が緩んでしまう。

二人で一緒にいればいつも喧嘩しているのだが、でもきっとすごく彼等にとってその時間は大事なものなのだ。
アマリージェも憎まれ口を叩くけれど、憎からず彼を想っているようだし気にしている。
「うわ、なんかこっちが照れる」
かわいいかわいいかわいすぎるっ。
あたしが身もだえしていると、「あああ、リトル・リィが可愛いっ」とのしりと背中に重みが掛かった。
途端にあたしの中の、なんだかもぞもぞするような幸せな気持ちが霧散する。

「ノックという言葉を知ってますか？　それから気配を殺して部屋に入るの止めて下さい」
心臓止まったらどうしてくれる。
あたしは辛らつな口調で続けたのだが、背後の妖怪はそのままあたしの左手を自分の左手でいったんぎゅっと包み込み、薬指にはまる指輪をなぞった。
「あんまり長くここにいるとジオさんに怒られるんだ」
「そうでしょうね」
「でもちょっとだけならいいって」
うわっ、この傍若無人の塊のような男が、なんとこの部屋を訪れる許可をジオさんにもらって来たというのですか？
あたしはその意表をつく行動に笑いたいのか純粋に驚愕しているのか良く判らなくなった。
「だから、ね？」
背後からあたしの耳の後ろに鼻を押し当てるようにささやかれ、あたしの身が自然と強張る。次にぶっ飛んだことを口にしたら確実にその腹に肘鉄を食らわせてやるっ、と身構えた途端、テノールが耳に触れた。
「ちょっとお話しよう？」

やさしく囁かれた言葉に、あたしは一旦思考を停止させた。

……お話？

「昔話もいいけれど、今の話をしよう。君の話でもいいし、ぼくの話でもいい」

お話？

「お互いのことを――あれ、どうかした？」

お話って、それだけ？

いや、いやいや？

拍子抜けって、あたし別に期待とかしてませんからねっ。

あたしは自分の思考に呆然として、思わずぐるりと身を翻してにっこりと微笑んでいる男の頬を思い切り張り倒していた。

「え、え、なんで！？」

あたしだって知りませんっ。

二人の関係（ルティアと婚約者）

「当代様」
それは極普通の食卓風景だった。
物静かな黒髪の青年と、そして彼の婚約者として滞在を許されている――といったところで、この館はもともと彼女の祖父の暮らす館だったのだが――ルティアとが、毎日定められた食事の時間を共有する。

当時の少年は肉類を一切食べようとしなかった為に、食卓にあがるものは決まって野菜をメインとした料理であった。
ルティアの食事にはわずかに魚や肉が入るが、それは館の主が「付き合う必要はありませんよ」と告げた為だ。
「エルディバルト様はいついらっしゃるのですか？」
作り物めいた秀麗な顔立ちに心は見られない。
「来ません」
少年は穏やかに言った。
「こんな場で隠居のように過ごすのは彼の為にもなりません」
やんわりといわれ、ルティアは吐息を落とした。
子供の頃から暮らしていた屋敷だったが、主がかわってからというものますますこの館は陰気さを増してしまったようにさえ思える。
人の出入りは絶え、無駄な音を失ってしまった屋敷。
生きているものなどいないかのような、静寂の館。
「会いたいのですか？」
「先日、階段から落ちそうになったのを救っていただきました。お礼をきちんと致したいのです」
「でしたら会いに行けばいいですよ。移動がしやすいようにあちらとこちらを扉でつなげてあげましょう」
会話は途絶えた。

会いに行きたいで会いにいけるような性格ならば悩みはしない。ルティアがこっそりと吐息を落とすと、少年は穏やかに言った。
「エルディバルトが好きなのですか？」
「はい」
面前の相手に嘘など言って通じる訳がない。
面前の男は彼女の祖父と同じイキモノなのだから。
「では今度呼んであげましょうね」
やんわりといわれ、ルティアは複雑だった。
――私はあなたの婚約者なのですよ。
そう告げたところでまったく意味はなさそうだった。いつも共にいても共になどいない。触れ合うこともない。
名ばかりの二人の関係。
誰にでも優しいヒト。誰より自分に厳しいヒト。悲しいヒト。そして――ヒトの魂を食らう化け物。あの祖父と同じイキモノ。
汚らわしい……そう心の深い場所で思ってしまう自分は、絶対にこの男を受け入れることはできない。
だというのに、いくあての無い自分はこの男の許に嫁ぐのだ。それは恋ではなく愛でもなく情でもなく、ただそうあれというだけ。
「いつか、あなたにも好意をもてる相手ができると良いと思います」
ルティアは自分の内にある恋心に気付いていたから、面前の男に素直に言えた。
ルティアは恋をしていた。
十一の年に自らの婚約者となった青年の後ろに控えた、騎士に。
物語の騎士のように麗しいわけではない。むしろ無骨さもある。けれど憮然とした顔立ちに生きている人間を感じて、気付けばその人ばかりを視線で追うようになってしまった。罪だとは思わなかった。

婚約者と自分の間には心のふれあいなど何一つとしてない。そしてまた、相手も自分に何も求めてなどいない。面前の男はただ「生きて」いるだけの抜け殻。

「私はみなを好いていますよ」

「大好きで大好きで欲しくてたまらない。そんなヒトができることを……私は願うわ」

面前の少年はそんなものは戯言だというように笑って――それで終い。

日々は怠惰に、静かに、しめやかに。

風化するのを待つようにただ静かに流れた。

ひっそりと、息を殺して。自らを殺して。

その人が、はじめてルティアに触れたのはあの日。

しばらく様子が変わったと思っていたあの日。半年に一度、かの青年は人を寄せ付けない禍々しい程の気を見せる。そんなおりには誰も近づけようとしないから、またそれかと思えばその荒れた気はゆるりとまったく別のものへと変化していった。

半月は続く癇癪を、どう沈めたのかと首をかしげた矢先のことだった。

顔を合わせた途端、彼のヒトは両の手を伸ばして突然ルティアを抱きしめた。

――肉欲的なものなど持ち合わせていないのではと思っていた相手からの抱擁は、ルティアに驚愕をもたらした。

「ルティア」

「当代……さま？」

「婚約を破棄しよう」

吐息のように囁かれた言葉に、ルティアはさらに瞳を見開き、がばりと離れた相手の顔をまじまじと見た。
いつだってただ穏やかな顔をしているだけの相手が、今はとても生きた人間の顔をして、口元に微笑まできたえているのだ。

「君も、そして私も自由だ」
「恋を……なさいましたね？」
あてずっぽうではなく、確信を持って言った。
「恋？　これは恋だろうか？　もっと……なんだか醜い感情ではないかな。私は自分にこんなに欲があるとは知らなかった」
「恋は醜いものです。嫉妬や猜疑心や、欲。でもとても素晴らしい」
明らかにいつもと様子の違う相手に、ルティアは微笑を称えた。
無機質にただ日々を暮らしてただ生きていただけの人。冷たい体にはじめて熱をもったかのように。

「あの子の為……いや、自分の身勝手で酷いことを言っているのは承知している。
ルティア、君と結婚することはできない」

「お喜び申し上げます。ですがどうぞこのルティアの言葉をお心に御留め下さい」
相手の侘びなど無視して微笑むルティアに、穏やかなその人は囁いた。
「なんだい？」
「先代は自らの妻を、子を――滅してしまわれた。愛が失われたのではありません。愛しすぎたのでございます。どうぞ……どうぞあなたの心に芽生えたその愛を実り豊かなものに」
どうか――あなたの身に絶望の津波がおしよせることのないように。
愛は無い、恋も無い、情もない。

――尊敬でもなく、この二人の間にあるものはいったい何であったのか。ただの風。ただの空気。ただのまやかし。

真実があるとすれば、保護。

放り出されるべくいた娘を、ただ保護する為だけにこの面前の青年は受け入れただけ。保護した娘を、今手放すという。

自らの身勝手で。

それを腹立たしいなどとルティアは思わなかった。むしろ喜ばしいと思ったのだ。

欲も心も捨てた人が、今はただの身勝手な男だというのは実に素晴らしいことだと思ったのだ。

元婚約者は瞳を細めた。

「エルディバルトを呼び寄せよう。君の愛が実るように」

「……あの方には婚約者がおりますわ」

「ぼくと君の婚約は解消された。あれには申し訳ないけれど……まぁ、私は君の幸せを願うよ」

キスしていいかい？

その言葉にうなずくと、頬に唇が触れた。もう二度とこの相手が自分に触れることも、口付けることもないだろう。

ルティアは深く一礼した。

面前に立つ男は婚約者ではない。

「竜公――」

はじめてその尊称を口にした。当代といい続けた自分はもういない。

「どうぞそのお心をお忘れなきように」

はじめて自分の気持ちのままに動いた相手を、ルティアはほんの少しだけ「好き」になれた気がした。

＊＊＊

「エディ様のほうが絶対に可愛いとおもいますわー」
「君も頑固だよね。絶対にリトル・リィのほうが可愛いよ。ちょっとキスしただけで真っ赤になっちゃってすごい怒るんだから」
本当はとても素直なんだよ。
そんな風に続けられ、ルティアはムッとした様子で続けた。
「エディ様だって素直ですわよー。怒っても押し倒せばすぐに反応なさるのですものっ」
「それはただ下半身がだらしないだけだよ」
「竜公には言われたくありませんわよぉ」

聞こえない聞こえない聞こえない。
アマリージェはもう恋なんてすまいと魂に誓うのだった。
恋は人間を堕落させる！
こんな大人には絶対になりたくない。

馬車の旅と旅の友

翌朝は曇天。
今にも泣き出してしまいそうな天候で、馬車の旅といえど気分が滅入る気がした。
――あの後、そうあの後……ぱしりと頬を叩いてしまった後、あたしは咄嗟に「ごめん」と口走ることも、それ以上の会話も交わすことができなかった。

アジス祖父、突然だかだかと部屋に乱入。
アレは耳を掴まれてそのまま引っ張っていかれてしまったのだ。
「ごめんねぇ？」
ターニャさんは必死に笑いを堪えて翌朝教えてくれた。
――ワシの目が黒いうちは不埒な真似は許さんの言葉の通り、ジオさんはどうやら扉にはりついていたようで、あたしが彼の頬をぱしりと叩いた音にそそくさと害虫排除に動いたのだった。
一応あの男は無実であったことはそれとなくジオさんに言ったのだが、どうも信じてくれたかどうかは怪しい。ま、信じてくれなくてもいいですが。だって、アレときたらいるだけでなんだかもう犯罪っぽい。
成分の七割がきっと不道徳でできてます。

「――」
ターニャさん達に別れを告げて、あたしは朝一番の馬車に乗る為のステップに足をかけ、片方の手をアレに支えてもらえながらそっと言った。
「ごめん、ね？」
――勇気を、もう誰でもいいから勇気を下さい。
判っていますよ。私が悪かったというのはもう本当に理解してい

るのです。ただ、それを言葉にして相手に謝罪するのがこれほどまでに勇気を必要とするなんて、今まで知らなかった。
半歩後ろにいる男は小さく微笑を落とし、
「気にしてないよ」
と囁いた。

思い返せば「ごめんね」なんて台詞はいつもさらりと口から飛び出たものだ。
心が、こもっていないから。心底謝罪の気持ちなど覚えていないから。ティナやマーヴェルに対して、あたしは……もしかしたらとても不誠実で卑怯だったのかもしれない。
もっと真っ向からちゃんと向き合えば、あたしの人生はまた違ったのかもしれない。
でも、そうすると、この男と再会することも無かったのだ。
ふとその現実に気付いた。

もし、マーヴェルとティナが恋人同士でなければ、あたしは？
もし、マーヴェルとあたしが結婚していたら？

――そうしたら、この男と再会することは無かった。二人の道は交わることなく、あたしは自分の記憶が失われている事実にも気付くことなく、今頃はこの腕にマーヴェルとの間の子供を抱いていたのかもしれない。
かつんと足をとめたあたしを覗き込み「どうかした？」と囁かれる。

あたしは斜め後ろから覗き込む男を見て、息をついた。
もしも、なんてまったく意味は無い。
縁があるのだろう――腐れ縁かもしれないけど。
「あなたの名前について考えていたの」

あたしはすっと真剣な眼差しを向けた。それは咄嗟に出てしまった言い訳だったけれど。あたしの中に違和感無く落ち着いた。
「教えて欲しい？」
「要らない」
きっぱりと言い、馬車の一番奥にある椅子に座り、自分の鞄を昨日と同じように自分の隣にむぎゅっと置いた。
あたしがきっぱりと拒絶したことに対して、アレはほんのちょっと吐息を落とした。
寂しそうに切なそうに。その吐息がちくりと痛くて、慌てて弁解するようにと言葉を重ねていた。
「思い出すから」
「……」
「あたし、ちゃんと思い出すから――そしたら」
一緒にいてくれる？
その言葉はさすがに気恥ずかしくてあたしの舌に張り付いた。
きゅっと左手の指輪を握り締めて。
過去を振り返るなんて馬鹿みたい。マーヴェルのことは終わったこと。
ああ、でもこの人のほうこそが過去なのに。
どう言えばいいのか判らなくて頬が赤くなってしまう。そんなあたしの心の葛藤だとかに気付かないこの変質者はぎゅっと肩を抱いた。
「そしたらあんなことやこんなこともしていい？」
「っっっ」
「どうしたら君が気持ちよくなれるか、すっごいぼく考えてるんだよ。考える時間はいっぱいあったから！　さすがにちょっと縛ったりとかは難易度が高いと思うんだけど、でも楽しいことはなんでも

チャ――」

裏拳を習得しましたが裏拳は自分の手も痛いのだと気付いたのでもうやりたくありません。
新しい発見はどんなことでも素晴らしいですね！

＊＊＊

馬車の旅も二日目。
しばらくはおとなしかった魔術師は、やがていつもの通り無駄に復活したが昼近くまで無視したら捨てられた犬オーラを垂れ流しながらしくしくとやりだし、ついで馬車の空気が「なんて酷い女がいるものだろう」と染まりだした為にあたしは仕方なく和平協定を結んだ。

もしかしてわざとだろうか？　ものすごく信用できません。

まぁ、機嫌よく穏やかにしているぶんには――嫌いではない。
そう、決して嫌いではない。ただし、何故だかあの男がおとなしくて普通の顔をしているとあたしが落ち着かなくてなんだか困るのが欠点だ。居心地が悪くてそわそわしてしまう。

昼が過ぎて馬車が列車の駅がある街に入り、本来だったらそのまま宿をとることになる筈だった。列車の数は限られているし、毎日出てもいない。だから当然、この日は宿屋に泊まることになる予定であったのだけれど、その予定は未定のままに終わった。

もう無いであろうと思っていた列車があったのだ。

そう――その名を特別列車というモノが。

「お待ちしました」

乗合馬車の停留所で、仰々しい騎士は丁寧に頭を下げ――あたしは呆気にとられてしまった。
何故こんな場所にいるのだろうというあたしの驚きとは違い、あたしの後ろに立つ男はとうの昔から理解していたかのように苦笑一つで応えた。
「やぁ、エルディバルト。待たせたかい」
「馬車のお着きが遅いようでしたから心配致しました。列車の準備は整っております、どうぞ」
「もしかして怒ってるのかな」
「当然です。私の職務を思い出して頂けるとよいのですが――」
軽く身を伏せたまま言うエルディバルトさんの背後、ひょこりと顔を出したのはアマリージェと、そしてアジス君だった。

「なんでっ？」

あたしは無意味に後ろを振り返ってしまった。
だって、え、どうして？
どう考えても彼等があたし達より先にここにたどり着いている意味が判らなかった。だって、ここへは馬車を二日使って来たのだ。幾度か停車はしたけれど、だからといってどうやって追い抜ける？
驚くあたしに、アジス君は瞳をきらきらと輝かせながら言った。
「リドリー！　すげーんだよ。尊き人の館から扉で転移ができるんだ！　聖都に二つの扉を通って、それから列車でここに連れて来てもらったんだよ。列車って早いな」
「アジスが列車に乗ったことが無いというから誘ったのです。私がいない間に勉強が滞っては大変ですし」
アマリージェは少しだけ顔をしかめて見せたが、すぐに微笑を浮かべた。
「馬車の旅はいかがでした？」

あたしはアマリージェと騎士を見て、ついで隣の男を見上げた。
「……聞いていい？」
「えっと、なんだか聞かないで欲しいかも」
聞きます。
「転移の扉って、アレよね？　あたしのアパートの二階にある」
「ああ、うん。あるね」
「あたしのアパートの二階と、あんたの寝室をつなげてあるって、ああいうのが――別にもあるの？」
「まぁ、あるね」
あたしの隣にぴったりといた筈の男は、つっと一歩距離をとった。
「で、その転移の扉は――つまり、聖都にも通じてるのね？」
「そうかもしれない」
それはつまり、
「この二日間を返せぇぇぇぇぇっ」
馬車の旅はお尻が痛いのですよっ。
それに、何よりっ、馬車強盗の話とか完全でっちあげてまでなんたることでしょうか。扉さえ使えば二日など使わずにすんだ筈だ。当然強盗にだってあいようがないっ。
もしかしたらあたしのような一般人には使えないアイテムなのかもしれないが、おおよそ一般人であるアジス君が使っている時点でその話しはありえない。
確かに、ヤツが使えるものだからといってあたしが当然使えるとは思わないけれど、でも！
あたしは怒りのあまりヤツにもう一発叩きつけようとしたのだが、そんなあたしの前でエルディバルト氏が腰に下がる大仰な剣に手をかけ、アマリージェが「いけませんっ」と叫び、アジス君が「うわ

っ」と声をあげ、そしてあの男が、

「エルディバルト！　下がれ」

冷ややかな声をあげた為にあたしは慌てて自分の憤りを静めることに専念した。

――エルディバルトさんは地下牢から出たばっかりですよ！

「ごめんね、でも――キミと二人きりで旅をしたかったんだ」

一生懸命呼吸を整えるあたしに、そっと黒い男は身を伏せて耳元に囁いた。

「ごめん」

なによ、ちっとも全然悪いなんて思ってない顔をして。

あたしは悔しさにぎゅっと自分の手を握り締めた。

どんな言葉で飾ろうと嘘をついてあたしと――

……あたしと一緒にいたいと思ってくれるのは、きっとあんただけなんだわ。

列車と不機嫌な騎士

二人旅が二人旅でなくなれば、途端に辺りは騒がしくなった。用意されている列車は五両編成の仕様になっていて、二つがまるで居間のような作りをし、もう一車両が二つの個室。

そして残りが荷物と護衛用として普段は使われるのだという。あたしが以前乗ったことのある列車ときたら、黒塗りで木がむき出しでシートは硬くて、あまり寝心地もよくなかった。だが、この列車ときたらまるきり邸宅か何かのように立派な作りをし、なおかつ手すりなども贅沢に彫刻がされた、まさに特別車両だった。

想像して欲しい、そんな列車を利用するのがひょろっとした男、やたらでかい騎士、凡庸を描いたあたし、それでもってお姫様のようなマリアージェ、一般庶民まるだしの少年アジス君。

やめてください悪目立ち。

一般人リドリー・ナフサートの胃が激しく痙攣しそうですからね。ある意味アジス君はどんなところでも堂々としている。がんばれ未来の騎士。でも、どうかその隣のでかい騎士のようにはならないで、コワイから。

挙句、列車が出るならば乗せろと言うちょっとうるさい商人風の男とのいざこざがあったようで、少しばかり大変だった。

エルディバルト氏が出て行くだけで相手は静かになったが。その様子にアジス君の瞳が更にきらきらとしていて、もうそれがあたしの心に痛かったです。激しく。

それをなんだか冷たい瞳で見るアマリージェ……何故彼女はアジス君に厳しいのでしょうか。

「天気悪い……」

朝の曇天は、今は完全な雨となっていた。

そしてあの男は一人で個室に閉じこもっている。アジス君がいる為かむっつり騎士がいる為か判らないが、いつも通りの阿呆発言などはひそめられ、最終的にはどうやらいじけてしまったようだ。まったくもって静かでありがたい。

「な、な、スゲーよな？」

アジス君が相変わらず瞳をきらきらとさせて窓辺に張り付き、ガラス窓を叩きつける雨などものともせずに外を眺めている。列車のスピードのおかげだろう、雨は更に強く感じられた。

「何かありましたか？」

しばらく静かにしていたアマリージェが眉をひそめて言った。

「え、何がです？」

「いえ――あの方が不安定なようだから」

不安定？

あたしはその言い方に小首をかしげた。機嫌が悪いとはちょっと違うニュアンスだ。

「半年に一度ほど、あの方は少し不安定な期間がありますのよ。なんだか、それに似ているみたい」

先ほどの様子を振り返ってもアマリージェが言うような不安定が納得できはしなかった。喧嘩はしていないはずだ。喧嘩にもならない。

ほんの少し怒ったけれど、あの男ときたらケロリとしている。あたしがアマリージェの言葉を思案していると、車両をつなぐ扉から騎士が舞い戻った。

鼻の下の髭を撫でるように思案しながら歩いて来た騎士は、ちらりとアマリージェを見て、それからあたしを――まるきり胡散臭いもの扱いするように眇めた視線で見てから言った。

「えっと……レディ」

レディィィって何ですかぁ？

あたしは鳥肌がたつかという衝撃に、あわてて「リドリーです！極一般庶民のリドリー・ナフサートです！」と名乗った。
そういえば名乗った覚えがなかった。面識も少ないし、おそらくきっと好かれてもいないだろう。
もぉ本当に色々とスミマセン。

「ナフサート嬢」
苦痛のように人の名前を呼ぶのは止めていただきたい。
いや、わかっています。好かれるとは到底思っていませんから。あなたが地下牢に押し込められた十日前後を思えば、もう頭を何度下げたって許されるとは思いません。

ですが考えて頂きたい。
悪いのはあんな阿呆なことをする貴方様の本当にどうしようもないご主人様であって、ついでに、拘留期間を勝手に延ばしたのは貴方の愛らしい婚約者様です！
無実とは言いませんが、できれば少しくらいそこら辺りを思い出して頂けるとよいのですが。

「少し話しを聞かせていただけまいか。二人で」
ちらりと子供達を見て、ついで奥の車両を示す。そちらはアレのいない方――誰にも聞かれたくないと示す様子に、アマリージェが眉間に皺を寄せた。

「エルディバルト様、彼女は――」
「判っている。失礼なことをするつもりはない。ただ話しがしたいだけだ――かまわないだろうか」
構わないだろうか、と言いながら言い切る様子は命令をすることに慣れている大人の言葉だった。

あたしは少しばかり畏れを抱きつつ、こくりとうなずいてエルディバルト氏の後をついて後部車両へとうつった。

別段部屋に入るわけでなく、車両の廊下で足を止めたエルディバルトさんは苦悶するように眉間に皺を寄せて腕を組み、壁に軽く寄りかかるようにしてあたしを見下ろした。

――エディ様かわいいっ。

というルティアさんの気持ちがちっとも判らないです。

威圧的、でかい、怖い。

「この二日であの方に何があったのか、教えて欲しい」

溜息のような音と共にエルディバルトさんはゆっくりと言葉を吐き出した。

「何かって」

は？

え、なに、この人って毎日アレの観察でもしているのだろうか？

見ていないと不安とか？

――ストーカーにストーカーがついてます、みたいな？

あたしは相手の言葉に軽く妙なことを考えつつ、

「これといっていつも通りだったと思いますけど……」

「いつも通りとは？」

変態でした。

――いや、うん、それもどうだろう？

あたしは即答しそうになった言葉を喉の奥へと戻し、少し考えてみた。

旅に出る朝、無理やりついてきて、馬車の中で手品――魔法という

には手品だと思う――を披露し、下らないエロ話で一人勝手に盛り上がり、それから……

あたしはつっと視線を逸らして「いつも通りの変態です」と改めて応えた。

うっ、なんか色々思い出して耳が赤くなりそう。

――ぼくの唇が君の瞼に、頬に触れて、可愛らしい唇の頂きをほんの少し吸い上げる。下唇を舌先でなぞり上げれば、きっと甘い味がぼくにも、そして君にも小さな漣（さざなみ）を与えてくれる。

親指の腹が、軽く唇をなぞる感触。

その瞳は濡れたように艶めいて微笑を称え、

――唇を開いて。戸惑いと一緒にぼくの舌を受け入れて。歯列をなぞりあげて、その奥をもっと探らせて。舌と舌とを絡み合わせて、君の味をゆっくりと堪能したい――指先は穏やかに背中をなぞり、君の背骨をたどりやがて腰の窪みへとたどり着く。君の体温が上がり、鼓動がぼくを……

いやぁぁぁぁ、思い出させないで下さいっ。

あたしはカッとなって言い募った。

「いつも通り変態ですよっ！　どうしてあんなの野放しなんですか、断固抗議しますよっ。あんな有害粗大ゴミ放置するんじゃないっ」

感情のままに叫び、あたしはハっと息を呑んでしまった。

激しく恐ろしい眼差しでエルディバルトさんが睨んでくる。その手は今にも腰に下がる剣を引き抜きたいとしているが、ふるふると身を震わせてそれを押し留めていた。

「我が主への侮辱はそれで終いか」

「……すみません」

ものすっごい怖い。
あたしは小さな声で謝罪したが、相手の剣呑な眼差しは緩むことは無かった。

「どうやって貴女が公に取り入ったか知らぬ。だが、私はあなたを決して許す気はない」
低く威嚇するようにエルディバルトさんは言った。
取り入ったという言葉に多少カチンっときてしまう。
取り入った？あたしがいつあれに取り入ったというのだろう。
それではあたしがアレをたぶらかそうとしているようではありませんか。

完全に違います！
たぶらかそうとしているのはアレです！
たぶらかされてるのはあたしですっ。

「貴女という女のおかげで、一人の女が不幸になったなど、知らぬのだろうな」
蔑む口調で言い切る男に、あたしは唖然とした。
「え……？」
「あの方にはもともと婚約者がおられた。それを破棄したことも知らぬだろう」

忌々しいというように言われ、あたしは「一応知っています」とはいえなかった。それに、それが事実であることは聞いている当人から。
――あたしの為に婚約を破棄したのだと。
事実だと知っているから、あたしはぐっと言葉を詰まらせた。
あの男は、その女性は今は幸せに暮らしていると笑っていたけれど、ただの口先だけのことかもしれない。面前のこの男が言うように、

本当は不幸になってしまったのかもしれない。
それは生憎とあたしには判らないのだ。

あたしは自分の手と手をからめ、自らの左手の薬指にある指輪に触れた。
……その人も、この指輪をしていたことがあるのかもしれない。今も、アレのことを恋焦がれていないと誰が言えるだろう。
なんといってもあの変態ときたら、顔と声と外面だけはいいのだ。変態の癖に。
そう思うとあたしはなんだかいたたまれないような微妙な気持ちも抱いた。

――いやまて、あたし悪いですか？

もうとりあえずこの問題は保留。あとでアマリージェにでも聞いてみよう。時々彼女は鉄壁だけれど。それとも、この騎士の婚約者であるルティア様にでも聞ければいいけれど。
彼女はどうやらアレと仲はよさそうだった。
なんといっても会話が成立していた。自分の好きなことしか言わないという一方的な会話を延々と繰り広げられるのだ。あれは絶対に仲良しの部類に違いない。
なんと変態にも友人がいるのだとものすごく思ったものだ。あれは確実に類友。類は友を呼んでしまったのだ。

近くで二人の会話を聞いてしまうと、ただ延々と自分の好きなことしか言わないという「あんたたち阿呆ですか？」な会話だけれど。

「くそっ、あなたと話などするべきでは無かった。よりにもよって公を変態扱いとは！　おまえなど早々に愛想をつかされてしまえばいい。そうすれば私の独断で切り捨ててくれるものをっ」

吐き捨てるように言いながらエルディバルトさんは乱暴に壁を蹴り上げ、そのまま後部へと足音をさせて行ってしまった。

それをあっけにとられて見つめながら、あたしは瞳を瞬いた。レディと口にし、ついであなたになり最期にはおまえになってしまいましたよ？　なんだか激しく嫌われているというか憎まれているというか、あれ、えっとね？

――いや、でもですね……あなたのご主人様は確実に変態なのですが。

果たしてエルディバルトさんがそれを理解してくれる日はくるのだろうか。

決意と失意

一人ぽつんと列車の廊下に残されたあたしは、深い溜息を一つ。なんというか、エルディバルトさんて濃いよ。よく見れば顔立ちとかも悪くないのだし、静かに控えて立つ姿は立派な騎士なのだが、人間が濃い。上から見ても下から見ても「かわいい」にたどり着けません、ルティアさん……あなたの「エディ様かわいい！」は本当にこの方でしょうか？

何より、この方めちゃくちゃご主人様（ヘンタイ）が大好きですね！　崇拝ですか？　その対象であるアレはものすっごくへらへらしながら「楽隠居」とか「名誉職」とか言ってますが。存在自体が激しくアレですし！　どこをどうしたらそんなに妄信できるのか判らない。

って、もしかして聖都ってアレを崇拝している人間がいっぱいですか？

この国滅ぶんじゃなかろうか。

……王様（陛下）は普通の人だと信じたい。まぁ、あたしには絶対に関わって来ない相手なのでどうでもいいですが。

あたしはこのままここにいても仕方ないとアジス君達のいる車両に戻ったのだが、窓辺にぺったりと張り付いて嬉しそうにしているアジス君と窓から見える風景を説明しているアマリージェの姿に思いっきり疎外感を受けてしまい、こっそりとその後ろを通り抜け、更に次の車両まで行くことにした。

見ているととても可愛いのですが、二人の間に割って入るのは何故かできない雰囲気。この二人に混じるととても自分がケガレテいるようにすら感じるのは何故でしょう。

――何より、その後ろ姿を見た途端に思い出してはいけないものを

思い出してしまった。
アルジェス君！　もうなんというか、さり気にさらりと呼んでしまいたい。でもそれをしたらきっと顔を真っ赤にして怒ることだろう。何よりアマリージェの前で言ってしまったらきっと大失態。嫌われたくないので、今はちょっと離れていたほうが良いという結論がでました。

こそこそと離れようとするあたしでしたが、けれどアマリージェは気付いて小首をかしげた。
「お話は終わりまして？」
「そうみたいです」
……なんというかお話にならない感じでしたが。
「部屋に行きますか？」
「少し休んで来ようと思って」
二人は窓から外を眺めてていいですよ？
あたしの言葉にアマリージェは少しばかり呆れたような視線をあたし達の様子に気付かずに列車の速度や窓からの風景やらに夢中になっているアジス君へと向けたが、そっと声を潜めてあたしに囁いた。
「あの方にはしばらく近づかないほうが宜しいですわよ」
「……はい？」
当然アマリージェがあの方、というのは現在一人引きこもりの変態のことだ。何故あたしがアレにわざわざ近づくと思うのか？
しかし、彼女は真剣な様子で言った。

「今は、きっとどなたも近づけようとなさいません。何故突然こうなったのか判りませんけれど……半月程は心が不安定だと思いますから、このまま顔を合わせないほうがよろしいですわ」
まったく意味は判らなかったが、あたしはとりあえずこくりとうなずいて次の車両へと移ったのだ。

次の車両には個室が二つ。
先頭の方の個室をアレが使用するので、手前の方をあたしとアマリージェ、アジス君が使うようにとエルディバルトさんから言われているが、あたしは手前の部屋の扉に手をかけようとして、ふっともう一つの扉に意識を向けた。

具合、悪いとか？

機嫌は悪くなかった筈だ。
けれど普段であれば引っ付いてくる男がこうして引きこもっているのが奇妙で、何故か不安で、あたしは眉をぐぐっとひそめて溜息を一つ落とした。
――ごめん、少し休みたい。
アレはその言葉を残してエルディバルトさんと二人で消えてしまったのだ。

アマリージェの忠告を、あたしはあまり深刻には考えていなかった。

数歩の距離を歩く為に、自分自身に言い訳をしながら歩み、扉の前で息を吸い込んだ。
扉にはドアノッカー……屋敷の玄関ですか？
あたしはそれを使わずに自分の手を握りこんで扉を軽くノックした。
一度、二度。
反応が無くて、眉宇をひそめてあたしは応えを待たずにそろりそろりと扉を開いてしまった。

「エルっ、来てはいけないと言ってあるでしょう？」

鋭い声がぴしゃりと叩きつけられ、あたしは唖然とした。

室内が暗い。この車両はガス灯が揺らめいてどこもかしこも明るいというのに、室内が暗い。まだ夕刻で窓から入り込む太陽の明かりすらも薄暗く感じる。

「なにこれ……」

あたしは思わずつぶやいてしまった。

特別列車の特別室――列車に乗り込んですぐにちらりと見せてもらった豪奢な調度品と花々に埋め尽くされた客室は、無残な程に破壊しつくされていた。

「出て行きなさい。出て……」

言葉を叩きつけていた男が、ハッとした様子であたしを見る。

すでに神官服になっている男は、部屋の片隅で汗に濡れた額をかきあげ、苦痛のように顔をしかめた。

「リトル・リィ……」

「なに、どうしたのこれ？」

飾られていた花が散らばり、花瓶が叩きつけられたように割れている。おかれている寝台の枕が引き裂かれ、あたり一面に水鳥の羽が舞っていた。

まるで破壊できる全てのものを破壊しつくしたように。

「リトル・リィ、外に出ていて」

必死に歯を食いしばるように言うものだから、あたしは相手の言葉になど従わずに慌てて近づき、苦しげに喘ぐその顔を覗き込んでしまった。

「もしかして具合が悪い？　ねぇ、本当にどう――」

「駄目だっ、駄目なんだ……」

呻くような言葉と同時、あたしはぐっとその腕の中に抱き込まれていた。

はい？

ぎりぎりと締め上げる力は抱擁というよりは押しつぶすように強い。骨までがみしりと悲鳴をあげそうで、あたしは意味が判らず狼狽より先に真っ白になった。

「外に出て」

外に出ろって言いながら抱きかかえられてたら出れないでしょうよ。あたしは顔をしかめながら相手の矛盾を突きつけてやろうとしたのだが、このあほんだら様は歯を食いしばるように苦しげに必死に「リトル・リィ、お願いだ……外に出て」と懇願する。

だったら離してください。

そう思いつつ、あたしはなんとか身じろぎしてヤツの腹と自分の胸の辺りに押し込められてしまった手を引き抜き、そっと相手の背中を撫でた。

「どうしたの？　具合悪い？……あの、気持ち悪いとか？」

額から流れるのは冷や汗とかの類のように見えた。苦痛を必死で堪えるような様相にあたしの中に不安がくすぶる。

ああ、マリー――あなたは正しい。

これは確かに不安定とか、そういう部類で。彼女はそんなことを感じられるのだ。あたしよりもずっと年若いのに。あたしよりもずっとあれと接していなかったのに。

アマリージェはほんのささやかだった変化を読み取れる。

そう思うだけで胸の奥がもやもやとしてしまう。馬鹿みたいな、これは嫉妬だ。

あたしは――自分がどうしようもない愚か者で本当にいやになる。

背中をさすり、そっと抱きしめ。その胸に額を押し当てた。

「大丈夫。大丈夫だから……一緒にいるから。だから、泣かないで」

言葉がするりと落ちる。

更にきつく抱きすくめられ、相手の震えが伝わってくるのを感じながらあたしは自分が吐き気を催すほどに嫌いになった。

自分勝手だ。

好きだと言わない癖に。
素直になれない癖に。
この男のことで他の誰かに負けたくないなんて。

「リドリー、頼むから」
苦しそうにもれる言葉に首を振る。

また、一人にしてしまった。

――本当は一人が一番嫌いだと知っているのに。
そう、あたしはちゃんと知ってる。寂しくて、つらくて、でも一人きりでいることになれてしまった人。
幼い子供が差し出した手にすら縋り付くほど、本当はとても孤独が嫌いな人。
何故こんな風に一人で辛さを我慢しようとするのだろう。
どうして一人でいようとするのだろう。
あたしが……きちんとしないから？　あたしが拒むから？　あたしが卑怯だから？

「離れて」
「駄目だよ。一緒にいる」
「駄目なんだ。今は……」
――気を緩めてしまった。
引き絞るように言いながら、それでもあたしを抱きすくめている。
まるで心と体とが別もののように。

あたしは宥めるな気持ちでその背をさすり、少しだけ緩んだ腕の中で顔をあげて、うつむきぎゅっと瞳を閉ざした男の唇に、触れた。

―そうすることが良いのだと思ったのだ。そうするべきだと思ったのだ。けれどそれは間違いだったのかもしれない。

息を飲み込んだ相手が、離れようとした唇にすがるように覆いかぶさる。今まで一度だってそんなふうに荒々しく口付けをされたことは無かった。

歯と歯が一度がちりと音をさせるくらい勢いをつけて、そしてそのまま近くの寝台の上にあっけなく転がされ、あたしは自分の上にのしかかる男の熱を感じた。

口の中に鉄錆のような味がじわりと広がる。

この状態はもしかして結構やばいのか？　あたしは下半身がひんやりとした奇妙な感覚を覚えた。暗い室内に、寝台の上――押し倒されているこの現状。

みぞおちのあたりが激しくきゅうっと収縮するような感覚――どくどくと血が逆流するように自分の感覚が研ぎ澄まされた。

普段の飄々とした態度などまったく持たない荒々しい男の唇が、幾度も唇に触れ、顎を伝い首筋を伝いおりていく感覚。

心臓が激しく鼓動し、あたしは小さな喘ぎと一緒に、自らの体が張り詰めるようなぞくぞくとした感触に身をゆだねようとしていた。抵抗するように込められていた腕の力がゆっくりと抜け落ちる。

頭のどこかがマズイと警鐘を鳴らし、また別の部分が面前の男を抱きしめたいと欲する。

ああ、ほら……こんなにもイトシイ。

ならば抗う必要などない。ジョウシキとヒジョウシキなんて、たか

が一文字の違いじゃない。
欲しいと思う気持ちのままに求めることが悪いなんて、誰が言えるの。
あたしは、このヒトが――

静寂と、あたし達の動きで舞い上がった水鳥の羽――肩を上下させて苦しげに息をつくその様子が、まるで自分のことのように判る。
首筋から鎖骨へとおりた唇が、うめくように小さく、小さく、苦痛の言葉を漏らした。

「今は、駄目だ」

その言葉が最後だった。
突然押さえ込まれていたあたしの上からその姿が一瞬にしてかき消えた。薄暗い特別室の寝台の上。
あたしは呆然とその天井を見上げた。
細かい文様が刻まれた美しい天井を。

「……うそ」

一人きりで部屋に残されたあたしは、馬鹿みたいに何度も「うそ……」とつぶやいた。
完全に混乱していた。
これはなんでしょう?
これは……ちょっと、委ねてしまってもいいかなぁとか思ったところで、もしかして、拒絶されましたか?
このままなるようになってしまってもいいかも、なんてちらっと考えたところで!

「なにこれ!」

出て来い責任者！
覚悟を決めたこの心を本気でどうしてくれるのっ。
あたしは軽く混乱しながら気恥ずかしさに「責任とれぇぇぇ」と思わず叫んでしまった。

次に顔を合わせた時にはあの顔に平手を見舞っていいですか？
あああぁぁぁもぉ、あの馬鹿男！

乙女心は複雑で繊細なんだぞっ、次があると思うなよ！
っていうか、アレ、もしかしてこれはあたしが悪いのですか？
だってあの男は最初から最後まで拒絶していた。拒絶、して、いたのだ。

あたしが悪いのですか！？
ああ、マリー！
これはさすがに聞けません。

深淵と侵食

逃げられた。
逃げられました。
ええ、なんだかものの見事に。

あたしは呆然としつつ、頭がふわふわとする現状でもう一つの個室に入り込み、ばったりとおかれている寝台に寝そべった。
なんでしょうこのお腹の中にくすぶる激しいふつふつ感は。あたしってば振られた？　なにこれ。もういい。もう知りません。変態のくせにっ。
そう責任転嫁しつつ不貞寝を繰り広げようとしているというのに、感情の発露がなくていつまでも安穏とした眠りなど訪れてはくれなかった。
そうこうしているうちにストーカーのストーカー――失礼、護衛騎士であるエルディバルトさんが隣の部屋で「公ぅぅぅ」と悲壮な声をあげ、ついでノックの一つもなくこの個室の扉を押し開いた。

「公はいづこか」
「知りません！」
あたしは力いっぱい睨みつけた。寝台の上から上半身を起こして怒鳴ったあたしの姿に、エルディバルトさんは一瞬びくっとした様子を見せたが、すぐに嘆息を落とした。
「……判った」

判った？　は？　判るんですか？　今の説明でいったいぜんたい何が理解できるというのでしょう。
「居ないのであれば、良い。列車の到着はもうまもなくだ」
って、早くないですか？

と一瞬別のことを考えたが、この列車はもともと各駅停車ではないし、スピードも通常のものと違うのだろう。特権階級って色々ズルイ。

エルディバルトさんが身を翻そうとするのに対し、あたしは慌てて言葉を投げかけた。

「居なくてもいいって、心当たりがあるってことですか？」

「……公は時折このように心の平静を失われる。そうすると他のものを避けて姿を消してしまわれる――聖水を求めていかれたのだろう」

苦いものでも食むようにいいながら、ふとエルディバルトさんはその冷たい眼差しをひたりとあたしへと向けた。

「あの方は、贄を召されたのだろう？」

冷たい口調で淡々と問われ、あたしは眉をひそめた。意味がつかめずに、問い返そうとしたのだが、軽く手を払われる。

「いや、何でもない。ただ食事が悪かっただけだろう――不浄のものを召されると心にふれる。あの方はとても繊細な方だから」

……食事？

は？

あたしは相手の言葉をゆっくりと心の中でこねくりまわし、口の端を引きつらせた。

フクツウでも召されていたのですかね！？

は？　腹下しですか！？

そんなことであの不機嫌ですか？　そんなことであたしは拒絶されましたか？　絶対に殴るよ？

たかが食べ物であれだけの惨状になれるってどんだけセンサイなんだ？

それはセンサイという言葉を当てはめるべきなのか？　まったく意味が判りませんよっ。変質者の分際で心がセンサイだと？

乙女心のほうがよっぽど繊細ですよ。

あたしは寝台の枕を抱きかかえなおし、ふるふると身を震わせたがやがてゆっくりと呼吸を繰り返して嘆息した。

――心配して損した。

そう思いながら、そっと指輪に触れた。

理由はどうあれ……あれが苦しんでいたのは事実だ。ま、実際のところ極度の食あたりとかは苦しいというのは実体験として理解できる。だからといって破壊活動するほどのことではないのだけれど。

「大丈夫、かな？」

もしかしてマイラおばさんの腹痛のパンが効くかもよ？

そんなふざけたことを思いながら、あたしは窓の外を眺めた。

雨は相変わらず列車の窓を叩き続ける。季節はずれの嵐のように。

＊＊＊

「婿殿の役立たずぶりと言えば類をみない。いい加減に婚約を破棄してはどうだ」

神殿と王宮とをつなぐ役割を果たす神殿官という役職につくユリクス卿が、自分の気を落ち着けるように、巨大な竜のレリーフを磨いている。

そういったものの清掃は年若い神官見習いの仕事だが、その仕事のツメが甘いと磨きはじめてからは、何故かそれがユリクスの趣味となっていた。

それを呆れた様子でながめながら、彼の養い子であるところのル

ティアは溜息を落とした。
相変わらずの侍女姿で。

「エディ様は役立たずではありませんわよー？」
「どこがだ？　今回だとて自分の護衛対象を完全に見失っていたではないか」
「一晩で三回はできます」
さらりと年頃――を過ぎてはいるが、いまだ未婚の娘から出た言葉に、ユリクスは危うく竜のレリーフに額を打ち付けそうになった。
「時間をおけば四回もできるかもしれません！」
「……そのわりにはおまえの腹が膨らまんのはやっぱり役立たずではないか」
忌々しげに言い切り、ふと視線をルティアの腹へとむけていた。
そこから産まれ出でる筈の子供は娘でなければいけない。そうして早い段階で良い相手と婚約させるのだ。ルティアの娘であれば麗しい娘になる筈だ。そしてその孫娘は高位貴族、果ては他国との縁故として激しく役立つことだろう。
男孫は要らない。エルディバルトの家など絶えてしまえ！
ついで養父は体制を整えなおした。
「まったくおまえときたらどうしてそんな馬鹿みたいなことをへらへらと言う娘になってしまったのか。以前のおまえはとても聡明でしとやかな理想的な娘であったというのに」
「まぁ、お義父さま。あほな娘は役立ちますのにー？」
「……確かにな。だが時々本当に阿呆になってしまったのではないかと心が痛む。とりあえずその侍女服はいかがなものだろうか？」
「ふふふ、これを着てるとエディ様の力の入りようが違います」
こすちゅーむ・ぷれいですわ。
などという娘にユリクスは絶望的な表情を浮かべた。
「今ならまだやり直せる……おまえが望むなら他国の者との縁組を考えないか？　乙女でないのはこのさい仕方がないが、だが」

嘆息しつつハっとユリクスは息をつめた。
部屋の中央にすえられた聖水の泉。その上空に突然人の姿が現れ、ついで勢いを付けてそのまま落下した。

激しい水音と同時にしぶきが竜のレリーフにかかり、また自分達も水をかぶった。
ルティアは瞳を瞬き、そしてユリクスはせっかく磨いていた竜をもう一度磨きなおすことに嘆息した。
「竜公……身を清める時は服をお脱ぎになったほうがよろしいですわよー？」
軽口を叩いてみたが、相手からの反応は無い。
ルティアは咄嗟に養父の横腹に手をかけた。
「お義父さま、出ていらして」
「ああ。気をつけなさい」
ユリクスはちらりと水の中にいる男を一瞥したが、そそくさとその部屋を出ていった。

ルティアはゆっくりと唇の間から息をつき、それまでのふざけた雰囲気を払拭するようにつめたい眼差しで問いかけた。
「贄の用意は整ってございましたのよ？　あなたの負担を軽くする哀れなココロナイ生贄の準備は整っていたわ。それ以外を召されれば心が容易く侵食されると理解なさっている筈ですのに」
「――」
ビシリと壁に亀裂が入り、聖水を湛えた泉の縁が音をさせて砕ける。
決して狭くはない場であるというのに、泉の中心部から風が渦巻き見えない刃のように場を蹂躙した。
ルティアの髪が風に巻き上げられ、頬に小さな石礫が当たり痛みを覚える。

ルティアは嘆息した。
呆れるように口を開こうとした途端、ばさりと水から浮き上がった男は口元に品の無い笑みを浮かべ、その瞳に欲望をみなぎらせている。纏う雰囲気はまったく異質。まったくの別人のものだ。
麗しいといわれる表情が浅ましい表情に歪んでいるのを見てとるとルティアはいっそう冴え冴えとした視線を向けた。
「ルティア……」
低い声音で語られ、ルティアはいっそう瞳に険しさを滲ませた。
「おいで」
「ご命令であれば」
口元を歪ませる男の言葉に、ルティアは平坦な言葉で応えた。
聖水に身を浸しても尚正気を失うような「贄」など想像もしたくない。それとも多量の「贄」を身に宿したのか。神殿が用意するそれとは違うものを取り入れることは初めてのことだろう。今までも清浄な「贄」でさえ心を乱されてきたものだが、今の男はそのココロを完全に「贄」に侵されている。

過去には「その行為」を楽しむ竜公もいたという。
自らの体内に穢れた魂を取り入れ、自らとは違う残虐性に一時の快楽を覚えた者も。他人の魂を自らに取り入れるというのはそれだけ苦痛なのだ。
ルティアには想像もつかない。他人のココロが自分のココロを侵食し、入り乱れることなど。挙句それを楽しむなど。だがほんの少しの理解はできる。
――ある種の逃避行為。
そうでもしなければ他人の魂を奪う行為に自らの心が完全に壊れてしまうのだろう。
いや、もうその時の竜公は完全に壊れていたのだろうが。

そういう意味では、当代は理想的だった。

苦痛でしかない行いを、それでも粛々と受け入れて自らの殻に閉じこもり一人で耐えていた。確かに苛立ちや気性の荒さもあったが、極力他人との接触を避けてそれを一人で乗りきろうとしていたのだから立派なものだ。

男の手がルティアを引き寄せる。

荒い息を身近で感じながら、これで正気を取り戻したらまたこの男は絶望するだろうとひそかに笑ってしまった。

口付けを赦し、それ以上の行いを赦し、あとで激しく虐めてやるのも楽しそうだが、心優しく弱いこの男が自分にした行いで使い物にならなくなっても困る。

他人のココロと自分のココロが交じり合い、欲望が渇望が侵食される。そしてその悪行を、まるでたった一人で寸劇を見るように感じ続けるのだとルティアの祖父が昔教えてくれたものだ。

――必死に自己を守りながら。

面前の男は完全にタガを外しているようだが。

唇が触れそうになる瞬間、ルティアはにっこりと口元に笑みを刻んだ。

ぐいっと相手の胸倉を掴み、逆に引き寄せるかのように動かしたがルティアはそのまま相手の急所を膝で蹴り上げ、ついで身が沈んだところでその背に両手を組み合わせた拳を炊き落とした。

怒声をあげた男の体が沈んでばったりと倒れると、膝頭でのしかかるようにして押さえ込んだ。ついでするりとどこからか銀色のナイフを引き抜いて苦しさに喘ぐ男の首筋に押し当て、ルティアは暢気そうな口調で囁いた。

「公、起きてくださいませー？」

軽く言いつつも警戒は忘れなかった。

もっと強い衝撃が必要ならば、ナイフで刺してみよう――そう思ったところで、膝頭で押さえ込んだ相手から応えが返った。

「……なんだか色々ありがとう」
泣いているような気もするが、ルティアは気にしなかった。
――少し痙攣しているようにも感じるがまったく気にしなかった。
「しばらくは一人にしておくれ」
「そのように致します。まずはきちんと身を清めてくださいませねー？」
「竜峰に行くよ。ここより……早く落ち着くだろうから」

苦痛に呻きながら言う言葉に、ルティアは嘆息した。
「時折、あなたはとても自虐的でいらっしゃるわねー。そういう男は嫌いですわー」
「ルティア」
肩で息をしながら床に伏した男は、苦しげに言葉を続けた。
「……あの子と一緒なら大丈夫だと思ったんだよ。実際、離れるまでは平気だった……少し気を緩めたら、途端にからめとられてしまった。普段通りの贄であれば、今度は確実に押さえ込めるさ」
深い後悔の言葉を吐き出し、更に苦痛のように呻いた。

「あああっ、でももったいなかったかな？　でもあの時は絶対に駄目だったんだ。だってぼくであってぼくじゃない！　そんなのは絶対に許容できないっ――」

呻きながらずるずると聖水の中に入り込むみっともない生き物を、これはいったいナニかしら？　とルティアは瞳を瞬いて観察してしまった。

婿と舅

永久凍土といいながら、実際に触れればそれは氷ではないということがみてとれる。
ひたりと冷たい感触は、むしろ水晶に近い。
だがこれは溶けるのだ。ある一定の条件のもとでそれは急速に溶けていく。
冷たいその感触に手の平と額とを押し当てて目を伏せた男はゆっくり深く呼吸を繰り返した。
――刺すように冷たいというのに、それでも鼓動のようなものを感じることができる。
閉じ込められたソレは今なお、目覚める時を待っているのだから。

自らを閉じ込めた魔法使いを呪い、今なお代替わりを繰り返し自らを閉じ込め続ける魔法使いを憎みながら。
その鼓動を肌で感じ、口元に緩く笑みを刻んだ。
「……それでもおまえを嫌いになれないのは、誰の記憶なのだろうね」
眠り続ける竜の鼓動に触れながら、自嘲気味に微笑んだ。
微笑み、ついで吐息を落とす。
「御用ですか？」
あくまでも無視していたかったが、相手はこの冷たい室に居座るつもりのようで身震いをはじめてしまった。
さすがに放置もできず、苛立ちの含まれる言葉を向ければ、憮然とした言葉が返る。
分厚いローブに身を包んではいるが、この寒さは相当応える筈だ。
この地で安息をえられるのは自分くらいしかいないだろう。
その身をこの寒さから守ってやることもできるが、あえてそれはしなかった。

「報告を受けたからな」
「――何もありませんよ」
「下賤な贄を食らったようだな？　具合はどうだ？」
ニヤニヤと笑みを浮かべていわれ、どうやら心配されているのではなく面白がられているのだということに気付いた。
「あなたを殴り倒したいくらい絶好調です」
「それは良かった」
肩をすくめてニヤリと笑い、壮年の男は面白そうに瞳を細めた。
「男と女、どちらがいい？」
「――」
「帰る時に放り込んでやる」
「必要ありませんよ」
苛立ちが更に募った。
いらいらするのは未だに他人の意識が混濁しているからだろう。暴れだしてしまいそうな何かを必死で押さえ込む。
湧き上がる殺意は自分のものではない。
だというのにそれは吐き気のようにこみ上げてくる。そんな時に限ってわざわざ顔を出してくるのだから悪趣味としか言いようがない。
ある一定の期間は自分が不安定になり他者に対して脅威となりえることなど知っているというのに。
絶対の自信があるからこそ、この男はわざわざ試すように顔を出すのだろう。

「おまえの為に用意した精進潔斎を済ませた特別なモノだ。遠慮など要らん。ペットの餌やりは飼い主の責務だからな」

＊＊＊

特別列車はその主を失ったまま聖都――しかもその停車駅は一般人が使用できない場所不明の隔離駅に到着した。

トンネルを通って現れたそこは地下なのか、それとも建物の中であるのかも判らない。
判るのは、やけに煌びやかな装飾を施された場であるということだけだった。
――さすが特別列車。
もうナニを見てもあたしは驚かない気がする。
驚きはしないがある種の憤りがある。つまりこれはあたし達のような一般市民がせっせと稼いだお金の一部であり、それを使えるのは特権階級のみ！
別に特権階級が使うのは色々と納得してもいい。それだけの功績だとか色々とあたしのような一庶民にはわからないことが一杯あるのだろうから。
だが！　あの変態がそれに列せられると思えばなにかが納得できません！

「お待ちしてましたわー」
駅のプラットホームにはルティアさんと神官服の男性が一人。
あとは列車関係者があわただしく右往左往していた。
あたしはなんだか自分がこんなところにいる意味が判らなくて、どうしていいか判らずに思わず「うっ」と呻いたが、それよりも「げっ」という激しい音がその場を満たした。
自然と視線がその声の主であるエルディバルトさんへと向いたが、それを押し留めるようにルティアさんの隣の男性が一歩近づいて微笑んだ。
栗色の淡い髪を後ろに撫で付け、目じりに柔和な皺を刻んだ紳士。
思わずこちらが気恥ずかしさを覚えてしまうような穏やかで柔らかな物腰のロマンス・グレーな様相に、あたしは自分はもしかしたらおじさん趣味なのではないかと疑ってしまった。

自分の父親がぽってりしているから、こういういかにもなスレンダー系紳士に憧れるのかもしれない。
お父さん……太りすぎ。
「よくおいでくださった。私は神殿官のユリクス――ルティアの養父です。以後お見知りおきを。リドリー・ナフサート嬢」
神官服に多少似ているが確実に仕立ての良さと持つ雰囲気の違う衣装の男性は穏やかそうな口調で笑い、ついでその視線を無邪気なアジス君へと向けた。
目じりの小じわが更に深くなる。
「列車は楽しめたかな」
「すごく楽しかったです」
「それは良かった。お腹がすいてるだろう？　君等は戻るのかもしれないが、その前に私の家で食事をしてから帰りなさい」
言いながらぽんっとアジス君の頭を撫でる。
とても優しそうなユリクスさんは、あたし、アジス君、そしてアマリージェにも声を掛けて食事に誘ったが、その視線は力いっぱいエルディバルトさんを無視した。
彼等二人はあたし達の中に変態の姿が無いことにいささかの不都合も感じていない様子だった。あたしとしてはアレがいないことでものすごくバツが悪いのだが。

「さあ、馬車を用意している。おいでなさい」
穏やかな様子でうながすユリクスさんに、おいてけぼりを食らった様子のエルディバルトさんは戸惑うように声を掛けた。
慌てているのか、エルディバルトさんらしくなく足元をもつれさせたりもしている。

「ユリクス卿、あの、公は」
「ナフサート嬢、好き嫌いはありませんか？　先に言っていていただければ、うちの料理番も心置きなく腕がふるえるでしょう」

「あのー、卿」
エルディバルトさんの手が不自然に宙を泳ぐ。
「アジス君は何でも食べないと駄目だぞ。成長期なのだからね。騎士を目指すのであればなおさらどんなものでも食べないと」
あくまでも爽やかにユリクスさんはアジス君に言うのだが、さすがにアジス君もどうしてよいのか判らないという様子でその視線でもってアマリージェに救いを求めていた。

……無視、していますよね？　ものすっごく意図的に。
あたしもアジス君に習って、ちらりとルティアさんとアマリージェへと視線を送ったが、二人とも平然としている。
慌てているのはエルディバルトさんだけで、まるきり彼という存在が――無駄に自己主張の激しかった騎士殿が、完全に閉め出しを食らっていた。
しかし、あんまりエルディバルトさんが「あの」とか「その」とか必死に言葉の間に入ろうとしているのがうざさを呼んだのか、限界に達したのか、ふいにユリクスさんはぴたりと足を止めて冷ややかな眼差しをエルディバルトさんへと向けた。

「おまえは仕事に戻れ。邪魔くさい――おまえが見失ったお方は竜峰におられる」
きっぱりと言い切る言葉に、あたしは複雑なものを感じた。
彼等は一行の中にアレがいないことを承知していたということだ。
その事実が何故か奇妙にあたしの胸に沈んだ。
いないことも、そしてどこにいるかも彼等は知っているのだという事実。

やっと声を掛けてもらえたものの、ユリクスさんの口調はそれまでとまったく違うものだった。
威厳のある大人の男の声だ。

はっきりとした意思の強いその物言いは冷たく命令することに慣れたものだった。
「いや、竜峰ならそもそも私が行く意味が無いのだが」
「では自宅にでも帰れ。邪魔くさい。無能」
邪魔臭いを二度もいいました。
おまけに無能まで付きました。
柔和なロマンス・グレーの口から大嫌いオーラ駄々漏れです。

ルティアの養父ということは、つまり婚約者の父親ということで——はて、もっと親しげな関係なのではないだろうか、一般的に。
あたしだってそれほど世情に詳しい訳ではないけれど、少なくともあたしの父とマーヴェルの父親は親しかった。めちゃくちゃ。ああ、違うか——この場合、あたしの父とマーヴェルが親しかったかどうかだから……そこそこ親しかった筈だ。少なくとも会話はしていた。
それとも、反対を押し切って婚約？　いや、反対を押し切って結婚ならともかく、反対を押し切って婚約っておかしいか。ここも不思議だなー。

エルディバルトさんは人を殺しそうな恐ろしい目つきでユリクスさんを見やり、突然ルティアさんを呼んだ。
「ルティア」
「なんですかー？」
「私は帰る」
「お気をつけて」
「私は帰ると言っているんだぞっ」
「お疲れ様ですー」
のほんっとルティアさんは言い切り、ほえほえと微笑ながら養父の腕を引いた。
「ルティは牛タンの煮込みシチューが食べたいですー」

「勿論用意させている。では行こうか」

かくてエルディバルトさんは捨てられた。

情け容赦なく。

その時のエルディバルトさんは捨てられた子犬――ではなく巨大犬のようだった。でかい犬だけにいっそう哀れを誘いました。

誰もきっと拾ってくれそうにない。

あたしはユリクスさんの邸宅に行くまでの間に、こっそりとルティアさんに「いいんですか？」とおそるおそる尋ねた。尋ねてよいのか判らなかったが、あたしの知る限り彼女は婚約者に対してものすごーく心を向けていた筈ではなかったろうか。顔を合わせたのはほんの数度だが、その間に腐るほど「エディ様可愛い。エディ様スキー」を聞いてきたのだ。

彼女の感覚は絶対に理解できないと結論を出してはいたが、彼女がどれだけあのオソロシイ騎士殿を好きかは理解している。

何故かこちらがどきどきしてしまった。

二人の関係に亀裂とか入ったりしたらどうしよう。あたしが悪い訳では断じてないのだけれど、とてもどきどきして背中のあたりがもぞもぞとしてしまう。

何故ルティアさんはこんなことをするの？

「ふふふ、これは男と女の駆け引きなのですわー」

ルティアさんはこっそりと、ナイショ話でもするように声を潜めて笑みをこぼした。

「時にはこうして知らんふりをしてあげると、まるでご飯をお預けになってよだれをたらした駄犬のように求めてくださるのですよ！

確実ですっ」

聞かなきゃ良かった……

それに、何故にあなたは時折愛する方を猛獣だとか昆虫だとかさら

には駄犬などと言うのか。
アマリージェなどは真っ赤になって隣のアジス君の耳をふさいでいたが、アジス君のほうがこの手の話は詳しそうで、笑いを堪えている様子が見て取れた。

あたしは唇がぎゅむぎゅむと奇妙な笑みを浮かべ、視線をさまよわせてしまった。
男と女のことに口出ししてはいけなかった。
「ふふ、リドリーさんも時には押したり引いたりしてみたら宜しいわー」
「押すも何も」
逃げられたばかりですよ。
あたしは思わず口にしてしまった。
途端にアマリージェとルティアががばりと身を寄せ、ついで思い出すようにアジス君の体をぐいーっと押した。

「なんだよっ」
「女の子の話に加わるのはよくありませんわよっ」
「狭い場所で話してるのが悪いだろ！」
「立派な男は聞かないフリをするものですわよっ」
「この狭さでどうしろってんだよっ」

途端にお子様二人が口げんかをはじめてしまったのでこの話はうやむやになってしまったが、だが女とは恐ろしいイキモノだったのです。
あたしは正直友達という友達がいなかった。だからこういうのはとても――とても、戸惑う。

夕食が済むと、今度は「遅いから部屋を用意させよう」と言う言葉に甘えたあたしだったが、入浴をすませて寝巻きに着替え、ノッ

クの音に首をかしげつつ扉を開けば、そこには同じく寝巻き姿のアマリージェとルティアさん、その腕には枕まで抱えて立っていた。

瞳がらんらんと輝いておいでですが……

もしかして寝る気はないのだろうか。

先に言っておきますが、あたしは友達少ないのでこういうノリはちょっと馴染みがないのです。

逃げられ話をしろとイイマスか？

ムリ！　絶対にムリ！

こんな窮地に陥ることはもしかしてはじめてかもしれない。

女友達と深夜のお茶会

寝台の上に寝巻き姿の娘が三人。
「あのー、狭くないですか？」
何故寝台の上で膝を突き合わせて座っているのでしょうか、あたし達は？

夕食を頂いたのち、今夜は遅いから泊まるようにと客室へと案内してもらったのは良いのだが、寝る間際になって枕を抱いたアマリージェとルティアさんに押しかけられ、あたしは途方にくれていた。しかもなんで寝台に追い立てられた？

「そうですわねー。さすがに客室の寝台に三人はつらいですわねー」
「じゃあ、寝椅子に移動します？　わたくしお茶をいれましょうか？」
アマリージェがいそいそと寝台をおりてお茶の準備にとりかかる。ルティアはその言葉に寝台の縁に座りなおし、くすくすと笑った。
「そこのベルで人が来ますわよー」
「わたくし今はお茶の入れ方を習っているところなのです。やらせてくださいませ」
言葉にしながら、水差しの中の水を暖炉に用意されているケトルの中に落とし込む。その様子はとても楽しげでさえあった。
そしてその動きはあくまでも優雅。
うわー、お嬢様が二人いらっしゃる。いや、お姫様か。
何故にあたしは、一般市民リドリー・ナフサートはこんな場所にいるのでしょうか。
「あ、そういえばアジス君は？」
「ユリクス様が神殿にお連れして、そこから転移の扉をとおってパン屋さんに戻ったと思います」

……便利アイテムですね。ええ、まったく。
「マリーも帰らなくて良いのですか？」
「こんなに楽しいのに？　のけものはイヤですわよ」

唇を尖らせていうアマリージェに、あたしはふっと笑った。
「どうかなさいまして？」
「いえ……うん、楽しいなーって、あたしも思います」
戸惑いも大きいのだが、楽しいか楽しくないかでいえば確かに楽しい。
思い返せば、あたしはティナと二人で夜を過ごしたことも無かった。
――母親も、そして家人もティナとあたしが二人でいることを嫌がるような風潮すらあったから。
なんとなく暗い思想に囚われたあたしを、本来であれば絶対に自分になど関わることの無い二人の女性が不思議そうに見ていて、あたしは慌てて笑みを浮かべてみせた。
彼女達と知り合うことができたのは、アレがいたおかげだ。アレは変態だけれど、そこは感謝してもいい。
あたしがそんな思いに浸っているというのに、突然ルティアさんががばりとあたしに抱きついた。
なに、なに、なにっ？
「では白状なさいませー、逃げられたって何です？　まさか竜公以外の男性と何かあったりなさいますのー？　言っておきますけれど、私は告げ口いたしますわよー」
都合もへったくれも知りませんよー
とやけにまにまと嬉しそうに。
「まさかっ。そうなんですか？　リドリー、尊き人以外の男性とっ？」

食いつきが違う。釣りで言うのであれば入れ食い。もしくはここは釣堀ですか？

餌は生餌ですかっていう勢いです。それともコマセも撒きましたかね！

あたしはくらくらしながら首を振った。

「そういうことじゃなくてですねー」

「だってあの方が逃げたりする訳ないじゃないですか」

「ですわよねー、貴女に関していえば誰が居ようと気にしませんものー」

……ルティアさん、それは貴女も一緒。

いや、というかその話はしたくないですって。

あんな恥ずかしい話なんて絶対に無理。覚悟を決めた瞬間に逃げられたのですよ、ええそれは綺麗さっぱりと。

あたしは慌てて話の矛先をかえることにした。

えっと、えっとっ。

「あのっ、あの人の元婚約者さんって――今、どうしているか知ってますか？」

あたしが二人の話を蹴飛ばすように大きな声で言うと、途端にその場はシンっと静まり返った。

その微妙な間に、あたしの中にじんわりとつめたいものが広がっていく。

――不幸に……

エルディバルトさんの言葉がのしかかった。

あたしという存在が誰かを不幸にした。それは事実なの？

困ったような顔をしたアマリージェが、お茶をいれるポットを手にしたままちらりとその視線をルティアさんに向け、そしてルティアさんはあたしに抱きついたまま小さな声で囁いた。

「聞いてどうなさるの？」

「……」

「あの方の元婚約者のことなど関係がありませんでしょうに」
ふざけた口調ではなく、淡々と言われる言葉にあたしの中で確信が深まっていく。やっぱり、エルディバルトさんの言った通りに――

あたしが泣きそうな気持ちで「あの、その方は、今……」幸せではないのですか？　その言葉が喉の奥で引っかかる。
それでも何とかぼそぼそと吐き出された。
つらさがじわじわと自分の身に染みてくるような感覚。
「あたしのせいで、婚約を破棄されたって……」
あたしはぎゅっと自分の手を握りこんだ。冷たい指輪の感触。
その人は、この指輪を手放したくなかったのではないのか？

「その人は、今でもあの男を」
想っているの？
あたしは自分がどう呼吸しているのか判らないくらい頭の中がぐちゃぐちゃになっていた。

こんなことを聞くのは間違っていたかもしれない。
傲慢なことではない？　思い上がってはいない？　あたしは、
「捨てられた女のことなど聞くのは選ばれた自分を誇っていらっしゃるのかしら？」
辛らつな言葉はあたしの心臓の動きを一瞬とめた。
「ルティア様、あんまり虐めないで下さい」
アマリージェが言うと、途端にふにゃりとルティアさんは口調をいつものものにかえた。

「あの方の元婚約者は、今はとぉっても素敵な方と婚約してそれはそれは幸せに暮らしておりますのよー？」
きっと嘘に違いない。
この場限りの嘘としてそんなことを言うのだ。

あたしは自分の愚かさに自分を殴ってやりたくなった。
婚約破棄なんて良くない。あの男にはきちんと話し合って――そもそもあたしとあいつは付き合ってないんだし、何の関係もない。
他人から奪うのなんて絶対に駄目だ。絶対にイヤだ。
今なら引き返せる。あたしとあいつの間には何もない。
大丈夫。好きなんて、そんなあやふやな感情はきっと消してしまえる。
マーヴェルだって諦められた。
ならば今のこの感情だって！
ずきりと痛むのはきっと幻だ。大丈夫。諦めるのなんて簡単……

「ルティア様が意地悪なさるからっ」
アマリージェが怒ったようにいい、そのまま慌てたように言葉を続けた。
「リドリー、本当に元婚約者の方を気にかける必要などありませんのよ？」
「そうですわよー？　塵芥（ちりあくた）のごとく放置なさいませー」
「ルティア様！　どうしてそのような言い方をなさるのですっ！　もぉ黙っていてくださいませっ」
アマリージェが本気で怒ると、くすくすとルティアさんは楽しそうに笑い、あたしの頬にちゅっと唇を押し当てた。

「私ですー」
「……はい？」
「公の元婚約者は私です。
で、あなたには私が不幸に見えますかしらぁ？
公に捨てられた哀れな娘に見えますの？
公を想って今も泣き暮らしているとでもー？」

自分の悪戯が成功したというように、ルティアさんはぱっとあた

しを離すと激しく身もだえしながら笑いころげ、枕を抱いて涙を流した。

あたしは呆然と彼女を見ながらつぶやいていた。

「……あの男を、好きではないのですか？」

「今はそれほど嫌いではありませんわねぇ。

でも、観察していると面白い程度ですわよー？

あの方普段は居るのか居ないのか判らないくらい大人しいですし、生きてますかー？　という感じなのですけれど、あなたのことを話させるとめちゃくちゃ面白いですのよ？」

ナニを話してるんですか？

凄い怖いんですが。

「でもっ、エルディバルトさんがっ」

「あら、エディ様が何か余計なことをおっしゃったのねー」

目じりの涙をぬぐいながらルティアさんは肩をすくめた。

「あの方、おばかですからあまり気になさっては駄目ですわよー？」

おばかって……

あたしは混乱してしまった。

え、だって、ルティアさんはあの男の元婚約者で、あの男を好きではなくて？　それで、エルディバルトさんの今の婚約者で――幸せ？

でもエルディバルトさんはあの男の元婚約者は「捨てられて不幸になった」って。

捨てられて不幸になった元婚約者は、耐え難いというように笑いを堪えている。

不幸……？

「エルディバルト様は、まさかルティアさんが元婚約者だって、知らないのですか？」

「知ってますわよー？」

あれ、なんかおかしくない？
相手を知らずに、勝手に婚約解消＝不幸になった。と思っているわけではない？
あんなにエルディバルトさん好きなルティアさんのどこをどう見て不幸だと？
あたしの混乱を更に笑いながら、ルティアさんは肩を震わせ、アマリージェは嘆息しながらお茶を入れた。
あたしのあやふやな言葉で全てを理解したかのように、ルティアさんは笑いを必死に堪える様子で口を開いた。

「エディ様は私が公に未練があるからエディ様と婚約したのだと思い違いをなさっているのよー」
「はぁ？」
「私が公の近くに居たいが為にあの方と婚約したと思ってるの」
あ、勿論そんなことはないのですよー？　私は昔っからエディ様一筋ですものぉ。
心底おかしそうにいいながらルティアさんは目じりに涙を浮かべ、それを指先でぬぐいとりながら言った。

「ああん、もぉエディ様ったら！　まだそんなことをおっしゃってるのですねー？
ふふっ、おばかでとっても可愛いでしょう？」

そう言う彼女は泣き笑いの顔で、喜んでいるのか悲しんでいるのか一概には判らなかった。
……幸せ。
まるで、その言葉は呪文のように耳に届く。
幸せだと幾度も幾度も上書きするかのように。

あたしは自分のココロのどこかにもやがかかるような気がした。

幸せそうにしていたルティアさんが、本来は――実は見たままの幸せに浸っているのではないのではないかと思えたのだ。
あれ、なにこのちょっと腹の中にずしりと残る違和感は。

――おまえのせいで！
じゃないだろ、エルディバルトさん？　をい？

「で、逃げられたって何の話ですか？」
「ふふふ、その指にあるのは公の指輪ですわよねー？」

もぉ忘れてください、本当に。
あたしは二人が眠りにつくまで必死にその話題をさけまくる羽目に陥った。

思慕と溜息

きゅっと、リボンを指に巻きつけた。
左手の薬指。さすがにコレを母に見られる訳にはいかないだろうという結論を出したあたしは、いかにも「怪我してますよ」と言わんばかりに包帯ならぬリボンを巻きつけ、片手だけで結わくことが難しい為に右手と歯をつかってなんとかそれらしく整えた。

よし！
これでいい。これでこの呪いの威力は半減された。呪われた指輪の封印は成された。
朝食をすませ、馬車の用意が整ったと侍女の一人が呼びに来てくれたその時、あたしは丁度この指輪を隠す為に悪戦苦闘していた。ルティアさんが呆れた様子で視線を向けているが、手伝ってくれる様子は皆無だった為あたしは彼女の前でせっせと一人がんばったのだ。
「愛する方から頂いた指輪なら見せびらかしたいとおもいませんのー？」
「……愛？」
あたしはあまりな発言に固まってしまった。
愛？
誰が、誰を、愛していると？
「勿論、あなたが公を」
「スミマセン――」
最近やっとアレを好きだと認めはしましたが。愛とはなんぞや？
好きで精一杯なのですが。
「まぁ、愛していないのに結婚致しますの？」
「ものすごい誤解があるみたいですが、あたしとあれは付き合っていません。すなわち結婚話もありません」
すくなくとも、あたしはあれの名前を思い出すまで付き合うつも

りは無い。
無い……ちょっと流れに流されてしまいそうになったけれど、きっとあれは神様が止めてくれたのだ。勢いは駄目だと！
そう考えるとあの変質者の腹痛はまさに天罰！
　まずは冷静になってですね、きちんと当初の予定通り失われた記憶の発掘です。
なによりもそれが大事。

――　一生思い出さなかったらどうするあたし？

あたしは咄嗟に話の矛先をかえようと、ルティアさんの食いつきがよさそうな話題を振ってみた。
「ルティアさんはエルディバルトさんと婚約しているんですよね！」
この話題は彼女相手ならば絶対に食いつく鉄板だ。付き合いの短いあたしにだってそれくらいは判るのですよ。
「はいー」
　途端にルティアさんは満面の笑みになった。
年上だけど可愛い。可愛いメイドさん。
そう、彼女は相変わらず可愛いメイドさん。この屋敷にもメイドさんがいるのだが、彼女が着用している侍女服とはちがうので間違うことはないのだが、それでも時々使用人の方がぎょっとしている。

「いつ結婚されるのですか」
もし宜しければ結婚式は呼んでくださいね。
あたしの言葉に、ルティアさんはぴたりと固まった。
それまでおとなしく食後の紅茶を堪能していたアマリージェが、珍しくカシャンっとカップの音をさせる。
　あたしは自分の台詞がまさか自分を窮地に陥れるとは思いもしなかった。ええ、欠片も。

ルティアさんは天使のように美しいにっこりとした表情のまま言った。
「いつでしょうね？」
「……はい？」
「子供ができれば諦めると思うのですけどねー？」
――あれ、なんだろう。なんだかコワイ。
ルティアさんの目が、とてつもなくコワイ。
「できないのですよねー」
「えっと、あの？」
「そうしますと、やっぱりこちらの問題ではなく、そちらの問題だと思うのですよー？」
はい？
ルティアさんは固まった笑顔のまま、ぐっと手を伸ばしてあたしの指のリボンをしゅるりと無常に引き抜いた。
あたしの努力の賜物を！
邪悪な封印を解いた可愛いメイドさんは口元だけに笑みを浮かべ、その瞳は無表情。
「エディ様ときたら竜公の忠実な駄犬なものだから主より先に結婚はできないなんていいますのよ？」
その言葉でようやく相手の言わんとしている意味を汲み取り、あたしはざっと血の気を引かせた。
「おかげで婚約も晴れて六年目ですー」
「ああ！　馬車の用意が整ったんでしたよね！　では、あたし母のところに顔だしてきますっ」
「まだ話は終わっておりませんのよーっ」
逃がしませんよーといいながら手を伸ばしてくる相手をよけて、あたしはアマリージェに「行ってきます！」と声を掛けて逃げ出した。
危ない。

ものすごく危なかった。
危うくおかしな理由で結婚させられそうになった。もしかして実はルティアさんに恨まれている？　いや、恨まれるとしたらあたしではなくて確実にあの男だ。
そもそも、エルディバルトさんも謎の忠誠心など破棄してさっさと結婚してしまえばいいのに！
その実結婚がイヤで逃げてる訳じゃないですよね？
あたしは自分の胸元に手をあてて冷静さを取り戻し、玄関の車寄せに用意された馬車にものすごく下手になりつつ乗り込んだ。
馬車は辻馬車と呼ばれるもので、その側面には何の文様もない、味も素っ気も無いシンプルなものだった。当初はルティアさんが家の馬車を使って行くといいと言ってくれたのだが、神殿官――高位貴族であり高級官吏である人の紋章入り馬車などで母の家に乗り付けるなどもってのほかだ。あたしは心の底から辞退し、お手数ですが辻馬車を呼んで頂ければありがたいとお願いした。

ユリクス卿の自宅は聖都でも高位貴族だけが許される一区画に作られ、あたしの母が暮らしているのはそこから川を挟んだ高級住宅街にある。歩いて行こうと思えば行けない距離ではないけれど、聖都など訪れたのはもう何年も前のことで確実に迷子になりそうだったあたしはおとなしく馬車を選択したのだった。贅沢な出費だけれど、列車の代金が無いだけ今回は物凄く安上がり。
それも全てアレの恩恵だ。ありがたいですね！

箱馬車の小さな小窓から外の様子を眺め、あたしはゆっくりと呼吸を繰り返す。
母とあうのは一年ぶりで、実際何を言いたいという話題もない。会いたいといわれたから顔を出しに来たけれど、あって何を話せばいいのだろう。そもそも率先して会いたかった訳ではないし。
あたしはそれでもあれやこれやと頭の中で会話の種を拾い集め、

子供の頃のこと、あの八つの頃のことを聞いてみるのも良いかもしれないな。という思いと同時にほんの心の片隅にマーヴェルやティナのこと、そしてあたしの婚約がどうなっているのか聞いてみようと心の手帳に書き記した。

窓から眺める聖都はその名前に相応しく地面も綺麗にブロックが埋め込まれて整えられ、家々の生垣や花々が美しく全てを装う。あたしはふと歩いている男性二人の姿に心臓を掴まれたような違和感を覚え、それからふるりと首を振った。

――マーヴェルがこんな場所にいる訳がない。

彼は船長（ふなおさ）の息子で、内陸にはあまり近づかない。だからきっと気のせいに違いない。

あたしはそう思いながら、それでもどくどくと脈打つ心臓に苦笑した。

丁度ちらっと彼のことを考えたから、道端の男性がマーヴェルに見えただけ。

未練なんて、ない筈なのに。

それでもやっぱり顔を合わせるのはまだちょっと無理みたいだ。

顔を合わせたら、きっと笑ってティナとのことを祝福しようと思っているのに。でも、なかなか感情の制御はできそうにない。情けないなぁ。

あたしはあたしを笑い飛ばし、心を落ちつかせて、そうして準備が整った頃合にようやく母の暮らす邸宅へとたどりついたのだ。

御者の小父さんが馬車の速度をゆっくりとおとし、丁寧に停止させて馬車の狭い出入り口の掛け金を外してくれる。代金の交渉をしようとすると、小父さんはすでに受領済みだと軽く笑った。

……もうこんなにおんぶで抱っこはダメ過ぎる。

これについてはあとでルティアさんに言わなければならないぞ。

それともユリクス様だろうか。二人の顔を思い浮かべ、なんというか二人とも笑ってこちらの言うことなど聞きそうにないという結論

にたっしてしまった。

血のつながりはないはずなのになんて凄いそっくり親子。

＊＊＊

幾度か訪れたことがあるその屋敷は、煉瓦造りで未だ枯れていない蔦が程よくその壁にからめられている。屋敷の門は閉ざされているが、別に門番がいるという訳でもなくあたしはすんなりとその門を押し広げて中へと入り、屋敷の正面玄関の二枚扉の前、勇気を奮い起こすように息を吸い込んでドアノッカーを軽く二度ほど鳴らした。

しばらくたてば扉が内側から開かれ、開いた当人である執事さんが軽く目を見張り、口髭のある口元を緩めた。

「おかえりなさいませ。リドリー様」

おかえり、といわれると物凄く違和感を感じてしまう。まるで当然のように執事は身を引いてあたしを迎え入れ、

「奥様は居間においでですよ」

と、取次ぎもせずにあたしを案内してくれる。

手入れの行き届いた家の内部を、あたしは少しばかりの緊張と共に歩みながら自分の荷物をぎゅっと抱きしめようとしたが、それに気付いた執事にそれは取り上げられてしまった。

「リドリー様はいつこちらにお着きになられたのですか？」

「えっと、昨日です」

「さようでございますか。このところこの辺りも物騒でございますから、もし外出なさる際は必ず声をおかけ下さい。供を付けますから」

その口調が少しばかり固く、あたしは聖都も物騒なのだなぁと暢気に思った。

軽く会話をかわしながに二階へと通され、そこの一室――扉を軽く

ノックして執事さんが中に声を掛けると母の声が響いた。
「なぁに？」
「奥様にお客様でいらっしゃいます」
「帰して――もううんざりよ」
しかし母は固い口調で言い切った。懐かしさを伴う母の声。だというのにその口調は尊大で疲れさえみせる。あたしが瞳を瞬くより先、執事は扉をあけて言葉を続けた。
「このお客様をお帰ししたら、私のクビをきりたくなられると思いますよ」
「どう――」
居間のソファで座る母と目がばちりと合うと、彼女は口を開いたままじっとあたしに見入り、挙句の果てに彼女らしからぬ行動に出た。
――自分の頬を軽くつねったのだ。
それからゆっくりと首を振り、面前にあるテーブルがもどかしいというように立ち上がってぱたぱたと駆け出し、あたしをその腕の中に閉じ込めた。
「リドリー、私の可愛い小さなリィ」
――いたね。いましたね。そういえば……あたしのことをリィと呼ぶもう一人のひとが。
子供の頃のようにそう言われ、あたしは久しぶりの再会にげんなりとしつつそのキスを頬に額に受けまくった。
お腹のあたりがほんの少し、くすぐったい。
「ああっ、大きくなったわね」
……お母さん、あたしだいぶ前から成長止まってるから。
「会いたかったわ。リィ」
「うん、あたしも――あたしも会いたかった」
もう随分疲れたけど。

それでもじんわりと自分の中に嬉しさが広がるなか、母はやっとあたしを解放して肩を抱くようにして言った。

「ああ、ごめんなさいね。あんまり嬉しかったものですから」

あたしに言われたのかと思ったが、その台詞はあたしに向けられたものでは無かった。

「ご存知でいらっしゃいますわよね？　私の愛娘、リドリーです」

母が穏やかに言葉を続ける先、丁度窓辺の方に立っていた青年は微笑んだ。

「勿論存じ上げてますよ。ぼくは彼女が大好きなんです」

一匹いたら三十匹いる。

確実に！

その時の自分の感情を言葉にするとしたら「お母さん、何か叩くもの！」が正直なところだった。
もう本当に抹殺すべきだろう。
「まぁ？」
その男は窓辺に立っていた。
本日の髪の長さはおそらくきっと肩口辺り。紐で首の後ろで一本に結わえている様子。そして着用しているのは神官服ではなかった。薄い若草色に濃い目のバイピングがなされた神殿官のものだ。だらりと長く、腰の辺りを幅広のベルトでとめている。神官服だとその下にズボンは無いが、今回は若草色よりも濃い目のズボンを穿いている。幅広のベルトから伸びた組紐が体の動きでさらりと揺れる。
――アレの発言をどうとったのか、母は微妙な顔をしてあたしを見た。彼女の視界に入ったあたしときたら、それはそれは見事に引きつっていただろうと推察できる。
殺意に限りなく近いなにかによって。
「どうしてここにいるのかしら？」
あたしの声は低かった。
言葉に呪い要素を含ませることができるのであれば、おそらくヤツは三回程は呪いの波状攻撃を受けたはずだ。
ただし、残念なことに害虫には少しも通用している様子はみられないけれど。
「挨拶に来たのですよ」
しかも、この変質者は完全に外面神官長モード。
軽く微笑を湛え、害意など欠片ほどもない人畜無害っぷり。これが初対面であればあたしはその視線に恥じ入ってひれ伏して「ごめん

なさい」と訳もなく謝罪を口にしていただろう。
「神殿官の方に失礼よ」
母がそっとたしなめるように言う。
神殿官を名乗りやがりましたか、そうですか。そうですね？　神官が女の子に対して「大好き」とか言っては倫理的にも問題がありますよね。
神官は普通神様に仕えるのです。女性を好きだとか口にしたり行動にうつしたら普通に破門とかじゃないですか？
破門されるべき。

神殿官はあくまでも神殿と王宮とをつなぐ役割。お役人だ。当然妻帯だってすることでしょう。
抜け目無いところが激しくむかつく。
「リィ？、どうしたの？」
軽くたしなめるように母があたしの腕をとんとんっと叩く。
「母さんはこれが誰だか知ってるの？」
あたしはどこまでも低い声で尋ねた。
「あなたの暮らしている町、コンコディアの神殿官の方よね。以前にあなたを迎えに行った時にはじめてお会いしたのよ。私が貴女を聖都に連れて来ようとしたら、もう十六で成人を迎えているのだから親は見守ったほうが良いって説得されたのよ。神殿官であるあの方がきちんと見守ってくださると言うから……それに、幾度か報告にも来て下さったとても親切な方よ？」

……あたしはふるふると身を震わせた。
物凄く言いたいことが蓄積されていく。あたしは引きつった微笑を浮かべ、ぎぎぎっと母を見た。
「お母さん、ちょっと席をはずしてもらっていい？」
「――でも」

「お願い」
あたしの強い口調に、母は困惑を示したがすぐに軽くうなずき、頬に口付けを残して神殿官と名乗った腐った男に一礼した。
「お飲み物を用意してまいりますね」

それでも名残惜しい様子でちらちらとあたしを気にしながら出て行く母を見送り、あたしは大きく息を吸い込んだ。
心の中でゆっくりと数字を数えた。言いたいことを丁寧に整理していく。
神殿官の衣装が激しく格好いいとかはこのさい無視。その衣装はユリクスさんが着てこそですよ。

「神殿官？」
「いや、だってイロイロと言えないことってあるでしょう？」
そうですねー、神殿官どころか神官長で公爵様でいらっしゃる。
あなたがその爵位を持っていると思うだけで公爵位なんて道端の石ころ同然ですが。
「うちの母と顔見知り？」
「だってほっといたら君を連れて帰ってしまいそうな勢いだったから」
「そこに座れ！」

おまえはやっぱり詐欺師だろう。
あたしはばしりと指を突き付けた。そうですね、覚えがありますよ。
一年前にわざわざ町にまでやってきた母が、いがいにあっさりと引き下がった覚えが。
あたしの怒りを前に、神官長だか神殿官だか竜守だか竜公だか何だか判らない男は言われた通りにその場に座った。いや、さすがに床に座れとは思っていなかったというのに、その場でかしこまって座られてしまい、あたしは思わず怯んだ。

なぜ、床ですか。
そこまで鬼畜じゃないですよ、あたしだって。
怯んだあたしに対して、神殿官の高潔そうな衣装の男はまるで捨てられた犬のようにあたしを見上げてくる。
「ごめんなさい」
「……」
「でも、もともと一緒に来る予定だったじゃないか」
そんな予定はナイ！
少なくともあたしの予定では、母のところには一人で来る予定でした。絶対に何が何でも変質者同伴での母との対面なんてちっとも欠片も考えていなかった。
「本当はルティアのところか神殿で待とうかなと思ったけど……でも、会いたかったんだよ。すごく、すごく、会いたかった」
真摯な眼差しで切なそうに言われ、あたしはまるで自分が非道なやからに成り果てたような錯覚に陥った。
「リトル・リィ――寂しかったよ」
あたしは先ほどまで自分の内にあった言いたいことリストが途端にがたがたと崩れ落ちていくのを感じた。言いたいことはいっぱいあった筈だし、何よりも顔を見たその瞬間にひっぱたいてやりたい気持ちだってもっていたというのに。
あたしの怒りはしおしおとしおれて、最期には眉をひそめてまったく違う言葉が搾り出されてしまった。
「腹下しは、治ったの？」
あー駄目だ。あたしってば弱すぎる。どうして折れてしまうのだろう。
もっと強い意志で突っぱねて。もう絶対にイヤだと言い切ってしま

えばいいのに――好きっていう感情はなんて厄介なのだろう。幾つもの紙に丸め込んでくず入れの中に入れて、あげくそのまま火を放ってしまいたい。

「……腹下し？」

「違うの？　エルディバルトさんが貴方はセンサイだから悪いものを食べるとすぐに中って酷いことになるって。でも、言わせてもらえば腹痛だからって部屋のものを破壊していいってことじゃないと思うのよ？　あの列車の特別車両もう本当に酷いありさまだったのよ？　誰も文句の一つも言わないみたいだけど、あれは絶対に駄目。弁償もの！　いくらなんでももうちょっと冷静……――」

あたしの言葉は途中で途切れた、あたしの言葉にかぶせるように、突然面前の男が座ったまま爆笑したのだ。

爆笑――口元に手を当てて耐え切れない様子で肩を震わせ、ついで立ち上がったかと思えばあたしの腕を引っ張りあげて自分の腕の中に閉じ込めた。

「そうか、腹痛ね。ははっ、そうかな。そうかもね」

は？

「本当なら半月くらい平気で腹痛になっちゃうんだけどね。君に会いたい一心でがんばったよ？　ああ、リドリー、ぼくのリトル・リィ。大好きだよっ」

その上機嫌っぷりが理解できず、ついで首筋をなぞるようにして相手の手が頭を押さえようとするものだから、これは危険だと察知したあたしが体をぐいぃっと引き離そうとすると、ふっと腕の力を抜いて懇願するように甘く囁いた。

「口付けしたい」

「――」

「駄目？」

なんで、なんで、なんで聞くのっ。
今までだって聞いたことないじゃない。無理やりしなさいよ。
「リトル・リィ――」
切なそうに囁きが吐息と混ざり合ってあたしの鼓動を早めてしまう。
「リドリー」
唇と唇が触れ合う寸前、もう口付けに限りなく近い体制のまま、
それでもあたしの許しをじっと待つ男の言葉と態度にあたしはわな
わなと身が震えた。
吐息が、香りが、熱が、あたしの中で蓄積されていく。
「い……」
いいといえば、それはあたしがそれを許可したということですよ。
それは、それは、あたしの――
あたしはぎゅっと眉を潜ませ、相手の胸の辺りにある指先でその
神殿官の衣装、絹の手触りを握り締めた。
血の気がどんどんと下がって、やけに耳が熱い。
「交換条件！」
あたしは咄嗟に言った。何か条件を付けなければ――耐えられな
かった。
どう表現してよいのか判らないけれど、あたしが耐えられなかった。
キスしたいなんて。
自分から言うなんて。
「指輪を外してくれれば、駄目じゃ」
ない、という言葉は口付けによって飲み込まれた。軽くうつむい
た体を無理やり上向かせるように唇を押し当てて、ついでいたわる
ように柔らかさをもって触れてくる。
力強く抱きしめてくる腕が背中をしっかりと固定し、もう片方の
手が背筋を背骨をなぞりながらゆっくりと下がる。
その優しく強い感覚にぎょっとしながら身じろぎすると、唇を触れ
合わせたまま苦しそうな囁きが落ちた。
「舌を出してごらん」

さぁっとその言葉は背筋をなぞりあげた。血の気がこれでもかという程に下がり、ぞくぞくと全身に冷たいものが染みとおる。だというのにその次にはかぁっと体温の変動を感じつつ、男の手が背骨の窪みを押すように撫で、なぞるようにお尻のあたりをゆっくりとさすりあげたことに別の感覚を覚えた。

――よだれを垂れ流す駄犬！

まさにソレだ。

あたしは手を回してぎゅっとその不埒な手の甲をつねりあげ、引きつった笑みで言った。

「とりあえずこの指輪を外してね？」

「え、なんで？」

「外しなさい！」

一歩距離をつめて自分の左手を突き出す。

リボンという封印を可愛いメイドさんにあっけなく解除されてしまった呪わしき邪悪なる指輪だ。

「似合ってるのに？」

いやいや、分不相応ってくらい似合いませんよ。この細かい文様の辺りとかがとくに。

あたしがそれでも精一杯の低姿勢で引きつり笑顔を撒き散らしていると、しぶしぶという様子で男の手があたしの左手を掴み、もう片方の指先が指輪に触れた。

「どうなさったの？」

丁度その時に紅茶の乗った銀のトレーを手に持ち現れた母に、ヤツはにっこりと微笑みながら言った。

「彼女は似合わないなんて言うんですけれど、似合いますよね？」

その所作は、指輪を取るというよりむしろはめているようにも見えた筈だ。

あたしは自分の手を必死に相手の手から引き抜こうとしていたが、優男の癖してその手はびくとも動かず、あたしはネズミ捕りにかかってしまったネズミのように手を支点としてじたばたと暴れることしかできなかった。

母の瞳が愕然とあたしと指輪とを交互に見つめていたような気がするけれど、もうそんな悪夢からは覚めてしまいたい。

「あの、どういうことでいらっしゃいます？」

どういうことでしょうね。

あたしはここで流されてはまずいと「違うのっ、これはっ」と慌てて声をあげたのだが、外面大王は穏やかな調子で続けた。

「挨拶に参りましたと申し上げましたね。

彼女との婚約の挨拶です」

爽やか好青年を演じるんじゃない！

この邪悪の大魔王めっ。

焦るあたしが更に相手の言葉を打ち消そうとするより先に、母のきっぱりとした声が響いた。

「お断りします」

その声はまさにあたしが理想とする毅然と凛とした態度で発せられ、あたしはあまりのことに称賛と羨望とを覚えるより先に、何故か唖然としてしまった。

「お帰り下さいませ。勿論――お一人で」

通じぬ言葉と届けぬ言葉

母が持参したお茶をあたしは自らカップに注ぎ落とし、行儀は悪いが椅子に横すわりしてたそがれるようにして飲んでいた。

「いい加減に出て行って下さい」

「一人で帰るつもりはありません」

二人の口論はもう半刻あまりも続いている。

そう、変態対母の舌戦はその場を冷却作業でもしているのかという程の冷ややかな微笑みと共に続いているのだった。

完全無欠にあたしを無視して。

「私が神殿官だから反対だというのであれば、どのような身分であれば承諾して頂けますか？」

「娘に結婚はまだ早いのです」

「十七の女性の結婚が早いとは到底思えません。失礼ですが、貴女だとて彼女の年齢ではすでにお子さんをお産みになっておられたと思いますが？」

「だから早いといっているのです。結婚など勢いでするものではありません」

――帰りたい。

マイラおばさんのトコに帰りたい。あの殺人パンすら懐かしい気がするくらい帰りたい。

柔らかでふんわりとした焼きたてのパンの香りと、豪快なマイラおばさんの笑いが恋しい。

幾度かこの二人の間に割って入ろうとしたものだが、生憎と二人はあたしの話など受け付けない。そしてお互いに微笑みあっているのが怖い。マイラさんと違い、この二人の笑いときたら殺伐としすぎ

です。

冷め切った紅茶は葉の苦味が際立ってしまい、すでに美味しいとは思えない。ただ喉を潤す為だけの存在に成り果てていた。

それでもあたしは親切心から二人の前にも紅茶を注いでやったし、更に親切心を発揮して椅子に座るようにも促してさしあげた。

ずっと喋りっぱなしなのできっと喉も渇いたことだろうし、立ちっぱなしもよくない。

だが気付いた。放置しておけばそれだけ早くこの舌戦も終わったのかもしれない。

今更言っても仕方アリマセンが。

「しかも貴方ときたら、何がリドリーは成人だから親元から離れるのも良いなどと白々しい。自分の近くにリドリーを置きたいが為の詭弁ではありませんか」

「その通りです」

……けろりとあっさり言いやがりましたね。

「信用なりません」

ごもっともです。

まぁ、信用してはいけません。そいつは詐欺師です。詐欺師で卑怯者で裏技野郎でよいところを列挙しろといわれても生憎とあたしにはそれが適いません。

かわりにエルディバルトさんでも連れて来ましょうか？

あの人ならそれこそ信じられない程の美人麗句を並べ立ててくれるでしょう。変態を変態と認識する能力もなくただひたすらに大好きっぽいですからね。

いや、冗談です。

あたし……あの人若干苦手ですから。

「リドリー！」

ばっと母の顔がこちらに向けられ、あたしは危うく白磁のカップを取り落としてしまいそうになった。
あたしの存在など忘れ去られていると思ってイマシタヨ？
「あなたはこの人と結婚したいなどと思っているの？」
「いやぁ、それは……」
思っているようないないような。
どう言えばいいでしょう。激しく微妙。
「ほらっ、この子も反対です。ですからこの話は無かったことに」
「リドリーは照れているだけですよ。何故そこまで反対されるのか理由をお聞かせ下さいとお尋ねしているのですよ。私の何がそんなに御気に障られたのでしょう」
そこはかとなく漂う胡散臭さ？
それとも明らかな変態臭とか。
爽やか好青年を演じつつも、明らかに怪しい。というかその爽やかさが怪しすぎる。
だがそんなあたしの予想を上回ることを母は突き付けた。
「結婚など必要がありません。人生の墓場に娘を追いやる親がどこにいますか」
もしもーし……それは親の台詞じゃないよ。
結婚が人生の墓場。
そんなこと言い出したら子供を結婚させる親が鬼畜になってしまいそうですよ、お母さん。それに、もうそういう話だと年齢が早いとかまったく関係ないですよね。
今までの時間は何ですか。
「男なんていうものは結婚してしまえば女の財産を食い物にして、挙句好き勝手に振舞って良いと思う下らない生き物よ。妻の心など

踏みにじって他の女に手を出して。あなたもその口なのでしょう」
「――」
「とにかく。リドリーは結婚なんてしなくていいのです。自分の人生を歩むのに男なんて不要です！」
あいた口がふさがりませんよ。
あたしは母の結婚観がここまでいっていることをはじめて突き付けられてしまった。確かに父と母との結婚は幸せなものではないと知っているが、だからといってそこまで思い込み娘の結婚まで拒絶するとは思わなかった。
この見るからにオカシナ男だから反対しているのではない。
母が反対する理由は「結婚など不要、男など要らない」それだけだ。
呆然としたあたしと同様、口八丁手八丁で世の中をひょうひょうと渡りきる変質者は一旦大きく息をついて、やがてその視線をあたしへと向けた。
「リトル・リィ」
「なによ」
「とりあえず今日のところは帰ることにする」
うわっ、負けた。
この男が引き下がった。すごい、母強いっ！？
あたしってば本当にお母さんの血を継いでるかしら？　物凄くその強さを分けて欲しい。
あたしが驚愕に瞳を見開くと、すっと立ち上がり丈の長い神官服に刻まれた皺を払うようなしぐさをした男は悠然と微笑んだ。
「よく考えて」
それはあたしへと向けられた言葉だった。
言葉というか、もう確実に警告。脅し。
冷たい冷笑は底冷えする力を持ち、口元に張り付いた歪んだ微笑は背筋に悪寒を走らせた。

「私が本気になる前に少しばかりお母さんの気持ちをほぐしておいて欲しいな。普通に説得したいと思っているんだ。できればね？」

あたしは背筋に冷たい汗が流れるような感覚を覚え、ひきつりつつこくこくと勢いにまかせてうなずいてしまったが、

だから、あたしはまだ結婚を承知してないんですが！

――あああ、もぉっ。聞いて、人の話っ。

＊＊＊

あたしの部屋として通された部屋で、あたしは人生について思わず考えたくなった。

薄い桃色の壁紙だとか、レースのクッションだとか、それはそれは愛らしいというかオソロシイ硝子の目が光るドレスを着用した人形だとか。

「……前より凄いことになってる」

以前も随分と可愛らしい部屋だった記憶がある。幾度か泊まった時に「素敵」という言葉よりも「冗談？」という言葉を必死で飲み込んだ部屋だ。

「クロゼットの中に替えの御衣装がございます。お食事の時にはお召し替えを――もしサイズに不備がございましたら手直しする者を用意致しますから」

と執事さんに穏やかに言われたが、おそるおそる開いたクロゼットの中身はおそろしい桃色と愛らしいドレープの洪水でした。

……ティナなら似合うかもしれませんが。

お母さん、あなたはあたしにどんな夢を見ていらっしゃるのか。

絶対に着替えないな。あたしはうんうんとうなずきながらクロゼットの扉を閉ざしたが、その決意はあっけなく覆された。母が満面の

笑みでその中からひらっひらのオソロシイ薄紅色の衣装を引き出し、無理やりあたしに合わせ、あげく髪の毛にブラシをかけはじめたのは、ほんの四半刻後のことだった。

トイレ休憩並みの自由よさようなら。

「髪の毛の手入れが良くないわ。毎日光沢がでるように丁寧にブラシをかけているの？　オイルは？」

パン屋の店員にそんなものは必要がありません。

「お肌もちょっと乾燥しているのではないかしら？　かわいそうに。きちんとお手入れをしなければね？」

母はまるであたしを相手に人形遊びをするように実に楽しそうに語りかけてくるが、先ほどまで彼女の怒りを買いまくっていた男の話はついぞその唇から漏れてこないことにあたしは眉をひそめた。

「あの、母さん？」

「なぁに？」

「……さっきの神殿官のことなんだけど」

「顔がいいからといって騙されてはいけないわ。ああいう男は遊び人なのよ。神殿官なんて高潔そうな職種に見えてきっととても女癖が悪かったりするものなのよ。あなたは男の人への免疫が少ないから、ああいった顔だけの男性に騙されてしまうのよ。可愛そうに」

免疫。

確かに免疫はないけれど、あたしはこれでも結婚間近までいったことがあるので、一応婚約者なんかも――

「あ、そもそもあたしの婚約ってもう解消されてるのよね？　マーヴェルはティナと結婚したの？　お母さん、何か知ってる？」

あたしはおとなしく母に髪を何度もすき上げられながら、今回の訪問で聞いておきたかったことを思い出した。

母はあたしの髪を梳く手をとめて首をかしげた。

「婚約の話は破談されているわ。私があなたの婚姻の為に出向いて――あなたがいなくなった折りにその話はきちんと済ませておいたから。いつまでもあんな男との縁があるなんて冗談ではないわ」

母の冷たい単調な言い方にあたしは少しだけ心を痛めたが、あたしの結婚式にわざわざ来てくれた筈の母を思えば致し方ない。

何より、母の言葉の冷たさにあたしは瞼を伏せた。

どうして結婚間直で逃げ出してしまったのか、その理由をあたしは言っていない。ただ、結婚したくないということだけを母には告げたのだけれど、母はその理由を知っているのだろうか。

――ティナとマーヴェルのことを。

勇気のないあたしはそのことを今まで母に問いかけることができなかった。

けれど、彼女の言葉の冷たさが如実にそれをあらわしていた。

母は、知っているのだと。

「じゃあ、ティナとマーヴェルは今頃は夫婦になっているかしらね」

さりげなく、なにげない口調で――あたしは言えただろうか？

心臓が少しだけ早くなり、体温の上昇を感じる。何の感情も交えずにさらりと言い切りたいのに。何故、それができないのだろう。

母の顔を見ることができなくて、あたしは後ろを振り返らずに正面だけを向いて言葉にした。一拍、小さな息を呑む声が背後から聞こえたけれど、母はやがて穏やかな調子で口を開いた。

「……さぁ、知らないわ。けれど、前の手紙で書いたわね。一月以上前の話しになるけれど、ティナがあなたを探してここまで来たのよ？」

「ああ、手紙届いたわよ？　聖都からうちのほうまでって結構日数がかかるみたい。手紙届いたのってほんの数日前なんだから」

その手紙がもとでここまで来たのだ。

「あなた、ティナには会った？」
小さな囁くような声に、あたしは首をかしげた。

「あたしの住所教えたの？」
――確か手紙には教えてないとあったと思うのだが。
あたしは数日前に受け取った文面を一度しか読んではいないが、それでも忘れてはいなかった。
ほんの少し心臓がどきどきする。
今更、ティナはあたしに会いたいのだろうか？　幸せになったことを報告？　でもそれって何かおかしいわよね？
あたしを探すことでティナに何かいいことってあるかしら。いや、たった二人の姉妹だから、会いたいという純粋な気持ち？

――あたしは、できれば会いたくないなぁ。
そのうちに、数年たてばお互い笑って話せるようになるのかもしれないけれど、たかが一年ちょっとの今はまだ会いたいという気持ちにはなれそうもない。
あたし、心狭い、もしくは弱い？
笑って二人を祝福する！　それだけはずっと決めているのに。あたしは未だにその場面がもっと遠い未来であるようにと祈っているのだ。

「教えてはいないのだけれど、ティナが来た時――あの子ときたら私の書斎に入り込んだようなのよ。あそこにはあなたの手紙がおかれていて、その中の一通が無くなっていたものだから心配していたの。いいのよ、顔を出していないのであれば、きっと私の杞憂だったのね。手紙は読み返している時になくなってしまったのかしら。ごめんなさいね」

ほっと息をつく母は「あと……――」と言葉を続けようとしたが、

その言葉はそのまま落とされはしなかった。
「母さん？」
「いいえ。何でもないわ。逢いに来てくれて本当に嬉しいわ。けれど、ちょっと時期が悪かったわ。最近この辺りにはおかしな変質者がでるのよ。一人で外に行ったりしては駄目よ？」
おかしな変質者ならさっき部屋にもいましたよ。やけに堂々として爽やか好青年を演じまくってましたが、あれほどおかしな変質者をあたしは他に知りません。
あたしは内心でそう付け加えておいた。
「ほら、リボンをつけてあげましょうね」
どこか強張るような硬い口調をムリに微笑みに変えるように、母はふるふると首を振り、あたしの髪を結わいた。

「まあ、可愛い」
……右と左で揺れるツイン・テールに赤いリボン。
お母さん、あたしもう子供じゃないのでコレは本当に勘弁して下さい。

歪愛と思惑

あたしは昨日の夕方にルティアさんに手紙を書いた。
今日は母の家に泊まるので、神殿にもルティアさんの家にも行けないですと。泊まるつもりはあまり無かったのだが、せめて一日くらいと言う母に押し切られたのだ。

「母さん！　あたしの荷物はっ」

翌朝、あたしは机の上に置いた鞄の中身がなくなっていることに愕然とした。たいしたものが入っている訳ではなかったけれど、着替えと日用品とが入っている。あとはお財布。お財布までも無いのだ。
「必要が無いでしょう？」
「必要って……着替えは？　あたし、こんなひらひらドレスで帰りたくないっ」
十七才にもなって桃色ひらひらドレスは止めて。これで町に戻ったら変態以上の変人になってしまいそうで怖い。町の人は一瞬ぎょっとした様子で視線を逸らし、ついで「リドリー、似合っているよ」と言ってくれると思われます。物凄くいたたまれない。
マイラおばさんに至っては必死に笑いを堪えながら肩を揺らし「可愛いじゃないか」と言ってくれるだろう。
あたしの心に物凄いキズが生まれそう。泣きたいくらいの。

母は穏やかに微笑み、
「まぁあなたときたら。あなたは帰って来たのよ？　どこに行くというの？」
おかしなことを言わないで？　という空気を撒き散らしながらオカシナコトをおっしゃる。
あたしは小さくうめいた。

「母さん、あたしは母さんに会いに来ただけで――コンコディアの町に戻るのよ？」
「どうして？」
どうしてって、
「どうしても何も。あたしはあの町の住人なの」
仕事ももっているし、税金も払っているし。アパートにはきっちり家賃を払ってます。
少なくともあと二か月分は払ってありますよ。
「そんな辺境に暮らすより、ここにいたほうがずっと幸せよ。あなたは仕事なんてしなくていいの。この家で、ずっと母様と一緒に暮らせばいいのよ。勿論、結婚なんてしなくていいの。孫は欲しいけれど、いいのよ。私はあなたがいればそれでいいの。やっと可愛いリィが戻って来てくれたのですもの。母様をこれ以上悲しませないで」
母がゆっくりと近づき、あたしの頬に触れる。
愛しむように微笑まれても、あたしは泣きたいような複雑な気持ちでもやもやとしてしまった。

母は……相変わらずだった。

「母さん、あたしはもう大人なの」
「いいえ、あなたときたらいつまでも小さな子供よ。あんなおかしな男に引っかかるなんて、危なくて一人にしておけないわ」
いや、おかしな男は認めるけれど、別に引っかかってません。
私は強い意志を今のところ貫きとおしてますよ！
……通して、ますよ？
ちょっと自信がない。
滅びてしまえ恋心。

「ずっと母様と一緒にいてくれればいいのよ」
ぎゅっと抱きしめる柔らかな腕の中、あたしは自分が無力な子供に戻ってしまったような錯覚を覚えた。
昔の自分なら、一緒にいると言うだろう。ここにはティナの視線も、父の視線も無い。自分を引きとめるものが無い。
母だけがあたしを求めてくれている。
母はあたしにとって大事な――
「母さん、あたしは」
口を開いたところで、控えめなノックが部屋に落ち、執事が一礼して口を開いた。

「お客様がおいでです」
「今日は誰とも会うつもりは無いわ」
「それが、リドリー様にお客様なのです」
困ったような執事の言葉に、母が更に気色ばむ。
「神殿官の方ならなおさらもう」
「いえ……リドリー様のご友人だとおっしゃるのですが、リドリー様、アビセイム伯令嬢をご存知でいらっしゃいますでしょうか？」
心配するように尋ねられ、あたしは首をかしげて瞳を瞬いた。
誰、それ？

「アビセイム伯令嬢、アマリージェ・スオン様とおっしゃる方がいらしておいでです」
「マリー？」

＊＊＊

「友達がいがありませんわね。わたくし、初対面できちんとアビセイム領を治めるジェルド・スオンの妹と名乗った筈ですのに」

それとも友人だと思っているのはわたくしだけでしたのでしょうか。

わざとらしく言うアマリージェは、丁寧にあたしの母にスカートの裾をつまみ、頭を下げた。

「はじめまして、リドリーとは親しくさせていただいております。アマリージェ・スオンでございます。こちらは当家の家人、アジスです」

一緒に来ていたアジス君は緊張した様子でぺこりと頭を下げた。

「リドリーのお友達？」

母は戸惑うようにアマリージェとあたしとを交互に見た。

そうですね、なんというか品位とかイロイロな問題で「友達」という単語が当てはまらないですよね。なんてひねくれたことを思ってしまったあたしだが、母が思っていたことはもっと酷いことだった。

「リィの友達ははじめてね」

――友達いなくてスミマセン！

胸が、胸が痛いよお母さん。なにこの直球で厳しい感じ。

しかし、母は何故か嬉しそうにしながらそそくさと「お茶とお菓子の準備をしてあげましょうね。座っていらして」と出て行ってしまった。

「なんつーか、きんちょーする」

と、やっと会話が許されたとでもいうように、アジス君はいい、勢いをつけて椅子に座った。それをアマリージェが軽くとがめる。

「アジス、男性は女性の椅子を引いてさしあげるものです。座る時にはタイミングを合わせて椅子を押して、男性が座るのは一番最後。もし女性が部屋に入室したら、男性は席を立ち上がって迎え入れるのが礼儀ですわ」

きびきびとした教師の言葉に、アジス君は「けっ」という表情を

見せたが、素直に言われたように椅子を引いてアマリージェとあたしの椅子を引き、最期には一礼してアマリージェに「座って宜しいでしょうか、姫」とまで言った。
「よろしい」
――ちょっと楽しそうなアマリージェ。

「にしたって、リドリーってオジョーサマだったんだなー」
「いや、そんなことないから」
あたしは顔をしかめた。
あたしはしがない一般人ですよ。
それでもあえて言うのであれば、エセお嬢様です。まさに虚構――この屋敷はあくまでも伯父が母の為に用意したものであって、あたしはただの母の付随品。
「ルティア様はいらっしゃらなかったのですね」
まぁ、あの方も忙しいのかもしれないし。と、それでも話題の一つとしてふってみると、アマリージェではなくアジス君がにやにやと答えた。
「ルティア様は宮廷の人間にひじょーに評判が悪いから、リドリーのお母さんに会うのは止めておくって言ってたぞ」
……なにそれ。
答えもないままに、アマリージェに視線を向けると、彼女はこほんっと咳払いを一つ。

「ルティア様からご伝言です」
ふとアマリージェは声を落とした。
「お母様の邸宅には幾日御逗留でいらっしゃいますか？　勿論幾日逗留なさいましても構いませんが、公を放置すると楽隠居が珍しく仕事をして聖都に嵐がきますので早く戻っていらして――ということです」
「意味が判りません」

「……これでも判りやすく噛み砕いたのです」
どうやらルティアさんはもっと難解な言葉でアマリージェに伝えたようだ。伝言ゲームには向かない人選かもしれない。

「リドリーさんに伝えてくださいなぁ。何日おかーさまのとこにおられるかしらぁ？　何日でもかまいませんけれどぉ、公をあんまりほうっておきますと、いつもだったらしないよけいな仕事までしたり、欲求不満が溜まりすぎて暴れだしますからできれば早く帰ってきてくださいませねぇ？　あ、でも、公にいぢめられてるエディ様は見ものですわよー、でもエディ様は私のですからあげませんわよぉー。もぉ、本当にエディ様可愛いっ。が原文」

アジス君が肩をすくめて言う。しかもルティアさんの声をわざわざ真似ているので、あたしは噴出すのを懸命に堪えたし、アマリージェは目を見開いていた。
それはともかく、いろいろ要らない部分ははしょられていたらしい。確かに要らない。
最後のほうは完全に必要ないです。どんだけルティアさんはエルディバルトさんが好きなんだろう。しかも、たかが短い付き合いしかないあたしにだって理解できることを、エルディバルトさんが理解していないのが意味不明。
――アジス君は最後のほうの台詞を実に楽しそうにニヤニヤと言っていた。
あたしが乾いた笑みを浮かべたところで、母が昨日同様にお茶の用意を整えて顔を出します。
途端に座っていたアジス君がすっと席を立ったものだから、あたし眉を潜めたのだけれど、アマリージェはよくできましたとばかりに一つうなずいて微笑んだ。
あ、紳士のマナーというヤツですか。
……なんだろう。偉いぞ、アジス君という思いと同時、アマリージ

ェの教育がちょっと怖かったです。

「楽しそうね。私も混ぜていただいて構わない？」

混ざる気満々な母だったが、あたしは慌てて席を立ち、部屋から押し出した。

「母さんは駄目っ」

「まぁ、リィってば冷たい。あなたがはじめて友達といるのよ？いいじゃないの」

あたしってばどんだけ寂しいコドモですか。

「そんなことないでしょっ。マーヴェルだっ……」

不用意に出した言葉に、あたしはびきりと固まり、母は息をついた。

「マーヴェルは友達ではないわ。そうでしょう？――まぁいいわ。では、スオン様、どうぞ楽しんでくださいませね」

母はアマリージェに微笑みかけ、あたしの頬にキスをして部屋を出ていった。

多少からだを硬直させたまま、あたしは自分の席に戻りながらアマリージェとアジス君とを交互に見て、それから乾いた笑いを浮かべてしまった。

「すげー、リドリー愛されてる？」

なんで疑問系で言うの、アジス君。

しかも視線が生あったかい感じ。

あたしは意地悪くアジス君を睨みつけ「あーら、アジス君だって随分と愛されてると思うけどなー？」と口元を緩めた。

「へ？」

「ねぇー？　アルジェ――」

「だぁぁぁぁぁっ」

アジス君は悲鳴のような奇妙な声をあげると、がたりと音をさせて席を立ち、あたしの腕をぐいぐいと引っ張った。

「なに、何でっ」
部屋の片隅で涙目で訴えてくる少年をにまにまと見下ろし、あたしは更に口元をにーっと歪ませてみる。
「言い忘れたけど、おとといアジス君の部屋に泊めさせてもらったの。ターニャさんと町中であってね」
ソレ以上は言葉を濁すあたし、アジス君は泣きそうな顔をし、ついでおいてけぼりを食らったアマリージェが「いったい何ですの！」と声を荒げた。

「二人で何です！　いやらしいっ」
いやらしいことはありませんよ。
「アジス君ったら、実は」
「リドリィィィっ」

「おじいちゃん子なんですよー」

ちょっと虐めすぎました。

＊＊＊

とんとんとんっと、神経質そうな指先が椅子の肘掛を突いた。
それまで数多の手紙に視線を落とし仕事に熱心であった主だが、やがて眉間に皺を刻み込んで長い呼気を落とすと、控えているエルディバルトを呼ばわった。

「エル――エルディバルト」
「はい」
「ファディル男爵を知ってますか？」
「名前だけであれば」

生憎と貴族年鑑を全て記憶している性質（タチ）ではないし、男爵程度にかかずらっている程暇ではない。

それでなくともエルディバルトは普通よりもすることが多い。

「では調べてください。特に女性関係とか金銭面とか、どういったサロンに頻繁に出入りしているのかとか、調べられることであれば何もかも」

「あら」

軽く頭を垂れて主の言葉を拝聴していたところで、間の抜けたような声が入り込む。

エルディバルトは途端に顔をしかめた。

「そういったことはー、ルティのほうが得意ですわよぉ？」

「ではルティアに――」

「これは私が公から頼まれたのですから、私が！」

「でも、ルティのほうが得意ですのにぃ」

にまにまと口元を緩めて言う婚約者を睨みつけ、エルディバルトは主の前でしっかりと胸元に手を当てて膝を折った。

「確かにこの私が拝命致しました。失礼します」

まるで早く行かねば仕事がとられるとでも言うようにさっさと退散した騎士を見送り、ルティアは肩をすくめた。

「騎士の仕事ではありませんわー」

「そもそもルティアにはあの子を任せていたと思いますが？」

ルティアは冷たい微笑を湛えたままの元婚約者に小首をかしげて微笑んだ。

「リドリーさんのところにはマリィを行かせてますわよぉ」

「何故あなたは行かないのですか」

「あら、公ってばおばかさん。神殿官である貴方様が嫌われましたのに、神殿官長の義娘である私が出向いたら警戒されてしまいますわよ？」

それに私ってばとっても評判悪いのですものぉ。
などと軽く続ける。

ついで、ルティアは生温かい眼差しで元婚約者を見た。
「そもそも公――あなたにはできないことは無いというのに。何の為の魔法使いですの？」
「私は万能では無いし、私の力は数多の犠牲の上のものなのだから無駄に使ってよいものではないんだよ」
子供に諭すように言ってみたが、ルティアはにっこりと微笑んだ。
「そしてこの国は貴方という犠牲の上に成り立つ矮小な国ですわ」
「そんな風に言うものではないよ」
「犠牲ばかりではつまりませんものね。貴方は貴方に許された自由をどうぞ堪能なさいませ」
肩をすくめたルティアは更に微笑を深めた。

「ということで、今すぐ既成事実でも作っておしまいなさい」
「……」
「縛るとか押さえつけるとか、色々やりようはあります。媚薬とか必要なら用意しますよ。まさか不能だとかおっしゃいませんわよね？　スッポンの生き血とか蛇の陰Xとか効くらしいですわよ。なんでしたら私がリドリーさんに薬をもってさしあげますけど」

「――やっぱり、きみはあまりぼくのリトル・リィに近づかないでくれる？」
伝染(うつ)ったらヤダ――切実に。

番外・尊大な騎士と意地っ張りな姫君（前）（前書き）

ｗｅｂ拍手で一度掲載したものです。

番外・尊大な騎士と意地っ張りな姫君（前）

一年に一度の豊穣を祝う収穫の祭りは年頃の娘達にとっては一番大事な行事の一つに違いない。

アマリージェだとて、祭りが近づけばそわそわと心が浮き立つような喜びを味わうこともあった。ただし、それはいつの間に苦痛にとって変わっていた。

おそらく自分の年齢が上がったからだと思うとアマリージェはほんの少しだけ鼻に皺を刻み込んだ。もちろん、表面上の彼女はそんなことはおくびにも出さない完璧な淑女――すくなくともそう自認している。

その淑女も二十一という年齢を迎えれば年若い娘達を生あったかい視線で眺めるだけの分別を持つようになってしまった。

――子供はいいわよね。

どこか覚めた気持ちで眺めてしまうのはもともとの彼女の老成ゆえか。彼女の友人に言わせれば、マリーは大人びているからということになる。その彼女も二十一、つまり大人びているのではなくてすでに立派な大人であった。

ただし、貴族の娘としては異例なことに彼女は未だに夫をもっていなければ、婚約者ももっていない。幾度もあった縁談話は彼女のある好みによって一蹴されてしまった。

――激しく面食いだった。

彼女にとって基準は兄であり、また自分の暮らす城館の裏手に暮らす神官長だった。

もちろんそれ以上を望むほど愚かではないが、だがしかし妥協した

としても妥協に妥協を重ねる気には到底なれなかった。自分の年齢があがったところで自分を安売りなど断じてする気はない。

彼女は麗しい兄の妹だった。

つまり、自分の美貌もきっちりと自覚する女アマリージェ・スオン――時折友人がマリーはイイ性格だよね、などとぼそりという言葉をほめ言葉として処理している。性格がいいとは多少ニュアンスがことなっているようだが、気にするような問題ではないはずだ。

収穫の祭りは豊穣の女神が町をめぐり盛大なパレードが繰り広げられる。

基本的に祭りの主役は町の人々で、アマリージェや兄達はあまりかかわってはいない。

数年前に一度アマリージェが女神の役をやったこともあったが、あれは適齢の娘がいなかったからであって、もしアマリージェに変わる娘が町にいればアマリージェは辞退していたことだろう。

アマリージェは城館の二階アプローチから庭の様子を眇(すが)めて眺めながら心の奥がちりちりと痛むのを感じた。

収穫の祭りの日には城館の庭が開放される。綺麗に整頓された庭を見学するのはだいたいがお年寄りや食事をとる家族連れと相場が決まっていたというのに、ここ数年は何故か若い娘達が入り込んでキャーキャー騒いでいる。

そしてその中心にいるのが、この城館に勤めているアジス――アジス・トルセアというのももう見慣れてしまった光景だ。

彼はもともと隣町の住人であったが、十一のころからこの町に長く滞在するようになり、そして十二の年齢でこの城館にあがった。

従騎士見習いとして、従騎士として、そして騎士になる為に幾度か聖都にあがり、今は……十八となり騎士の資格を手に、収穫の祭りの為にこの城館に戻っている。

もともとが平民であったものが許されて騎士となったものだから、町の娘達の憧れは相当なもので――その姿にはたいてい一人二人の娘がセットでついてくるという有様だ。

それを見るとアマリージェは胸がむかむかとしてくるのだ。彼が幼い頃を知っているだけに余計――愚かだわ、と吐き捨ててやりたくなる。

本当に愚かしい！

つまり、なんですの？　あの子供は女の子にモテタイが為に騎士になったのかしらね！

そう思うと本当に腹立たしいのだが、実際そうでないことは――アマリージェはいやという程知っていた。彼が騎士になる為に尽力したのはアマリージェ自身であるのだから。

「マリー？」

ふいに兄から呼ばれてハッと息をつく。

「祭りを見てきたらどうだい？」

一人でぼんやりとアプローチでたたずむ妹の姿に兄が気遣うように言う。むしろほうっておいてほしいのだが、どうして兄はこういう時余計なことをするのだろう。まったく要領が悪いというか、余計な世話としかいいようがない。

兄にまで心の中で悪態をついてしまうアマリージェに、兄は困惑したようにふいに言った。

「アジス君と祭りを見てきたらどうだい？」

「どうしてわたくしがあの口の悪い愚か者と一緒に祭りになどいかなければいけませんの？」

「いや……うん、いやなら別にいいんだけれど」
「兄さまが命令なさるならば仕方ありませんけれど」
「命令？　いや、そこまでは言ってないけれど――」

兄の命令であれば仕方ない。
アマリージェは意気揚々とドレスの裾を裁いた。
そう、これは自分の意思ではなくて、兄に言われたから仕方なく、仕方なくあのいけすかない男を護衛として連れて行くのだ。
アマリージェは軽やかに階段をおり、中庭に足を踏み入れた。
かしましい娘達の嬌声などものともせずにゆっくりと優雅な調子で歩む。こちらに背を向けて腕を組むようにして尊大に立つ男の背後から近づいていくと、すっと――まるでアマリージェが近づいていたのを感じるようにアジスは一歩身を引くようにして振り返り、口の端を持ち上げるようにして笑うと胸元に手を当てて一礼した。

「ごきげんうるわしゅう、アマリージェ様」
「そんな気取った挨拶など必要ありません。アジス、町におりますから共をして」
よどみなくいい、にっこりとアマリージェは不満そうな顔を見せる娘達に微笑んだ。

「ごめんなさい。兄の命令ですの――」

自分は本意ではないのだというように示す姫君に誰も否を唱えることなどできようはずもい。
「アジス、今夜のダンスは出る？」
それでも別れを惜しむように言う娘の言葉に、アジスは軽く手を振って、
「さぁ、どうだろうな」
と曖昧に返事をしてアマリージェの後に続いた。

「珍しい」
ゆっくりと歩くアマリージェの後ろ、皮肉な口調でアジスが言った。
「何がです」
「普段であれば護衛なんて要らないって息巻くお姫さんがね」
「――兄の命令ですもの。仕方ありませんでしょう」
「そうですか、仕方ないですか」
はっと吐き出すように笑われ、アマリージェはぴたりと足を止めて振り向きざまに相手をにらみつけた。

「別に、好きであなたを連れていく訳じゃありませんわよ」
「わーってるさ、お姫様。我が君のご命令だ」
――我が君、という言葉にどきりとした。
それでは彼は聖都で騎士の位を授かり、こちらに戻ってすぐに兄にその剣を捧げたのだ。

手の早い！
まだ戻って数日だというのに。
もともとそうなることは判っていたが、兄もアジスもちらともそんなことは言っていなかった。なんだかむかむかとしながら、「そうですか」と乱暴にかえした。

「アマリージェ様、姫さま」
「なんです」
「あんたらしくないぞ、どすどす歩くなよ」
かぁっと体温が上がる。
なんだってこの男はいつもこう気に障る物言いしかできないのだろうか。これで騎士？　騎士？　ありえないわ。騎士といえば淑女に礼を尽くすものではないの？　だというのに、この男ときたら子供の頃からこの調子だ。

「らしくないって、どういうのがわたくしらしいのです！」
「外面だけはいいくせに」
「――っ」
「ほら、自覚してるじゃないか」
ふっと笑う相手をにらみつける。

「生意気ですわ！　わたくしはあなたよりも三つも年上ですのよっ」
「知ってる」
「もう少し敬ったらどうなのです」
兄の――領主の妹だという言葉は口にしない。それはアマリージェの持つモノではないのだ。自分の矜持が許さない。
だが、アマリージェは知っていた。自分が胸をはれるものは自分自身のみ。しかしこの面前の男はそんなことかけらも気に掛けたりしないだろう。
尊大にでれるものが年齢だけとは嘆かわしい。
「判った、敬う」
さらりと言われてアマリージェは絶句した。

番外・尊大な騎士と意地っ張りな姫君（後）

肩をすくめるようにしてアジスはぐいっとアマリージェの腕を引き、庭を横切り温室へと向かう。強く引かれて意味がわからず、アマリージェは動揺した。

心臓がばくばくと鼓動を早める。もともと早足で歩くこともない娘だ。ほんの少しの運動でも息切れをしてしまう。

さらに手首を強く掴まれたそこから、熱を――相手の熱を感じてしまう。

苦しいのか悔しいのか判らない気持ちにアマリージェは焦った。

温室までは開放されていない為、そこに人はいなかった。

かちゃりと扉を開き、中へと入る。人工的に通された小川が北の霊峰から届く水をさやさやと流していた。

中央のほんの少し広くなった場所、アマリージェの手首を離したアジスはくるりと身をひるがえしてするりと腰に下げた幅広の剣を抜いた。

――特別に許された、竜の紋章入りの剣。

突然のことにアマリージェはその翡翠の瞳を見開いた。

「な、なん……」

抜いた剣を逆手に持ち、片膝を地面につけてひざまずく。

その所作にアマリージェは息を飲み込んだ。

「我れアジス……いや、アルジェス・トルセアの信義をもちてここに聖約する。

この命、この剣、この魂。そのすべてを――」

「辞めて！」

逆手に掲げられた剣はアジスの胸へと向けられている。そして彼は乞い願うはずだ。自らの主となることをこの面前の自分に！

そして、それが果たせないのであればこの剣を自らの胸に沈めよと突きつける。
アマリージェは悲鳴のように声をあげ、とっさにその剣の柄を掴んでいた。
「辞めなさい！」
「――何故だ」
アジスは憤慨するように見上げる。その瞳には憤りすらあった。

「俺はこの剣をアマリージェ様――俺の姫。あんたに捧げるつもりだった」
「そんなことは望んでいません！
あなたは……兄を主にしたのではないの？」
先ほど我が君と言ったのは戯れか？
信じられないというようにゆっくりと首をふるアマリージェに、アジスはむっとした表情のまま言葉を続けた。
「あんたの反応を少しみただけじゃないか」
まるですねるかのように。

「俺の主になるのは不満か？」
「……」

アマリージェは随分と尊大で不機嫌な年下の男を見つめながらゆるゆると首を振り続けた。
背筋に冷水を浴びせられたように体温が冷え、またあがる。
泣きたいように体の内側を這い回るのは喜びかもしれない。だが、それはイヤだった。
剣を捧げられたいと願った気持ちもある。
けれどアマリージェはゆっくりと呼吸を繰り返し、自らの矜持を総動員して告げた。

「騎士など不要よ」
きっぱりと言い切る。
苛立ちをさらに募らせてアジスは立ち上がった。
「アマリージェ！」

「騎士の崇拝などほしくはありません。冗談ではありませんわ」
言葉が震えてしまいそうだった。
自分の心が激しくゆれている。相手の瞳がまっすぐに――まるで憎しみすら孕んで見つめ返してくる。
そう、この男の強いまなざしは子供の頃から変わることがない。
強い意志をひたむきに示してくる。乱暴で粗暴、尊大で、そして嘘のない男。

「そうか、そうだよな！
俺がどんなにがんばったって所詮……」
「命も魂も要らない！　わたくしがいつ主になりたいといいました！」
喉が、渇く。
魂が震える。
駄目だ……息の根が、止まってしまいそう。
「わたくしが欲しいのはわたくしの主よっ！」
アマリージェはその言葉を口にした時、ああっと血の気が一息に引くのを感じた。
自らの手をもう片方の手で強く包み込み、もう取り返しがつかないのだと感じていた。

言ってしまった。
言ってしまった。
言ってしまった！

言葉はもう二度と戻らず気持ちも堰を切った。
あとは濁流のように流れるだけだ。

「触れ合うことも許されない騎士なんて、崇拝されるだけなんてイヤよ。わたくしはっ」

しゅっと音をさせてアジスは抜き身の剣を鞘に収め、ただ冷たい程の視線を向けてくる。迷いのないまっすぐな眼差し。
アマリージェの内面を見透かす鋭い眼差し。ずっと、ずっとそうやって彼はアマリージェを見つめ続けた。

「わたくしは……」
わたくしが欲しいのは、共にいるもの。
自らを引き上げ、導き、共にいる――
「泣くなよ」
「泣いてなんておりません！」
「泣くな」
すっと大きな無骨な手が差し出された。
「その後は俺が言うから」

おびえるようにそっと、そっと……アマリージェはその手を伸ばした。
触れたかった。掴んでほしかった。
身分も年齢も、全て乗り越えて欲しいなんて我儘だ。それでも、それでも、
望んだのは――
遠慮がちにそっと触れ合う指先、火傷を恐れるかのように脅えるように触れたとたん、更にその手を伸ばしてアジスはアマリージェの手首を掴み、その腕の中に抱きとった。

「俺の女神、俺の姫、俺の……っ、なんでもいい、俺のものだっ」

叫ぶような宣言と共にむさぼるように唇が奪われた。

驚きと共に広がる喜びにアマリージェはあえぎ、相手の広い胸に縋った。

出会った当初は自分よりも小さかった少年が、今は肩幅も身長もそのすべてを追い越してアマリージェの華奢な体を力強く抱きしめてくる。

いとおしいという思いがあふれて涙と共に頬を伝った。

指と指とを絡めて夢中で唇を奪い合い、やがてゆっくりと二人が離れるとアマリージェは強い意志と矜持とをひらめかせる眼差しで夢見るように自分を見つめる男を見返した。

「随分とキスがお上手ね？　どこで何を習っていらしたの？」

「……っ」

チッと一旦顔を背けて舌打ちをする男を冷ややかに見上げ、アマリージェは宣言した。

「わたくしは寛大だから許してさしあげるわ」

「まったく、女ってやつはっ」

なじみの言葉がぶつぶつとアジスの口から吐き出され、アマリージェはからかうようにその顔を覗き込んだ。

「女ってやつは、なんですの？」

忌々しいというように眉間にくっきりと皺を刻みつけ、しかしアジスはふいにニヤリと口角を引き上げてみせた。

彼特有の、魅力ある微笑。

「あんたもキスに応えるのが上手じゃないか、お姫様」

そんなのは嘘だ。

ただ、欲しいという欲求で――応えただけだ。触れた舌先に、熱いうねりに自ら応えただけ。
だがそれを口にするなどアマリージェにはできかねて精一杯の虚勢がのぞく。
「でもあなたは寛大だから許してくださるのでしょう？」
くすりと微笑む女神をもう一度抱きしめ、アジスは呪うように言った。

「許すわけないだろ」

ｆｉｎ

番外・尊大な騎士と意地っ張りな姫君（後）（後書き）

ｗｅｂ拍手上で連載したアジス＆ａｍｐ；アマリージェのオハナシでした。
ちょっとオトナになった二人。次回更新から通常に戻ります――本編お待ちの方にはお目汚し失礼致しました。

動揺と抱擁

パン屋の休暇は十日間！
あたしは指を折ってその日数を確認し、がしりと拳を固めた。母に流されていてはいけない。あたしは立派な社会人。職場に迷惑がかかるようなことがあってはなりません。
何といってもマイラさんは心優しくあたしを送り出してくれたのだ。絶対に戻る。

アマリージェは「一緒に戻りますか？」と言ってくれたが、まずは母を説得しようとしたあたしは彼女等を見送った。そんなこんなで三日目――日付はちゃくちゃくと過ぎていくし、親の仇のように母の家には花が届く。
「物凄い量でございますね」
「花の香りで気持ち悪いくらいにね」
あたしはうんざりと言った。もともと毎日のように花をくれた魔術師だが、ここにきて毎日花を届けさせている。馬車で一台分。おそろしい量の花を毎日。

「もって帰ってくれます？」
さすがに今日は受け取れない。花で死ぬ。
「しかし、必ずお届けするようにといいつかっておりますので」
丁寧に頭をさげるのは、この三日花を届けてくれていた男性。見た感じは従僕という様相でお仕着せを着ている。あの魔術師の関係者なのか、それとも花屋なのか？

「わたくし共が叱られてしまいます」
「……」
悲しそうに言われ、あたしはちらりと冷たい眼差しの母を見た。呆

れているのだろう、至極。
「あなた達が叱られようと関係が無いわ。迷惑だと言っているのです。お帰りなさい」
母、強し。

花を馬車ごと追い返した母は、眉をひそめてあたしを見た。
「……あの男はいったいどういう男なの？　あなたは判らないかもしれないけれど、あれだけの量の花を集めるのは大変なのよ。聖都の花屋の花を買い占めたようよ」
「さ、さぁ？」
知ってることは幾つかあるが、果たしてそれは言っていいのかどうかが判らない。

竜公爵――これを知っているのは公爵位を持つもの、その配下程度の上層しか知らないことだとアマリージェが教えてくれた。ではこれは確実に駄目だ。
神官長、これだって普段は神殿の奥深くで祭祀に励んでいて国の安寧を祈っているといわれていて、それが実はそのあたりをうろうろとしながら変態発言を繰り返しているなんて到底いえません。
頭の中でイロイロとうんざりとしながら、ふと気付いた。
――つまり、あの男という存在は、本来は見えないとされているのだ。
本来であればヒトの目に触れないもの。
まるで見えているのにいないような……なんだかもやもやとする違和感のようなものを覚えた。

あの男は、ちゃんと居るのに。

あの男は、自分のことを「楽隠居」だという。それはいったいどんな気持ちで言っているのだろう。きっと気楽な気持ちでは無いので

はないだろうか。そんなことを考えはじめると、あたしはもやもやとした気持ちがなんだかそわそわにかわってきて落ち着かないまま唇を噛んだ。

離れているのがどうしても不安に思える。

まるきり小さな子供を置き去りにしてしまったかのような、いやな感じ。

「駄目よ」

そっと手を叩かれて、あたしはハっと息を飲んだ。

母が心配そうにあたしを見つめている。

「唇を噛んでは駄目――なあに？　何か心配事でもあるの？　母様に言って御覧なさい。大丈夫。リィのことは母様がちゃんと守ってあげる」

「母さん……」

あたしはぎゅっと眉をひそめた。穏やかに微笑む母の顔を見るといろいろと決心が鈍りそうになる。けれどここは心を鬼にし……――

「奥様」

その時に現れた執事さんは、眉をきつく寄せて厳しい眼差しをしてちらとあたしを見ると、声を潜めて母の耳元に何事かを囁いた。

「……追い返しなさい」

「ですが――」

ぼそぼと言う言葉はあたしの耳までも届かない。母の表情までも厳しくなる。雰囲気からそれが来客を告げるものであることは知れるし、あたしはすぐにぴんときてしまった。

――アレだ。

アレに違いない。

慇懃無礼で傲岸不遜で、そして、二日程顔を見ていないだけであたしに不安を与えてしまう不思議なヒト。

あたしは途端に落ち着きのない気持ちになった。

母はちらりとあたしを気にし、ついで言った。
「判ったわ――リィ、悪いのだけれど、書斎のほうにいっていらっしゃい。招かざる客のようだから。決して出てきては駄目よ？」
きつく確認され、あたしはなんだかふわふわするようなぼんやりとした気持ちでうなずいた。

二人で対峙させて大丈夫だろうか？
アレと母との口論なんて誰も止められないだろうし、うわ、もうどうしよう？
あたしは執事に追い立てられるように書斎へと押し込められてしまったが、やがてしばらくたてば決意してこっそりと母がいる一階の居間へと庭側から回り込むことにした。
窓から覗き込もう！
こっそり覗き込んで、何か危険――なんてあるわけがないけれど、何かあったら二人の間にわって入ろう。

なんてイロイロと言い訳を自分の中に重ねながら、あたしはぐっと拳を握りこんだ。
判ってる。何だかんだいって、一目……会いたい。たかが一日二日見ないだけで気になるなんて、もう本当にどうかしているとしか思えないけど！
あたしは一階居間のテラス側からこそこそと入り込み、カーテンに隠れるようにしてこっそりと部屋の中を覗き込んだ。

窓側から見れば、母のぴんっと伸びた背中が見えた。
置かれたソファに深く腰を預けずに臨戦態勢を伝えるかのようにぴんと伸びた背筋。まっすぐに正面を向く顔。そしてその顔が向く先に座っていた相手に、あたしは危うく声をあげそうになり、口元にがしりと手をあててネズミ捕りにかかってしまったネズミのようにがばりと体を反転させて壁に背中を貼り付けた。

マーヴェル！

一瞬、ほんの一瞬だけ誰だか判らなかった。そこに座っているのはあの男だと思っていたから。でもそこにいたのは、もう……一年、一年以上前にあたしが捨て去った過去。

あたしはともすれば叫びだしてしまいそうな気持ちになって、体全体が震えてくることを必死に押さえ込んだ。

硬直してしまったように体が固く、何かで殴りつけられたように頭の中がくわんくわんと音叉のようなものが巡る。

息のしかたを忘れたように首をふり、ついであたしはその場から逃げ出していた。音をたてないようにとか、何も考えていなかった気がする。ただその場を逃げ出し、途中で何かに躓いて転び、その場で――吐いた。

なんで、何がどうして？

どうして母のところにマーヴェルが来るの？

あああああっ、やっぱり駄目だ。

すごい、あたしってば偽善者だ。ティナに、マーヴェルにあったらきっと祝福してあげようなんて、そんなことができる訳がない。何よこれ、なんなのこれ？　あたしは眦からあふれるものに嗚咽をもらし、袖口でぐいっと口元をぬぐって「は、ははは」と乾いた笑いをこぼした。

もうあたしの人生に関わってこないでよ！

「帰ろう……」

あたしはぎゅっと地面の芝生を掴んで呟いた。

どうしてマーヴェルがこんな場にいるのか、母に何の用があるかなんて関係がない。あたしは帰る。

あたしの新しい人生に。

＊＊＊

それからどんな風にその日一日をやり過ごしたのかあたしははっきりと覚えていなかった。

母が何事か心配そうな眼差しで見ていたけれど、その時のあたしときたら母に何も言わずにでも逃げ出してやろうと考えていたから。

――逃げてばっかりの人生だ。

そう思うと激しく嫌悪を抱いたけれど、どうやって戦ったらいいのか判らなかった。

用意された馴染みのない寝台の上で枕を抱きしめて、ぎゅっと唇を噛んで。

「っっっ」

涙なんて流す意味がまったく判らない。

それでも滲んで来るものにどうしようもなく腹がたって、あたしは口の中に血の味が広がるのを無視してぎゅっと目を閉じた。

「駄目だよ」

――だからその時、穏やかな声がそう言ってあたしの唇を親指の腹でそっとなぞりあげたとき、あたしは何の疑問を抱くことなくそれを受け入れた。

「どうして……」

「ん？――」

「どうしていなかったの！」

すごい理不尽な八つ当たりだ。
あたしはお腹の中がぐちゃぐちゃで支離滅裂で、突然枕元にヒトが現れた現実よりも、きつい口調と眼差しとを叩きつけていた。
「魔術師！」
「何かあった？」
寝台の縁に腰をおろし、優しい眼差しで覗き込んでくる。愛しむように優しい指先であたしの唇をなで、頬に触れ、温かな何かを惜しむことなく流し込んでくる。
何か、何か？
何も……――なかった。
何があった訳じゃない。何もなかった。
あたしは上半身を起こして、がばりとその胸にすがって泣いた。
「馬鹿っ」
「うん、ごめんね？」
「馬鹿っ、このばかっ」
温かな胸元にすがって、その体温を分けてもらいながらあたしは幾度も馬鹿と繰り返し、その指先があたしの頭をなで、ぽんぽんっと一定のリズムで優しく叩くのを感じながら、あたしはやっと呟いた。
「こんな言葉、何受け入れてるのっ」
「ぼくはどんなきみも好きだもの。馬鹿でも間抜けでも、きみの唇からぼくに向けられる言葉はどんなものでも愛しい」
当然のことだというふうに優しく穏やかに笑う男を、あたしはそっと見上げた。
あれだけ激しく吹き荒れていた奇妙な嵐が、穏やかに沈静化していくのが判る。

あたしは泣き笑いの顔で、言った。
「帰りたい。あたし、帰る――連れて行って」
あなたにはそれができるでしょう？
あたしが求める言葉に、けれど魔術師はその唇をそっとあたしの瞼に押し当てて囁いた。
「そうしてあげることは簡単だよ。でも、いつかきみは立ち止まって考える。お母さんが泣いていないかとか、おいてきてしまった何かについて」
「――」
「たとえばきみは今、このままぼくに抱かれてもいいと思ってる」
突然指摘された言葉に、あたしは身を固くした。
「でも、そうしたらきっときみは後悔する」
「――」
「眠れないなら朝まで抱きしめてあげる。あまりうまくないけれど、子守唄だって歌ってあげる。穏やかな眠りを約束するよ」
――穏やかな眠り？
そんなものは欲しくない。今欲しいのは全てを忘れさせてくれるものなのに！
そう言ってやりたかったけれど、あたしは自分の顔をその胸に押し当ててぎゅっと抱きしめた。
「あたし……」
「なんだい？」
「――もう逃げなくて、いい？」
おそらく相手には通じないだろう言葉。けれどあたしを抱きしめ、とんとんっと穏やかな振動を与え続ける男は笑った。
「逃がしてなんてあげないよ？」

茶目っ気交じりの言葉に、あたしはふっと笑って、そういうのはちょっと違う。と言葉にしながら相手に聞こえないように小さな声で囁いた。

――会いたかった。

会いたかったの。

嘘つきと裏切り者

「ぼくは時々自分の忍耐力を褒めてあげたくなる」
人間というものは不思議なもので、心が動揺している時はものすごぉく弱くなってしまうものだとおもうのです。
そして、そんな時は誤った行動をとってしまう。
当然、それにはコレも含まれた。
「なんであんたがあたしの寝台で寝てるの！」
「それは勿論、きみが眠れるようにずぅっと添い寝していたから」
ええ、知っています。
昨夜の醜態をあたしは忘れたくてもきっちりと記憶していて、記憶の最後は、この一晩たったというのに髭すら生えない謎の生命体があたしの髪を指先ですきあげながら「大丈夫だよ。何も怖いことはないからね」と囁き続ける場面。
思い返せば恥ずかしさで憤死してしまいそうなそんな場面だ。
しかも、それはあたしが望んだもの。
優しい言葉と優しい手と、ぬくもり、心音。
全てあたしが望んで、そしてこの男が惜しみなく与えたもの。
けれど冷静さを取り戻したあたしはそれを認めることがどうしてもできなかった。
「とりあえずもういいから！」
帰って下さいっ。
ぎゅううっと胸をおせば、魔術師はにまにまと笑いながら「うん、もう大丈夫そうだから帰る」とこちらが呆気にとられてしまいそうな程素直にうなずいた。

「リトル・リィ」
「な、なによ？」
「キスしていい？」

にっこりと微笑まれたが、あたしは力いっぱい自分の口を押さえて拒絶した。
お帰りください！
「そこまでいやがらなくても……」
ふっと寂しそうに瞳を伏せて力なく言われた言葉に、あたしは慌てた。
「だって！　口の中……へんだものっ」
あたしは咄嗟に言い訳のように言葉にし、ついでかぁぁっと体温が上がることにくらくらした。
どう説明したら理解してもらえるか判りませんが、一晩寝た後の口腔は、なんというかいやな感じなのですよ。そんなんでキスなんてとんでもない。絶対にイヤ。
びしりと口に手を当てて言うあたしを見つめ、ついで面前の男は噴出した。

「キスはイヤじゃないんだ」
「っっっ」
「大丈夫、舌いれなければいいでしょ？」
生々しく言うなっ。
あたしはもう一度ぐっと相手の胸を押しのけ、上目遣いににらみつけた。
「お・か・え・り・く・だ・さ・い！」
「判った。また会おうね」
くすくすと楽しそうに笑ったかと思うと、ぐいっとあたしを押さえ込んですばやく唇を押し当てた。
唇の表面だけを一度ついばみ、それで離れるかと安堵に力を抜いた途端に押さえ込まれ、あたしは唇の隙間を割って入ろうとする感触に目を見開いてじたばたと暴れた。

それはイヤだって言ってるでしょうっ。

涙目になって暴れるあたしを容易く捉えたまま、唇を押し当ててくぐもったような微笑を落とした悪魔は「あああっ、もう可愛いなぁ。どんな味だってリトル・リィなら確かめたくて仕方ない。ねぇ、口をあけて？　そうしないとこのままもっと別の場所まで舐め尽してあげたくなっちゃうよ。それともぼくの忍耐力を試しているの？」意地悪しないで。と甘く囁く言葉に背筋があわ立つ感覚を覚えながら、あたしは涙ぐんだ。

意地悪しているのはおまえだ！

「力を抜いて？」

意固地に入り込もうとしていた舌先が、今度はゆっくりと優しく唇をなぞり、下唇のふくらみをちゅっと軽く吸い上げる。あたしは無駄な抵抗を諦めて、それでも軽い抗いに身を震わせながらゆっくりと力を抜いた。

イヤだという嫌悪感はぬぐえないのに、そうすることで開放されると思えば自分の心が砕かれていってしまう。

何より、それは腹部をざわざわとなぞる奇妙な誘惑――

相手の舌先が歯列に触れた途端、

「何をしているの！」

苛烈な声にびくりと体が跳ね上がり、あたしは咄嗟にぎゅっとあたしを抱き寄せている男のシャツを掴んでしまった。

「おはようございます」

動揺の欠片も見せず、あたしと同じく寝台の上の男は爽やかに声をあげた。

あたしは部屋の扉へとおそるおそる視線を向けながら、これは違う

の！　と声をあげようとするのだが、喉の奥が急激にからからに乾いて言葉が喉の奥でひゅーひゅーという謎の音に変わってしまった。

それまでの空気がまるきり変わり、その場の緊迫感はシンと耳に痛い程のものになっていた。

母と、その背後には執事すら従えて。

――これは。これは違うのっ。

何もないからっ。

おかしなことは何一つって、あああ、なんかいろいろおかしい気がするのは気のせいだと誰か言ってください。

深夜に入り込んだ男は怪しくないと……怪しいよ。

娘の寝台に男がいることは怪しい通り越しておりますよ。

言い訳のしようのない現状にあたしはいっそ意識を飛ばせるものなら飛ばしてしまいたくなったが、そんなことをすればどんなことになるのか恐ろしい。

あたしを起こしに来たであろう母は、ぶるぶると怒りに身を震わせ、射殺す眼差しをあたしを腕に抱いて寝台に座る男をにらんでいたが、相手はどこ吹く風の様相だ。

この厚顔無恥ぶりはいっそ天晴れだが、頼むから言い訳をして欲しい。

動揺しすぎて何が何だか判らないあたしにかわって、ここはなんとか穏便に。

そんなあたしの心の叫びが聞こえたのか、ヤツは穏やかな調子で言った。

「安心して下さい」

安心という言葉にあたしはやっと息をついた。

「寝台で二人で朝を迎えたのはまだ二度目ですから」

……この男を頼った自分が馬鹿でした！

＊＊＊

「どういうことなの、リドリーっ」

母は不法侵入の変質者と会話をするのを諦めたようだった。

そうですね、それはきっと正解です。正解、というかもう無視して下さい。自分の好きなことしか言いませんから。しかも誤解を招くようにしか言わないので、本当に要らないです。

母が何かを言うより先に、あたしはさっさと「黙っててくれる？」ときつく睨みつけた。

さすがに場を居間へとうつせば多少はあたしも冷静になれる。

来客を受け入れる為の部屋へと移動し、母はいつもと同じ席に座り、そしてあたしと魔術師は並んでソファに腰を下ろしていた。

冷静になるとあたしはふとこれはもしかしたら使えるかもしれないと強(したた)かに考えを改めた。

黙っていなさいと威圧を向けられた男は、まるで我が物顔で執事にお茶の種類の注文などしているが、それは無視。

あたしはお腹にぐっと力を込めて、引きつりそうな口元を微笑の形に変えた。

「母さん、母さんが認めたくないのはちゃんと理解しているけど、あたしと彼は――」

あ、あ、あああああ、

「愛し合ってるの」

「リィっ」

あたしは自分の左手についたままの呪いの指輪をこれみよがしに

右手の親指と人差し指でなぞりながら、視線を落とした。

ああああ、嘘八百。

「結婚の約束もしているし、一緒にいないと駄目なの」

隣に座る馬鹿様が物凄く平然とお茶を飲んでるのがめちゃくちゃ気になります。黙っていてという言葉の通り黙っているのか、それともあたしの言葉を本気にとっているのか。

これは違うのです。

大嘘です。当然のごとく偽装工作ですよ。

もうこうなったら一日でも早く帰る為にもどんなことでも利用しようとあたしは悪女になることに決めました。母に嘘を言うのは気が引けますが、こうなったらさっさと帰宅したい。

あたしの小さなアパートで安眠させて欲しいのです。

そう思うと、あたしは饒舌にありもしない「熱愛」を口にした。

「一日も会えないのは辛かった。勿論、母さんの家に勝手にこのヒトを入れたことは良くないことだって判ってる。でも、ねぇ、母さん――理解して欲しいの」

「あなたは騙されているのよ」

「違うわっ。あたしはっ」

「違います」

すでに紅茶はおろかスコーンにまでジャムを塗って朝食を楽しんでいた男は、突然口を開いた。

母の視線が冷たく向けられても気にせず、

「違いますよ。ぼくが彼女を騙しているんじゃなくて、リドリーが

お母さんを騙そうとしている」
「なっ」
「――あのね、リトル・リィ……さすがにぼくも怒るよ？」
冷ややかな微笑を落とし、親指についたジャムをぺろりと舐めた。
物凄く艶っぽく、そして物凄く冷ややかに。
「以前もぼくが喜ぶようなことを並べ立てて、本当はアジス君の為だった。君ときたら時々酷い。
こんなにぼくを喜ばすような言葉を並べ立てているけど、ちっとも心から言ってない」
うっ。
あたしは息を詰めた。
めちゃくちゃ事実です。間違いなくその通り。
「ああ、ぼくってばそれでもリトル・リィが好きなんだ。かわいそう」
ぼそぼそと言いながら、きちんと姿勢を正して母へと視線を転じた。
「リドリーは早く自宅に戻りたいが為にぼくを利用しようとしているだけです」
このっ、裏切り者ぉぉっ。
いや、確かに悪いのはあたしですが！
「お母さんに嘘なんて良くないよ。自宅に戻りたい気持ちも判るけれど、君自身の気持ちをきちんと伝えないと、説得するのは難しいかもしれなくても、だからといって嘘で乗り切ろうなんて良くない」
「どういうことなの、リィ」
「ああ、でも彼女だけが悪い訳では当然ありません。ぼくの非礼をまずは謝らせて下さい。
昨夜はどうしても彼女に会いたくて、とても気になっていたんです。

本来であればお母さんに許しを得ていないぼくなどが彼女と共にいてはいないことは理解していますが、三日も共にいないことがどうしても耐えがたかったのです」

「――」

「それと、お母さんは心配なさっていると思いますが。まずは彼女の身の潔白は信じていただきたいのです。ぼくは確かに彼女を心から愛しています。朝にも言いましたが彼女と二度程寝台で朝を迎えはしましたが、不埒なことをしてはいません。あの、キスは――しましたけれど。そこで留まっていることが男にとってどれほど辛いことだか、ご理解いただけますでしょうか」

それは結果であって全然ちっともあなたの本意ではないことがばればれです。

この大嘘つきっ！

怒りばかりをその瞳に湛えていた母だが、その光が緩んでいくのを感じる。

戸惑いと困惑とが混じる眼差し。

「ま、まぁ……あなたがそんなに悪い方だと思っている訳ではありません」

ちょっ、騙されてますよっ。

それは悪です。

悪だってば！

嘘は駄目だなんていいながらしれっと嘘をついてますよ！

愚か者と傍若無人

こういう時を何と表現するのだろう。
孤立無援とか、きっとその手の言葉が当てはまるように思われます。
確か当初怒っていたのは母だけで、ついであたしが応戦し、しかし味方だと思っていた相手が後ろから砲撃を向けてきて、それでいつの間にか、

「そもそも、リィは考えが足りないのよ」
「ああそういうところはありますよね」
「人の娘を悪く言わないでちょうだい」
「そういうつもりはありませんよ。それにそういうところが可愛いと思います」

――いたたまれません。

仕方ないのであたしは一人、ぬるくなった紅茶をわざと音をさせながら飲み、マフィンを二つに割ってジャムをのせてもそもそと咀嚼した。
目の前で繰り広げられるのは、奇妙な茶番劇意外のなにものでもない。
母は完全に懐柔されている訳ではない様子だが、いかに自分がより娘を愛しているかを語り、娘の可愛さを語る。それに応戦する馬鹿は同じく……

なにこの羞恥プレイ。

本人の前での褒め殺し。かと思えばあたしの欠点をさらりと口にし、落として持ち上げて、相手の揚げ足をとるの繰り返し。あたしの目

前でのこの惨劇に、あたしはいっそ耳に何かを詰め込んでしまいたい気持ちでいた。今まさに食べているマフィンだっていい。この二人の会話を遮断してくれるのであれば。

そんないたたまれない空気の中で、執事だけはもくもくと自らの職務を全うしている。

職業人の鑑のような人だが、このだらだらと流れている阿呆会話に何を思っているのだろう。激しく尋ねてみたい。

こういう母親のことをきっと親馬鹿というのだろう。

だがこういう男はいったい何というのだろうか……ああ、ただの馬鹿か。

「とにかく、あなたのしたことはあまりにも常識外です。勝手にひとの屋敷に入り込むなど、紳士のすることではありません。そんな男性が愛？　それは愛ではなくただの情欲というものよ」

じょ、じょうよく……

マフィンの塊が喉の奥でつかえて、あたしは慌てて自分の胸の間を叩いた。

「情欲ならありますよ。あなたの娘はとても可愛らしい。ぼくはいつだって必死に理性と戦っているんです」

どこがですか！

どのあたりに理性があるのかとりあえず教えて下さい。

本能だけのような気がしますが――それともあたしの勘違いですか？

あたしの自意識過剰ですかって、そんな訳があるか。

「もちろんそうでしょうとも。けれど絶対に私は許しません」

も、もう止めてください。

あたしは涙目になりながら紅茶を最後の一滴まで飲み干し、それに合わせて執事が新たな紅茶をいれてくれた。

熱い紅茶をそのまま飲みそうになるのを必死に堪えて、ふーふーっと何度も息を吹きかける。水分は欲しいけれど、これをそのままぐいっと飲み干すほど愚かではない。

「判りました。これ以上貴女と話してもらちがあきそうにない」
やれやれと魔術師は肩をすくめて手のひらを軽く上にあげると、口の端に笑みを浮かべた。
「ほら、この程度で諦めるくらいの――」
まるで鬼の首をとるように母は冷たい眼差しと口調とを向けたが、相手はその言葉にかぶせるようにさえぎった。
「あとはファディル男爵と話をすすめたいと思います」
さらりと出た言葉に、あたしはお茶を冷ます為に吹きかけていた息が「ぶふっ」とくぐもるのを感じ、その勢いにカップのお茶が吹き上げられてこぼれ、執事が慌ててナプキンを差し出した。

母ですら驚愕した様子で瞳を見開き、
「あなた、兄をご存知なの？」
と強張るような口調で呟いていた。

「ええ、彼とは親しくさせていただいています。まぁ、最近知り合ったばかりですが――とても親しくなれるでしょうね。この先はもっと」
あたしはナプキンで口元をぬぐいながら、瞳をぱちぱちと瞬かせた。
伯父さんを持ち出されると、母は弱くなってしまう。当然だ。実質上の母の庇護者なのだから。
母が暮らすこの屋敷を用意したのも伯父であるファディル（バロン・ファディル）男爵で、母は父からの援助を一切受けようとしていない。
「貴女には是非とも二人の関係を認めて欲しいところでしたが」
「リィは私の娘です。兄は関係が無いわ」

「そうですね？」
意地悪い笑みを浮かべ、ふとその視線をあたしへと戻して微笑んだ。

「リトル・リイも関係が無いと思う？」
その言葉であたしは息を飲み込んだ。じんわりと背中にいやな感じの汗があふれ出る気がする。
物凄く意味ありげな表情でしれっとおかしなことを言い出した男の意図を測りながら。
「関係が無いわよ」
そう応えたあたしの言葉は、わずかにひきつれていたに違いない。
「そうか。それはつまらないな――エル相手にも突っかかってきたから、伯父さん相手ならさぞいい反応が返るかと思ったものだけど」

あたしは頭を抱えたくなった。
エルディバルトさんのことでこの男に突っかかったことは……一度しかない。いや、あるかもしれないけれど、そもそもあたしエルディバルトさんのこと苦手だし。思い当たるのは一つしかない。
エルディバルトさん地下石牢「ごめんなさい」事件。
「このっ、卑怯者ぉ！」
さすがに伯父を地下牢にいれるなどとは思わないが、この男が言いたいのはつまり、それくらいはできるという意味合いのことだろう。
――この男に無駄な権力を与えるのは本気で止めて頂きたい。

「何のはなしかな？　ぼくはただファディル男爵とちょっと親しくなってみたいなっていうだけなんだけど」
「――」
「何の話をしているの、あなた達」
母の言葉に不安と不満とが混じる。あたしは母を見返し、溜息を

落とした。

「さてと、今のところは帰ります。朝食をごちそう様でした」

爽やかに言い捨て、このぼけなす様はにっこりとあたしの顔を覗き込んだ。

「夕方に迎えを寄こすよ」

「は？」

「エルの家の正餐に呼ばれているんだ。君もおいで――大丈夫。エルから男爵宛に招待状は出してあるから、男爵は必ずきみに行くようにと言ってくれるよ」

自信たっぷりと微笑み、史上最凶の卑怯者は優雅に母へと一礼した。

「楽しい時間を過ごさせて頂きました。次はもっと友好的に迎え入れて頂けるものと信じています」

「無駄なことです」

「そうでしょうか？」

くすりと微笑んで居間を普通に出て行った男の後ろ姿を見送り、あたしは暗澹たる気分で息をついた。

「本当にどういう人なの！」

母の言葉に応える気力が、あたしには無かった。何しろあたし自身、あの男について知っていることというのは少ないのだ。

判っていることといえば――どうやら傍若無人なことが許される立場にいるらしいというコトだけ。

「むしろあたしが教えて欲しい」

あたしはぼそりと口にしたが、果たしてその言葉は母の耳には届いていなかった。

どういう人か――本気であたしが知りたいくらいだ。

告白と招待状

過ぎ去った嵐に心が落ち着くと、あたしは途端にまったく違う思念に囚われた。
両手でカップを捧げ持ち、喉の奥が不自然に乾いて幾度も舌を動かす。
母は疲れた様子で眉間に皺を寄せていたが、もともとの性格なのか軽く首を払うようしてそれまでの話題を打ち消した。

「まぁいいわ。そんなことより――」
意識して口調を軽くして何かを提案しようとした母に、あたしは思い切って口を開いた。
「昨日、マーヴェルは何をしに来たの？」
さりげなく口にするのは無理があった。
あたしの言葉は少しばかり固かったであろうし、あたしの視線はうつむいて捧げ持ったカップの表面を見つめている。
わざとらしくしないようになんていう配慮は到底無理で、けれどできるだけおだやかに言ったつもりだった。

一瞬、その場の空気に奇妙な緊張が走った。
母は軽く動揺したようで、彼女らしくなく持とうとしたティカップを指の爪先ではじき、ついで無理に微笑もうとして失敗した。
やがて深く長い溜息を吐き出すと、半眼を伏せて唇を引き結んだ。
「あなたの様子がおかしかったのはその為なのね。ええ、そうね。私はただ知らぬふりをしていただけだわ――あなたが気付いていることを気付かぬふりをしていただけ」
ゆっくりと首をふり、先ほどまでアレが座っていたあたしの隣に席を移すと、母はあたしの肩を優しく抱き寄せた。
「あなたが気に掛けることではないのよ」

あたしは母の柔らかな言葉を測りかねた。

あたしに真実何の関係も無いことなのか、母が独断であたしが気にかける必要が無いと決め付けたことなのか。それを相手の言葉、そしてしぐさからさぐりだすことが難しく、あたしは慎重に言葉を選んだ。

「ティナのことなの？」

あたしは昨日、自分のことばかり考えてしまったけれど、考えてみればそういうことだってあるはずだ。

今更マーヴェルがあたしに用があると考えるほうが馬鹿らしい。確かにあたしとマーヴェルは結婚間近だったけれど、その関係は破綻している。そんな相手があたしに用があるなんて、あたしも少し自意識過剰というものだろう。

ならば、一番ありそうなことといえばティナのこと。

「ティナとの結婚の話？」

あたしの言葉に、母はこくりと喉を動かし、ついで瞳を伏せたまま口を開いた。

「あなたには関係の無い話なのよ」

かんで含めるようにゆっくりと告げられた言葉に、あたしはどこか心がふっと緩むのを感じた。

――やっぱり。

結婚の承諾とか、もしかしたらティナに赤ん坊ができたのかもしれない。

そんな話、あたしに知られたくないと思うのは当然だろう。あたしは一度ゆっくりと唇の隙間から肺一杯に酸素を取り入れ、ついでその全てを時間をかけて吐き出した。

「今はまだ……少し無理かもしれないけれど、あたし、二人のこと

はちゃんと祝福するつもりだから。母さんも――あまり二人のことを悪く思わないで」

大丈夫。

うん、大丈夫。あたしは大丈夫。

あたしはカップの中の琥珀色の紅茶をただじっと見つめていたから、母が奇妙に眉を潜めてあたしを見つめ、そっと首を振ったことに気付かなかった。

ただよりいっそう強い力であたしをの肩を抱き、母はやけに丁寧な口調で囁いた。

「船長（ふなおさ）の息子はティナの元へ帰ったわ。ええ……もう二度とあなたは過去になど囚われなくていいの」

いいのよ。

こつりとあたしの額に自分の額を押し当てて、母はまるで泣きそうな声でそう告げた。

――もう、いないんだ……

あたしはその事実にお腹の中がもぞもぞするような奇妙な感覚を味わった。羽を持つ虫が腹部で暴れているような、あまり愉快とは言いがたい感覚。

顔を合わせて、きちんと向き合って――もう逃げることなく立ち向かおうと決意すれば、それは蝶のようにかろやかに手元をすり抜けていく。

昨日の今日であればまだこの聖都にいるのではないだろうかと思ったけれど、いないといわれればほっと息をついてしまう。あたしは顔を合わせてきちんと過去に向き合って、そうして謝るべきだった。

あんな風に逃げ出したのは、誰でない自分の為だったから。

もっと強い自分であれば、ティナに、マーヴェルにきちんと伝えることができた筈だ。

――二人の関係に気付いていること。

あたしは、マーヴェルを好きだって。

ティナと戦うことも、マーヴェルを怒ることもしないで、あたしは逃げ出したのだ。後に残される者のことなど考えないで、ただ自分の為だけを思って。

あたしは全てを見てみぬふりですまさずに、きちんと立ち向かえばよかったはずだ。

二人は酷いと思うけど、結局自分も随分と酷かったのだと思う。

そんな風に思うのは、今はあのぼけなす様がいてくれるから。

結局、それに尽きるんだろうけれど。

あたしは冷めてしまった紅茶を飲み干し、肩を抱いたままの母に自分の身をすりよせるようにして観念するように言った。

「あたし――あの人が好きなの」

「それは……つまり、あのおかしな男のことよね？」

いや、うん。そうなんだけどね？

あたしは苦笑して、母から身を引き離して彼女の瞳をひたりと見据えた。

「結婚はまだ確かに早いと思う。母さんが認められないっていう気持ちも、判る」

どっからどう見ても胡散臭いですしね。

「母さんにとってあたしは確かにいつまでも娘で、小さなリィなのかもしれないけど。でも、抱きしめて守られてばかりの子供ではもうないの」

「リィ……」

「明日、コンコディアの町に帰る」

穏やかな空気が満ちていたその時に、あたしは精一杯の思いを込めて母に訴えた。母はきっとイヤだろうけれど、きっと今なら認めてくれる。

吐息を吐き出し、瞳を細めて――「仕方ないわね」と微笑んでくれる。というあたしの思いとは裏腹に、母は思い切りその表情を歪ませ、

「絶対に許しません！」

母は聞く耳を持っていないようだった――

＊＊＊

母は多少意固地な性格だったかもしれない。

思い返せば確かに……

あたしは押し込められた自室、寝台にべったりと張り付きながら額を押さえ込んだ。

その後どうなったかといえば、かるーく軟禁状態だった。

部屋の前には本来は庭の手入れをする筈の下男が主からの厳命により門番ならぬ扉番をしている。

幸いこの部屋には鍵がつけられていないが、なんだか二・三日したらそれはそれ強固な鍵をとりつけられてしまいそうな勢いだ。

なんというか、きつい。

母親っていうのはどこの家でもあんなものだろうか――いや、マイラさんもターニャさんも違う気がする。もっとおおらかで豪快。まかり間違っても自分の娘を閉じ込めたりしない気がいたしますよ？

あたしはぐったりとしながら、これはやっぱりあの変態魔法使い

がもう一度現れるのを待って今度こそここから逃げるのに協力してもらわなければいけないだろうと考えていたのだが、意外にもこの軟禁状態は二刻程度で解除されることとなった。

母の馬車が屋敷を出て行くのを窓から眺め、今なら逃げ出せるかもと思ったものの下男の壁はわりと強固であるし、自室の窓から飛び降りる程あたしには運動能力はない。

考えるのも疲れ果て、寝台の上で少しばかりうとうととしていた頃合に、乱暴な足音が廊下を歩み、外の下男と何やら言葉を交わすとその野太い声の主はノックの一つも無く二枚扉を両手で押し広げた。

「リドリー、おまえ本当にいたのか！」

はいぃ？

あたしは慌てて寝台から跳ね起き、づかづかと近づいてきた相手にがしりと一旦抱きしめられた。

突飛な行動にあたしは肺の中の酸素を無理張り吐き出させられるような衝撃をうけ、おもわずくぐもった「ぐふっ」という音をもらしてしまった。

強い力はあたしの骨すらきしませる程の力強さをみせ、そしてすぐにあたしを引き離すと大仰な様子で顔をしかめて首を振った。

「来ているなら来ているとどうしておまえやエレイズは知らせてくれないんだ？　こんな風に知らされて、私がどれだけ驚いたことか！　まったく、私のか弱い心臓を止めるつもりなのか？」

突然傍若無人に現れて好き放題なことを言う中肉中背の男性は、あたしにとっては伯父に当たり、母にとっては兄であるところのファディル男爵――レイシャス領領主ランドルフ・モートメン・ファディル。

その容姿は母にまったく似ていない。ベストの下にある腹部が、多少突き出ているのは御愛嬌というものだろう。

伯父は苛立っている様子ではないが、困惑に満ちた空気を滲ませ、

自分の上着の隠しから一通の封書を引き出した。

「いったいいつモルティバル卿とお近づきになったというんだ？まったく信じがたい！」

モルティバル卿……

あたしは伯父の手から渡された封書の裏面をしげしげと見つめた。紅の封蝋をたらし、印璽（シール）を押して封印された正式な書類の下部分には、流暢な文字が刻み込まれている。

エルディバルト・クム・セイナム・ル・モルティバル――

髭の邪魔臭い騎士の名にぴったりだこと。

見るからに仰々しい感じがとくに。あたしが冷めた眼差しでそれを一瞥し、ペーパーナイフなどというものも使わずに乱暴にそれをびしっと開くと伯父は自らが切られたかのように何故かびくりと身をすくませた。

朝に言われた通り正餐の招待状だったが、これをあの人が書いたと思うとどれだけ嫌そうに書いたのだろうと想像できる。嫌われているのがありありと判る手紙というのははじめて受け取った。

ある意味エルディバルトさんは可哀想な人だ。だって、嫌いな相手といえども、主に命じられればこうしてわざわざ正餐に招待しなければいけないのだ。

ちょっとだけ、なんというか――ざまーみろ、的な気持ちになってしまったのはナイショです。

「モルティバル卿はいったい何と言っていらしたんだ？」

そわそわと伯父が手紙を覗き込もうとする。

あたしは「本日の正餐の招待ですって」とそのまま簡潔に告げた。

「そうか！　では私がきちんとエスコートしてやろう。ああ、おまえはこういった時の礼儀はどうなっているんだ？　きちんとあの男は躾たんだろうな？　それにしても、なんだって今夜なんだ？　着る衣装は大丈夫なのか？」

一人で混乱している伯父を前に、あたしはそっと乾いた笑いを浮かべた。

「エルティバルトさんの家でご飯食べるだけでしょ？　何もそんな大げさな」

先日のユリクス様の邸宅での夕食は着替えをさせられたが、あれはきっとルティアさんの衣装。胸元がちょっと、いや、かーなーりがばかばでしたが、胸の下部分に布をいれてあげました。ルティアさん、神業。アマリージェなど物凄く食い入るように見ていましたが、マリー、あなたはまだ成長するからおかしな技は必要ないと思われます。

あ、ルティアさんやアマリージェもきっといるに違いない。楽しみだ。

「普通のドレスで平気でしょ」

そうあっけらかんと言うあたしに、伯父は目をむいて唾を飛ばした。

「リドリー！　失礼なことを言うものじゃない！　モルティバル卿は王位継承権こそ破棄されておられるが、れっきとした陛下の甥子様であり、王弟殿下の第三子息なのだぞ」

その言葉があたしの脳内に到達する前に、あたしの手からひらひらと封書が落ちた。

――あの髭が？

幸いあたしの口からその無礼極まりない言葉は吐き出されはしな

かったが、あたしは寝台にもぐりこんで冬眠してしまいたい気持ちになった。

勤めと二人の伯父

「なんでこんなに仕事があるのでしょうね？」
神官長のだらりとした神官服の青年は引きつった微笑で小さく呟いた。
神官長としての仕事はもっぱら祈祷ばかりだが、竜公としての仕事が存在する。それはつまり、魔法使いの秘術でもって行われるヒトの手にあまる事柄だ。

日照りの強い場に水脈を通し、粘土質の為に水はけが悪い地方の土を改良する。
「って、土木工事？」
「国の為ですからぁ」
「あの、ルティア……実は賄賂とか貰ってきてませんか？　明らかに私の仕事じゃないような」
神殿にいるのだから仕事をするのは構わないが、明らかに何かがおかしい。
「いやですわぁ。ヒトの心なんてのぞいちゃ駄目ですぅ」
「……のぞいてませんが」
ルティアは唇を引き結んでにっこりと笑い、そそくさと現在自分が腕に抱えている書類を机の上にどさりとおいた。
「今宵の正餐の献立を考えなくてはいけませんわねぇ？　私失礼させていただきますわぁ。お仕事はちゃんとなさいませー」

「その正餐とやらは私を招いてはくれていないようだな」

正面の二枚扉が許しもなく開かれ、ルティアは慌てて二歩下がり頭を下げた。
せわしなく動いていた神官達がざっと壁際によって頭をさげていく。

その中で中央の椅子に座ったままだった神官長は吐息を落として頬に掛かる髪を払った。
「分別なく動き回るのはお止め下さい」
「自分の縄張りをうろついて何が悪い」
「ここは私の縄張りですよ。いくら貴方でもね――席をお譲りしたほうが？」
立つこともせずにいう神官長に、厚地の外套を腕で払いながら壮年の男は口元を歪めた。
「年寄り扱いはやめろ」
「私は年寄りではありませんが座ったままで構いませんね」
「ああ、好きにしろ。それより、正餐の招待は来てないぞ」
「呼ぶ気はまったくありませんから。それに、今宵の正餐のホストはエルです」
「なんだ。アレか」
つまらなそうに言い、ふっとその眼差しを神官長の背後に控える侍女姿のルティアへと向けた。

「姫――息災か」
「おかげさまで健やかにしております」
「また変わったナリをしているな。エルディバルトの趣味か？――アレに飽いたら他の者をあてがってやっても構わんぞ。私の四番目辺りはどうだ」
「たいへん嬉しゅうございますが、エルディバルト様に飽きることはございません」
にっこりと丁寧に言うルティアにニヤリと笑った。

「そんなことを言いにきたのですか？」
「なに、我が守護者が女にのぼせ上がってると聞くのでな。一度見たいと願うのはおかしなことではあるまい？」
「年寄りは下世話ですね」

微笑を湛えて言う神官長に、言われたほうはニヤニヤと口元を緩めている。
「見せると減るので見せません」
「そういうものか？」
「そういうものです」
神官長の眼差しは冷たいものだった。二人の間に何故か重苦しいものが横たわる。ルティアが怪訝な顔をすると、正面に立つ男は腕を組んだ。

「その女が相応しいものでないのであれば、処分せねばなるまい」
「そのようにエルディバルトに命じたのですね」
「ああ――」
「そして断られた」
「まったく忠実な犬だな、アレは。伯父の頼みといえどすげなく断った――使えん」
大仰に肩をすくめて笑う相手に、神官長は穏やかな微笑を返した。

「忠実な犬も時には噛み付くものですよ」
「その犬に牙がなくば意味などあるまい」

二人の間に冷たく流れるものに、ルティアは小さく身を震わせ、更に一歩退いたがそれを合図にしたように二人が笑い声を上げた。
「では致し方ない。姫よ――同じ命を与えよう。その女に支障があれば、早々に処分せよ」
つっと向けられた視線は冷たい刃物のようにルティアを捉えた。

ルティアはその言葉に喉を鳴らし幾分逡巡した後に頭を垂れ、唇が震えそうになるのを必死に堪えながらぎゅっと瞳を閉ざし、応えた。
「承りましてございます」

「良い返事だ。まったく女であることが惜しいことよな」
高らかに笑って身を翻し退出する相手を見送り、その場の誰も口を開こうとしなかった。神官も、ルティアも、そして――彼等の主も。

静寂が重くのしかかり、頭を下げたままの状態のルティアの額から流れた汗が顎を伝い、落ちる。やがて苦痛にうめくようにルティアはその場に膝をついた。
「申し訳ありませんっ」
「何がだい？」

唯一人、椅子に座っていた男はゆったりと足を組み、小首をかしげて微笑した。

＊＊＊

「何をしているんだ、リドリー？」
伯父さんが眉間に縦皺を刻みつけて声音を変えたが、あたしはいそいそと寝台に戻ってキルトにくるまった。
冬眠――冬眠は無理かもしれないが、二・三日休ませて下さい。

「寝てる暇なんてないぞっ。リドリー？」
伯父は乱暴に切るとの端を引っ張るが、あたしは身を丸めながら抵抗し、あげくある一つの考えがばしりとあたしの脳内をめぐり、掴んでいたキルトを手放した。

「エスコートは要りませんから！」
「な、なんだ突然？」
「迎えが来てくれるから。伯父さんは行かなくて大丈夫っ」

それどころではありませんよ。伯父とあの人たちを会わせるのは実は結構危険ではないのでしょうか？　認めたくはないけれど、あの髭――もとい、あの駄犬、ああ違くて、ちがくて！　あああっ、これもそれもルティアさんのせいだっ。などと八つ当たり気味にルティアさんのせいにして、あたしはぶるりと身を震わせた。

あのエルディバルトさんが王弟殿下の三男だというのであれば、つまりあの変態魔法使いはそれだけの人を護衛騎士としてもてるということだ。まぁ、偉いのは理解していたけれど。

そして、その無駄に偉いエルディバルトさんをたかが「あたしに失礼なことを言った」という阿呆な理由でもって地下牢に十日近くも投獄した。

……伯父さんを投獄するなんてことはないだろうけれど、なんてあたしは結構さらりと思っていたが、どうしてそれをしないなどと言えるだろうか。

――常識などもともと通用しないのだ。

あんなの野放しにしないで欲しい、本当に。

「何を言ってるんだ。おまえが何か失礼なことを仕出かさないように見張らねば」

「ああ、安心して」

あたしは寝台に座ったまま乾いた口調でいった。

「失礼以前に、もうすでにエルディバルトさんには物凄く嫌われてるから」

今までの人生の中で、あたしを嫌っているという人間は何人かいることとは思いますが、ダントツナンバーワンで嫌っている人といえばエルディバルトさんに違いないと断言してもいいです。

まるで害虫をみるかのような視線を惜しむことなく向けてくれますよ。伯父さんがそれを体験すれば、卒倒すること間違いなしです。

素晴らしいですね。滅多にできませんよ、そんな経験。

「おまえっ、卿に何をしたんだ！」
「……」
ナニをしたのでしょうかね？
あたしが説明を求めたい。個人的に何かした覚えはまったくありませんが、激しく嫌悪の対象になっていることはひしひしと感じています。
「まさか、怒らせた為に呼ばれているのか？　招待ではなく呼び出しなのか？」
引きつって卒倒しそうになった伯父の様子に、あたしは困惑して額に手を当てた。
何故にこんなややこしいことに。
「えっと、夕食の招待は招待だから、おかしな心配はしないで？」
「まったくおまえが何を言っているのか判らん」
気が合いますね。あたしも自分が何を言えばいいのか判りません。判っているのは、気楽に考えていたことが激しくややこしくて面倒臭いということですヨ。

伯父は落ち着きをなくしたのか、うろうろとその場をいったりきたりと歩き出し、大げさにぶんぶんと手を振り回し、
「そもそも、どうしたら一介の庶民であるおまえと卿が知り合うことができるというんだ？」
ぶつぶつと言ったと思えば、今度はハっと息を飲み込んで伯父は食い入るようにあたしを見た。
「まさか！　まさかおまえ――卿と不適切な関係を築いたとか言うのではあるまいな？　あの方は女癖が……いや、えっと……」
ごほんごほんっと咳払いする伯父だったが、あたしはその発想に更に疲れを感じてしまった。
あたしとエルディバルトさんが何ですと？
天と地とがひっくりかえり、あらいぐまがオットセイと熱愛を繰り

広げたとしてもありえない。
しかも伯父ときたら一人で動揺し、
「まさか子供とかっ」
「馬鹿なこと言わないでよ！」

「馬鹿なことおっしゃらないで！」

悲鳴のような高い声が怒鳴り、あたしと伯父の視線は開いたままの扉へと向かった。
そこには外出から戻ったばかりの母が憤りをみせて出現し、足早に寝台に近寄るとその手であたしを抱き寄せた。
「兄さまっ、私の娘に突然なんということをおっしゃるのっ」
突然帰宅した妹が厳しい眼差しで睨みつけ、浴びせかけてくる非難がましい言葉に伯父は目に見えて狼狽した。
「エ、エレイズ……いや、すまない。だが……」
「だがもへったくれもありません！　私の娘をふしだらな女のようにっ。許しませんよっ」
「エリー、私が悪かった。だが、話を」
「まさか！　ああ、まさかっ。リィっ、まさかそうなの？　あの男との間に子供ができたから結婚なんて言い出したというのっ？」

はいぃぃ？
あたしを抱きしめ、伯父を糾弾していた母が突然その矛先を自分の腕の中の娘へと向けた。あたしはその超展開にぎょっとして目をむいたが、あまりのことにぱかぱかと口を動かすことしかできなかった。

「なんとっ、そうなのか。リドリー、ああ、でかしたぞっ。卿はまだ結婚されていない。確か婚約者はいたと思うが……子供ができてしまえばそんなものはどうとでもなる。なんと目出度いっ」

「どこが目出度いのですっ、あああ、可哀想に。大丈夫、大丈夫よ？　慌てて結婚なんてしなくていいのよ。そう、リィも赤ちゃんも母様がちゃんと守って――」
「そう、結婚だ。早く話しを詰めなければっ。婚約期間の最低期間は三ヶ月だが、卿ならすぐさま特別許可証を用意して頂ける」
「兄さまは黙ってらして！」

「ってか、二人とも黙って！」

あたしはなんとか必死に腹部に酸素を取り入れ、今までこんな大声など出したことなど無いという大音量で怒鳴りつけた。

しんっと一瞬部屋が静寂で満ちたが、すぐに懲りない二人が同時に口を開こうとするものだから、あたしはぱんぱんっと今度は手を打ち鳴らし、強い口調で言った。

「勝手に話を作ってすすめないで！　あたしは妊娠してませんからっ」

人の話を聞いて下さい。
ええ、本当に――あきれ返りながら、あたしを見ている二人が本当に兄妹なんだなぁと何故かやけに感じていた。

ああっ、もぉっ。
二人とも、勘違いした挙句の暴走っぷりがそっくり。

羞恥と接触

「あたしは、妊娠してませんからね」
あたしはゆっくりと丁寧な口調で言い切り、理解してくれたかどうかを確かめるように二人の顔を交互に見た。
その言葉に母はほっと息をつき、
「ええ、そうよね？　それに……確か昼間のうちにまだ二人はそんな関係じゃないと言っていたよね？　あら、いやだわ。私ったら」
ほほほほっとおかしな笑いをしながら扇で口元を押さえた母、ついでこほんっと一つ　咳をして恨めしげな視線を伯父へと向けた。
「兄さまがおかしなことをおっしゃるから……」と明らかに非難しているが、勝手に勘違いしたのは母も一緒だ。
ええ、あたしは忘れません。愛娘をふしだらな女のように言うなと実兄を非難したその口で、自らも我が娘をふしだらな女のように非難した事実を。
酷すぎる。
「なんだ、子供はいないのか。いや、だが――つまり、二人はいわゆる恋仲、ということでいいんだな？」
「まだ許した訳ではありませんっ」
「何故だ、エリー。こんな素晴らしい縁組！　おまえが反対といったところで」
「だから！　とりあえず黙ってっ」
勝手に二人で会話をするのは止めて。
しかも、明らかにおかしな会話をするのは止めて下さい。
あたしはギロリと二人を睨みつけた。一年前であればおそらくこんな風に二人に強く言葉を操ることなどできなかっただろう。

あたし偉い。よく成長した。がんばってる。誰も褒めてくれないのでせめて自分で自分だけは褒めておくことにする。

「それに、母さんと伯父さんの言うところの相手が食い違ってるから」

「は？」

伯父が言葉を落とし、母が眉を潜めた。

あたしはすでにくしゃくしゃになったエルディバルトさんからの招待状を拾い上げ、わざとらしくその表面を叩いた。

「伯父さんが言っているヒトはこっち。今夜の夕食に招いてくれたのは確かにエルディバルトさんだけど、あたしは別にエルディバルトさんと付き合いがある訳じゃないの。ただあたしの……」

あああああ、

あたしは言葉を上ずらせながらついっと視線をそらした。

「あたしの、恋人の、友人ってだけ！」

うわぁ、言った。言っちゃった。大丈夫だよね。聞いていませんよね。

あの神出鬼没な変質者は今確実にいませんよね！

あたしは意味不明なほどきょろきょろと周りを見回してみたが、幸いおかしな様子は微塵も無い。ここは聖都の母の家で、そして母があたしへとあてがってくれたあたしの部屋で、ヘンタイの気配は微塵もない。

それでもあたしはばくばくとあがる体温と心音にどこかにもぐりこんで、嘘です嘘です、死ねあたし！と頭を隠して叫びだしたい気持ちを必死に押さえ込んだ。

動揺に内心七転八倒中のあたしとは違い、伯父はあからさまにがっかりとした様子で息をついた。
伯父の野心に付き合ってやる義理は生憎とあたしには無い。しかも、自ら女癖が悪いと言ったエルディバルトさんとあたしとをくっつけようなどと何がどうしたらそんなことになりえるのだろうか。
とりあえずルティアさんが怖いです。
ルティアさんっていつもにこにこしているけれど、押しが強いというか妙な迫力がある。おそらく敵にまわすと怖いタイプに違いない。
影でこそこそと虐めるのではなくて、常に堂々と虐めるタイプだ。ルティアさんが男だったらもしかしてあたし惚れてしまう――訳はないな。あたしは平和主義です。

そこまで考えたあたしはそれまでの動揺をやっと沈めた。
はい、さっきのナシです。忘れてください。もうお終い。心臓よばくばくしてはいけません。

母はエルディバルトという名前を耳にしてもすぐに誰とは判らなかった様子だった。まぁ、エルディバルトなんて名前はそのへんにわんさかいそうですしね。
「ああ、確か……あの神殿官、あら、名前は何といったかしら……まぁいいわ。あの男が帰る時に言っていた正餐の招待ね？　まったく失礼な男だこと。リィ、行かなくていいのよ」
憤慨する様子の母だったが、さすがに伯父さんは慌てた。
「馬鹿を言うんじゃない、エリー。この招待を断ることはできない」
「当日に届くような無礼な招待を受ける必要はありませんわ」
「おまえこそ無礼なことを言うな。相手はモルティバル卿なのだぞ」
伯父が身震いするように言えば、母はしばらく伯父の顔を見つめ、ついで毛嫌いするように冷ややかな視線をあたしの手の封書に向けた。

「……そう、あの男ときたら虎の威を借るような品の無い真似をするのね」
本当に、なんて下らない。
冷たく吐き出される言葉に、あたしは胃の辺りが痛むような気がした。
「エリー？」
「――それにしても、モルティバル卿は友人を選ぶべきね」
母は悪意の棘を撒き散らすように言いながら口元に当てた扇をぱちりと閉ざした。

母さん、それは色々と誤解です。
だって、虎の威も何も、アレ自身が虎なんだもの。
それに、エルディバルトさんはアレが大好きだから、そんな辛辣な台詞をエルディバルトさんの前で言ったら最後どんな恐ろしい事態になるかあたしにはもう判りません。本気で腰の剣を引き抜きそう。
言うべきかいわざるべきか……――も、もうちょっと先に延ばしてもいいですかね？

二人が言う王弟殿下の第三令息モルティバル卿は、あの変態の忠実な犬でございます。いや、だから人のことを犬だなんて言っちゃだめだ、あたし。

あたしはぶるりと身をふるわせた。考えたくないけど、ルティアさんの口癖がうつっている気がする。
だって、ルティアさんってば物凄く嬉しそうに言うんだもの。
――エディ様ってば竜公の忠実な駄犬ですものぉっ。

耳に残るんですよね、あの言葉。

「そんなことはどうでもいい。リドリー、早く準備を！」

そわそわしている伯父があんまり滑稽で、あたしは乾いた笑いを浮かべた。

まだ時間はたっぷりあるというのに、まるで一大イベントのようだが正餐ってつまり、ただの夕食会ってことなのに。

＊＊＊

「姫さんっ、あっちの建物は？」

中央広場の右手に見えている建物を示して振り返るアジスに、アマリージェが応えるより先に彼等の後ろを歩いていた青年が応えていた。

「あれは音楽堂。聖歌隊が歌を披露してくれる場だ」

そつなく端的に言うのは、夕方にリドリーを迎えに行くまでのあいだ聖都を見物するというアマリージェとアジスの為にエルディバルトがつけた警護役の従騎士であったが、ふいにその厳しい眼差しをアジスへと向けた。

「アジス・トルセア。いくら君がまだ幼い少年といえども伯爵家の姫君に対する礼儀がなってないにも程がある。騎士を目指しているならばなおさら言葉や自らの行いに――」

「申し訳ありません」

相手の言葉をさえぎるようにアマリージェは声をあげ、ひたりとその視線を重ね合わせた。

「アジスはわたくしの家の家人です。そしてわたくしの友人でもあり、また彼の教育を担っているのもわたくしです。彼に何か落ち度があるのであればそれはわたくしが責めを負うべき事柄です。どうぞアジスにではなくわたくしにおっしゃって下さい」

よどみなく言いつけると、アマリージェは自分よりも随分と大きな男をしっかりと見つめ、ついで微笑んだ。
「いや、あの――アマリージェ様」
「何かございますか？」
「ありません」
「さようですか。もう何もないのでしたら、どうぞお戻り下さい。もともと護衛など必要ではありません」
「しかし、私は――」
職務だと口にしようとしたが、アマリージェはゆっくりと相手の言葉をさえぎった。
「それでも護衛として付いていらっしゃるとおっしゃるなら、どうぞわたくしの目に付かない場にお行き下さい」
相手の言葉を待たずに一礼すると、アマリージェは絶句しているアジスの手を掴んだ。
「アジス、広場の入り口に市がたっている筈ですわ。行きましょう」
「……」
くんっとつかまれた手をアジスは見つめ、ついで嘆息した。
子供扱いされるのは腹がたつ。従騎士に子ども扱いされるのは腹立たしいが、だがこうやってアマリージェに迷惑がかかるのもアジスの心を塞いだ。
「時々すっげーキツイよな」
「あら、何かありまして？」
「俺が口調を改めないと、やっぱ姫さんに何か問題がでるんじゃねぇの？」
自分達がそれでよくとも、世間的に見れば身分だ何だと煩わしいものが多くある。それを無視できない程度にはアジスは子供ではなかった。
声のトーンを低くしていう相手に、アマリージェは足を止めて小首をかしげた。

「では言葉を改めてみます？　聖都（こちら）にいる間」
「姫さんがそうしたほうがいいって言うなら」
「そう。でしたら。そうなさるといいわ。わたくし返事いたしませんけど」
さらりと言ったあとに、くすくすと笑うアマリージェにアジスは肩を落とした。
アマリージェは時々とても頑固になることがある。今もきっとそうなのだろう。
「女ってめんどくせぇ」
真実そう思っている訳ではないが、すでに口癖となっている言葉がするりと口からこぼれてしまう。それを聞きとがめたアマリージェは憤慨するように身を翻したが、丁度道が交差する場で、危うく行き交う男とぶつかりそうになった。

「うわっ、だいじょうぶか？」

乱暴な声と大きな手がアマリージェを支える。
アジスも慌ててアマリージェに手を伸ばそうとしたが、相手は色の黒い大きな男で、アマリージェの体を容易く支え、きちんと立たせた。
「すまんね、痛くなかったか？」
「ええ、わたくしこそ申し訳ありません」
「いやいや、俺もちょっと余所見してたからなぁ。悪い悪い」
にっと笑った男の後ろ、もう一人の青年が呆れた様子で言った。
「ドーザ、おまえがきちんと前を向いて歩かないからだ」
藍色の瞳に赤茶色の髪の青年はドーザと呼ばれる青年の肩を叩き、少し疲れたような笑みを浮かべてアマリージェに微笑んだ。
「うちの人間が失礼しました。怪我はなかった？」
「ありませんわ」
応えてアマリージェはスカートを軽く払った。

背後から騎士が近づいてくる気配が煩わしい。
面前に立つドーザと呼ばれた男は随分と大きく手足が太い。ぱっと見て海の男だと思わせる男だが、隣にいる青年はドーザと並んでいる為にか優男という印象が強い。
「もし後で何かあれば、海運商のランド商会を尋ねてくれよ。俺はドーザ。こっちの優男がマーヴェル」
ドーザが決まり悪気に頭をかいているところで、離れていろと言った従騎士がかけつけて「何事ですか？」と割ってはいる。
アマリージェはあきれ果てながら、それでも「転びそうになってしまっただけです」と相手を黙らせ、藍色の瞳の優男が差し出した手に触れずに一礼した。

「怪我はありません。気になさる必要はありませんわ。ご丁寧にありがとうございます」
「いや、こちらこそ失礼しました」
「わたくしも余所見をしていたのですから、どちらが良い悪いということはありません」
丁寧にアマリージェが言いながら微笑むと、相手の青年はちらりと従騎士を一瞥し、苦笑した。
「もし、貴女が船を使うことがあれば、気軽にオレの名を出してくれればいい。ランド商会はオレの父の会社で、オレはそこの三男だから少しは便宜が図れる」
使う予定はまったく見えないが、アマリージェは礼儀正しく微笑んでみせた。

「ありがとうございます。ではわたくしどもは失礼させていただきます」

大きな男二人に見送られるようにアマリージェとアジスは歩き出したが、やがてアジスは唇を尖らせた。

「ああいうのをナンパっていうのか？　ここぞとばかりにアピールしやがって。あー、やだやだ」
「……違うのではないかしら？」
「ったく、姫さんはもうちょっと気をつけないと。ぼけぼけしてっと絶対に痛い目みるからな」
　ぶつぶつと言い出したアジスに呆れ、アマリージェは「ナンパってそもそもなんですの？」と小首をかしげた為に、更にアジスに小言をくらう羽目に陥った。

「ったく！　女ってやつはめんどうくせぇなっ」
「それは何か違うのではないかしら」
「ちがくねーよ！」

女の戦いと嫉妬心

夕刻――四頭の毛並みの良い駿馬に引かれた馬車を降り立ったのはあたしの予想通り、アマリージェとアジス君だった。というかアマリージェ以外は考えたくなかった。もし万が一、あの髭の騎士が来てしまった時にはあたしはその場で気を失いたい程の気持ちになっていただろう。

良かった、うん本当に良かった。

この人選だけはあのぼけなす様を褒めてあげてもいい。もしまかり間違って王弟殿下の第三子息サマがお迎えにみられでもしたら、母の屋敷は軽く恐慌状態に陥いってしまったことだろう。

迎えに訪れた伯爵家令嬢の姿に母は微妙な表情をし、ついで伯父は嬉しそうに「なんと美しいお嬢さんだろうか。私がもう少し若ければ――」という本気なのか冗談なのか判らない世辞をつらつらと吐き出し、アジス君に冷たい眼差しを向けられていた。

「娘の招待は了承いたしましたけれど、娘は帰してくださるのですよね？」

ぐすぐずと送り出そうとしない母は、アマリージェをしっかりと見据えてそう口にしたが、アマリージェは困ったように微笑んだ。

「わたくしがお約束できることは、リドリーの希望に沿うことしか致しませんということです」

その言葉に弾かれたように母はあたしを見た。

「リドリーっ」

不安と怒りさえ孕んだ眼差しにあたしは手を伸ばし、母の肩を抱きしめた。

「もう閉じ込めたりしないと約束してくれれば、今日この家に戻ってくるって約束する」

「リィ……」
「あたしはもう大人なのよ、母さん。母さんが心配してくれているのは十分判るけれど、あたしは自分の足でちゃんと立てるの」
あたしの言葉に母は息をつき、きゅっと一度あたしを抱いた。
「でも、結婚の話を認めた訳ではありませんからね」
「いや、それはもともとどうでもいいです」
あたしはさっさと手を振って、やはり一緒に行くべきだという伯父を無視してあわただしく馬車に乗り込んだが、その場ですっころびそうな程狼狽した。

「……いたの？」

普段であれば呼びもしなくとも顔をだす尊きあほんだらサマは広い馬車の一番奥の席で足を組んですわり、外の人間に気を遣っているのか心持ち身を縮めてにぎにぎと手を動かした。
「色々と困った事情がありまして」
「はい？」
馬車の入り口でもたもたしているあたしを、アジス君が無遠慮に押して中に入り込む。そこではじめて目を見開いた。
「尊き人っ」
「やぁ、アジス君。ごめんね、突然入り込んで」
どうやらもとからいた訳ではないらしい。
アジス君は多少驚いた様子だが、もともと彼はコレが不思議な力を持つ人間だと承知している為にさほどの動揺は見せなかった。
アマリージェが最後に馬車に乗り込めば、御者がぱたりと扉を閉ざした。そこでやっと身を縮めていた魔術師は、背筋を伸ばすようにして体を動かし、乾いた、というか疲れた笑いを浮かべて見せた。
「また逃げ出してまいりましたね」
アマリージェは馬車が動き出すのに慌てて席に座り、辛辣な調子

で唇を尖らせた。長年この男と付き合いのある彼女は、何故かこの男にだけは厳しい。
「逃げ出したくもなるよ……もう本当に勘弁して欲しい」
「なに？　何かあったの？」
まったく意味がつかめずに中腰状態のあたしをふいに引き寄せ、他人の視線などまったく気にもかけない変質者はぎゅうっとあたしを抱きしめつつ、厚顔無恥に口を開いた。
「リトル・リィ、ルティアをどうにかして」
「ルティア様がどうかなさったのですか？」
ルティアさんの名前にアマリージェが慌てて口を挟みこむ。
「ぼくは気にしていないのに、あの子ときたら些細なことで恐慌状態だよ。まったく、意地の悪いおじさんにちょっと虐められただけなんだけどね。年寄りはどうしてああ性格がねじくれているのかな」
ぶつぶつといいながら人を撫で回すのは止めなさいよ。
あたしはぐぐぐっと腕に力を込めて相手をおしやりながら、
「あのルティアさんが虐め？」
「あの子ってば時々思い込みが激しいから。なんといってもエルが可愛いとか絶対に思い込みだよね」
虐めこそすれ虐められるところがまったく想像できずに、あたしは瞳を何度もまたたいてしまった。しかも、虐められて恐慌状態？
何がどうすればそんなじたいに陥るというのだろうか。
「ぼくが何を言ってもきかないからね。きっとリトル・リィの言うことなら効くと思うんだよ」
「いや、あんまり自信ないけど」
「だいじょーぶ、だいじょーぶ。ショック療法とかあることだし。ね？」
いっそ無邪気に言うや、その手がぽんっとあたしの肩に触れた。
「いってらっしゃい！」

＊＊＊

その次の瞬間、あたしは自分の意識やら感覚やらの全てを疑った。突然身を包み込んだのは温かな室温。馬車の中もさほど寒くは無かったが、だからといってこんな風にほんわりとした温かさなど無かった。

突然投げ出されるような感覚でくらりと頭が揺さぶられ、呆然としながら辺りを見回せばそこは馬車とはまったく違う場所だった。

あたしは冷たい床の上にぺたりと座っている現状。

自分に起こる異常な出来事に、拒絶反応のようなぞくりとした奇妙な恐怖が腹部から競りあがる。

ありえない現象が理解できなくて上ずるような声が漏れそうになった途端、そんなあたしより先に悲鳴が上がっていた。

「リドリーさんっ」

慌てて視線を向ければ、その場が居間のような一室だと判る。寝椅子にすがるようにして座っていたのは相変わらずの侍女服のルティアさんで、まるで幽霊でも見るようにあたしを凝視しながらゆるゆると首を振った。

「どうして……どうしてあなたがいらっしゃるのです」

その時の彼女は、普段の彼女とはまるきり違う女性だった。

恐怖を覚えるように身を震わせ、何かを抑えるように自らを抱きしめてあたしを凝視する。

「どうしているのかと問われれば、り、竜公?サマに聞いて欲しいのですが」

竜公という単語が自分の口になじまない。

あの男自身、あたしに言われたくないだろう。それでもあの男は彼女にとって竜公であろうと思われ、あたしは首をひねりつつそう口にした。

面前のルティアさんは今にも気を失ってしまいそうに顔色が悪かった。
「……あの方の心がわかりませんわ」
「いや、あたしも判りませんが。変態の心はあまり理解しないほうがいいと思いますよ？」
知りたいような気も確かに時々しますが、その成分の八十パーセントが不道徳ですからその内容をまざまざと見せ付けられた日には、明日の朝日を放棄してしまいたくなるくらい心に打撃を受けるものと思われます。

あたしはくらくらとする頭がやっと落ち着いてくるのを合図に、へたりと床に座ったままの現状を逃れるようにゆっくりと立ち上がった。
「なんというか突然押しかけてしまいましてすみません。ここは、エルディバルトさんの屋敷でしょうか？」
「いえ、ここは聖都の中央から北地に作られている神殿です」
ルティアさんは挙動不審に視線を泳がせた。
というか、ルティアさんってまともに喋れるんですね。そこ突っ込んでいいですか？
しかし、彼女はまるきりあたしが面前にいることが耐え難いという様子だった。

なんだか判らないけれど、もしかしてあたしは嫌われてしまったのだろうか？　数日会わない間に嫌われてしまった？　それはとても残念だ。というか残念という言葉で流せないくらいちょっと辛い。だってあたし友達少ないのです。
やっとできた友人が、やけによそよそしいというのはあたしが何かしでかしてしまったのだろうか。
あたしはおそるおそるルティアさんに手を伸ばしたのだが、ルティアさんはハっと息をつめ、触れられたくも無いというように身を

引いた。

うわー……

痛いなぁ。いや、どこかぶたれたとかではなくて、その、心が痛い。

あたしは行くあての失った手をわきわきと動かし、そろそろと一歩退いた。

「あの、あたし外に出てますね？」

「――あなたは、あの方には相応しくありません」

突然突きつけられた言葉に、さらにあたしは唖然として胸に痛みを覚えた。

とくとくと心臓が激しく鼓動する。耳がくわんくわんと痛みを訴えだし、あたしは泣きたいような気持ちになって眉を潜めた。

「あの方の、竜公の心を乱すような女性は相応しくないのです。あの方は泰然と分け隔てなく誰にでも同じように接するべき方だというのに、あなたを前にすればその全てを覆してしまわれます」

「……」

「あの方に相応しいのは、たとえ失っても心乱されぬ女性――」

刃のように言葉を紡ぎながら、ルティアさんは唇を噛んだ。

あたしは今にも泣き出してしまいそうな女性を見つめ、心がひんやりと冷たくなる感じを味わっていた。

耳が、言葉を拒絶するように痛む。

心が、悪意に染まりそうにくらくらする。

「やっぱり、あの人に似合うのはルティアさんという話ですか？」

自分の声とは思えない程、それは冷たく他人事のように口からこぼれた。

「――結局はそうなのでしょう。私に何があろうと、あの方は心を乱されることなどありません」

「何がいいたいんですか！」

ぶわりと膨らんだのは怒りだ。

認める。認めましょうとも。

ええ、嫉妬ですよ。これは嫉妬です。それも物凄い理不尽な。

ルティアさんは何を言いたいの？

まるで勝者は自分だと示すように言うくせに、まるきりその内容は敗者のそれだ。

――自分は竜公の心を乱さないから自分のほうが相応しいのだと。

何それ気持ち悪い。

「あの方を好きですか？」

ルティアさんはひきつれるような奇妙な笑いを浮かべて問いかける。

腹立たしさが一杯のあたしは怒鳴り散らしていた。

「悪いですか？」

喧嘩なら買いますよ！

今までまともに喧嘩などしたことは無いですが、めちゃくちゃ買いますよ。

そんなあたしの意気込みの前で、ルティアさんはつっと涙を一筋流した。

好きですよ。貴女が――元婚約者という立場の貴女が、今更あの人が好きだと言っても、あたしはもう引かない。

「あなたはあの方に相応しくない。けれど、あなたにあの方と共にいて欲しいのです」

はい？

「私は決して貴女を傷つけたりしません。できない……でも公も、あの方も私を許しては下さらない」

ルティアさんはふいに片手をひらめかせ、ついであたしはギョッと目を見開いた。

その手には銀の細長いナイフが握られ、そして彼女はそれを自らの首筋に押し当てたのだ。

「公に、エディ様を頼みますとお伝え下さいませ――あの方に咎が向けられませんようにと」

て、ちょっ、何それっ。

あたしは慌てて手を伸ばそうとしたが、それより早くルティアさんの背後から伸びた手がそのナイフをやんわりと押さえ込んだ。

「だから、年寄りの冗談を真に受けないように。ああやって時々底意地の悪いことを言っては遊んでいるだけなんだよ。エルだって断っただろう？」

「公っ。けれど私は引き受けたのですっ」

「――貴女が引き受けざるを得ないことなんてあの場の誰だって判っていますよ。けれどそうしないことを私は知っているし、あの年寄りだって心得ている。年寄りの戯言なのだから、そんな愚かな真似をしたら貴女のエルディバルトが謀反を起こしてしまうよ」

ふわりと微笑み、黒髪の青年は慈愛を込めてその額にそっと口付けた。

「貴女の心を疑ったこともない。気にしていないと言ったろうに」

「ですがっ」

「私の言葉が信じられないですか？」

ルティアさんがその腕の中で涙を落とし、あの男が背後から抱きすくめて優しく囁く。
その姿にあたしはぎゅっと自分の手を握りこんだ。

何より、今現在自分の胸の内をかけめぐるのは激しい苛立ちだ。
まったく意味が判らない！　どうしてこんなことになるのか理解できないし、どうして彼女がそんなに心を乱しているのかも判らない。
ここで怒鳴るのは物凄く大人気ないことだけは判るけれど、でも、それでも。
あたしはぎゅっと手を握りこんで、喉許にせりあがるものを必死に押さえ込んでいた。

抱きすくめられているのが自分でないことが。
その優しさを向けられているのが自分でないことがあたしの中でぐちゃぐちゃとめぐり、あたしは自分の醜さに顔を背けたのに、あの馬鹿男ときたらルティアさんをソファに座らせ「正餐の支度をしておいで。楽しみにしているから」とその前髪をかきあげると、ルティアさんはちらりとあたしに視線を向け、儚く一度微笑んで「ごめんなさい」の言葉を最後にふわりと大気に溶けて消えた。
面前で見せ付けられる魔法にも心が麻痺しているあたしは反応できなかった。

だって今のあたしときたらそれどころじゃないくらいの感情に翻弄されていたのだから。
苛々とぐるぐると駆け巡る根の暗い消化不良のものを抱えるあたしの前で、高潔と慈愛に満ちた男は途端に悪戯っぽく瞳を輝かせ、両手を大仰に開いてみせる。

「ぼくのことが好きだって言った？」

「言ってません！」

馬鹿っ。

不満と不安

「あれ、なんか……すごく、怒ってる？」
困惑を込めて呟かれ、あたしはぶちりと自分の中で何かがきれるような音を聞いた。

「そこに座りなさい！」
今回は床に座ったとしてもあたしの心は痛まない。あたしはびしりと指を突きつけたが、相手はまるきり理解できないという様子で眉を潜めている。

「確かにリトル・リィを無理やりこっちに運んだことは謝るよ。でも、一番手っ取り早いかなと思ったんだ。あの子ときたらいくらぼくが宥めても耳に入らなくて」
困惑のまま告げられる言葉が更にあたしの怒りを増幅させる。
何に対して怒っているのか？　そんなのあたしだってきちんと把握していませんよ。
ルティアさんがおかしい態度をとったとか、不可解なことを言われたとか、確かにそれは訳がわからないし説明を求めたい。
だが、今、あたしの腹部でぐずぐずとくすぶっているのはまったく別のものだとどうしてこの馬鹿は気付かないのだろう。

他の女性に触れるな、馬鹿。

額といえども口付けするなんてありえない。

判ってます。
判ってますよ――本当はあたしがそんな風に言うのは間違いなんだって。そう思うのだっておかしいことでしょうよ。

あたしは口元が戦慄くのを覚えながら、苛立ちのあまり左手の薬指に右手を伸ばし、必死にその指輪を引き抜こうと力を込めた。
しかし、呪いの指輪は骨に当たる訳でもないのに指にぴったりと張り付いて外れる様子がない。
無駄なあがきだと理解しているが、あたしは必死に引っ張った。
「リドリー」
「あんたなんて嫌い！　大っ嫌い！」
声に出した途端、あたしはじわりと眦に熱を感じた。

泣くな！　どうして泣くのよ、リドリー・ナフサート。こんなことで泣くなんてイヤだ。強く一人でたてるでしょうっ、リドリーっ。
あたしの剣幕に面前の青年は慌ててあたしの前に来ると、あたしの左手をやんわりと手のひらで包み込んだ。

「……判った。指輪ははずしてあげるから」
吐息交じりの言葉に、あたしは更に感情的になって力任せにその頬をひっぱたく。
「馬鹿っ」
「うん、ごめんね。イヤな思いをさせてごめんね。でも、ルティアは決して君を傷つけたりしないよ。もしその判断を誤ったとしても、決してぼくがそんなことはさせない。だからこそ……」
「傷ついたっ。傷つきましたよっ」
「え？　どこか痛む？」
あたしの言葉に慌てた男が真剣な眼差しを向けるから、あたしは悔しくて悲しくて唇をぐっと噛んだ。

――心が、痛い。

自分の中にあるのはただただ醜い嫉妬心だ。
自分勝手、エゴイスティックなどろどろとした浅ましいもの。

「イヤだ……」

嗚咽まみれの小さな呟きに、困惑顔の男が腫れ物にでも触れるようにあたしを引き寄せる。

「イヤ、もう、ヤだ」

「ぼくが考えなしだった。君をこんなに苦しめることになるなんて考えてなかった。

リドリー、君の――」

「他の人に触れたりしないでよっ」

引き絞る声が口からもれ出た途端、あたしはそれまで必死に耐えていたものが決壊してしまうのを感じた。

「どうしてあたしがこんな風に思わなくちゃいけないのよ？　あんたなんて大嫌い！　あたしを好きだって言う癖にっ、どうしてあたしの前で他の女性に触れるのっ。どうしてキスなんてっ……もぅっ、馬鹿っ」

吐き出される言葉に自分の中で熱があがったり下がったりしてしまう。

どうしてこんなことを言ってしまっているのかと慌てる自分がどこか遠くにいるのに、言葉はとりとめもなく恥ずかしい台詞を紡いでしまう。

怒鳴り散らしたあたしが、ハッと息を飲み込むと面前の魔術師は瞳を幾度か瞬きゆっくりと口を開いた。

「ごめん、どうしよう」

「なによ」

面前の男はどうして良いのか判らないというように声を僅かに震わせた。

「嬉しい」

言葉にした途端、普段は厚顔無恥な男はかぁっと心持ち顔を赤らめ、笑いを堪えるように自分の口元に手を当てて瞳を細めた。
「ごめん、なんか嬉しくて――どうしよう、にやける」
「なんなのよっ」
「ルティアは確かに元々婚約者だったけど、実際は妹みたいなもので。さっきの額のキスだって気を落ち着かせる為のちょっとした魔法を使ったんであって……うん、もう誰にもそんな風に触れたりしないから」
君が嫌がることなんてしない。
相手の言い訳を耳に入れながら、あたしは自分がどれだけ恥ずかしい台詞を吐いたのかじりじりとその羞恥が背筋をのぼりはじめるのを感じていた。
それってつまり、あたしは、大きな声で、
「すごく嬉しい！　ああっ、ぼくって君に言い訳しているんだよね？　嫉妬されてるってことだよね？」
「黙んなさいよっ」
言わないでよっ。
自分でも気付きましたよ。でかい声で嫉妬していますと宣言しているような自分があんまりにも痛すぎる。
ああもぉっ、馬鹿じゃないの、あたしっ。
「あああっ、リトル・リィ可愛いっ。もうむちゃくちゃ可愛い。どうしよう。ええ、どうなってるのっ」
ぎゅうぎゅうと抱きしめられてわたわたと慌てたあたしだったが、先ほどまでのどろりと渦巻いていた苛立ちがゆるりと解けるのを感じると、溜息と共に体の力を抜いて相手の胸に耳を押し当てた。
そもそもこの男も何を叫んでいるんだ。意味不明。

あたたかい体温と少し早い鼓動。
泣きたいくらいの安堵感とがあたしの体に満ちてくる。もう本当に腹立たしいのに。
頭に顎先がのり、その顎先が胸元に張り付いたままのあたしを弾いて顔をあげさせる。口付けされると判ったけれど、あたしは静かに目を閉ざした。

「いい？」

馬鹿みたいに断るから、あたしは目を閉ざしたまま相手の服を引いて唇と唇とを重ね合わせた。
――この人はあたしの唯一人のひと。
苛立つのも、辛いのも、あたしがこの人を好きだから。

あたしの胸が温かなもので満たされていく。ぎゅっと背中に回された手がやがて優しく背中をなぞり、ゆっくりと下方へと移動する。その手が執拗に体をまさぐるように腰から下へと移動していくと、あたしははたりと意識を引き戻した。
もう片方の手が背筋のくるみボタンをなぞるようにはずしていく。
「ちょっ、何してるの」
あたしが慌てて身じろぎして相手の胸を押すと、とろけるような微笑を湛えて「ごめん、脱がすのは慣れてないから手間取っちゃった。ああ、魔法で脱がしちゃえばいい？　でも、こういうのって脱がすのもある種の楽しみの一つだよね」
「……あの、もしもし？」
「寝台に移動したほうがいい？
えっと、一番近いとこどこかな。はじめてが寝椅子っていうのも刺激的かもしれないけど、やっぱりリトル・リィはちゃんとした寝台のほうがいいよね？」

あたしはそう言われている間にも背中のボタンを全てはずされ、はらりと手前にドレスがはだける感触に慌てて胸元を押さえ込んだ。
無理矢理着せられたコルセットが押し上げる胸が見えてしまいそうに感じ、羞恥が膨れ上がる。
「え、あ……」
かぁっと体温があがっていく。
むき出しになった肩口に置かれた手が滑らかにすべり、この場で相手をひっぱたくべきなのかどうか逡巡し――逡巡、し、首筋をなぞり鎖骨に触れる唇に小さな吐息を落として相手のシャツを掴んだ。

＊＊＊

「公っ、お戻りが遅いので心配致しました」
正餐の頃合に遅刻した主に、まるで世話焼きの乳母のようになついているエルディバルトさんの横、ルティアさんはいつも通りのメイド姿でぴらりとスカートの裾をつまんで可愛らしく軽く一礼し、
「お待ち致しておりましたぁ」
と、のほんっと微笑んだ。
それをあたしは一瞥し、どうにもざりざりとした気持ちを味わった。
今日起こった出来事など、まるで無かったかのように彼女は普段と変わらぬ彼女に見えた。それはあたしの中で消化不良を起こすように奇妙に引っかかる。

「リドリーさん、少しよろしいかしらぁ？」
「はい」
ルティアさんは普段どおりでにっこりと微笑み、ちらりと人生の不運を背負ったような不機嫌顔の痴漢を一瞥し、ころころと笑った。
「見事な手形ですわぁ」

「ソコ、突っ込むんだ……」
「突っ込むだなんて品がありませんわぁ」
「悪かったね。ふふふ、そうだよ。いいって言ったのに。どうせぼくは突っ込、ぐふぅっ」

根暗な低い声で笑い、ほうっておけば更におかしなことを口走りそうな男の足をがんっと力いっぱい踏みつけると、エルディバルトさんが目をむいて「何をするっ」と怒鳴るが、あたしは強気で睨みつけた。
「あーらごめんあそばせっ」
王弟殿下の第三子息サマだか知りませんが、所詮あなたは痴漢変質者の犬に相違ナシ。あたしは一度はその身分に驚愕したことも完全に忘れ去り、ふんっと鼻を鳴らし、ルティアさんの腕を引っつかんでその場を離れた。

口付けも、触れられることも不快じゃない。
ただ、自分がまるで急激に変化していくことにココロが追いつかない。
今でさえこんなに自分が醜い嫉妬心を持っていることに驚いているのに。もしこの人を真実手に入れてしまった時、あたしはどれ程酷く醜い生き物になってしまうのかと不安なのだと、誰かに言えば笑われてしまうかしら。

女の友情と男の実益

「さぁ、話とやらをどうぞ」
あたしは柱の影に来ると、くるりと身を翻して仁王立ち。
彼女のおかしな様子はすでに無いが、ルティアさんはくすくすと笑った。

「まずは、お騒がせ致しましたわ」
「ええ、随分なお騒がせでした」
「私の落ち度として全て謝罪いたします。申し訳ございませんでした」
さぁ説明して下さいませ。
どうしてあんな騒ぎになったのでしょうか。
「ですが貴女に説明することは適いませんわぁ」
「あたしに説明できないことで喧嘩売られた訳ですか」
あたしはゆっくりとした口調で問いかけた。
「そういうこともありますのぉ」
「で、この騒動はあたしの感知する場ではないところで終わった訳ですか？」
ゆっくりとした口調で言いながら、けれどあたしは苛立ちを覚えてはいなかった。
何故なら、彼女がやけにいつもと変わらぬ様子だったから。
一から百まで説明を求めるのは無理なのだろう。そもそも彼女とあたしとでは立場が違う。ただ理解しているのは、彼女は暴言を吐いたけれど、おそらくそれはあたしへの悪意ではない。
――竜公に相応しくない。
そんなの、誰よりあたしが一番知っている。

けれど、相応しくない理由が「あの人の心を乱すから」なんて上等な理由じゃないですか。
そして、何よりあたしがこの人に反発したのはあたしがずっと疑っていたからだ。
「ひっぱたいていいですか？」
あたしは手首を振りながらひたりとルティアさんを見た。
一般庶民リドリー・ナフサートとはまったく違う場にいる姫君に。

ルティアさんは瞳を瞬いたが、一つうなずいた。
「手加減はいりませんわよぉ」
ルティアさんが応えて目をつむると、あたしは力いっぱいその頬を張り飛ばした。

小気味良い程の音が響く。
いいといった癖に本気で叩かれたことに驚いた表情の姫君は、唖然とあたしを一旦見つめた。
「じゃ、ルティアさんも一発どうぞ」
あたしはひりひりと鈍く痛む手を撫でながら言った。
「はい？」
「あたし、ずっと心のどこかでルティアさんはまだあの男に未練があるんじゃないかって、やっぱり思っていたと思うんです。だから、あたしもあの台詞に逆上しちゃいましたけど、でも、ルティアさんが言いたかったことって違いますよね。あなたは、あたしにあの男と共にいて欲しいって言ってくれた」
あたしは自分の頬をそっと撫でた。
「あたしとあの男がいることで、貴女にとって何か障りがあるんでしょう。自分の命を投げ出すくらいなこと。あたしにはまったく判らないけど。でも、あなたが自分の全てを投げ出すような理由なんて、本当はどこにもないですよ」
ああ、本当に意味が判らない。

もっと強く言えばきちんと話してもらえるのかもしれない。けれど、頭を下げられた以上のものを求めるのはばかげている。相手は言いたくないのではなくて――言えないのだ。ただの庶民の娘とは違くて、彼女には彼女の場所があって。それをあたしはきっと理解できない。

判らないけど、自分の命と引き換えにして何かを守ろうとしていたということだけ知っていれば十分。その守ろうとしたものの中には、エルディバルトさんと、そしてあたしも入っていたのだと思う。勝手な思い込みだけれど。

「だから、あたしも後ろめたい気持ちのままはイヤですから、どうぞ一発」

あたしの言葉に、ルティアさんはしばらく不可思議な顔をしていたが、やがてくすくすと笑い「では覚悟なさいませ」とその手をひらめかせた。

パシンっと乾いた音と共に痛みが走り、ほんのちょっと自分の中に後悔が生まれる。

思い返せば今まで生きていて張り手を受けたことなどただの一度も――あれ、あったか？　あたしはふとよぎった思いに眉を潜めたが、とりあえずそれは頭の隅に押しやった。

そもそも喧嘩する程仲の良い友人などいなかったし、あの男は今まであたしに手をあげたことは無い。手を出そうとしたことは何度もありますが。それとはまったく話が違う。

目をあけて、これでおあいこという言葉を告げようとしたところでルティアさんがその場で膝をついていることにギョッとした。

「私はただの女です。騎士でもなく、力あるものでもありません。

けれど、リドリー・ナフサート様。私は決してあなたの害になるようなこと、意に沿わぬことは致しませんと誓います。どうぞ、末永くその言葉をお納め下さい」

ぎょっとして怯んだあたしは、慌ててルティアさんの腕を引いて立たせた。

「なんですかそれっ」

「受けては下さいませんの？」

「……まるで臣下みたいでイヤです。友達では駄目なんですか？」

「友達？」

「友達です。友達って、裏切ったりしないものでしょ？　それだけでいいじゃないですか」

慌てるあたしの言葉に、幾度も友達という単語を舌の上で転がし、ルティアさんはふわりと微笑んだ。

「素敵ですわねぇ。私、友達は初めてですわぁ」

「はじめて？」

「ええ！　ドレスを引き裂いたり、ネズミの死骸を送りつけたり影でこそこそ言う方なら幾人か知っておりますけれど。そういうのは友達とは言いませんのよねー？」

気付いてないと思っているみたいなのですが、私ってばそういう人のねちっこい部分を調べるの得意ですのよぉ。と実に楽しそうに言葉が続いているが、あたしは言葉すらない。

間抜けにもぽかんと口をあけてじっとルティアさんを見つめてしまった。

「嫁遅れとか、出戻りとか！　体で男を誑かしたとか！」

嬉しそうに垂れ流される言葉の羅列にあたしが目をむき、

「誰がそんな誹謗中傷をっ」

と思わず声を荒げたのだが、ルティアさんはころころと笑って少しだけ赤くなった頬を撫でた。

「全部事実ですのよー」
小首をかしげるメイドさんは実に可愛いらしい。
「……」
「十六で嫁ぐことも当然の王宮ですものぉ。二十四歳で嫁がない淑女はほぼいませんのよぉ。婚約者、元婚約者の許から義父のところに戻ったのも事実ですしぃ。体でエディ様を誑かしたのも事実ですのよー」
しかも彼女はその全てを、むしろ誇らし気に瞳をきらきらとさせて口にした。
「確かにあの時エディ様には婚約者はいませんでしたけど、エディ様を狙っている女性は一杯いましたのぉっ。無駄に産まれただけは良いですから。人間的にアレでも地位とか財産に群がる方って一杯いますのよぉー。だ・か・ら、私、さっさとエディ様の上に――」
はい止めて下さい。こんな廊下の片隅で生ぐっさいというか、なんというかな話止めて下さい。それに、エルディバルトさんの話は食事の進みが悪くなります。せっかくお腹がすいているのに、減退させないで。
あたしは乾いた笑みを浮かべ、ルティアさんをしげしげと見つめた。
「本当にエルディバルトさんが好きなんですね」
「だってエディ様より可愛い方なんていませんわよぉっ」
幸せそうにエルディバルトさんを語る彼女を見ていると、本当にどうしてあたしはこの人が未だにあの男を好きだなんて馬鹿げたことを思ってしまったのだろうと不思議でならない。
「リドリーも公がお好きでしょう？」
ふっと声のトーンをかえ、あたしの腕に抱きついて歩き始めたルティアさん――いや、ルティアが蕩けるような微笑で囁く。

あたしは呼び捨てにされた名と、言われた言葉に少しだけ動揺しながら小さく、まるでナイショ話をするように囁いた。
「――嫌いなんて、言っていませんよ」
「あら、往生際が悪いですわぁ」
クスクス笑うルティアさんの額に自分の額を寄せるようにして、あたし達はクスクスと笑いあった。

＊＊＊

「ルティアっ」
蒼白になって叫んだのはエルディバルトさんだった。
重厚な二枚扉を使用人が開けてくれ、その間をルティアに腕に抱きつかれた状態で通ると、中にいた男性人がすっと立ち上がる。
一番奥にいたのは神官長の正装をした男で、反対側――扉側の側面に立っている男はエルディバルトさん。
座っているのはアマリージェだけで、アジス君もきちんと正装させられ、席を立っている。
エルディバルトさんはあたし達が遅れたことに対して不満そうな様子を見せたが、ルティアさんの頬が赤くなっていることに気付いた途端、動揺してあたしを突き飛ばさんばかりの様子でづかづかと近づいた。

「この怪力暴力女に何かされたのか」
誰が怪力暴力女だ。
むっとしたあたしだったが、背後からすっと二の腕をとられて促される。
「エル、口が過ぎる」
「しかし、公っ。ルティアはもとはといえば――」
口惜しそうな様子で言葉をとぎらせるエルディバルトさんに嘆息して見せて、困った子だねと呟くとあたしの頬に触れ、ついで唇を

押し当てた。
「――もう、痛くない？」
すっと引いた小さな頬の痛みに、あたしは引きつったままうなずいた。
なんというか、ある程度は理解しているつもりだし、納得しているつもりなのですが、魔法といわれるよりペテンといわれるほうが納得しやすいお年頃ですみません。
「ルティア」
と、ルティアにも声を掛けた魔法使い――わかりました、もういいです魔法使いで――はそっと左手を差し向けようとしたのだが、ふとその手を止めた。

「あ、でも触ったら駄目なんだ」
それまでの落ち着いた物言いをころりと変えて、まるきり阿呆丸出しでふにゃりと表情すらだらしのないものにかえた。
「リトル・リィがね、他の女の人に触っちゃ駄目って言うんだよー」
そのあけすけで阿呆くさい言葉にあたしは内心で悲鳴を上げた。

「ぼくが触りたいのは勿論リトル・リィだけだっていうのに。でもそういうとこがもう本当に可愛いよね」
「まぁ」
ルティアさんが明るく声をあげ相槌をうてば、調子にのったあんぽんたんは滔滔と言葉を落とす。
「イヤなんだって。すっごい可愛く涙目でイヤだなんて言われたら、やっぱりそれは……」
あたしがわずかに肩を震わせていることなどおかまいなしにべらべらと阿呆な台詞を吐き続け、ふいにぱちりと指を鳴らした。
ルティアが小さく「あら――」と呟き、ついで微笑む。
「ありがとうございます」
「ふふふ、どういたしまして。じゃあ、食事にしようか？」

さらりと流されたが、あたしは小刻みに怒りに震えながら、ある予想を元にルティアに話しかけた。
「ルティア」
「何ですのー？」
「頬、痛みなくなった？」
「ええ。もう平気ですわ」
「そう――そう。やっぱりそうなんだ」
あたしは低く呟くと、あたしをうながす男へとにっこりと微笑みかけた。

「いちいち触らなくても口付けしなくても魔法使えるじゃないの！」
にっこりと笑って次の瞬間、あたしはそれはそれは恐ろしい鬼のような形相になっていたことだろう。自分からは見えないので知りませんけどね。
「それは当然趣味と実益を兼ねてます！」
「開き直るなっ」
あたしの怒鳴り声に、けれど相手は楽しそうに笑ってエルディバルトさんに向けて手を払った。

「食事にしよう。エル」

何故かぐったりしていたアジス君がぱっと喜色を浮かべてみせるから、あたしはとりあえず言葉と拳とを収めて吐息を落とした。
なんだか怒りっぽいのは、きっとお腹がすいているに違いない。

ｗｅｂ拍手お礼小話つめつめ（６）

マイラは自分の人生の中でこれほど驚愕したことはない。
自分の孫が騎士になると騒ぎ出したことも、その孫のために領主館の姫君が教鞭をとってくれていることも驚いた。
　自分のパン屋の従業員が神官長と付き合っている（付き合ってない）のも驚いた。

だがこれ程に寿命が縮まるような驚愕を覚えたことは無い。
「やめてくださいましよっ」
悲鳴のように言うのだが、相手はさわやかに微笑を湛えた。
「いいんですよ。体を動かすのは良いことですね。とても楽しい」
「ご領主さまっ、あたしは一人で大丈夫ですったらっ」
「でも人手は足りないのですし、マリーにも言われているから」

【うさぎのパン屋】で働いている御領主様の姿に、若い娘さんの来店率五倍アップ！　リピート率１００パーセント。

マイラの寿命は三年マイナス。
……御領主様、ウサギのアップリケ付きエプロンがたいそうお似合いです。

＊＊＊

「姫さまっ、あの建物は何だ？」
　姫様、と呼ぶ癖してアジスの口調ときたら遠慮が無い。それをいちいち諫める気もなく、アマリージェは列車の窓から見える景色に意識を向けた。
　きらきらと瞳を輝かせて好奇心いっぱいの子供は微笑ましい。

まったく子供ね！
　アマリージェは多少馬鹿にしながら言われた方向を見た。
列車は未だ走り出していない。場は聖都――これから竜公とリドリーとを迎えに行くのだ。
そもそも迎えなど必要ないし、邪魔してはいけないと思うのだが、エルディバルトが硬い表情で行くといっているので、それならばと便乗することにした。アマリージェだとて列車などはじめてなのだ。
　だがアジスの手前そんなことは絶対にいえない。
「あれは……」

何かしら？
やたら華美な建物だ。屋根も赤いし少しけばけばしい。
小首をかしげて眉をひそめたが、アジスが「何だよ、知らないのかよ？」と言ってくる。むっとして「知っているわよ！」と言い返し、けれどその建物が判らなくて、ここは適当に言いくるめてやろうと口を開きかけると、アジスはニヤリといやな笑いを浮かべた。
「娼館だよ、屋根が特徴的だろ」
「……何です？」
　得意気にアジスが言うから、アマリージェは唇を尖らせた。
「知らなかっただろ。やっぱ姫様だよなーっ」
「知っておりましたわよ！」
「ぜってー知らなかったろ」
　知っている知らないの騒ぎになり、アマリージェはぶちりと切れた。

「知ってますわよ！　娼館ですわよっ、娼館！」

大きな声で怒鳴りつけると、丁度車両の継ぎ目の扉を開いてやってきたエルディバルトと、そして彼の部下と思われる幾人かの男達が

ぎょっとした様子で足を止めた。

「アマリージェ……」

「なんでございます！　エルディバルト様もわたくしを馬鹿になさいますのっ？」

フーフーと肩を怒らせるアマリージェに、エルディバルトは眉間にしっかりと皺を刻みこんで言った。

「おまえだけは信じてたのに」

「どういう意味ですか！」

――ルティアは二人いらない。

＊＊＊

「まったくもって度し難い！」

アジス少年を送り届けに来たユリクスは、まるで自らの家のようにジェルドの私室で勝手にキャビネットからブランデーとグラスとを引き出し、手酌で注ぎ始めた。

「あの馬鹿婿ときたら」

「はぁ……えっと、何か食べるものでも用意しましょうか？」

その酒は次の誕生日にでも飲もうと思っていたものだとか、おそらくユリクスには関係がないだろう。

ジェルドはちょっとだけ切なかった。

「何かつまみがあるかね？」

「あ、いいものがありますよ」

とりあえず来てしまったものは仕方が無い。ユリクスは神殿官という役職だが、神官ではないので酒は飲むし女性も好きだ。だが神殿と王宮との板ばさみで色々と気苦労もあるだろう。

「今日私が作ったパンです！」

いそいそとパン屋で作ったパンを差し出すと、ユリクスは狐につままれたような顔をした。
「何故パンなんだ？」
「今日はパン屋さんで働いていたので」
「……」
ユリクスは鎮痛な溜息を吐き出し、額に手を当てた。

頭の中で二人の男が並んだ。
馬鹿婿エルディバルト。そして出世の見込みなど欠片もない地方領主ジェルド。

「世の中嘆かわしいっ――どこかに良い婿はおらんのかっ！」
「ユリクス様？」

ジェルドさん、婿候補にはなれないようです。

＊＊＊

オペラグラスは便利なものだ。
アマリージェは聖都で幾度かオペラを見たことがある。ルティアが連れていってくれたのだ。だからその時に高価なオペラグラスもルティアから貰っている。
高台に作られている領主館からは町の様子がよく見えた。
とくに【うさぎのパン屋】は角にあるし、前は開けたとおりだから良く見える。といったところで肉眼では少々難しいのだが。

「あの子供は何をしていますの！」

パン屋の前でへらへらとしながら女性に頭を撫でられている若干十一歳を発見した。

「えっとマリー……プライバシーって言葉を知ってる？」
「未来の騎士を正しく導く為に必要なことなのですっ」
愛らしい妹の剣幕に兄は降参するように両手をひろげ、乾いた微笑を浮かべた。

「そう、かなぁ……？」
「そうなのです！」
「そうか、うん、そうかな」

兄さま納得しちゃ駄目だ！

＊＊＊

花を……花を摘んだ。
川辺にある何の変哲もない花だ。黄色い名もないような野辺の花。
ぱっと、彼女が浮かんだ。

「わっかんねぇ」
と、友人が笑う。
「ティナのほうが可愛いじゃんか」
その言葉にムッとした。ティナは確かに可愛いけれど、リドリーが時々困ったように、どこか居心地が悪いように笑う時の可愛さは異常だ。
皆はそれに気付かないだけだ。いや、気付かなくていい。
俺だけが知っていればいいのだから。

花をつんで、彼女の家を訪れた。
きっと喜んでくれる。彼女はこんな些細な花でもきっとはにかむように。

「リドリーっ」
声を掛ければ彼女は手元の花を一瞥して、そして、
「ティナっ、マーヴェルがお見舞いに来てくれたみたい」
「――」
そうじゃない、そうじゃない、そうじゃなくて……っっっ。

＊＊＊

「毎日毎日本当に腐る程花をありがとう！」
勿論、嫌味だ。

アパートの螺旋階段で毎朝決まって魔術師がトップハットから花を引き出す。
時にはステッキのときもあるし、時には手をひらめかせる時だけのこともある。
悔しいけど、種はちっとも判らない。

さらに気になるのは、突然飛び出すハトやうさぎはいったいどこにいってしまうのか？　だがそのことをまったく気にしない魔術師は、毎朝毎朝花をくれる。

「どういたしまして」

どういたしましてじゃない。
「ずっとずっと君に花を贈りたかったんだ。それでもって、それがやがては指輪にかわるんだよ！」
何が指輪だ、阿呆らしい。
そもそもずっとずっとも何も、初対面から花攻撃じゃないかこの阿呆め。

妄想大爆発なあんぽんたんを無視して、あたしはそれでも毎日毎日花を受け取る。

だって……花を貰うことは本当はとても嬉しい。

子供の頃、花といえばティナの元に届けられる花をうらやんでばかりいた。

本当はわかってる。ティナは病気なのだから、その心を和ませる為に皆が花を贈っていた。それをうらやましいなんて、意地悪だ。

でもこの花は、あたしへの花。

魔術師がからかって贈ってるのだとしても、この花は、あたしへと贈られた花。

あたしは今日もバスケットに花を入れてパン屋に出勤しながら、その一輪を指先で弄んだ。

たとえそれがあの変態魔術師からであろうとも、花に罪はないのだ。

……そう、花には罪はない。

＊マーヴェルを書くと切なくなるのは、これはもしかして恋かしら。

＊＊＊

「ユリクス様」

御領主様の屋敷の門前で、アジスは思いつめるように顔をあげた。

「何だい？」

「明日、また聖都に行っていいですか？」

年上の相手に対する礼儀を最近身に付け出した少年は、真面目な表情で言う。それを茶化すように、ユリクスは口元を緩めた。

「君には聖都は刺激的だったかな」

「そんなんじゃなくてっ。あの……姫様。アマリージェ様は、あちらに幾日かいるつもりなんですよね？」
「どうだろうね。明日こちらに戻るかもしれないし、幾日か泊まることになるかも知れない」
正直に言えば、少年は更に生真面目な表情でユリクスを見上げた。
「一緒にいないと、心配だから」
それは多少の照れもなく吐き出された言葉で、ユリクスのほうが居心地が悪くなった。
思わず少年を見つめ、
「アマリージェにはルティアがついてる。ルティアはあれで結構しっかりしているんだよ。そうは見えないかもしれないけれど」
「オレ、騎士になるんだ」
ユリクスの言葉など聞かぬ気に真面目腐って言う。
「――大人になったら、姫様の騎士になるんだ。姫様をオレが守ってやるんだ」
続けられた言葉の意味に、ふっとユリクスは微笑み、
「アジス君は立派な騎士になれるよ。随分年齢が開くがうちのルティアの婿に来るか？」
――13差など気にするな！
アルジェス、逃げとけ。
＊＊＊
「はっぴー・はろうぃーん」
ルティアは三角帽子と黒いドレス。ついでに箒という姿で。そしてその隣のアマリージェは同じく黒いドレスに黒い猫の耳と尻尾とを貼り付けてリドリーの前に登場した。

「うわっ、可愛いですね！」
「ふふふ、リドリーさんも着替えましょう。魔女がよろしい？　それとも狼が良いかしらー？」
きゃいきゃいと三人娘が騒ぐ横、無骨ででかい騎士が通りかかるが、無視された。

「狼の尻尾も可愛いですわね」
「かぼちゃのランタンも持ちます？」
着替えがすめばハロウィン娘が三人。

その横を騎士が通りかかるが、それも無視。

さすがにそれが三回も続けば、リドリーは乾いた笑いで「エルディバルトさん、構って欲しそうですよ」と促してみた。
その言葉にルティアは満面の笑みで、次に通りかかった騎士に向かった。

「トリック・オア・トリート！」
ぱっと騎士が笑いたいのか笑いたくないのか複雑な表情を浮かべつつ、用意してあった菓子の包みをルティアに差し出した。
「お菓子はいらないので悪戯しまーす！　では皆様ご機嫌よぉ」
がしりと騎士を引っつかんでホホホと消える魔女の姿に、アマリージェとリドリーは顔を見合わせた。

「仲良しですね？」
「仲良しですわね」
アマリージェの言葉には物凄く呆れが含まれている。
「ちなみに、騎士と一緒にじぃっとこちらを見ていたあの黒い粗大ゴミもどうにかしてくださいませ」
「いや、あれは罠だから」

見えませんよ、見えませんったら！

＊＊＊

一番はじめの船はカヌーのような小さなものだった。
「自在に操れるようになったら、もう少し大きなものにしてやるよ」
父親の言葉に俄然はりきったが、生憎と結果は散々なものだった。
あやつるどころか、その船は川の底に沈んだ。

「マーヴェル、大丈夫？」
そう言うリドリーのほうがちっとも大丈夫そうじゃない。
不安そうにしながら青ざめた顔で岸辺から見てくる。
「へい、き……」
言いながら開き直って泳いで岸まで戻ると、リドリーは小さく息をついた。
「ティナを乗せなくて良かった」
ティナが乗りたがっていたのは知っている。だが、今日ティナはいなかった。まだ寝込んでいるのだ。ティナが寝込むとリドリーは家からあまり出てこない。それをやっと引っ張り出したのに、リドリーは相変わらずティナのことばかりだ。
うんざりする。

「手、貸して」
川の中から言うと、リドリーはおそるおそるというように手を伸ばして来た。もう片方の手は無駄に雑草など掴んでいたけれど、俺は水の中からリドリーの手を引っつかみ、勢いを付けてリドリーを引っ張った。

「え、ええっ？」
奇妙な声のあとに悲鳴がほとばしる。雑草が土ごとぼこりと抜けて、リドリーは水の中に落ちた。

「まぬけーっ」
「マーヴェルっ、ひどいっ」

ほんの遊びだというのに、リドリーは傷ついたような顔をした。
とても、とても……
必死に泣くのを絶えるように。

それから乗る船はどんどんと大きくなり、そのたびにリドリーを誘った。いつの間にか健康になったティナが乗るようになると、まるでお役ごめんとばかりにリドリーは船に乗らなくなってしまった。
不安定な船の上、水に落ちるのではないかとマーヴェルにしがみついていたリドリーは激しく可愛かったのに。いつもいつもリドリーの顔は泣きそうで可愛かった。
「マーヴェル、酷いっ」

本当に可愛い。

＊＊＊

「違うんだよ、ちょっとからかっただけなんだよぉぉ」
うーっと低く唸りながら机の上で突っ伏す友人の寝言に、
「おまえだからいい加減に止めとけって」
酒、飲みすぎ。と忠告をしたが、がばりと体を起こしたマーヴェルはその勢いのままにオレにすがりついた。
「愛情の裏返しなんだっ」
「気持ち悪いって！」

「大好きなんだよー」
「酔っ払ってるんです、酔ってるんですよ！　違います、違いますからねっ」
酒場の中に謎の緊張がめぐり、俺はもう必死で怒鳴ったが――信じてもらえない場合、こいつを海にでも沈めていいだろうか。

＊＊＊

「船は苦手です」
乗り物についての話だった。列車の速さに「すごいねー」などと言っていた時に、どんな乗り物が好きかと言われたのだ。
「馬車は短時間ならいいですけど、一日乗るとお尻痛いですよ。ロバは乗ったことがあるけれど、歩いたほうが早いですし。馬はいまのところ無いです。船は身近でしたが、実はあまり好きじゃないんですよ」

「あら、嫌いですの？」
アマリージェが小首をかしげる。
「船は水の上だから、嫌いなんですよ」
「泳げませんの？　まぁ、わたくしも泳げませんけれど」
コンコディアは山間ですからね。
アマリージェは人の視線があるような泉などで泳ぐなど到底無理だろう。

「――幼馴染が船長の息子で、ある程度の年齢になると自分の船をもって幾度かのせてくれたんですが」
物凄く揺れるんですよねー
あたしは眉間に皺を刻んで溜息を吐き出した。

はじめはカヌーのようなもの、あれは乗る前に沈んでしまったが、そのあとはガレー船のようなものになり、乗れる人数がどんどんあがっていく。それを操るのもマーヴェルはうまくなったものだが、乗せてもらうたびに激しい揺れにマーヴェルに必死にしがみついて落ちないようにすがりついたものだ。

怖くて。

マーヴェルは楽しそうだったが、とても怖かった。

今ではマーヴェルは商船を操るが、十三歳程度の頃にはもう絶対にマーヴェルの船には乗らなくなった。誰かが言っていたのだ「リドリーが乗る時は決まって難しい海路や流れの速い川にしてる。あれは絶対にわざとだよ」と。

あの頃から本当は嫌われていたのかもしれない。

思い返せばわざと川に落とされたりもした。

ティナの時は絶対にそんなことはしなかった癖に。

苦い思い出に溜息が漏れた。

「リドリー？」

「船は……苦手です」

あーやだやだ。いやなことは忘れるに限る。

「大きな客船でしたら怖いことなんてありませんわよ？　今度一緒に乗りましょう？」

「外洋船でしたらよいものがありますわよー？　うちのお養父さまが他国に行くときに使う船ですわ。揺れませんわよぉ？」

いや、だからもう船はいいです。

却下。

微妙な食事と逃れえぬもの

ばふりと寝台に身を投げ出して、あたしは大きく息を吐き出した。

用意された食事は文句のつけようがない――なんていいませんよ、文句言いまくりたいです。どうしてああ貴族サマが食べる食事というのはボリュームが少ないのか！　ほんの一口二口だけで幾つも幾つも幾つも幾つも出すな！　時間ばっかり掛かるではありませんか。せっかくソースが美味しい。とか思ってもたかが二口で食べ終わってしまう前菜やシチューやら何やらって、もうなんであんなに苛々させられるのか理解不能としか言いようが無かった。

何より食事中ときたらホスト役のエルディバルトさんはご主人様のお世話で涙ぐましいというかかいがいしいというか……

いいのかな、王弟殿下第三子息サマはそれでいいのかなと見てみぬふりを貫くあたしと、何故かうっとりと「エディ様可愛いぃ」と興奮しているルティア。それ等を完全無視してあたしの食事の世話をやく変質者と、更にそれ等全てまるっとまとめて背中をむけ、「見てはいけません」と、ひたすらアジス君にテーブルマナーを教えるアマリージェがいました。

一般人は完全立ち入り禁止です。

最後のデザートに出されアイスクリームの添えられたアップルパイは物凄く美味しかったです。

「俺！　俺作ったのっ」

と、嬉しそうに言い出したアジス君にあたしは驚いたが、そもそも彼はパン屋の孫息子。手伝うこともあるのだろう。料理上手の男はポイントが高い。

「すごいねー」

とあたしが言うと、アジス君は照れくさそうに笑い、ぼんくら様は「リトル・リィの得意な料理は何？　ぼく、食べてみたいなぁ」と言うものだから、あたしはにっこりと応えてやった。

「目玉焼き」

「――」

「ベーコンエッグ」

終了です。

あ、サラダも作れますよ。野菜を洗ってちぎっただけで宜しければ。

「リドリーは確か一人暮らしですわよねぇ？」

無邪気なルティアの問いかけに、あたしはあくまでもにこやかにうなずく。

「マイラさんとこで売れ残ったパンを頂いて、たまの贅沢でベーコンを添えたりして生きてました」

とりあえず一年きっちり生きられましたよ。問題はありません。

「――りょ、料理はしなかったのかなー？」

引きつった変態に、あたしは更に微笑みを向けてやった。

「今度がんばるから是非食べてね！」

まったく自信はありませんよ。ええ。欠片もね。マイラさんの最終兵器よりも素晴らしいものを作る自信ならあります。味見も自分でするのは怖いので是非食べてみて。

何があろうとも一切の責任はもちませんけどね。

「リドリーもお嬢様だもんなぁ」

アジス君が言う言葉に肩をすくめた。

「そのつもりは無いけど。でも――一人暮らしの前はやっぱり食事は料理番の人が作っていたから……自分ではできないんだよね」

「あ、でもパンは作れるんだよね」

思い出したように変態が勢いをつけて言うが、

「それだってこの間の豊穣の祭りの時にはじめて成型だけしたの。

あたし、パン屋さんではただの売り子さん」
相変わらずにこやかに応えてさしあげました。
――女だから料理ができるなどと思っていたら痛い目見せますよ……。
パンに関しては、びしばしパン生地をこね回したけれど、それだってパンを作るという意味合いとはちょっと違うような気がするのです。
ある種の憎しみと憂さばらしの意味合いを込めて叩いて投げつけていただけですからね。
誰に対する憎しみだったかはあえて言うまい。

「リトル・リィ。あっちに戻ったらぼくの家にご飯食べにおいでよ。毎日美味しいもの用意させるから。ね？　ちゃんと食べないと成長するところだって成長しないよっ」
焦るように言う男の成長の意味を無視して、あたし達はそこそこ楽しく食事をすませた。
おそろしく最低限な感じの楽しさでした。
もう二度とこのメンツで食事はすまいと誓ってみました。
エルディバルトさん抜きで変態もいなければきっともっと楽しかった。間違いなく。

「明日、昼前に迎えに行くよ。それでお母さんともう一度話し合ってから転移扉で一緒に帰ろう」

そう言って送り出され、あたしはアジス君とアマリージェと一緒にまたしても馬車に乗り込んで母の屋敷に送ってもらったのだ。
思い返せばどたばたと忙しないこの数日間だったとしんみりとしていたところで、アマリージェが思い出すように口を開いた。
――せっかくこちらに来たのに、リドリーは観光してないのではありません？
と。

「まだ休みはありますでしょう？　明日は舟遊びなど致しません？」
「舟遊び？」
「聖都は水の都でもありますの。聖都全体を幾つもの水路が走っていますのよ。ですから、観光で船巡りとかしてから帰ってもよろしいのではないかしら？」
アマリージェが楽しそうに提案する言葉に、アジス君が顔をしかめて唇を尖らせる。
「船反対！」
「あら、いいじゃありませんの」
「俺はイヤだ」
ふんっと鼻まで鳴らして言う少年の様子に首をかしげつつ、あたしも苦笑した。
「船ですかー」
「あら、お嫌いですか？」
「嫌いというかーー」
苦手なのですよ。
あたしは視線を落とした。

何といっても、あたしの元婚約者といえば船長（ふなおさ）の息子。あたし自身幾度かその船に乗った記憶がある。
だがだからといってここで「船いやー」とか言うのは大人気ないとしか言いようが無い。
それに、船長といったところであちらは海主体の運送業。観光とは無縁だろう。
「じゃあ、明日の午後に」
アマリージェと簡単な約束をすれば、アジス君が不機嫌そうにしている。
「アジスはイヤでしたら無理に来なくても宜しいですわよ？」
「行くよ！」

ふんっと横をむいた少年の様子がわからずに、あたしはこそこそとアマリージェの袖を引いた。
「なに？　何か怒ってるみたいだけど」
「さぁ……午後に船の予約を入れておきますね。あの方がお迎えに行った後で待ち合わせる形で宜しいですわよね？」
「話し合いに時間が掛かるかもしれないけど」
あたしは曖昧に言葉を濁したものの、アマリージェは「平気ですわよ」と穏やかに微笑んだ。
「何だかんだと言っても、あの方は自分の好きなようにしてしまいますから」
――それは、よくないよね？
アマリージェはあくまでもさらりと言ったが、ある意味問題発言だと思う。

不機嫌そうにしていたアジス君だったが、それでも馬車が母の邸宅に付く頃には自分の機嫌と折り合いをつけたように溜息をついてあたしとアマリージェの会話の中に紛れ込んでいた。
「明日の午前中はエルディバルト様が厩（うまや）を見せてくれるんだ。騎士を目指すなら馬にも乗れないといけないって」
俄然張り切っている少年を、アマリージェが多少呆れるようにして見つめている。エルディバルト様を見本にして欲しくないと小さく呟いた言葉はナイショにしておいてあげようと思う。だってあたしもそう思うし。
馬車が母の邸宅の屋敷内に入り、ゆっくりと速度を落として停止する。完全に止まったことを確認すると、アマリージェによってしっかりと躾けられているアジス君は一番先に席を立って出入り口を開くと、とんっと地面におりてステップを引き出してあたしに手を差出した。
「気をつけろ」
言葉遣いはいつものままだが、さすがなんだか男前。

あたしは苦笑をこぼしながらアジス君の手をかりて地面に降り立った。と、ふと思い出すようにアジス君は言ったのだ。
声を潜めて。
「そういえば、リドリーの妹ってここに住んでるのか？」
ぽんっと出された問いかけに、あたしは心底驚いて振り返っていた。
「いないけど……」
いないどころか、あたし、ティナのことをアジス君に言ったか？
「そっか。それは良かったな」
アジス君はうんっと大きくうなずいて、引き出したステップをがんっと蹴って元の場所に戻すと勢いをつけて馬車に乗り込んだ。
「じゃ、またな」
「おやすみなさいませ」
にこやかにアマリージェの声が奥から聞こえ、アジス君が自ら扉をしめながら御者へと声を掛けていたが、あたしは食い入るようにしてアジス君を見つめてしまった。
――良かったな。
……それは、どういう意味？
あたし、アジス君にティナのことを話したっけ？
それより、どんなことを話したっていうの？
どくどくと早鐘をうつ心臓を押さえるように胸元を掴み、もう片方の手であたしは宙をかいた。
「アジス君っ」
かすれたような声は弱く小さく、馬車の走り出す音に掻き消えて――あたしは呆然とその姿を見送ってしまった。

あたし、子供相手にティナの愚痴とか言った？
あわただしく思考が巡るけれど、生憎とあたしはその時のことを思い出すことができなくて、泣き笑いの顔でふるりと首を振った。
どこかでうっかりと妹の話をしてしまったのかもしれない。アジス君は随分と年下だけれど、なんだか頼れる男みたいで、あたしはぽろっとぼやいてしまったのだろうか。
なんだか釈然としない気持ちのまま、あたしはその日ばったりと寝台の上に身を投げ出したのだった。

求婚と告白

なんだかもやもやとするものを抱え込んだあたしは昨夜あまり眠れなかった。

船とか妹と言う単語が重なりすぎてしまったのかもしれない。

これらの単語はある種の動悸・息切れ・眩暈などの作用をあたえ、更には不眠さえももたらすのかもしれない。あたし限定で。

――嫌いじゃないと思いたい。

けれど、あたしの本能が拒絶しようとする。どうしても嚥下することのできない不自然なものとしてあたしの中に居座るのだ。

朝の身支度を整えたのは、いつもより遅い時間だった。おそらく明け方近くにやっと眠れたのだろうけれど、今日は午前中にアレが来ると言っていたのだから悠長に寝ている場合ではない。寝ている間に母と二人で放置するなどあたしの胃に穴があく。

あたしはそのまま帰れるようにと一番質素なドレスを引き出して着替え、食堂へと足を向けたのだが食堂の扉の奥――聞こえてきたのは母の金切り声だった。

うわー、もう喧嘩しているのか？

正直そう思ったのだが、実は相手は変態痴漢男ではなく、伯父だった。

「わたくしは知りません！　兄さまが悪いのではありませんかっ」

「それはそうだが、少し落ち着け」

「リィは私の娘です！　兄さまの勝手にはさせませんっ」

「そうは言っても、このままにしておけばいずれはこの屋敷だとて手放す羽目になるんだぞっ。だったらよりよい相手との縁組をだな

っ」
「この屋敷は私のものよ！　兄さまの馬鹿っ」
　聞こえてくる声と、ぼすりという微妙な音。あたしは慌てて食堂室に入り、そこでクッションで伯父を叩いている母という物凄く珍しいものを発見してしまった。伯父は片手でクッションを受けながら逃げ惑うという有様だ。
「ちょっ、何の騒ぎ？」
「リドリー、助けてくれっ」
　伯父さんが必死に助けを求めるから、あたしは慌てて母のもとへと駆けてその腕を引いた。
「どうしたの、母さん」
「どうしたもこうしたも！」
　言葉を吐き出す母は顔色が悪い。あたしは母の腕を力ずくで引いてソファへと連れて行くと、伯父へと視線を向けた。
「リドリー、昨夜は楽しんだかね」
　伯父はとりつくろうように口元に笑みを浮かべた。なんとなく警戒心を与えるものだ。ものすっごく胡散臭い微笑。
「……楽しんだけれど、どうしたの？　朝から何の騒ぎ？」
「いや、ただの意見の相違だよ。私はおまえにとってよりよい婚姻のことを話していただけなんだ。おまえも年頃だろう？　生憎と貴族ではないが、貴族に嫁ぐのであれば私が養父となればいい話だ――おまえは元々エレイズの娘なんだから何の不都合もない」
　しどろもどろに出る言葉に、あたしは眉を潜め、母はふるふると小刻みに震えながら伯父を睨みつけた。
「リィは私の娘です！　それを売り渡すような真似はさせませんからねっ」
　なに、何の話？
　あたしはまったく意味がつかめずに伯父を凝視し、伯父は決まり悪

い様子でわざとらしくごほんっと咳をうった。

「おまえには是非、モルティバル卿と婚姻してもらいたい」

「無理」

却下。問題外。

え、なにそれ。突然何の話なの？

あたしは話の内容を吟味するまでもなく、まさに条件反射で即答した。

「リィ、聞くことはないわ！　その男は自分が作った借金を貴女を売り払って解決しようとしているのよ」

低く冷たい母の言葉に、あたしは「はぁぁぁぁ？」と声をあげてしまった。

「売り払うなど人聞きの悪い。モルティバル卿ならば地位も財産もお持ちだ。婚家の援助だって惜しみなくしてくださる。婚約者がいるが、もう何年もの間婚姻には至っていない。おそらくろくな女ではないのだ。もとより卿を罠にはめるようにして婚約者の地位を得たという女だからな。卿はうんざりとしているに違いない！　だから、おまえが――」

べらべらと吐き出される言葉に、ふっとルティアの言葉が耳をよぎった。

――私ぃ、宮廷では嫌われておりますのよぉ。

根も葉も無い（本当はある）噂や誹謗中傷に晒されている友人に、あたしは身が震える程腹がたった。

「伯父さんっ」

とりあえず相手の言葉をさえぎろうと声を荒げたあたしに、伯父は更に言葉を募らせる。

「私の屋敷が抵当に入っているのだ。領地の屋敷までもが。頼む。リドリー、この伯父を助けることはおまえの母を救うことにもなる

んだ。この屋敷だっていずれ奪われることになる」
「エルディバルトさんはあたしを嫌ってるし、何より絶対にそんな話にはならないわよっ」
「そうよ。リィには婚約者がいるんですもの」
はいぃぃぃ――？
あたしが腕を支えている母が勢いづいて言うが、あたしはその言葉にも動きを止めてしまった。
「モルティバル卿ならまだあの男のほうがマシというものだわ」
ちょっ、母さん。話しが飛躍していますよっ。
「リィ、あの男はどこの家の出なの？　財産はどうなって」
まってまってまってよっ。
「財産目当ての結婚はしませんからねっ」
何この騒ぎ。どうなっているの？
どう収集をつけようかとあたし自身が判らなくなっているところで、ふいにのんびりとした声が部屋に満ちた。
「勿論、財産目当てだろうと体目当てだろうと私は構いませんが。朝から失礼。宜しいでしょうか？」
のほんっとした口調でこの三すくみに入り込んできた男は今日は普段とまったく違い、首筋にはピンでとめたクラバット、細かい彫刻の入った貝細工のボタンの上着。まるで紳士然という様相で大きめの封筒を手に現れ三人の視線が向くと、にっこりと微笑んだ。
食堂室の入り口、執事に案内された男はゆるりと三人の顔を眺めやる。一人ひとりの意識を一気に自分に集中させるように。
「ごきげんよう」
しかし、この乱入に慌てたのはあたしや母ではなく、伯父だった。

「なっ、何故ここに」
「そんなに驚かなくてもいいじゃありませんか」
くすりと微笑みをうかべるとエセ紳士は執事に紅茶を頼み、小首をかしげるようにして「とりあえず座りませんか？」などと提案してくる。
だが伯父はそれどころではないらしい。額はぶわりと汗を滲ませ、その瞳は食い入るように見開かれている。
まるで、恐怖の対象を目の当たりにしたかのように。
「待ってくれ。まだ、まずは話を……」
「待てませんよ。まぁ、それはどうでも宜しいのです。まずは座ったらどうです？」
まるで自分の家だとでもいうようにさっさと応接用におかれているソファにすわり、ばさりと封筒をテーブルに置いた。
「エレイズさん、どうやら私と彼女の婚姻を認めてくれるようでよかった」
この場の謎の雰囲気などものともせずに言い切る男に、母が「それはっ」と声をあげたが、男はしれっとした表情で封筒を示した。
「私の財産を心配されているようですが。とりあえず、リドリーと婚姻するにあたりまして、私からの贈り物です」
――封筒から吐き出された書類は、伯父の屋敷の権利書、伯父の領地の抵当権……
呆気にとられるあたし達に、面前の男は微笑んだ。
「これはほんの一部ですけどね？」
＊＊＊
「伯父さんが賭け事が好きだというのはエルに調べてもらったから

ね。サロンで相当大きな賭け事をしているみたいだったから、ぼくも一緒に遊んでみたんだ」

はじめのうちは勝っていたのだと伯父は言っていた。

はじめは勝ったり負けたりを繰り返し、やがてこの男は「私の屋敷を賭けて勝負しませんか？」と言い出したのだという。どんな屋敷かは判らなかったが、聖都の大貴族ばかりが暮らす区域にあるという。大貴族のぼんくら息子だと思った伯父はその賭けに乗り、惨敗。

自らの家屋敷の権利を奪われ、冗談じゃないと――あろうことか領地の家屋、土地までも賭けの対象にしてしまったのだという。

その時、あたしはそれを聞きながら伯父を睨んでいたが必死にある言葉を飲み込んでいた。

――このイカサマ師！

相手は魔法使いだ。そんな相手と賭け事などして勝てる訳がない。

「すんなり話しが進んでよかったね」

「……」

すんなり？

物凄くうちの母には更に嫌われているようにみえましたけれど、それをすんなりと表現しますか？

母は卒倒し「こんなだまし討ちみたいなこと！　ありえないわっ」と訴えたが、伯父は一生懸命母をとりなすし、このあんぽんたんイカサマ師は冷ややかな微笑を湛えて「別にこの権利書でリドリーを買おうなんて思っていませんよ？　ただ、これはささやかな私の気持ちだと言っているだけです」と、明らかに挑発的な様子で二人の大人を交互に見ていた。

どうしてもうちょっと正攻法で来なかったか。

それでも最終的に母はあたしを送り出してくれた。結婚云々でなく、とりあえず自分の町へと帰ることを許諾したのだ。

もしかしたら考えることを放棄したのかもしれない……

「いつでも帰って来なさい」

とあたしに言い、神殿官を名乗っている物凄く胡散臭い男には冷たい一瞥をくれ「認めた訳ではありませんからね」と最後まで忌々しそうに言っていたが、言われている男はへらへらとしていた。

伯父は……――どうもおかしな方向に行ってしまった。

「強さの秘密を教えてくれたまえ」

などと明後日なことを言っていたくらいだから、どこかネジが弾け飛んだのかもしれない。

あたしはぐったりとしつつ、馬車のクッションに埋もれ、小窓から見える町並みを眺めやった。

楡の街路樹、煉瓦作りの美しい町並み――綺麗だけど……ああ、早くマイラさんのいるあの町に帰りたい。

まぁその前に、アマリージェとの約束があるのだけれど。

「市場から一番近い運河の船着場で待ち合わせだって聞いてるけど、何をするの？」

「舟遊びだって言ってた」

あたしがぐったりと言うと、馬車の反対側の男は「へー？」と微妙な返事を返す。

「ぼくも付き合っていいんだよね？」

「仕事はどうなってるの？」

「ぼくってば基本的に生きていればいいひとだから。神殿の仕事は神官達がしてくれるしね」

この役立たず。

「午後は遊んで、あちらに帰ろう」

言いながら、すっと手を差出してくる。あたしはそれを睨みつけた。

「なに？」

「ほんの少しの時間だけど、抱っこしたい」
「いやです」
「いいじゃないか。ぼくと君は晴れて婚約者になれた訳だし」
――物凄く恐喝とか脅迫とかいう類の感じでしたが。
「ま・だ。そこまでちゃんと話はすすんでませんよ！　それに、ああいうのは卑怯だと思う」
「君の為ならいくらでも卑怯になるよ」
さらりと言われた言葉は最悪の部類だというのに、あたしは思わず顔が赤くなるのを感じた。
「正攻法でやるほうが良かった？　神官長として花嫁を迎える為に？　でもそうすると色々と面倒くさいよ？　神官長の花嫁は神女だから。三年間も神殿内に閉じ込められてしまうし。その間ずぅっと精進潔斎。男と接触できなくなって、当然夫であるぼくとも会えない。それよりもコンコディアでのんびり暮らせるほうがずっといい」
「――」
「尊き人でも竜公でも神官長でもない、このままのぼくのところにお嫁においで」
言われた言葉が、溶けた。
今まで幾度も似たようなことは言われていた筈なのに、何故かはじめて求婚されたつもりになって、あたしは動揺してふいっと顔をそむけた。
そうしないとそのまま抱きついてしまいそうな気持ちだったからだ。
でもそうする前に、あたしにはきちとん言わなければならないせりふがある。

「そんな風に言うけど、本当のあたしを知ったら――嫌いになるかもよ」

「どんな君？」

「あたし……婚約者がいたの」

それは罪を告白するくらい、あたしには苦くて飲み込めない辛い台詞だった。

「あたし、結婚式の三日前に婚約者から逃げたのよ」

勇気と過去と

あたしは勇気を振り絞ったと思う。
自分の中でひたすら考えないように、けれどずっと抜けない棘のように、溶けない鉛のように居座り続けた問題を、見てみぬふりにもうできなくて勇気を振り絞って口にしたのだ。

心臓が別のイキモノのように脈動して、あたしは唇がともすれば小刻みに震えそうになって必死で押さえつけていた。

――言った。
言ってしまった。
言ってしまった！

もう吐き出されてしまった言葉は取り消すことはできない。嘘とも、冗談とも訂正がきかない。
あたしは自分で告白したのだ。自分が――最低最悪な人間なのだと。

怖くて相手の顔が見れなくて、視線が落ちる。
狭い空間の中で、相手がどういう風に動くのか気になってあたしは緊張していた。
――軽蔑する？
他の男と婚約していたことを。いや、それは致し方ないことだとしても、結婚間近で逃げ出したことはあたしの……罪だ。
あたしのこと、嫌いに……

「でもほら、ぼくは逃がさないし」

しかし相手はふざけているのかと思えるくらい明るい口調でへろ

りと言った。
その口調には動揺も蔑みもなく、ただ普段と変わらぬ響きだけ。
あたしは身を固くしたまま、今自分の中に入り込んだ言葉――音の意味を飲み込むように幾度も幾度も頭の中で再生させた。
「ぼくから逃げられると思ったら大間違いだよ？　ぼくってば魔法使いだから」
くすくすと笑い、あたしの膝の上にあるぎゅっと握った拳をぽんっと一度叩いて、ついで手首を引っつかむと勢いをのせて自分の方へと引き寄せた。
あたしの顔が相手の胸にぶつかるのと同時、お尻が膝の上に乗せられてしまう。
「あ、あたしのこと酷いとかって思わない訳？」
結婚式の三日前に逃げたのですよ？
一般的に考えて物凄い最低行為だ。軽蔑されておかしくない。逃げるなんて――投げ出すなんて。絶対に褒められた行為じゃ……
ねぇ、あたしの話を信じてないの？
それとも――
あたしが身じろぎするのも無視して、温かな体温があたしを包み込む。
「酷いって、いやだなぁリトル・リィ。ぼくの正直な感想を聞きたいの？」
「当たり前でしょっ！」
動揺のあまり舌がもつれた。
掴まれた手首、抱きこまれた背。
相手の膝の上という普通とは違う場で、そして男の微笑と首筋に顔が近づき、囁いた。
「ありがと」
「……」
「逃げ出してくれてありがとう。もう一度出会えたことにありがと

う。今、こうしてここにいてくれてありがとう。君が君でありがとう」

耳元で優しく、宥めるように言葉を落としながらぽんぽんっと安心させるように背を叩かれた。

まるで小さな子供をあやすように優しくて、あたたかくて。

あたしの中でざわめきがうまれ、そして、はじけた。

自分から手を伸ばし、相手の首に両腕をまわして声を殺して泣いた。涙を流さずに感情だけをひたすらに流し続けた。

「産まれてくれてありがとう。生きていてくれてありがとう――泣かないで、かなしまないで、きみがぼくのいちばんのひとなんだ」

とろとろと甘くあたしの身に染みとおる、愛しい音。

ああ、あなただ。

ずっとずっと、あたしが一人で辛かった時にあたしを支え続けたのは、あなた、だ。

あたしの心が落ち着くと、途端に照れくささが先にたってあたしは体を引き起こして、視線をそらしつつ「ごめんなさい、ありがとう」と消え入りそうな声で呟いた。

「惚れ直した？」

「――」

「キュンキュンきてキスしたいとか、もうこのまま抱かれたいって思った？　いいんだよ！　どんな欲望もぼくはちゃんと受け止めてあげるからっ」

きらきらとした眼差しで腐った言葉を吐き出す相手を前に、あたしは冷静さから更に温度の低いものに変化した。

実際惚れ直し、キュンキュン――なにそれ？――したとしても、それを指摘された途端に完全に覚めるものだと、なんという見事な見本だろうか。

おまえは瞬間冷却装置か。

「はい、ちょっとごめんなさいね」

あたしはおばさんのように平坦に言いつつ相手の肩を押し、その膝の上を辞去することに成功した。

わざと「どっこいしょ」と座席の反対側、窓側に張り付いて外を眺めて更に「はぁぁ」と溜息を吐き出す。

甘くてちょっとだけときめいてしまったあたしよさようなら。

おいでませ現実、だ。

「えええっ、リトル・リィっ」

「あなたは壁に向かって愛でも囁いてから出直してください」

「なんで、なんで？　リトル・リィだって欲情したに違いないのに」

「そんなことしてないわよっ」

よ、よ、よぉぉぉ？

あたしは窓の外に向けた視線を元通り大馬鹿者に戻し、ぎろりと睨みつけた。

なんという単語を口にするんだこの変態っ。あたしは自分の顔に熱が集中して真っ赤になるのを自覚しつつ、馬車の座席に一杯用意されているクッションの一つをがしりと掴んで投げつけた。

欲情なんてしてないわよ。変態と一緒にするな。

どっかの誰かが過保護に育てたのでしょうか。余計な言葉さえなければあのまま相手の腕の中でその体温に守られていたいと思うのに。

あたしはもしかしてまったく無関係かもしれない過保護な姑にして忠犬エルディバルトさんに向け呪いの呪文を呟いていた。

ええ、そう。その通り――ただの八つ当たりです。

馬車が速度を落とし、馬が嘶いてかつかつと石畳を叩く音が耳に入る。
完全に馬車が止まるとみるや、クッションに埋もれていた男は「ああ、ついたね」とあたしに微笑んだ。
箱型の馬車の中、クッションと羽根とが舞っている。
あたしは確かに相手にクッションを投げつけたけれど、それが相手から返されるとは思っていなかった。
はじめのうちこそ「なにをっ」とやり返していたが、そのうちクッションの一つが破れて中の白い羽根が舞い飛べば、二人で顔を見合わせて笑いながらお互いにクッションを投げ合うという――いいですよ、馬鹿っプルと言いたいのであればどうぞ。
あたしだってそう思うよ。

ふわふわと白い羽根が未だ舞う狭い箱馬車の扉が、外側から開かれて「公っ、お待ちしておりました」と嬉しそうに言うエルディバルトさんは、馬車の中の惨状に一瞬あっけにとられ、ついで「公っ、体調がすぐれぬのか？　また具合がっ」と声をあげて身を乗り出し、大好きな公の腕を引っつかんでじろじろとその体を見回し、べたべたと触りだした。

「エル、何でもないよ。それよりどうして貴方がいるのかな。護衛は要らないと言ってあるでしょうに」
苦笑しながら相手の手をやんわりと引き剥がし、小首をかしげて肩についている羽根を払った男に、エルディバルトさんは逡巡するように声をかけた。
「申し訳ありません。お呼び出しでございます」
「え、聞こえない」
「公、お呼び出しでございます」

「聞きたくない」
「公っ」
再度言葉を続けるエルディバルトさんに、魔法使いは大仰に溜息を吐き出してあたしへと手を差出した。
「お仕事が入ったみたいだ。君は皆と楽しんでおいで」
相手の手に導かれて馬車をおり、とられたままの手をうやうやしく持ち上げ指の付け根に口付けが落とされる。
そんな何気ないしぐさにお腹の底のあたりがざわつきながら、あたしはなんでもないことだというように装った。
「手袋をしている君も悪くないけれど、いつものように素手の君に触れたいよ」
囁きを残し、馬車に乗り込めばエルディバルトさんが冷たい目であたしを一瞥して後に続く。その場に残されたあたしはどういう顔をしていいのか判らないまま相手を見送った。
なんだかちょっと寂しいとか――思ってませんよ。
思ってないです。
ちょっとだけしか！
「リドリー、遅い！」
アジス君の声がはじけるように耳に入り、あたしは慌てて振り返った。
馬車があたしをおろしたのは、運河の横にある船着場で、石畳の隅には運搬用の箱が幾つも置かれていた。
運河と言っても広い川幅をほこる為に、桟橋には幾つかのゴンドラが付けられ、一つだけ大きな船には人が二・三人動いているのが判る。
あたしは船を視界にいれ、小さく息を吸い込んだ。

――船は、あたしにとってトラウマか。

やれやれと自分に呆れて空を見上げると、あたしは呼んでいるアジス君の方に手を振った。

「マリーとルティアは？」

「花摘み」

ざっくりと言われた言葉に、あたしは呻いて「そういうことは小声で言って」と少年を諫めたが、アジス君は唇を尖らせた。

「便所って言わないだけマシだろうが」

「……そうかもしれないけど！」

確かに、花摘みという単語を彼が使ったことだけ称賛に値するというべきか。アマリージェの教育の賜物か。

いやしかし。

あたしがげんなりとしつつ「とにかく、大きな声で言わないように」アマリージェに怒られますよ。紳士はそんなことを大きな声で言ってはいけません！　とアマリージェが怒る口調まで耳に届くようだ。

あたしはきっちりとアジス君に理解を求め、うなずいた相手の素直さに褒める言葉を載せようとして思い出した。

「そういえば、アジス君。昨日、あたしの妹の話をしていたけど、妹の話なんてしたっけ？」

さりげない口調で切り出せば、アジス君はあたしを見上げた。その瞳が無機質にあたしをじっくりと見上げ、しばらくして口にした。

「あー、了解」

なにが？

「気にスンナ」

気になるでしょっ。

むしろ物凄く気になりますが。

あたしが相手の腕を掴もうとした途端、強い力があたしの二の腕を背後から引っつかみ、男の声が「リドリー？」とあたしの名を呼んだ。

「リドリー、だよな？」

ぐっと力強い大きな手が二の腕を掴み上げ、問いかけた言葉。
「リドリー、だよな？」
戸惑うような声は、振り返った途端に眉を更に潜めた。
「リドリー・ナフサート？」
「……え？」
「随分と雰囲気が違うが、おまえだよな？」

心臓が掴まれるような衝撃と同時、あたしの中で血の気が引くような奇妙な寒気が満ちた。
面前にいたのは色の黒い大きな男で、低く野太い声は苛立ちを含んでいたが、まったく覚えの無い相手から突如名を呼ばれ、あまつさえ二の腕を背後から捕まれるという現状にあたしは卒倒しそうになっていた。
「チクショウっ、あーもぉっ。本当にあいつは間が悪いっつうか、運が無いというか！」
罵るように言いながら、男の腕が更に強くあたしを引き寄せてそのまま無理やり歩き出そうとする。
「本当にあいつは馬鹿じゃねえのかっ」
慌てるあたしより先に、近くにいたアジス君が相手の手首を掴み上げ「なんだよ、おまえ！」と怒鳴ったが、相手はちらりと視線を向け、はじめてその存在に気付いたとでも言うように顔をしかめただけだった。
「ああ、悪い。急用ができたから嬢ちゃんにはあとで商会で他のヤツに頼んでって言ってくれ」
「わけわかんねぇこと言うな！　リドリーを離せよっ」
「離したら逃げられるだろ。阿呆か」
邪魔臭そうに言う男があたしをちらりと見て、ふいに舌打ちをし

た。

「おまえ、俺のこと忘れてるだろ？」

「だ、誰……？　あの、知り合い？　デスカ？」

あたしは記憶をフル回転させてみたが、体の大きなその男が判らずに不安と恐怖で言葉をもつれさせた。

面前にいる男は浅黒く日焼けし、両の腕をむき出しにした体躯のいい大男だ。眼光は鋭く、ぼさぼさの髪を無造作に首の後ろで一つに束ねている。しかし、一見しただけで海の男だと思わせる空気が、あたしの記憶を激しく明滅させた。

誰だかちっとも出てこない。出てこないけれど、あたしの本能が告げている――相手は自分を知っていて、そして、彼は……

「おまえってそういうヤツだよな？　町の人間とかちっとも関係なくてよ。びくびくびくびく隅っこでおびえてる。かーっ、本当に意味わかんないね。こんな女のどこがいいかね！　まぁいいさ。来いよ。今ならまだ間に合うだろうから」

マーヴェルの関係者。

あたしの元婚約者にして海運商ランド商会の三男。マーヴェルの関係者に違いない。

ふんっと鼻を鳴らし、ずるずるとひきずるように歩こうとしたが、アジス君が大きな声で「離せっつってんだろっ！　このゆーかい魔っ」と蹴りを入れると、まるで獣の咆哮のように大きな声で怒鳴りつけた。

「うるせーっ、糞ガキ！　この馬鹿女は知り合いなんだよ！　同郷なんだ。この糞女は忘れちまってるみたいだけどな！　それに、俺はこいつの婚約者のダチなのっ。邪魔すんなっ」

つかまれた腕が、きしきしと悲鳴をあげる。
遠慮も容赦も無い強い力が、さらに締め上げてあたしは恐怖に喉の奥が悲鳴すらあげらずにヒューヒューと奇妙な音をさせ、必死に足に力をこめようとするのに、ふいに相手の腕があたしの体を持ち上げ荷物のように肩に担ぎ上げた。
ぐっと腹部に肩骨が押し付けられてくぐもった悲鳴が零れ落ちる。

「ふっざけんなっ」
アジス君がくってかかるが、その体躯の違いでどうにもならない。相手の腕がアジス君をたやすく押さえ込み、引き剥がし、乱暴に突き飛ばした。
「アジス君っ」
強かに石畳に尻餅をついたアジス君が苦痛の呻き声を歯の隙間からこぼし、それでも必死に身を起こそうとするのが視界の端にちらちらと見えていた。
「くそったれっ」
アジス君の激しい焦燥の声が胸に響く。
あたしはどうすることもできずに必死に身じろぎしたけれど、そんな抵抗など相手の力の前に完全に無力だった。
どんどんと血の気が下がり、担ぎ上げられて下がる頭が力を失っていく。
「や、な……なにっ離してっ」
抵抗を示す言葉はかすれてろくに音にならず、じたばたと足を動かそうとしてもそれはどこかむなしく宙をかいた。

何これ?
何、なんでこんなことになっているの?
面前に広がるさかさまの背中を叩いて「離してっ」必死に訴えても、その声には力が入らない。
完全に混乱するあたしを担ぎ上げたまま船着場の小さな船に乗り

込んだ男は、桟橋と船とをつなぐロープをひょいとはずし、その勢いのままどんっと桟橋を蹴った。
「ったく、周遊用のこんなちっさい船じゃ追いつけねぇかもなっ」
忌々しいというように吐き捨て、船の櫂に手をかけた男は、どさりと乱暴にあたしをその場に落とした。

優しさなど少しも見せぬその所作にあたしの臀部が船板にぶち当たって悲鳴をあげ、あたしは恐怖に駆られながら必死に怒鳴った。
「何するのっ。船を戻してっ」
「今から水路を下っていけばうまくすれば追いつける。ってもあっちは船足が早い大型だからな。あー、無理かもしれんが、そん時は安心しろ。俺がきっちり連れてってやる」
言いながら、ぺっと唾を水面へと吐き捨て、冷たい目で男は言った。

「マーヴェルのところに」
「なんっ……」

――かろうじて出た音のあと、あたしは言葉を続けることができなかった。
なぜ、どうして？
今更マーヴェルの許につれて行こうとするのか理解できない。
百歩譲って、マーヴェルがあたしに恨み言を言いたい気持ちは判らないでもない。もしかして、今は幸せに暮らしているという報告かもしれないけれど。ってかそれってあたしにする報告か？　実質上フラレ女であるあたしに？　しかも、そんなことの為にこんな風に無理矢理つれて行かれるのはまったく理解できない。
緩く首を振りながら、あたしはハっと息を詰めて、今となっては遥か後方になった桟橋にアマリージェとルティアを認めた。

小さくなったアジス君の傍らにしゃがむアマリージェと、そして桟橋の端で必死に声を張り上げるルティア。
口元に手を当てて悲鳴のような高い声でルティアがあたしを呼ぶ。

「リドリーっ、水に飛び込みなさいっ」

叫ぶ声に、男が応えた。
「わりぃな嬢ちゃんっ！　船遊びはちょっと別でやってくれやっ――て、あの嬢ちゃんとおまえは知り合いか？」
胡散臭いものでも見るようにあたしへと視線を戻す。
あたしは揺れる小船の上で、必死に縁につかまりながらどうしていいのか判らなかった。

船は嫌い。嫌いっ。船は大嫌い！
激しい揺れも、泳ぐこともできない水も、あたしの心が拒絶する。
震えるからだを必死に鼓舞し、ルティアが叫ぶように水に身を投じようにもあたしはそれが怖くて腰に力が入らない。
子供の頃におぼれた記憶が、どうしても水の中に身を落とすことに恐怖を与えていた。
マーヴェルの扱う船から落ちそうになるたびにもうイヤだと言ったことがまざまざとよみがえってきて、あたしは吐き気のように競りあがるものを堪えていた。
「あたしを帰してっ、かえし、てっ」
舌がもつれて、唇からはたよりない悲痛な音が零れ落ちる。
「だーかーら、帰してやるっつってんだろうに！　おとなしくしてろよ。あー、本当にオレおまえは苦手だ。イラつくっ」
周遊用の小船だというのに、男の力強い腕が櫂をあやつりどんどんと船は水路を下っていく。ルティアの声が今は風に掻き消えて、小さなその姿が見えなくなることに更に恐怖が募った。

櫂をせわしなくこぐ水音と、流れる景色に呆然としていたあたしは、やがてゆるゆると首を振った。
胸元に当てた手が心臓の音を伝えてくる。
いつもとははっきりと違う恐怖とともに、理不尽さによる怒りがゆるりと湧き上がり。まるで泣き叫ぶかのように怒鳴りつけていた。

「どうして！　なんでこんなことをするのよっ」
「どっかの馬鹿が逃げ出したからだろうが！」

吐き捨てられる言葉にぐりんっと顔を向け、あたしは唇を噛んだ。
相手が言う「逃げ出した」の意味なら承知している。
あたしは確かに逃げ出した。自らの結婚から――マーヴェルから、ティナから。
あたしの過去から。
「だからって、どうして今更あたしを連れ戻そうなんて！　こんな、こんなことして……」
まるで誘拐まがいに乱暴に！

「うっせぇなっ。おまえだっていつまでも逃げ回ってんじゃねぇ！　ああっ、たくよぉ。面倒くせぇなぁっ」
あたしはばくばくと鼓動する胸元を必死に押さえ込み、喘いだ。
そんな半泣きのあたしを見下ろし、男がまるで苦いものを口にするように顔をしかめ、舌打ちした。
「オレだって正直言えば、おまえが逃げ出したのはある意味しかたねぇと思うよ。あいつがヘタうったのは認めるさ。だけどあの馬鹿がどうしてもお前の――」

水路の流れに乗った船に安堵するように、男は櫂から手を離してしゃがみこんだまま動けないあたしの手首を掴み上げ、無理やり自分の方へと向かせようとする。あたしは不安定な船が恐ろしく、面

前の男が怖く、吐き出される悪意に旋律しながら、

「離してっ、触らないでっ」

相手の腕から逃れようと腕に力を込めた。

「はなしを、きけっ！」

「イヤだって言ってるでしょっ！」

――ああっ、魔法使い！　どうしてこんなことにっ。

ぐいっと顔を近づけて更に怒鳴ろうとしてくる男を殴ってやろうと手を振り上げた途端、ダンっという重い音と同時、あたしの腕を掴んでいる男の体がびしりと強張り固まった。

「なんだ、これは？」

低く呻いた男は、あたしの腕を掴んだままきょろきょろと周りを見回した。

相手の突然の緊張の意味がつかめずに戸惑うあたしの前で、屈強なその男は緩い流れを持つその川と自分達の乗る小さな船とを交互に見て幾度も首をかしげてみせる。

「船が、止まった？」

掠れるようなその呟きの意味が脳内に浸透するより先に、あたしは突如として自分の本能を揺さぶる別の恐怖に声をあげていた。

「に、ニゲタほうが、宜しいト思いマスよ？」

思い切り音をはずしてしまった楽器のように甲高く裏返った声が出てしまったけれど、それはきっと仕方ないと思います。

だがしかし、あたしの畏れは杞憂であった。
何故ならそのダンっという音と共にその場――男の背後に突然現れたのはあたしが畏れた相手ではなく、その忠犬エルディバルトさんであったから。

突如船上に現れた今時珍しい騎士姿の髭面男の出現に、あたしを掴んだままの男は更に驚いた様子で一歩退いた。
驚いた、というかドンビキか。
安心して欲しい。あたしもその気持ちは良く判る。

腰の剣をするりと抜き放ち、エルディバルトさんはただでさえ目つきの悪い眼差しを更に険悪にして怒号を発した。

「せっかく公といたというのに！　この愚か者がっ、そこに直れっ！」

……そんなにご主人さま好きですか？
その好き好きメーター、実は壊れてませんかね？

報復と復讐

「何ごとなのです！」
アマリージェは咄嗟に詰るかのようにそう口にしてしまった。
口にしてしまってから、思いのほかきつい口調に唖然とする。
無理矢理つれていかれたリドリーが見え、地面から必死に立ち上がろうとする少年の姿にカっと自身の中で何かがはねあがる。
護衛は何をっ、と言いそうになった言葉が音にもならずに止まった。
護衛など要らないと護衛騎士を下がらせていたのはアマリージェだ。
ルティアもいるのだからと楽観していたのは自分だ。
これは誰でない自分の失態だ。

体の痛みをおしてやっと身を起こした十一の少年が、口惜しさにぎゅっと拳を握って唇を噛む。
その手首にはこすれたような傷跡。ユリクスが用意した身奇麗な衣装が破け、のぞく素肌にも擦過傷がうかがえる。
「っくしょうっ、ちくしょうっ」
口から漏れる激しい焦燥に、アマリージェは顔を背けそうになるのを必死に堪えた。
「ふざっ、けるなっ！」
何に対しての慟哭か、その言葉と同時に石畳に拳を叩き付けそうになるから、アマリージェは慌ててその腕を抱きしめるようにして食い下がった。
「――大丈夫ですわ！　リドリーはあの方の指輪をしていますもの。それに……」
水路の水は竜峰と水源を同じくする。
ルティアが言うように、リドリーが水に入ってくれるのが一番尊き人からの救いを手早く受けられる。

「オレは強くなるっ」
突然、アジスは呻くように言った。
「もう絶対にこんな思いはイヤだっ」
「……」
「大事な人を守れるように、俺は誰より強くなってやるっ」

どう声を掛けてよいか判らぬアマリージェだったが、桟橋へと視線を向け、息を飲んだ。
桟橋の端でリドリーへと必死に声をあげたルティアが、腕をあげたかと思えば右手にはいつの間にかナイフを持ち、何の躊躇もなく自らの左腕を切りつけたのだ。
研ぎ澄まされた銀色の煌きは、ひとなでだけでその腕に無残な傷を作り上げた。
「ルティア様っ！」
指一本分程にもなる切り口から、盛り上がり、つっと赤い血が流れ落ちて水路へとしたたっていく。それを見届けるとルティアはくるりと身を翻した。
「何をなさるのですかっ」
アマリージェの声にルティアは苦笑を見せた。
ルティアのメイド服、そのスカート部分にはっきりとした血の染みがひたひたと広がっていく。
「竜峰と続くこの水脈に私の血が流れれば公には判ります。異常事態にすぐに動いてくださるでしょう。それより、アジス？　そちらは大丈夫？」
アマリージェはアジスの腕を抱きしめていた自らの手を慌てて離し、わたわたとハンカチを引き出してルティアの腕に押し当てた。
白いハンカチが瞬く間に血の朱に染まっていく。
そんなものを見るのははじめてで、アマリージェは泣きそうな顔をして必死にハンカチを押さえ込んだ。

普段は気丈な様子をみせているアマリージェも、本来は十四の小娘でしかなくこのような事態には対処しきれない。
血を流しているのはルティアだというのに、アマリージェは我が事のように身を震わせてそのままふらりと気を失ってしまいそうになった。
「しっかりしろっ」
慌ててアジスが身を起こしてアマリージェを支え、その視線をルティアへと向けた。
「ルティア様、いくらなんでもやりすぎだ」
その非難はアマリージェの心を揺さぶったことに対するものだったが、ルティアは半眼を伏せた。
「自らの失態は自らが負います。けれど決してこのままにはしないわ――あの男は何故あんなことをしたの？」
＊＊＊
「せっかく公といたというのに！　愚か者めっ、そこに直れっ」
という、一般的に理解不能な台詞を吐き散らした髭の騎士を前にして、あたしの腕を掴んだままの男は唖然としていた。
突然船の上に人が現れればそりゃ驚くだろう。だが、男はきょろきょろと辺りを見回し、ちょうど近い場所に水路をまたぐ橋を見つけ、なんとか自分を納得させた様子で息をついた。
そう、たとえ水路の船の上に突然人が現れたとしても、降って湧いたとは普通は思わない。
けれどアレの関係者は突然降って湧くんですよ、ボウフラ並みにね！

「なんだか知らないが、勘違いだ」
極一般的な結論を出した、ある種普通の感覚の持ち主の男はまっすぐにエルディバルトさんを見て言う。
「誘拐とかじゃない。悪いがその剣は収めてくれ」
「その馬鹿女の手を離せ」
「いやっ、この馬鹿女の手は離せないっ」

……

「なんだとっ、この不届き者めっ」
「だから、誘拐とかじゃなくて、これは保護だっ。そう！　保護なんだよ」
保護、という言葉を吐き出し、ついで男はその言葉に納得するように大きくうなずいた。
「あー、だからさ。この馬鹿女は家出人なんだよ。ずっと探していてやっと見つけたんだ。さっきの子供が誘拐とか騒いだからあんたは人助けの為に来たんだろうがね、それは勘違いなんだ。この馬鹿女は家出人で、オレはそれを保護しただけなんだよ」
保護という言葉に、エルディバルトさんは眉間に皺を刻みこんだ。じっくりと考えるように間をあけ、ちらりとその視線がこちらへと向けられる。
「怪力馬鹿女。おまえは家出人なのか？」
「って、何相手の話をきいちゃってるんですかっ」

しかも馬鹿馬鹿言いすぎではありませんか？
「判ってくれたか？　判ったらその剣を収めて船からおりてくれ」
男があからさまにほっと息をついたが、あたしはじたばたと暴れた。
なんということでしょう。救い手だと思われたエルディバルトさん

は全然ちっともアテになりません。

「駄目だ」

あたしが諦めかけたところで、しかしエルディバルトさんはきっぱりと言った。

「その怪力馬鹿女を連れて行かせる訳にはいかない」

「オレはこいつの婚約者から頼まれてるんだよっ」

判らない男だなぁっと誘拐犯が苛々とした怒号を発すると、エルディバルトさんはまたしても明後日な言葉を撒き散らした。

「私はまだ認めておらんぞっ！」

「は？」

「何故、なぜその馬鹿女なのだ。まったく理解できぬ！　世の中にはもっとマシな女が山といるというのに。何故判ってくださらぬのか」

「……いや、それはオレも同意するが」

まて。

あたしは引きつった状態でエルディバルトさんと誘拐犯の話しを聞きたくも無いのに耳に入れていた。

「おおっ、おまえもそう思うか？」

「ああ！　よりにもよってどうしてこの女がいいのかまったく理解できない」

「おまえとはいい酒が飲めそうだ」

リドリー・ナフサート大嫌い選手権はどこか別の場所でして下さい。

当人の居る前でなんということでしょう。あたしだって万人に好か

れるなんてそんな傲慢なことは考えていませんが、だからといってこれはないのではなかろうか？

謎の意気投合を収めた男二人が、あたしの悪口に花を咲かせ、いい女とはどんな女かを定義しはじめたところで男の手がふっと緩んだ。

途端――

「だが、私は主の命に従うのみっ！」

エルディバルトさんは大きな声で言うや、突然身を伏せ――鋭く右足を踏み込んだかと思うと俊敏にあたしと男との面前に迫りぐいっとあたしの腕を乱暴に掴み、そのまま外側にぶんっと力任せに投げた。

投げ、投げた！

勢いよくあたしの体が空気を引き裂き「ぎっっっ」っと、咄嗟に悲鳴のようなものが歯の隙間からこぼれる。あたしがめいっぱい開いた両目の視界が大きくぶれて、そして、あたしの体は不安定な船の上から空中に踊り、そのまま――落下した。

「ばっ、リドリーは泳げないんだぞっ！」

「馬鹿女の心配など無用！　おまえは自らの心配をするのだなっ」

エルディバルトさんの声を最後に、あたしの体は水の中に叩き付けられた。激しい水音と水柱とが辺りに響き渡る。

冷たい水があたしの体を一気に包み込む。目を見開いたあたしの視界に、幾つもの気泡が広がった。

慌てて開いた口から水が入り込み、鼻にツンっとした痛みが走る。はじめのうちにこそこぼごぼとした音を感じたというのに、それは

やがて音すら感じなくなった。
いやっ、いやだ！
あたし泳げないのにっ。
　足と手が必死に水の中で踊る。何かつかめないかと必死になった手が咄嗟に何かを掴んだと思った途端、ふっとその場の温度が変化した。
「ッッッヤァっ、だれ、誰かっ、誰かっっっ」
魔法使いっ！
　喉を引き裂くように悲鳴をあげたところで、穏やかな声があたしの中に響いた。
――大丈夫。落ち着いて。
　聞きなれたテノールにあたしは救いを求めたけれど、その声はあたしの内にだけ響く。
――力を抜いて。行けなくてごめん。ごめんね。少しだけ、待っていて。
何かがあたしの中に浸透していく。
ふわりと優しく、温かなもの。
清涼剤のように満ちるものに、すくめていた首が伸び、強張っていた体がとける。それと同時に、ふわりと柔らかなものがあたしを包み込んだ。
「お気をしっかりなさいませ」
　柔らかな布地、そして向けられた声は静かで無機質な女のものだ

った。
ハっと両目を見開き、辺りを見回すとあたしは自分が巨大な寝台の上にいることに気付いた。
四方八方が水であったあの場ではなく、そこは一つの部屋。
白く、どこまでも白い部屋だった。

「え……あ……？」
「何かお飲みになられますか？　先に浴室へご案内いたしましょうか？」
静かな問いかけをする言葉は熱を持たぬもので、あたしは相手のあまりにも冷静な物言いに唖然としながら自分の現状を確かめるようにきょろきょろと首をめぐらせた。

簡素な部屋だった。
おそらく調度品は一級品だと思うのだが、その色彩はどこまでも白く無機質でいっそ寒々しい。無駄なものは置かれず、ただ目立つものがあるとすれば竜のレリーフがここにも置かれている。
目を伏せた竜。
だがここの竜は小さい――それとも、対比となるそれが大きいのだろうか？
ゆったりとしたワンピースドレスの美しい女性が、眠る竜を膝に抱いているレリーフ。
眠る竜を、守る女性の姿。

「こ、こ……？」
「神殿にある長殿の私室になります――長殿は宮殿にて陛下のお召しによりこちらに参ることは適いません。勤めを終えられましたらおいで下さいますので、どうぞご容赦を。
必要があればなんなりとご用意致します。命じつけ下さい」

――行けなくて、ごめんね。

悲痛で柔らかな声が耳元によみがえる。

まるで抱きしめられるような錯覚を覚えながら、竜のレリーフを見つめ、自らにかけられたタオルをぎゅっと抱きしめた。

あれだけ恐ろしかった気持ちが今はやけに落ち着いていて、これはきっと魔法の一種なのだろうとどこか遠い場所で思い、あたしはぎゅっと唇を引き結んだ。

数多のことが脳内を巡る。

あの男のこと、マーヴェルのこと。

そして何より……エルディバルトさんには復讐しても許されるはずだ。

思考と恣意

――どうして、マーヴェルはあたしを探しているのだろう。
最終的にあたしの思考はそこで立ち止まる。
そもそも、マーヴェルはあたしを探しているの？　あの男の勘違いとか早とちりとかではないだろうか？
あたしを探したところで何の利点があるというのだろう。

あたしは白い花がいくつも浮いた湯から右手を出して、ゆっくりと確認するように指を折り込んで数えてみた。
まず大前提。
「あたしとマーヴェルは親が決めた婚約者同士だった」
これは間違いなく。
「あたしはマーヴェルが好きだったけど、マーヴェルはティナが好きだった」
これもそう。
はっきりとマーヴェルに聞いたことは無かったけれど、これは女の勘とか雰囲気とか、まぁそういうので判るものですよ。
「ティナは子供の頃からずっとマーヴェルが好きで、それで……」
あたしは言葉を濁した。
脳裏に二人のことが巡る。
マーヴェルはあたしのことを好きだと言っていたし、愛しているとも言っていた。けれど、この言葉を口にする時、罪悪感のようなものを滲ませることに気付いていた。瞳がかげるというか、戸惑うような。
マーヴェルがティナを気にかけて、ティナがマーヴェルを気にかけていたことも気付いていた。
それでもいいと思っていた。
結婚してしまえば何とかなるって、今は気付かないふりをしてやり

過ごして、それでもいつかは普通の夫婦になれる。
そう思っていたけれど、結局あたしは我慢ができなくなったのだ。
そんな偽りの生活を続けてなど居られない。
そんなのはイヤだ。
だから、あたしは結婚式の前に逃げ出した。
――自分の為に。

あたしがいなければ二人は幸せ。そんなのは後付けの理由でしかない。結局あたしはあたしが可哀想で逃げ出した。
あの夜に決めたのだ。
あたしはあたしの人生を、あたしが幸せになれる人生を生きようって。

二人の為なんて、本当はそんなオヒトヨシじゃない。あたしはあたしがカワイソウで逃げた意気地なし。
「でも！――どうしてあたしを探すのよっ」
あたしはばしゃりと湯の表面をたたいて、湯船の中でくるりと身を翻し浴槽の淵に二の腕を預けるようにして右頬を預けた。
呆れる程広い浴室に、その中央に掘り下げられた湯船は円形の池のようだ。
お決まりの竜のモチーフの石像。その口からは湯が流れ、水音と湯気とがタイル張りの浴室を満たす。自棄になっていたあたしは、先ほどの女性の「沐浴のお手伝いを致します」を「はー、あ、いや、すみませんねぇ」と受け入れ、体も髪もぴかぴかに洗われてしまいましたが、その時にめちゃくちゃ気になったのはあのすかぽんたんは毎日そんなことされているのか？　というヨコシマな疑問だ。

風呂くらい一人で入れ。
それが無理なら男の人に世話させなさいよ、変態め。

エルディバルトさんならそれこそ喜んで……いや、なんかすみません。ごめんなさい。考えてはいけません。いや、考えてません。考えてませんったら。

「会いに行こうかなー」

溜息交じりにあたしはぼそりと言った。

勿論パン屋があるからすぐには無理だけど。十日も休みもらってるから、当分の間はそんな長期休暇無理だし。だってものすっごい遠い。

そして何より激しく面倒臭い。

何と言いましてもあたしってホラ、負け犬ですから。一見するとあたしが家出して結婚式拒否って見られますけど、実際はあたしが負けて逃げたのですよ、ええ、本当に――あー、やさぐれるわ。

「リドリー！　ティナと今は幸せに暮らしているよ。家出してくれてありがとう」

とか満面の笑みで言われたらどうしよう。

会いたいならあってやろうじゃないですか！　と勢いこんで出かけて、そんな台詞吐かれたらあたしっていったい何でしょうね。

――おめでとう。というか、なんてオメデタイ。

あたしは右腕に頬を預け、左手をひろげてそこにある指輪を眺めた。

「いっそ、こっちから先に婚約しましたーとか報告しちゃうとか」

いや、それも何だかなぁ？

そもそもきっちりと婚約して無い訳ですしね。

会いに行こうかな、と口にはしてみたものの、あたしは眉を潜めてばったりと持ち上げていた手を落とした。

思考が支離滅裂。

やっぱりあの人――色黒の水夫さんの勘違いじゃないかな。
というか思い違い。幼馴染の婚約者が結婚式前に逃げ出したってことで、その相手を見つけたからマーヴェルに引き渡そうとした。マーヴェルの迷惑も顧みずに。
うん、その辺りが正解。
あたしは足を上下に動かして湯船に浮かぶ花を散らしながら「ははは」と乾いた笑いをこぼした。

「勘違いで今頃エルディバルトさんに足蹴にされてたりしてー」
ほら何せ、エルディバルトさん的にあたしがどうなろうと知ったこっちゃないだろうけど、最愛のご主人様と一緒のトコ邪魔されてしまった訳ですしね。
あたしは忘れてませんよ。アレと一緒に馬車に乗り込む時のあの何とも言えない「ざまーみろ」的な「いいだろう」的な一瞥を。ちっとも羨ましくないってのに。
だというのに、おそらく突然ご主人様に放り出されたわけですね、わんこ様。

ははは、はっは？
あたしは一気に腕の力を入れ、浴槽の淵を掴んでざばーっと体を起こした。
ヤ……殺ったり、しませんよね？
いくらなんでもそれはナイ。いやいや、きっと殴るくらいで済みます、ええ、誰も怪我とかしてないし。エルディバルトさんのココロがどうなったか知らないけど。
「いや、まて！　同情は不要？　あれ、でもっ」
そもそも、あたしは今は無事安全なところにいるけれど、アジス君達はそれを知らないかもしれないし。あたしこんなところでのんびりとしている場合ではないだろ、おい。

「何か御用がおありですか？」
脱衣室のほうに控えていた侍女さんが静かに問いかけてくる声に、あたしは悲鳴のように応えた。
「ごめんなさい、着替えありますか」
悠長にお風呂入りながらあのあほんだらサマを待っている場合ではありません。
ってか、もぉ、どうしてあのあんぽんたんは必要な時に居ないの？
いや……そうじゃなくて、いないのはむしろ当然で、どうしてあたしはこんなに傲慢なの。
自分勝手で傲慢で、最低。
本当にどうしようもないくらい、あたしはあたしが嫌いだ。
もっと自分が好きになれたら、もっと、自分に自信がもてたら――
ぐっしょりと濡れた体をわたわたと動かして脱衣所に行けば、侍女さんがおおぶりのタオルを広げて待ち受ける。それに体を包まれ、背後からは濡れた髪を、ふんわりと吸水性のよさそうなタオルで撫でられ、あたしはその悠長さに絶対に貴族とかの生活はムリ。と改めて思いながら相手の手からタオルを引き取ろうとして絶句した。
「乱暴にやったら痛むよー」
へろりと間抜けな男がいていいのか？
「いるならいるといえ！」
咄嗟に吐き出された言葉に、自分で動揺した。
ちょっと、待て。
あたし、いま……
「リトル・リィがお風呂で何してるんだろうとか、どこ洗ってるのかとか想像したり、一緒にお風呂入ってあんなことやこんなことを

したいと思ったのを我慢して待ってたぼくって本当に偉いと思わない？　紳士だよね！

ああ、でも優しいだけの男より、時には強引な狼みたいに行動したほうが女心がめろめろしちゃう？」

居てほしいとは確かに思ったけど。

いや、違う、ちがっ……そうじゃない、それどころじゃない、よね？

＊＊＊

「ばっ、かやろう！」

水路に落とされたリドリーを救うべく、色黒のがしりとした体躯の水夫が怒鳴り声をあげて水に身を投じたものの、幾度も幾度も水を潜ってもその姿を捉えることはできなかった。

見えているのは透明度の高い水路の中――湧き水を水源としているこの水は不自然な程に美しく、海から遡上する魚まで見える。

激しい混乱のうちに水面へと顔をあげて怒鳴り散らした。

「どうなってる？　ここはそんなに深い訳じゃない筈なのにっ」

戸惑うように視線を巡らせる男を見下ろし、エルディバルトは自らの大剣を鞘へと戻した。

「リドリー・ナフサートのことであれば心配は要らぬ。早くあがって来るのだな――貴様は誘拐の罪により処断される」

「なっ、だから言ってるだろう。誘拐じゃない。あの馬鹿女を婚約者の許に連れ戻そうとしたんだって」

「それを私に言っても意味は無い。おまえを裁くのは私ではなく、我が主だ。生きたまま連れて来いと命じられているのでな」

手を差出し、船の上に水夫を引き上げてやっていたエルディバルトだったが、水路の脇に馬車が止まるのを確認し視線を上げた。

あわただしくステップを引き出すこともせずに馬車から飛び降り

たのは、最近馴染みとなっている少年だ。
ユリクスに気に入られたのか、ユリクスと良く似た神殿官の絹地で仕立て上げられた軍服のようなナリをしているのが微笑ましいのだが、今はそのズボンが擦り切れ、汚れている。
「エルディバルト様っ、リドリーはっ」
少年特有の甲高い声が問いかけ、エルディバルトは太い声で「公の元へ送った」と簡素に応えた。
アジスが目に見えて息をついたが、すぐに口元にもう一度手を当てて叫んだ。
「ルティア様と姫さんが気を失って馬車の中で倒れてるんだ！」
「……ルティアが？」
――何故？
エルディバルトは水の中から男を完全に引き上げ、眉を潜めた。気丈なルティアが気を失うとは珍しい。普段は阿呆のような会話を楽しんでいるルティアだが、その実誰よりも男らしいことはいやでも知っている。
アマリージェが気を失うことはさもありなんだが、自らの婚約者がその辺りの小娘のように気を失うなど……――
「腕のナイフ傷からの出血が酷すぎて！　姫さんはそれを見てぶっ倒れるし、ルティア様はきっと血が流れすぎ――」
その言葉を耳に入れた瞬間、エルディバルトは小船の上でびしょぬれになり息をついている男の腹めがけて長靴（ちょうか）を叩き付けた。
「死ね」
怨嗟の言葉と同時にくぐもった唸り声と水音とが響き渡り、勢いよく男はもう一度水路に落ちた。

「か弱い婦女子に刃物を向け、あまつさえ私のルティアに怪我をさせるなど言語道断、我が主が手を下すまでもない。貴様は死ねっ」

水に落とされた男が腹部に受けた一撃に身をもだえ口に水が入り込んでもがいたが、やがて船をあきらめ水路を泳ぎ、それを追いかけて櫂をこぐエルディバルト。

それを唖然と見送り、アジスは咄嗟に伸ばした指先で宙をかいた。

「あー……もういいや、スミマセン。医者、どっか医者に馬車回して」

後半の台詞はぐりんと顔を回して馬車の壁を一度叩いた。

「神殿に回しますよ。あちらには医者も詰めてますから」

「じゃ、早くお願いします」

御者に声をかけ、アジスは馬車の扉をばたりと閉めた。

リドリーのほうは心配ないらしい。

心配なのは血の気を失い真っ青になってしまったルティアと、そんなルティアを見て自分がわれ先に気を失ってしまったアマリージェだ。

近くにいたほかの船子と御者に頼んで二人を馬車に乗せたはいいが、ルティアは「船を追って」という言葉を最後に気を失ってしまった。

医者に行くのが先だとおもったものの、言われた通りに水路を下った。

二人の女性を座席に横たえ、自分は中央に立ったまま箱馬車の壁に手をついて揺れに耐えながら、もう片方の手で額を抑えた。

「ルティア様の怪我はあのおっさんのせいじゃ……いや、結果としてあいつのせいか？　ま、いいか」

呟きと同時にふと自分の体のあちらこちらが痛むことに気付いた。

気が張っていた為に今まで体の痛みなど気付かなかったのだ。

「いってーなぁ」

言いながら、それは感情の欠片も無い音になった。

痛くない。

ルティアに比べれば、こんな痛みは欠片も痛くない。

「ルティア様、エルディバルト様……ちゃんとルティア様を大事にしてるよ」

先ほどのエルディバルトを見たらきっとルティアは激しく喜ぶだろう。そう思うとアジスは乾いた笑みを浮かべ、ついでその視線をアマリージェへと向けた。

一人で抱いて運ぶこともできない子供の自分が、これ程厭わしいと思ったことはない。

微笑みと微笑

――長い風呂の湯中りが原因か、はたまたただ単にあたしの血が一気に頭に集結したせいなのか、のぼせ上がるようにあたしはへたりと体の力を失い、危うくその場でしゃがみこみそうになってしまった。

それをさも当然のように片手で支え、ついでぎゅっと引き寄せられる。

「今日の香りはぼくと同じ香り」

うぎゃあっ。

首筋の辺りをすんすんと嗅いだ挙句に囁く言葉に、失われた体力を取り戻したあたしはじたばたと暴れた。

「なに、何してんのっ」

「お風呂あがりの濡れた肌って凄いね、めちゃくちゃどきどきする」

「ぎゃあっ、はな、離れて、離して、変態ぃぃぃっ」

ってか、お願い。周りにいる侍女さん助けてっ。

少なくともその場に二人はいる筈だというのに、彼女達はまるで感情が欠如した人形のように控えている。

見えてますか？

それとも現実逃避中でかすか？　そうですよね、コレは貴女達にしてみれば尊い人でしょうとも。

見ないフリでやり過ごすことが適うのであればあたしだってそうしたい。

「お願いだよ、リドリー。君が怪我とかしていないか確かめたいだけなんだ。少しじっとして」

切なそうに言われた言葉に、あたしはどきどきとする自分を押さえ込み、上目遣いで問い返した。

「確認……？」

変態的な意思はまったく無いと？

「何があったか判らないし、でも何かがあったのかは判ってるし。どれだけぼくが不安で怖かったか――君がはいっているお風呂に乗り込んで行きたいくらい心配したんだよ。それを必死に抑えてここでまっていたんだ。だから、暴れないで？」

せつせつと語る口調に、あたしは強張らせていた体を緩め、眉を潜めつつも小さくうなずいた。

「でも、怪我とかしてないのよ？」

「――」

自分と相手との間に距離を置く為に伸ばした手首を、そっと囚われる。

静かにそこを見つめられる感覚に、あたしは自分の二の腕に痣ができていることに気付いた。

「掴まれた跡、だね――可哀想に、怖い思いをさせたね」

穏やかに言いながらそっと痣の辺りを指先でなぞられる。

その唇からこぼれる言葉には慈愛が見えるのに、何故かぞくりと背筋が寒いような気がして、あたしは無意味に慌てて「幼馴染らしいのっ。あたし、最初わからなくて――前言ったわよね？　あの、結婚式の前に逃げ出したことがあるって。だからそれを知ってる幼馴染らしくって、ちょっとあたしを連れ帰そうと思ったみたい」

「どうしたの？　なんだか慌てているみたいだけど」

くすりと魔法使いは笑みをこぼし、小首をかしげた。

「君が悪いなんてちっとも思っていないよ？　ほら、他に怪我は無い？　痛いところとか。見せてごらん」

なぞられた腕をもう一度みれば、そこに痣はすでになかった。

さすがにここまでくれば「胡散臭い魔術師」ではなくて「胡散臭い魔法使い」に格上げだ。相変わらず胡散臭いという枕言葉は燦々と輝いているけれど。

「何があったのか話してくれる？」

あくまでも穏やかに問いかけられ、あたしは事の経緯を語りなが

ら、相手の手が自らのむき出しの腕や肩に触れるのを感じていた。
――け、怪我の確認、怪我の確認。怪我の確認っ。
内心で呪文を唱え続けつつ、そもそも今のこの男には疚しさなど感じないだろうと自分を落ち着かせる。
そう、まるで極普通の聖職者のよう！
よし、大丈夫。

――船着場で自分の幼馴染（？）と出会ったこと。その幼馴染は元婚約者の友人で、あたしを元婚約者の元に（ややこしい）連れて行こうとしただけだということ。でも、そもそもあたしと元婚約者の関係は破綻していて、どうして幼馴染があたしを元婚約者の元に連れて行こうと思ったのかは判らない。ただの親切心。もしくはおせっかいなのではないかということ。
あたしの説明を静かに聞き終えた男に、あたしは言葉を続けた。

「考えてみれば大層なことでは無かった気がするけど、今頃ルティアとかマリーが心配してるんじゃ、ないかしら」
あたしはなんだか落ち着かなくて早口で言うが、相手はタオルをぎゅっと片手で押さえ込んでいるあたしをじっと確認するように眺めている。
「ぼくは君を心配しているよ」
「うん、それは……判ってる、んだけど」
あまりにも相手の態度が真摯過ぎて、あたしは視線を泳がせた。タオル一枚で男性の前に立つなど尋常なことではない。マーヴェルの前でだってこんな事態に陥ったことはないのだ。
勢いに任せてべらべらと喋っていたが、喋る言葉がなくなってくるとなんだかとっても恥ずかしい。
あたしは無闇に耳の辺りに熱が集中するような思いに言葉をども

らせていた。

「本当はぼくが君のところに行きたかったけれど、どうしても手が離せないこともあってね。エルに行かせたけれど、ぼくがどれだけ歯がゆくて辛かったか、わかる？」

素肌の両肩に手を乗せて、真摯に落とされる視線と言葉にあたしは身を固くして小さくうなずいた。

胸の内にきちんと相手の言葉も想いも届いていたから、判っていたから。

そんな辛そうに言わないで欲しい。

「用事を終わらせてすぐに来たんだよ？　お風呂入っているとこに本当は飛び込んでいきたかったけど、君がたてる水音だとか、気持ち良さそうな鼻歌だとかがガラス窓越しに聞こえたりなんかするものだから、こうむらむらっと――」

「とりあえず出て行け！」

タオルを抑えているのとは逆の手を振り上げれば、いつもなら大人しく叩かれている変質者はぱしりとその手首を捉え、どきりとする程綺麗な微笑みを浮かべてみせた。

半眼を伏せるように、やけに艶やかに。

「元気そうで良かった。心配することは何も無いからね。着替えをすませてゆっくりとくつろいでいて。すぐにルティア達も来るだろうから、お茶でも飲んで待っていて」

捉えた左手の薬指の付け根にチュッと唇で触れて、まるきりいつもとは違う穏やか過ぎる程の穏やかさで「胡散臭い魔法使い」はあたしの手を離し、控えている侍女さん達に視線を向けた。

「頼みます」

「かしこまりましてございます」

丁寧に二人が言葉を唱和させ、退室する男をうやうやしく見送る。

あたしはなんだか居心地が悪くて、思わず声をかけていた。
「ねぇっ」
「――どうかした？」
どうって……
「あの、どこに行くの？」
心臓がなんだか落ち着かなくてとくとくと早鐘を打つ。
だから咄嗟にそう問いかければ、面前の青年は唇を引き結んで微笑した。
「エルのところだよ。早く行ってエルをとめないと――って、思っているのではないの？」
くすりと笑われて、あたしはほっと息をついた。
そう！
そうです。
あたしはうんうんっと力強くうなずいた。
「今思えば、あたしを連れて行こうとしたのは純然たる親切心だと思うのよ。勘違いとかそういうのでエルディバルトさんに酷い目にあったら可哀想よね！」
物凄く罵倒とかされだくったのは忘れていませんけどね。
――あれ、もしかしたら今頃本気で二人で酒を酌み交わしていたりしませんよね。
なんか心配するのが馬鹿らしい？
「エルに殺されていたら大変だからね――もう行くよ」
くすくすと笑う魔法使いは、軽く手を払うようにして片目を閉ざした。
「少し待っていてね」
すっと――目の前でその姿が消えるのはさすがにちょっと……微妙に、心臓に悪い。
しかしこの場にいる侍女さん二人はまったくもって動じることもなく、止まっていた時が動き出すかのようにあたしへと意識を向けた。

「お体は冷えておいでではありませんか？」
「もう一度入浴されてはいかがでしょう」
とてもありがたい申し出ではありますが、なんというかヤツのテリトリーで肌をさらしているのはもうイヤです。
＊＊＊
泳ぐことに関して言えば、水夫は誰にも負けない程の自負がある。だが、まさかその後に警邏隊どころか騎士隊が――王宮警護の為の騎士隊が自らを捕まえる為に槍を構える段に到っては、逃げるなど不可能だと骨身に染みた。
ざっと四方を包囲され、幾本もの槍先を向けられれば両手をあげて敵意も害意も犯意も無いことを示すほかなかった。
それでも生来の反骨精神から唾を吐き捨て、自分の面前に立つ大柄な男を睨み返した。
「随分な歓迎だな」
「無駄な口を叩くな」
「何度も言ってるがよー、そんな大げさな話しじゃないだろう？そもそも、あの馬鹿女の」
「誰が馬鹿女の話しをしている」
冷ややかに言い切る男は、無遠慮に腰に納めなおしてあった剣を引き抜いた。
「槍を引け――誰か、こやつに得物を与えよ」
低く恫喝する言葉に、騎士達は槍の先端を一旦上へと跳ね上げ、引いた。
「得物って、あんた。頭イカレテんじゃねぇのか？　俺は一介の水夫だぞ？　海賊でもねぇ。武器なんざどうしろって言うんだよっ」
救いを求めるように周りを囲む騎士達を見回してみたが、彼らは統率された集団としてただそこにあるだけであり、何ら救い手には

ならなかった。
　耳鳴りがし、頭ががんがんと痛む。
現状がまったく理解できずに「なぁっ」と声をあげれば、騎士の一人が腰にある剣を引き抜き、面前に放り投げ、また別の騎士が持っていた槍をがんっと石畳の上に投げ置いた。

　ざぁっと血の気が引いていく。
「冗談だろっ」
「冗談などではない。私は武器も無いものを嬲(なぶ)るような下衆ではない。武器を取れ――我が名はエルディバルト・クム・セイナ――」
「おやめなさい」
　名乗り上げようとした声を遮ったのは、穏やかなテノールだった。
四方を固めていた騎士達が、まるで漣(さざなみ)のように膝を折って礼をとる。
決して視線を合わせないようにとでもいうように、慌てて下げられた視線と、そして息を飲む音が辺りを満たした。
唯一立っていた名乗りをあげようとしていた髭の騎士のみで、その男にしても突如その場に現れた白い衣装の神官のような相手を前に一瞬怯んで見せた。

「公っ」
　神官、だ……ろう。
だらりと白い聖衣には細かい銀糸の刺繍。腰辺りまでの黒髪は艶やかで一瞬女性かと思わせる優美さを備えた男は、軽く左手の平で騎士の肩に触れた。
「公、ルティアは？　ルティアはどうなりました？　傷を負って気を失ったとアジス・トルセアから伝えられましたがっ」
「そうなのですか？」
　それまでの緊張など完全に無視した穏やかな言葉がゆるゆると空気をかえていく。
「公っ」

「冗談ですよ。ルティアのおかげでこうしているのですからね――心配は要らない。ここに来る前にきちんと手当てはしてありますよ。あの子ときたら頑固で治療は要らないだとか傷跡は消さないでいいとか」

「――傷が残るのですか？」

騎士が呻くように言えば、神官は微笑んだ。

「そんなことにでもなれば傷つくのは私のあの子です。ルティアの頼みでも聞き入れることなんてしませんよ。安心なさい」

その言葉に騎士は目に見えて大きく息をつき、胸元に手を当てて深く一礼した。

突如現れた救い手に、水夫がほっと息をついた。

誰だか判らないが、神官であれば無体はしないであろうという安堵感が満ちていく。どう見ても、この場で一番地位のありそうな相手が神官であるならば、きっと自分の話しをきちんと耳に入れ、誤解はすぐに解かれることだろう。

現に、面前の神官は穏やかそうな微笑を湛えているし、この男の言葉で猛々しさをみせていた騎士がその雰囲気も態度もかえてしまった。

どう考えても、今までよりも悪いことになることはないだろう。

ゆっくりと詰めていた息を吐き出すと、神官の眼差しが水夫へと向けられた。

「良かった。エルディバルトに殺されていたらどうしようかと思いましたよ」

「あんたそいつの上役か何かかい？　そんな猪突猛進なの野放しにしておくなよな」

つい悪い癖で軽口を叩けば、エルディバルトと名乗った騎士は色めき立ち「貴様っ」と声を荒げたが、神官服の青年は軽く手を向けてそれを抑えた。

「失礼しましたね」
丁寧に詫びを向けられ、思わずバツが悪い気がして「お、おうっ」と声が漏れる。
神官は微笑を湛え、まるで今日の天気でも話題にするように言った。
「殺してしまうなんて、そんな生ぬるい」
――喉の奥でくすくすと笑うその意味が、ゆっくりと自分に浸透するのに長い時間は必要としなかった。

謝罪と罰

待っていてといわれたところで、なんとなく居心地とやらは悪い。着替えを済ませて通されたのは、やっぱりなんだか無機質な白い部屋だった。

よくよく考えてみれば、コンコディアの神官長の邸宅に似ている。白くて無機質で人間味のない冷たい部屋。

置かれている応接セットもシックな作りで、ただし銀糸で細かい模様が施されているところなんかはちっとも安っぽいものではないけれど。

あたしはこの一年で貧乏性を更に悪化させたのだろう。広いところは苦手だ。玄関を入ってすぐに台所と寝台とが置かれているあたしの部屋程落ち着く場所はない。

白くて無駄に広いそんな場で一人、お茶と簡単な軽食と共におかれたあたしは居心地が果てしなく悪くてこっそりとテラスから庭へとおりたった。

丁寧に手入れの行き届いた芝生。子供の頃に暇つぶしで芝生の手入れをしたことなどを思い出し、あたしは芝の合間に雑草がないかな、引っ張ってすぽっと抜けると気持ちがいいんだよね。などと滑稽なことをおもいながら足元を観察しつつ歩いた。

広い庭には左手、右手と生垣も作られているし、その向こうは木々が生い茂って見える。

芝生の真ん中にはお決まりの噴水が置かれ、ここにもやっぱり竜がばっかりと口をひらいて水を吐き出していた。

あたしは自然とその竜の元まで足を進ませ、そっとその頭を撫でた。

竜のレリーフやモチーフに触れたのははじめてのことだったが、冷たい石の感触だと思ったものが、そのじつほんのりとぬくもりをも

っていてあたしは首をかしげた。
ああ、天気がいいから、かな？
「温かいだろう」
あたしが不思議に思っていることを見透かすように、突然言われた言葉にびくりと身をすくませて振り返れば、そこに随分とがたいのいいおじさん――というか、初老の男性が腕を組んで立っていた。
薄い色彩のゆったりとした神官達の衣装とは違い、騎士にも通じる装いだ。襟ひだのあるシャツに上着、ズボンに皮の長靴。
あたしは慌てて曖昧な微笑を浮かべ「こんにちは」と声を掛けた。
髪は元々金髪であったのかもしれないが、もうだいぶ白いものが混じっている。
堂々としたその様子はまさに偉そうだが、その口元には浮かんだ笑みは好々爺というところだろう。
ずかずかと歩み、その人物は口の端をもちあげるようにして肩をすくめた。
「その竜の由来を知っているか？」
「……竜峰の、竜、ですか？　眠っているという」
「そうだ。そしてここの水源は全て竜峰から辿るものだ――国の西半分はこの水脈が通じている」
つまらないことだというように言いながら、そのまま噴水にどかりと座る。
そして次にその口から流れた言葉は、異国の言葉のように意味の判らない一節だった。
あたしが瞳をまたたいていると、また肩をすくめられる。
「最近の若い娘は古き神代の言葉すら理解しないようだな」
やれやれといわれ、あたしは思わず気恥ずかしさに頬が染まった。
「古語を知らんか？」
「……幾つかの単語なら」

「ほぉ、言ってみろ」

明らかに楽しんでいる物言いに、あたしは多少むっとしつつも子供の頃などに耳にした言葉を幾つか発掘する作業に専念した。

「女神（ナトゥ）に、秘密（リーデ）に罪（ノウツ）……」

しかしやはり古き言葉などそうそう出てくるものではない。苦労して顔をしかめたところで、あたしは、ああっと思い出した。

「尊き人（コーディロイ）」

ふんっと鼻から息をだし、更に呆れたように肩をすくめる。

「子供ならばもっと身近なものがあるだろうに」

からかうような言葉に、あたしはもう一つ単語を思い出した。

「咎人（ユーテミリア）」

言葉にしてからその不吉な単語にぶるりと身をすくませた。じんわりと自分の中にいやな気持ちが湧き上がる。心臓がばくばくするような、物凄くいやな気持ちだ。

ほんの小さな子供の頃には、子供同士の悪口に使われるような単語だ。分別をわきまえて大人になる頃にはいつの間にか忘れ去られていく忌まわしいとされる言葉。

だからといってこんなに背筋をなぞるような大きな意味など無いというのに。

あたしの様子がおかしいのか、面前の男性は喉の奥を震わせて笑った。

「おまえもさんざ脅された口か？　私もな、子供の頃には乳母にさんざ言われたさ。竜を解き放った恐ろしき魔女の名だ。幾万もの人々を死に至らしめ、大地を焼き野原にかえてしまった恐ろしい魔女」

だがおかしいと思わないか？

初老の男は声を潜め、竜を叩いた。
「古語というわりに、竜の話しはさほど古いものではない。なんといっても三百年前のことだという。なれば、そなたはどう思う？その言葉がもとより咎人という意味合いであったのか、それとも後に付けられたものなのか？　どちらだと思う？」

あたしが相手の言葉をどう解釈し、また返せば良いものだろうと逡巡していると、あたしへと向けた言葉などもう興味が無いというようにまた口を開く。
「こんな話しは知っているか？　三百年前に竜を沈めた女の名はナトゥ――おまえが先ほど言っていたな。女神（ナトゥ）と」
男の手が竜の開いた口にかかり、水が無遠慮に手の上を流れていく。
「だが、彼女の名は元々ユーテミリアというのだ」
さらりと言われた言葉にあたしが瞳をまたたくと、まるで子供のように無邪気に笑い出した。

「さて、娘よ。私の話に驚いているようだが、私が真実を語ると思うのは間違いじゃ――なんといっても、愚かな娘がそうやって私の下らぬ話しに唖然とするのは好物だからな！」

げらげらと無遠慮に笑われ、あたしは呆気に取られた。
「だが愚か過ぎるものは好かぬ。お前はどうだ？　ただの愚か者か？　それとも、使える愚か者か？」
ひたりと向けられた視線は驚く程冷たく、あたしは息を飲み込んだ。
まるで好々爺であったその存在が、今は理解しがたい程に激しく面前で見つめてくる。口の中に唾液が溜まり、あたしはおそるおそるそれを飲み込みながら、どう応えるべきなのだと逡巡した。

まるでこのまま首元を捻られてしまいそうな緊張があたしを包み込む。

喉の奥がからからに乾いて舌が引き連れる。

何事かを言わなければいけないというのに、あたしはどう返答してよいのかも判らずに自然と自分の体が震えるのを感じていた。

「おまえにはルティアに頭を下げさせるだけの価値があるのか？」

ふいに声の調子を変えて問われた言葉に、あたしは息をついて相手を見た。

――そう、ここは神殿の庭先で、関係者以外は入れない。

そうであるなら、この男性は神殿の関係者である筈だ。

あたしはぎゅっと自分の手を握り締め、喉に溜まった唾液で舌を湿らせた。

「ルティアに頭を下げさせる価値など、あたしにはありません」

意味も判らないし。

なんでルティアがあたしのことで頭をさげなければいけないんですか？

「けれど、ルティアの為にあたしはいくらだって頭を下げます。ルティアに何かあったんですか？　今、ルティアを待っているところだったんですけど、あのっ」

「心配か？」

「当たり前ですっ。ルティアは――友達ですから」

ちょっと気恥ずかしくて言いよどむが、それでも勢いをつけて言えば面前の男性は喉の奥を鳴らして笑った。

「ではルティアの為に頭をさげよ。私に詫びよ――あの娘は私に背いた。どのような罰を与えてやろうかと丁度思案していたところだ。したがその代わりにおまえが謝罪し、おまえがその罰を受けるか？　できぬであろう？　それでも友と言うか？」

面白そうに言われる言葉にあたしはむっとしていたが、眉を潜めて相手を見返した。
「私が謝ればルティアを叱らないということですか？」
「そうだ。ついでにお前に罰を与えるが――それすら甘受できるというのであれば、私はルティアに一切とがめだてしない。だが、意味も判らず謝るなどできまい？　私がどんな罪でルティアを罰しようと思っているか判らぬのは怖かろう？」

――あたしはじっと面前の男性を見つめ、ほんの数秒の間を置いてうなずいた。

「あたしが謝って許されるなら、あたしが謝ります。あの……罰は、ちょっと怖いですけど」
正直な気持ちが出てしまったけれど仕方ない。
だって罰って何だか判らないし、面前の男性はなぜか妙な威厳がある。
――でも自分にできることならば、あたしはそれを受ける。
だって、ルティアは……あたしを守ろうとしてくれた。あたしの為に命まで自ら差しだそうとした。
その気持ちに応えずに、友達なんて言えるか！
勿論勢いばっかりですが、人生行き当たりばったりどうにでもなれ！

「では、私の言う言葉をきちんと違わずに言うがいい」
面前の男は威厳たっぷりに言うと、

「オジサマごめんね」

やけに可愛く謝罪の言葉見本を示した。
「……」

「ほれ、言うがいい。かわゆくな」

顎先でほれほれと促され、あたしは口元がぴくぴくと引きつるのを感じた。

面前の男性は噴水の淵にどっかりと座り、腕を組んだままの状態で偉そうに――

「お……」

「お？」

「オジサマごめんね……？」

……あたしもう十七才なんです。なんかこんなちっちゃい子供みたいな台詞とか語尾にハートマークすらついていそうな感じとか、恥ずかしくて憤死しそう。

脱力しているあたしの前で、謎の「オジサマ」は嬉しそうに二度うなずいた。

「さて、罰はまだ考え途中だ。しかし私も忙しいからな、次に顔を合わせた時の楽しみにとっておこう。ルティアに会ったら、オジサマがもう良いからたまには食事をしにくるようにと言っていたと伝えておいてくれ」

なに、なんなのあの嵐のような人は？

あわただしく立ち去っていった謎の人物の背を見送り、あたしはぐったりと噴水の淵に手をかけて思い切り溜息を吐き出した。

神殿の関係者は変人ばかりですか？

もう本当に早く帰りたい……

＊＊＊

「少し、話しをしまょうか？」
　相変わらずその神官は穏やかな物言いでそこにいた。
口元に張り付く微笑と、優雅な動き。
それだけ見れば男といえども眼福ともいえるものだ。だが、自分の体は背後で押さえ込まれ、連れてこられたその部屋の床下に押さえられ、無理やり上半身をあげさせられている為に背中がきしむように痛む。

「なんでオレがこんな目にあわなくちゃなんねぇんだよ？　オレがどんだけ悪いことしたって言うんだっ」
「おや、誘拐は重罪です」
　不思議そうに言われ、慌てて声を張り上げた。

「だから、誘拐じゃない！　保護だって何度言わせるんだよ。オレはあいつを――リドリー・ナフサートを婚約者のところに連れて行こうとしただけだ」
「随分と乱暴ですね」
「……それは、そもそもあいつが逃げるからだろう。あの女に聞いてくれよ。あいつは自分の結婚式を逃げ出しやがって、それでっ」
　ふーっと神官は深く息をつくと、まるで哀れむように眉を潜め、それからまたしてもあの冷たい微笑を浮かべた。

「素晴らしいですね」
「は？」
「あなたが言葉を発したほんの数十秒の間に、まぁ見事に不愉快な単語がこれでもかという感じで出ましたが、この短時間で私を怒らせることに成功した数少ない方です」
神官は微笑みながら言うと、組んでいた手をゆっくりと離した。

と、その手にはまるで手の平から出現したかのように何故か杖が一本握られ、その先端でくいっと水夫の顎が引き上げられる。
「まあそんなことはどうでもいい。貴方の罪は多くありますが、あの子に恐怖を与えたこと、あの子の体に痣を残したこと――この私から、あの子を奪おうとしたこと。さてどれが一番罪深いことでしょう」
顎を持ち上げていた杖が跳ね上がり、体がかしぐ。
ついでその背にとすんっと杖の先端を感じると奇妙な感覚が背中を覆った。
ぐいぐいと何かが背中の一点を押し、そして無理やりに進入する感覚。
そう、それは感覚だけだった。痛みはまったく伴っていないというのに、何かが背中の皮膚を無視してずいずいと入り込む。
まるで奇妙なイキモノが体を蹂躙するような感覚に、胃の中のものが食道を競りあがってくる程の嫌悪が広がっていく。
痛みがないという一点だけで、謎の恐怖が身をふるわせた。
「判りますか？　心臓――ここをつけば、あなたは死ねる。けれど、そんなことはしませんよ？　言ったでしょう？　死なんていうのは単純なものです。あっという間に神の手にからめとられるだけ。そんなことはつまらない」
相手の言葉の意味が判らない。
ただ背中が引き連れて、何かが確かに背から入り込み、無理やり肉体を突き進む感覚に瞳が無理やり開いていく。
「ゆっくりと時間をかけて、どうその罪を償わせようか？　痛みにはどれだけ耐えられる？　足の先、手の先からゆっくりと切り落として、君はいったいいつ死という恩寵を賜れるのだろうね」
囁かれる文言に額から汗が流れた。

――拷問紛いなことをされるほどのことをしたか？
いいや、そんなことは無い。確かに少し乱暴であったかもしれないが、だが、こんな風にっ。

「公、どうぞお止め下さい」
それまで控えていた髭の騎士が進み出て膝をつく。
「慈悲深い我が主よ、貴方様の御手をそのようなことにお使い下さいますな。お許し下さいますなら、私がいかようにも処分致しますゆえ」
一瞬救いが得られるかと思えば、その口から吐き出されるものは救いでも何でもない。
体中の汗が噴出し、がちがちと歯が音をさせた。

――こいつら、頭がイカレテル！

「僭越ながら進言致します。公が他者の命を奪うことは自由です。貴方様が望まれるのでしたら、幾つもの死体を面前に積み重ねも致しましょう。ですが、公。どうぞ私怨でその御手を血に染めることはなさらないで下さい。私がいくらでも貴方様のかわりをお勤め致しますゆえ」
「僭越が過ぎる」
冷ややかに男は言うが、やがて吐息を落とした。

「判ったよ、エルディバルト。私も少し大人気なかった」
神官は言いながらすっと水夫の背に差したままだった杖を抜き放ち、汗で濡れた男の額に手を当てて微笑んだ。

「夢を見るといい――この先、逃れることのできない夢を。
現に生活し、夜ともなれば悪夢があなたを包み込む。愛しいものを日々失い続ける悪夢を、他者によって奪われ、自らによって滅する

悪夢を、その命果てるまで」
――愛しいものを奪われる辛さを知るといい。
いっそ慈愛にすら溢れる物言いが脳を満たして魂を揺さぶる。
そして、微笑と共に、闇が……闇が世界を閉ざした。

女同士と男同士

神殿の関係者は変人が多すぎてついていけません。

魂の疲弊を感じながらあたしが庭園の噴水になついていると、ぱたぱたと芝生を駆ける足音と共に甲高い声があたしの名を呼んだ。

「リドリーっ」

切羽詰るかのようなその声はルティアで、あたしが「はいぃ？」と、ちょっと間抜けな声を発しつつ振り替えれば、その勢いのまま彼女に抱きつかれ、危うく噴水に頭から突っ込みそうになってしまった。

「ぶほうっっ」

肺が圧迫されておかしな音がもれてしまっても気にしてはいけない。

「無事ですわね？　ええ、勿論無事ですわよね？　そうでないなら正直に言って下さい」

先ほどのアレではないけれど、ルティアはあたしの体を無遠慮にばしばしと叩いておかしなところが無いかと確かめる。

「リドリーっ、正直におっしゃい！」

あたしは犯罪者か何かですか？

まるで自白を求められるかの勢いで言葉をたたきつけてくる姫君を必死に押しとどめ、相手が向けてくる駄々漏れ心配していますオーラに口元がにやけてしまうのを堪えた。

こんな風に他人に心配されることが心地よいことだと知らなかった。彼女は――あたしの友達なのだ。そして、きっと今は居ないアマリージェも同じようにあたしに対してくれる。それを信じられる

ことがなんだかこそばゆいというかくすぐったいというか、不思議な気持ちに満たされていく。

「何をニヤニヤしていらっしゃるの？　まさか、どこか頭を打ったのですか？」

「ルティア、口調がふつーの人みたいになってますよ」

それに、ちょっと最後の一文は酷くないですか？

あたしそんなにオカシイですかね？　いや、口元が緩みっぱなしなのは自分でも理解していますけれど。頭の心配までされてしまうとなんというか微妙。

「リドリー！」

ルティアは怒るように怒鳴るから、あたしは軽い調子で彼女の二の腕をぽんぽんっとたたいた。

口元がにやけてしまうのはもう仕方ない。

「無事です。大丈夫――ルティアこそ平気ですか？　マリーとアジス君は？」

ルティアは一旦あたしから離れ、じろじろとあたしの体を眺め回してやっと納得したのか大きく息をついてぎこちなく微笑んだ。

肩を上下させ、ゆっくりと瞳を伏せると彼女はころりと普段の彼女に戻って見せた。

「マリィとアジスは別室です休んでおりますわぁ」

その変わり様に、あたしはまたしてもぶふっと噴出した。

「なんですのぉ？」

眉を潜めて唇を尖らせる女性はいつもの彼女だ。

いつもの、なんだか間延びしてのほんっとしたメイド服が良く似合うルティア。

あたしが笑いを堪えていることにだんだんと不快を覚え始めたのか、ルティアは無造作にあたしの頬を引っ張った。
「な・ん・で・す・のぉ？」
びにょんっと頬を引っ張られながら、あたしはくふくふと笑い「どうして口調が変わるのか、今度聞かせてくださいね」と言ったが、彼女は今度ではなくその場で即答した。
「あら、それは簡単ですわぁ。エディ様おつむのかるーい方が好きなんですものぉ。でもルティってば厳しく育てられてしまいましたからぁ、せめて口調だけでもお馬鹿っぽくしてますのぉ。ああ、それに」
彼女はにっこりと微笑んで付け足した。
「あの方、私の名前を覚えてくださいませんでしたのぉ。覚える必要などちぃっとも感じてくださいませんでしたのねぇ。ですからインコに記憶させるように、ルティは自分のことをルティと言い続けましたのよ？」
……それはエルディバルトさんが馬鹿なんじゃ。いや、言わないでおくけど。
あたしが反応に困っていると、ルティアはくすくすと微笑を落とした。
「あの方がルティアと名前で呼んでくださるようになったの、実は結構最近ですのよぉ？」
うわーっ、殴ってやりたい。
いや、殴るのは無理でも、とにかく絶対に何か報復をしよう。
あたしは山ほど馬鹿女呼ばわりされたことも、泳げないのに川に落とされたことも忘れておりません。
そして報復を誓ったことも。
ここに新たに自らに誓う。絶対にナニかする。今のところ考えつか

ないけど。
あたしは薄ら暗い感情を心の隅っこにしっかりと収納した。

「それより、どうしてあのようなことになりましたのぉ？　あの男はいったいどなた？　まさかコイビトとは言いませんわよねぇ？」
「それはナイです」
あんなごっついコイビトはまずないです！
あたしはルティアのからかうような口調にぶんぶんと首を振り、先ほど尊きあほんだら魔法使い様に説明したように口を開いた。

「実は、あたしってば家出をしたことがありまして。あの人はどうやら幼馴染？　らしいんですよね。で、あたしを見かけたものだから……」
「幼馴染らしいって、どうしてそんな曖昧なんですのぉ？」
「――あたし町の人とあまり接触無かったんで。お祭りの時とか顔をあわせたかもしれないんですけど、日曜学校とかも行ってないですし」

勉強らしい勉強はあまりしていない。
文字の読み書きくらいはできるけれど、それを教えてくれたのは通いの家庭教師。父は女に勉強は必要がないと考える人だったし、十を過ぎた頃には母は居なかった。

基本的に本が友達の寂しい青春でごめんなさい。

「父がちょっと変な人で、無駄に小金持ちなものだから娘達が誘拐されるとでも思っていたみたいなんですよね。だから敷地内からあまり出してもらえなかったんです」
マーヴェルが来てこっそりと抜け出したことは幾度もあったが、マーヴェルはたいてい一人か二人で来ていてあまり大人数ではなか

った。
お祭りの時とかに一杯年齢の近い子供達を見たが、人の多さに圧倒されるばかりで引っ込み思案なあたしはティナの後ろに隠れてばかりいましたしね。

「誘拐？」
「時々へんな人が家の周りをうろついてたり、屋敷のモノがなくなったりって――勘違いだって言ってるのにちっともきかなくて」

あたしがへらへらといいながら手を振ると、ルティアは何故かつつっと視線を剃らしたが、すぐにぐっとそれを押しとどめてあたしを見た。
「で、その幼馴染はどうしてあんな乱暴なことなさるのですかぁ」
「――家出娘を見つけたから連れ帰ろうとしたみたいです。えっと、心配させてごめんなさい」
「心配なら致しますわぁ」
ルティアは緊張を解いたように、より一層ほにゃりとした口調で言った。

「友達ですもの」

うっ、ぎゅっとしたい。
やばい。あたしめちゃくちゃルティアに抱きついてしまいたい。
――もしかしてこれは変態思想？
可愛いから抱きつきたいっ、てコレってあの変態様の思想に似てない？　伝染してる？
そんな動揺を鎮めるように、あたしはわたわたと口を開いた。

「そういえば、さっきルティアのオジサンという人に会いましたよ」
照れ隠しにわたわたと言えば、彼女は瞳を瞬いて小首をかしげた。

「オジサン、ですかぁ？　どんな方でしょう。わたくし、親戚という方はいらっしゃいませんのですけれどぉ。お養父様の関係かしらぁ」

「壮年のちょっとガタイのいい感じの人で、目つきがなんだか鋭い人でした。白髪交じりの」

「生憎とそういった方は多くいらっしゃるわぁ」

確かに、あたしの説明もあまりにも漠然としすぎていて、これだけでは人の特定など難しいことだろう。

「そのオジサンがルティアに伝えて欲しいって――もういいからたまには食事でもしに来なさいって」

言い方は違かった気がするが、あたしはざっくりと伝えた。

ルティアはますます眉を潜めていたが、ふいに殴られたかのようにハっと息をつめてまじまじとあたしを見た。

まるで穴が開くほどという言葉通りに。

「な、なんです？」

思わずたじろぎ一歩退いたあたしに、ルティアは軽く口元を引きつらせるようにして自らの指先を唇の端にそっと押し当てた。

「ここに――唇の下に、引き攣れたような小さな傷跡がございませんでした？」

彼女の言葉にあたしはぐぐっと眉を寄せて相手の顔を思い描いてみたが、生憎とそこまではっきりと記憶していなかった。

あたしの記憶中枢は自分でも信用ができないくらい曖昧です。

アレとの出会いだって中途半端にしか覚えていませんしね。

「ごめんなさい。覚えてないです」

「……そう。では違う方かしら」

彼女は小さな声で呟くと、意識を切り替えるようにふるりと小さく首を振り、いつもと同じように微笑んだ。

「もしそういう方とお会いしたら近づいてはいけませんわよ？」
「――口元に傷の人ですか？」

「ええ。その方は……」
ルティアは迷うように視線をさまよわせ、ぼそりと言った。

「女性を泣かせて喜ぶ変態ですのぉ」
「近づきません！」

確かにそんな雰囲気ありました！

＊＊＊

「エル？」
水盆の中に手を浸して穢れを流す主へともの問いたげな眼差しを向けてくるエルディバルトの視線に彼の主は穏やかな笑みを向けて促した。
「何か言いたいことが？」
「ああいったことは、公らしくありません」
「私らしい？」
小さな笑みを湛える主の様子に触発されるように、エルディバルトは言葉を募らせた。
先ほどまで見せていた冷淡な雰囲気などもう微塵も無い。それが嬉しく、また悲しかった。

「以前の公は……あのようにお怒りになられたりなさりませんでした。どんなことにも慈悲と慈愛をもって接しておられた。最近のあなた様は……」
言いよどむ言葉に、相手が濡れた手を払う。
瞬時の水気が消え去り、その指は耳に掛かる黒髪を掬い後ろに流し

た。

「私が竜公として相応しくないというのであれば提言すればいい」
「そんな訳ではありません！　そんなっ。あなた様程素晴らしい竜公など居なかった！　先代などっ」
「エル――先代の話しはなしだ。彼の人は……ルティアの祖父だよ」
「だからこそっ。だからこそ私は先代が許しがたいっ」
咄嗟に言い放った言葉に恥じるように、エルディバルトは視線を剃らした。

「無礼が過ぎました。あなた様こそ我が主にして竜公――竜の守り人でございます」
「相手は寝っぱなしだけどね」
冗談でも言うようにくすりと笑う主にエルディバルトがぎょっと目を見開く。
しかし主は身を翻し、控えている侍女に声をかけた。
「湯殿に行く」
「禊の仕度はできておりますが。湯殿の方はまだ湯の入れ替えが済んでございません。もうしばらく――」
お待ちいただくこととなりますが。
そう続けようとした言葉を、彼らの主の声がさえぎった。

「うそっ、お湯替えちゃったの？」

……意味が判りそうだが判りたくないエルディバルトだった。

意思と矜持

「止めてっ、止めて下さい！」

血の気の失せた顔をしてぐったりと力を失っていたルティアだが、突如現れた神官服の青年の姿に狼狽するように身を震わせ、悲鳴のように叫んだ。

まるでその相手から害されるとでもいうように。

だから、アマリージェもアジスも困惑し、咄嗟に「大丈夫です。尊き人ですよっ」と声をかけたのだが、しかし二人の気持ちとは違う次元でルティアは訴えていた。

馬車で神殿へと向かいながら、せめてもとルティアの腕を強く縛ってそれ以上の血が流れないように適当に対処してみたが、それはどうやら正解であったようだ。

神殿についた途端に、従僕が先んじて呼び寄せた神官と医師とがすばやくルティアとアマリージェを運んでくれた。

医務室と思わせる一室に運ばれたアマリージェは、すぐに気付け薬の小瓶を鼻先に当てられ、そのつんと鼻の奥を刺激する香りにむせながら目を覚ました。

「手当ては悪くないが、また何かあった時はもう少し上のほうできつく縛るんだ」医師はルティアの傷の具合を確かめながらアジスにそう言っていた。

「傷は、残るんですか？」

相手が女性ということもあり、綺麗に血をぬぐわれて薬品を塗布されていく腕を見ながら問いかけた。

痛ましさに声がかすれた。

「残りませんわよっ」
途端に未だ小さく咳き込んでいるアマリージェが、まるで噛み付くように口にする。顔色の悪い表情で、こぶしを握り締めたその様子はまるでアジスが悪いとでも言うように。
「残ったりなど致しませんっ」
「でもっ」
何故アマリージェが自分に食ってかかるのか判らずに反論しかけ、そして口ごもった。

――オレが悪いのかよ！

その思いが口を出なくてよかった。
そう、オレが悪い。
何故なら、オレがいたのにみすみすリドリーを連れ去られた。結果としてルティアは怪我をする羽目に陥ったのだ。
たとえ彼女が自らそうしたのだとしても、元を正せば自分に非がある。

アジスがぐっと言葉を詰まらせると、やっと意識を取り戻したものの、未だぼんやりとした様子で天井を見上げていたルティアが不意に声を荒げたのだ。

「やめてっ、止めてくださいっ」

誰もが息をつめた。
突然その場にその人物が現れたのだ。
アジスはその姿に一瞬ぎょっとしたが、それだけだった。
何故なら、彼にとって尊き人は不思議の力に溢れた馴染み深い相手であったのだから。何があっても不思議でも何でもない。そういうモノ、なのだ。

竜峰で眠る竜を護り、不思議の能力を操る尊き人――竜守りにして神官長。

その姿を見て、ほっと息をついた。

そう、この人がいるのだからルティアの怪我など、どうということはない。

だからこそ、彼女はそんなことを容易くできるのだ。自らの体を傷つけたところで、何ほどのこともない。傷などあっという間に癒してくれる。

それは跡形もなく。

他の誰にできずとも、この相手にはできる筈。

それは絶対的な信頼だった。

そしてそのことをアマリージェも心得ていたのだ。

アジスとアマリージェは自然と安堵の吐息を落し、知らず数歩づつその場を離れた。自然と他者にそうさせる、それは絶対的な畏敬の念。

普段の相手とはまったく違う、本来アジスがよく知る神官長としての近寄りがたさをかもす青年は、顔にかかる髪を軽く払い、ルティアの言葉に反応した。

「ルティア？」

穏やかな面差しに眉を寄せて優しく名を呼ばれても、ルティアは頑なに唇を噛んだ。

まるきり頑是無い子供のようなしぐさで。

「公、竜公。これは罰です。手当てなどなさらなくて結構ですっ」

「ルティア」

「これは私が負うべき罰です。私は彼女を護ると誓ったのですもの。この怪我を消すなど、必要がありませんっ」

強い意志を叩き付けるルティアは、苦しげに喘いだ。
血が多く流れすぎ、止血と増血の為の薬草を施されていても未だ万全とは程遠い。
そんな状態だというのに、ルティアはまるで負った傷を相手から必死に隠すかのように身じろいでさえ見せる。

「公っ」

必死の懇願に、ルティアの面前の青年は吐息を落とした。

「それは自己犠牲？　自己満足？」

その言葉は辛辣に響き、アジスは目を見開いた。
相手が何を言おうとしているのか、十一歳の少年には難しい。
そもそも、ルティアが何故自らの傷の手当をするななどと、そんなことを言うのか、アジスには信じられなかった。
一瞬で傷を治療してしまえるはずの相手を前に、その治療を必死で拒む。その理由が理解できたとき、アジスは息苦しさを覚えた。
ついで、神官長の口から吐き出された言葉に、更に身が引き連れるような気持ちになった。
声音はあくまでも穏やかであったが、内容は決して穏やかなものではない。神事の折に見せる優しさなど微塵もない。
冷たく胸に突き刺さる刃のように。

「悪いですが、そんな傷を残されたら私のあの子が気に病む。
あの子を愚かだとでも思っているのですか？
あの子が連れ去られた後にあなたに傷ができて、自分とはまったく無関係だと思うと？
そう思っているのですか？」
冷たく向けられる言葉に、ルティアは唇を噛んでいた。

「……」

「それを消されることであなたの気持ちがおさまらないといわれても、悪いですがあなたの願いはかなえてあげられません」

淡々と言いながら、左手の中指と親指とを弾くように音をさせた。

それだけで全てが終わることが、この場の誰にも明らかであった。

ルティアはいっそう泣きそうな表情を浮かべ、すでに傷跡一つ失われ、ただ手当ての跡だけを残すのみとなった自らの腕を反対側の手でなぞり、唇をかんだ。

強くつむいだ唇から、漂わせる威厳から、ルティアがどれほど自分自身に対して憤りを抑えているのかはひしひしと感じることができる。

その強さはアジスを圧倒した。

今、彼女の矜持は踏み潰された。

頑なに拒んだところで相手はものともしない。

自らの矜持で傷を放置しろというルティア。

それをリドリーの為に無視する男。

――アジスは正直貴族というものが好きでは無かった。

特権階級というものに対するのは、畏敬の念でもなければ畏怖でもない。ただ自分とは違う生き物であるというだけ。別種のモノ。

その時はじめて、相手が自分とは違うイキモノであるかもしれずとも、同じヒトであり、また自分とは違う高い場にいるべき意味を感じ取ることができた。

その強い意志を、気高さを、尊きものだと感じて寒気すら背をなぞる。

アマリージェに対する気持ちが、途端に恥ずかしいものに感じた。

自分の口にする「守る」とルティアが口にする「護る」の違い。守りたいと思っているこの気持ちは、ただの「言葉」でしかないような恥ずかしさ。まるで母親に簡単に告げる口約束のようだ。

たとえ破ったとしても「そんなもの」と笑える。

それくらい軽々しい「言葉」だったような気がして、アジスは穴があれば入りたいような、突然叫び声をあげてこの場から逃げ出してしまいたいような気持ちになった。

「公っ」

ルティアは悲鳴のように声を荒げたが、面前の相手は奇妙な微笑を称えた。

「もういくよ。まだやることが残っているから――ルティア」

声音が変化した。

ただゆっくりと確かめるように。

「あの子のことを、頼めるね？」

「言われるまでもありません」

ルティアの瞳は、まるで面前の青年を憎んでいるかのように見返していた。

――その緊迫が途切れたのは、尊き人がその姿をまるで冗談のように消し去ってからのことで、アジスは喉の奥に溜まった唾液をやっとのことで嚥下することができた。

しゅるりという音が辺りに響き、気づけば顔色の悪いアマリージェがルティアの腕に巻かれた包帯を解いているところだった。

「いやです」

「……」

「いやですからね」

アマリージェは黙々と白い包帯を見ながらいった。

「あんな尊き人は……いやです」

「マリィ、ごめんなさいね」
ルティアは苦笑し、アマリージェの前髪をそっとかきあげた。
「ルティア様もいやっ。あんな風に自らを傷つけることも、こんな風に怖いことをおっしゃるのもいやですわっ」
アマリージェはうつむき、言葉を震わせていた。
「わたくしはっ、いつものルティアさまが、好きですっ」
その背中を見つめながら、アジスは自分の手を握りこんだ。

――もっと、もっと強く。
どんなことからも大事な人を守りぬけるように。
ルティアのような強い意思と高潔な心を持つ騎士に。

面前で見せ付けられたその激しさを決して忘れないと心に誓ったものの、ルティアは次の瞬間にはふにゃりと顔をほころばせ、身を震わせるアマリージェの頭を抱き寄せ「そうですわよねぇ、公はちょっとねじがゆるゆるって感じが一番ですわよねぇ。でも大丈夫ですわよぉ。リドリーをロープでぐるぐる巻きにしてお皿に盛り付けて差し上げれば、途端にこわーい公はいなくなりますからねぇ。マリィ手伝って下さいますぅ？」
と、途端に高潔さががらがらと音をさせて崩れ落ちるようなことを言う。

「いくらルティア様の頼みでも、そんな悪事には手はお貸しできませんからねっ」

アマリージェが真っ赤になって噛み付くように言えば、ルティアは「あらぁー？」と奇妙な声をあげ、ちらりとアジスへと意味ありげな視線を向けてくる。

アジスは思い切り視線をそらした。

――御領主様、もう心を惑わされたりしません。立派なのは御領主様だけです。オレはきっと御領主様のような男になってみせます。

アジスは、コンコディアの領主に新たな誓いを捧げたが、唯一立派な人物と思っている御領主は、今頃アジスのかわりとして祖母マイラのパン屋でうさぎのアップリケ付きエプロンをして嬉々としてパンを焼いていたりするのだが、もちろんそんなことは欠片も知らない。

報復と幸福

「神殿に居るのも居心地が悪いですからぁ、ルティの家に参りませんかぁ？」

神殿だろうとユリクス様の屋敷だろうとあまり大差は無いけれど、まぁアレの縄張りよりはマシだろうと同意したのだけれど、

「よく考えてみれば、さっさと帰っていいんじゃ……」

確か神殿から帰れる筈！

というあたしの訴えは、にこやか笑顔のルティアに却下された。食い下がってはみたものの、あたしの訴えなどルティアはものともしなかった。

もしかしてルティアって最強かもしれない。

だが、生憎と最強ルティアの思う通りにはならなかったが。

神殿の庭を横切り、アマリージェ達とばったりと廊下で再会を果たすと、アマリージェは強張る表情でいきなりがばりと頭を下げた。

「ごめんなさい！」

何がですか？

予想外の動きに、あたしは思わずびびってしまった。

ご存知かもしれませんが、小心者なのであまり激しいリアクションには許容量一杯一杯になってしまいますよ。

「な、何が？」

むしろあたしが心配かけたと詫びるべきではないだろうか？

本気で動揺してしまったあたしだが、アマリージェと共にいるアジス君すらなんだか表情が硬い。

「わたくしが舟遊びなど提案した為にリドリーを危険な目にあわせました」
「違うだろ。俺が一緒にいたのに、きちんと護れなかったのがっ」
慌てて言葉を重ねるアジス君に、あたしは顔をしかめてちらりとルティアを見てしまった。
なんだろうね、これは。

原因なんてあたしが一番知っている。
誰が悪いのか？
――そりゃもちろん、あたしだ。
あたしですよ。完全に。
あたしのしでかしたことが引き金だから、当然、彼らの誰かが悪いなんて事実は存在しない。
あたしは深く溜息を吐き出した。

今回の一件の根本原因はあたしだ。
それに対して何故にこの人たちときたら自分が悪いなどと言うのだろう。
あたしは両手を伸ばしてルティアとアジス君とを一緒にぎゅうっと抱きしめた。
「心配かけてごめんね。ありがとう」
「リドリー……」
「誰が悪いなんていったら原因はあたしにあるから、あたしが悪い」
あの人だって――未だに名前も思い出せないマーヴェルの友人にしたって、悪気とか悪意であした訳じゃ、きっとない。
家出したあたしが目の前に現れたものだから、強行な手段に出てしまっただけ。マーヴェルの友人としてそうしてしまっただけ。
逆の立場であたしが家出した知り合いを見かけたら、少なくとも声くらいはかけたろう。決して担ぎ上げて誘拐しようとはしませんけどね。

それはともかく――悪い人がいるとすれば、
「それに、他に悪い人がいるとすれば、それはエルディバルトさんだけだから！」
あたしはぐぐぐっと二人を抱きしめたまま力強く言い切った。

「え？」
「は？」
「あら？」

という三人の小さな声が同時にその場に響いたが、あたしは二人から体を引き剥がし、ぐぐぐっと拳を握りこんだ。
ルティアには悪いけれど、あたしはエルディバルトさんへと報復すると誓った自分を忘れてはいない。

さんざ馬鹿女だといわれまくり、挙句運河に叩き落された恨みは早々忘れられるものではないのですよ。
更に言えば、エルディバルトさんのルティアへの仕打ち許すまじ！
馬鹿な娘が好きだと？
ルティアの名前も覚えられなかった人間の言うことですか。
心優しいルティアが許しているからといっても、ルティアの友人として絶対に許してなるものか！

さぁどのように報復してやろうか。
あたしは現在人生で一番黒い自分を自覚している。

「エルが何かしたの？」
あたしは悪役よろしく「ふふふ」と鼻を鳴らしながら、口に笑みを刻んだ。
「さんざ馬鹿女馬鹿女呼ばわりされた挙句、泳げないのに運河に叩

き落された恨みは絶対それ相応に思い知らせてさしあげましょうとも！」

今まで人間関係がうっすい人生でしたので、実は嫌がらせをするだのしないだのという事柄はあたしには存在していなかった。

子供の頃に自分の持ち物が無くなったりとかはたびたびあったけれど、あれはきっとお手伝いさんのうっかりだろうし。

お父さんは泥棒だの何だのってぴりぴりしていたけれど、子供のリボンだの靴だの下着だの盗む泥棒など普通に考えている訳がない。

お手伝いさんのうっかり、もしくは近所の犬の収集物になったに違いない。

それはともかく、果たしてエルディバルトさんの報復は実際どうすればよいだろう。靴の中に画鋲いれたり……持ち物を隠したり？

女子学生ではあるまいし、なんだかちっとも打撃にならない気が――

こういったスキルはあまり持ち合わせていないのが残念でなりません。

むしろエルディバルトさんの前でルティアといちゃいちゃして見せ付けるとか。

それを言うならアレといちゃいちゃしたほうが打撃か？　でもそれって自分にも打撃になりそうじゃありませんか？

そこまで身を切るのはちょっと……

「馬鹿女……」

ぼそりと落ちた言葉に、あたしは真っ黒い考えから浮上し「そうなのよ！」と勢いをつけて顔をあげ、自分がすでに思いがけず報復の為の狼煙をあげていたことに気づいた。

「叩き落す……」

その場にいたアジス君とアマリージェは完全に停止して微妙に引きつり、何故かルティアは必死に笑いを堪えるようにし自分の口元を可愛らしく片手で押さえ、そして――忠犬エルディバルトさんの唯一絶対の主様は微妙な笑みを浮かべてそこに立っていた。

なんだってこんなに神出鬼没なのでしょうと思いはしたが、どうやら今回は歩いて来たようでその後ろにはしっかりと問題の人もいたりして、あたしは思わず喉の奥で呻いた。

「エル」

響いた言葉に、エルディバルトさんはびしりと背筋を伸ばして「はいっ」と返事をした。

それはそれは素晴らしい程の勢いで長靴（ちょうか）を打ち鳴らし。

「三月程顔を出さなくてよろしい。蟄居」

主の言葉に、途端に忠犬は哀れな程の声をあげた。

「公っ、公それは駄目です。いけません。御身の警護はどうなりますかっ。公っ」

というかイヤです。

と慌てて吐き出された言葉が一番の本音っぽい。

「まったく全然必要なし」

完全に犬を追い払うしぐさで手をふり、彼のご主人様はにっこりと微笑んでエルディバルトさんに止めを刺した。

「消えてよし」

がっくりとうなだれるその様子はあまりにも哀れだった。

そう、それは飼い主に捨てられたわんこそのもの。そして捨てられ

たわんこを更に主は足蹴にするように言葉を足した。
「リトル・リィ。何か他にエルディバルトにやりたいなら何してもいいよ？　運河に落そうか？　いっそ海峡を横断しろって言ってみる？　体力はあるよ。それとも一人牛追い祭りとかやらせてみようか？　一晩パントマイム？」

おまえは鬼か。

ちょっとの間、確かにあたしは真っ黒い心で報復をどうしようと悩んだものですが、誰が命にかかわりそうな報復などしようものか。
一晩パントマイム？
それ誰が得をするの？

それよりも手を伸ばすな。
何であたしを引き寄せようとする。公共の面前での痴漢行為は警備隊に突き出しますよっ。
あたしはじりじりと逃れようとしたが、いつの間にかべったりと張り付かれてぎゅうっと腰に手が回された。

「えっと……そこまでしなくていいわよ。それに、護衛とかって必要なんでしょ？」
あたしは体を突っぱねるようにしながら、当面の問題と向き合っていたが、首筋に顔をうずめた変態は他人様などものともしない。
「まったくいらない」
だから、その相手の人生を完全否定いるようなこと言うのやめてやってよ。
それに、ほら。あんたがあたしに張り付いているからエルディバルトさんが苛々してるし。

これもある種の報復活動っぽいけど、なんかもう頼むから匂いは

かがないで。
あたしは慌ててルティアを見たが――それはただ後悔だけを誘うものだった。

ルティアは心から幸せそうにうっとりと、捨てられた犬状態の自分の愛しい人を見つめながら呟いた。
「エディ様かわいぃぃ」
エルディバルトさんのルティアに対する扱いが非道だと憤ったあたしだが、もしかしてそれは間違いかもしれない。
「海峡横断とか素晴らしいですわぁ」
いや、だからそこまでやったら死ぬからね？
どれだけ体力ある人だって無茶ですからね？
ルティアのエルディバルトさんへの扱いも十分酷くないですか？

「せめて地下牢くらいにしてあげて、ね？」
思わずあたしがぽろりと言うと、ルティアは不満そうに「それはあきましたー」と唇を尖らせた。
……そりゃ、飽きるだろうね。
必要以上に入れていたし、眺めておりましたしね。

「リトル・リィが望むとおりにしてあげるよ？」

耳元で小さな笑みとともに落とされる言葉に、あたしはちらりとエルディバルトさんを見て、もうすでに十分打撃を受けているのを感じた。
「蟄居とか大げさなことしなくていいから」
蟄居って、詳しくは知らないけれど騎士とか貴族にはきっと厳しい罰則だろう。何より、ご主人様至上主義のエルディバルトさんがご主人様と会えないのはものすっごく辛いだろう。

あたしは寛大な心でもって言った。

「その髭そり落とすくらいでいいわよ？」

トレードマークの口髭をばっちりとそり落としてやるというのはどうだろう。

なんだか毎日きちんと手入れをしていそうだし、もしかしてとっても落ち込ますことができるかもしれない。

我ながらものすっごい譲歩だと思ったのに、エルディバルトさんは激しく憎しみの篭った目でギンっとあたしを睨み、ルティアは一層楽しそうに笑いを堪えていた。

どうやら……髭の騎士にとってその髭はものすっごい大事なものだったようです。

なんか更に嫌われましたか、あたし？

……どうでもいいですけどね。

ええ、本当に。

それより問題なのは、

「いい加減はなせぇっ」

「だってぼくは今すんごい傷心なんだよ、リトル・リィ！」

心底悲しそうに声のトーンを落として言われ、あたしは同情心から力を緩めた。

「なに、何かあったの？」

あたしを引き寄せていた手を緩め、正面から顔を合わせて神官長の衣装の麗人は鼻をすすりあげるように悲しげに言った。

傷心という言葉の通り、物凄くせつなそうに。

「リトル・リィの使った後のお風呂の残り湯捨てられちゃったんだよ！

すぅごく楽しみにしていたのにっ。でもぼくってば気づいたんだよ。
もっといい方法があるでしょ？
ってことで一緒にお風呂に入ろうっ」

「お断りです！」

護衛騎士が涙を流さずに泣いているので、これはこれで報復として成り立つような気がする。

悪夢とストレス

「私はお前に言われて髭を剃ったのではない！　公の命令に従ったまでだ！」

びしりと突きつけられた言葉は、幾度反芻しようとも感想は一緒だった。

――そうですか。

はいはい、終了。

もう頼むから夢にまで出てこないで欲しい。

あたしはもぞりと狭い寝台の中で身じろぎし、あふりと欠伸を一つ。

「夢見最悪……」

せっかく自分の家の自分の寝台で寝ているというのに、何故こんな夢を見てしまうのか。あたしは顔をしかめながら身を起こし、狭くて薄暗い――でも自分の稼ぎで暮らしている自分だけの安息の地を眺め回した。

たかが十歩程しかない狭い部屋。

レンガで造られた三階建てのアパート。小さな窓からはほんのささやかな光と小鳥の声が聞こえて、壁にひっつけてある寝台は多少手狭で、きっと母さんが見たら卒倒とかしちゃいそう。

小さな水場があって寝台があって、一人で食事をとるには十分なテーブルと一客だけの椅子がある、本当に小さな小さな……あたしの家。

「なごむー」

あたしは伸びをしながら枕を抱きしめ、自分の自宅を堪能した。

何度も言うように、夢見は悪かったがこのさい寛容な心でもって流

そう。

髭の騎士にして王弟殿下の第三子息様――竜公の騎士にしてその忠実なる駄犬であるところのエルディバルトさんは、ご自慢の髭を綺麗さっぱりとそり落とした。

そうしてはじめて知りました。

……実は二十代らしいです。

三十過ぎていると思っていたのですが、ぎりぎり二十代らしいですよ。

髭があると無いとでもまるきりイメージが変わる。意外に若い――ルティアが惚れてしまったのも無理らしからぬ立派な騎士だった。

黙って立たせて居れば、十人中六人くらいは見惚れてしまうかもしれない。ただし、中身はちっとも変わらないエルディバルトさんでしたが。

「いいか！　私はおまえに言われて髭を剃ったのではない。公のご命令に従っただけだからなっ」

と、決してご主人様に聞こえないように声を潜めてぎりぎりと奥歯を噛み締めて叩き付けられた言葉は憎しみというアラザンで飾りつけられていた。

それはそれはきらきらしくも。

「まぁ、エディ様ってば立派な負け犬の遠吠えですわぁ」

ルティアが心底嬉しそうに言っていた台詞もある意味忘れられない。

あたしはルティアを見てはじめて理解した。

愛って……複雑怪奇。いや、怪奇現象かもしれない。

人によっては、ルティアの愛は愛ではないと言うのではないだろうか。

見ようによってはただたんにいじめっ子ですよ、ルティア。

あたしは朝から「やれやれ」と小さく呟き、ふと気付いてしまった。エルディバルトさんがルティアの愛を疑うのはもしかして無理もないのではないか？　第三者であるあたしが「それは虐めじゃないの？」と思うくらいなのだから、やられているエルディバルトさんだって虐められていると感じるのかもしれない。

ま、どうでもいいか。

あたしはもぞもぞと寝台から這い出て、歩いてテーブルの上にある水差しの水を水盆の上に落とし、ばしゃばしゃと顔を洗った。冷たい水があたしの眠気をすっきりと洗い流す。片手を伸ばして椅子に引っ掛けてあるタオルを引き寄せると、あたしは「ぷはー」と声をあげながら顔を拭った。

「よし！　今日も一日がんばろー」

ぱしんと頬をたたいて気合を入れて、あたしはいつもと同じように玄関を出て階段をおりて――そしていつもと同じように謎の魔術師姿の男ははと時計のように顔を出した。

「おはよう、リトル・リィ！　いい朝だね」

途端にあたしは現実を思い出してしまった。

現実、それはすなわち自分の左手にずっしりと重く存在を示すアレな感じの指輪。そして広がるあたしの平和でささやかな幸せ生活。

あたしは戦いに赴くような気持ちで腹部にぐっと力を込めた。

「おはよう――魔法使い」
「魔法使いじゃなくて魔術……あれ？」
いつもと同じやりとりだと思った男は、いつもと同じように訂正しようとして言葉をとめ、ついで微笑んだ。
「君こそぼくの魔法使いだよ。リトル・リィ！」
はいはい、朝から元気なのは判りました。
がばりと人を抱き込もうとするその腕から一歩離れて、あたしはつとめてにこやかに言った。

戦いは先手必勝。

「お願いがあるの。魔法使い」
「リトル・リィの頼みならどんなことでもきいてあげる」
「ありがとう。じゃあ、三つくらいあるんだけど聞いてね？」
「うんっ！」

あたしはびしりと指を一本たてた。
「お仕事中は指輪が外れるようにして欲しいの。粉がついてしまって汚れるし、水仕事もしなければならないから」
あたしがにこにこと作り笑いで言う言葉に、面前の魔術師姿の男はステッキの先端で自分のトップハットを押し上げ、眉を潜めつつも了承した。

「じゃあ、はずして」
あたしは相変わらずにこやかに左手を差し出し、ヤツがそれを掬い取るようにして一旦指の先端に口付けを落とし、ついで指輪に唇で触れるのを見つめた。
手が触れることに慣れ始めた自分に驚く。
白手に包まれていてもわかる、冷たくて繊細そうな指先。あたしの手よりずっと華奢にすら思える。

だというのに、まるで壊れ物でも扱うようにあたしの手をそっと持ち上げ、触れる。そんな風にされるとあたしは胸の中にざわざわとざわめくものを感じて触れられたままの手を引っ込めてしまいたい気持ちになる。

白手に包まれた逆の手の親指と中指とがゆっくりと指輪をはずしていく、そして完全に指から外れた時、その指輪には繊細そうな金鎖がしゃらりと揺れていた。

魔法使いは微笑み、金鎖の華奢な留め金をはずして広げた。

「首に下げていて」

そしてそのまま当然のように金鎖をあたしの首に添わせ、後ろ手でその留め金をかちりと嵌め込みながら、あたしの唇に口付けた。

「で、次は？」

「……」

あたしはその腕の中で居心地の悪さに身じろぎした。

口付けされるのは判っていた。

けど、それをとめるでなく、あたしが思ったことといえば——ちゃんと歯も磨いたし、ミントを噛んだし、大丈夫！　という全然ちっとも大丈夫でないもので、そんな自分の頭を咄嗟に壁に打ち付けたいくらい動揺していた。

何が大丈夫か？

あたしの頭がぜんぜん大丈夫じゃない！

「あ、あのね。その……」

「なぁに？」

「パン屋に来ないでね？　ここであんたは有名人だし、マイラおばさんも驚くし！」

仕事の邪魔をしないで下さい。
あたしはせつせつと訴える。
職場はあたしの心のオアシスです。
自分の部屋も当然そうですが、一階下におりると謎の世界が広がっていると思うと、そこはかとなく安心できない。

「リドリーがぼくのところに顔を出してくれれば約束する」
あたしはこくこくとうなずいた。
毎日顔を出すとは言ってない。言ってませんよ。
あたしが口付けを受け入れたことで調子に乗ったのか、もう一度身を伏せようとするのを押しとどめた。

「それと、これが一番大事なんだけど」
「うん？」
「――人前で抱きついたり、キスしたりしない！　変態発言も禁止っ」
よし、言ったぞ。
この旅の間にあたしは十分理解しました。この馬鹿モノ様ときたら他人のことなどちっとも気にしない。誰がいようとどこにいようと自分のしたいことをしたいようにするのだ。

「そんなっ、今だってすんごい我慢しているのにっ」
信じられないというように大仰に目を見開いてふるふる首を振る男に、あたしは引きつった笑いを浮かべた。
……我慢してアレですか、そうですか。
一生我慢して過ごして欲しい。ぜひとも。

「でもそれってつまり人前じゃなければ何してもいいってことだよね？」

絶望の淵に落とされたようにふるふると身を震わせていた腐った思考回路の男は、突然息を吸い込み、今度は逆にきらきらと瞳を輝かせた。

まるで純粋無垢な子供のような微笑を浮かべ、魔術師姿の成人男子は両手を合わせて幸せそうにのたもうたのだ。

「人がいなければ何でもやり放題？」

あたしは今日は自らの身を犠牲にしてもこの町で暮らす為の大事な約束を取り付けようと思っておりました。

にこやかに笑顔を絶やさず、たとえ口付けされても抱きしめられても強い信念で我慢して神官長の言質を勝ち取るのだと。

まさに根本から腐っていようとも神官長。約束さえとりつけてしまえばきっとあたしは幸せになれると……平穏な生活を送る為の我慢なのだと。

我慢我慢。

「いやだな、実はリトル・リィもぼくが欲しくて我慢できないならそういってくれればいいのにっ」

「――」

ふ、ふふふふ。

殴ったら駄目よ、リドリー・ナフサート。

「リトル・リィってば照れ屋さん。でもぼくってばリトル・リィが一緒にいるっていうだけでもう触りたいしキスしたいし、色々我慢できなくなっちゃうんだよ」

魔法使いってば腐れ頭さん。

あたしは引きつった笑いで肩を震わせ「……約束、してくれる？」

ともう一度言葉を重ねた。

「これはある種の本能みたいなものなんだよ、リトル・リィ。我慢してどうにかなるものではないんだよ。だからここは諦めてもらうしかないよ」

しょうがないよね！

と何がしょうがないのか判らない言葉を吐く男に、あたしはぐぐっと拳を固めた。

「それに、リトル・リィだって我慢しなくていいんだよ。君にはぼくの体の隅々まで触る権利がある。さぁ遠慮しないで！　あんなところやこんなところもリトル・リィなら大歓迎。むしろ思い切り恥ずかしい――」

作戦終了の鐘が華々しく脳裏に響いた。

＊＊＊

久しぶりに【うさぎのパン屋】にはりきって出勤したあたしを、マイラおばさんはそれはそれは嬉しそうにぎゅっと抱きしめて迎え入れてくれた。

「お帰り、リドリー」

隠すことの無い好意を向けられ、あたしは照れくさいような気持ちでマイラおばさんを抱きしめ返して、少しだけ滲んだ涙を隠した。

――マイラおばさん、本当に会いたかった。

実の母親に会うよりずっと安堵感を与えてくれる人がいるとは思わなかった。

なつかしい豪快な笑い声とパンのほわんとした美味しそうな香り。アジス君は庭で薪割りなんぞをしながら「おはよー」と気楽に声を掛けてくれる。

あたしは上機嫌で朝の準備を整えたが、あたしを歓迎してくれたのは、残念なことにマイラおばさんとアジス君だけだった。

「あああ、もぉっ。どうしてリドリーがいるのっ」

という台詞を耳に入れたのはすでに一度や二度じゃなかった。

「スミマセンネ」

あたしは乾いた笑みを浮かべながらうさぎのアップリケのついているエプロンを引っ張った。そして、もうお客さんから言われる次の台詞も判っている。

「リドリーが居ない間、御領主様がパン屋で働いていてくれたのにっ」

そう……あたしとアジス君がいない間、なんとアマリージェの兄にしてこの町の御領主様であらせられるジェルドさんが【うさぎのパン屋】で働いていたのだと聞かされた時、あたしは思わずジェルドさんの屋敷の方角にぺこぺこと頭を下げまくってしまった。

「そもそも、どうしてリドリーが居ないってことで御領主様がリドリーのかわりに働いてくれてたのよ？　まさか、まさか、もしかしてリドリーってば御領主様と親密な関係とか言わないわよね？」

「とんでも無いこと言わないで下さい！　御領主様に申し訳ないですよっ」

あたしは慌ててぶんぶんと首と手を振った。

あたしと御領主様が何ですと？　あまりおかしな噂をたててジェルドさんに迷惑がかかったらどうしてくれますか。

ま、所詮一般人リドリー・ナフサートと御領主様ではただの悪意

の無い戯言でしかないですけどね。
あたしは常連さんの不満そうな言葉に適当に相槌を打ち、ジェルドさんがどれだけ素晴らしい人であり、またなおかつどのようにパン屋で仕事をしていたかを延々と聞かされつつ午前中の仕事をこなしていた。

それにしたって、確かにパン屋の人手は足りなくなってしまっただろうが、そこで何故ジェルドさんがパン屋で働くなどという珍事が起こったのかは理解できない。
いや、あの人って物凄く人が良さそうだから――いやいや、だが領主ですよ？　誰か他の人間を差し向けるとか色々と手立てはあったと思うのだが。

実はジェルドさんは色々とストレスを抱えていて、その発散の為に心から楽しくパン屋で働いていたらしいことまでは、さすがのあたしでもこの時は判らなかった為、ただひたすら「ジェルドさんって本当にいい人だなー」と関心しまくっていたが、この噂が元でジェルドさんが更にストレスで寝込むなんて、その時のあたしは勿論知らなかった。

殺人兵器と嵐の前

ああ、帰って来たんだなぁとあたしがしみじみと実感したのは、マイラおばさんの新作パンを目の前にしてからだった。

「今回のは自信作だよ！」

というその言葉の通り、香りは食欲をそそる美味しそうなものだったが、何を目的として作られたパンであるのか、マイラおばさんはニヤニヤとした表情で言おうとはしなかった。

ちらちらとアジス君とあたしの視線が交差する。

言葉はなくとも今、あたし達は一卵性双生児並みに恐ろしい程の意思疎通を見せた。

――食べれば？

――食べろよ？

どちらが先に手を出すのか、じりじりとした緊迫感。

決闘を目前とした敵同士といったところで大げさではないだろう。

あたし達はこくりと喉を上下させ、裏切りは許さないという鬼気迫る雰囲気をかもしながら、二人同時にトレーに乗せられた白くて丸いパンを手にとった。

「何をぐずぐずしてるんだい？　早く食べて感想を言っておくれよ」

こちらの緊迫などそ知らぬ様子で、マイラおばさんはふっくらとした手を腰に押し当てて胸を張る。マイラおばさんの胸で横幅のあるうさぎのアップリケがなんとも愛らしい。

長年使われたエプロンは哀愁すら漂わせていたが、今はまったく関係が無かった。

マイラおばさんは本当に自信があるのだろう。

あたしはそれを心から信じたい。

あたしとアジス君はちらちらと相手をうかがいながら、一秒でも相手より先に食べる勇気は無いという様子で無言のやりとりを繰り広げていたけれど、最終的にうなずきあい、諦めの境地でもって、ばくりと同時にパンを齧った。

「――！」

そしてあたしもアジス君もおそらく同時にその衝撃に打ちのめされた。

「かたっ！」

いま、まさか今パンをかじろうとしただけなのに、がつんっていいましたか？

目の前に火花が散るほどの衝撃に、あたしは呻いた。

「かってぇよ！　何だよ、これはっ」

顎、やばい顎。

思い切り噛み付いたあたしとアジス君は、自分の顎をしっかりと押さえて悶絶した。

どうたとえたら理解してもらえるでしょうか。あともう一つ階段があると信じて足を踏みおろしたのに、すかんっと足は空を切るかのような衝撃。いや、逆？　逆ですか？

無いと思っていた階段がもう一段存在して、危うく階段ですっころびそうになったような……

「あんた達、もうちょっとゆっくり食べなよ」

しかし呆れた様子のマイラおばさんはこちらの悶絶などものともしなかった。

「このパンはね、最近の子供達は柔らかいものばかり食べて顎が弱いっていうから作った固パンなんだよ。表面は固いけど、中はバターたっぷりの美味しいパンなんだ」

まさにあんた達に丁度いいパンだろう。

言いながらマイラおばさんは肩をすくめ、パンをつまむとそれを二つに割ろうとした。

割れなかった。

もう一度両手で半分に割ろうとして、それでもできないと知るとマイラおばさんは眉を潜めながら直にパンを口にもっていった。

勿論簡単に食べれる訳はない。

マイラおばさんはこちらを伺うようにそっと視線を向け、三人の間に微妙な空気が広がった。

「食えるかぁ！　ばぁちゃんの作ったソレは石かっ。武器かっ。嫌がらせかっ」

怒鳴るアジス君を押さえつけ、あたしは慌てた。

アジス君の気持ちも判るのですが、あたしにはマイラおばさんの気持ちだってわかる。マイラおばさんはいつだって悪気があっておかしなものを作成している訳じゃない。たとえそれが殺人兵器並みに破壊力、及び殺傷能力の高いものだったとしても、それはあくまでも結果であって、悪意では決してないのだ。

愛する孫息子に怒鳴られ、マイラおばさんが目に見えてしぼんでしまう。

豪快な体をもつおばさんがしゅんっと沈むと、この場の明かりすら落ちるかのようだ。
あたしは焦って口を開いた。
「スープで浸して食べてみたらいいんじゃないかな？　ナイフでスライスして浸して食べたらきっと美味しいですよ。香りは凄くいいし、食欲そそるしっ」
必死の言葉に、一旦気を落とし始めたマイラおばさんはいつも通りあっけない程浮上した。
「そうだね。じゃあ、一杯あるからリドリー持ってお帰り」
……バスケット一杯の石パン、いや固パン。
あたしはそのパンの処遇に困り、アマリージェに分けようかと思ったのだが、それを察知した様子のアジス君にしっかりと釘をさされた。
「姫さんや御領主様に届けるのは禁止だからな」
アジス君は今や立派な領主館の守護神だった。
ギンっと三白眼であたしを睨み上げ、威嚇する様子は北部の犬そり用の犬のように雄々しい。
やがては狼の風格を漂わせそうだが、悲しいかな現在は身長もアマリージェより低い弱冠十一歳。ちょっと目つきの悪い子犬のようだ。
あたしは乾いた笑いを浮かべた。
アマリージェや御領主様が駄目なら、残るはつまり――ココだ。
あたしは仕事あがりに領主館の裏手にひっそりとたたずむ白亜の屋敷を訪れていた。
これはつまり、来たくて来た訳ではなくて、この大量にあるパンの

行く末に困ったから来たからであって、あのあんぽんたん様に会いに来た訳ではありません。
あたしは自分の胸に手をあてて、三度程そう呪文を唱えた。
胸に当てた指が、洋服の下にぶらさげられた指輪に触れる。実は結局はずしてもらって以来指には通していない。こうやって首から提げているのだって、自宅に置き去りにでもしたら最後、また無理やり指にはめられそうだという恐怖の回避行動にほかならない。

「――だから、違うから」
あたしは好き好んで会いに来た訳じゃない。会いたくない訳じゃないけど……今回はたまたまパンを届けに来ただけです。
よし、これでいい。
あたしは決意を込めて、玄関ドアにあるノッカーに手をかけようとしたのだが、扉は内側からすっと音もさせずに開いた。

「長様はご不在です」

無表情な女性は淡々とおっしゃる。
「中でお待ちいただくことになりますが、どうぞお入り下さい」
あたしはいえいえと断ろうとしたのだが、相手は無表情だというのに威圧的な空気をかもし、気の弱いあたしは簡単に敗北した。

＊＊＊

白を基調とした部屋は相変わらず寒々しい。
人が暮らすにはどうにも人間味の無い屋敷だ。あたしはあまり好きじゃない。
こんな場で毎日一人で暮らしていたら、気持ちがどんどん沈んでいってしまうような気がする。

それでなくともあたしときたら前向きなほうではないので、もつとこう人生を謳歌できそうな明るい色にかえてしまいたい。
すくなくとも、カーテンも白って……なんだかなぁ。
あたしが通された居間で居心地悪く身じろぎしていると、侍女さんが静かに頭を下げた。
「夕餉はいかがいたしましょうか。食堂にご用意致しましたが、こちらにご用意しなおしましょうか？」
その言葉にあたしはぴんっと背筋を伸ばした。
ものすごく魅力的なお誘い。
今日の夕食予定といえば、あの固いパン。スープつけるのはいかにももったいない。けどスープがなければ絶対に無理。
しかも今はおかしな人もいない。
だがしかし、あたしの中の常識が、主がいない家で勝手に食事するってどうなんだ？　と言っている。

あたしは立ちあがり「いえ、もう帰ります！」と宣言するように声をあげたのだが、それにかぶせるようにのほんっとした声がかかった。

「一緒に食べましょうよぉ」
「……ルティア、来ていたの？」
居間の扉をひょこりとのぞきこんだルティアはにっこりと微笑んだ。
しかも、今日の彼女は侍女服（メイド）ではなかった。

「……なにそれ」
あたしは思わず素で問いかけた。
普段の侍女服に慣れたあたしだが、今日の衣装に関してはまったく理解ができなかった。
本日の彼女は白を基調としたドレス。そして腰の辺りには薄い青色のエプロン。つまるところレースたっぷりのエプロンドレス。

額には相変わらずのヘッドドレス。
侍女といえば侍女服の様だけれど、どちらかといえばそれは――

「看護婦です」

ああ、やっぱり？
あたしは言葉を飲み込んだ。
そうかなと思いました。思いたくなかったけど。

「……えっと……理由は聞かないほうがいいのかな？」
あたしは思わず脱力しながら言った。
「エディ様ときたら看護婦に鼻の下を伸ばしてましたのよぉぉぉ」
侍女服（ぜんかい）とやっぱり似たような理由なんですね、そうですか。
あなたはいつも楽しそうで何よりです。
それにしても――エルディバルトさん……看護婦って。

「あれ、エルディバルトさん怪我とかしたんですか？」
まったく関心はないですが、一応聞いてみる。
あの人が怪我をしようが寝込もうがあたしには一切関心はありません。関心があるとすれば、あの人への報復活動があまりにも中途半端であったこと。
何より、あたしはあたし自身の手でエルディバルトさんにやりかえしてやりたかったのだけれど、結果としてあたしでは無くて魔法使いの手をかりてしまったことが悔まれてならないのだ。
虎の意を狩る狐のような真似は良くないです。

「ちょっと堀に落ちましたのぉ」
ルティアは嬉しそうにいいながらひょこひょことあたしのもとに近寄り、あたしの腕を引いた。

「……堀？」
「公が、しばらく顔を見たくないとおっしゃるものだから反省の意味を込めて川に飛び込みました！　人間って丈夫ですわよねぇ」
自分からそんな試練を。なんて阿呆な人だろう。
「その後で公にご機嫌伺いに顔を出して、更に顔を出すなといわれたものだから足にすがりましたのぉ。それで足蹴にされてまして……いつもよりちょっとしつこかったものですから、鼻血を出す羽目に」
……泣ける。
ルティアもその時のことを思い出すのか、半眼を伏せて口元に手を当て――笑いを押し殺していた。
「それより、食事にしましょ？　今日は公ってばお忙しいのですぅ」
「いや、当人がいない家でくつろぐのはちょっと」
あたしは愛想笑いで言いながら、先ほどから何度か聞いた「忙しい」を尋ねた。
「忙しいって？」
ルティアは一旦ふっと真顔を浮かべ、すぐに微笑した。
「台風が派生したのですって。普段でしたら自然の摂理に公はお手を煩わせることもありませんけど、今回は本人の希望でしばらく様子を見たいのですってぇ」
くすくすと笑うルティアは、更にあたしの腕を抱くようにして引いた。
「食事くらいいいじゃありませんかぁ。無駄に捨てることになってしまいますものぉ」

捨てる、という単語にあたしの中のもったい無いおばけがむくむくと反応し、あたしはルティアに引かれるままに食堂へと足を向けることを承諾し、ほんの少しだけ魔法使いのことを考えた。

台風――普段はただのあんぽんたんで変質者で痴漢行為しか考えていないようにしか見えないのに、アレでちゃんと神官長だとか竜公だったりして慈悲深い行動なんてされちゃうと、あたしはアレに対してどう接していいのか困ってしまう。

とりあえず……次に会った時にはちょっとくらい褒めてあげてもいいかもしれない。

「あら、このバスケットは何ですのぉ？」

ルティアがふとあたしが持ってきたバスケットに気付き、あたしはどうやらきちんと仕事をしているらしいアレにコレを差し入れするのは無体であることに気付いた。

「エルディバルトさんにあげてくれる？」

ルティアは不思議そうに瞳をまたたいていたが、あたしは無理やり彼女の腕にバスケットを押し付けることにした。

一応コレだって食べ物で作られた食べられる物だ。たとえソレが凶器のように固くて顎が酷い目にあってしまうとしても、間違いなく食料。

しかも美味しそうな香りだけは漂わせている。

「あ、あたしからって言ったら食べないかな。じゃあご主人様からって言っておいて」

ほんのちょっと罪悪感が浮かんだが、嬉々として食べようとするその姿をルティアはきっと存分に楽しんでくれるだろう……結果的には。

黒い天使と地雷

その日の夕食程のんびりと楽しく、そして美味しいと思わせてくれるものは無かった。
格好だってわざわざ着替えて正装だの何だという堅苦しいこともなかったし、一緒に食べている友人は楽しい話題の提供者でもあった。
ただし、彼女は看護婦さんのような姿をしていたし、給仕係もいるというのだけ目をつむることができるのであれば。

メイン料理である羊肉のローストにナイフを当てながら「むかし、マリィにジョルドのお嫁さんになってとお願いされたことがありますのよぉ」と、思いがけない告白にあたしが御領主様の悲しい過去とか暴露してはいけませんと！と、ハラハラとしてしまっている頃に、この屋敷では見たことの無い黒の上下のお仕着せらしき服装の男が控えめに入室し、あたしに一旦頭を下げ、そしてルティアの横に行く身を寄せてその耳もとに何事かを囁いた。

小さな声で二人は二・三囁き合い、そして相手は深くうなずくと、またあたしへと体ごと向き直り「失礼致しました」と一礼して退出した。
あたしは瞳を何度か瞬き、ルティアに問うべきか問わざるべきかと逡巡したが、答えはすぐにルティアからもたらされた。
「食事中にごめんなさいねぇ」
「いや、いいのだけど」
何かあった？　という言葉は飲み込んでおいたが、ルティアはとても良いことがありましたのぉとばかりに口を開いた。

「ふふ。ちょっとした知り合いの方を探してましたのぉ――その方が見つかったらどんな時にもすぐに知らせるように言っていました

のよぉ」

ルティアは楽しそうにころころと笑った。

とろけるように幸せそうに微笑み、手元の皿にある羊肉にフォークとナイフとを当てる。

彼女の指先がほんの少し力を加えただけで、柔らかな肉はすっと綺麗な線を描いて切れ、羊肉の周りのソースがその表面に美味しそうにからめられた。

「心配しておりましたのよぉ、なんだか気の病らしくってぇ。なかなか眠れないのですってぇ。おかげで職場にも顔を出していらっしゃらないようですしぃ、居場所もはっきりしませんしぃ」

ルティアは相変わらず間の抜けたようなほにゃんとした口調で続ける。

その為に一見するとちっとも心配していたようには見えないが、内容的には確かに心配するに値しそうなものだ。

気の病というものがどういうものか判らないが、人間眠れないというのはなかなか厳しい。どんなに辛い時でも結構ばったり寝れてしまうあたしにはあまり無縁だけれど、きっと眠れないというのは凄く辛いと予想はできる。

「眠れないっていうのはストレスみたいなものなんですかね？　それは確かに心配ですね」

「ええ！　なんだか判らないですけどぉ、夢見が悪いんですってぇ。それで眠るのが怖くなってしまったとかぁ。大の大人がおかしなことですわねぇ。それで、仕事にも来なくなってしまってぇ、ちっとも見つからないものですからぁ、ルティとぉっても心配しましたの。でも、ちゃんと見つかりましたからぁ。明日あたり行って来ますわぁ」

「夢見が悪いってのは、確かにイヤですよね」

あたしも子供の頃の夢を見ると悶絶したくなりますよ？　ただアレは悪夢と断定するのはちょっとアレなんですけどね。
いや、悪夢といえば確かに悪夢！
その代わりあたしはむしろ率先して見たいと思っているけれど。
自分の記憶を取り戻すために。思い出したくないシーンばかり出てくるのはいかんともしがたい。

「ルティ基本的に夢は見ないのであまり判りませんわぁ。ちゃんと寝る前に運動すると夢なんて見ないくらいよぉく眠れますのよぉ」

ルティアの明るい言葉に、あたしはつくづくルティアは優しいなぁと口元が緩んだ。
時々とっても怖いんじゃないかという片鱗も見せるが、病に陥ったであろう人を気にかけるような面も見せてくれる。

あたしの心が一瞬ほんわりと温かくなったが、ルティアの「寝る前の運動」という言葉にぐっと思考が停止した。
いや、うん……考えちゃ駄目ですよ。
ただのさらぁっと流せる爽やかなハナシです、うん。現にルティアの表情には一点の曇りも無い。

そ、それにしても！
つくづくルティアはエルディバルトさんにはもったいない。

あたしは内心でちょっと良くないことをふつふつと考え、フォークに刺した羊肉にソースをたっぷりからめて口にした。

とにかく！
「その人がが早くちゃんと眠れるようになるといいですね」
「ルティ、とぉっても眠れる良い薬を持ってますからぁ。明日届け

てあげますわぁ」
――悪夢なんて見る暇もありませんわぁ。

ルティアはナプキンで口元を拭い、小首をかしげるようにしてこくりとうなずいて見せた。
あたしは思わずぷっと噴出し「まさに看護婦（はくいのてんし）ですね」とその服装をあてこすった。

ルティアの持つ薬がどんなものかは知らないが、一般庶民には理解できないくらい高価だったりする素晴らしい薬に違いない。気の病とやらで眠れないといったところで、睡眠効果の高い薬であれば、すこぶる良く眠れることだろう。
眠ることさえできれば、きっとその病とやらも改善されていくことに違いない。

――素人判断でめちゃくちゃ適当だけど。

「ところで一つ聞いていいですか？」
給仕係りがメインの皿を片付けている間、あたしはルティアに問いかけた。
「なんですぅ？」
「――エルディバルトさんが居ない時もその口調なんですね」
いや、もう慣れましたが……
あたしが張り付かせた笑みでルティアを見ると、彼女はふっと息をついた。

「普段から言ってないとぉ、エディ様の前で普通に喋ってしまいそうなのですものぉ。ルティはエディ様色に染まる純白の花嫁なのですわぁ」
可愛らしく言うくせに、ルティアはそのままぼそりと続けた。

「乙女ではありませんけどぉ」
余計な補足は要らないですから。
脱力したあたしの前に、すっとデザートの乗った皿が差し出された。
「今日のデザートはオレンジのコンポートのアイス添え」
説明と共に、ちゅっと首筋に唇が触れて、あたしはびくぅっと身をすくませた。
「その後はぼくを召し上がれ」
「あらぁ、お帰りになりましたのぉ？」
がちんと固まっているあたしなど無視して、ルティアがのほんっと言う。
あたしは固く身をすくませたまま、デザート皿から離れた右手が自分の右側からテーブルに置かれ、ついで反対側も同じようににょっきりと腕が生えて自分を囲んでいることにどう反応するべきかと考えていた。
かぁっと体温が無遠慮にあがり、だらだらと汗が流れるのを感じる。
背後から感じる体温と、そしてこの現状を無視したルティアと――
そしてこの屋敷の主との言葉のやりとりは勝手に続いていく。
「今日のところはこれといって進展はなさそうだったからね」
「ではぁ、邪魔者は退散いたしますわぁ」
「デザートを食べて行ったら？」
「ルティも特別なデザートが良いのですわぁ」
くすくすといいながら、ルティアはさっさと席を立ってしまう。
あたしは首を竦めつつじりじりと視線をあげ、必死に眼差しだけでルティアに「行かないで！」と訴えたが、ルティアはあたしよりも絶対にこの男の味方だった。

「お二人とも良い夜を」

そう……うすうす気付いておりましたが、ルティアはあたしとコレを天秤にかけたら絶対にコレに向けてその天秤皿を傾ける。

あたしとルティアは友達だが、もしかしてコレとルティアは親友？

なんか激しく悔しいんですが。

酷いよ、ルティア。

変態類友には勝てる気がしませんよ。

いや、そこに混じるつもりも無いけど。

軽やかにルティアが食堂から消えてしまうと、あたしの右と左からにょっきりと生えた腕の右側がデザート用のスプーンをとりあげ、コンポートとアイスとを掬い取ってあたしの口元に運んだ。

「はい、あーん」

「……」

「あーん」

み、耳もとで囁かないでっ。

あたしはぞわぞわと背筋に感じるものに、思わず泣きたい気持ちを抱きながら自棄になってばくりとスプーンにかじりついた。

冷たいオレンジの味が口いっぱいに広がる。

それを美味しいと感じるより、この現状をどう打開すべきかと考えを巡らせたのだが、背後霊は楽しげに言った。

「ごめんね、せっかく会いに来てくれたのに居なくて。寂しかった？」

そりゃ勿論全然ちっとも寂しくなんか無いです。

「いや、あのっ、会いに来たって訳じゃっ」

あたしはぐいんっと身を動かし、背後にいる男を見上げた。
その眼差しが楽しそうにからかうようにあたしを見下ろし、小首をかしげる。

「そうなの？　じゃあ、何をしに来たの？」

極普通に、当然でるべき問いかけだ。
だがそれはあたしを窮地に陥れた。

――あんたに暴力的に固いパンを届けに来たの！

そう、あたしは好き好んで来た訳ではなくて、必要があって来たのだ。バスケット一杯のあのパンを押し付けようとして来たのだ。
だがしかし。
パンは無い。綺麗さっぱり。
バスケット一杯のパンはエルディバルトさんにあげて欲しいとルティアに渡してしまった。
ではあたしはいったい何をしにこの屋敷を訪れたのか？

――他人様の屋敷に夕食を食べに来た。

ああ、悲しいかな……あたしはそういう常識は持ち合わせておりません。しかも屋敷の主そっちのけで！

あたしは泣き笑いの顔でさまざまな回答を捜し求めた。
誰もが納得できて違和感の無い回答。他人様の家を訪れて、なおかつ夕食まで食べていても不自然でない回答。
果たしてそんなものが幾つあるというのだろう。
そしてあたしにはそんな台詞が思いつく頭は生憎と無かった。
そう、無い。

「あなたに、会いに、きた、の」

あたしは今まさに絞め殺される鶏のような声を絞り出した。

面前の男は一瞬その瞳を見開き、ついでゆっくりと、とろけるような微笑を浮かべて見せた。

踏んだ。

あたしは今確実に踏んではいけない何かを踏んだに違いない。

狼さんとなめくじさん

人生とは何ぞや。
そは後悔の連続である――などと言った先人がいたかどうかは知らないけれど、あたしは現在ずぅーんと重いものにのしかかられていた。
窓から差し込む太陽の光とか、さらさらと揺れる紗のカーテンだとか、一見すると爽やかな良い朝ですね、今日も一日がんばろう！
そんな気持ちにさせてくれる朝ですが、生憎とあたしはその全てに背中を向けていた。
隣にナニかが寝てます。朝だというのに髭も生やさないあのナニかが。
やせている癖にたるんでいないその体は、絶対にナニか卑怯な手段を講じているのでしょう。髭と同様に。
あたしは膝を抱えて身を丸め、深い溜息と共に言葉を落とした。
「押し倒しちゃったよ……」
――もう何の言い逃れもできません。

＊＊＊

あたしは自分の阿呆さ加減に辟易としていた。
阿呆さ加減、若しくは語彙力の無さ。考えたらず。この辺りはぽんぽんと出るのに。

よりにもよって出てきた言葉が「あなたに会いに来た」なんて、あたしがアレに対してよく使うあんぽんたん様とはまさに自分のことなんじゃあるまいか。

確実によくないものを踏みつけた、面前の男のスイッチ的なもの、もしくは踏んだら最後動けなくなるようなものを。そう感じていたというのに、しかしあんぽんたん改め、すかぽんたん様は淡い微笑を浮かべただ幸せそうに「ありがとう」と礼を口にして身を引いたのだ。

あたしは呆気に取られてしまった。

今までの経験上、ここは「リドリー！」と両手を広げてむぎゅっと抱きついてくるものと身構えていたというのに、身構えただけに自分がちょっと自意識過剰で馬鹿臭いような気持ちになってしまう。

……考えすぎ？

「ぼくが何をしていたかルティアに聞いた？」

すかぽんたん様は自分の為にセッティングされたテーブルに付き、穏やかな調子でそう切り出した。

拍子抜けしたあたしときたら、いったい何を言われたのか意味がつかめず、わたわたと相手の言葉をもう一度頭の中で組み立てなおす。

「どっかで台風が発生したとか？」

正確に言うのであれば、何をしていたのかは知らない。ただ、台風が派生したことによってうんたらとルティアは言っていた。それに対して確かあたしは「変態も真面目に仕事をするのだ」と感心したものだ。

「うん。本来ぼくは自然現象に手は出さないことになっているんだ。そういう大きな魔法に関しては歪みが生じやすいし、魔法の原動力

だって無限という訳ではない。元々の仕事である竜を眠らせ続けることをおろそかにする訳にはいかないから、基本的にはぼくは魔法は使わないようになっているんだ」

並べられた食事は、あたしやルティアとが先ほど食べていたようなものではなかった。野菜をベースにしたスープとサラダと煮込み料理。あとは白くて手のひらサイズの丸いパン。

どこかで見たことがある気がしたあたしは、ぶっと噴出し、慌てて音をさせて「そのパン食べちゃ駄目っ」と声を張り上げた。

丁度パンに手を掛けた神官長は小首をかしげ「なに？」と問いかけてくる。あたしはせかせかと席を移動し、引きつった微笑でそのパン――皿の上にあるパンを二つとも取り上げた。

「これはあたしが貰っとく」

「食べたいの？　別に構わないけれど」

それは当然、食べたい訳ではありません。

何だってここで出てくるかな、このパンは？　まさかマイラおばさんが届けに来た訳ではあるまい。ということは、ルティアがきっと親切心を出してエルディバルトさんのパンをおすそ分けしたというのがありそうな回答だけど、ルティア……――純粋な親切で神官長の顎を破壊しちゃ駄目です。

あたしはたそがれるような気持ちを抱きつつ、パンを二つ手に自分の席に戻った。

そしてあたしは取り繕うように「魔法の原動力って、何？」と先ほどの会話を引き戻すように尋ねてみた。

「はっきりとこうだ、というものは生憎とぼくにも判らない。ただぼくの使える魔力の大本は、竜峰に眠る竜――その媒体となる水脈、そして」

一旦口を閉ざし、グラスの水をゆっくりと喉に流してにっこりと微笑んだ。

「人の魂（ココロ）」

あたしの視線と、相手の視線とが絡まりあう。

ココロって何だろう。祈り？　思い？　あたしはぐぐぐっと眉間に力が入るのを感じた。ご主人様がパンを奪われたことに対し、給仕係が元々用意されていたであろう茶色い綺麗な焼き色をしたパンを運んでくる。

あたしは頭の中をぐるぐるとさせながら、目の前でパンを食べる相手に合わせて自分も面前のパンを手に取り――無意識に齧った。

「ぐぅっ」

「リトル・リィ？」

また、また齧っちゃいましたよ。

馬鹿ですか、あたしは。

あたしは肩を震わせてうなだれた。なんだっけこういうの……人を呪わば穴二つとか、自業自得とかそんな言葉があった気が致しますよ。

それとも所謂呪い返し？　エルディバルトさんへの呪いが成就されずに返されたとか？

あたしは支離滅裂なことを頭の中で躍らせた。

「どうしたの？　舌でも噛んだ？」

「いや、あたしが噛んだのは恐怖の固パンです」

うぅぅと呻きつつ何とか言葉にし、口元を押さえつつ身を起こした。

思わず正直に言ってしまったあたしの横に回りこみ、あたしの手元

から問題のパンをひょいっと取り上げて、高潔な神官長様はとんとんっとそれを指先でたたいた。

爪が当たるのか、パンからはそれはそれは耳に心地よいコツコツという音が返る。

「これは、食べ物なの？」

「食べ物で作られているから食べ物です！」

思わず我が事のように言い張ってしまった。

自分で作ったものでは決してないのだけれど、なんとなくマイラおばさんを馬鹿にされたような気がしたのだ。

マイラおばさんが作るパンは美味しいんです！　普通に作れば。ただ、趣味かどうか判らないが、時々彼女が作り出す新作パンはある意味錬金術かといいたいくらいスバラシイのです。

――反対の意味で捉えていただければ正解。

あたしが赤くなりながら言うと、パンとあたしとを交互に見てすかぽんたん様はぷっと噴出した。

「つまり、君はこれをぼくに届けに来たんだね？」

「そうだけどっ、そうじゃ……ないの」

あたしは慌てていい訳した。

悪事が露見してしまった気まずさだ。

「そりゃ、当初はそのつもりだったけど……なんか、真面目にきちんと仕事しているみたいだし、だから」

「だから？」

「だから流石にちょっと悪いかなって反省したの。このパンはマイラおばさんの新作パンで、昼間アジス君と二人で食べようとしたんだけど、二人とも顎痛めるし！　だから」

「だから？」

だから……あたしは視線をそらした。

面前で、物凄く楽しそうに見つめている相手がいるのが物凄く恥ずかしい。
「だから、ルティアにエルディバルトさんにあげてねって――そりゃ当初はあなたにたべさせてやれって思ったけど、後半はそんなつもりは全然ちっとも無かったのよ？　あなたの食卓に並ぶなんて、本当に予想外だったんだから」
だからもう勘弁して下さい。
「エルにあげたの？」
困惑の混じる言葉に、あたしはちらりと上目遣いで相手を見た。
「もちろん、あたしからって言ったって食べないと思ったから――あなたからって言ったんだけど……ごめんなさい」
正直に全て吐き出すと、相変わらず指の爪先でこつこつとパンを弾いていた指をぴたりと止めた。
「君からのものならどんなものでも食べるけどな」
「食べ物？って聞いた癖に？」
からかう口調に安堵して、あたしは同じくからかうように言った。
「原料が食べ物なら、食べられるようにすればいいだけ。ほら」
いうや、手の中のパンを指先でぱふりと千切り、あたしの口元へと示した。
あたしは相変わらず上目遣いで相手を見ていたけれど、おそるおそる口を開いてそのパンの欠片を口に入れた。
たっぷりとしたバターの香りと甘み。
鼻を付きぬけるうまみにあたしは笑った。
「美味しい」
そう、マイラおばさんのパンは基本的には美味しいのだ。
あたしが笑みを湛えて言えば、面前の男は突然肺の中の酸素を全て吐き出すような、特大の溜息を吐き出した。

その勢いのままにその場にしゃがみこむ。
「なに、その反応？」
「ぼくもいい加減判ってるんだよ。ここでリトル・リィの可愛さにくらくらっときて抱きしめてぎゅうっとしてキスしたりとかするでしょ？　すると、何かしらの邪魔が入るんだよ。絶対に。ぼくはそういう呪いが掛かってるんだと思うね。きっと」

まるで独り言のようにぶつぶつと言い出し、床をぐりぐりとほじくるように指先で丸を描く神官長様に、あたしは思い切り間抜けな視線を向けてしまった。
「そうだよ、どうせぼくは呪われてるんだ。一杯色々と嫌われているし、きっと幸せなんてこないんだよ。さっきだってまた邪魔されるだろうなって思ってぐっと我慢したんだから」
「もしもーし？」
突然暗雲を背負ったように根暗くぼそぼそと呟く男があまりにも馬鹿らしく、あたしこそ溜息を吐き出した。

「呪いなんてある訳ないでしょ。馬鹿ですか？」
「だって。今までどれだけ邪魔されてきたと思う？　エルが飛び込んできたり」
どういう記憶中枢をしているのか、今までにどれだけ自分が不幸だったかをぐじぐじぐじじめじめ言うナメクジ男に、あたしはどんどんと苛立ちを募らせた。

ああそうですか。
あたしがナニかを踏みつけたと思ったその時に、この男は呪われてるだの何だの訳の判らないことを思って自分をセーブしていたのですか。
おかげで逆になんだか自分が物凄い思い上がりで自意識過剰で恥ずかしい気持ちに陥ってしまったではありませんか。

身構えた自分がどれだけ図々しい女かと反省までしそうになったというのに。

「いっておきますけど、あたしがいいかなって思った時に逃げたのはあなたですからね！」

何が呪いか、馬鹿らしい。

あたしがあきれ返って言い切ると、面前でぐりぐりと丸を描いていた魔法使いはぴたりと動きを止めてあたしを見た。

「――」

「――」

また、またやった。

今、あたしまたやったよね。

かぁぁぁぁっと体中を血液が巡り、耳が痛いくらい熱く感じる。

しゃがんでいた男があたしをじっと見つめている。

すごくむかつくくらい間抜けな顔で。

あたしは、あたしは――言い訳が枯渇して、もう自棄になって、相手の襟首を掴みあげて、馬鹿みたいにぽかんっと開いているその唇に自分の口を押し付けた。

「呪いなんて無いってば！」

困惑とお花畑

それにしても、本当に爽やかな朝ですね……
あたしの心以外は。
人間勢いで行動しちゃいけないという見本のような朝。
時々酔っ払って朝起きたら異性の寝台の中で、記憶は無いなんていう話をオトシゴロになると耳に入れてしまったり致しますが。

記憶は無いって言い張ってみたいです。
食堂にいたのが、いつの間にか寝台の柔らかな感触の上にいたとか、触れられる感覚とかしなやかな指の動きとか――痛み、とか。

くぅっ。きっと昨夜の食事のメニューにはたっぷりとお酒が使われていたに違いない。若しくは、飲んでいた果実水は水ではなくて酒だった。

そうじゃなければ昨夜食べた食材には媚薬が混じっていた！

ないか。
ないですね。
そんな阿呆なことある訳ありませんよね。
だってルティアも食べてたし。いやっ。ルテイアが入れたとか。

ない、なー。

ははははは、は、は、はぁぁ……は。

あたしはだらだらと背筋を汗が伝い落ちるのを感じながら、自分のしでかしたことをなんとか「誤魔化せないか」と考えた。

言い逃れができない？
いやいや、そんなことは無い。
夢とか幻とか。
世の中はご都合主義の結晶でできている。
この場からそそくさと逃げ出し、そ知らぬ顔で「おはよう魔法使い」といつものようにあたしのあのアパートの階段で元気一杯に言えば、すかぽんたん様は「あれー、夢だったかな？」と思ってくれるに違いない。普段からへんな妄想垂れ流しているのだから、これくらいの夢は見ている。

ってそれはそれでイヤなんですが。

まぁいいっ。
よし、この作戦で行こう。
あたしは足元に丸まっていたシーツを自分の体に巻きつけ、アレ言うところの大人が五・六人寝ても大丈夫という寝台の上をそろりそろりと移動しようと前かがみになり、できるだけ振動を与えないように逃げ出そうと試みた。
あたしの寝台であれば、ちょっと体重をかけただけでギシリと音をさせるというのにこの寝台はがっしりとしていてクッション性もよろしく不快な音など欠片もない。
あれだけ動いていたのにちっとも……そう思った途端に、あたしは「うわーっ」と叫び声をあげてしまった。

あれだけ動いてたって何、ナニさっ。
あたしの馬鹿っ。変態っ。もう穴掘って埋まってしまいなさいっ。
冬眠でも昇天でもしてしまえぃっ。

あたしはかぁっとあがる体温と同時、自分のしでかしたことにのしかかられた。

自分から口付けることじたいは最近では幾度かあった。
そこまでは問題無かった筈なのに、ナニがどうしてこうなったのかと問われれば――やっぱりこれはあたしが襲ったという話だと思います。

だってあんまり馬鹿なことばかり言うから。
うじうじとしているのを見ていたら、なんというか「邪魔されるまでやってやろうじゃないか」という気持ちになってしまって、あの、気付いたらもう後戻りができない感じで、誰もとめてくれないし！

あああ、あたしも本当に何言ってるかな。馬鹿ですかっ。

あたしはぶるりと首を振り、そこらかしこに落ちている自分の服を目で確認しつつそろそろりと寝台からおりると、一番目立つシャツへと手を伸ばした。

「やりにげ」

途端、ぼそりと背後から音が流れた。

「目覚めたら愛しいハニーが腕の中、小さな身じろぎで目を覚まして、視線が合えば頬を染めてぎこちなくキスしておはようって――」
「……」
あたしの心臓がばくばくと鼓動を早めて、手のひらにじっとりと汗を感じる。
「でも現実はぼくが起きる前にこそこそと逃げようって、そういうのやり逃げって言うんだよ」

ぼく悲しいぃぃぃ。

あたしは呻きながらやっと引っつかんだシャツをぐしゃりと握りつぶした。
起きる前に逃げ出す計画、夢オチ大作戦失敗。
ぶ、ぶんなぐったらまだいけるかもしれませんが。

「やり逃げって、人聞きの悪いこと言わないでよっ」
「んじゃ、乗り逃げ？」
「乗ってないしっ、逃げてないでしょっ」
逃げようとしていたことはちょっとそのへんの棚の上に乗せておいて下さい。現実としてまだあたしはこの部屋にいる訳ですし。
「だねー、乗ってたのはぼくでしたー」
いやぁっ。
もう黙れぇいっ。
あたしは半泣きで唇を戦慄かせた。
「目、覚めたから着替えて帰ろうと思っただけですっ」

寝台の上で肩肘をたてて右頬を支える格好で、こちらを見ているエロ魔人は口元にうすーい笑みを浮かべて「へぇぇぇ？」といかにも信じていませんという返事を返して寄こす。

「とにかく、帰る。仕事あるし」
なんとか言葉を搾り出すと、まるで捨てられた子犬のような目をして上目遣いに見上げながら、
「帰る前に一つだけ聞かせて」
と、何故か愁傷な口調で問いかける。
あたしは拾い上げた衣装を抱きながらじりじりと後退し、確か左の扉が洗面室だったと目で確認しつつ「なに？」と聞き返した。

「後悔しているの？」

この、卑怯者！

＊＊＊

卑怯者は誰かと問われれば――それはつまりあたしでございます。あたしはマイラおばさんのパン屋の台所でトングとトレーとを洗いながら、若干下半身が痛い現実を無視していた。

「だらしねぇぞ。しゃんと背筋伸ばして立たねぇと、姫さんにこっぴどく叱られるぞ」

心持猫背になって働いているあたしに、呆れたようなアジス君の声が飛んだ。

アマリージェにこっぴどく叱られるのはアジス君だけです。という軽口が出るほどの元気が生憎とあたしには無い。

苦笑だけを浮かべ、それでもあたしはなんとか背筋を伸ばそうとしたが、まぁ色々と不都合があってやっぱりちょっぴりと猫背で午前中を耐え抜いた。

「リドリー、腰痛いのか？」

幾度か顔をしかめていたアジス君だったが、最終的に諦めから心配に切り替わり、洗い物をしているあたしの顔を横から覗き込んだ。

「寝違えたの」とあたしは咄嗟に笑い「寝違えって首じゃね？　腰にも通用すんのか？」と彼の心に謎を一つこしらえてしまった。

すみません。腰の寝違えがあるのかあたしにも判らないですが。

「いいよ、俺がやるから。座ってろよ」

「腰が痛いのかい？　痛み止めのパンでもこしらえてあげようか？」

マイラおばさんがパン生地をこねまわしながら口を挟むと、あたしとアジス君はほぼ同時に口を開いていた。

「薬の原材料にしてやれよ」
「薬そのものでお願いします」

もう薬関係のパンは作成を断念して頂きたい。
そもそも、マイラおばさんのオリジナルパンは、もともとは惣菜パンが主で比較的失敗は無かった。ニガヨモギとか使ってしまって痛い目見たこともあるけれど、本当に時々だったのに。いったいいつからそんな悪魔の発想を植えつけられたのだろうかと眉根を寄せたあたしだったが、やがて一つの事実に気付いてしまった。

あたしか……
便秘に効くとか言うあの花だ。あのパンが比較的成功してしまったものだから、マイラおばさんの方向性がちょっとおかしなことになってしまったのだ。

あたしがマイラおばさんから薬草を頂き、煎じて白湯で飲んでいると、店舗の裏手にあたる扉が開いた。
「おや、いらっしゃい」
もはやマイラおばさんも慣れたもので、領主館の令嬢の出現にも卒倒することなく対応している。
「よお、姫さん。今日は来ないかと思ってた」
食器を洗いながら視線だけを向けて言うアジス君に軽く会釈し、アマリージェは眉根を潜めて自らの指と指とをからめ、困ったようにあたしを見つめた。

「……」
「……なに、かな？」
あたしは口の中に含んだ苦い液体を無理やり飲み込み、ひきつり笑顔で問いかけた。途端、それはそれは見事にアマリージェの顔は

真っ赤に染まり、慌てて視線をそらしたのだ。
まるで見てはいけないものを見てしまったとでも言うように。
え、何それ。
「あ、あの……アジス。遅くなりましたけれど、外で勉強致しましょうか」
そそくさと視線をそらしたアマリージェは、思いっきりわたわたとした動きであたしから意識を引き離そうとするのだが、それでもちらちらとあたしを伺っている。
まるで耐えられない程の好奇心を胸に秘めるように。
「言われていた本は読んだ。次の課題は？」
「次は――」
アジス君に説明しながらも、ちらちらとこちらを気に掛けているアマリージェの様子に、あたしはだんだんと不安を覚え、おそるおそるアマリージェに問いかけた。
なんだか不自然に心臓がばくばくいいはじめる。
血の気が下がってくような、微妙にいやな感覚だ。
「あの、マリー？」
「えっ、あっ、ハイ！」
アマリージェはびくんと見事に跳ね上がり、こちらへと視線を向けたものの、更に顔を赤らめてその瞳を彼女らしくなく左右に揺らした。
「あのっ、あ、お体……大丈夫、です、か？」
好奇心と気恥ずかしさ一杯のご令嬢の表情は、見ようによっては物凄く可愛いのですが、あたしの脳内ときたら現状それどころでは

ありません。

「なに？　姫さんもリドリーが調子悪いの知ってたのか？　腰が痛ぇんだってよ。寝違えだって。リドリーってば何気に寝相悪いんだな」

「アジス、女の子の体のことを口にする男は嫌われるからね」

マイラおばさんにぴしゃりと窘められたが、アジス君は意味がつかめないというように唇を尖らせ、肩をすくめてまた別の話題を口にしだす。

アジス君の話し声をどこか遠くで聞きながら、あたしは手にしたグラスが小刻みに震えるのを感じた。

「マリィ」

自分の声音が僅かに震え、いつものマリーではなくルティアが言うようになんだか間延びした声が漏れたが、自分の声とは思えない程低いその声音の訂正はできなかった。

「……頭に花を咲かせた阿呆と遭遇した？」

――あんのすかぽんたんっ。何を言いふらしてんのよっ。

この場にいたら確実に首を絞めている自信がある。

というか完全に息の根をとめるっ。

忠犬とわんこ

丘の上にある御領主様の館の後ろ――遠く北に連なる霊峰の白さが目立ち始めて、肌に触れる空気が冷たく変化していく。

この町はあたしが産まれた町よりもずっと西北の位置に存在し、きっと冬には物語でしか見たことのない雪が降るのだろうと思っていたけれど、思う程冬は雪深い訳ではなくて、町の人たちに言わせるとそれはつまり、守り神である竜の恩寵なのだという。

あたしはマイラおばさんが持っていた古い装丁の本を開いた。

「この辺りじゃ、一冊くらいは持ってるもんさ」

端のほうのページは丸みを帯びて、丁寧に扱わないとぼろりと崩れてしまうのではないかとすら思える読み古した本は、ターニャさんが読み、そしてもっと小さな頃にアジス君も読んだことがあるのだとマイラおばさんが引っ張り出してくれた。

眠り続ける竜。

むかしむかしではじまる物語は、一匹の竜が人々に意地悪をし、それを諫める一人の女神様――そして改心した竜は北の霊峰で人々を見守りながら眠りに付くという、単純な物語だった。

そしてこの物語は書き記されてはいないけれど、皆最後にある言葉を付け加えるのだという。

――竜はこの地を守る為に眠り続けている。決して起こしてはいけない。

それは矛盾に満ちた言葉で、人々はそのことを承知しているのだ。守る為に自らの意思でそこにいるのであれば、起きてしまったとし

ても問題は無い筈だというのに。けれど人々は竜が目覚めるのを恐れている。

決して大言はされないけれど、そっと僅かな言葉で伝えられていく口伝。

それが現在も生きているのは、この町には神官長――竜守が代々存在しているからだ。

「先代様は見たことがないけどね」

マイラおばさんは遠い記憶を掘り起こすように言った。

「代替わりなさったのもいつの間にかってところだねぇ。もともと雲の上の話だから、あたしらには関係が無いのさ。当代様は慈悲深い方だし、ユーモアもお持ちだから、子供の為に魔法を披露してくださることもあるから、町では好かれていらっしゃるけどね」

「魔法……そもそも、あたしは魔法とか竜とかに馴染みは無かったんですよねぇ」

まさに御伽噺だ。

触れると少し指先にひっかかる本を撫でて、あたしは肩をすくめて見せた。

「そうかい？　あたしらなんかは産まれた時から馴染んでるもんだからねぇ」

魔法があるのも、そして竜が存在しているのもそういうものだと感じているだけだという。

「竜って見たことあるんですか？」

「馬鹿お言いで無いよ。竜は北の霊峰さ――ああして町からうっすらと連なる山脈は見えているけれど、その実あそこまで行くのは相当難儀なものさ。それに、霊峰は迷いの山だ。一般人が入れば迷って出られなくなるとも言われてる」

マイラおばさんは肩をすくめ、椅子に引っ掛けていたエプロンを腰に巻きつけた。

「さあさ、お茶を飲み干しておしまいよ。後片付けをして店じまいにしよう」

すっかりと暗くなってしまった町の様子に、アジス君が自宅まで送ってくれると請け負った。

「そんなに遠い訳じゃないし」

「いいんだよ。帰りに走るから遠慮すんな。それに体調悪いんだろ？　無理すんなよ」

最近すっかり体を鍛えることを覚えたアジス君は、多少筋肉の付いた腕をさすりながら肩をすくめた。

もともと可愛らしい顔立ちが精悍になっていくのを見るのは少しばかり物悲しい。鳶色の瞳とふわふわの髪の愛らしい少年よ――最近目つきがすっかり男になってしまった。

舗装された石畳をゆっくりと歩きながら、あたしは口から白い息を吐き出した。

「アジス君の誕生日っていつだっけ？」

「春の終わり……十二歳までまだ遠い」

ぼそりといやそうに言う様子が微笑ましい。

アジス君は十二歳になったら領主館にあがることになっているから、それが待ち遠しいのだろう。

「あのさ、リドリー？」

「うん？」

あたしの手にあるマイラおばさんから借りたバスケットを取り上げるアジス君は、ふいに足を止めて、しっかりとした眼差しであたしを見た。

「姫さんに俺はすげーガキに見えてるのかな？」

ぶふっ。

あたしは危うく思い切り噴出してしまいそうになったのを無理やり押さえ込んだ。

どうしよう。なんだろう、この可愛い生き物。

「マリーが大好きなのね」

不用意に言ってしまった言葉に、アジス君はむっとした様子で眉を潜めた。

「違うっ」

駄目、からかってはいけない。いけないと思うのに、もう何故かあたしは浮かれてしまっていて、どうにもアジス君の頭を撫で回してしまいたくて仕方ない。

「ちげーよ。俺は――姫様を、けーあい、してんだよ」

うわっ。凄い難しい言葉が出た。

敬愛。

勤勉な将来騎士になろうとしている少年は唇を尖らせ、ぷいっと顔をそむけた。

「もういいっ」

「ごめんっ。ごめんってば――マリーがアジス君を子供と思ってるか、だっけ？　でもマリーだってまだ十四だよ？」

「俺は姫さんより三つも年下なんだよっ」

三つの年齢を激しく気にするアジス君に、あたしは笑いながら手をはたはたと動かした。

「あたしとアレの年齢差なんて確か七つか八つだし」

「男が上なら別にいいんだよ！……ってか」

勢いのままにいい、ふとアジス君は更に眉を潜めてあたしを見た。

「――俺の記憶が正しければ、確か……リドリーと尊き人はずっと

昔に出会ってたよな？」
「……」
「俺しつこい程聞かされたもん。えっと？……あの方が十八だったか十七だったか」
止めて。
それ以上考えないで。
あたしは手のひらを開いたり閉じたりしながら呻いた。

「リドリーが十七で、七つ――八つ年上で、それで、十八で」
最近計算スピードが上がったという少年はそれでもぶつぶつといいながら、どうやら一つの結論を導きだした。

「それってつまり、オレが四つか五つのチビに惚れるようなもんだよな？」

――その純真無垢な眼差しだけで「変態（ねえよ）」と訴えるのは止めて。

＊＊＊

「やはり沖に出たままの船が四隻――航海予定では沖合１５０、１００海里を航行していると予想されています」
水盆に映し出される港の様子を淡々と見つめている主に向けられる報告を耳にいれ、ユリクスは嘆息した。

「公、聞いて楽しい話題ではありますまい。お休みなさるといい。自然災害は貴方様の領域を外れる――盟約にもない」
「判っているよ、ユリクス」
小さく微笑を落とし、彼等の主はそっとその指先で水盆の水面に触れた。
言葉を重ねようとユリクスは口を開きかけ、そのまま嘆息した。

「あまり世情になど顔を出されるな。批判が増えていることにお気付きか？」
「この顔を見たい物好きは少ないからね。まるで私と目が合っただけで呪われるとでもいうように動揺されるものだから、さすがにちょっと心が傷つく」
淡々と言う相手にユリクスは苦笑した。
「新たな候補者をたてよというものもいる。最近の貴方は活動的過ぎて、愚かにも貴方が先代をなぞるのではと言うものまでいる始末だ」
「それはそれで構わないけど、あんまり不穏なことを言うと、あの人の怒りを買うだろうに」
「このままいけば、そのようになるでしょう」
これではどちらが守護者かわからないですね。
吐息を落とし、水から手を引き抜くと青年は淡く微笑んだ。

「ところで、うちの婿の姿が見えないのですが」
「目に付くところにはいませんよ。気配はするからその辺りにいますが。呼べば来ると思うけれど」
「別に呼ばなくとも構いません」
ふんっと視線をそらしたユリクスの内部に苛立ちを認め、黒髪の青年は微笑んだ。

「エル、出ておいで」

穏やかな声で言えば、すぐに嬉々とした空気をかもして上背の高い騎士が現れ、主の前で膝を折った。
「お召しにより参じました」
その額には、いいの？いいの？　と書いてあるようだ。
しかし、ユリクスは久しぶり見た婿の姿に思い切り顔をしかめた。

――何かがおかしい。
一見していつもの腹立たしい程の馬鹿面だが、何かが……
ユリクスはじわじわと眉を潜ませ、その正体に気付いた途端に鼻で笑った。

「なんだその間抜け面は」
髭が無い――ならともかく、ちょろっとあるところがミソだった。
現在進行形で髭を育てているエルディバルトはムッとユリクスを睨みつけた。

「卿、私は主のお召しにて参ったのだ。あなたのお相手をするつもりはない」
突如勃発した舅婿戦争を微笑ましいとでもいうように瞳を細めた麗人だったが、ふっと二人を放置して自らの脇にある水盆へと視線を戻した。
港は嵐を前にあわただしく船を海上へと引き上げ、人々が右往左往している様子をみせる。外洋船隻の幾つかはとうの昔に内海を嫌い沖へと出ている。
季節を外れた台風がその速度を上げて港を襲えば、その損害は激しい傷跡となって残ることだろう。
半眼を伏せて更に意識を飛ばし、大気中に散る霊峰の水脈の果てを宥めるように組み立てていく。

やがて浮かんだ沖合の一隻――外洋貨物帆船の姿に口元に笑みが浮かんだ。
「公?」
「――どうやら無事らしい」
嵐で翻弄されることを恐れて沖合いへと逃れた船の様子に、吐息を落としぱしゃりと指先を弾いた。

「良かった」

「何が良いのですか！」

口げんかをはじめていたエルディバルトの切なげな声に意識を引き戻された青年は、水本の映像を消し去ると嬉しそうにその表情を変えた。

「そうだ、エル、エルも聞きたい？」

突如その頭に花を咲かせてしまった相手を前に、ユリクスは嘆息してその部屋にいた他の神官達を片手で下がらせた。

彼等の主は基本的には理性的であり理想的だが――ある一点においてその基本を逸脱する。ユリクスとしてもその事実に気づいたのはつい最近のことだったが、できれば神殿にいる神官達にはそんな姿を曝して欲しくは無い。

心から。

「リトル・リィに押し倒されちゃった。凄い、もうぼくってば実はめちゃくちゃ愛されてない？」

ユリクスはエルディバルトの尻でぶんぶんと揺れていた尻尾が力なくはたっと止まるのを感じながら、この場にはいない「押し倒した」女性の不憫さにそっと涙した。

彼の人が言う言葉を丸々信じる訳ではないが、とにかく相手の女性は不憫すぎる……

いや。

ふっとユリクスは養い子の将来の夫であり、自らの婿となる男にはじめて憐憫の気持ちを抱いた。

魂を粉砕されていないといいが。

女々しさと波紋

「でかいのが来るぞっ。脇腹を見せるんじゃねぇっ」
季節はずれの嵐だった。
聖都から続く運河をひたすら下り、三日を掛けて海へと出て、大型の商船に乗り込んで二日目。外洋ではなく内海を南下しつつも左手にはずっと岸辺を眺めていたものだが、湾内を出て一日、雲行きの悪さに慌てて内海へ戻るべきか沖合へと出るべきかを考え、大型商船は座礁を恐れて沖へ沖へと進んだ。
黒くうねる海原の動きに全神経を研ぎ澄ませ、船子たちが忙しなく船上を行きかう。
船の上で産まれたと笑いあう海の男達といえど、嵐ばかりは軽くあしらうことも余裕を見せることもできない。普段の海であればともかく、こんな嵐で船上から放り出されれば命などひとたまりもなく消え去るしかない。海は彼等に数多の糧を与えるが、時には無常にその全てを一瞬で奪い去ることを彼等はよく知っていた。

「っの、くそったれ！」
巨大な波に乗りあがり、その船体がぐらりと揺れるのに合わせて体制を崩した友人を、上半身裸の男がロープで引っ掛けてはたき倒した。
「うろちょろすんな、ぼけがっ」
「ドーザ、オレは船から落ちたりしないさ」
「一度落ちろ！　落ちて、死ねっ。この疫病神っ」
本気とも冗談ともとれるようなやり取りを繰り広げ、なんとか幾つものうねる波をやり過ごした船は疲れ果てて外洋でその碇を沈めた。
空を見上げれば未だ雲は多いが、ところどころその雲の上から太陽の光がまぶしく海上にまっすぐの線を描き、神秘的な美しさを見

せ付けている。
　ぐっしょりと濡れて肌に張り付いた上着を脱ぎ去り、ぎゅっと強く絞れば水に浸したのかという程に海水が絞り落ちていく。

「おまえに関わると本当にろくなことがねぇな。やっと郷里に戻るかと思えばコレだよっ」
「オレが嵐を呼んだように言うなよ」
「違うのか？　違うんだな？　本当だなっ？」
　ドーザは言いながら自分も相手と同じように腰にくくっていたシャツを引き出し、乱暴に絞った。

「あああっ。こんなことならあの嬢ちゃん達の舟遊びに俺が付き合うべきだったよ。ダグの野郎今頃あの綺麗なメイドのねぇちゃんとうまいことやってるかもしれねぇなっ」
　ちきしょうっと呻く幼馴染をあきれるように眺め、マーヴェルは絞ったシャツを勢い良く広げて水切りの為に二度程振った。
　ドーザがその話をするのはもう幾度目だったか。
聖都を出る時に「舟遊びがしたい」と声を掛けてきた二人の子供と付き添いと思われるメイドはマーヴェルの記憶にもはっきりと残っていた。
　なかでも付き添いのメイドは不思議な雰囲気をかもしてはいたが、どうやらドーザの心に住み着いた様子で「名前を聞いておけばよかった！」としつこい程話題に上っている。

「何もついて来ることはなかったのに」
「今更だろ」
　ドーザは舌打ちし「ま、また近いうちに都にあがったら探すからいいさ。神殿官のお偉いさんの紋章馬車だったからな」とぶつぶつと続けた。
「いつまでも付き合うことはないんだよ」

ドーザは何だかんだとこの一年ずっとリドリーを――婚約者を探すのに手をかしてくれている。一人であてどなく探していると気が滅入る為、ドーザがいてくれるのはとてもありがたい。

――いい加減にしろ。もうナフサートの娘と結婚しろとはもう言わない。あの商人も今となっては落ち目だからな。何より、いくらお前が三男だといっても、いつまでも遊ばせておくつもりはないからな。

ふいに父親の叱責が耳によみがえり、マーヴェルはほんの一瞬苦痛をおさえるように瞼を伏せた。

仕事の合間合間をぬっての人探しではあるが、父や兄としても目こぼしし続けるにも限界なのだろう。

「そう、おまえまで付き合うことはない」

思いのほか重く落ちた言葉に、

「俺はなぁ、リドリー・ナフサートに一度会って言ってやりたいんだよっ」

ドーザはドラの音のように響くだみ声で強く言った。

「こんな女々しい男は捨てて当然だ！　良くやったってなっ」

「左舷に雨雲っ。かぁっ、だから台風っつぅのはイヤなんだよっ。次々きやがる」

突然船の先端から向けられる金切り声のような報告に、一旦解かれた緊張がその場を支配する。マーヴェルは濡れて張り付いていた前髪をかきあげて絞ったシャツを腰にくくった。

「女々しいのは……判ってるよ」

＊＊＊

軽く殺意が沸いたところで実際にヒトゴロシなどできよう筈は無い。
どれだけ腹立たしく、どれだけその息の根を止めたいと願っても。
だからあの日、あたしは帰宅途中の階段で頭の中で花を咲かせ、あまつさえ蝶を飛ばしているあんぽんたんですかぽんたんでのーたりんで腹立たしい程顔だけはいい阿呆な魔術師の格好をした変態を前に、にっこりと笑ってみせた。
きっと口の端はひくひくと引きつっていただろうけれど、あたしは一生懸命極上の笑みを作ってみせたのだ。

「お帰り、リトル・リィ！」

あたしの全開の笑顔をどうとったのか知らないが、あんぽんたんですかぽんたん――以下略――は、ふいにもじもじと身をくねらせ、まさにてれてれと「あのね、そのね、今日もぼくの部屋に泊まる？美味しいご飯も用意してあるし。今日はもっと時間をかけて――」と何か判らないけど、きっと邪悪なことを口にしようとしていた男に、あたしは言った。

「どちら様ですか？」

「……えっ、と？　え？」
その時のあれの顔は素でおかしなことになっていた。
「良い天気ですね。ではさようなら」

――以来二日程口を利いていません。

「リドリー、あの人は本当に頭がどうかしているとは思いますけれど、そろそろ許してさしあげて下さいませ」

アマリージェが昼食のパンをぱふりと二つに割りながら、ちらちらとあたしの様子を伺うように言ってくるのだけれど、あたしは相変わらずにこやかな表情で「何の話しですかー？」と無視していた。
「今では四六時中兄に泣き言を言っているのです」
うっ。なんかそれは申し訳ない。
御領主様ときたら人が良すぎるものだから、きっと親身になってあのあんぽんたんですかぽんたん――以下略――の下らない妄言を聞いているに違いない。なんて不憫。
しかもその光景が物凄く想像できる。

激しくうじうじとした女々しさ大全開で他人様に迷惑をかけているに違いない。

「マリーが何について言っているのか判りません」
しかし今のあたしは意固地なイヤなヤツでございます。

「またそんな」
「どなたのことを言っているのか、まったく判りません」
そりゃ、ちょっとやりすぎている感もあるけれど、あたしの憤りはこの程度でどうにかなるものではありません。
はっきり言って人権侵害。
もうアマリージェとは顔を合わせているけれど、果たしてジェルドさんやルティア――はどうせ喜んでいるだろうからいいけど――それと、エルディバルトさんと顔を合わせられない。あんまり恥ずかしくって。
あたしが淡々と「変態なんぞ知りません」を貫いていると、困惑の色を深めていたアマリージェが、ふいにその瞳を見開き、あたしを凝視した。

「まさか、本当に忘れてしまっている訳ではありませんわよね？」

「――」

「でも、そんなまさか？　あの方がまた記憶を奪ったという訳ではありませんでしょうに？」

驚愕してその手からパンをぽろりと落とすマリーに、横合いから落ちたパンを咄嗟に拾い上げるアジス君。

アマリージェは腰を浮かせ、あたしの手首をぐっと掴んだ。

「それとも、何かの後遺症とかっ」

「えっと、マリー？　突然何？」

記憶を奪うって、なんですかそれ。

いくらなんでもどっからその発想が出るの。

「リドリーもいい加減にしろよな。なんで腹をたててるんだか知らないけど、ガキみたいにいつまでも無視するなんて下らない」

慌てているマリーの様子を見て、アジス君は顔をしかめてあたしを睨みつけた。その顔にははっきりとアマリージェに迷惑を掛けるなと書かれている。あたしは肩をすくめ、あたしの手首を掴んだままのアマリージェの手の甲をぽんぽんと叩いた。

「脳内から完全消去したいという願望はあるけど、しっかり居座ってますよ。心配かけてごめんね」

アマリージェはけぶる睫毛をぱちぱちと瞬き、ほっと息をついた。

「本当に忘れてしまったのかと思いましたわ」

「ん。ま、確かにあたしは割りと物忘れが激しいほうですけど――あの突拍子も無い生き物を忘れるのはなかなか難しいですよね」

でも、あたしはその突拍子も無い生き物を忘れていたのだ。

子供の頃に出会っていたというのに。それはものの見事に綺麗さっぱり。

まるで――そんな記憶は元から無かったかのように。

あたしはアジス君にも謝りながら、ふっと眉を潜めた。
さっき何かアマリージェってばおかしなことを言っていませんでしたか？
――あの方がまた記憶を奪ったという訳ではありませんでしょうに？
「マリー……？」
「え、はい？」
マリーはほっとした様子を見せながら、小首をかしげて微笑んだ。
「あの、さ。もしかして――魔法使いは、人の記憶を奪ったりとか、できちゃったりする、のかしら？」

消えた過去と消された罪

あたしの問いかけに、アマリージェの表情はみるみるうちに強張りをみせ、あえぐように小さく喉を動かした。

「リドリー……」

かすれた声があたしを呼び、あたしは咄嗟に「いい。ごめん――ごめんなさい。あたしの勘違いっ。いくら魔法使いだからってそんなことできないわよね」と早口に言い切り、逃げ出すように自ら使っていた昼食の食器を慌しく片付けにかかった。

心臓が鼓動を激しくして、手にはじっとり汗をかんじる。

アマリージェにあんな風に言ってしまったのは、言ってはいけないことを自分が――いや、アマリージェが口にしてしまったことを後悔しているのを感じたからだ。

アマリージェの表情は明らかに動揺していて、どうしたらよいのかと物語っていた。

あたしはパン屋の流しに食器を置き、水桶の水面を見つめながら耳の脈動すら感じていた。

アマリージェと出会った当初、アマリージェはあの男の事柄はあまり言えないのだと口を噤んでいた。ならばきっと今問いかけたこと――記憶を奪えることについても言えない事柄の一つだったに違いない。

まさかそれを口にしてしまったアマリージェに対してあのぼけなすが何かしたりはしないだろうけれど、でも自分がそのことをアマリージェに問い詰めることはきっと良いことでは無いということは、思慮深くないあたしにも理解できた。

「ルティア……」

救いを求めるようにかすれた声でその名を呼んだけれど、ふるりと首をふる。

駄目。

ルティアに聞いても駄目だ。じゃあ誰に尋ねればいい？　魔法使いは記憶を奪える――魔法使いはあたしの記憶を奪ったことがあるの？

あたしがあの男と出会った時のことを忘れていたのは、あたしの記憶をあの男が奪ったから？

「違う……違うわよね？」

だって、だって――忘れられて悲しかったと言ったじゃないの！　何より、あたしの記憶を奪うことに何の意味があるの？　八つの子供の記憶を奪って、何か意味があるとでも？

あたしは強く目をつむり、ぎゅっと唇を噛んだ。

＊＊＊

その日の午後、あたしがどう仕事をしていたのかははっきりと覚えていない。

ともすれば不安に押しつぶされてしまいそうな気持ちを封じ込めて、どこか空虚な笑みでお客さんに対応して――アマリージェのことを、避けて過ごした。

極力普通に接しなければと思うのに、あたしの心が畏れのようなものを抱え込み、アマリージェの物問いたげな視線や口元が怖くて。

判っている。

自分だけで考えているとどうしたって良くない風に考えてしまう。

人の記憶を奪う理由って何？　どうしてそんなことをするの？

もし、あの人があたしの記憶を奪ったというのであれば、どうしてそんなことをする意味があるの？

あたしはかろうじて取り戻していた子供の頃の幾つかの記憶を必死になぞりながら、理解ができなくて何度も行き詰まり、首を振った。

出会いこそ冷たい口調であたしに対したあの人は、けれど数日後にはまるで兄妹のように接してくれていた。

幼いあたしが喜ぶようにと、小さなうさぎやリスを見せ、菓子を与えて。そんなささやかな記憶を奪う意味など無いだろう――奪い去らなければならないような記憶なんて……ない、筈？

あたしはふっと真顔になった。

誰にだって消したい過去があるように、あたしにだって消したい過去がある。

その一つに、思い出したくなかった記憶があったりして、あたしはその存在に口元を引きつらせた。

――あるじゃあ、ありませんか！

十八歳が八歳児にしたら犯罪的にまずいコトが。

アレか。

アレの抹殺か！

無かったことにしやがりましたかっ。

人の初キスをあの阿呆はっ。

突然明滅するように脳裏に描き出された情景と、その時に口移ししされた甘い菓子の味を思い出してしまい、あたしが拳に力を込めて呻いていると、突然――思い切るような口調で背後から名を呼ばれた。

「リドリー」
あたしはもうすでに帰宅したと思っていたアマリージェの突然の呼びかけに、危うく「うわぁ」と声を上げてしまい、あまりの無様な自分に無意味に手の平で宙をかいてしまった。
なんといっても、今現在ものすごく不都合な記憶を掘り起こしていたものだから、その動揺は激しい。

滅びされ変態っ。ロリコン。人類の敵！
でもあの当時のほうがまっとうそうだったのが腹立たしい。
穏やかな雰囲気を身に纏い、憂えるような眼差しで――やっていることと言えば、より酷いのではありませんか？

思わず自分の胸元に手を当て、あたしはとりつくろうような引きつった笑みを浮かべて振り返った。
「マリー、まだ、いたの？」
あたしの言葉はさぞかし跳ね上がり、その動きは笑う程挙動不審にうつったことだろう。だが、先ほどまでの自分からは少なくとも浮上している。

あの卑怯であんぽんたんな阿呆男ならば、それくらいするという理由を掘り起こした今であれば。
あたしの中でうまれた余裕が、アマリージェへの配慮へと向かわせた。

あたしときたらもうオトナなのに、十四歳の少女にずっと気を使わせているなんて、なんて情けない。
アマリージェは思いつめたような表情であたしを見つめ、長い睫毛を振るわせた。
「もう帰宅の時間ですわよね？　ご一緒してよろしいですか？」
両手の指を組むようにして言う姫君の様子に、あたしの心がつき

つきと痛む。あたしはぎゅっと彼女を抱きしめたい衝動を覚えながら、内心で囁いていた。

――ごめんなさい。いつもいつも、なさけないあたしで、ごめんなさい。

「もちろん」

「じゃあ俺も」

洗い終わったトレイを布巾で拭いていたアジス君が声をあげると、アマリージェは「必要ありません」とすげなく断り、彼女の心を察知したあたしは「女には女の話があったりするのよ。男の子は立ち入り禁止」とからかうように付け加えた。

あたしの発言にアジス君は途端に顔を顰め、唇を尖らせた。

「男の子とか言うな」

十一歳の少年はとっても繊細です。

片眉をあげて物問いたげな少年だったが、アマリージェにきつく言われて引き下がり、あたし達は少しばかり空が夕焼けから深い闇色ににじむ頃合にパン屋を出た。

「リドリー、昼間の質問ですけど」

綺麗に整えられた石畳の上をぎこちない雰囲気で歩きながら、ふいにアマリージェは一歩あたしの前に踏み出した。

カツリとアマリージェの靴が石畳を打ち鳴らす。

自分よりもずっと年下の少女が、思いつめたような口調と眼差しとであたしを見上げてくるものだから、あたしはまたしても相手の言葉をさえぎっていた。

「ごめんなさい。忘れてください」

「できるかできないかで言えば、記憶を奪うことはあの方にとって

簡単な魔法だと思います」
　判っていたことだとしても、突きつけられるとそれは思いのほか大きなダメージとなってあたしの胸に落ちた。
　昼間のアマリージェの様子で予想をつけていたことだとしても。
　あたしは口元が歪みそうになるのを堪えて「そう、なんだ……」と力なく口にした。
「じゃあ、やっぱり。あたしの子供の頃の記憶って、あの人に消されてしまったって、ことでいいのかなぁ」
　やばい。
泣きそう――
もう本当に、人として駄目駄目だって判っていたけど、どうしてここまで駄目かなぁ。
自分の都合の悪いことをそんなに簡単に消してしまえるなんて……
「忘れられてしまうのはイヤだったのですって」
　アマリージェはぎゅっと自分の手を組み合わせ、彼女こそ泣きそうな顔で言った。
「郷里に戻ってしまうあなたに、もうずっと会えないであろう貴女に――そのまま生活していくなかで、ゆっくりと記憶の海の果てに忘れ去られてしまうであろうことが、耐えられなかったと言っていたのです」
切羽詰るように吐き出される言葉を耳にいれ、あたしはしばらく無言でアマリージェを見つめてしまった。
「悪意でもって記憶を奪った訳ではないのです。自分の立場や、あなたの幸せすら思慮に入れて、自分のことなど忘れてしまったほうが幸せだろうと――そのほうが貴女の為だって！」
「あの……忘れられたくないって、自分で記憶を奪っている訳です

よね？」
とりあえず、後半部分はおいておくとして。
あたしは軽く額に触れて眉を潜めた。
「冷静に聞き返さないで下さいませ。わたくしにも実はちょっと理解できないのです」
すすっとアマリージェの視線がそれる。
あたしはそんなアマリージェを、何故か「ああ、やっぱり可愛いなぁ」とか訳判らない視点で眺めながら、また別の場所では違うことを考えていた。
――……変態の思考回路が判りません。
ああ、でもそう、そうですか。
あの犯罪一歩手前な記憶を誤魔化そうとした訳では無いわけですか、へぇぇぇぇ？
あたしは引きつったままの微笑で両手をぽんっとアマリージェの肩に掛けた。
「ココは一つ直談判という直接話法で乗り切るつもりですから、マリーはもう心配しないで領主館にお帰り下さい」
「……大丈夫、ですか？」
それでも不安そうに見上げてくる姫君をぎゅうっと抱きしめ、あたしはぽんぽんっと彼女の肩甲骨の辺りを親しげにたたいた。
「大丈夫ですよー、悪いのはいつなんどき、どんな場面であろうともアレですからね」
あの変態の思考回路を理解しようというのがまず間違い。
うだうだ考えるだけ無駄というものですよ。とっつかまえて全部吐かせるのが正解です。
あたしはにっこりとアマリージェに笑ってみせ、ついで声をあげた。

「アジス君、マリー送ってあげてね？」
こっそり建物の影からのぞいているちびっ子よ。
君は本当に男前で素晴らしいと思うのだけれど、一歩間違えるとストーカーです。

過去と過去

嵐の脅威を乗り切った時、疲弊した体を抱えた船子達は自分達の運の良さを女神ナトゥへと感謝した。

多くの帆船がそうであるように、当然この船の先端にはナトゥを模した女神像が竜珠と呼ばれる小さな珠玉を胸に抱くのが見られる。

その像に感謝の言葉と酒を振る舞い、船の損傷を調べ上げていく船子の声を遠くに聞きながら、この船の船主の息子は吐息を落とした。

「命拾いしたな」

「海では死なないさ」

何の根拠も無い言葉を口にし、マーヴェルは肩をすくめる。

たいていの船乗り達は同じ言葉を呪文のように口にし、そしてたいていの船乗り達がその最期を海で迎える。

「だが進路がだいぶずれたろう。ったく、ろくなもんじゃねぇっ」

「そういうなよ、ドーザ。嵐の間は沖にいたほうが座礁は免れる」

「その代わり船がしずんじまえば命はないだろ。流石の俺だって陸地まで泳ぎきる自信なんざねぇ」

つまらなそうに言う友人に苦い笑みを返し、マーヴェルは口の端に笑みを刻んだ。

――死ぬのもそう悪くない。

などといえば悲観的過ぎるだろう。

父親はすでにマーヴェルの新しい縁談を考えているとほのめかした。相手はずっと北のほうにある港町の商家の娘だとか。

「これだけ探して見つからないんだ。リドリーは死んでいるかもしれないじゃないか」

兄の言葉に、咄嗟に頭の中が真っ赤に染まるように感じ、その襟首を締め上げていた。父がとめなければおそらく殴り倒していたこ

とだろう。

考えなかった訳じゃない。

何故なら、リドリー・ナフサートは気の弱い――繊細な娘であったから。

護ってあげなければと思わせるか弱い少女が、たった一人で生きていると思うだけで胸が締め付けられるように苦しくなってしまう。

商家の娘としておっとりと育っていた彼女が、果たして厳しい世間でどうやって生きていけるだろうか。

誰かに騙されてやいないか。泣かされてはいないか。つらい思いをしていないか……悪い男に騙されたり、はたまたその命を……

マーヴェルはぐっと拳を握り締め、その考えを投げ捨てた。

リドリーは生きている。

生きている。

決して顔を合わせてくれなかった彼女の母親が動揺など微塵も見せはしなかったのが何よりの証拠だ。

あの頑な人が「ティナに聞けばいい」と言ったのは、きっと自分の誠意が通じたのだと信じたい。

七割の確立でただのでまかせで追い払いたかったのだとしても、それでもやっと掴んだ手がかりならば無視などできなかった。

ただ、ティナにもう一度会うことができるだろうか。

自分はティナを拒絶した。そして、ティナの父親の願いすら拒絶した。今更会わせて欲しいと願って会わせて貰えるものだろうか。

それ以前に――ティナが姉の居場所を伝えてくれるだろうか。

以前目にした彼女は、まるきり元の彼女とはまったくの別人のようだった。ただ寝台で壁に向かい、ぶつぶつとリドリーを呼んでいた。

心が壊れてしまったと彼女の父親が言っていたが、自分はそれをただ冷たく見つめただけだ。

ティナは――十歳足らずの頃こそ病弱だったが、病気が完治すると天真爛漫で無邪気な娘になって、あけすけにマーヴェルが好きだと言っていた。それでも大人になるにつれてその発言が無くなったのは、マーヴェルとリドリーの婚約が成立していたからだ。

リドリーと会う時、決まってティナもいたけれど、ティナとリドリーと三人で何の問題も無かった。

むしろ三人でいなければリドリーに触れてしまいたくて、それを誤魔化すように愚かなことばかりしていたから、ティナがいることに対して文句は無かった。

――姉さんは、結局何でも持ってるから欲が無いの。

ティナはふと、そんなことを言っていた。

「ううん、違う。どんなモノもどうでもいいの。面倒くさがりなのか博愛主義者なのか知らないけど。争いごとが嫌いで、自分が我慢すれば何事も起こらないと思ってる。馬鹿みたい」

ティナが何かの拍子、リドリーが席をはずした時にした台詞に腹をたてたのは、それが事実でもあるからだ。

家から出るなといわれればリドリーは父親の言葉を守って家から出ない。

ティナが一緒にいたいといえば断わらない。

幼馴染の男と結婚しろと言われても、彼女は何の躊躇もなく受け入れる。

「あたしがマーヴェルを頂戴って言ったら、くれるんじゃないかしら？」

――……とっさに、ティナの頬を叩いていた。

女性を叩いたことなど一度も無い。それでも気持ちが乱れ、体温が上昇し、腹立ち紛れに手が出ていた。

最低な行動だと判っている。

でも――その台詞は、決して言って欲しくはなかった。

自分の胸の内で、確かにくすぶっていたものだからこそ。

……彼女があんな行動を起こしたきっかけは、結局自分だったのかもしれない。

＊＊＊

「お帰り、リトル・リィっ」

毎度毎度飽きもせずにぼんくら魔術師姿のすかぽんたん様は両手を広げて左手に持ったトップハットから鳩を飛ばした。

一羽、二羽、三羽……――

くるっぷぅ。

そしてあたしはにっこりと微笑んだ。

この間とは違う。

今日のにっこりは――臨戦態勢を示すにっこりだ。そのかわり口の端か目の端かは細かく痙攣しているけれど。

「ただいま、魔法使い」

あたしの言葉に、魔法使いは軽く目を見張り、満面の笑みを浮かべて見せた。それはそれは幸せそうに。

いくらでも幸せに浸れば宜しい。

今のあたしは真っ黒ですよ。色々と腹立たしい要素の塊ですからね。

「やった！　今日は喋ってくれたっ。すごい、嬉しいっ。どうしよう。ぼくってばもうそれだけでイ――」

……逝って良し。

天国でも地獄でも思う存分逝くがいい。ただし、
「今日は真面目なお話があります」
大事な詰問の後で。

「なになに？　結婚式の日取り？　それともまさかのもう赤ちゃんができたとか？　えええ？　ぼくってばおとーさん？」
どうしよう。
とりあえず何より先に殴っていいような気がいたします。どうしてこう口を開くと人を怒らせるようなことしか言わないのだろう。
あたし――本当にこの阿呆が好きなのでしょうか。
本当にあの腹立たしい男と……致しちゃったんですよねぇ。ああ、人生ってどうなっているのでしょうか。

後悔先に立たずって本当だと思いますよ。
後悔してませんけどね！　だって結局好きだもの。
あああ、この自分の矛盾が何よりイヤですよ。
本気でね。

あたし自身の思考回路もそうですが、放っておくとどんどんと一人でおかしな方向に向かっていってしまう魔法使いは、つつっとその視線をあたしの腹部へと向け、じいっと見つめたかと思うと「赤ちゃんいないっぽいよ？」と小首をかしげた。

まて。
なにそれ。見ただけでナニが判るというのでしょう。
あたしは口元が更に引きつるような気持ちになった。

「ああ！　でも赤ちゃんはまだちょっと先がいいよね。だってもっとイチャイチャ一杯したいしっ、あんなことやこんなことも色々と試してみたいことが一杯あるけど、妊娠初期に無茶はできないよね」

「あたしの記憶を奪ったのはどうしてかしら？」
あたしは貼り付けたような微笑のまま、極力感情を抑えてそう問いかけた。

相手の動き、表情、その全てを見落とさないようにあたしは身構えていた。
どんな小さな嘘一つだって見逃してあげるつもりは無い。
あたしがこう切り出すことで驚愕し、慌てふためいてどんな言い訳を――と、こちらが身構えているというのに、魔法使いはさらに嬉しそうな笑みを浮かべてみせた。
「思い出してくれたんだね？」
「……」
いや、あの、へ？
なんか、ちょっと違いますが？
何をそんなに嬉しそうにのたまうか？
あたしは思っていたのとはまったく別の反応がかえってきたことに狼狽してしまった。

「あの時も君は記憶を消すことを反対していたね。でも、ちゃんと思い出してくれたんだね！」
「何盛り上がってるのか判らないんだけど、あたしが言っているのは――どうして記憶を奪ったのかってことなのよ！　どうしてそんな酷いことができるのっ」
相手の謎の勢いに負けてはいけません。
あたしの手首を掴み、引き寄せようとするものだから、あたしはその手を振り払って一歩退いた。
魔法使いは一瞬傷ついたような表情を浮かべ、ついで淡く微笑むと自らの後ろ手にある扉に手を掛ける。
「少し話し合いが必要かな。こんなアパートの廊下で話している訳にもいかないし。とりあえず中に入ろうか？」

ほんの少しだけためらって、けれど相手の言うことも理解できるものだから、あたしは仕方なくその言葉に従って古臭い扉を潜り抜けた。

途端に体に違和感が生まれる。

それはたとえるのであれば、わずかなゆがみだ。

踏みつけた場所の角度がほんの少しだけ曲がっているような、なんとなく踏み心地の悪い違和感。脳内揺さぶられるような、騙されたかのような感覚。

脳内で考えることと体で感じることが食い違う違和感。

そして扉を抜けた先、あるのは案の定な、どこまでも白を基調とした綺麗過ぎる寝室で、あたしは理解していたというのにたじろいでしまった。

そう、寝室。

数日前にあたしが目を覚ました、その場所。

「座って」

「……どこに？」

「寝台？」

当然お断りです。

あたしは喉がこくりと動いて唾液がやたら溜まってしまうのを無視して、無言でその寝室をつかつかと歩き、更に奥にある廊下へと出る扉を開いた。

「隣が私室だよ」

それも当然お断り。

だれがそんなプライベート空間――もとい、悪魔の縄張りになど行くものですか。

あたしは自分が腹をたてているということを明確に示す為にも、足音も高く廊下を歩いて居間へと赴きたかったのだけれど、生憎と

この屋敷の二階の床ときたら寝室だろうと廊下であろうとやたらふかふかとした起毛の絨毯が敷き詰められていて足音なんてたちゃあしない。

やっと階段を下ってオープンフロアに出ると床が石張りになった。あたしは思う存分足音を鳴らし、まるでこちらの来訪を知っていたかのように普通に頭を下げて居間の扉を開けてくれる使用人の脇を通り、居間のソファを示した。

「どうぞ」

あたしの家じゃないですけどね！

そうして改めてあたしは絶対に誤魔化されるわけにはいかない重大案件を突きつけた。

「どうして、あたしの記憶を奪ったの？」

あたしの決意のこもった再度の宣戦布告を、面前の男はトップハットをくるりくるりと手で弄びながら微笑で応えた。

「君が竜を目覚めさせてしまえる人だから」

淡い微笑のままに告げられる言葉に、あたしは予想の斜め上どころか方向感覚を見失い、ぐっと足を踏ん張って絨毯の模様を見つめた。

――ごめんなさい……聞きたかったのは、もっと阿呆な、理由です。

きつねとたぬき

古の竜が眠る町――
三百年の昔、大陸を蹂躙したという竜が眠るとされる御伽噺と、そしてその竜の眠りを守る竜守りが残る、町。

災いを招く竜は眠り続ける。
それは人々の幸せを願い、守り続ける為ではなく……その全てを破壊させぬように竜守によって眠らせ続けられているのだ。

「いや、ないデショ」

あたしはくらくらとする頭を支えるように額に手をあて、もう片方の手を力なくひらひらと動かしてみた。
おばさん臭いと言ってくれて構いません。
自分でもそう思うから。

「人違い、じゃない？　あたしは……極普通の一般人なんデスガ」

――竜を目覚めさせてしまえる人だから。

って、あたしいつからそんなことができるようになったのでしょうか。
物凄い田舎町に産まれた極普通の人ですよ。
ああ、いえ訂正します。
ただの根暗な人です。
くっらい青春です。
爽やか人間が持っている青春という言葉じたいがありませんでしたよ。

極普通の一般人なんて付けたら本当の極普通の方が憤慨してしまいますよね、すみません。

ともすれば現実逃避でおかしなことを考え始めてしまう思考をなんとか軌道修正しつつ、あたしはぺしぺしと自分の頬を叩いた。
そもそも、竜なんてそんな途方も無い生き物をどうやったら目覚めさせられると言うのか？
　確かに仕事のおかげか最近ちょっと腕力とか握力とかついてきた気も致しますが、竜なんてそんな強大なものを目覚めさせるような破壊力なんて到底持ち合わせている訳ではありません。
まさか竜を起こすのに「起きろー」と声を張り上げるとかではないだろうと思われます。
　町の大声コンテストなんてものがあったとしたって、きっとあたしは参加賞とかがんばったで賞くらいしか貰えない自信があるし。
完全に頭の中が煮えたあたしの動揺を前に、相変わらずトップハットをくるくると手の中で弄びながら魔法使いは微笑んだ。

「君が君だから、だよ」
　どう返して良いのか判らずに、あたしの口は無為にぱくぱくと動き、やたらと乾きを感じていた。
「なんだ、思い出してくれた訳ではないんだね。別に思い出さなくてもいいけれど――ちょっと、残念」
　へらりと言う口調は相変わらず。
あたしはぐちゃぐちゃになってしまった頭を抱えたまま、なんとかからからに渇いて張り付いてしまった舌を動かして音を吐き出した。

「竜って……起こしちゃ、まずい、のよね？」
　戸惑いが言葉を細切れにしてしまう。
自分でもそんな喋り方をしたい訳ではないというのに、あたしは幾度も言葉を詰まらせた。

最近になって読んだ竜の物語。
町の人たちの反応。
竜を目覚めさせられる人間ってだけで、町の人たちに嫌われること確定な気が致します。

「まずいと言われているけれど、実際起こした人はいないから。もしかしたら何も起こらないかもしれないし」
面前の青年はほんの少し言葉をにごらせ、眉間に皺を寄せた。
「畏れられている通り、三百年前のように辺りを蹂躙するような破壊活動に走るかもしれない。まぁ、そうならないようにぼくみたいな人間がいる訳だから」
なんだかやたらと簡単なことのように言う相手に力づけられ、あたしはぎこちなく微笑んだ。
「あ、もしかして実は竜を目覚めさせられる人っていうのは、結構普通にいたりするのかしら？」
「いるよ」

そのあっさりとした返答に、あたしの肩の力がゆるりと抜けた。
なんだ、やけに重々しく捉えてしまったけれど、結構簡単なことなのだ。
まったく驚かせてくれる。
あたしはやっと大きく酸素を取り入れ、胸元が激しく動くのを右手を押し当てるように確認しながら相手をねめつけた。
ここは一つ罵倒の一つや二つ――

「竜守が死ねば竜の力が膨れ上がって竜峰の氷が溶け出す。そうすれば二週間足らずで竜は目を覚ます――ぼくを殺すことができれば誰にでも竜を目覚めさせることができる。結構単純」
「……」
「でも、竜守が死んだら途端に国は次の竜守を作り出す。竜を封じ

続けることはこの国にとって大事な事柄で、最も下らないことなんだよ。まぁ、ぼくが竜守にさせられた時はまだ先代が生きていたから、継承の仕方は違うけど」

どこかなげやりな口調で肩をすくめる相手を前に、あたしは耳にどくどくと脈打つ熱と血とを感じた。

「でも、君はぼくを殺すまでもない。竜を目覚めさせたいのであれば……」

細めた瞳で、まるで聖なる言葉を紡ぐように。

「ねぇ、リトル・リィ――君は望むかい？」

とんっと指先で弾かれたトップハットはそのままやけにゆっくりとした動作でくるくると回り、なんの脈絡もなく宙空で忽然と消えた。

シンと満ちた静けさの中で、白手に包まれた手が差し向けられる。

「君が望むなら、ぼくはこの国を滅ぼすことも厭わない」

ゾクゾクと背筋に旋律が走り、あたしは危うくなんだか判らない誘惑に――恐怖に、ゆっくりと首を振った。

「なに、言ってるの？」

国単位規模の話などあたしの許容量を破壊する。

破壊するけれど、あたしは差し出された手をぴしゃりと叩き落し、睨みつけた。

「あたしがそんなことを望むと思って記憶を消した訳？」

相手の言葉に翻弄されてしまう自分を叱責する。元を正せば話はココに集約する。

あたしの、記憶。

「違うよ。それを利用しようとする人がいるかもしれないだろう？」

くすりと笑みをこぼし、わざとらしく叩き落とされた手をもう片方の手で撫でる。

「実際に世の中には竜を起こそうとしている人たちがいる。現状に不満を抱え、竜を解き放とうと考える人が。そういう人達と、竜守の名を知りぼくという存在を記憶している君とが接触することは――あまり楽しい結果を産み落としはしなかったろうね」

伏せた瞳がすっとあがり、その眼差しが楽しそうにあたしを見上げる。

「だから君の中からぼくという存在を消し去った。君はぼくになど出会わなければ良かったんだ。ぼくとかかわりあうことで、君の運命は変わってしまう――」

悲しげな微笑がただあたしを捕らえ、

「遠く離れた場所で、君が幸せになれることを祈ったこともある。きっと誰よりも幸せでいてくれるようにと」

真摯に落とされる言葉は一定の穏やかさであたしの中にせつせつと落とされる。

許しを求めるでもなく、ただ淡々と。粛々と。

厳格な青年の口調で。

まるで、何かの呪文のようにあたしの心にゆっくりと降り積もる。

「でも、君は再びぼくの前に来てくれた」

ドクンっと心臓がはぜた。

困ったように瞳の色を変えて、面前の男は苦笑する。

再会は自分としても不本意であったかのように。
「一週間だけ我慢したけど」
もう一度差し伸べられた手を、
「無理だったよ」

――だって、どうしようもないくらい君が好きなんだ。

そんなことで誤魔化されたりしない！
そう怒鳴ってやりたいのに、結局その手を振りほどくことができないのは、どうしようもないくらい……

「もう、会わないつもりだったの？」
「――ほんの少しだけ信じてたよ？　記憶を奪う時、君は怒りながら言っていたから。絶対に又会いに来るって。お嫁さんにしてもらうって」

指と指をからめて、額と額が触れて、
「随分と贅沢な夢だったけど。ねぇ、もっと欲張りになっていい？」
だから、あたしは怒ってるのに。

「君の世界にぼくは本当は必要ないんだ」

囁き、落とされる言葉に触れながら、あたしは泣きたいようなつんっとこみ上げるものに目を伏せた。

「ごめんね」

――何でもできる魔法使い。
あなたはあたしの心すら操るのではないの？
怒っているのに。

騙されたりしないと思っているのに。
あたしの心は砂糖菓子のように崩れてしまう。

＊＊＊

「殺せ」
あっさりとした命令。
そして命じられた言葉の通りに控えていた騎士達はするりと腰の剣を構えた。
「陛下っ」
「言った筈だな。
不満があればあやつを殺せ――できぬのであればお前が死ね」

冷たく言い放ち、全ては終わったというように席を立つ男の背後、神殿官ユリクスは胸元に手を当てて一礼した。
「差し出がましいこととは存じ上げておりますが」
「判っているのであれば口を挟むな」
「命はもう少し尊きものに存じます」
「尊んでいるさ。一万の命を救う為に百人の命を犠牲にする――それがこの国の正体ではないか！
決して逃れることの出来ぬ負の遺産を押し付けられ、延々と同じことを繰り返す。幾人の魔法使いを作り上げ、幾人の人間を殺し、そうして果てに何がある！」
その声音は太く、低く怒りを内包するかのように発せられてはいるものの、その瞳はやけに平然とユリクスを見返してくる。

「何もありはしない」

達観か、諦めか。

ユリクスは胸元に当てた指先で自らのシャツをくしゃりと掴み、瞳を伏せた。
「いっそ竜など目覚めてしまえばいい」
「陛下……」
「三百年前にこの地位にいた男が面前にいれば、わしはこの腰の太刀を引き抜き突きつけてやる」
まるでユリクスこそがその相手であるというように、その鋭き眼光をぴたりとユリクスへと向け、そして自らの腰に佩いた太刀をするりと抜き去り突きつける。

「そのそっ首叩き切ってくれる、この愚か者！」

低い威圧的な怒号を真正面から受け止め、ユリクスは小さく息をついた。
「リドリー・ナフサートをご存知ですね」
「それがどうした」
興をそがれたとでもいうように鼻を鳴らし、抜き身の剣を鞘へと戻してユリクスを睨みつけた。
「彼女は毒となりましょう。如何なさるおつもりです」
ユリクスの言葉に相手の瞳が楽しげに揺らめき、口元に笑みを刻みつけた。

「さすがは先代に逆ろうた男は言うことが違う。当代すらも敵にするか」
意地の悪い物言いにユリクスは微笑した。
「いいえ。私が敵にしているのは貴方様でございます。陛下」
「ほぉ？」
「二度、貴方様はあの娘を殺し損ねた」
淡々と言うユリクスの言葉に、相手が興味をそそられた様子で瞳

を細める。

「不満があれば殺せ――できぬのであれば、というのはどなた様のお言葉でしたか」

ユリクスの唇からこぼれる物騒な言葉に、相手は豪快に大笑した。

「危うい綱渡りは身を滅ぼすぞ、神殿官」

「やがて落ちる綱ならば、自らの意図するその時に落ちてみせましょう」

ゆったりとした口調で笑みを浮かべる相手に、この国の主はやがて目にかかる白髪をかきあげて舌打ちした。

「おまえみたいなのが百年生きるんだ」

「褒め言葉として頂戴いたしましょう」

「小娘を連れて参れ」

くるりと身を翻し、小さく命じつけられた言葉にユリクスはうやうやしく一礼したが、相手の男は何かが釈然としないというように歩み始めた足を一旦止め、底意地の悪い笑みをユリクスへともう一度向けた。

「おまえの馬鹿婿は先日パンを食べて顎を外したと聞いたぞ。大丈夫なのか？」

「それは貴方様の阿呆甥のことでいらっしゃいますか？」

ｗｅｂ拍手お礼小話つめつめ（７）

母は嫌いでは無い。
母の愛情は疑いようがない。母が父との別居を決めた時も、母は必死にあたしを連れて行こうとしたものだけれど、あたしはティナの戸惑う視線も、父の苦い顔も突然定められた婚約者のことも振り切って母についていくことはできなかった。

むしろ、あたしが行かないと言えば母も残るかもしれない。そう思った程だ。だがそうはならなかった。母はあたしを幾度も幾度も抱きしめて、けれど一人で伯父の待つ聖都へと行ってしまったのだ。

あたしは今、自分用にと用意された部屋と衣装を眺めながら一人思う。
「――ついて来ないで良かった」

人生かわるどころか何かが激しく壊れそう。
セイシン？
お花畑で暮らせるのは変態だけだと思う。
一日耐えるのもキツイんですが。

＊＊＊

「エル、喉が渇きました」
冷ややか笑顔の主の言葉にエルディバルトが嬉々として動き回っている。
聖都にある神殿。彼のもともと座すべき場にいる男は神官長らしい長衣装に冷ややな微笑を湛えたままめずらしく仕事にいそしんでい

るようだが、その場にいる人間はすべて戦々恐々と潮のように引きだくり、主の言葉にびくびくと身構えている。

「……ご機嫌斜めですわねー」

こっそりと柱の影からそれを眺めつつ、アマリージェ、ルティア、翌日早々に聖都に戻っていたアジスの三人はぼそぼそと口にした。

「こわいですわね」

「――そうか？　近寄りがたいけど、本来の尊き人じゃんか」

アジスにとっては最近見てきたヒトのほうが悪夢だ。

「エル、お茶の時間に私の為に城下町の《アリスタウン》のアップルパイを用意して下さい」

「行って来ます！」

「八つ当たりしまくってますわー」

ルティアはくすくすと笑った。

「ケーキ買って来いって頼んだだけじゃないか」

「《アリスタウン》で売られているのはロールケーキだけですものぉ。きっとエディ様、必死に店主にアップルパイを要求するのですわー、ああっ、楽しい。素敵ですわ、エディ様っ。見逃したらもったいないですわよぉ。行きましょ？」

うっとりと言うメイドさんを一度うろん気に見上げ、ついでアジスはアマリージェに視線を向けた。

「楽しいか？」

素敵なのか？

「……萌えポイントは個人の自由ですから」

エディ様の不幸はルティアの幸せ。

――それは本当に愛なのか激しく疑問。

＊＊＊

「たまには真面目に働いているのを見てもらえば、ぼくがどれだけ誠実な人間だかリトル・リィに理解してもらえると思うんだ！」

どう思う？　と言葉を振られたアマリージェだったが、生憎と「誠実な」人を発見できそうになかった。

「申し訳ありませんけど、その案はオススメできません」

「どうしてだい？」

目に見えてしまうからだ。

きちんと祭祀を執り行っている神官長――その前にリドリーを配置したらどうなるか。

「仕事を放棄して更に人間性を疑われると思いますわ」

「……マリー、ぼくのこと誤解してない？」

果たして誤解なのか？

＊＊＊

「ルティア」

エルディバルトは珍しく神殿にいるルティアを呼び止め、真面目な口調で言った。

「公が何をおっしゃったか知らぬが、貴女は自宅にいなさい」

「何のことです？」

「――貴女があの女の面倒をみることなどない」

厳しい口調で言うエルディバルトを見上げ、ルティアはそっと溜

息を吐き出した。
「公には早く結婚して頂きたいのですわぁ」
「そんなことをしなくていいっ」
エルディバルトはきつくいい、いらだつようにルティアを引き寄せて抱き込んだ。
「そんなことはしなくていいんだ。ルティア」
――公に結婚して頂かないと自分達も結婚できない！
だから率先してリドリーの世話をしたいルティアと、公を想い公の為に日陰の身になって必死にルティアが耐えていると思い込んでいるエルディバルト。
更にその勘違いを承知しつつ、エルディバルトが優しいので思わずノッてしまうルティア。
「ジレンマですわ……」
バファXンの半分は優しさでできていますが、【あたしの魔法使い。】の半分以上が勘違いでできています。
＊＊＊
「大変だよ、リトル・リィ！」
突然背後から抱き寄せられ、あたしは条件反射で肘鉄を繰り出した。
「ぐふっ」
「ああ、ごめん。いたの？」
「いや、いたよね。判ってたよね？」
「そんなことないわよー？」
棒読みですが、悪意は無いですよー。ほら、誰だって害虫を見たらスリッパを振りかざすでしょう？　それと同じ。
「で、何がたいへん？」

「ううう、そんな貴女が大好きです。いや、うん大変なんだよ」
気を取り直した男はぐっと拳を握りこんだ。
「本編のほうで【尊大な騎士～】がのってる」
「ああ、そうね。それのどこが大変なの？」
「ぼくらってば出番無いんだよ？　前編・後編で二週間もぼくの欲求不満がたまるっ」
「……」
「男っていうのはイロイロと溜まるものなんだよ。それでもって一定のサイクルでちゃんと出さないとだ――」
裏拳。
裏拳は痛いからもうイヤだって言ったのに！

＊＊＊

「【尊大な騎士といじっぱりな姫君】はマリーが二十一歳の話ってことは、現在から7年後ってことよね」
「そうだね」
あら、顔いたそうですねー？
大丈夫ですかー？
顔面を軽く押さえながら心持ち一歩退いた変態は気をとりなおすように言った。
「でも7年後ってことは、その頃はぼくたちもきっと夫婦になって可愛い子供とかいるかもしれないね！」
「でもそんな話ちらっとも出てないわよ」
「そりゃ、本編とは関係が無いからはしょられたんだよ」
「もしかして神官長が代替わりしてるかも。もしかしてあたしは他の誰かと……」
確かに神官長の話題とマリーの友人の話はちらっとだけ出ているけどねぇ。とあたしが冷たく言えば、変態はどんな涙腺をしている

のかさめざめと泣き始めた。

「いいんだ。ぼく判ってる。そうやってぼくの心を傷つけてもてあそんでリドリーは快感を覚える性癖なんだ」

「違うわよっ！」

「大丈夫。ぼくちゃんと耐えられる。究極のMにだってなるよ」

「違いますってばっ」

「リドリーの為ならぼくは蝋燭だってムチだ――」

腹部の一発は本当に手馴れてますからね！

「あたしはSじゃないですからっ」

「……本気で言ってる？」

＊＊＊

肩を落として溜息を落とす御領主様の様子にアジスは心配気に声を掛けた。

「御館さま？　何か……姫様と何か話していたようですけど」

十六歳という年齢が過ぎれば、領主の妹姫であるアマリージェと親しく会話を交わす頻度は明らかに減った。

覚えることは多く、すべきことも多い。

聖都と主との間とを行き来しながら、それでも領主館に居を頂いて遠くからあの人を見ることはできた。

――窓辺に立つ姿を。東屋で休む姿を……

「見合いの話をね、また蹴られてしまった。今となっては自分のことよりもあの子のことが気がかりでしかたないよ」

ふっと、ジョルドは苦笑した。

「見合い……」

小さく口の中でその単語を転がして、自分の胸の痛みを無視しようと勤めた。

だが、それはとうてい無視などさせてはくれぬ。

騎士を目指せるのだと、その道を示してくれたヒト――

誰より綺麗で、誰より優しくて、誰より厳しくて、誰より……

ただ護ろう。

たとえいつか他の誰かのものになろうとも。

いつか、いつか、あなたの騎士に。

その思いと同時に湧き上がる。

――おまえなど要らぬと言って欲しい。

おまえのような騎士など要らぬと、捧げた剣をこの胸に深く突き刺して、優しい慈悲を与えて欲しい。

あなたの姿を、声を、最後に得られればそれは永遠。

口八丁と手八丁

「とにかく、奪ったものなら戻せるでしょ。記憶を返して」

あたしの言葉に、しかし相手は意外な言葉を聞いたとでも言うように瞳を瞬き、挙句の果てに小首をかしげ、物の道理を判らぬ子供に諭すかのように言った。

「人の記憶を操作するのはとっても危険な魔法なんだよ？」

って、おまえが言うな！

しかも、危険ってどういうことですか。人の記憶を奪っておきながら言う台詞でしょうか。

もぅ、本当に誰かこのアホの育成責任者を出せ。

「記憶をたどる手伝いはしてあげられるけど、さぁどうぞと切り取った記憶をリトル・リィの中に押し戻すことは残念ながら、できない」

とんとんっと自分の隣を示して、殊勝な態度で淡く笑む。

どうやら座れと言いたいようだが、断固として拒否致します。

しばらく何度か座るように示し、あたしが拒絶を続けるとシュンっと肩を落としてみせる。その様ときたら、本当に寂しそうで痛々しくて、なんだかこちらが悪いような気がしてしまうのは——絶対にこの男の作為に違いない。

魔術師とか詐欺師の手口。

あとになってみればちゃんと判るのに、けれど面前にしていると騙されてしまうのだ。騙されるものかと何度も心の中で上書きしているというのに。

「無理やり記憶を引き戻して、もし君の心に傷ができてしまったら……そう思うだけでもつらい」

いや、だから。

その記憶に傷ができるような根本的なことを自分がしたっていうトコは無視ですか？

もしもーし？

前々から判っていたことですが、本当に自分勝手なご都合主義の塊でできていませんかね？

「でも、君の中にきちんと記憶の種はあるからね。思い出せない訳じゃないんだ――だから、さっきも言ったように、君の記憶を引き出す手伝いはいくらでもできるよ」

「……って、それはどういうことをするの？」

あたしがおそるおそる尋ねれば、天然詐欺体質の尊きあほんだら様はにっこりと極上のタラシ笑顔を浮かべてのたもうた。

「そうだね。失った記憶と同じことをたどってみる……とかね？それとも、ぼくがゆっくりとその時のことを話して聞かせてあげてもいいよ？　君がぼくにどんなことを話してくれたか。君がぼくの膝の上で寝ちゃったこととか」

なにその気はずか……

「君がぼくの口にあるチョコレ――」

「黙れぇぇぇっっ」

あたしがとっさに悲鳴のような声をあげるのに対し、確信犯（誤用）の病気持ちはにっこりと微笑を見せた。

「あ、コレはもう思い出してるんだったね」

――絶対に判っていて言ってますよね？
確実にこちらの反応を楽しんでいるだけですよね。

「ちっちゃな君が、頬をほんのり染めながら、お嫁さんにしてくれる？　って……」
更に続けようとする相手に、あたしは身もだえするほどの羞恥に爆発した。

「もういいです！――もぉ、ホントウに結構ですっ」
「じゃあ、許してくれるんだ？」
「許す訳ないでしょっ」
それとこれとはまったく違います。
「だったら、やっぱり記憶が戻る手伝いをしないと。安心して、一晩でも二晩でも――なんなら一月じっくりあの時のことをすべて再現してあげる。ぼく、リトル・リィのことに関してはものすごぉく記憶力いい自信あるんだ。なんたってぼくの宝物だからね」

ひょいっと引き寄せられて耳元に「あのね」と囁かれたのを最後、あたしは半泣きで悪魔に魂を売り渡した。

「も、もぅ許すから、もうやめて」

……というかもうなんだか判らないけど、堪忍して。
騙されていると理解していても、人間には流されてしまうことがあるのだと身に染みて理解した瞬間だった。

＊＊＊

そう、騙されてる。
判ってますよ！

少なくとも七割近くはごまかしとか、騙されとかの成分で満ち満ちている。
とにかくあのあほんだら様ときたら口がうまい。まるきり司祭長の顔で淡い微笑を湛えて淡々と解かれると、それが間違っていようとも誤魔化されてしまう自信がある。
生きてるだけで詐欺成分満載。

あたしってば意志薄弱！

弱すぎる。
「とにかく、君の為だったんだよ」
で何もかもが回せるのであれば町に警備隊は必要ありません！
何度近所に変態が出ると訴えでてもまったく役立たずな警備隊でしたがね。
しかし、そんなことすら強く言い切れなかった昨日のあたしに説教をかましたい。
まぁ、そのままずるずると押し倒そうとしたぬけさく様を渾身の力ではったおして逃げ帰った自分は褒めますが。

あたし偉い。
偉すぎる。ちょっぴり、ぎゅっと抱きしめられてそのぬくもりを感じたいとか思ってしまった部分は穴を掘って埋まっておけばいいと思いますよ。ええ、ホントウに。

「リドリー、雪虫だ」

アジス君の弾むような声に、あたしは店の窓を外側からふきあげながら、顔をそらして空を見上げた。
ほわほわと白い何かがゆっくりと吹きかかる風に巻かれて落ちてくる。

それは雪のように白くて、けれど真綿のような不思議なモノ。
虫というけれど動きはせず、ただ地面に落ちて消えていく。
やっぱり雪なのかな。

「もう冬だねぇ」

あたしはのんびりと呟いた。
冬といってもこの町の冬は短い。
万年雪が積もる竜峰とは違い、この辺りは地熱の影響と町の人曰くのありがたい竜様のおかげで冬の時期は短いし、この町じたいはさほど冬の厳しさを受けることは無い。町から出ると、途端に雪が偉い勢いで積もっていたりするので、そこはやっぱり竜に関係するのかしらと思ったが、どうやら――どっかのドくされバカが「寒いのはちょっと」ということらしい。
便利なアイテムなのか、身勝手なアイテムなのかそこは謎。

町の中こそ被害は少ないが、外は例外なく雪が厳しいのでこの町は孤立してしまう。もとからここの町に住む人にしてみれば、やっぱり冬は厳しい冬で間違いは無いのだ。
乗り合い馬車も来なくなるので、この町の冬はちょっぴり寂しい。

「アジス君は冬の間はどうするの？」
店の前のゴミ拾いをしているアジス君は、不思議そうに首をかしげた。
「どうって、何が？」
「乗り合い馬車も来なくなるでしょ？　ターニャさんのところに戻ったりしないの？」
「どうせ俺は役立たずだしな」
母親の元に戻らないとあっさりと言う少年は、顔をしかめて見せ

る。だが、役立たずというのはあまりアジス君に似合う言葉ではない。
「どうして役立たずなんて」
君はいつだって立派ですよ。
最近はなんだか領主館の番犬の如し。ただし、今のところころころっとした子犬が必死に睨んでくるような、ちょっぴり可愛いらしさが目立つ。

「かぁちゃん今妊婦」

さらりと言われた言葉に、あたしはぶっと噴出してしまった。
豪快なマイラ小母さんの娘にして男前少年の母親、なんと、妊婦。
唖然としたあたしに、十一歳の少年はやれやれと肩をすくめた。
「二日前に手紙が届いた。家に戻ったって邪魔だの何だの言われるのが判ってるからな。まだ最近判ったみたいで、安定期っていうの？　それが来るまでは鬼のように神経張り詰めてるらしいぞ。絶対に帰らない」
「でも、それだったらなおさら……人手とか」

いや、妊婦さんのことはあたしにとっても未知数なのであまり判らない。
妹のティナが産まれたのはあたしがまだ小さな赤ちゃん期なもので、いわゆる年子なのよ。だから、赤ん坊が産まれるとかって経験が無い。
けど、やっぱり赤ちゃんが産まれるというのであれば人手とか必要ではないのかしら？
ターニャさんの旦那様は普段から出稼ぎで居ないし、あの家にはおじいちゃんしかいない。しかもおじいちゃんは頑固だ。
「いいか？　十一の俺の下に突然いもーとだかおとーとだかができるんだぞ？　俺のこの繊細（ナイーブ）な気持ちも察しろ」

ないいぶ。
「かぁちゃんの顔見てどうしたらいいか判んねぇし。どうせ俺はいたって邪魔だろ」
だが妊婦で動きづらいターニャさんと頑固なおじいちゃんのコンビでは何かと心配だ。と思う心を読むように、アジス君は肩をすくめた。
「俺がかーちゃんの腹にいた時も、じぃちゃんが家事とかやったらしいから。今頃はじぃちゃんが奮闘してるさ。じぃちゃん妊婦には優しいんだってよ。ばぁちゃん――二人目の妊娠の時に無理がたたって死んじまったらしくってさ」
さらりと言われた言葉が意外に重くて、あたしは口をつぐんだ。出産は命に関わる大仕事だ。
以前はマーヴェルの子供を腕に抱く想像もしたことがある。
でも、なんだろう――あの口八丁手八丁の子供を抱くのを思い浮かべることができないのは、あの人と自分との結婚というのがなんとも結びつかない為だ。
自然と胸に下げた指輪に触れて、あたしは北に連なる霊峰へと視線を向けた。
遠く霞む山脈には万年雪がうっすらと見える。
竜の眠る竜峰は――今日も変わらない。
それは御伽噺でしか無い風景。
「やぁ、がんばってるかい？」
あたしがぼんやりと遠くに霞む竜峰を眺めていると、突然柔らかな口調で言われ、あたしはあわてて背筋を伸ばした。
「おはようございます」

パン屋のお客様来訪かと、あたしが営業スマイルといつもよりちょっとだけ高いトーンでにっこりと振り返ると、そこにこの町で見たことも無い人物を発見し、あたしは窓拭き用のウェスを握ったまま凍りついた。

麦藁帽子に生成りのシャツ。
黒いズボンといえば一般的に農夫の衣装――だろう。
だが、そこについている頭は、物腰も柔らかな壮年の紳士。
色白な様子は確実に農夫ではなく、むしろまっとうな肉体労働など無縁の完全室内型と思わせる面(おもて)は青白くて不健康。
だのにその格好は農夫。
あまりの不似合いっぷりに自然と口元が引きつってしまう。

それはさながら、見てはいけないものを見てしまった時の感覚に似ている。
――大げさに言えば、上半身はびしりと決めているのに、下半身が丸見え。
挙句相手は爽やか笑顔。

「ユ……リクスさま？」
さすがのアジス君も驚いた様子で言葉をつまらせ、あたしも唖然としながら瞳を瞬いた。
「あの、ユリクス様……ですよね？」

幾度もお会いしたことは無いが、それでも招待を受けて一緒に食事もしたし、屋敷に泊めても頂いた。
ルティアの養父である神殿官長ユリクス様は、完全に超浮きだくりの農夫姿でにこやかに微笑んだ。

「似合ってるかな？　町に溶け込むようにこういった格好のほうが

いいとルティアが用意してくれたんだが」

人の良さそうな神殿官長様は、自分のシャツの袖口をつまむようにして微笑むが、あたしが応えるより先にアジス君が言ってしまっていた。

「いや、この町でもその格好は、ない、かなぁ――」

ルティア……ルティアがおかしな格好をするのはもう慣れたけど、自分の養父まで毒牙にかけるのは如何なものでしょう。しかも確実に騙してるし。

あたしの脳裏には、ルティアが口に手を当てて笑っている様子がまざまざと浮かんでいる。

「農夫って、このヘン居ないし。それ以前の問題もありそう」

アジス君の微妙な返答に、あたしは慌てて「それより、今日はどうなさったんですか？」と畳み掛けた。

とりあえずもうその格好のことは触れちゃ駄目だ。

この善良なる紳士をこれ以上追い詰めてはいけない。

不憫すぎるから。

あたしの努力の賜物か、それとも当人がちょっと人が善すぎるのか、神殿官長ユリクス様は目元に小じわを作って微笑んだ。

「ナフサート嬢に、ひとつお願いがあってね」

きいてもらえるといいのだが、と言葉を続ける相手に、あたしは愛想笑いを浮かべながら力強くうなずいた。

「あたしにできることなら」

そのルティアの悪行衣装から話題を逸らせられるのであれば、何だってしちゃいますよ。

そんなあたしの意気込みは、しかし告げられたオネガイの言葉に凍りつく羽目に陥った。

迷い子とデート

目じりに皺を浮かべ、柔和な笑顔を浮かべてみせる紳士はのたもうた。

「デートしよう」

――動悸息切れ眩暈が誘発されるすばらしいお誘い。

で、いいのか？

いいんでしょうか？

あたしはユリクス様にどう返すべきなのか判らなくなり、救いを求めるべく弱冠十一才の男前、頼れる少年アジス君を見たが、アジス君は少しも動揺していなかった。

あたしは一瞬真っ白になる程動揺したというのに。

「次のお休みはいつかな。その日の朝に迎えをよこすから」

確か、ユリクス様は当初物腰も柔らかに「きいてもらえるといいのだが」という単語を使っていらっしゃったように思うのですが、最終的には何故か「デート」は確定されていた。

物腰は柔らかいというのに、何故か押しは強い。

これが壮年の力とでもいうべきか。

いやいや、デートというのはただの単語だ。

男女の正しいお付き合いとかそういったものではなくて、ただ――ただ、何なのですかね、ユリクス様？

「ああ、公にはナイショでね」

あたしの混乱をよそに、実に楽しそうに無理やり約束を押し付け、

ルティアの養い親であるところの神殿官長殿は穏やかに帰宅の為に元来た方向へと歩き出した。
完全に浮きまくった農夫姿で。

「なんか――なんだったんだろうな」
アジス君が掃除用の箒に寄りかかるようにしてぼそりと呟き、あたしは優雅に動く麦藁帽子を見つめながら「さぁ？」と魂の抜けたような声で返事をした。

爽やかなロマンスグレー――ただし農夫は優雅な足取りで歩いていたが、やがて道の往来でぴたりと足を止めたかと思うと、何やら懐から一枚の紙を出し、じっくりとそれを見つめ、

「あれ、なんか戻って来たぞ？」
アジス君の言葉の通りにこちらへと戻り、少し困ったように微笑を浮かべてその紙を差し出した。

「すまないが、ちょっとこの地図が判りづらくてね。来る時も公の邸宅からずいぶんとかかってしまったんだ」

差し出された紙をあたしとアジス君が覗き込み、あたし達はちらちらと目線を合わせてある回答をはじき出した。

「オレ、送ります」
「いやいや、そんな迷惑を掛ける訳には……」
「大丈夫です。コーディロイの家まで二十分程度だから」

この町はそんなに広くないですよ。
パン屋から細道を進んで、大きな通りに出ましたら右手に行くと中央広場がございます。その広場を突っ切って丘のほうにあるいてい

くと、領主館が見えて参ります。それは見事なお城ですので目立ちます。間違いようはありません。それでもって、その館の後ろにひっそりとあんぽんたん様の白亜の邸宅がある訳です。

簡単に説明すると、白亜の館を出て坂道を下り、突き当たったら右に折れて、まっすぐ行くと三叉路です。その三叉路の左側の小道に入るとこのパン屋の前に出る訳です。

――という地図を、一本線でぐりぐりと書いたのは間違いなくルティアだ。

挙句紙の隅に愛らしい飾り文字で「お養父様お気をつけて」とイケシャアシャアと書いてあるところがまたすばらしい。

迷子にする気満々ではありませんか。

あたしは乾いた笑いで軽く手を振って二人を見送りながら「デートって……もしかしてはじめてだなぁ」と呟いていた。

デート……って、何だろ。

楽しそうな響きだが、果たしてユリクス様の真意が判らない。文面どおりのデートという訳では決して無いだろう。

あたしは無意識に首から下がる指輪をもてあそびながら、なんとなく眉を潜めて、遠く霞む竜峰へと視線を向けた。

――公にはナイショで。

おまけのように、茶目っ気さえ見せて付け足された言葉が、なんだかとても、怖いなんて言ったら、アジス君は笑うだろうか。

神殿と王宮とをつなぐ神殿官。

その長官を務めるユリクス様の知るあの男は、いったいどんな男なのだろう。

あたしの知らないあの男を知っているその人との約束に、あたし

は不安と同時にほんの小さな淡い期待のようなものが広がるのを感じていた。

あたしの知らないあの人を、知ることができるような気がして。

だって、仕事中くらいはきっと真面目なのよね？

まさか神官長として働いている時はおかしな言動で皆さんをどん引きさせてないわよね？

そんな思いがちらりとよぎった途端、あたしは思わず指輪をぐぐっと握り締めていた。

――まさか神殿の人を困らせてるっなんてことないわよね？

脳裏で踊る変態様の姿に、あたしは肩を小さく震わせた。

「いやいやいや？」

聞きたいような、聞きたくないような……聞きたく、ないかなぁ。

＊＊＊

――はじめてのデートと呼べるデートは、きっとあの沈んでしまった船遊び。

ティナが寝込んでいたものだから、リドリーははじめ出かけることを渋ったものだ。

けれど、はじめてもらった小型の船――たかが小さなカヌーでも嬉しくて、挙句お邪魔虫なティナもいないという最高のシュチュエーション。

かっこよく決めたかったというのに、リドリーはカヌーに乗ることを拒否したし、カヌーはいともあっけなく沈んでしまった。

真っ青になったリドリーに「手を貸して」と川の中から声をかけ、

心配している彼女を勢いよく川に道連れにしてやったのは良い思い出だ。
びしょぬれになって、そんなに深い川でもないのにリドリーはえらく慌てて溺れ掛けていたっけ。
必死にしがみついてくるから、危うく泳ぎの達者なマーヴェル自身も溺れかけてしまった程だ。

笑ったマーヴェルに、やっと岸にあがったリドリーは泣きべそをかきながら「マーヴェル酷いっ」と甲高い声で言っていたのが、とても可愛かった。
そう、リドリーはそんな時の顔がとても可愛い。
普段はあまり感情を見せないで、そっとはにかむように笑うから、だから子供の頃はよくそうやって彼女を困らせることでその表情を引き出した。

やがて大きくなる頃には、できるだけ笑顔を見せて欲しくて努力した。
それが実るかのように、リドリーは時々とても綺麗な笑みを浮かべてくれて、それが嬉しくて優しく接するように勤めたものだ。
一度、母親に連れられて聖都に行ってしまったリドリーは、その後性格が変わってしまったように塞ぎ込みがちになって笑わなくなった。
マーヴェルが話しかけても、今まで一歩引いていたものが三歩程も引くような感覚にたいそう焦ったものだ。
だから更に努力した。
優しく、優しく――からかったり、苛めたりしないように。

外洋船から小船に乗り換えてそんなことを思い出し、マーヴェルはふと小さく笑った。
「なーに、にやけてんだよ」

「いや……ちょっと昔のことを思い出してた」
「悠長なヤツだなぁ。今回の嵐でどれだけうちの商会が損害だしたと思ってるんだよ？　また親父さんにこっぴどくやられるからな」

呆れるドーザの言葉に、ぐっと喉の奥で言葉を詰まらせた。
今回の船出は少しばかり無理を通した。
その為に嵐にかちあったといっても過言ではないだろう。それは船主として当然笑える話ではない。
それでなくとも最近の風当たりは強いのだ。
潮でぱりぱりと張り付いた髪を無理やりかきあげて、マーヴェルは吐息を落とした。
「船の発着所の料金は安くなってる。それでなんとか押し通すさ」
「使用料程度じゃ弱いだろうに」
「――なんとかするさ」
ドーザと忌々しい会話を続けている最中、港の桟橋の近くまで来ればドーザが船の綱を手に桟橋へとうつる。それを合図にしたように、桟橋の先端の方につけられている小屋から見慣れた男が顔を出した。

「お帰りなさい、マーヴェルさん」
「ただいま。何かかわったことは？」
お決まりの台詞にはたいてい「いつも通りですよ」と返される。だが、今日ばかりは違っていた。

「聖都からお帰りのとこ悪いんですが、あっちから鷹が飛びました」
鷹、という単語に船の綱を桟橋の縁にくくりつけていたドーザも顔をあげる。大抵の連絡に使われるのは鳩だ。しかし、緊急を要するものの場合通信用に鷹を使う――鳩とはまったく速度が違うその通達は、船を追い越して届いていたのだろう。

「何だ？」
「ダグのやろうがあっちで何かしでかしたようで――ちょっと面倒事になってるようなんです」
ダグ？
その名を口の中で転がし、差し出された手紙を受け取る。中に書かれているのは鷹を飛ばした割りにはあやふやな文面であった。
脳裏に聖都を出る時に見た幼馴染が浮かぶ。
確か、あの日は舟遊びをしたいという子供達が来て――彼等のことはダグに頼んだのだ。一番小船の扱いが上手く、多少粗暴だが仲の良い友人の一人。

【ダグ客とトラブル。聖都水路内商業停止。ダグ行方不明】

二度、目を通し、三度目に突入する頃にはドーザがその紙を引ったくり、
「なんだこりゃっ。どういうこった」
ドーザは無遠慮な声で叫んだが、言われた相手も困ったように首を振った。
「すぐに鷹を戻しましたが、その後のことは判りません。船長（ふなおさ）が、マーヴェルさんが戻ったらそのまま船で聖都に戻って確認し、ダグを探すようにと」
早口で言われる言葉に、マーヴェルはぐっと唇を噛んだ。
――郷里に行けばティナがいる。
この港町から川を遡り、二日。
その場所に行けばティナがいて、そして――ティナであればリドリーの居場所を知っているかもしれないのだ。
強く噛んだ奥歯がぎりりと音をさせ、口の中に鉄さびでも噛んでしまったかのような味がじわじわと広がる。

リドリー……

肩を僅かに震わせ、マーヴェルはぐっと拳を握りこんだ。

「ドーザ、船を戻せ」

魂がイヤだと叫ぶ。

あと二日。あと二日で彼女の行く先の欠片が拾えるかもしれない。一日でも一刻でも早く会って、そしてその無事を確かめたい。

全ての事柄を謝りたい。

そう切望しながら、

「いいのかよ」

ドーザが言う言葉に、マーヴェルはくるりと体の向きをかえて桟橋を小船へと戻りながら硬い表情でうなずいた。

「ダグは友人だ。戻ろう」

そんな頑なな背中を見せるマーヴェルに、ドーザはすぐに満足気な笑みを浮かべた。

「俺が行く」

「ドーザ？」

「商会はおまえの仕事だ。そっちは肩代わりなんざできねぇ。だから、ティナのところには俺が行ってやるよ。ま、俺が行ったところで無駄足になっちまうかもしれないが……おまえが何をしたいのかは俺が一番理解してるからよ。こっちの用件が済んだら俺もそっちに行く。ダグの野郎はおまえに頼む」

親しげに肩を叩かれ、マーヴェルは硬い表情のままこくりとうなずいた。

――切望しながら、少し……怖い。
会いたい。会いたい。会いたい。会いたい。
けれど、リドリー。
君は今も、君なのだろうか。

そんな風に思う俺は、酷く臆病で、愚かで、最低だ。

悪夢と人形

それはまるでフラッシュバックのように、脳裏をいきなり駆け抜けた。
一気に酸素を吸い込み、見開いた瞳に入り込む薄暗い天井――明かりひとつない闇が、冷たい空気があらゆる情報があたしの脳内を駆け回っていく。

壊れたおもちゃのようにがばりと跳ね上げた自分の体。
胸元を押さえるように手を当てて、あたしは止まってしまった心臓を動かすかのようにたんたんっと数度、胸を叩いた。

――夢を見ていた。
なんだか生々しい夢。
あたしは迷路を一人駆け抜けていく。
生垣の迷路。
荒い息遣いは、獣におわれているかのように思えるけれど、それはあたし自身の口から吐き出されているようにも感じられた。

足元は芝生。
時折り埋め込まれた石畳。
それはきっと庭の作成者によるほんの少しの遊び心なのだろうけれど、小さなあたしは幾度もその石に躓きそうになり、あわてて手が宙をかく。
サンゴジュで作られた生垣の枝を無意識に掴んで、なんとか体制を整えなおすことを繰り返し、振り返りたいという吐きたいほどの欲求と同時、振り返った先にあるものをはっきりと認識することを恐れていた。

――耳をよぎる風の音さえも生々しい。

ニゲナイト。

ニゲナイと……怖いことになる。

切羽詰った感情と同時に、重なり合うように『あたし』が問いかける。

「何から逃げているの？　怖いことって、何？」

何が追いかけてくるの？

尋ねても、小さなあたし自身それがはっきりと何かは判らない。

サンゴジュ、カイヅカ、様々な樹木で意図的に作られた迷路を駆けながら――つま先に衝撃と同時、あたしの足が鋭い何かで押されてその勢いのまま前のめりに倒れこんだ。

二の腕から伸びる腕に砂利の上をすべる痛み。

痛み？

いや、痛みはない。

今は――

あたしの心臓がばくばくと音をさせ、荒い息遣いを繰り返す。

耳鳴りが耳の中で奇妙な圧迫感をあたえ、動揺するあたしに「悪い夢でも見たの？」心配気に覗き込む眼差しに、あたしはあやうく二度目の心拍停止をむかえてしまいそうになった。

「な……に、してるの？」

思いのほか囁くような小さな声で問いかけたのは、意表をつきすぎてあたしの感情が制御されているだけに他ならない。

ここは確かめるまでもなく、あたしの小さなアパートの一室。
十歩程度で隅から隅まで移動が可能。寝台と一人用のテーブルと椅子。小さな水場だけで存在する小さなあたしの城。

寝台は一人用で、決して――

「睡眠学習って知ってる？　寝てる時に囁きながら子供の頃の思い出を」

狭い寝台でうつぶせに体を横たえ、にっこりと言う男の顔面をひっぱたかなかったあたしは我慢強いのではなく、あまりにも驚いていた為に体が固まっていただけに他ならない。

「でもなんか、えっと、怖い夢になっちゃった？」
ごめんね？

と何の悪意もなさ気に言葉を続ける男に、あたしはやっと自分の体が小刻みに震えていくのを感じた。

「どうして、ここに、いるのかしら？」

やっと搾り出された声はわれながら、ひっくい。
そして体の振るえに連動するのか、声も振動している。
何故でしょうか――お腹の底からなんだか判らない笑いがこみ上げてくるような気がいたします。

ああ――これってアレ？
純粋な、殺意ってヤツでしょうか？

ええ、あたしとこの馬鹿野郎様はもしかしたら恋人同士かもしれません。
そこを否定するのはちょっと色々と無理があるかもしれない。あた

しは好きでもない相手に身を任せたりなんて考えられない。
この男が好きなんでしょうよ――で、どこが？
「他人の寝台に勝手に入るなっ」
他人様の家に不法侵入して勝手に寝台の中にもぐりこんでいる男のどこが好きだというのだ。
冷静になればなるほど、あたしは自分自身が大丈夫なのかと問い詰めたい。
「いやだなぁ、いまさら他人なんて言っちゃ駄目だよ？リトル・リィってばちゃんと責任とってくれないと」
あたしはぐっと鉛のように喉を競りあがってくる言葉を飲み込んだ。
――責任とって。
って、それは女の子の台詞だろうっ。
こっちこそ責任とって欲しいですよ。いやいやいや、責任の取り方が絶対こういう時だけノーマルだろうから却下。
「一人で寝てるとね、すごく寂しい気持ちになっちゃうんだよ。リトル・リィの体温とか、吐息とか柔らかさとか想像しちゃって――それで、僕は考えたんだよ！」
「……」
「ぼくがソウなんだから、きっとリトル・リィだって一人寝は寂しいだろうなって。一人で寝台の中で泣いているかもしれないとか、ぼくが来るのを待ってるかもって」
「……」
「そう思ったら、いてもたってもいられなくて」

来ちゃった。

という言葉は、ぼふりという枕の音と共に抹消された。

――警備隊っっっ。

明日起きたら真っ先に被害届を提出。

不法侵入の変態を何とかしてっ。

それともこの無駄に偉い尊きあほんだら様の苦情は直接御領主様であるジェルドさんに言うべきか？

ぎりぎりと奥歯をかみ締めながら脳裏でだかだかと考えてみたところで、あたしはその全てがまったく無意味であることに気づいていた。

生きる反則技めっ。

「出ていってよっ」

ぎゅむぎゅむと枕で押し、寝台から排除しようとすれば「えええっ」と驚いた声をあげたあげく、ぱちりと指をひとつ鳴らした。

途端、あたしの手の中の枕がぱっと消え去り、こちらは枕でぼすぼすと押しているものだから、その勢いのままボケカスの胸にぶつかった。

「じゃ、じゃあさ。キスしていい？　そしたら、帰るからっ」

「あほですかっ」

「じゃあ絶対に帰らない」

あたしの両肩をがしりと掴んでにっこりと微笑む相手に、あたしは耳まで赤くなるのを感じながら睨みつけ、自分の中で平穏と口付けとを天秤にかけた。

まず大事なのは自分の城から悪魔を追い出すことが先決。
あたしが不承不承了承すると、面前の腐れ魔術師姿の魔法使いは瞳を細めてあたしの頬につめたい指先を沿わせた。

とくりと心臓が一度大きく鼓動する。
了承はしたものの、口づけに慣れてきている訳ではないし、なんとなく気恥ずかしいものが這い登ってくる。
あたしは相手の顔を見ていることができなくて、ぎゅっと力いっぱい目を閉ざして「さぁさっさとしなさい」という態度で示したが、相手は何が面白いのか小さく笑い声をもらし、声を潜めて——艶っぽさを含めて、囁いた。

「食べられてしまうと観念したうさぎさんみたいだね」

余計なことなど言わずにさっさとすまして。
「リドリー、可愛い」
囁きにさぁっと背筋にぞくぞくとしたものが這い登る。下半身から力が抜けるような奇妙な感覚。あたしがぱっと目を開けそうになるその瞬間、唇に唇が触れた。

背に回された腕が、ぐっと強く抱きすくめる。
どう見ても優男だというのに、こんな時の力はとても強くてあたしの中に狼狽が走る。いつもは優しく触れる唇が、力を込めて押し付けられて酸素すら奪い去るかのようにあたしの全てを絡めとろうとする。
頭に靄がかかるかのように意識が揺らぎ、あたしは酸素を求めて喘いだ。
手で相手の胸を押しても更に口付けが深まって、眦に涙が浮かぶと、親指の腹がそっとそれを拭い去り、嬉しそうな眼差しがあたしを覗き込んだ。

「やっぱ帰るのやめた」

ちょっ、なにそれっ。

＊＊＊

港町に一泊したいという欲求を宥めて、五人乗りの小型の手漕ぎ船を用意した。

港町を走る水路から山間へと遡る川へと入り込み、交代で櫂をこぐ作業に没頭し続けて、自分がいったい何の為にこんなことをしているのかと思えば、ドーザは乾いた笑いを漏らした。

「笑えねぇ」

「笑ってるだろ」

付き合わされている商会の船子にして幼馴染のレイルが積んである皮袋を漁りながら軽く蹴るような仕草をしてよこす。

「ま、ドーザには頭が下がるわ。マーヴェルに付き合ってるだけで人間できてる」

「おぅ、褒めやがれ」

ドーザは言いながらがしがしと櫂をこぐ。

川の流れを逆らうのだから人力でも相当の苦労だ。それを二日――小型の船では寝入ることもできず、夜は岸につけて地面で野宿という有様だ。

もちろん、商会にはもっと大型の船もあるし人員もいる。だが、これは仕事ではないので早々良い船など出してはもらえない。

船長であるマーヴェルの父親や兄達がいい顔をしないのは、当然だ。

それでも仕事をこなしながらの人探し。渋々目を瞑っているだけに過ぎない。彼等だとて判っている。

マーヴェルがどんな思いで逃げた女を捜しているのか。

「馬鹿だよな」

ぼそりとつぶやき、ドーザは自分の記憶の中にいるマーヴェルの婚約者を思った。

――一言で言えば、目立たない女だ。

人の群れの中で、一歩も二歩も下がって決して近づこうとはしない。

マーヴェルは「笑うと可愛い」と言うのだが、その笑った顔を見たものはきっと少数だろう。

控えめと言えば聞こえはいいが、陰気なと言えばしっくりとくる。なぜあんな女にこだわるのか、ドーザは理解できなかった。

何より――マーヴェルが結婚したいのは本当にあの女だったのだろうか。

誰に聞いても、マーヴェルはティナと好きあっていると思っていたと言うだろう。婚約者のリドリーの妹は、十歳頃になるまではめったに人前にでられるような状態ではなかった。

ひどく病弱で、家の中でよく寝ていたのだ。

その娘が元気になると、途端に町の連中はその可愛さに驚いた。ドーザもその一人だが、あいにくとドーザはティナに心を奪われることは無かった。ティナはふわふわの金髪に大きな翠の瞳。教会に飾られる天使のような容姿を持った愛らしい娘だが、我儘だった。

本当にティナとリドリーが姉妹だというのは信じられない。

――その謎は、いがいに簡単に解かれたものだ。

大人達は子供達が理解していないだろうとこそこそと言うが、ティナとリドリーの母親は違うというのは堂々と言われることではな

いが、皆……知っていた。

さすがにティナやリドリー本人達に言うものはいなかっただろうが、皆なんとなく理解はしていた。

リドリー自身が知っていたかどうかは謎だが。

リドリーはティナを可愛がっていた。というか――盾にしていたように見えた。

人との関わりを嫌い、全てティナの後ろに隠れて怯えているかのように見えた。

まぁ、リドリーときちんと会話をした人間がそもそもあまりいないのだから、ドーザの持つイメージなど、所詮ただの憶測でしかないが。

判っているのは、近寄りがたい娘だったということだ。

まるで、体はそこにあるのに、魂はそこにないような――不思議な雰囲気。

ティナのように誰もが可愛いと賞賛するような娘でない。

美人でもない。

だが、触れてはいけないという一種奇妙な雰囲気を持つ娘だった。

感情の起伏などないような、ただ静かな娘。

ドーザはリドリー・ナフサートに対して何等思うことは無かった。

それまでは。

あの日、結婚式の三日前にその姿を消してしまった彼女に対して、町の人間は驚愕した。もちろん、ドーザも同じように驚いた。

何より、正直に言えば――

「あのお人形さんにも心があったのか」
と賞賛したほどだ。

流されるままに結婚してしまうのだと思っていたのに、意外にも彼女はみずからの花嫁衣裳を引き裂いたのだ。
おとなしいと思われた娘の激情は、あっけにとられる程清々しかった。

だからドーザはマーヴェルがリドリーを探すことに手を貸している。

悪いがきっとマーヴェルの為じゃない。
自分が見たいのだ。
今はきっと人間になった、あの人形を。

＊＊＊

痛みではなく、それは熱だった。

あたしはぼんやりと自分の素足を見つめた。
夢を見た。
――それは恐ろしい夢だ。

夢の中で、あたしは生垣に囲まれた迷路で悲鳴をあげた。

足を炎が突き抜けたような熱が貫いた。
それは、頭が理解を拒む程奇妙な光景。
ほんの少量の赤い炎が足と、そして石畳をぬらす。いや、炎ではない。激しい熱は、炎ではなくて、赤いものは血液。

太ももを貫いた一本の矢は、まるで冗談のようにそこにあった。

「夢……よね？」

それは、ただの、夢――

小さな子供は、狐狩りの獲物のように矢で貫かれ、痛みを感じるより熱を覚え、そして必死に救いを求めた。

――ユー……っ、

救い？

それとも――矢を向けた相手へと向けたものだろうか。

ほとばしるその声にあたしの悪夢は閉じられた。

迷路と果て

にっこりと笑うあたしに、引きつった笑みで対応してくれたのは少しばかり小太りの警備隊の隊員さん。

駅馬車が乗り入れる、町の入り口の左側にある二階建ての赤レンガの建物は、平和な町を示すようにほんの一握りの警備隊員のみで構成されている。

こじんまりとした建物。入り口の二枚扉の脇に置かれている犬小屋には、耳の垂れた中型犬がいかにも「役に立ちません」という顔をしてだるんっと寝ている。

そして、あたしの知る限りこのちょっと小太りの隊員さん。やせてひょろりとして、いつも帽子を斜めに頭に乗せ、ついで膝の上には猫を乗せている隊長さん。他に二人の平隊員さんのみという構成だ。時々見巡りと称して【うさぎのパン屋】にも訪れる、気さくで人間的にもイイ人たちだが――あたしに言わせれば確実に役立たずだった。

そして、あたしの記憶が確かであるのであれば、この面前のちょっとぽてりとお腹の突き出た人は以前あの不法侵入者に金平糖という賄賂を貰いつつ一応苦情を言ってくれた人だが――あたしがあくまでもにっこりと「被害届を出したいのですが」と告げた言葉に一旦視線を逸らした。

まるで猫がしかられているのを承知で顔を逸らすのに似ているが、さすがに逸らしたままでいられなかったのだろう、つつっと視線を戻して引きつった笑みを浮かべ、額に浮いた汗を隊服の袖口でぬぐって、喉の奥がからむというように幾度が「あー、んっ」と空咳を繰り返してみせた。

なんともわざとらしく。

「あの、つかぬことを聞きますけどね」
「つかぬことでもつくことでも、いくらでも聞いて下さい」
バッチコイ。
「被害届というのは、いったい誰から、どんな被害を……」
聞くのもイヤだとありありと示す顔だが、もちろんあたしは容赦なく言いのけた。
「領主館の裏手に住む尊き人とか呼ばれている変人です」
「――いや、コーディロイは悪い人ではないですよ」
「以前もそれ聞きました」
却下です。

「悪い人じゃない人は勝手に人の家に入り込んだり致しません！」
不法侵入だけは本当にやめて下さい。
どこに訴えたところで無駄だとは理解していても、人間にはどうしてもやらなければならないことがあるのだ。

――そんなに、イヤ？
拒絶の言葉に肩を落とし、切なく囁かれる言葉に腹部がぞわりと内側からなぞられるような感触が走る。
耳によぎるのは、暗いあたしの部屋で囁かれる音。
抱かれた腰と、重ねられた指と指との間に入り込む神経質そうな細い指。
動揺するあたしに、畳み掛けるように言葉を連ねていく。
「初めての時にきつかった？　ごめんね。手加減したつもりなんだけれど、でも嬉しくてちょっと性急すぎたかもしれない」
「……」
「それとも、本当にぼくとはもう二度としたくない？」

落とされる囁きと、そっと触れる唇――肌をなぞる指先に翻弄されて、下半身にぽっかりと空洞があくように力が入らなくなってくる。

「痛かった？　今度は痛くないようにリドリーの体をじっくりと導いてあげる。隅々まで舐め上げて、たっぷりと――」

ぞわぞわとよみがえる羞恥と苛立ちと、どうしてあの時下から力いっぱいあの馬鹿の顎を殴ってやらなかったかという後悔とが燃え上がり、あたしは思い切り面前の警邏隊員を睨みつけた。

「ここで駄目なら御領主様に嘆願しますっ」
「すみません……そうして下さい」
こぉの、役立たずっ。

＊＊＊

ユリクス様の突然の来訪より三日目――【うさぎのパン屋】の休日にあたしの部屋を訪れたのは、ユリクス様のお使いと称する一人の青年だったが、彼があたしを導いたのはこともあろうにあのあんぽんたん様の白亜の屋敷だった。
「なんでここっ」と思わず声に出してしまったものの、彼が使用したいのはあくまでもソコにある扉であって、ここの主には用は無いらしい。
あわてるように自分の唇にびしりと人差し指をあて、静かにして下さいませと顔をこわばらせた。
目じりにじんわりと涙が浮かんでいたのを見てしまったことは、きっと誰にも知られたくないであろうから、あたしも口を噤(つぐ)むことにした。
お迎えに来ていただいて難ではありますが、なんだか相手が気の

毒に感じて、まるでこちらが悪いことをしている気になってくる。

「公は本日所要がありますのでお気づきになられることは無いと思いますが……申し訳ありませんが、できるかぎりお静かに」

やたらとびくびくとしている青年に、あたしは引きつれるような笑みを浮かべてこくこくとうなずいた。

気の弱そうな青年は、裏手から屋敷の扉に手を掛けて中に入り込んだ。

――勝手に入っていいの？

純粋な問いかけに「神殿に勤める者の幾人かはこの屋敷に出入りが許されていますから。そうでなければ入ることなどとても無理です」ひそひそと応える言葉に、あたしはまたこくこくとうなずいた。

そうか、この屋敷はだから鍵なんてものが無いのだ。

なんて便利。

うちのアパートも是非そう改良して欲しい――この先も勝手に入り込むのがいると思うと、自分の小さな城がちっとも安住の地では無い。

ニンニクを吊るすとか、杭をおいておくと撃退できるとか、何かいい手はないだろうか。あたしは夜を思って暗澹たる気持ちを抱いた。

最悪アマリージェに泣きついて一緒に寝てもらえるよう頼むべきだろうか？　ああ、でもアマリージェはまだ子供だしそんな風に迷惑を掛けるのよろしくありませんが。

ではルティ……――は、やめておこう。

ルティアは大好きですが、にっこり微笑を浮かべてアレと裏取引しているような想像ができてしまう。

そうして転移の扉を通り、連れてこられた場所に、あたしは我知らず自分の体をぎゅっと抱きしめていた。

ぶるりと背筋から振るえが走る。
体内を巡る血液の温度が一気に下がるような感覚に身震いし、あたしは自分の中で呪文のように小さく唱えていた。

――アレハ、ユメ……

「どうか？」
案内しようにも、相手が足を止めてしまった為にいぶかる青年に、あたしは口を開こうとしたけれど、喉の奥が乾いて思うように喋れずにあわてて咳を落とした。
「ここ、聖都の――」
「はい、ヴァシュラスの庭園と呼ばれる王宮の敷地内です。生垣の迷路を抜けた場で神殿官長様がお待ちでいらっしゃいます」
耳の細い血管までもが脈打つのを感じる。

面前に広がる樹木で作られた迷路の入り口で、あたしはぎゅっと強く自分の体を更に抱きしめて自分の体温と、脈動とを強く意識しながら乾いた笑いを浮かべた。
「どうかなさいましたか？」
「……いえ、いいえ」

アレハ、ユメだ――

足を貫いた矢など、無い。
流された血など無い。
「気分がすぐれませんか？」
ゆっくりと浅い呼吸を繰り返し、最後に一度、腹にある酸素を全て吐き出すようにしてその中身を全て入れ替えた。
耳鳴りがしているような気がしてぱしりと両耳を挟むようにして叩き、あたしはふるふると首を振った。

追いかけられる夢は不安の現れ。
ただそれだけ。
更に心配気に覗き込んでくる相手に、あたしはなんとか微笑を作りあげてひとつうなずいた。
「迷うと出られなくなります。どうぞついてきてください」
低い低木からはじまり、ゆっくりとその高さをかえて作り出される迷路。
時には花を、時には実すらつける樹木の道を、あたしは自分の胸に手を当ててゆっくりと歩んだ。
足元には石畳。時には芝生。時にはタマリュウ――砂利。
迷ってしまったら、落ち着いて周りの状況を確認してごらん。木々の名に、足元にヒントをちりばめた迷路は、決して君を飲み込んだりしないから。
胸元を超える高さにまで樹木が高くなると、案内役の青年の眉間に皺がよる。ゆっくりとあせらないように進む足に不安を滲ませるものだから、あたしはその袖を引いた。
「こっちのほうが、早いですよ」
「ちょっ、迷ったら出れないんですよっ」
慌てる案内人に、あたしは悪戯を打ち明けるように囁く男の顔を思い出す。
――仕掛けがわかると単純だけれど、ナイショだよ。
『ナイショ？　手品の種みたいに？』
『そう、ナイショ。この迷路は錯覚に満ちている――おかれている小物に惑わされないで。置物に意識を取られないで。君を導くのは、迷路そのもの。けれどその秘密が暴かれたら、ここは危険な場所になる。だからナイショ――ここはね』

実の色、花の色、名前にちりばめられた色や数字を拾い上げて足を向け、あたしは子供の頃の遊びの延長で迷路を攻略しながら一気に広がるその空間で、息の呑むように瞳を見開いた。

さやさやと流れる水の音。

見覚えのある円形の噴水の中央には竜ではなく一人の女性の石像が座っている。白い石像の女性はドレス姿で細かいドレープの作られたスカートの膝には、子供が二人。女性の膝に手を掛け、幸せそうに見上げるその様子は微笑ましい。

何故かその石像が竜でなかったことに驚きながら、あたしはその噴水の前に立つユリクス様に声をかけた。

「ユリクスさ――」

ま……

と声が尻つぼみになり、そしてあたしはユリクス様が振り返ったその向こう――噴水に尊大に座る壮年の男性の姿に、思い切り目を見開いて叫んでいた。

「うわっ、変なおじさんっ」

あたしの言葉に、あたしを案内していた青年は蒼白で三歩確実にあたしから離れ、そしてユリクス様は真顔になり――

問題の変なおじさん。

肩から分厚いローブを羽織るがしりと恰幅のよい白髪の目立つ男性は、眉間にしっかりと皺を刻みつけた。

＊＊＊

地方領主としてジョルド・スオンにとって何が大事かといえば領

地の平定である。
幸い、ジョルドの納める領地に限って言えば特別地区として優遇され、その税率は二割に過ぎない。農耕をしている民も少なく、多くのものが自給自足に近い生活を送っている。食物を作る為にはこの辺りの土は適さず、その多くが粘土質で水はけが悪い。町を出れば逆に砂漠が広がるというなんとも複雑なつくりをしているのは――もちろん、作為である。

この場所は竜峰への足がかり、監視地でしかない。
そんな領地であるが、ジョルド・スオンにとっては勿論愛すべき地であるし、心を砕くべき場だ。
領民のことを想い、その生活を見守り――税を計算し、治水を憂いる。
そのジョルドの腹部がちりちりと痛む。
その痛みの源がどこであるのか、ジョルドは正確に言える。
その部分は、胃だ。確実に胃が蝕まれている。薄い内膜がじりじりとストレスという名の攻撃を受け、今にもぷつりと穴をあけてしまうのではないだろうか。

「お戻りになられましたか」
「ただいま。そんなことより、顔色がよくないね」
心配そうな問いかけに、ジョルドは目元がぴくぴくと動くのを感じた。
「たまには休んだほうがいい」
「――休ませていただきますが、その前に、コーディロイ。この書類にサインを頂いてよろしいでしょうか？」
隣の屋敷とは庭を挟んで繋がっている。
何故繋がっているのかといえば、ありていに言えば――スオンの名を冠するものは、遥か昔から竜の名を持つ相手の手足（パシリ）な為だろう。
そう、どんな言葉で言いつくろったところで変わらない。

代々補佐官――下働き。奴隷。

そして……監視者。

「また新しい提――」

差し向けられた書類に、途端に相手の眉が寄った。

「――禁止事項？」

「ありていに説明申し上げますと、ある特定の女性の家へと侵入を禁止するという告知書と、同意書になります」

勇気を振り絞るようにジョルドが言うと、にっこりと面前の青年は微笑みを称え、そしてぽうっと、その手にある書類の端にオレンジ色の炎が紙を舐めあげ、みるみるうちに炭となり散った。

「……」

「……」

キイキイと痛む胃が、なんだかこんどはぎりぎりと感じてくる。

胃液がものすごく内壁を攻撃している。

「ほんのちょっとの間だけだよ。目をつむって」

黒ずんだ指先をこすり合わせながら、面前の青年は肩をすくめて見せた。

「そう、こんなことは長くは続かないから」

類友と贅

ぴしゃりと扉は玄関口で閉ざされた。
小型の手漕ぎ船で大の大人五人が交代制で小川を遡ること二日と半分――さすがに極度の疲れも手伝ってドーザはその日は久しぶりに戻った自宅で小うるさい母親の小言を耳に流し込みながら酒を飲んで眠りについた。

二十年近く生きてきたが、自分がナフサートの家を訪ねたことは無い。
商家の主としてのナフサートにも、ティナにもリドリーにも用は無かった。どうしても気が重くなるが、自らが進んでした約束だと自分を鼓舞して、それでも一応の礼節をもって昼飯時の前、午前中に玄関を叩いたのだ。

「旦那様は現在留守にしてますし」
不機嫌そうな北部訛りのきつい下女がそう口にする。
見たことの無い女の様子に、以前からいた女ではないなと思い、ドーザは愛想笑いを浮かべた。
「いやいや、俺ぁ町の人間でドーザ・ガダンズっとモンだけどよ。ティナにちょっと用があるんだ」
ドーザは自分の体が大きく、一見して恐ろしいことをよく熟知している。だが、その顔をほころばせれば、人がたやすく心を開いてくれることもまた理解していた。
だから人の良い笑みを浮かべて威圧感を軽減させるように身を縮めて言ったのだが、女は更に胡散臭いものを見るようにドーザを眺め回した。
「お嬢さんは誰とも会いませんし」

ばっさりと言い切り、女は玄関扉を乱暴に閉ざした。

「……」

――思わず嘆息しながらがりがりと頭をかき、ドーザは数歩下がってナフサートの家をじっくりと見回した。

町の外れの丘の上にたてられている家は、家と言うよりは邸宅やら屋敷やらという言葉が似合うのだろうが、いかんせんその概観はやけに古臭い。長いこと見ていなかったが、こんなにもさびれた屋敷だったかとドーザは眉を潜ませた。

左側の壁には蔦が絡んでいるが、これぱかりが雰囲気を壊しているわけではないだろう。そもそも蔦などはきちんと手入れさえしてあれば美観を損ねるものでもない。だが、今面前に広がるそれは、あくまでも無駄に生えていると感じさせる。

確かにナフサートの家は、今や没落していると言ってもいいだろう。だが、その没落だとてこの半年余りのことだ。

――商家と船長との縁組。

それを元にもっと栄える筈だっただろうに、その要となる娘は逃げ出した。

それが全ての現況だった。

いや……目に見えていなかっただけで、それ以前にこの家は傾いていたのだろう。婿をとり、更に仕事を拡大する予定だったものが全て覆された。

その時のナフサートの主人の憤りっぷりはすさまじいものがあった。

リドリーはまるで籠の鳥のように大事に大事に育て上げられていた。ただその大事の定義が少しばかりおかしい。蝶よ華よと育てられたのであればもっと違う生き物になっただろう。

「大事にしている」というオブラートに包み込み、ただただ放置さ

れたというところか。
　ゆがんだ家は、今はそのゆがみをはっきりと他者にも見せ付ける。大事にしていた娘は逃げ出した。ナフサートは激怒したが、その後にしたこととといえば、大慌てでランド商会に媚を売り、ついで――リドリーがいないのだからティナではどうだと切り替えた。
　ランド商会としてはティナでも良かったのだろう。
良くなかったのはマーヴェルだけだ。

　ドーザは大きく息を吐き出し、ぐるりと身を翻して元来た道を戻るように見せかけ、さっさと屋敷の裏手へと足を向けた。
ティナの部屋がどこであるかなどしりはしないが、大方の予想をたててドーザは開いている二階の窓を目当てに植えられた木に手を掛けた。

「海の男を舐めんなよ」

　ドーザは腰に手を回し、とんとんっと木の強度を試すようにその幹を叩き、その幹肌を確かめるように靴底で幾度か蹴った。

＊＊＊

　さすがに変なおじさんはまずい。
あたしは咄嗟に自分の口元に手を当てて愛想笑いを浮かべて見せた。愛想笑いには自信がありますよ。
なんといってもパン屋は客商売ですからね。
仕事をはじめた当初は色々と失敗したものです。なんといっても――他人と会話することも難しい人生でしたからね。思い出したくもありません。
「ごめんなさい……あの、すみません。何かお取り込み中に」
　いい年した壮年男性二人で迷宮庭園の噴水でお取り込み――ああ、

言葉にするとなんか微妙にいやんな感じですが、まずは自分の失言のほうが問題だ。
　顔を合わせた途端に「変な」と形容されて許されるのは変態くらいのものだろう。あれは、変が服を着て歩いていると言って過言ではありません。

　あたしに出会いがしらに「変なおじさん」呼ばわりされた変なおじさん――ルティア言うところの若い娘さんを虐めて楽しむ趣味の持ち主は、眼光の鋭い眼差しを細めて、ふっと鼻で笑った。
「おじさんではない」
「本当にすみませんっ」
「オジサマだ。かわゆく言えば許そう」

……そこですか、そうですか。
はぁぁぁぁ、もう本当にアレの関係者はちょっとどこかおかしいのではありませんかね。類は友を呼ぶなどとも言いますし。
いや、あたしは違いますよ？
あたしは絶対に違いますから。
ああ、ユリクス様とか御領主様も違いますね。
類友とかそんな失礼なことは微塵も思っておりませんよ。この場合の類友は当然ルティアでありエルディバルトさんです！
　その序列の中にこの面前の偉そうなオジサマも加えてさしあげます。十分その資格はありそうですからね。

「ほれ、かわゆくな」
尊大な雰囲気を持つ相手は、相変わらず噴水の淵にどかりと座り、腕を組んで、決して可愛くない口調であたしをうながす。
「ご、ごめんなさい。おじさま」
「かわゆくない。オジサマごめんね、じゃ」

ほらぁ、隣のユリクス様がいたたまれない顔しているではありませんかっ。
あたしからは見えないけれど、おそらくきっとあたしの数歩後ろで控えているお迎えの人だって相当ドン引きしていますよ。
しかしあたしの無駄な抵抗は、相手の眼光の前で崩れ去った。
くぅっと喉の奥で小さな呻きをあげ、あたしは何故か激しく屈辱的な気持ちで相手の言葉を反芻した。

「オジサマ、ごめんね」

もうなんか恥ずかしい。恥ずかしすぎる。もうイヤっ。
どんなプレイですか。
もう二回目ですよっ。
あの変態だってこんなことしないですよ――ルティア、この人本当に女の子を虐めて楽しんでますよっ。
半泣きになったあたしに、ユリクス様が近づき元気付けるかのように、とんとんっとあたしの二の腕を叩いた。

「あなたが変であることは今にはじまったことではないでしょうに」
「――おまえとは二十年間意見が合わんな」
「十九年ですが」
「そういうところが嫌いなんだ。おまえはほんっとうに目の上のなんとやらだ。覚えておれ、おまえには絶対に復讐する」
三白眼でユリクス様を睨みつけ、低く恫喝するような口調で言う言葉にあたしが身を震わせると、まるでかばうかのようにユリクス様は一歩あたしの前に出て微笑を浮かべた。
「それは楽しみですな」
「おう、存分に楽しみにしておれ。わしが死ぬ時はおまえも道連れだ――おまえの棺も用意してやる。わしの墓の片隅に場所も確保してやろう。遺言でおまえも連れて行くと残してやるのだ。ざまをみ

ろ。
わしの守護者が確実にそのようにしてくれるであろう」
「相変わらず趣味が悪い。後世語り継がれる愚か者ですな。いい年した男が男を連れて旅立たれるおつもりか。気色悪い」
「……確かに」
――どうしよう。
笑ったらいいのかな。
突っ込んでいいのかな。
なにこの二人は。
ユリクス様、そっちに行ったらいけません。
それは罠です。墓場よりなお悪い、類友という禁断の世界に旅立ってはいけませんったら。
極度の緊張の為か、あたしは自分の目元がぴくぴくと痙攣するのを感じた。
身の置き所がまったくありません。
「ナフサート嬢」
ふいに、それまで謎の会話を楽しんでいたユリクス様は、一歩足を引いて体の向きをあたしへと向けると、苦笑のようなものを浮かべて目じりに小じわをつくり、あたしの肩をそっと押した。
「この方は――」
「おお、そうだ！」
ユリクス様が紹介するより先に、声の大きな変なおじさんはたんっと自分の膝を叩いた。
「忘れておった――娘、おぬしルティアに伝言を伝えてくれたか？」
その言葉にあたしはあせった。
「あ……」

「なんだ。役に立たぬな」
「いえ――一応伝えたのですが」
あたしはしどろもどろに言葉を捜した。
「あなたが」
「オジサマじゃ」
それ、ずっと言わないと駄目なんですか？

「オジサマがどなただかピンと来なかったみたいで」
「なんだ。ルティアのやつめ。洞察力が悪いのぉ。まぁ良い。今度じきじきに召還状でも送りつけてやろうか」
「おやめください。そんなことをされては、あの子が怯える――そもそも、そんなことをおっしゃりたかった訳ではありませんでしょうに」
呆れたような口調のユリクス様に、変なオジサマは肩をすくめ、そして突然その雰囲気をがらりとかえた。

その鋭い眼差しに更に力を込めて、口元を引き締め、背筋を伸ばし。
冷たい眼差しであたしをひたりと見る。
そうするとまるで鋭利な剣の切っ先でも突きつけられたかのような圧迫感をぶわりと感じ、あたしはぞわりと背筋があわ立つような感覚を味わった。
そう、忘れていた。
この人は底冷えのするような強く恐ろしいものを秘めているのだと。
――決してただの変なおじさんではないのだ。

「わしは言うたな。罰を与えると」
「――」
「小娘。甘んじて受けるがいい」

冷たい眼差し、口元に笑みを浮かべ、

「おまえを竜の贄とする」

告げられた言葉は、正直――理解できるものではなかったが、共にこの言葉を聞いていたユリクス様は、口元にひっそりと笑みを浮かべていた。

麗しの乙女とイジケ虫

「おまえを竜の贄とする」

竜の、贄。

その意味がちっとも理解できないが、けれど、贄――って、あまり良い言葉では無いだろう。

さやさやと流れる噴水の水音と、ゆるく流れる風の音に木々がざわめく中。まるで時間が止まってしまったかのように感じられる沈黙。

困惑で喉の奥に溜まった唾液を嚥下するあたしの一歩前で、ユリクス様が微笑と共に言葉を落とした。

なんだかとても嬉しそうに。

「なんとも慈悲深い。と言ったほうが宜しいのでしょうか、この場合」

ユリクス様の穏やかさとは反し、相手は鼻を鳴らした。

「――どのような場であろうと、共に生きる道であるならば慈悲ともいえよう。

先代を嫌うおまえであれば、わしの心も理解できよう――」

「貴方様ときたら、同じことが繰りかえれるとでも思っているのか。なんともロマンチストなことですな」

まったく理解不能なやりとりを交わし、ユリクス様はあたしへと微笑んだ。

「竜の贄などと物騒な名称ですが、恐れることはない――神殿の巫女をそう呼ぶ、その程度のことですからね。

ただし、竜の贄と呼ばれる麗しい乙女は、生涯人の目に触れることも光を受けることも許されない。ただその命果てるまで、神殿の

奥深く身を潔斎し竜を慰める特別で、そして哀れな娘」
恐れることは無いといわれはしたものの、内容はあまり楽しいことではない。何より一介のパン屋の店員に何をさせようというのか。
驚愕するあたしに、ユリクス様はそれを命じた相手に視線を戻した。

「私の覚えている限り、ここ数十年廃れた因習に過ぎない。そんな古いものを持ち出すなど、それが貴方様にとって最後の手ですか」
「そうようだな――不満があるのであれば殺せ、できぬのであれば死ね。おまえの言葉であったか」
「いいえ、それをおっしゃったのは貴方様ですよ。さすがに貴方様の矜持では三度が限界でしょう」
「そうさな。次はわしの番だとは認めてやろう」
相手の笑い飛ばすような言葉を聞くや、ユリクス様はあたしの肩を優しく叩いた。
「それでも、十分な譲歩でいらっしゃると私も認めましょう。今までのことに比べれば」
「やかましい……わしだとて、好きでしている訳ではない。わしは二度とあのような恐ろしい場面になど遭遇したくないだけだ」

お二人は淡々と話していますが、お二人が話しているのはあたしにとって井戸端会議的に簡単にして貰っては困る感じなんですが。
なんとなく血の気が下がりっぱなしで、喉の奥はからからに乾いてしまうし、口は挟めないしであたしが内心で卒倒していると、ユリクス様はあたしへと視線を戻し、柔和な眼差しに皺を深めた。

「顔色が悪い。さぁ、約束の通りにデートといこうか。この話は終わったよ」
美味しいデザートを用意させているよ、行こうか。
さっさと相手を無視して歩き出そうとするユリクス様に、座ったま

まの男性は眼差しをきつくした。
「馬鹿を言うな。その娘はこれよりわしの――」
「ああ、無理です。彼女には資格が無い」
ユリクス様はあっさりと言い切った。

「竜の贄に必要なのは、麗しき乙女だというのは承知でしょう」
「おまえもきっつい男だの。
確かに麗しいという程でもないが、問題のある造作でも――」

あのぉ……

「女性相手にきついことをおっしゃっているのは貴方様ですよ。誰が彼女の美醜の話をしておりますか」
あの、あのですね、頼みますから。
リドリー・ナフサート容姿討論会を本人の前でやるのは止めて下さい。
リドリー・ナフサート大嫌い選手権もわりときつかったというのに。
まさか貴方達はエルディバルトさんのお身内の方ですか？
って――そうか、ある意味ユリクス様はエルディバルトさんの身内ではありませんか。なんといっても、エルディバルトさんはルティアの婚約者で、ルティアはユリクス様の義父でしたね！
なんたる迂闊。
それにしたって、今度は美醜って、本当に泣きますよ？
勿論、美人だとかなんとか思っている訳ではありませんけど、ちょっと酷いとは思いませんか。
そうですよね、世の中にはルティアやアマリージェみたいな容姿に恵まれた人間がいるんですよね。
すみませんね、あたしは一般的で。
一般的ですよ。十人並み。
せめてそれくらいで許して下さい。勘弁して。

そんなあたしの切なさを置き去りに、ユリクス様は言った。

「彼女は乙女では無いと言っているのです」

一拍、二拍……

あたしはゆるゆるとその意味が地面から這い登り、じわじわとあたしの体を伝いのぼっていくようないやな感覚を味わい――最後には、卒倒した。

今、さらっと言われましたが。

思いっきり恥ずかしいことをおっしゃいませんでしたでしょうか。

乙女では無いって、それはつまり。

女の子ではないって、そういう意味とは違います、よ、ね？

「なっ、なっっっ」

羞恥に体が火照り、口からおかしな音が漏れる中。

ユリクス様は実に悠然と、あっさりとのたもうた。

「すでに竜公爵のお手つきです」

あ、ああ、あんの尊きあんぽんたんっっ！

いったいどこまで吹聴してるのぉぉぉっ。

ぐっとあたしの喉の奥で潰された蛙のような音が漏れ、そして、やけに機嫌のよろしいユリクス様の面前、壮年の男性はぎしりと奥歯をかみ締め、ユリクス様をにらみつけた。

「はめたな」

「そういう品の無い表現はおやめになったがよろしい」

「誰がそっちの話をしている！　貴様だっ。この場所で、この聖域でわしの言質をとりおったなっ」

びりびりと振動すら感じる憤りの前に、ユリクス様は微笑を称えて見せた。
「ああ、そういえばここは貴方様の崇拝なさる女神（ナトゥ）のご在所でしたか。そのようなつもりは元よりありませんでしたが、結果としてはそのようになったかもしれませんな」
「――」
ぎしぎしと奥歯をかみ締める相手を涼しい顔で見つめ、ユリクス様は一礼した。
「けれどそんなことは関係はない。貴方様は気高きお方なれば、その尊き魂からのお言葉に偽りなど元よりなきものと存じ上げます」
ゆっくりと顔をあげ、ユリクス様はまさに勝ち誇った微笑を称えた。
「次はどうぞご自身の首をお絞めください」
なんだか判らないけど……コワイです。
あたしは完全に自らの居場所を失い、できれば一人でそろりそろりと逃げ出したい気持ちになっておりましたが、この場の空気は緊張に満ちていて、じりじりとも動けない。
何より、まったく理解はできないがこの面前の二人があたしについて話をしていることは承知している。
――そして『人が処女とか非処女とか何の関係があるんですかっ』とぶちキレるタイミングは完全に失っていた。
そう、あたしは絶対にキレて良かった筈だというのに。
悔しそうに奥歯をかみ締めていた男性は、自身の膝の辺りをぎゅっと強く掴んだかと思うと、あたしを睨みつけた。
「娘っ」
「はいぃぃっ」

もう完全に蚊帳の外かと思っていたが、その矛先は突然こちらへと向けられた。
「まったく嘆かわしい。
いまどきの若い娘達ときたら自身の貞操をなんだと思っておるっ。
わしの時代の娘達といえば、どの娘も貞操を守りぬき、尊き初夜の晩にはじめて夫にその身を委ねたものをっ」

何故でしょう……むしろ怒りたいのはこちらだというのに、その後説教モードに突入しました。

＊＊＊

今日は一日お疲れ様でした。
あたしはあたしに労いの言葉を贈りたい。
確かに以前「罰を受ける」という約束を致しました。
忘れていましたが、言われればきちんとと思い出せる程度には頭に入ってございます。
だから、納得できることでしたら罰とやらを受け入れてもいい。
ただちょっと、なんだか今回言われたことは、もしかしたら人生に関わるくらいものすごいことであったような気がするところが引っかかりますが。

幸い、問題の罰とやらはなし崩し的にどうやら立ち消えてしまったようです。
良かったですね。
非処女で……

なんだろう、すごく、すごぉく屈辱的。
自分の父親程の男性と祖父程の年齢の人が、あたしの処女性につい

て議論を交わすのを見せつけられる光景は筆舌に尽くしがたし。
今まで十七年の人生の中でこれほど穴を掘って埋まってしまいたい現象に遭遇したことは無いだろう。

無い……無い訳でもないけれど、いや、いや、だがしかし。
あたしは思い出してはいけない感じのぞくりと背筋をなぞるものを思い出し、突如顔を真っ赤に染めながらぶるぶると首を振った。
繊細そうな指先がなぞる感触。肩甲骨の辺りに落とされる口付けに、掴んだシーツの冷たさと囁かれる甘い……
――いや違う。ああいった羞恥と、今回の羞恥とでは比べる天秤がちがうのです。
あたしは頭の中で勝手に慌て、喉の奥で「ぐぅぅ」と呻きつつ、転移の為の最後の扉を開いた。

「どこ行っていたの？」

扉を開けた先、起毛の絨毯が敷き詰められた廊下で、真っ白い神官服の男が膝を抱えてしゃがんでいるのを想像していただきたい。
顔だけは無駄に良い癖に、まるで十代半ばの少年が、友人達と道端で不当に道を占拠しているが如く――なんとも滑稽な格好で。
恨めしい様子で眉間にくっきりと皺を寄せて、不満そうにじぃぃぃっと上目遣いで見上げてくる訳です。

あたしは自分の中に湧き上がるものを感じた。
それはもう、ふつふつと。
そして魂が命じるままに行動することにした。

「会いたかったわ、魔法使い」
――とりあえず一発殴られてくれる？

乙女で無いことは自分の行動の結果だから文句があろう筈はありません。

あたし自身が決断し、行動し、その結果そうなったのだからこれについては文句は無い。だがしかし、それを誰彼構わず――アマリージェのようなお子様相手にばらすことも問題だというのに、まさかのユリクス様にまで吹聴していることには異議ありだ。

素晴らしいロマンスグレー相手になんということを。

あたしの魂の憤りを前に、しかし、しゃがみこんで上目遣いで見上げてくる相手は瞳を細めた。

「誰と、どこ、行っていたの？」

いや、だからっ、あたしのほうが怒っているんだってば！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8709j/

あたしの魔法使い。

2011年11月4日08時06分発行